

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡大山町

MON ZEN
門前第2遺跡
SHOUBU TA
（菖蒲田地区）

2007

鳥取県埋蔵文化財センター
国土交通省 倉吉河川国道事務所



1 調査前航空写真（北から）



2 G区中近世墓群（北西から）

カラー図版2



1 G5区中世墓群完掘状況(南から)



1 G 4区近世墓群標石検出状況（南から）



2 G 4区近世墓群上面出土陶器

カラー図版4



1 G 4区近世墓群上面出土染付皿



2 G 4区近世墓群上面出土磁器（碗ほか）

序

一般国道9号名和淀江道路の改築に伴う発掘調査は、平成12年度から行われ、平成18年度末時点で遺跡数は18遺跡、調査面積は延べ16万平方メートルに及んでいます。

この発掘調査は、平成17年度から鳥取県直営の事業となり、鳥取県埋蔵文化財センターが担当することとなりました。

そのうち、大山町にある門前第2遺跡では、縄文時代から近世にかけて幅広い時代の遺構、特に、中世から近世にかけての大規模な墓地を検出するに至り、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。

また、埋蔵文化財センターでは、発掘調査により明らかとなった遺跡や出土品を活用し、その普及啓発に努めることも重要な業務としております。

門前第2遺跡でも、現地説明会を開催したほか、出土品の展示公開を行い、多くの方々にその素晴らしさを実感していただきました。

本書はその調査結果を報告書としてまとめたものです。この報告書が、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財が郷土の誇りとなることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

鳥取県埋蔵文化財センター
所 長 久保 穰二郎

序 文

一般国道9号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取 - 島根県境）までの92.3kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

名和淀江道路は、西伯郡大山町から米子市淀江町にかけての、国道9号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された一般国道9号のバイパス（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第94条の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成17・18年度は、「門前上屋敷遺跡」、「門前鎮守山城跡」、「門前第2遺跡」、「茶畑六反田遺跡」の4遺跡について鳥取県埋蔵文化財センターと発掘調査の委託契約を締結し、発掘調査が行われました。

本書は、上記の「門前第2遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた鳥取県埋蔵文化財センターの関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成19年3月

国土交通省 倉吉河川国道事務所
所 長 嘉本 昭夫

6 中近世墓の遺構図には以下の表現を用いて切り合い関係などを整理している。

-----：掘りすぎや切り合いによって肩が壊れた遺構の想定復元線。切り合い関係が複雑な近世墓は煩雑になるのを避けるため、他の遺構に切られた部分の復元線のみ破線で示した。

-----：遺構の現存線。遺構本来の肩が壊れている場合に、残存部の外郭線を一点鎖線で示した。

多色刷り：青で示したものが黒刷りのものより上から出土したことを表し、赤で示したものが黒刷りのものより下から出土したことを表す。

7 土器の分類と編年上の位置づけには主に下記の文献を参考にした。

- 清水真一1992「因幡・伯耆地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』, 木耳社
 牧本哲雄1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡 園第6遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書61
 田辺昭三1981『須恵器大成』, 角川書店
 中森 祥2005「中世前期の遺物について」『門前上屋敷遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書105
 中森 祥2006「鳥取県における中世後期土師器の展開」『調査研究紀要』1, 鳥取県埋蔵文化財センター
 九州陶磁学会編・発行2000『九州陶磁の編年』

新旧遺構名対照表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
集石4	SX94	墓1	SX2	墓64	ST47	墓127	ST72
道路状遺構1	SD20	墓2	SX116	墓65	ST114	墓128	ST74
道路状遺構1	SD23	墓3	SX97	墓66	ST30	墓129	ST80
土坑71	SK89	墓4	SX96	墓67	ST110	墓130	ST71
土坑72	SK107	墓5	SX95	墓68	ST109	墓131	ST66
土坑73	SK103	墓6	SX114	墓69	ST135	墓132	ST61
土坑74	SX3	墓7	SX130	墓70	ST53	墓133	ST65
土坑75	SK90	墓8	SX129	墓71	ST60	墓134	ST104
土坑76	SK86	墓9	SX106	墓72	ST54	墓135	ST89
土坑77	SK116	墓10	SX99	墓73	ST32	墓136	ST90
土坑78	SK111	墓11	SX133	墓74	ST3	墓137	ST83
土坑79	SK87	墓12	SX108	墓75	ST67	墓138	ST91
土坑80	SK82	墓13	SX126	墓76	ST81	墓139	ST100
土坑81	SK83	墓14	SX107	墓77	ST73	墓140	ST102
土坑82	SK84	墓15	SX125	墓78	ST119	墓141	ST133
土坑83	SK114	墓16	SX124	墓79	ST118	墓142	ST11
土坑84	SK91	墓17	SX121	墓80	ST62	墓143	ST22
土坑85	SK96	墓18	SX122	墓81	ST108	墓144	ST21
土坑86	SK102	墓19	SX123	墓82	ST57	墓145	ST4
土坑87	SK115	墓20	SX104	墓83	ST116	墓146	ST63
土坑88	SK92	墓21	SX103	墓84	ST58	墓147	ST27
土坑89	SK88	墓22	SX132	墓85	ST70	墓148	ST46
土坑90	SK112	墓23	SX117	墓86	ST44	墓149	ST17
土坑91	SK113	墓24	SX128	墓87	ST94	墓150	ST33
土坑92	SK101	墓25	SX100	墓88	ST19	墓151	ST28
土坑93	SK117	墓26	SX115	墓89	ST50	墓152	ST23
溝11	SD21	墓27	SX120	墓90	ST86	墓153	ST69
溝12	SD33	墓28	SX113	墓91	ST121	墓154	ST117
溝13	SD26	墓29	SX118	墓92	ST36	墓155	ST2
溝14	SD27	墓30	SX111	墓93	ST20	墓156	ST79
溝15	SD28	墓31	SX109	墓94	ST134	墓157	ST130
溝16	SD25	墓32	SX102	墓95	ST15	墓158	ST123
溝17	SD34	墓33	SX101	墓96	ST88	墓159	ST51
溝18	SD29	墓34	SX127	墓97	ST1	墓160	ST52
溝19	SD24	墓35	SX131	墓98	ST6	墓161	ST128
溝20	SD30	墓36	SX112	墓99	ST82	墓162	ST40
溝21	SD31	墓37	SX110	墓100	ST103	墓163	ST41
		墓38	SX119	墓101	ST56	墓164	ST122
		墓39	SK100	墓102	ST68	墓165	ST14
		墓40	SK106	墓103	ST140	墓166	ST13
		墓41	SK105	墓104	ST137	墓167	ST38
		墓42	SK104	墓105	ST136	墓168	ST87
		墓43	SK99	墓106	ST49	墓169	ST84
		墓44	SK98	墓107	ST120	墓170	ST24
		墓45	SK93	墓108	ST45	墓171	ST16
		墓46	SK94	墓109	ST93	墓172	ST25
		墓47	SK110	墓110	ST125	墓173	ST18
		墓48	ST126	墓111	ST34	墓174	ST48
		墓49	ST10	墓112	ST029	墓175	ST59
		墓50	ST37	墓113	ST129	墓176	ST101
		墓51	ST92	墓114	ST105	墓177	ST85
		墓52	ST95	墓115	ST64	墓178	ST43
		墓53	ST35	墓116	ST55	墓179	ST132
		墓54	ST9	墓117	ST75	墓180	ST113
		墓55	ST8	墓118	ST76	墓181	ST141
		墓56	ST7	墓119	ST77	墓182	ST115
		墓57	ST42	墓120	ST78	墓183	ST124
		墓58	ST26	墓121	ST106	墓184	ST31
		墓59	ST112	墓122	ST107	墓185	ST139
		墓60	ST12	墓123	ST96	墓186	ST138
		墓61	ST131	墓124	ST97	墓187	ST127
		墓62	ST39	墓125	ST98	墓188	SK95
		墓63	ST5	墓126	ST99		

* 墓49以降の墓には、調査の都合上、「SX」=標石と「ST」=土壇の二つの遺構名を付した。

目 次

序・序文

例言・凡例

目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 調査の経緯

- 第1節 調査に至る経緯……………(牧本)・ 1
- 第2節 調査の経過……………(牧本)・ 2
- 第3節 調査体制…………… 4

第2章 位置と環境

- 第1節 地理的環境……………(牧本)・ 5
- 第2節 歴史的環境……………(牧本)・ 5

第3章 遺跡の立地と層序

- 第1節 遺跡の立地……………(北)・ 9
- 第2節 調査地内の土層堆積……………(北・中森)・ 9

第4章 F区の調査

- 第1節 調査の概要……………(北)・ 13
- 第2節 縄文時代から古代にかけての調査成果……………(北)・ 13
- 第3節 中世以降の調査成果……………(北)・ 16

第5章 G区の調査

- 第1節 調査の概要……………(北)・ 22
- 第2節 縄文時代から古墳時代にかけての調査成果……………(北)・ 22
- 第3節 中世以降の調査成果……………(中森)・ 31
- 第4節 中近世墓群の調査成果…………… 38
 - 1. 概要……………(北)・ 38
 - 2. 中世墓の調査……………(中森)・ 41
 - 3. 近世墓の調査……………(北)・ 70

第6章 門前第2遺跡から出土した人骨について……………(井上・川久保・足立)・191

第7章 まとめ

- 第1節 中近世墓群の考古学的考察……………(北・中森)・272
- 第2節 門前第2遺跡の変遷と周辺遺跡……………(北)・286

表(遺構計測表・遺物観察表)……………288

図版

挿図目次

図 1	名和淀江道路と関連遺跡……………	1	図 43	G 5 区墓配置図 2……………	43
図 2	遺跡の位置……………	2	図 44	G 5 区墓・マウンド状隆起 土層断面図……………	44
図 3	調査地区の名称……………	3	図 45	墓 2 ~ 5……………	45
図 4	大山町の位置……………	5	図 46	墓 6 ~ 10……………	47
図 5	周辺の遺跡……………	8	図 47	墓 11 ~ 13……………	49
図 6	調査後地形測量図……………	10	図 48	墓 14・17・19……………	50
図 7	F 区土層断面図……………	11	図 49	墓 15・16・18・22……………	51
図 8	G 区土層断面図……………	12	図 50	墓 20・21・23……………	53
図 9	F 区最終遺構面遺構配置図……………	13	図 51	墓 24 ~ 26……………	55
図 10	土坑 71……………	14	図 52	墓 27……………	56
図 11	ピット出土土器……………	14	図 53	墓 28 ~ 30……………	57
図 12	F 区遺構外出土遺物 1……………	15	図 54	墓 31 ~ 35……………	58
図 13	F 区遺構外出土遺物 2……………	16	図 55	墓 36 ~ 38……………	60
図 14	F 区第 1 遺構面遺構配置図……………	17	図 56	墓 39 ~ 43……………	62
図 15	墓 1……………	17	図 57	墓 44……………	63
図 16	墓 1 出土遺物……………	18	図 58	墓 45……………	64
図 17	土坑 72 ~ 76・溝 11……………	19	図 59	墓 46……………	65
図 18	F 区遺構外出土遺物 3……………	20	図 60	墓 47・49・50……………	66
図 19	F 区遺構外出土遺物 4……………	21	図 61	墓 48・51・52……………	68
図 20	G 区最終遺構面遺構配置図……………	23	図 62	G 5・G 3 区中世墓周辺 遺構外出土遺物……………	69
図 21	土坑 77 ~ 79……………	24	図 63	墓 187・188……………	69
図 22	土坑 79 出土土器……………	25	図 64	G 4 区墓配置図……………	71・72
図 23	土坑 80 ~ 84……………	26	図 65	G 4 区墓(土壇)配置図……………	73・74
図 24	土坑 85 ~ 87……………	27	図 66	区画溝土層断面図……………	75
図 25	土坑 88 ~ 92……………	28	図 67	区画溝出土遺物……………	75
図 26	G 6 区溝 12・ピット群……………	29	図 68	立石 1……………	76
図 27	溝 12 出土土器……………	30	図 69	立石 1 周辺出土遺物……………	76
図 28	ピット出土土器……………	30	図 70	標石周辺遺物出土状況……………	77
図 29	G 6 区遺構外出土土器……………	31	図 71	標石周辺出土遺物 1(土師器)……………	79
図 30	G 区中近世遺構配置図……………	32	図 72	標石周辺出土遺物 2(陶器)……………	80
図 31	掘立柱建物 5……………	33	図 73	標石周辺出土遺物 3(磁器 皿)……………	81
図 32	掘立柱建物 6……………	34	図 74	標石周辺出土遺物 4(磁器 碗ほか) ……………	82
図 33	掘立柱建物 6 出土土器……………	34	図 75	標石周辺出土遺物 5(銭貨)……………	83
図 34	道路状遺構 1……………	35	図 76	標石周辺出土遺物 6 (煙管・鉄製品ほか)……………	84
図 35	道路状遺構 1 出土土器……………	36	図 77	標石周辺出土遺物 7(遺構内)……………	84
図 36	土坑 93……………	36	図 78	A 類墓配置図……………	86
図 37	集石 4……………	36	図 79	墓 53……………	87
図 38	集石 4 出土遺物……………	36	図 80	墓 53 出土遺物……………	87
図 39	溝 13 ~ 16……………	37			
図 40	溝 16 出土遺物……………	37			
図 41	中近世墓群全体図……………	39・40			
図 42	G 5 区墓配置図 1……………	42			

図 81	墓54	87	図126	墓77	105
図 82	墓54出土遺物	88	図127	墓77出土遺物	105
図 83	墓55	88	図128	墓78	106
図 84	墓55出土遺物	88	図129	墓78出土遺物	106
図 85	墓56	89	図130	墓79	107
図 86	墓56出土遺物	89	図131	墓79出土遺物	107
図 87	墓57	90	図132	墓80	107
図 88	墓57出土遺物	90	図133	墓80出土遺物	108
図 89	墓58	90	図134	墓81	109
図 90	墓58出土遺物	90	図135	墓81出土遺物	109
図 91	墓59	91	図136	墓82・83	110
図 92	墓59出土遺物	91	図137	墓82出土遺物	110
図 93	墓60	92	図138	墓84	111
図 94	墓60出土遺物	92	図139	墓84出土遺物	111
図 95	墓61	93	図140	墓85	112
図 96	墓61出土遺物	93	図141	墓85出土遺物	112
図 97	墓62	93	図142	墓86・87	112
図 98	墓63	94	図143	墓86出土遺物	113
図 99	墓63出土遺物	94	図144	墓88	113
図100	墓64	95	図145	墓88出土遺物	114
図101	墓64出土遺物	95	図146	墓89	115
図102	墓65	95	図147	墓89出土遺物	115
図103	墓65出土遺物	95	図148	墓90	115
図104	墓66	96	図149	墓90出土遺物	116
図105	墓66出土遺物	96	図150	墓91	116
図106	墓67	97	図151	墓91出土遺物	116
図107	墓67出土遺物	97	図152	B類墓配置図	117
図108	墓68	98	図153	墓92	118
図109	墓68出土遺物	98	図154	墓92出土遺物	118
図110	墓69	98	図155	墓93	119
図111	墓69出土遺物	98	図156	墓93出土遺物	119
図112	墓70	99	図157	墓94	120
図113	墓70出土遺物	99	図158	墓94出土遺物	120
図114	墓71	100	図159	墓95	121
図115	墓71出土遺物	100	図160	墓95出土遺物	121
図116	墓72	101	図161	墓96	122
図117	墓72出土遺物	101	図162	墓96出土遺物	122
図118	墓73	102	図163	墓97	122
図119	墓73出土遺物	102	図164	墓97出土遺物 1	122
図120	墓74	103	図165	墓97出土遺物 2	123
図121	墓74出土遺物	103	図166	墓98	123
図122	墓75	104	図167	墓98出土遺物	123
図123	墓75出土遺物	104	図168	墓99	124
図124	墓76	104	図169	墓99出土遺物	124
図125	墓76出土遺物	105	図170	墓100	124

図171	墓101	124	図216	墓126	143
図172	墓101出土遺物	124	図217	墓127	143
図173	墓102	125	図218	墓127出土遺物	144
図174	墓102出土遺物	125	図219	墓128	145
図175	墓103	126	図220	墓128出土遺物	145
図176	墓103出土遺物	126	図221	墓129	146
図177	墓104	127	図222	墓129出土遺物	146
図178	墓104出土遺物	127	図223	墓130	147
図179	墓105	128	図224	墓130出土遺物 1	147
図180	墓105出土遺物	128	図225	墓130出土遺物 2	147
図181	墓106	129	図226	墓131	148
図182	墓106出土遺物	129	図227	墓131出土遺物	148
図183	墓107	129	図228	墓132	149
図184	墓107出土遺物	130	図229	墓132出土遺物	149
図185	墓108	130	図230	墓133	150
図186	墓108出土遺物	131	図231	墓133出土遺物	150
図187	墓109	131	図232	墓134	151
図188	墓110	131	図233	墓134出土遺物	151
図189	墓111	132	図234	墓135	152
図190	墓111出土遺物	132	図235	墓135出土遺物	152
図191	墓112	133	図236	墓136	153
図192	墓112出土遺物	133	図237	墓136出土遺物	153
図193	墓113	134	図238	墓137	154
図194	墓114	134	図239	墓137出土遺物	154
図195	墓114出土遺物	134	図240	墓138	155
図196	墓115	135	図241	墓138出土遺物	155
図197	墓115出土遺物	135	図242	墓139	156
図198	墓116	136	図243	墓139出土遺物	156
図199	墓116出土遺物	136	図244	墓140	157
図200	墓117	136	図245	墓140出土遺物	157
図201	墓117出土遺物	136	図246	墓141	157
図202	墓118	137	図247	墓141出土遺物	157
図203	墓118出土遺物	137	図248	C・D類墓配置図	158
図204	墓119	138	図249	墓142	159
図205	墓120	138	図250	墓142出土遺物	159
図206	墓120出土遺物	138	図251	墓143	160
図207	墓121	139	図252	墓143出土遺物	160
図208	墓121出土遺物	139	図253	墓144	161
図209	墓122	140	図254	墓144出土遺物	161
図210	墓122出土遺物	140	図255	墓145	162
図211	墓123	141	図256	墓145出土遺物	162
図212	墓123出土遺物	141	図257	墓146	163
図213	墓124	142	図258	墓146出土遺物	163
図214	墓124出土遺物	142	図259	墓147	164
図215	墓125	143	図260	墓147出土遺物	164

図261	墓148	165	図306	墓173出土遺物	184
図262	墓148出土遺物	165	図307	墓174	184
図263	墓149	166	図308	墓174出土遺物	184
図264	墓149出土遺物	166	図309	墓175	185
図265	墓150	166	図310	墓175出土遺物	185
図266	墓150出土遺物	166	図311	墓176	186
図267	墓151	167	図312	墓176出土遺物	186
図268	墓151出土遺物	167	図313	墓177	186
図269	墓152	168	図314	墓178	187
図270	墓152出土遺物	168	図315	墓178出土遺物	187
図271	墓153・154	169	図316	墓179	187
図272	墓153出土遺物	169	図317	墓180	187
図273	墓155	170	図318	墓181	187
図274	墓155出土遺物	170	図319	墓182	187
図275	墓156	170	図320	墓182出土遺物	187
図276	墓156出土遺物	171	図321	墓183	187
図277	墓157	171	図322	墓184・185	188
図278	墓157出土遺物	171	図323	墓184出土遺物	188
図279	墓158	172	図324	墓185出土遺物	188
図280	墓158出土遺物	172	図325	墓186	188
図281	墓159	173	図326	墓186出土遺物	188
図282	墓159出土遺物	173	図327	G区遺構外出土遺物	190
図283	墓160・161	173	図328	仰臥屈位の模式図と検出人骨図面	191
図284	墓160出土遺物	174			
図285	墓162・163	174	図329	半仰臥屈位の模式図と検出人骨図面	191
図286	墓162出土遺物	174			
図287	墓164	175	図330	仰臥立膝位の模式図と検出人骨図面	192
図288	墓164出土遺物	175			
図289	墓165	176	図331	半腹臥正座位の模式図と	192
図290	墓165出土遺物	176		検出人骨図面	192
図291	墓166	177	図332	立膝座位の模式図と検出人骨図面	192
図292	墓166出土遺物	177	図333	右側臥屈位の模式図と検出人骨図面	192
図293	墓167	178			
図294	墓167出土遺物	178	図334	毛髪様物質の反射電子像と	259
図295	墓168	179		X線微小分析	259
図296	墓168出土遺物	179	図335	死亡年齢の分布	259
図297	墓169	180	図336	土壌類型と被埋葬者の性別	261
図298	墓169出土遺物	180	図337	仰臥屈位と仰臥立膝位をとる	261
図299	墓170	180		人骨の埋葬方向	261
図300	墓170出土遺物	180	図338	立膝座位と正座位をとる人骨の	262
図301	墓171	181		埋葬方向	262
図302	墓171出土遺物	181	図339	右側臥屈位と左側臥屈位をとる	263
図303	墓172	182		人骨の埋葬方向	263
図304	墓172出土遺物	182	図340	土壌類型と埋葬形態	273
図305	墓173	183			

挿表目次

表 1	標石周辺遺物出土位置一覧……………	78	表10	中近世墓一覧表……………	289～291
表 2	門前第 2 遺跡から検出された 人骨リスト……………	265	表11	土器・陶磁器類観察表……………	292～301
表 3	頭蓋骨計測値……………	267	表12	鉄製品観察表……………	302～304
表 4	頭蓋非計測的小変異……………	268	表13	釘観察表……………	305～314
表 5	近世墓の切り合いの新旧……………	272	表14	銭貨観察表……………	315～318
表 6	墓の特徴の変遷……………	274	表15	銅製品観察表……………	319・320
表 7	土壌形態別にみた副葬状況……………	280	表16	木製品観察表……………	320
表 8	中近世墓出土遺物一覧表……………	282～284	表17	ガラス製品ほか観察表……………	321
表 9	ピット一覧表……………	288	表18	石器・石製品観察表……………	321

図版目次

カラー図版1	1 調査前航空写真	カラー図版3	1 G4区近世墓群標石検出状況
	2 G区中近世墓群		2 G4区近世墓群上面出土陶器
カラー図版2	1 G5区中世墓群完掘状況	カラー図版4	1 G4区近世墓群上面出土染付皿
			2 G4区近世墓群上面出土磁器

図版 1	1 調査前航空写真	4	土坑80礫検出状況
	2 調査後航空写真	5	土坑81礫検出状況
図版 2	1 F区最終面完掘状況	6	土坑82
	2 土坑71土層断面	7	土坑83
	3 土坑71完掘状況	8	土坑84
図版 3	1 F区第 1 遺構面完掘状況	図版 8	1 土坑85
	2 墓 1 礫検出状況		2 土坑86
	3 墓 1 完掘状況		3 土坑87・93
	4 墓 1 出土遺物		4 土坑88
図版 4	1 土坑72礫検出状況		5 土坑89礫検出状況
	2 土坑73		6 土坑90
	3 土坑74遺物出土状況		7 土坑91
	4 土坑74出土遺物		8 土坑92
	5 土坑75	図版 9	1 集石 4
	6 土坑76遺物出土状況		2 集石 4 出土土器
	7 土坑76出土遺物		3 溝12・ピット群
図版 5	1 F区テラス 8・9 完掘状況		4 G6区出土土器
	2 F区完掘状況	図版10	1 道路状遺構 1
	3 F区包含層出土勾玉		2 道路状遺構 1
図版 6	1 F区出土土器類		3 道路状遺構 1 出土土器
図版 7	1 土坑77		4 掘立柱建物 6 出土土器
	2 土坑78		5 掘立柱建物 5
	3 土坑79遺物出土状況		6 溝13～16

- | | | | | | |
|------|---|-----------------------------|------|---|-----------------------|
| 図版11 | 1 | G 2 区 ~ G 5 区 中近世墓群完掘
状況 | 図版20 | 1 | 墓33礫検出状況 |
| | | | | 2 | 墓33完掘状況 |
| 図版12 | 1 | G 5 区中世墓群検出状況 | | 3 | 墓34礫検出状況 |
| | 2 | G 5 区中世墓群完掘状況 | | 4 | 墓34・35完掘状況 |
| | 3 | G 5 区中世墓群完掘状況 | | 5 | 墓35出土遺物 |
| 図版13 | 1 | 墓 2 礫検出状況 | | 6 | 墓36・37遺物出土状況 |
| | 2 | 墓 3 礫検出状況 | | 7 | 墓36出土遺物 |
| | 3 | 墓 3 遺物出土状況 | | 8 | 墓37出土遺物 |
| | 4 | 墓 3 出土遺物 | 図版21 | 1 | 墓39 |
| | 5 | 墓 4 | | 2 | 墓40 |
| | 6 | 墓 5 礫検出状況 | | 3 | 墓41 |
| 図版14 | 1 | 墓 7・8 礫検出状況 | | 4 | 墓42遺物出土状況 |
| | 2 | 墓 6 遺物出土状況 | | 5 | 墓42土層断面 |
| | 3 | 墓 9 礫検出状況 | | 6 | 墓44遺物出土状況 |
| | 4 | 墓10遺物出土状況 | | 7 | 墓44人骨検出状況 |
| | 5 | 墓10出土遺物 | 図版22 | 1 | 墓43遺物出土状況 |
| 図版15 | 1 | 墓12・13遺物出土状況 | | 2 | 墓45遺物出土状況 |
| | 2 | 墓12出土遺物 | | 3 | 墓46遺物出土状況 |
| | 3 | 墓13出土遺物 | | 4 | 墓46漆器出土状況 |
| | 4 | 墓14出土遺物 | | 5 | 墓47 |
| | 5 | 墓14遺物出土状況 | | 6 | 墓48 |
| 図版16 | 1 | 墓15・16礫検出状況 | 図版23 | 1 | 墓49遺物出土状況 |
| | 2 | 墓15・16遺物出土状況 | | 2 | 墓49出土遺物 |
| | 3 | 墓15出土和紙 | | 3 | 墓50遺物出土状況 |
| | 4 | 墓18遺物出土状況 | | 4 | 墓50出土遺物 |
| | 5 | 墓19礫検出状況 | | 5 | 墓51標石検出状況 |
| | 6 | 墓19遺物出土状況 | | 6 | 墓51礫検出状況 |
| 図版17 | 1 | 墓20検出状況 | | 7 | 墓52 |
| | 2 | 墓21検出状況 | 図版24 | 1 | G 5 区・G 3 区出土銭貨 |
| | 3 | 墓17 ~ 墓21完掘状況 | | 2 | G 5 区遺構外出土土器 |
| | 4 | 墓22出土遺物 | 図版25 | 1 | G 4 区完掘状況 |
| | 5 | 墓22 | | 2 | G 4 区標石群検出状況 |
| | 6 | 墓23遺物出土状況 | 図版26 | 1 | G 4 区北西部標石検出状況 |
| 図版18 | 1 | 墓24礫検出状況 | | 2 | 標石検出状況(墓149 ~ 155上標石) |
| | 2 | 墓24遺物出土状況 | | 3 | 立石 1 検出状況 |
| | 3 | 墓25検出状況 | | 4 | 立石 1 周辺焼骨・遺物出土状況 |
| | 4 | 墓25礫検出状況 | | 5 | 立石 1 周辺出土遺物 |
| | 5 | 墓26遺物出土状況 | 図版27 | 1 | 墓53人骨検出状況 |
| | 6 | 墓26出土遺物 | | 2 | 墓54人骨検出状況 |
| 図版19 | 1 | 墓27遺物出土状況 | | 3 | 墓54人骨検出状況アップ |
| | 2 | 墓28遺物出土状況 | | 4 | 墓55出土遺物 |
| | 3 | 墓29礫検出状況 | | 5 | 墓55人骨検出状況 |
| | 4 | 墓32 | 図版28 | 1 | 墓56人骨検出状況 |
| | 5 | 墓30遺物出土状況 | | 2 | 墓56上層出土遺物 |
| | 6 | 墓30出土遺物 | | 3 | 墓56出土遺物 |

	4	墓57人骨検出状況	図版35	1	墓84人骨検出状況
	5	墓58出土遺物		2	墓84出土遺物
	6	墓59人骨検出状況		3	墓85人骨検出状況
	7	墓60人骨検出状況		4	墓86出土遺物
図版29	1	墓61人骨検出状況		5	墓86人骨検出状況
	2	墓61出土遺物		6	墓86・87完掘状況
	3	墓63標石	図版36	1	墓88ほか標石検出状況
	4	墓63標石出土遺物		2	墓88標石出土遺物
	5	墓63人骨検出状況		3	墓88人骨検出状況
	6	墓63出土遺物		4	墓88出土遺物
	7	墓63人骨検出状況アップ		5	墓89標石出土遺物
図版30	1	墓64人骨検出状況		6	墓88・89完掘状況
	2	墓66土層断面	図版37	1	墓90人骨検出状況
	3	墓66出土遺物		2	墓90出土遺物
	4	墓67人骨検出状況		3	墓91人骨検出状況
	5	墓67出土遺物		4	墓91出土遺物
	6	墓68人骨検出状況		5	墓92遺物出土状況
	7	墓68人骨検出状況アップ		6	墓93
図版31	1	墓69		7	墓93出土遺物
	2	墓69標石出土遺物	図版38	1	墓94人骨検出状況
	3	墓70人骨検出状況		2	墓94出土遺物
	4	墓71出土遺物		3	墓95人骨検出状況
	5	墓71人骨検出状況		4	墓95出土遺物
	6	墓72人骨検出状況		5	墓96
	7	墓73礫検出状況		6	墓96出土遺物
図版32	1	墓73人骨検出状況	図版39	1	墓97出土遺物
	2	墓73出土遺物		2	墓97人骨検出状況
	3	墓74・155		3	墓98標石出土遺物
	4	墓74人骨検出状況アップ		4	墓98出土遺物
	5	墓74出土遺物		5	墓98人骨検出状況
	6	墓75人骨検出状況		6	墓99出土遺物
	7	墓75出土遺物		7	墓99人骨検出状況
図版33	1	墓76人骨検出状況	図版40	1	墓99・100
	2	墓77人骨検出状況		2	墓101人骨検出状況
	3	墓77人骨検出状況アップ		3	墓102人骨検出状況
	4	墓78人骨検出状況		4	墓102標石出土遺物
	5	墓78出土遺物		5	墓102出土遺物
	6	墓79人骨検出状況		6	墓103人骨検出状況
図版34	1	墓80遺物出土状況	図版41	1	墓104出土遺物
	2	墓80出土遺物		2	墓104人骨検出状況
	3	墓80出土数珠球		3	墓105出土遺物
	4	墓80人骨検出状況アップ		4	墓105人骨検出状況
	5	墓81人骨検出状況		5	墓106人骨検出状況
	6	墓82人骨検出状況		6	墓107出土遺物
	7	墓82出土遺物		7	墓107人骨検出状況

図版42	1	墓108人骨検出状況	3	墓137・138人骨検出状況	
	2	墓108出土遺物	4	墓137人骨検出状況	
	3	墓109人骨検出状況	5	墓137出土遺物	
	4	墓110	6	墓138人骨検出状況	
	5	墓111遺物出土状況	7	墓138出土遺物	
	6	墓111出土遺物	図版50	1	墓139人骨検出状況
図版43	1	墓112人骨検出状況	2	墓139出土遺物	
	2	墓113・114	3	墓140人骨検出状況	
	3	墓114出土遺物	4	墓141人骨検出状況	
	4	墓115出土遺物	5	墓141出土遺物	
	5	墓115人骨検出状況	6	墓142人骨検出状況	
	6	墓116人骨検出状況	図版51	1	墓143人骨検出状況
図版44	1	墓116～120標石検出状況	2	墓143出土漆器塗膜片	
	2	墓117遺物出土状況	3	墓143出土遺物	
	3	墓118人骨検出・墓75完掘状況	4	墓144人骨検出状況アップ	
	4	墓117・118標石出土遺物	5	墓144出土遺物	
	5	墓120人骨検出状況	6	墓143・144人骨検出状況	
	6	墓120出土遺物	図版52	1	墓145人骨検出状況
図版45	1	墓121出土遺物	2	墓146人骨検出状況	
	2	墓121人骨検出状況	3	墓146出土遺物	
	3	墓122人骨検出状況	4	墓147人骨検出状況	
	4	墓123～125人骨・遺物検出状況	5	墓148人骨検出状況	
	5	墓123出土遺物	6	墓148人骨検出状況アップ	
	6	墓124出土遺物	7	墓148出土遺物	
図版46	1	墓127人骨検出状況	図版53	1	墓149人骨検出状況
	2	墓127人骨検出状況	2	墓150人骨検出状況	
	3	墓127出土遺物	3	墓151・152人骨検出状況	
	4	墓128遺物出土状況	4	墓151人骨検出状況アップ	
	5	墓128出土遺物	5	墓151出土遺物	
	6	墓129人骨検出状況	6	墓152出土遺物	
	7	墓129出土遺物	7	墓152人骨検出状況	
図版47	1	墓130人骨検出状況	図版54	1	墓153人骨検出状況
	2	墓130出土遺物	2	墓153出土遺物	
	3	墓131人骨検出状況	3	墓154遺物出土状況	
	4	墓131出土遺物	4	墓155人骨検出状況	
	5	墓132出土遺物	5	墓156遺物出土状況	
	6	墓132人骨検出状況	6	墓156出土遺物	
図版48	1	墓133人骨検出状況	図版55	1	墓157出土遺物
	2	墓134人骨検出状況	2	墓158人骨検出状況	
	3	墓134出土遺物	3	墓158出土遺物	
	4	墓135～140標石検出状況	4	墓160人骨検出状況	
	5	墓135人骨検出状況	5	墓160完掘・161人骨検出状況	
	6	墓135出土遺物	6	墓160人骨検出状況アップ	
図版49	1	墓136人骨検出状況	図版56	1	墓159人骨検出状況
	2	墓136出土遺物	2	墓162人骨検出状況	

	3	墓163		6	墓172出土遺物
	4	墓162人骨検出状況アップ		7	墓172人骨検出状況
	5	墓164・110人骨検出状況	図版60	1	墓173上層遺物・人骨検出状況
	6	墓164出土遺物		2	墓173上層出土遺物
図版57	1	墓165標石検出状況		3	墓173出土遺物
	2	墓165人骨検出状況		4	墓173人骨検出状況
	3	墓165人骨検出状況アップ		5	墓174完掘状況
	4	墓165出土遺物		6	墓177人骨検出状況
	5	墓166人骨検出状況	図版61	1	墓175人骨検出状況
	6	墓166人骨検出状況アップ		2	墓175人骨検出状況アップ
	7	墓166標石出土遺物		3	墓175出土遺物
	8	墓166出土遺物		4	墓176人骨検出状況
図版58	1	墓167人骨検出状況		5	墓176出土遺物
	2	墓167棺材・銭貨出土状況		6	墓178標石出土遺物
	3	墓168人骨検出状況		7	墓178土層断面
	4	墓168出土遺物	図版62	1	墓179
	5	墓169人骨検出状況		2	墓184人骨検出・墓185完掘状況
	6	墓169人骨検出状況アップ		3	墓184出土遺物
	7	墓169上面出土遺物		4	墓186
図版59	1	墓170土層断面		5	墓187人骨検出状況
	2	墓170出土遺物		6	墓188遺物出土状況
	3	墓171礫検出状況	図版63	1	G4区出土土師器
	4	墓171人骨検出状況	図版64	1	G4区近世墓ほか出土陶磁器
	5	墓172人骨検出状況アップ			

カラー図版

図版65 頭蓋骨（墓63・73・82・137）

図版66 頭蓋骨（墓144・150・151・160）

図版67 頭蓋骨（墓162・165・166・169）

図版68 頭蓋骨（墓172・175）・硬直性脊椎炎（墓150）

図版69 疾患の認められる人骨

図版70 埋葬肢位と性別・銭貨付着の毛髪様物質

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、平成17年度に一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴い行った、西伯郡大山町門前地内の工事予定地に存在する、周知の埋蔵文化財包蔵地である門前第2遺跡（菖蒲田地区）の記録保存を目的としたものである。

ところで山陰地方では、国道9号線の交通混雑緩和、荒天時の交通障害解消、災害時の緊急輸送の代替道路確保及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められ、鳥取県西部地域では、米子道路、名和淀江道路が自動車専用道路として計画、施工されている。

このうち大山町（旧大山町・名和町）を通る名和淀江道路の計画地内及び隣接地には、多数の周知の遺跡があり、建設に先立って計画地内の遺跡並びに遺跡の範囲を確認する必要性が生じた。このため、平成2年度から大山町、名和町各教育委員会（いずれも当時）によって、国庫補助事業として逐次試掘・確認調査が行われた。

その結果を受け、文化財保護法に基づく手続きを踏まえ、平成12年度から平成16年度にかけて、財団法人鳥取県教育文化財団が調査主体となり、安原溝尻遺跡など17箇所の遺跡の発掘調査を行い、各報告書が刊行された。

門前第2遺跡（菖蒲田地区）は、旧名和町教育委員会が平成14年度に国庫補助事業として試掘調査を行い、遺構及び遺物を確認したものである。その結果を受け、平成16年度に（財）鳥取県教育文化

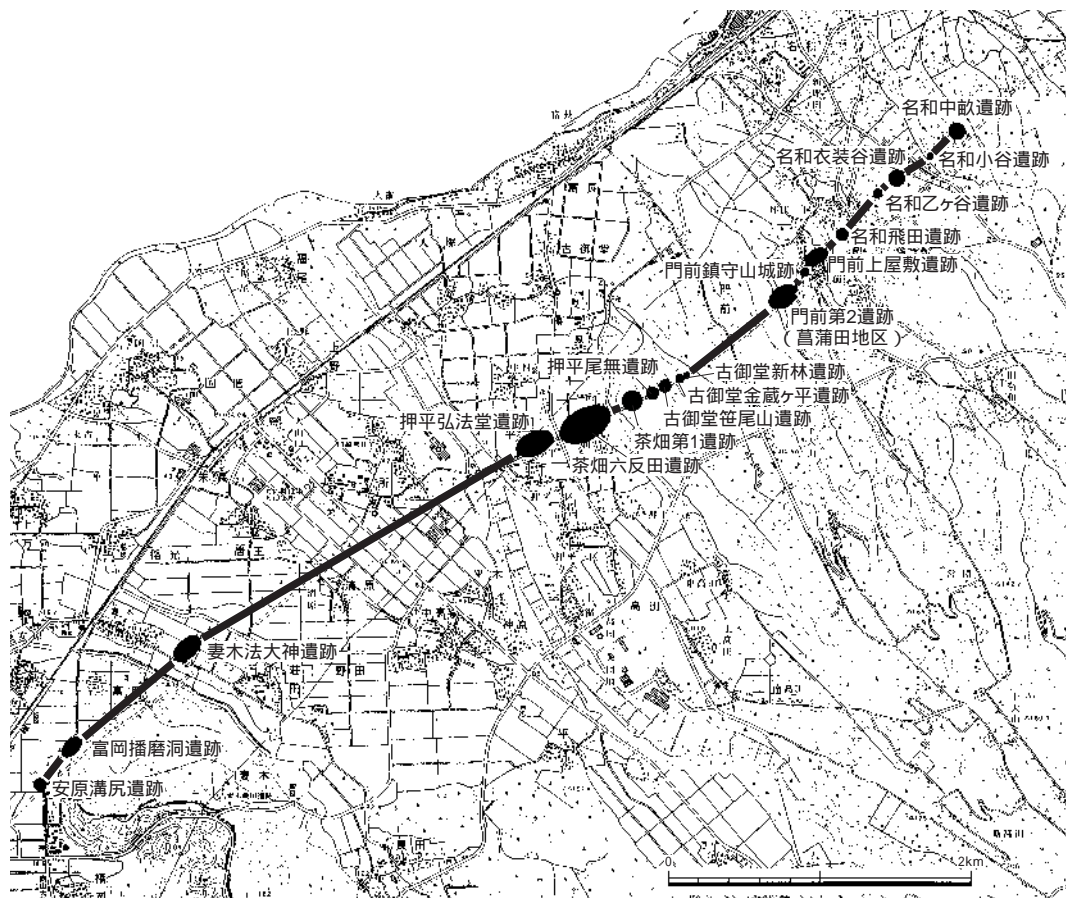


図1 名和淀江道路と関連遺跡

財団が当該遺跡のうち、A区からE区を調査し、報告書を刊行している。この調査では、縄文時代早期の配石10基、縄文時代の土坑群、弥生時代の墳丘墓1基、弥生時代から古墳時代の集落、中世の掘立柱建物跡や耕作痕など当該地域の歴史を考える上で重要な遺構が検出されている。

平成17年4月からは、調査組織改組があり国土交通省関連事業については、鳥取県埋蔵文化財センターが調査主体となり、発掘調査を行うこととなった。

平成17年度の調査は当初未用買地を除くF・G区が対象であったが、G区西側を南北に走る農道西側にも遺跡の広がりを示す平坦地が存在し、踏査によって中世の遺物が採取されたことから急遽調査対象地として追加となった。また、G区に存在した2箇所の未用買地が年度内に買収完了となり、その部分も協議の結果追加調査となった。

国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所は、文化財保護法第94条に基づく埋蔵文化財発掘の通知を行った上、鳥取県教育委員会事務局教育長の指示により、鳥取県埋蔵文化財センターが発掘調査を担当することとなり、文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を行った。

【参考文献】

辻 信広2000『名和町内遺跡分布調査報告書』名和町埋蔵文化財発掘調査報告書第26集、名和町教育委員会

辻 信広2004『名和町内遺跡発掘調査報告書』名和町文化財調査報告書第33集、名和町教育委員会

山根益隆・来海栄1990『大山町内遺跡発掘調査報告書 安原所在遺跡・平第2遺跡』大山町埋蔵文化財調査報告書10

中森 祥ほか2005『門前第2遺跡(菖蒲田遺跡)』鳥取県教育文化財団調査報告書106、(財)鳥取県教育文化財団

第2節 調査の経過

(1) 調査区の名称と調査方法

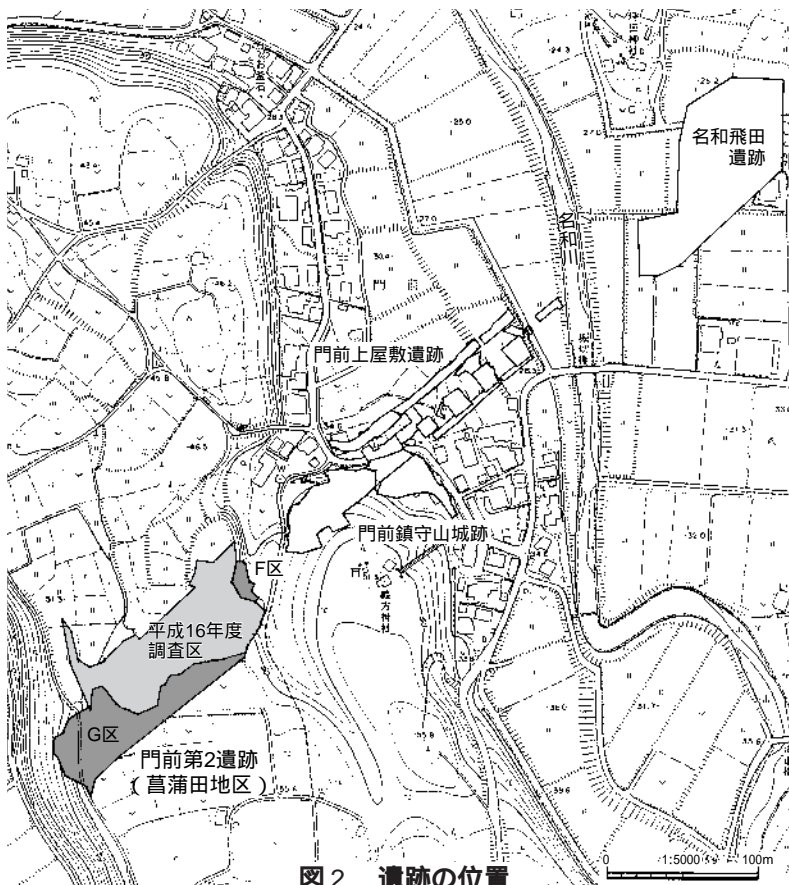


図2 遺跡の位置

門前第2遺跡(菖蒲田地区)は、地形的特徴から調査区を分割し、(財)鳥取県教育文化財団の調査に引き続きアルファベット順に便宜的に名称を付した(第3図参照)。現況ではF区は雑林地、G区は畑地・墓地及び雑林地である。

調査前に世界測地系公共座標に載る基準点及び方眼杭の設置を業者委託し、平成16年度に引き続き調査区内に10m方眼の基準杭を設定してグリッドを設け、その結果、東西軸は北からA～R、南北軸は東から1～13とした。グリッド名は、東西南北軸交点の北東側杭の名称をとって呼称することとし、座標はE2杭(X:-55900m、Y:-75940m)、R12杭(X:-56030m、Y:-76040m)などとなった。標高値

は、4級基準点4・No.1の48.290mを使用した。

検出した遺構・遺物の記録には、平板、光波トランシット及び自動レベルを用い、簡易遣り方測量を行った。現地での写真撮影は35mm判、プロニー（6×7）判、および4×5判カメラにより地上又は写真用ヤグラ上から行った。また、遺跡完掘状況写真については、ラジコンヘリコプターからの空中写真撮影（プロニー判カメラ使用）も併せて行った。遺物写真撮影は平成18年度に行い、プロニー（6×7）判及び4×5判カメラを用いた。いずれも白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用した。

（2）調査の経過

平成17年度は、現地調査のみで、F・G区を並行して調査した。4月25日に重機による表土剥ぎ作業及び作業員オリエンテーションを行い、4月26日から平成18年1月27日にかけて人力による検出作業を行った。

F区では縄文時代と中世の遺構面及び遺物包含層を調査し、中世墓、土坑、ピットなどを検出した。

G区は、耕作地の区割りなどによって更に1～6区に細分した。G1～3区では、縄文時代と考えられる落とし穴11基、鎌倉時代ごろの道路状遺構及び掘立柱建物2棟、中世墓11基などを検出した。G4区は、「無縁墳墓」として改葬公告が出され、用地買収が遅れた箇所ので、7月12日から検出作業を行い、中世から近世にかけての集石を伴う土葬墓140基を調査した。遺構数が極めて多く、さらにほとんどの墓から人骨が出土したため、最も多くの作業量を費やした。出土した人骨の調査指導は鳥取大学医学部井上貴央教授、川久保善智助手に依頼し、同大学学生の参加も得て、調査の進行に合わせて順次取り上げ作業を行った。G5区は、調査前の踏査によって遺構が存在する可能性が高い平坦面と礫集積や遺物が発見されたことで、急遽調査対象となった地区である。中世の土壌墓37基などを検出した。G6区は、未用買地区で当初調査対象外であったが、急遽用地買収が可能となり10月11日から調査を行った。弥生時代から古墳時代にかけての遺構面と遺物包含層を確認した。

その後、平成18年1月17日に調査後空撮、1月10日から調査後の地形測量を業者委託し、期限内に終了した。すべての作業は、1月27日に終了した。なお、報告書の刊行は、国土交通省との協議の結果、平成18年度に行うこととなった。

平成18年度は、遺物整理及び報告書作成を行った。



人骨の取り上げ作業

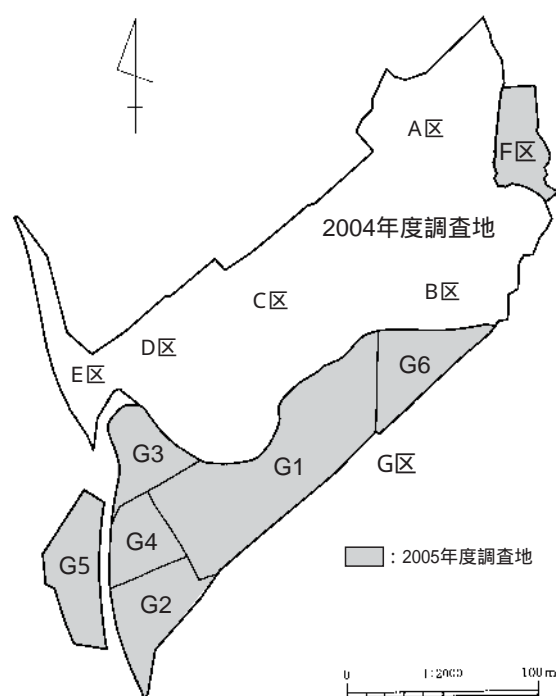


図3 調査地区の名称

第3節 調査体制

平成17年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所 長 田中 弘道
次 長 戸井 歩（兼総務係長）
総 務 係
副 主 幹 福田 高之

発掘事業室

室 長 加藤 隆昭（兼調整係長）
調 整 係
文化財主事 八峠 興
調査第二係（名和調査事務所）
係 長 牧本 哲雄
文化財主事 恩田 智則
中森 祥
北 浩明

平成18年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所 長 久保 穰二郎
次 長 戸井 歩（兼総務係長）
総 務 係
副 主 幹 福田 高之

発掘事業室

室 長 加藤 隆昭（兼調整係長）
調 整 係
文化財主事 濱 隆造
調査第二係（名和調査事務所）
係 長 牧本 哲雄
文化財主事 北 浩明

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

門前第2遺跡が所在する大山町は、平成17年3月28日に旧中山町、旧名和町、旧大山町が合併して誕生した町である。この町名は、中国地方最高峰であり鳥取県のシンボリックな存在でもある「大山」が所在すること由来する。当町は鳥取県西部、西伯郡の東部を占める位置にあり、県庁所在地の鳥取市からは西へ約80km、県西部中核都市の米子市からは東へ約20kmの位置にある。町域は、南端の大山（1,729m）を頂点に、船上山（615m）から金屋付近の日本海に至る線を東辺とし、西辺は大山を頂点に下槇原・孝麗山（751m）を結び保田付近の日本海に至る、南北に細長く不整逆三角状に広がる形を呈す。東西約15km、南北約20km、総面積は約189.8km²を測り、人口は約18,800人（平成18年末）の農畜産業・観光を主な産業にする町である。

本町の地勢は、大山山系から放射状に流れる小河川により開削並びに侵食され残った、手指状に走る台地状の尾根と急峻な小渓谷が繰り返す火山性台地と、甲川、下市川、真子川、名和川、阿弥陀川流域に発達した平野部からなる。平野部は、肥沃な黒ボク地帯で、特に阿弥陀川流域は県内でも屈指の広さとなる扇状地を形成している。台地は、御来屋砂礫層上に主に大山火山灰土の堆積したもので、海岸線付近まで延びている。町内には、前述の大山山麓に源流を發する河川の他、大小計12本の川が日本海に注いでいる。

日本海に面した地域では、御崎港、御来屋港を中心に沿岸漁業が盛んで、ヒラメ・ハマチ・タイ・アジなどの水揚げがあり、特にウニ・板ワカメは特産品になっている。町域北側から中部域は、農業を中心とした第1次産業が盛んである。低地では水田、台地上ではブロッコリー、スイカ、果樹などの栽培が盛んである。旧名和地域は台地上にあるという特性から、多数の溜め池が形成され、農業用水として利用されている。町域南側は、高原を利用した畜産が盛んであるとともに、国立公園にも指定されている他、大山寺・大神山神社などの著名な文化財もある。また、冬季には多くのスキー客で賑わっており、四季を通じて自然豊かな景勝地を求めて多くの観光客が訪れる県内でも屈指の観光地になっている。

町内の遺跡の多くは、丘陵及び台地上に営まれている。門前第2遺跡は、門前集落から約1km西側の標高約55mの丘陵上に展開する。

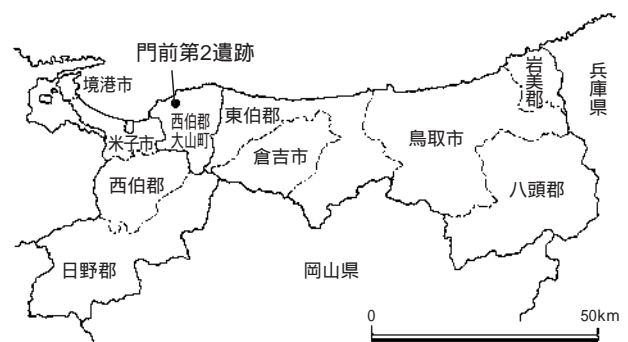


図4 大山町の位置

第2節 歴史的環境

以下、大山町周辺の歴史について略述する。

旧石器時代 鳥取県内では旧石器時代の遺構を伴う遺跡は発見されていないが、近年大山山麓では発掘調査によって、後期旧石器時代の遺物が確認されるようになった。門前第2遺跡（西畝地区）では、始良丹沢火山灰層以下（25,000年以前）で黒曜石製ナイフ形石器・黒曜石剥片を含む石器群が確認されている。名和小谷遺跡では、出土層位は不明であるが黒曜石製国府型ナイフ形石器が出土している。

縄文時代 大山町域は、広大な大山山麓にあり、県内においてもこの時期の遺跡が多数存在する地域となっている。退休寺、羽田井、上大山、陣構、坊領、荘田などでは、草創期と考えられる尖頭器が見ついているが、層的にはいずれも確認されていない。早期では、門前第2遺跡（菖蒲田地区）で押型文土器とともに10基の配石群が検出されている他、遺構は伴わないが赤坂後口山遺跡、退休寺飛渡り遺跡、古御堂金蔵ヶ平遺跡、上大山第1遺跡、角塚遺跡、高田第4遺跡、蛇居谷遺跡、大道原遺跡、塚田遺跡、蔵岡第1遺跡などで押型文、茶畑山道遺跡で燃糸文土器が出土している。前期では、石器工房と推定される下市築地ノ峯東通第2遺跡、名和乙ヶ谷遺跡で珧状耳飾が出土している。中期では、貯蔵穴が確認された細工塚遺跡などがある。後期では、南川遺跡で石組炉を備えた住居跡、晩期では、大塚第3遺跡で住居跡が見ついている。その他、落とし穴が八重第3遺跡、小松谷遺跡、下甲抜堤、赤坂後口山遺跡など多数の遺跡で検出されており、狩猟場として丘陵・微高地縁辺部が利用された様子が窺われる。

弥生時代 この時期本格的に稲作を中心とした社会が形成される。前期には米子市目久美遺跡で水田が確認されているが、大山町域では、当該期の稲作関連遺構は発見されていない。前期の遺構は少なく、大塚岩田遺跡で環濠の可能性のある溝が検出されている他、樋口第1遺跡、三谷遺跡、上野第1・2遺跡、塚田遺跡、大道原遺跡などで土器が出土している。

中期になると遺跡数が増え、集落遺跡として細工塚遺跡、退休寺遺跡、退休寺飛渡り遺跡、殿河内落合遺跡、押平弘法堂遺跡、門前上屋敷遺跡等が挙げられる。また、茶畑山道遺跡、茶畑第1遺跡では独立棟持柱を備える大型掘立柱建物、分銅形土製品、搬入土器を含む集落が検出され、当該地域の拠点的な集落と考えられている。

後期には、退休寺遺跡、八重第3遺跡、大塚塚根遺跡、押平尾無遺跡、茶畑第2遺跡、茶畑六反田遺跡、茶畑山道遺跡、茶畑第1遺跡、東高田遺跡など丘陵上に集落遺跡が多数造営されるようになる。その中で国史跡妻木晩田遺跡は、弥生時代中期以降約170haにおよぶ複数の丘陵上に、夥しい数の住居・倉庫をはじめ、首長墓である四隅突出型墳丘墓、環濠などが作られるなど、集落研究にとって重要な遺跡である。当該期には、松尾頭地区において、首長居宅と考えられる竪穴住居と近接して祭殿と考えられる二面庇の高床建物も確認されている。終末期には、首長墓である徳楽墳丘墓、松尾頭1・2号墓が築造されている。

古墳時代 古墳時代に入ると大型前方後円墳が各地に出現する。大山町域では、各時期において前方後円墳は確認されていない。前期では、小規模な方墳が茶畑第1遺跡で確認されているにすぎない。

当該地域の古墳は、ほとんどが中期から後期にかけてのものであるが、中期のものうち、高塚古墳、ハンボ塚古墳は、葺石・埴輪などの外表施設を持つ大型円墳で、首長墳の内容を持つ。

後期になると御崎古墳群、束積古墳群、三谷古墳群、高田古墳群、門前古墳群、豊成古墳群、坪田古墳群、富長山村古墳群、蔵岡古墳群、宮内古墳群、平古墳群などが形成されている。このうち、御崎古墳群では塊石を用いた箱式石棺を有し、鳥取県中部地域に特徴的に見られる壺型埴輪が出土しており、他地域との関連が窺われる。また、岩屋堂古墳、長野2号墳、岩屋平古墳、三谷16号墳、束積11号墳、高田26号墳、茶畑12号墳、豊成28号墳、蔵岡古墳群、宮内1・2号墳、平24号古墳など内部主体に切石積み横穴式石室を持つものが、米子市淀江町域まで広がっており、同一文化圏を形成している。また、高田25号墳は、横穴式石室内に家形石棺を内包する。当該域は、豊成横穴墓群など横穴墓群も形成されており、古墳築造集団より下位に位置付けられる葬制も混在する地域である。

この時代の集落は、依然丘陵上に営まれる傾向が強く、前期の茶畑第1遺跡、中期から後期の押平尾無遺跡、古御堂笹尾山遺跡、中畝遺跡、仁王堂遺跡がある。低地部では大塚塚根遺跡などがある。

奈良～平安時代 7世紀後半以降、山陰地方で仏教文化受容の痕跡が認められる。現在県内では22カ所の古代寺院が見つかっており、大山町域では高田原廃寺がある。ここでは、乱石積基壇や溝状遺構が検出され、上淀廃寺式の単弁十二葉蓮華文軒丸瓦が出土している。その他、名和神社付近が、『延喜式』に記載された古代山陰道の和奈駅（奈和の誤記か）として推定されているが、明確にはなっていない。また、阿弥陀川河口付近の大塚屋敷遺跡では、倉庫群と考えられる掘立柱建物群が見ついている。栃原窯跡は須恵器窯と考えられているが、上寺谷遺跡の製鉄炉やその周辺での鉄滓表採事例などから、鉄生産に関連する炭窯の可能性も指摘されている。細工塚遺跡では、大型の掘立柱建物群が検出され、平安時代には、官衙関連の遺構や有力層の建物が検出されている。長者原遺跡では礎石建物、区画溝、大量の炭化米が見つかっており、正倉と推定されている。名和衣装谷遺跡では2棟の大型掘立柱建物や鉄滓、緑釉・灰釉陶器が見つかっており、郡司層の居宅又は郡衙下部の鉄生産に関わる遺構と考えられている。茶畑六反田遺跡では、条里区画の一部と見られる溝が検出され、緑釉陶器や墨書土器が出土している。名和乙ヶ谷遺跡では、道路状遺構が検出されている。また、大山寺は、密教隆盛とともに信仰の中心的な役割を果たし、地方豪族に並ぶ僧兵勢力を有すようになる。平安時代末期には末法思想が広まる中、和鏡8枚などを含む壹宮経塚が作られている。

中世 律令体制の崩壊とともに封建制社会が形成される。門前上屋敷遺跡では、屋敷地を区画すると考えられる大溝、交易品としての青・白磁が検出されている他大規模な造成が認められ、居館又は寺院跡の指摘もある。門前礎石群は、青・白磁、青花などの出土から中世以降の礎石建物と考えられる。その他、旧名和町域には、名和長年をはじめとする名和氏一族に関わるとされる旧跡が各所に見られる。その他、大山町域には、籠津豊後守敦忠の居城とされる岩井垣城、天守山城、香原山城、松尾城などの他、富長城、長野城、末吉城、福尾城など日本海沿岸部にも多く砦跡が築かれている。

近世 寛永9（1632）年に池田光仲が鳥取藩主となり、因伯は幕末まで池田氏の治世となる。この時代、御来屋は伯耆街道の宿駅、藩の運上米の積出港として重要な位置を占めた。

【参考文献】

名和町誌編纂委員会編 1978『名和町誌』

鳥取県埋蔵文化財センター 1986『鳥取県の古墳』

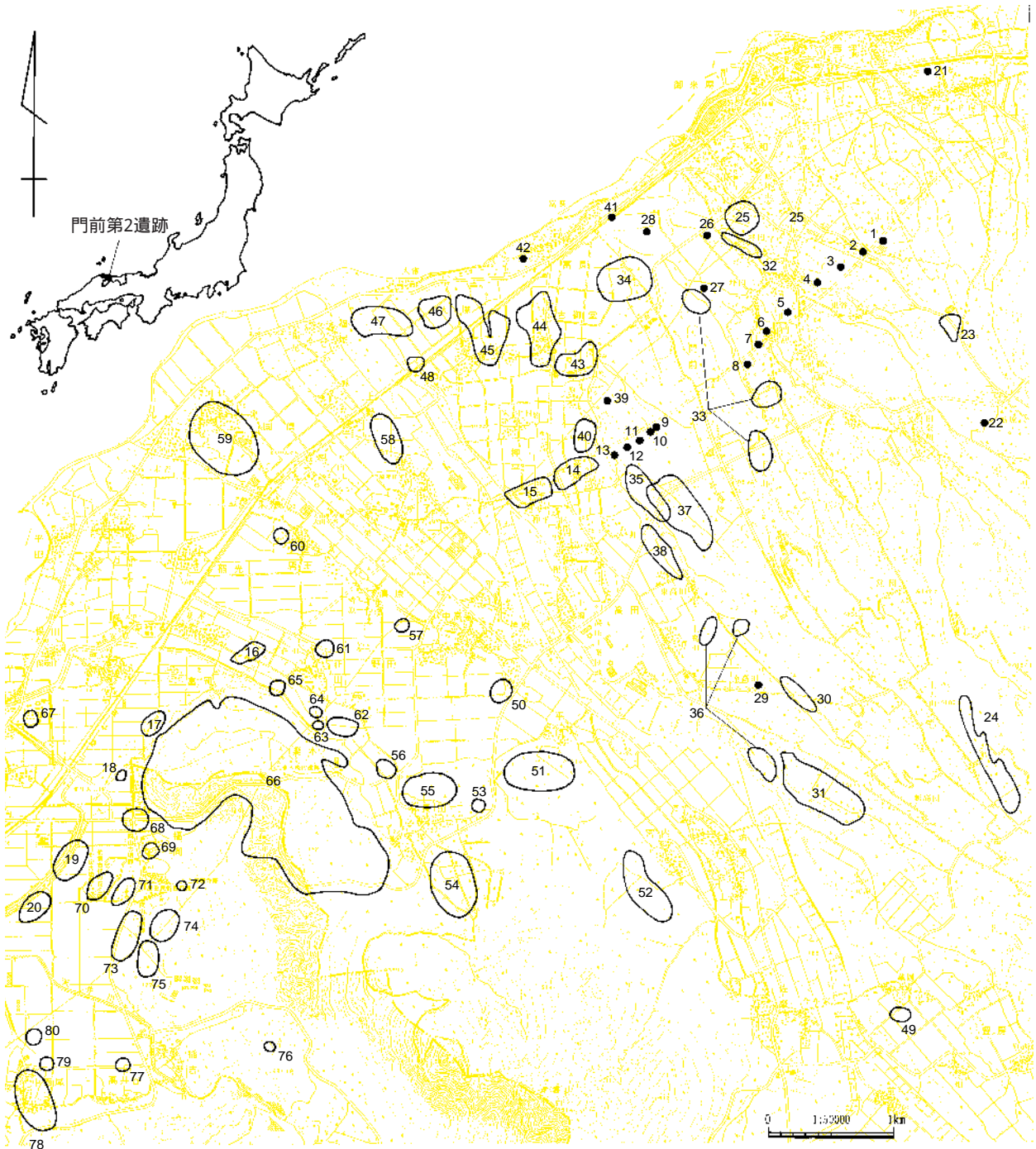
鳥取県埋蔵文化財センター 1988『旧石器・縄文時代の鳥取県』

鳥取県埋蔵文化財センター 1989『歴史時代の鳥取県』

内藤正中・真田廣幸・日置桑左門 1997『県史31 鳥取県の歴史』山川出版社

鳥取県教育委員会 2004『鳥取県中世城館分布調査報告書』第2集（伯耆編）

発掘調査報告書類については割愛させていただいた。



遺跡名	遺跡名	遺跡名	遺跡名	遺跡名
1 名和中畝遺跡	17 富岡播磨洞遺跡	33 門前古墳群	49 蔵岡第1遺跡	65 大道原遺跡
2 名和小谷遺跡	18 安原溝尻遺跡	34 富長山村古墳群	50 中高遺跡	66 妻木晩田遺跡
3 名和衣装谷遺跡	19 福岡遺跡	35 茶畑古墳群	51 平古墳群	67 今津岸ノ上遺跡
4 名和乙ヶ谷遺跡	20 井手膝遺跡	36 高田古墳群	52 宮内古墳群	68 晩田遺跡
5 名和飛田遺跡	21 龍光寺堀遺跡	37 茶畑第2遺跡	53 徳楽方墳	69 下楚利遺跡・宮廻遺跡
6 門前上屋敷遺跡	22 栃原竈跡	38 東高田遺跡	54 源平山古墳群	70 瓶山古墳群
7 門前鎮守山城跡	23 角塚遺跡	39 原3号墳	55 長田古墳群	71 向山古墳群
8 門前第2遺跡	24 上大山第1遺跡	40 茶畑山道遺跡	56 客尾山古墳群	72 上淀廃寺
9 古御堂新林遺跡	25 長者原遺跡	41 荒田遺跡	57 清原遺跡	73 彼岸田遺跡
10 古御堂金蔵ヶ平遺跡	26 ハンボ塚古墳	42 富長城跡	58 上野遺跡群	74 小枝山古墳群
11 古御堂笹尾山遺跡	27 門前礎石群	43 文殊領屋敷遺跡	59 国信遺跡	75 城山古墳群
12 押平尾無遺跡	28 南川遺跡	44 古御堂遺跡	60 唐王遺跡	76 四十九谷横穴墓群
13 茶畑第1遺跡	29 高田原廃寺	45 大塚塚根遺跡	61 新田原遺跡	77 稲吉角田遺跡
14 茶畑六反田遺跡	30 高田第4遺跡	46 大塚岩田遺跡	62 塚田遺跡	78 中西尾古墳群
15 押平弘法堂遺跡	31 高田第10遺跡	47 大塚第3遺跡	63 荘田古墳群	79 鮎ヶ口遺跡
16 妻木法大神遺跡	32 坪田古墳群	48 大塚屋敷遺跡	64 原畑遺跡	80 河原田遺跡

図5 周辺の遺跡

第3章 遺跡の立地と層序

第1節 遺跡の立地

門前第2遺跡（菖蒲田地区）は標高55m前後の丘陵上に位置する（図2）。丘陵は大山北麓に広がる火山性台地が、名和川や他の小河川によって開析されて尾根状に残ったもので、本遺跡から約1km北に丘陵の先端がある。また本遺跡のある丘陵上平坦面は比較的広く、東西幅は約150mを測る。

遺跡の東側には非常に狭い谷を挟んで門前鎮守山城跡の立地する小丘陵がある。この丘陵は本遺跡の立地する丘陵から派生したもので、その東には門前上屋敷遺跡の立地する中位段丘面が広がり、更には東には狭い低位段丘面と名和川がある。名和川東岸は比較的広い沖積地が広がっている。遺跡の西側は谷状の狭い沖積地となっており、現在水田が営まれている。この谷と調査地との比高差は約20mである。

調査地内の地形は、F区が丘陵東側斜面の小さな谷地形となっており、G区は大半が平坦面となっている（図6）。調査前はF区が雑林地、G区が畑地などであった。なお、G区は耕作による地形の改変が著しい。

第2節 調査地内の土層堆積

今回調査を行ったF区とG区は立地条件が異なっており、土層の堆積状況も異なる。F区は丘陵東斜面の谷部に位置するため、谷上方からの流土による堆積が主体となり、堆積した土層も厚い。G区は丘陵上に位置しており、平坦面では厚い火山灰性土壌の上に薄く耕作に伴う土壌などが堆積している。なお、G1区の中央付近は平成16年度調査で検出した谷部の谷頭となっており、この部分のみ堆積が厚い。

F区の土層堆積（図7）

谷に位置するF区では、地形の傾斜に沿うトレンチとそれに直交するトレンチを設けて土層を観察した。ここでは、地形の傾斜に沿い、堆積状況を良く示す東西方向のトレンチ（A-A'）の土層を基本層序とする。また平成16年度調査地A区と連続しているため、A区の層序との対応も併記する。なお、層位番号の後の（ ）内の番号は調査時の層位番号である。

- F 層（2層）：灰褐色粘質土。安山岩の砂礫と炭粒を多く含む。表土直下の土層で、F区全体に広がる。中世～近世の遺物を包含する。A区 層（中世後期～近世包含層）に対応する。ただし、含まれる遺物はF 層のほうが古いものが混じる。A区 層（中世前期包含層）がF区では確認できていないので、谷下方のF区付近ではF 層堆積時にA区 層が流失し、これらに包含されていた遺物がF 層に混在しているのかもしれない。下面で遺構面を検出した。
- F 層（3層）：黒色土。きめが細かい。安山岩砂礫を含む。調査区中央の谷部にのみ堆積し、調査区西部では削平を受けて消失しているほか、東部、北部、南部には堆積が見られない。古墳時代中期後葉～古代の遺物を多く包含する。A区 層におおよそ対応する。
- F 層（4層）：暗赤褐色土。シルト質の土層で、安山岩砂粒を含む。谷部にのみ堆積し、調査区西部では削平を受けて消失しているほか、北部、南部には堆積が見られない。弥生時代～古墳時代中期の遺物を多く包含する。A区 層に近いと考えられるが、土色および土質が若干異なっている。
- F 層（5層）：黒色土。シルト質。クロボクの再堆積層であろう。調査区谷部にのみ堆積する。少量の縄文早期の押型文土器などを含む。A区 層に対応する。下面で遺構面を検出した。
- F 層（6層）：黒褐色シルト。クロボクの再堆積層であろう。谷に堆積した流土の最下層で、無遺

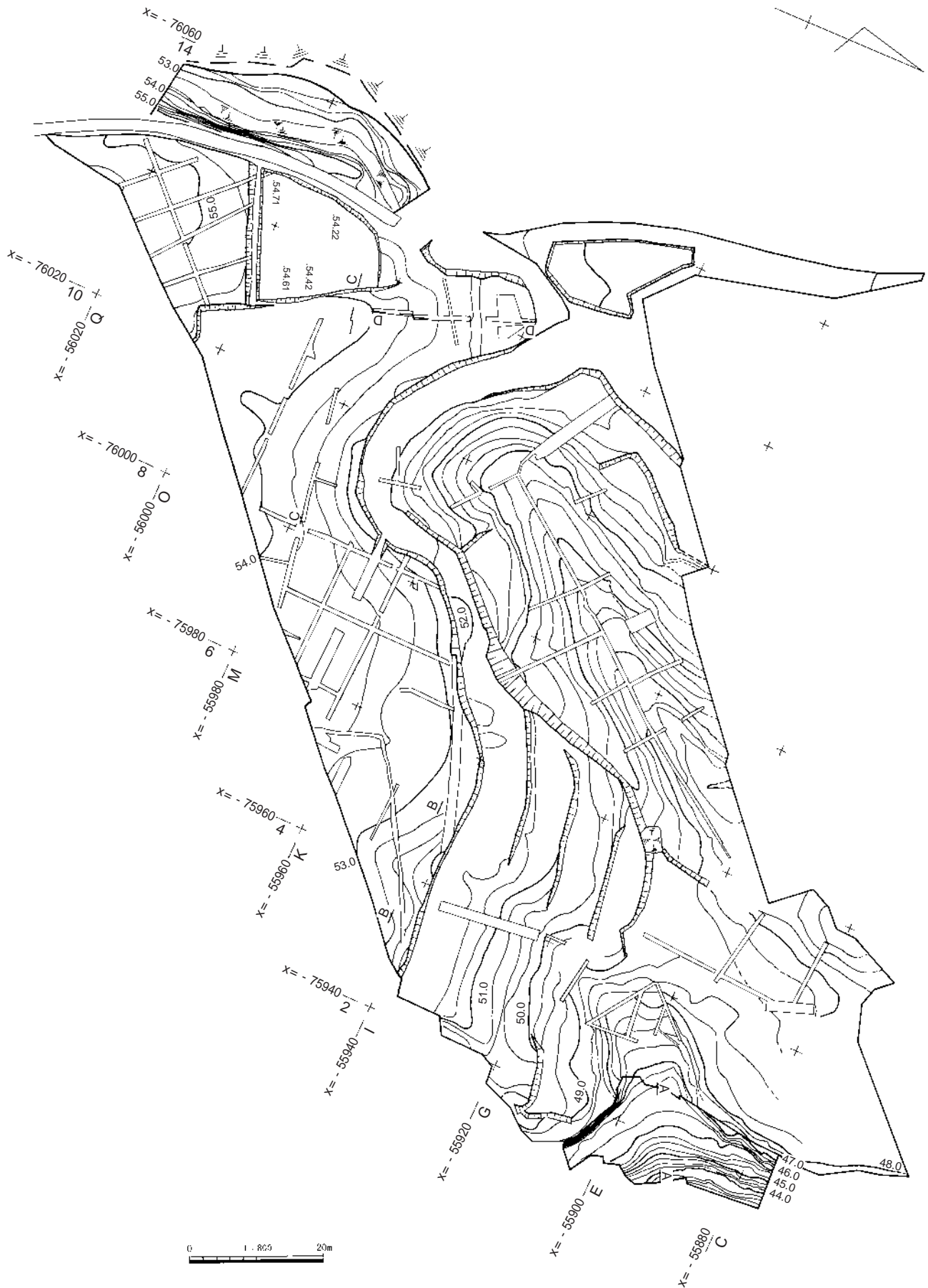


図6 調査後地形測量図

物層である。この層を掘りきった谷底付近では下面で地山（軟質の岩盤とそのバイラン土）を確認した。

G区の土層堆積（図8）

本年度の調査地はG4区を除き、大幅に後世の削平を受けている。そのため当時の堆積を残すのは、G1・6区でそれぞれ検出した北側から続く谷部のみである。平成16年度調査区との対応関係も合わせて記述する。層位番号の後の（ ）内の番号は調査時の層位番号である。

G 層（①・ii層）：近代以降の造成土。G1区・G6区では暗褐色粘質土で砂礫微細粒多量に含む。G3区では淡褐色粘質土でAT火山灰粒をやや多く含む。下面で中世後期ごろから近代にかけての遺構を確認した。

G 層（②・v層）：褐色土。やや粘質の土層である。G1区に堆積が残る。層厚15cm前後と堆積は薄い。中世前期の遺物包含層である。下面で道路状遺構や掘立柱建物跡などの中世前期の遺構を検出した。時期的にはC・D区 層に対応するが、砂礫分の含み方が大きく異なる。後者が耕作地であることと関係するのかもしれない。

G 層（G6区②層）：黒色土。G6区に堆積する。弥生時代から古墳時代にかけての遺物を包含する。

G 層（G6区②a層）：黒褐色土。G6区に堆積する。A・B区 層に対応する。弥生時代から古墳時代にかけての遺物を包含する。下面で溝、ピット群などを検出した。弥生時代終末～古墳時代中期に堆積したと考えられる。

G 層（③層）：暗褐色土。G1区に堆積する。C・D区XI層に対応し、堆積時期は縄文時代後期ごろの可能性が高い。下面で土坑などを検出した。

G 層（G6区③層）：暗褐色土。しまりよい。G6区に堆積する。A・B区 層に対応するものであろうか。遺物は出土していない。

G 層（⑤層）：暗黄褐色粘質土。G1区とG6区の谷部堆積土最下層で、無遺物層である。

G 層：地山。黄褐色粘質土。いわゆるソフトローム層。丘陵平坦部のほぼ全面に堆積する。

G 層：地山。黄褐色火山灰。始良丹沢火山灰層（AT層）に相当するものと思われる。丘陵平坦部のほぼ全面に堆積するが一部ブロック状となる。

G 層：地山。黄白色粘質土。白色のローム層。しまり、粘性強い。門前第2遺跡（西畝地区）ではこの層準から石器群が検出されているため、トレンチで確認を行ったが遺物の出土はなかった。

G XI層：地山。赤褐色粘質土。ローム層。しまり、粘性強い。

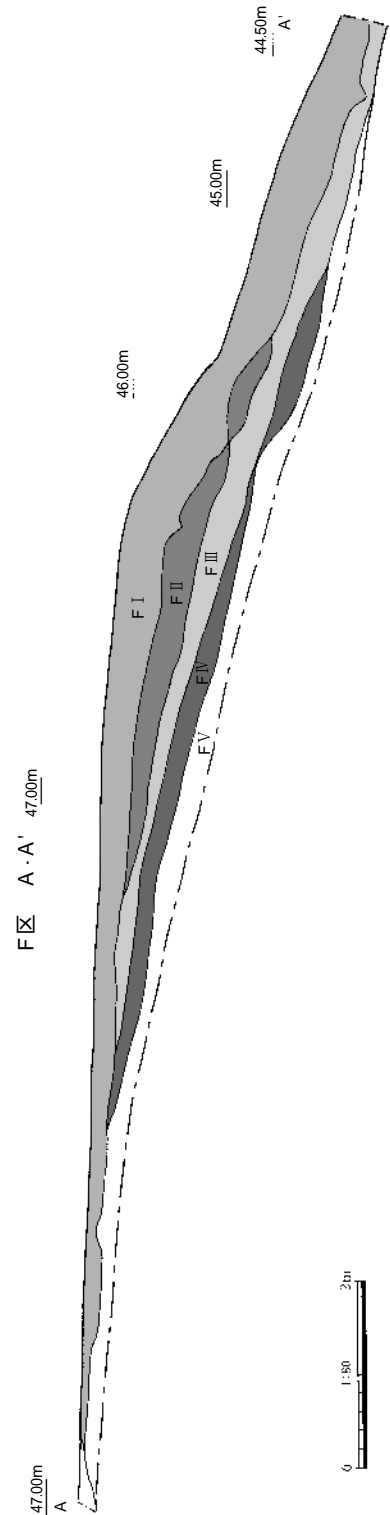
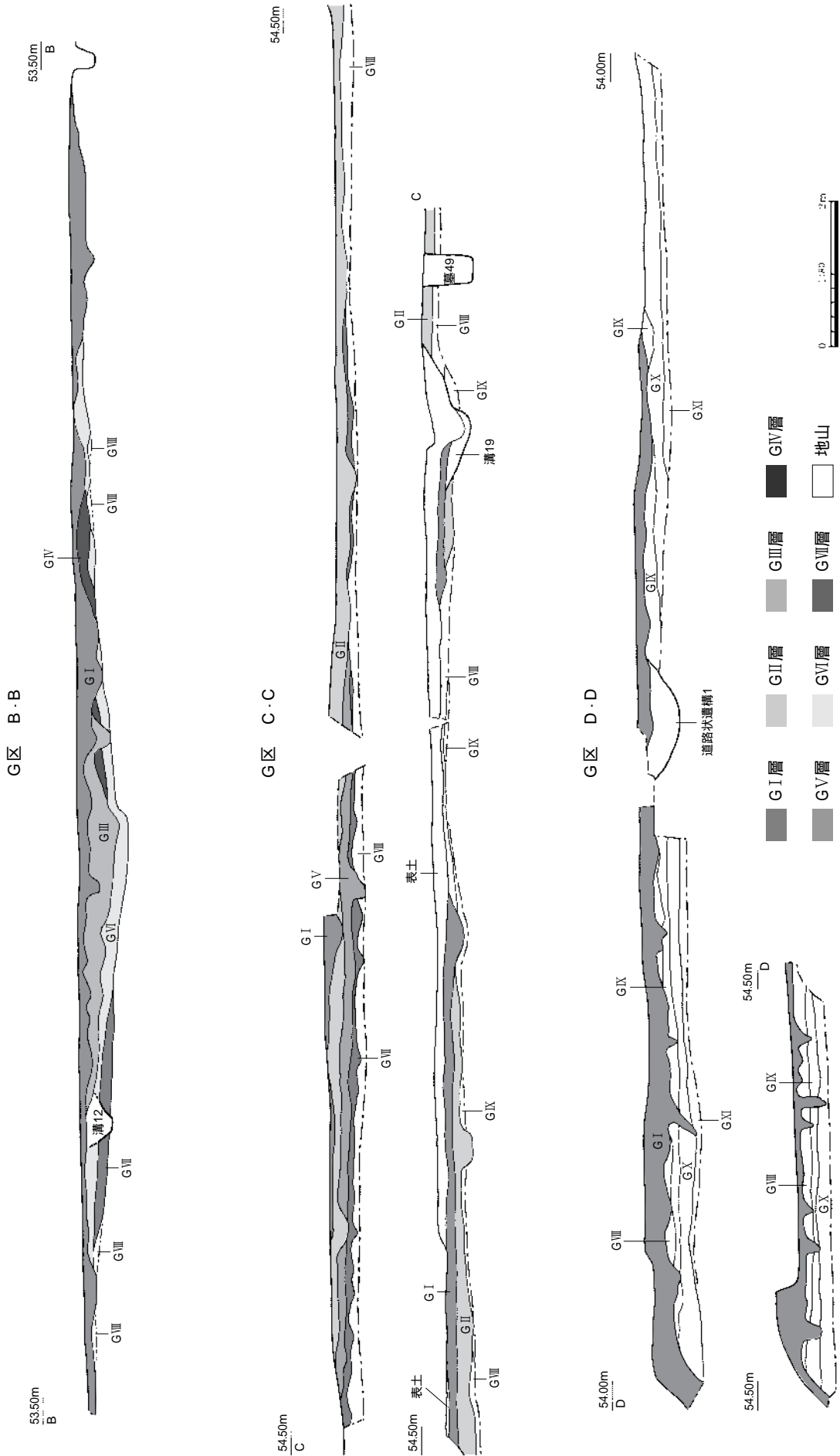


図7 F区土層断面図



第4章 F区の調査

第1節 調査の概要

F区は丘陵東部の谷斜面地に位置する。西側には平成16年度調査地のA区が接している。

F区では2つの遺構面を確認した。F層下面で墓をはじめとする中世のものと考えられる遺構を、F層下面で落とし穴やピットなど縄文時代のものと考えられる遺構を検出した。なお、F層下面で検出したP809からは古代の土器が出土し、またその埋土がF層に相当するものであったことから、本来はF層下面に遺構面が存在し、少なくともピット1基がこの面にあったものと考えられる。

そのほか、包含層からは大量の遺物が出土している。谷部という立地のため、上方から流れ込んだ遺物が多量に集積したのと考えられる。

第2節 縄文時代から古代にかけての調査成果

概要(図9、図版2)

F層下面ないしはF層上面で土坑1基とピット8基を検出した。このうちピット1基(P809)は先述のように本来はF層下面が掘り込み面と思われる。また、土坑1基とピット2基(P816・P817)は上面を中世以降に大きく削平されているためF層下面・F層上面で検出したが、いずれも埋土がF層に近似しているため、本来はF層下面を掘り込み面とする遺構と判断した。その他のピットの埋土もF層近似層である。F層からは縄文早期の土器が出土しているため、これら

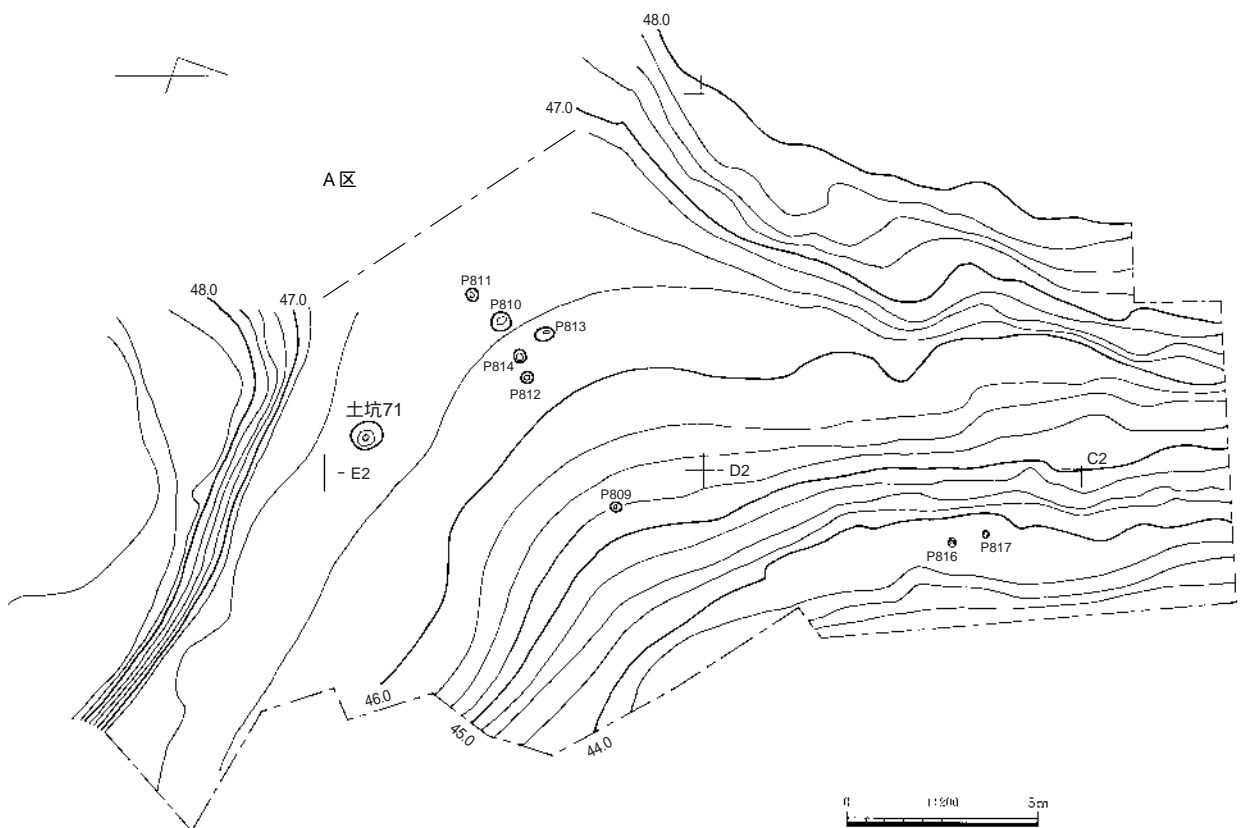
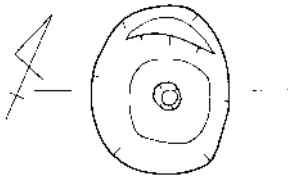
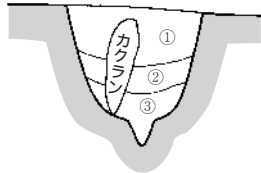


図9 F区最終遺構面遺構配置図



46.70m



- ① 暗褐色(地山クサレ礫多く含む)
- ② 黒褐色(地山クサレ礫少量含む)
- ③ 黒褐色(地山クサレ礫少量含む)

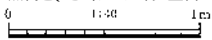


図10 土坑71

の遺構は縄文時代に帰属する可能性が高いだろう。

後述するように、中世に整地が行われたため谷部以外では旧地形は不明である。おそらく、谷の北側と南側には西から下ってくる傾斜面がそのまま続いていたと思われる。

土坑71 (図10、図版2)

底面に小ピットを有する落し穴状遺構で、D2グリッド南東に位置する。上面が大きく削平されているので旧地形は不明だが、本来は斜面に立地していたと思われる。

平面は円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.7m、残存部の深さは0.6mを測る。底面は一辺0.45mの隅丸方形を呈す。中央部に径0.15m、深さ0.15mの底面ピットを1基検出した。埋土はF層近似の黒褐色土である。埋土から縄文時代の遺構と考えられる。

ピット (図9・11、図版6)

ピットはいずれも谷部斜面を中心に分布しており、建物を構成すると判断できるものはない。P809からは須恵器杯蓋(1)が出土しているので、古代のもの可能性が考えられる。その他のピットは先述のように縄文時代のもの可能性があろう。



図11 ピット出土土器

遺構外出土遺物 (図12・13、図版5・6)

F層からF層にかけて、縄文時代から古代までの遺物が多く出土した。F区では弥生時代から古墳時代にかけての遺構は検出されていないが、平成16年度調査地から遺構、遺物が多く見つかったので、当該期の遺物はこれらが谷部に流れ込んだものであろう。

2~4、S1・S2はF層出土。1~3の押型文土器は前回調査の配石8から出土したもの(中森ほか2005 p.21 図13:1)の同一個体片である。

5~55、S3はF層またはF層からの出土。F層には古墳時代中期までの遺物が包含されており、F層には古代までの遺物が含まれている。F層出土の縄文土器(5・6)などは、本来F層に含まれていたものが遊離した可能性もある。弥生時代中期の土器(8~11)が少量出土しているが、前回調査では当該期の遺構、遺物は確認されていない。弥生時代終末から古代にかけての遺物(図12:13~36・S3、図13:37~55)は、前回調査で遺構が確認されたA区から流下してきたものであろう。なお、石製勾玉(S3)は前回調査の門前1号墓に伴う遺物の可能性がある。

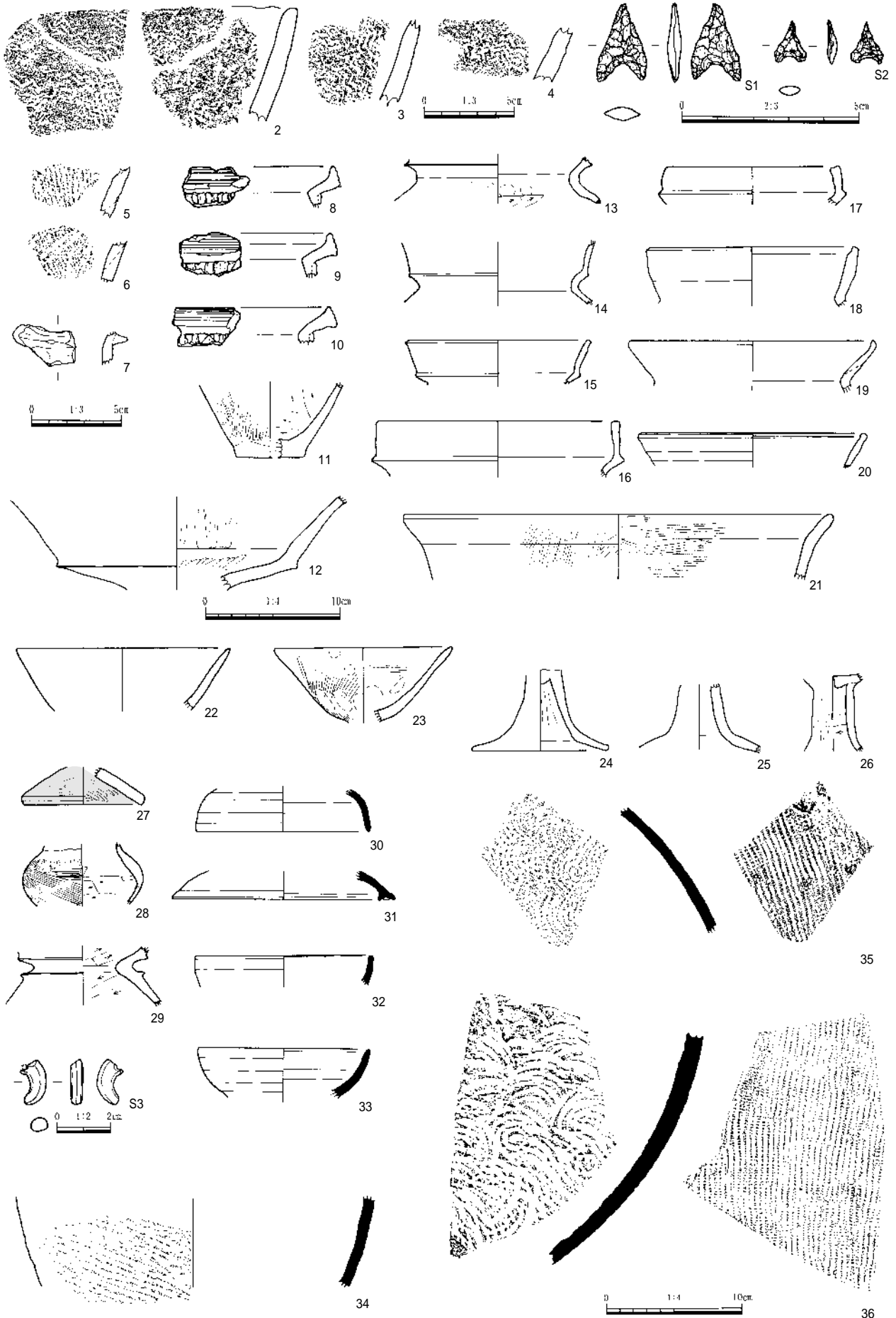


図12 F区遺構外出土遺物（縄文時代～古墳時代）

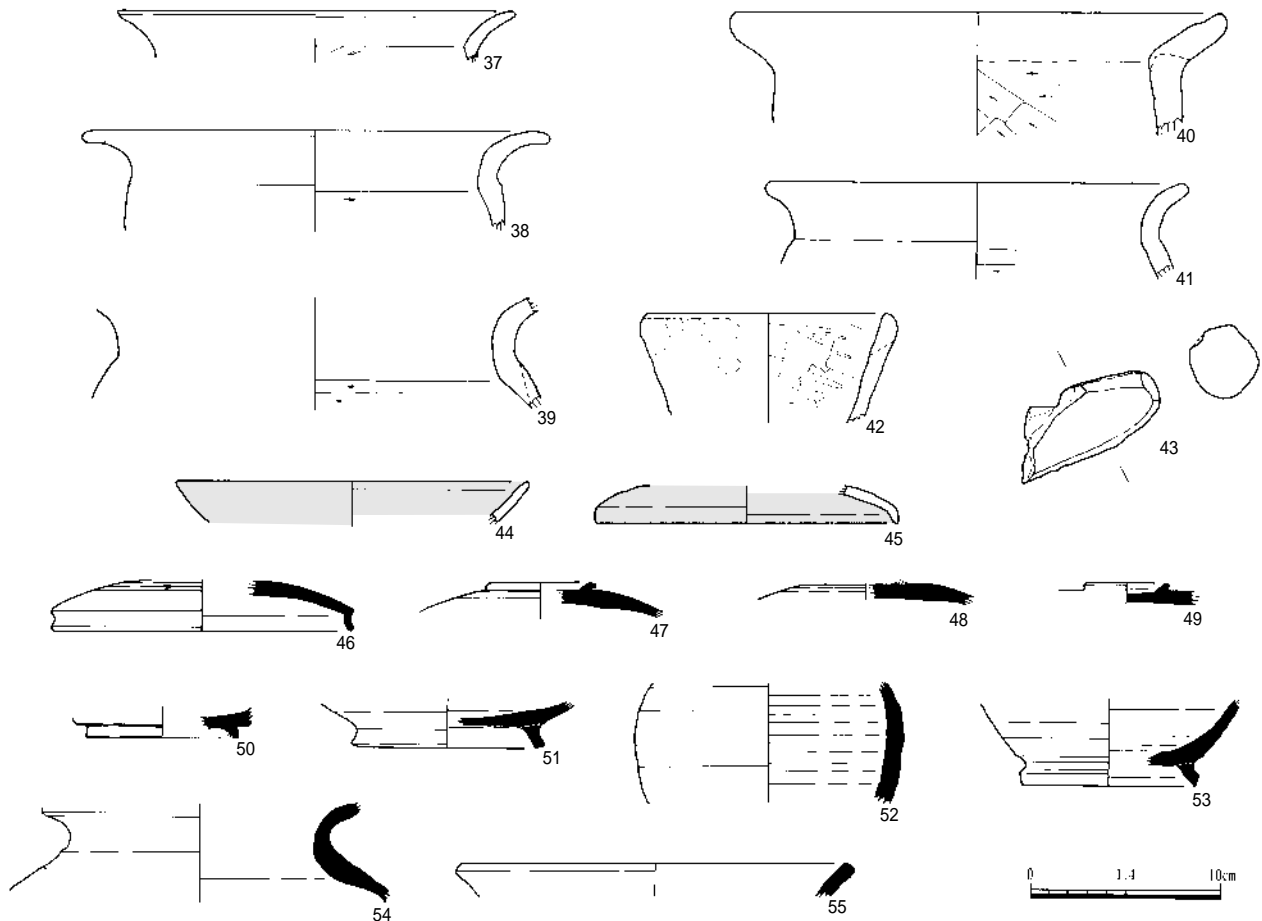


図13 F区遺構外出土遺物2（古代）

第3節 中世以降の調査成果

概要（図14、図版3）

F 層下面に整地面があり、そこで墓1基、土坑5基、溝状遺構1条、ピット12基を検出した。土層の堆積状況から、これらの遺構はいずれも中世に帰属すると考えられる。

谷を挟んだ南北の斜面は人為的に大きな掘削が行われており、谷部も削平されている。F 層下面で検出され、F 層を削平していることから少なくとも近世以前の整地面と考えられる。谷の南側は南西から延びてくる軟質の地山岩盤をほぼ垂直に大きくカットしており、北側は南側よりは緩やかな傾斜で地山を掘削している。この整地によって、調査区の西側の大部分がテラス状の平坦面（テラス7）となっており、平坦面の東肩は標高45.75m付近にある。さらに谷の北側では斜面裾にかけても整地が行われており、C2杭付近（テラス8）と調査区東端付近（テラス9）に狭いテラスが削り出されている。これらは前回調査検出の中世前期のテラス1～3と一連のものと考えられる。

F 層下面で検出した他の遺構は、埋土の状況を見る限り、この整地面から掘り込まれた可能性が高い。遺構群の中で時期が判明した墓1は中世前期のものであることから、整地が行われた時期は中世前期以前（墓1以前）と考えられる。整地面とこれらの遺構群は有機的に関連すると考えられる。

墓1（図15・16、図版3）

D2グリッドのテラス7の中央北寄りに位置する。F 層下面・F 層上面で検出した。

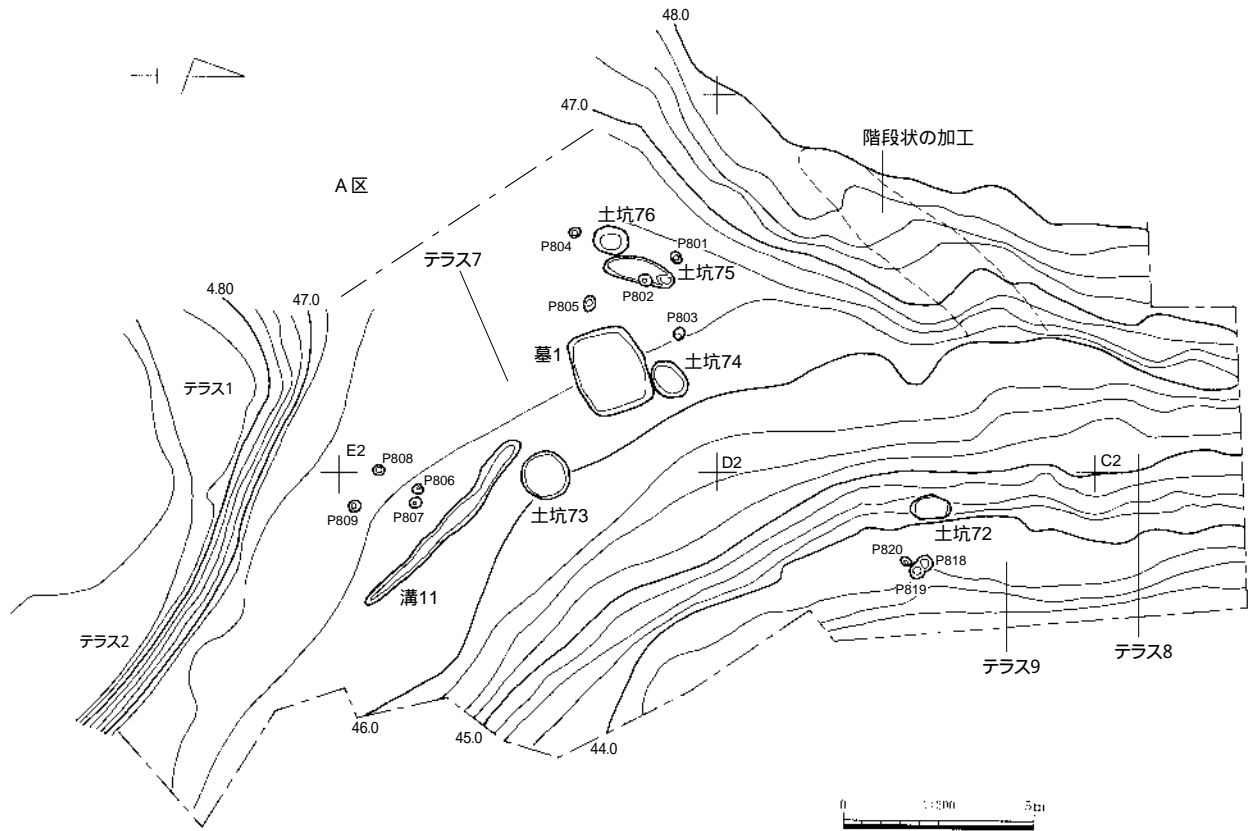


図14 F区第1遺構面遺構配置図

遺構掘り方は平面長方形で、長軸2.2m、短軸1.85m、深さ0.4mから0.5mを測る。遺構上面から掘り方内にかけて大小の自然礫50個以上が密に集積した状態で出土した。礫の垂直分布と遺構埋土のあり方から、これらの礫は遺構内から上面にかけて積み上げられていたものと考えられる。遺構埋土上層(①・②層)は暗灰褐色の土層で焼土粒や木炭片・炭粒を多く含む。特に①層は焼土のブロックを多く含み、赤化している。下層はF層に近似する土がベースとなった黒褐色土層である。下層は掘り上げた土を埋め戻した可能性が高い。上層の土は被熱したものを含む。

上層の礫の間を中心に中世前期の土器が出土した(56~58)。ほかにF層を埋め戻す際の混入と考えられる古墳時代前期の土器が出土した(59~64)。

礫の検出状況や埋土の状況から、本遺構は集石墓と考えられる。出土遺物から中世前期、12世紀代の遺構と思われる。

土坑72(図17、図版4)

C1グリッド中央西端付近の斜面部に位置する。F層下面・地山上

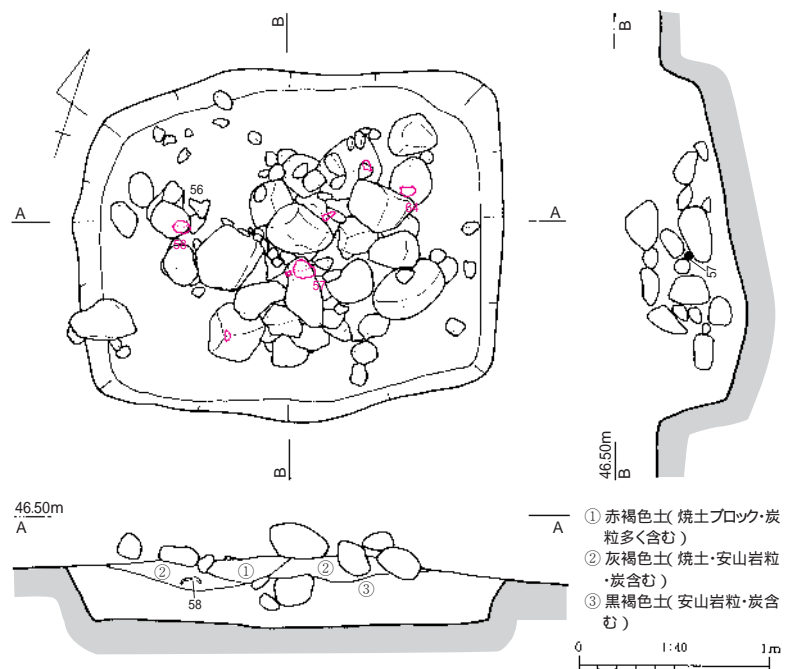


図15 墓1

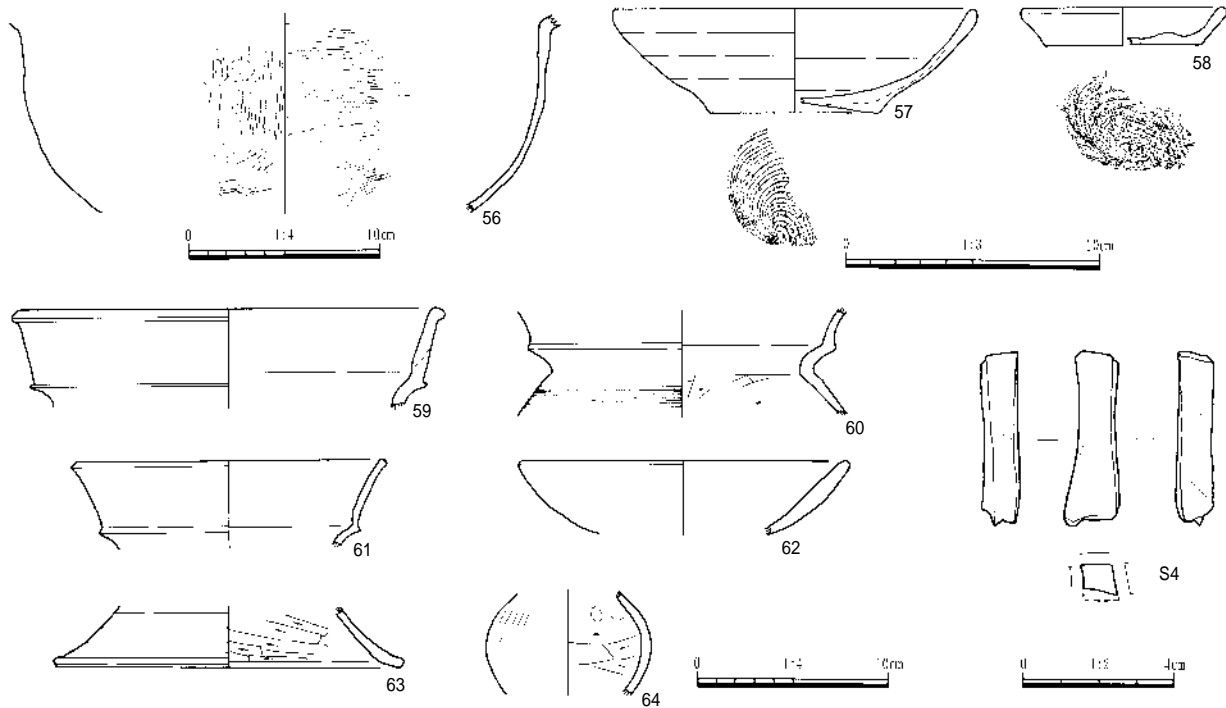


図16 墓1出土遺物

面で検出した。埋土がF層に近似していたためこの遺構面に帰属すると判断した。現状では横穴状を呈しており、長軸1.1m、短軸0.7m、西端部の深さ0.6mを測る。地山を掘り込んでつくられている。遺構内から礫が2点出土した。

土坑73（図17、図版4）

D1・D2グリッドのテラス7の中央東寄りに位置する。F層下面・F層上面で検出した。平面形は円形を呈しており、径約1.3m、深さ0.3mを測る。埋土上層には焼土ブロックと炭粒が多く含まれている。

土坑74（図17、図版4）

D2グリッド北東部、テラス7の中央北寄りに位置する。南側には墓1が隣接している。F層下面・F層上面で検出した。平面形は楕円形を呈しており、長軸1.2m、短軸0.85m、深さ0.3mを測る。埋土には焼土粒と炭粒が多く含まれている。遺構内から小型の礫が10点ほど出土したほか、混入遺物と考えられる古墳時代前期の土器（65）が出土した。

土坑75（図17、図版4）

D2グリッド北部、テラス7の北西に位置する。F層下面・地山上面で検出した。埋土がF層に近似していたためこの遺構面に帰属すると判断した。平面形は細長い楕円形を呈しており、長軸1.9m、短軸0.65mを測る。深さは数cmしかなく、底面西端が底面より10cmほど掘り窪められている。

土坑76（図17、図版4）

D2グリッド北部、テラス7の北西に位置する。F層下面・地山上面で検出した。埋土がF層

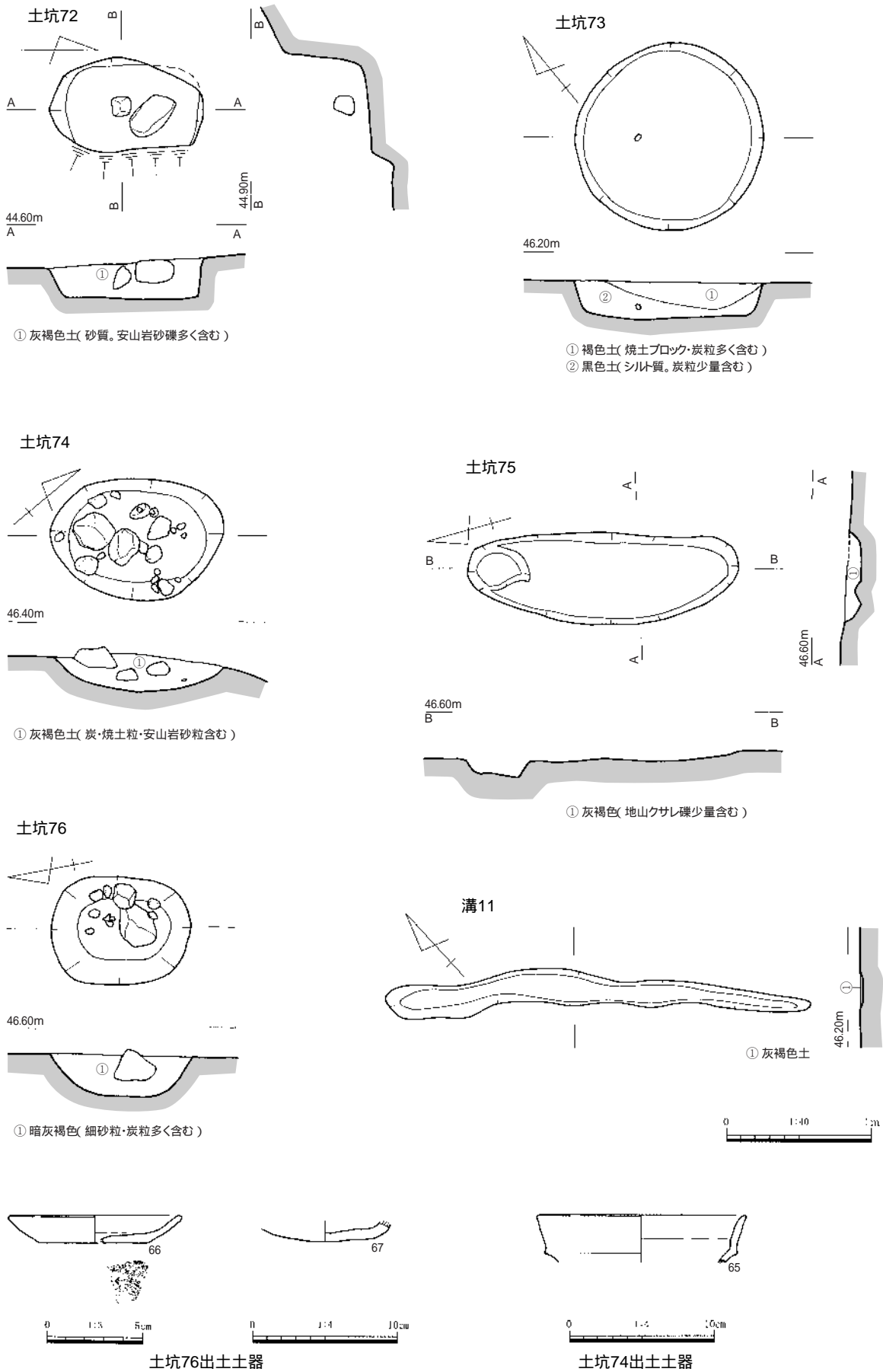


図17 土坑72~76・溝11

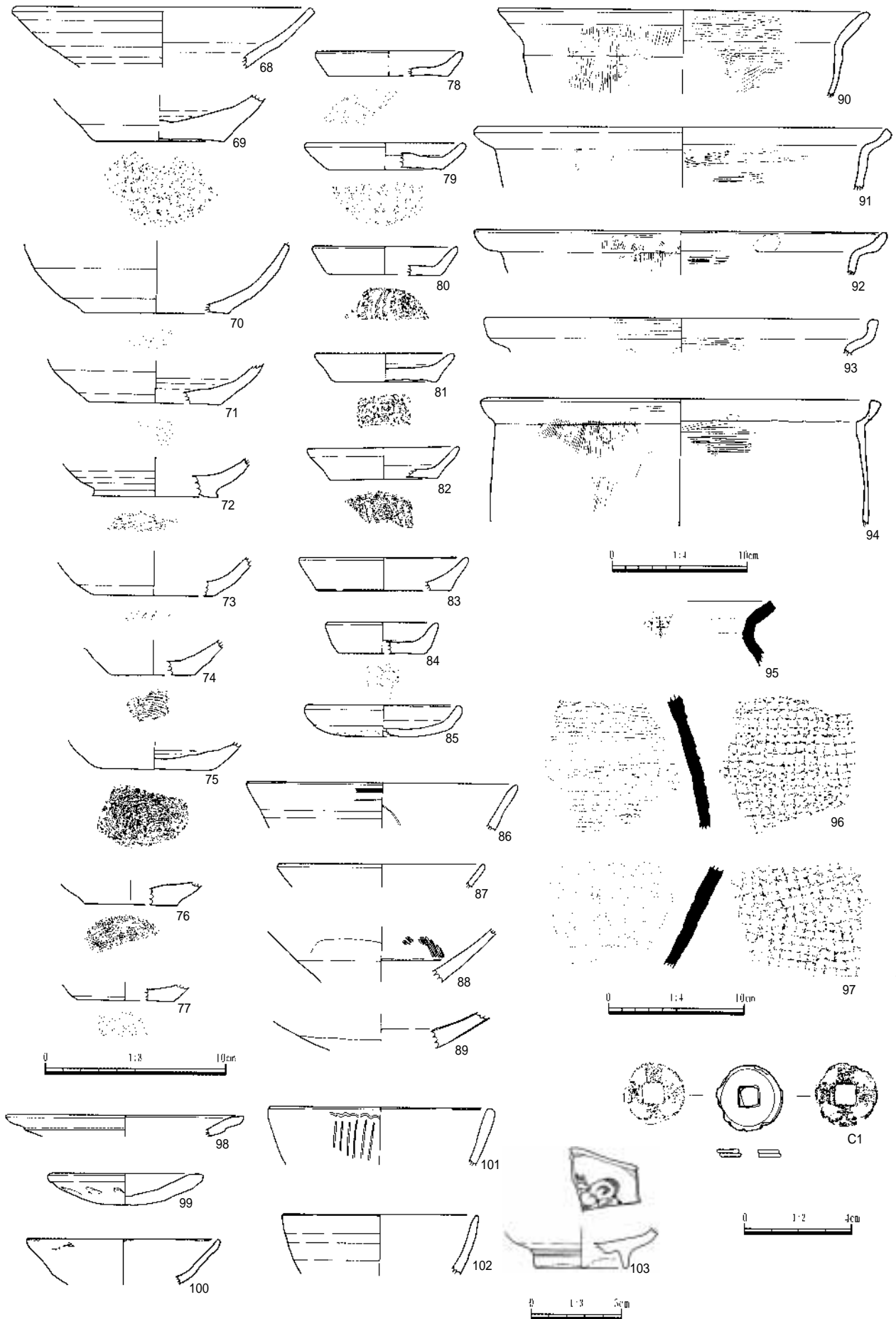


図18 F区遺構外出土遺物3(中世)

に近似していたためこの遺構面に帰属すると判断した。平面形は楕円形を呈しており、長軸1m、短軸0.75m、深さ0.3mを測る。埋土には炭粒が含まれている。遺構内から小礫が数点出土したほか、中世土師器皿(66)、古墳時代土師器底部(67)が出土した。

溝11(図17)

D1・D2グリッドのテラス7の中央東寄りに位置する。F層下面・F層上面で検出した。長さ約6m、幅0.5m、深さ数cmの浅い溝である。

ピット(図14)

F層下面からF層近似土を埋土にもつピットを12基検出した。いずれも建物を構成するような配置とはならない。ただし、いくつかのピットは地山をしっかりと掘り込んでいるので、柱穴として機能した可能性はあるだろう。

遺構外出土遺物(図18・19、図版6)

F層からは中世から近世にかけての遺物が出土している(図18・19)。68~97は中世前期の遺物、98~103は中世後期の遺物で、中世前期のものが量的に主体を占める(図18)。近世の遺物もF層上部から出土したが、量的には少ない(図19)。中世前期の遺物が包含層の主体となることから、F層下面での遺構の形成および利用の時期が中世前期ごろを中心とすると考えてよいだろう。

中世前期の遺物は土師器杯(68~77)と土師器皿(78~85)が主体を占め、ほとんどが12世紀代のものである。貿易陶磁器はすべて青磁である(86~89)。土師器鍋(90~94)は、他に図示し得なかった破片もあり、出土数は多い。勝間田焼系の須恵器甕(95~97)も図示したもの以外に破片が多く出土している。

中世後期の遺物は、京都系土師器皿(98・99)、朝鮮系雑釉陶器碗(100)、青磁碗(101・102)、青花碗(103)などが出土している。

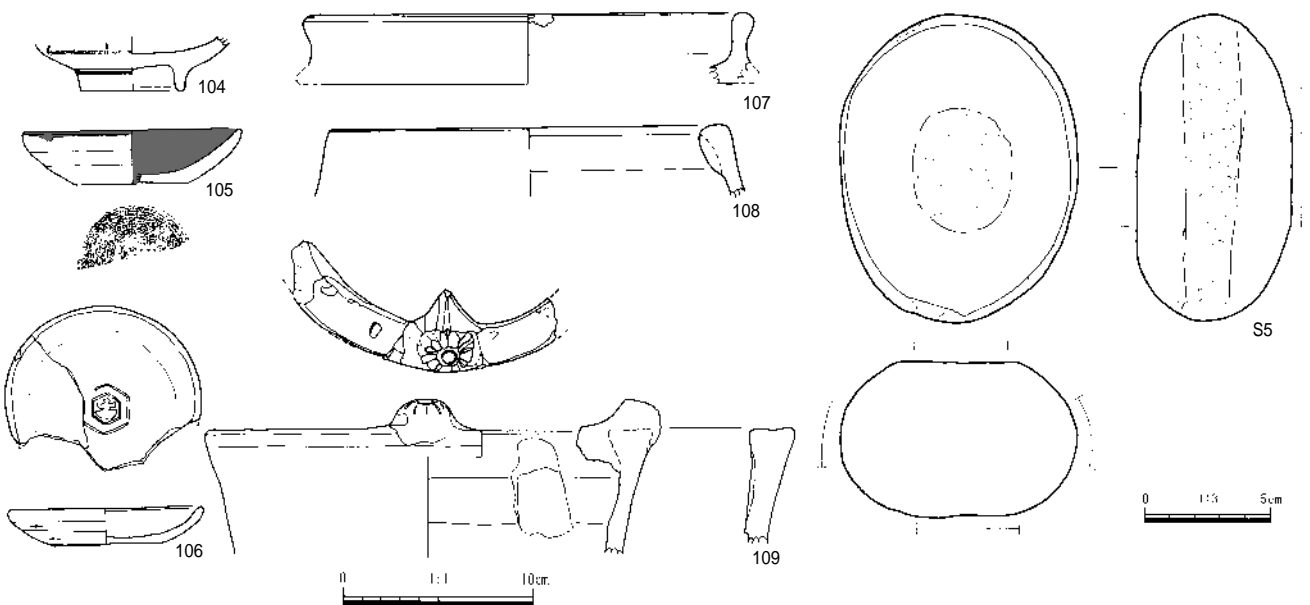


図19 F区遺構外出土遺物4(近世ほか)

第5章 G区の調査

第1節 調査の概要

G区は丘陵上に位置し、北側は平成16年度調査地に接する。

G区は耕作地整備による土地改変を大きく受けて、いくつかの区画に分かれている。この区画をもとにG区を細分し、調査順にG1区からG6区までの地区名称を与えた(図3参照)。G1区は最も広い区画で、上面は削平を受け、特に西側でその影響が著しい。G2区はG1区の西側の狭い区画で、G1区より一段高くなっていたが、ここも上面が大きく削平されていた。G3区はG区北西部の北側に突出した部分で、地形の改変が著しかった。G4区は「無縁墳墓地」として扱われていた区画で、隣接する地区より一段高く、調査前は藪地であった。近現代の地形改変は認められなかった。G5区は丘陵西側の斜面地である。G6区はさらに追加調査となった部分で、G1区の東側、丘陵平坦面の東縁部にあたる。比較的地形の改変は少なかった。

G1区では3面の遺構面を、G3区・G6区では2面の遺構面を確認した。その他の地区ではすべて1面で遺構を検出したが、本来は複数の遺構面をもっていたと考えられる。これらの遺構面を整理すると以下の3つの時期に分かれる。

・**縄文時代～古墳時代** G1区のG層下面とG6区のG層下面で、「落し穴」状の土坑など土坑計16基、溝1条、ピット30基を検出した。土坑は縄文時代、溝は弥生時代、ピットは弥生時代から古墳時代にかけてのものと考えられる。

・**中世前期** G1区のG層下面、G3区・G6区のG層下面で、掘立柱建物2棟、道路状遺構1条、土坑1基、ピット6基を検出した。遺構内出土遺物などから中世前期の遺構群と考えられる。

・**中世後期以降** G1区のG層下面で近世以降の溝4条、G2区～G5区で中世後期から近代初頭にかけての墓187基を検出した。

このうち、縄文時代から古墳時代までを本章第2節で、中近世墓以外の中世以降の遺構を第3節で、中近世墓を第4節で説明する。

第2節 縄文時代から古墳時代にかけての調査成果

概要(図20)

G1区とG6区の最終遺構面で、縄文時代から古墳時代にかけての遺構が検出された。遺構はG1区からG6区西縁にかけて展開する一群と、G6区に展開する一群に分布が分かれる。

G1区・G6区西縁では縄文時代に帰属すると考えられる「落し穴」状の土坑を中心に、土坑が16基検出されている。いずれもG層下で検出し、丘陵上のものはソフトローム層上面が、谷部のものはG層上面が検出面となっている。G6区には溝1条、ピット30基が密に分布している。いずれもG層下面・G層上面で検出した。G6区の遺構は出土遺物から弥生時代から古墳時代にかけてのものと考えられ、比較的時期にまとまりがある。

落し穴状遺構(土坑77～87)(図21～24、図版7・8)

G1区およびG6区西縁で、深い掘り込みをもち、底面中央付近にピットを有する、「落し穴」状

期ないしは晩期の土器が出土しているが、遺物が出土したものはこの1基のみのため両群の時期差は確定できない。なお、落し穴状遺構以外のG層下面検出の土坑5基も、黒色土系と褐色土系の埋土に2大別されるので、落し穴状遺構と同様の時期的展開を見せていたと考えられる。

土坑77～82は平坦面から緩斜面にかけて位置し、土坑78～82は地形の傾斜に沿って南北に並んでいる。土坑83～87は谷頭から谷部斜面にかけて位置している。2004年度に調査された落し穴状の土坑群の分布もあわせると、本遺跡では谷部に立地するものが目立つ。

これらの土坑は形態的特徴や埋土、出土遺物から判断して、縄文時代に帰属するものと考えられる。

土坑77 (図21、図版7)

G6区K5グリッド北側、標高53.5m付近の平坦面に位置する。上面が削平されている。

平面形は長幅比の小さい長方形で、長軸1m、短軸0.8m、残存部の深さは最大0.5mを測る。底面中央部に径0.2m、深さ0.3mのピットがある。

土坑78 (図21、図版7)

G6区I6グリッド、標高53m付近の北側の緩斜面に位置する。南側の上面を道路状遺構1に切られ、北半分は造成の際の段切りで掘削されている。

平面形は長方形で、長軸1.1m、短軸0.55m、深さは最大0.9mを測る。底面中央部に径0.25m、深さ0.4mのピットがある。底面ピット上で礫が検出された。埋土は黒色土系である。

土坑79 (図21・22、図版7)

G1区J5グリッド西側、標高53.25m付近の緩斜面に立地する。

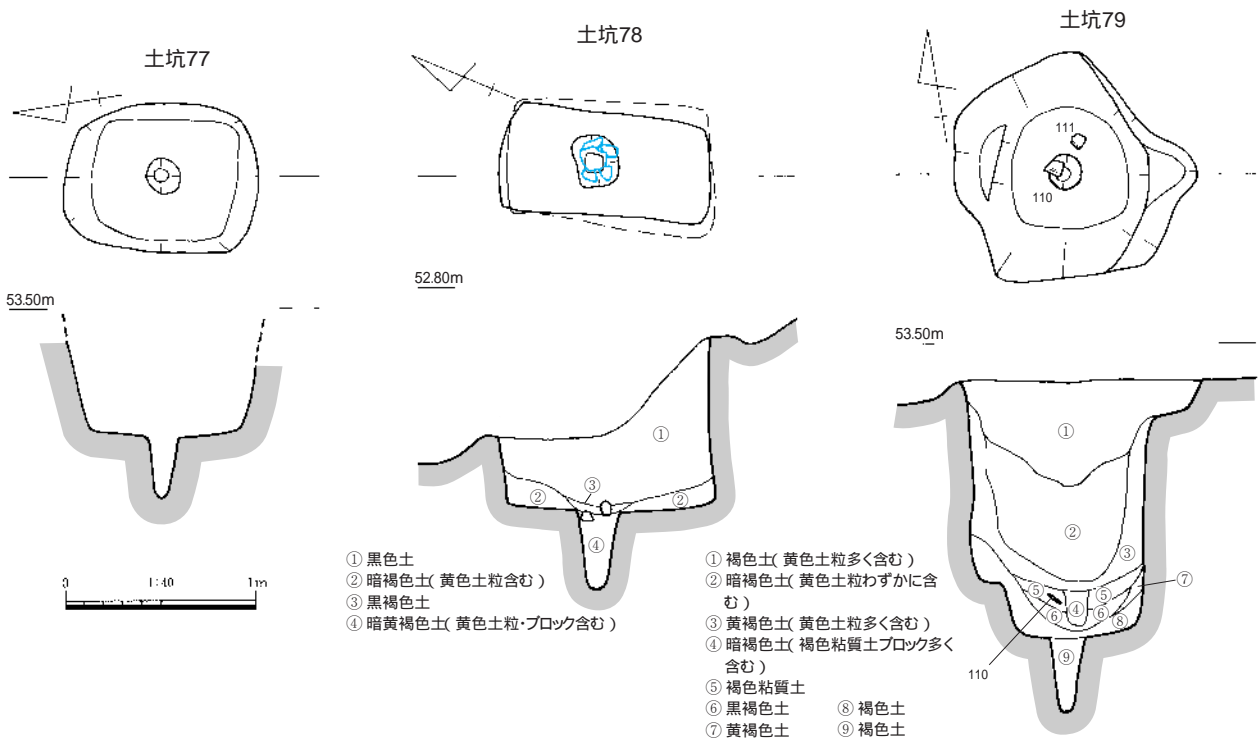


図21 土坑77～79

平面形は不整形で、径1～1.25m、深さは最大1.35mを測る。底面から0.25m上の西側壁面にテラスがみられる。底面は径0.6～0.65mの円形である。中央部に径0.2m、深さ0.4mのピットがある。埋土は褐色土系で9層に分層された。③層は黄色土粒を多く含み、壁面の崩落土と考えられる。

遺物は埋土下層から縄文土器深鉢口縁部(110)、縄文土器片(111)を検出した。いずれも無文の粗製土器であり、詳細な時期決定は難しいが、縄文時代後期～晩期のものであろう。

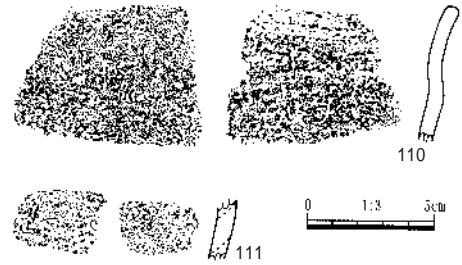


図22 土坑79出土土器

土坑80 (図23、図版7)

G1区K6グリッド北西隅、標高53.5mの平坦面に立地する。

平面形は長方形で、長軸1.2m、短軸0.65m、深さは最大0.8mを測る。底面中央部に径0.15～0.2m、深さ0.4mのピットがある。底面ピット上で礫を2個検出した。埋土は黒色土系で5層に分層された。②層は壁面の崩落土と考えられる。

土坑81 (図23、図版7)

G1区K7グリッド、標高53.5m付近の平坦面に立地する。

平面形は長方形で、長軸1.4m、短軸0.7m、深さは最大0.75mを測る。底面中央部に径0.2～0.25m、深さ0.45mのピットがある。底面上と底面ピット内で礫を1つずつ検出した。埋土は黒色土系で4層に分層された。③層と④層の一部は、ローム土粒を多く含み、壁面の崩落土と考えられる。

土坑78・80・81は立地、形態、埋土それぞれの特徴が一致し、さらに底面ピット周辺に礫が見られる点も共通するので、極めて関連性が高いと考えられる。

土坑82 (図23、図版7)

G1区L7グリッド北東側、標高53.75m付近の平坦面に立地する。

平面形は円形で、径1.05～1.15m、深さは最大1mを測る。底面中央に径0.2m、深さ0.35mのピットがある。埋土は褐色土系で5層に分層された。②層はローム土粒多くを含み、③層の一部とあわせて壁面の崩落土と考えられる。

土坑83 (図23、図版7)

G1区L8グリッド西側、標高53m付近の谷部斜面に立地する。

平面形は円形で、径0.8～0.85m、深さは最大1.2mを測る。底面中央に径0.2m、深さ0.4mのピットがある。

土坑84 (図23、図版7)

G1区N9グリッド北側、標高54mの谷頭に立地する。

平面形は長幅比の小さい長方形で、長軸0.95m、短軸0.7m、深さは最大0.8mを測る。底面中央に径0.1m、深さ0.1mの底面ピットを1基検出した。埋土は褐色土系で4層に分層された。堆積状況が

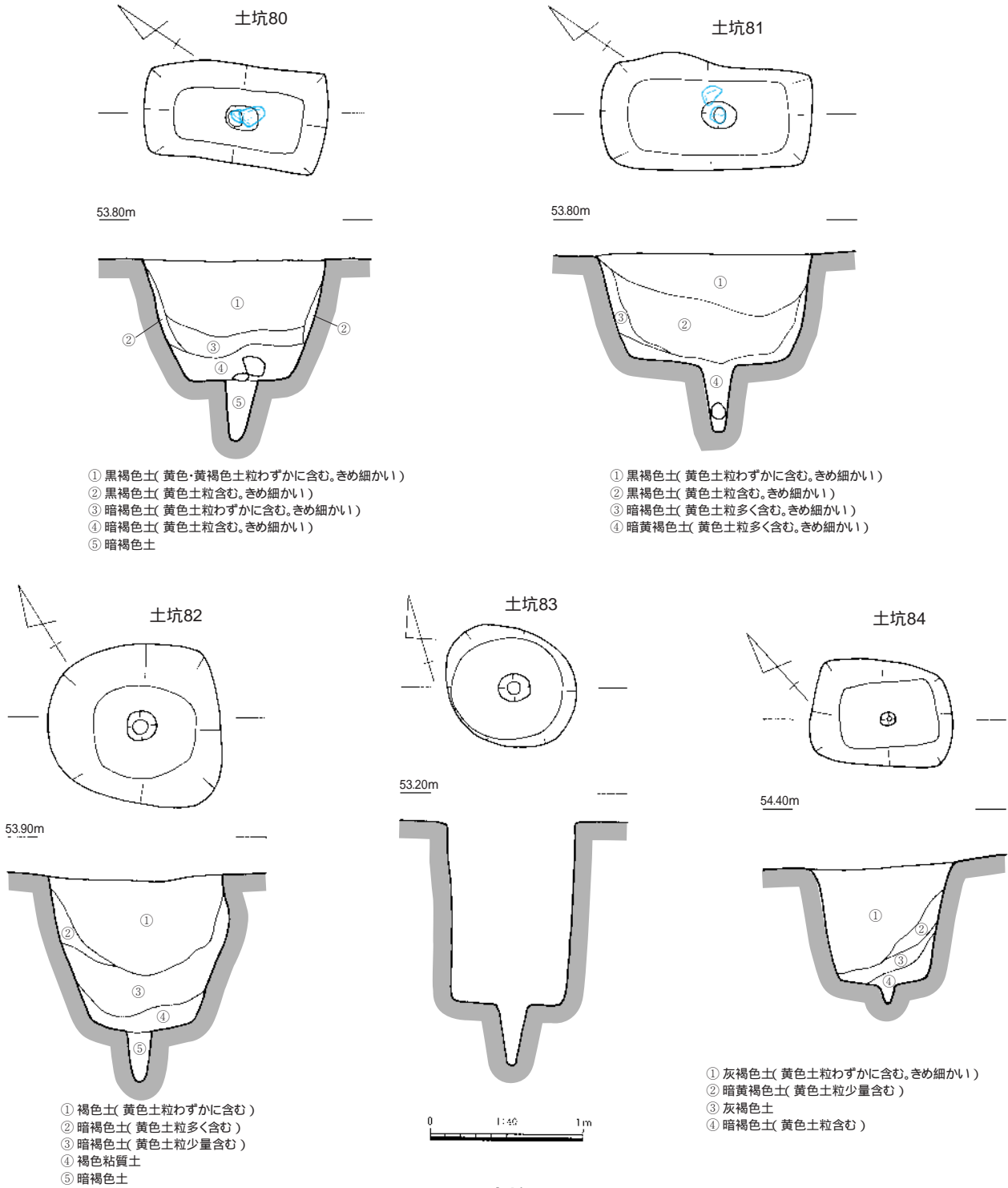


図23 土坑80～84

ら谷上方からの流入による自然堆積と考えられる。

土坑85 (図24、図版8)

G 1区M 9 グリッド南側、標高54m付近の谷頭に立地する。

平面形は楕円形で、長軸1.25m、短軸0.85m、深さは最大1.25mを測る。底面は隅丸長方形を呈し、長軸0.8m、短軸0.7mを測る。中央部に径0.15m、深さ0.45mの二段掘りになっているピットがある。埋土は褐色土系である。②・③層は、ローム土粒を多量に含み、壁面の崩落土と考えられる。

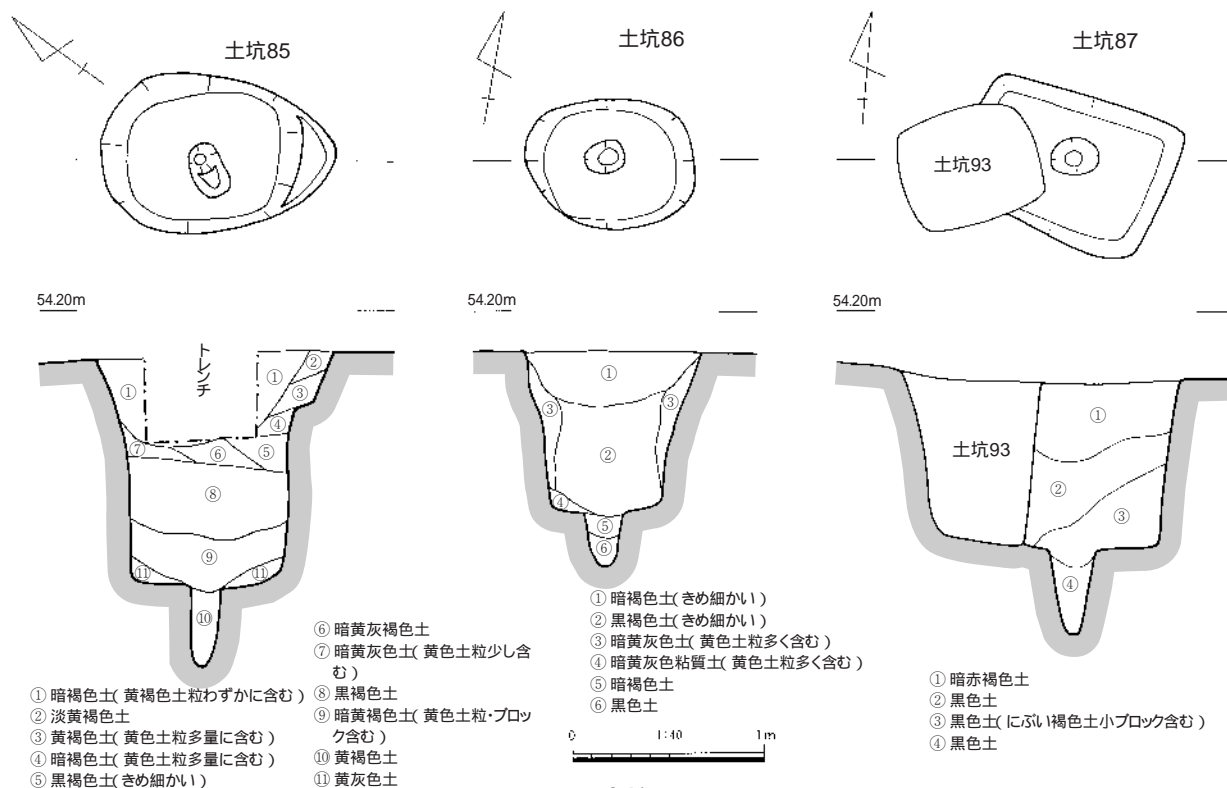


図24 土坑85～87

土坑86 (図24、図版8)

G 1区M 9グリッド西端側、標高53.75m付近の谷部斜面に立地する。

平面形は楕円形で、長軸0.9m、短軸0.7m、深さは最大0.85mを測る。底面中央に径0.2m、深さ0.3mのピットがある。埋土は褐色土系で6層に分層された。③・④層はローム土粒を多量に含み、壁面の崩落土と考えられる。

土坑87 (図24、図版8)

G 1区L 10グリッド北側、標高53.25mの谷部斜面に立地する。西側は土坑93によって切られている。

平面形は長方形で、長軸1.1m、短軸0.8m、深さは最大0.9mを測る。底面中央部に径0.2～0.25m、深さ0.45mのピットがある。埋土は黒色土系である。

土坑88 (図25、図版8)

G 1区M 9グリッド東側、標高54m付近の谷頭に立地する。G 層上面で検出した。

平面は楕円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.7m、深さは最大0.85mを測る。底面が上面より若干広がり、長軸1m、短軸0.75mを測る。埋土は黒色土系である。底面ピットが見られないものの、縄文時代の落とし穴状遺構の可能性も考えられる。

土坑89 (図25、図版8)

G 1区L 7・8グリッド南側、標高53.75m付近の谷頭に立地する。G 層上面で検出した。

平面はほぼ円形を呈し、長軸1.3m、短軸1.15m、深さは最大0.25mを測る。土坑内で小型礫が数個

検出された。埋土は黒色土系の単層である。

土坑90 (図25、図版8)

G 1区L 8グリッド中央部、標高53.5mの谷部斜面に立地する。G 層上面で検出した。

平面は楕円形を呈し、長軸1.3m、短軸1m、深さは最大0.2mを測る。底面は非常に小さい楕円形を呈し、長軸0.3m、短軸0.15mを測る。埋土は黒色土系である。

土坑91 (図25、図版8)

G 1区M 8グリッド北側、標高53.75m付近の谷部斜面に立地する。G 層上面で検出した。

平面はほぼ円形を呈し、径0.95~1.1m、深さは最大0.3mを測る。埋土は、上層は褐色土系で、下層は黒色土系である。

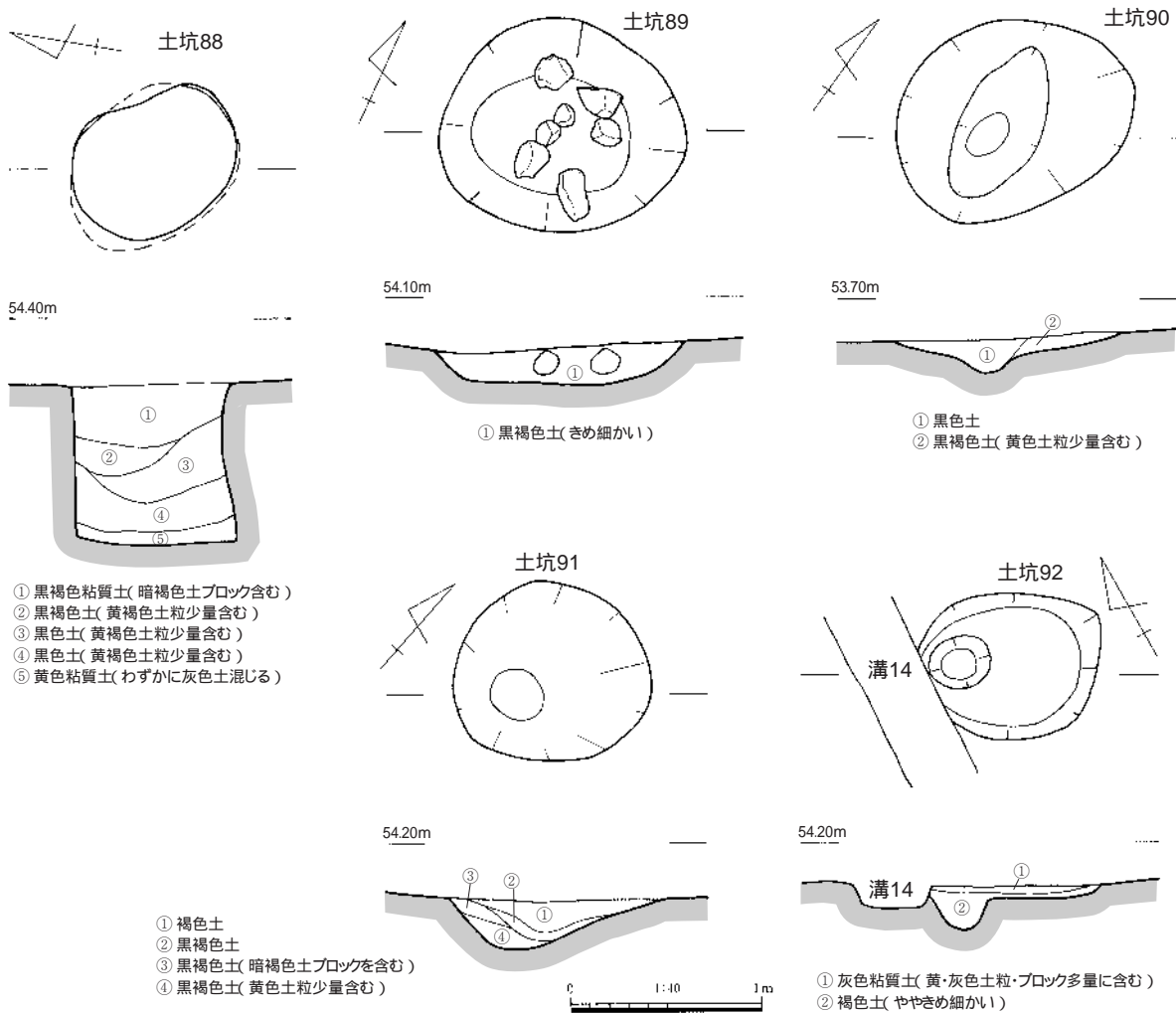


図25 土坑88~92

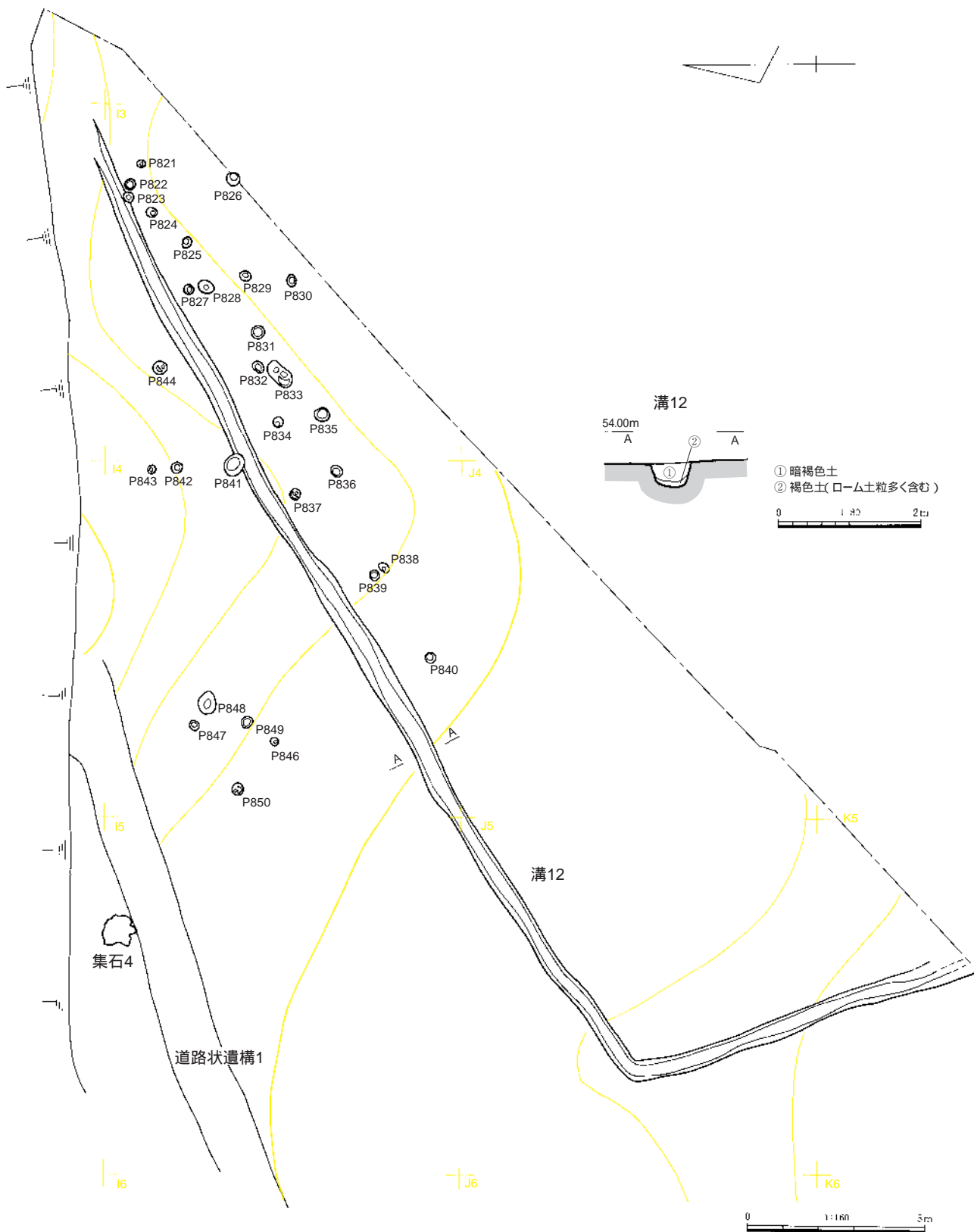


図26 G6区溝12・ピット群

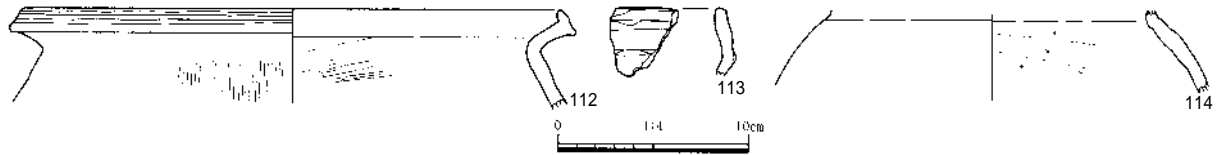


図27 溝12出土土器

土坑92（図25、図版8）

G 1 区M10グリッド北側、標高54mの谷頭に立地する。G 層上面で検出した。西側は溝14によって切られている。

平面は不整楕円形を呈し、長軸0.95m、短軸0.8m、深さは最大0.05mを測る。底面西側で径0.25～0.35m、深さ0.15mのピットを1基検出した。埋土は褐色土系である。

溝12（図26・27、図版9）

G 6 区の南西から北東にかけて続く溝で、丘陵上平坦面から谷頭付近にかけての立地となる。G 層を若干掘り下げてから検出したが、G 層下面・G 層上面が本来の遺構掘り込み面と考えられる。

溝は直線的に東西に延びており、西端で南に向けてL字に屈曲する。東西長約30m、南北長約12m、幅約0.5～0.8m、検出面からの深さ0.3～0.4mを測る。直角に近い角度で屈曲し、区画溝状の形態を呈すが、遺構は南側の調査地外に延びているので全体形は不明である。埋土は黒褐色土でG 層・G 層と近似する。この溝の機能が区画溝であるならば、調査地の南側に区画された遺構が展開している可能性が高い。

遺構内からは小片を中心に多数の土器片が出土した。状態の良いものはなく、大半はG ～ 層に包含されていた遺物が流入したものであろう。図化したものは弥生時代中期後葉の甕（112）と古墳時代中期の甕（113・114）である。他の小片はほとんどが弥生時代中期のものである。出土遺物から本遺構は古墳時代中期ごろに埋没した可能性が高いと考えられる。

平成16年度調査区からは古墳時代前期から中期にかけての遺構が比較的多く検出されており、これらの遺構群との関連が考えられよう。

ピット（図26・28、図版9）

ピットは30基を検出し、すべてG 6 区のI 3・I 4グリッドの緩やかな谷斜面部に集まっている。埋土はすべて黒色土ないしは黒褐色土で基本層序G ～ 層に対応するものである。建物を構成する配置を明確にとるものは見られない。

P844から弥生時代中期後葉の甕破片（115）、P841から古墳時代中期の土師器高杯脚部（116）が出土した。

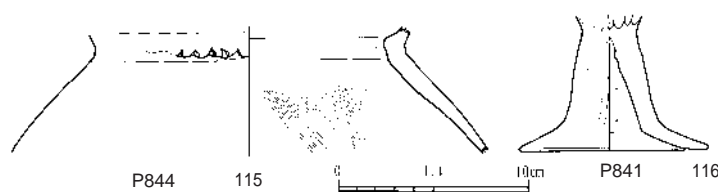


図28 ピット出土土器

G 6区包含層出土遺物（図29、図版9）

遺構内出土遺物からは、G 6区の遺構群は弥生時代中期後葉から古墳時代までのものと考えられる。これらを覆うG ~ 層は遺物包含層となっており、ほとんどは小片ながら多量の土器片が出土した。より標高の高い南側から流下してきたものだろう。弥生時代中期後葉の土器が主体となり、古墳時代中期ごろまでの土器片が含まれている。図示したものは弥生時代中期後葉の甕（117・118）と弥生時代後期の甕（119）である。

包含層の様相からは、調査地の南側には弥生時代中期後葉を中心に弥生時代から古墳時代にかけての遺構群が展開する可能性が考えられる。

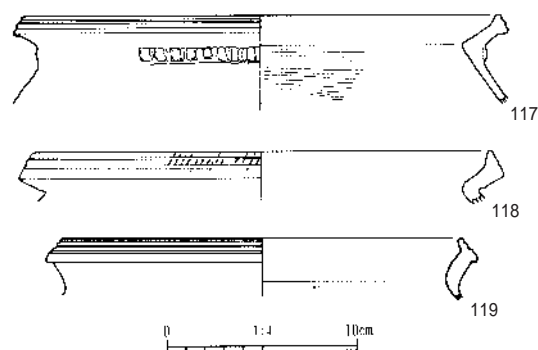


図29 G 6区遺構外出土土器

第3節 中世以降の調査成果

概要（図30）

中近世墓を除く、中世から近世にかけての遺構はG 層またはG 層下面で検出した。近現代の削平が大きいいため、消失してしまった遺構があったことも予想される。

中世前期の遺構がまとまっており、G 1区で掘立柱建物を2棟、G 3区からG 6区にかけて道路状遺構を検出した。出土遺物や埋土からほぼ同時期と考えられることや、それぞれ軸が揃っていることから、有機的に関連する遺構群と考えられる。なお、平成16年度調査ではG 1区の東側に広がる谷部から中世前期の耕作痕や掘立柱建物が検出されているので、これらとも関連をもっていると思われる。他に、検出面と埋土から見て中世前期のものと思われる土坑がG 1区の谷部で、集石がG 6区で見つかっている。

中世後期の遺構は中世墓以外見られない。近世墓群の展開するG 4区の東に近世後期の溝群が見られるが、性格は不明である。

掘立柱建物5（図31、図版10）

J・K 6グリッドに位置し、上面は大幅に後世の削平を受ける3×3間の掘立柱建物である。桁行2.6~3.0mで、中央部の間隔が広い。梁行は北側が攪乱により不明であるが、南側では1.5~1.9mの間隔でピットが並ぶ。各ピットとも径は0.3m、深さは0.3mほどで、いずれも褐色土系の埋土であった。遺物は出土していないが、埋土および軸の方向から考え、掘立柱建物6と同時期のもの判断している。

掘立柱建物6（図32・33、図版10）

L・M10グリッドに位置し、近世後期以降の溝群に切られる1×3間の掘立柱建物である。南北方向でやや東に軸をふる。桁行2.3~2.6mで、掘立柱建物5同様中央部の間隔が広い。梁行は約3.5mである。各ピットは概ね径0.3m、深さ0.4mと一様で、埋土も暗褐色系統であった。P 5から土師器鍋（120）が出土。遺物の時期は12世紀代が考えられよう。

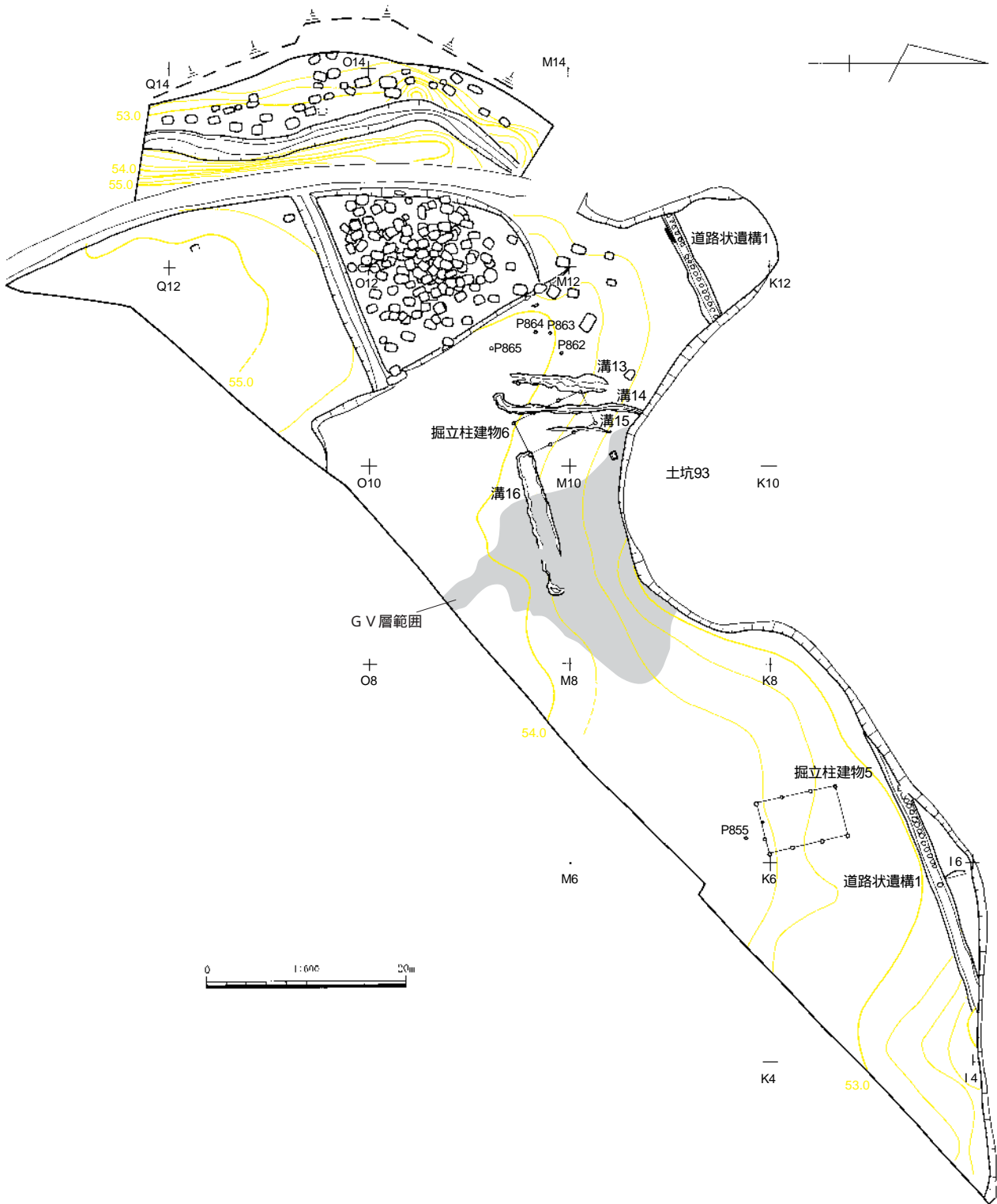


図30 G区中近世遺構配置図

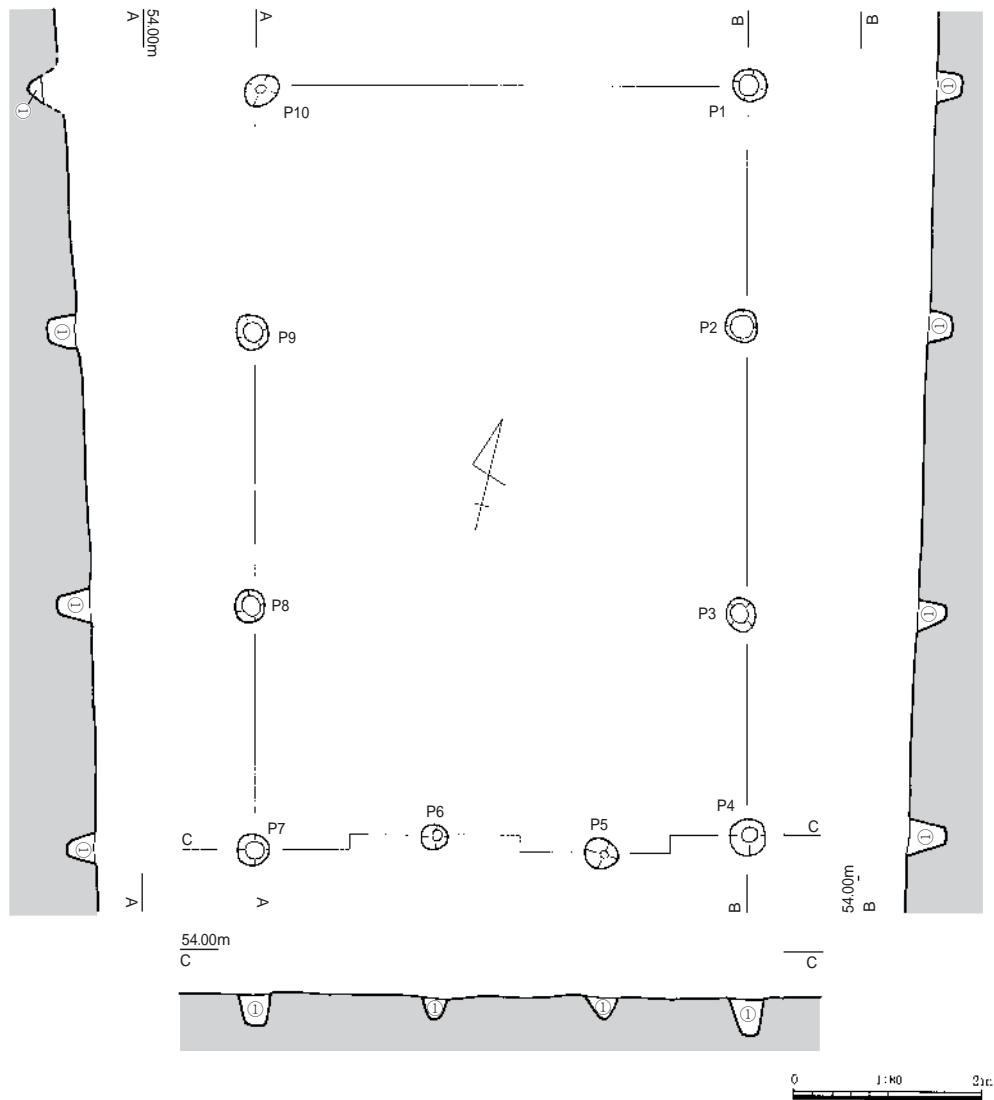


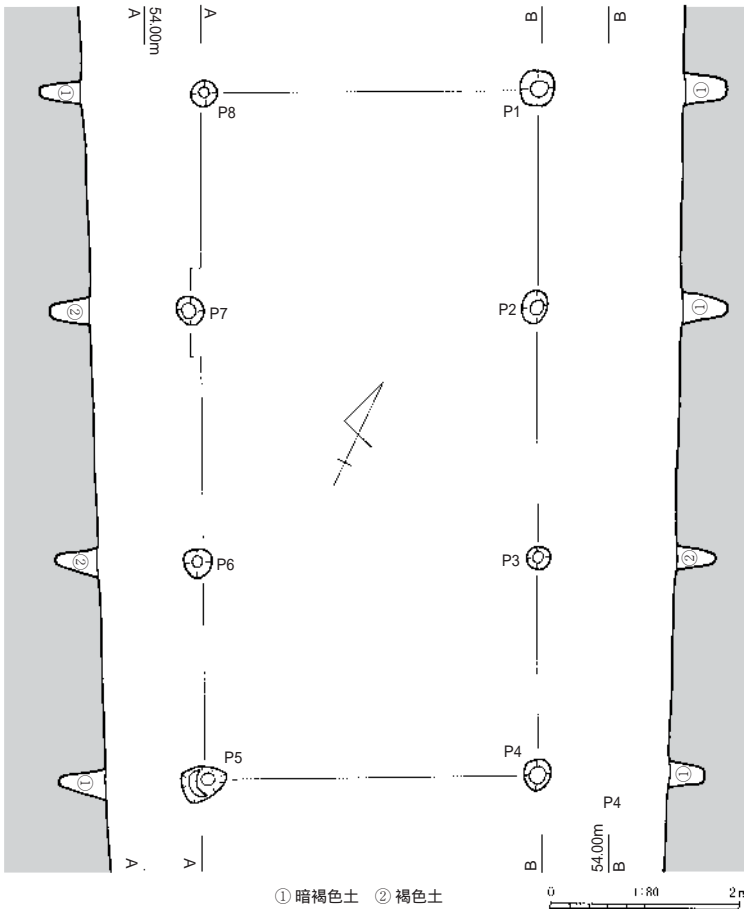
図31 掘立柱建物5

道路状遺構 1 (図34・35、図版10)

平成16年度D調査区の谷部を挟み、西側のG3区からG1・6区へと直線的につづく東西方向の道路状遺構である。標高ではG3区が高い。ここでは東西両端が後世の削平を受けており、検出した長さは12.3mであった。深さ0.3mほどの溝状を呈すが、やはりここも上面は削平されているため、本来はもう少し深かったと考えられる。上面幅は1.5m、底面は1.0mほどを測り、底面には長径0.4m、短径0.3mほどの楕円形を呈したピットが、ほぼ0.3mの間隔で18基並ぶ。いずれも深さは10cm以下で、埋土はAT火山灰粒を含む淡褐色土であった。

一方東側G1・6区で検出したものも東西両端を後世の削平により切られており、その長さは約29.7mであった。西端から5.5mほどのところから約11mの間に、長径0.5m、短径0.3mほどの楕円形を呈したピットが14基連続する。最東端だけが1.6m離れるが、あとはほぼ0.3mの間隔である。ピットの形態が不定なものも多く、またその長径がG3区に比べやや大きいものの、各ピットの間隔はほぼ一律である。ただし、ピットは東側で途切れている。

この遺構は、どちらも谷部を挟んだ平地に位置し、丘陵を横断するようにつくられている。しかし、



① 暗褐色土 ② 褐色土
図32 掘立柱建物6

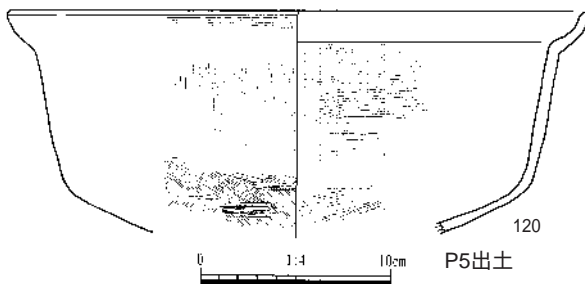


図33 掘立柱建物6出土土器

土は暗褐色土で、G層を含んでいる。

集石4 (図37・38、図版9)

G6区、I5グリッド北縁に位置する。G層下面で検出した。

礫と小礫を集積した遺構である。0.7m～0.8mほどの不整形の範囲に広がっている。礫は十数cmから20cmほどの大きさのものを数個やや散漫に並べ、小礫は径3cmほどのものを大量に集めて密に敷き詰めている。明確な掘り込みは見られないが、礫の下には数cmほどの落ち込みがあり、そのなかに礫が密に詰まっている。礫の間や礫の下からは遺物が出土していないので、遺構の時期は判然としない。礫周辺から須恵器提瓶片(127)が出土しているが、本遺構に時期的には関連しない。ほかに中世のものと思われる土師器の細片がわずかに出土している。

その底面にはいわゆる波板状凹凸面が連続するわけではなく、G1・6区のさらに東の浅い谷部へ向かう側にはそれがみられなかった。波板状凹凸面の性格については諸説あるが、こうした状況がどのような意味を持つかは今後の課題である。平成16年度調査区にも本来この遺構が続いていたと考えられるが、削平によって破壊されており検出されなかった。

遺構内の出土遺物はわずかであるが、土師器皿(121～123)の形態からみて12世紀前半(門前上屋敷遺跡編年期ないし期)に比定できよう。

平成16年度調査では概ね同時期に、谷部から東側丘陵平坦部に向け畑地の広がりを検出している。また今年度調査ではこの道路状遺構と直交して前述の2棟の掘立柱建物跡を検出しており、遺構群として一連ものである可能性が考えられよう。

土坑93 (図36)

G1区L10グリッド北側、標高53.25mの谷部斜面に立地する。土坑87の西側を切る。

平面形は長方形で、長軸0.7m、短軸0.6m、深さは最大0.9mを測る。埋

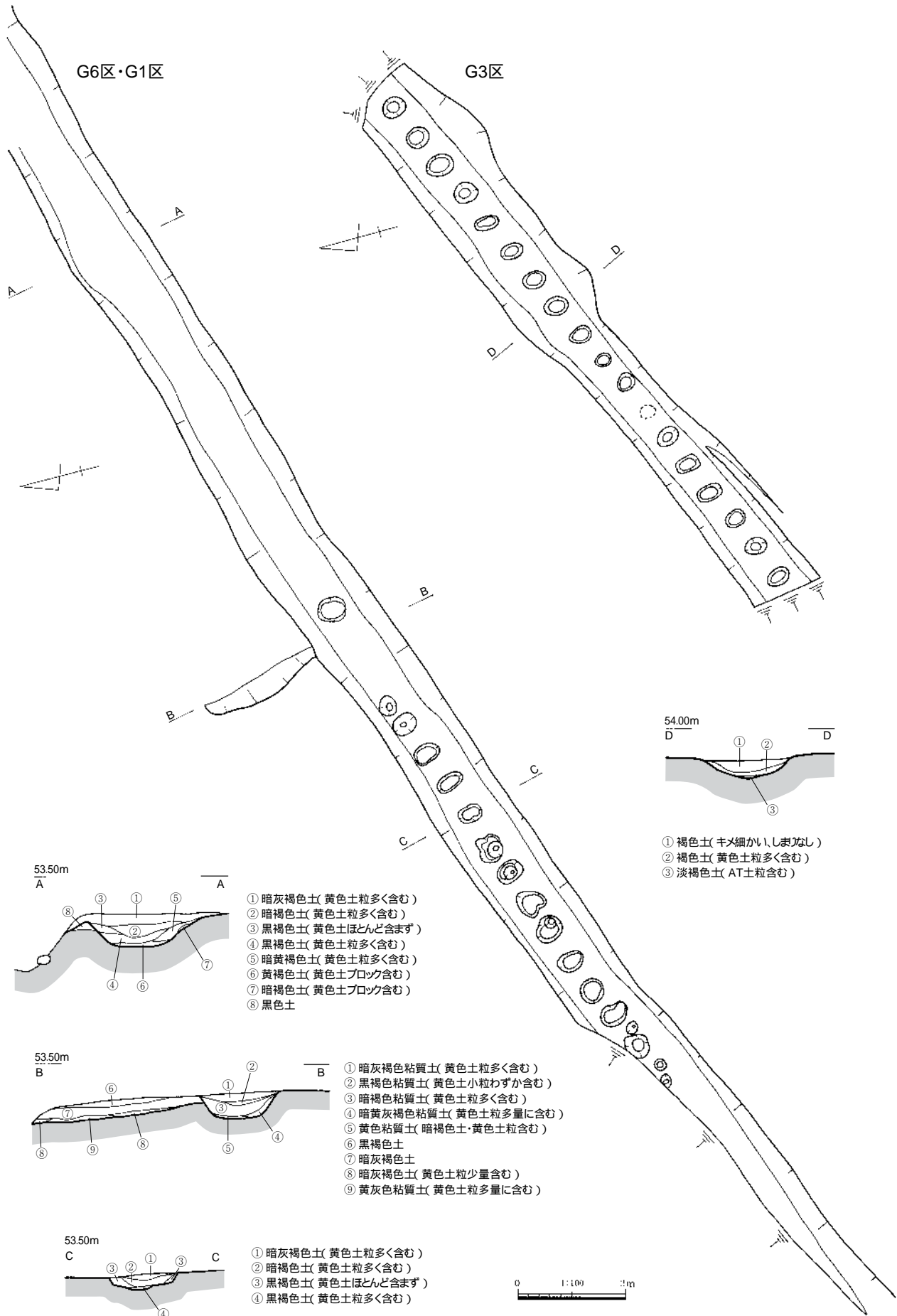


図34 道路状遺構1

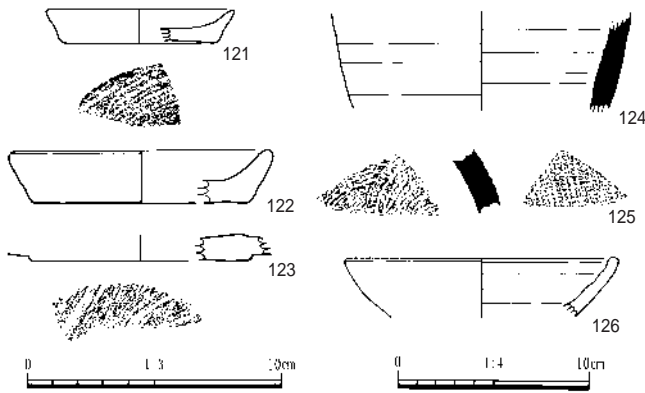


図35 道路状遺構1出土土器

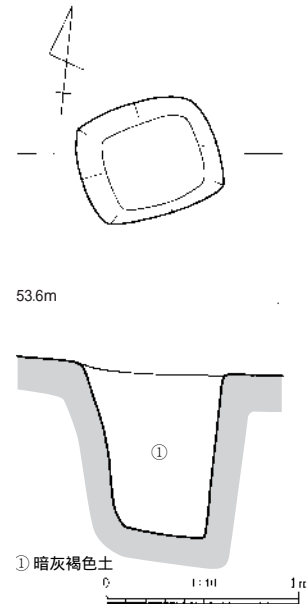


図36 土坑93

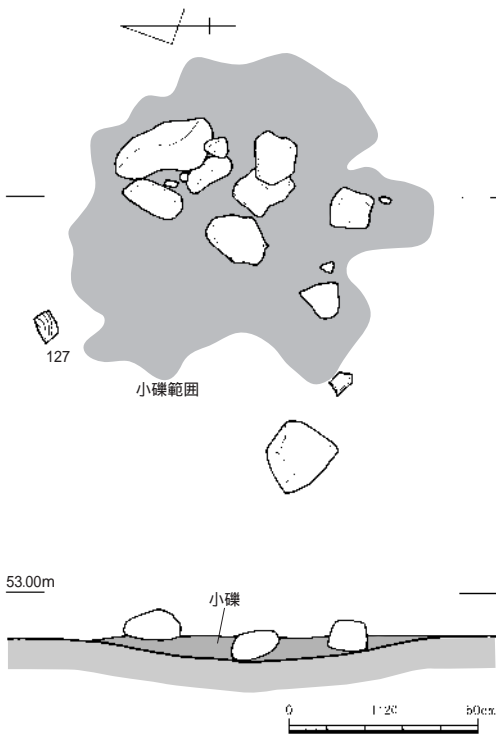


図37 集石4

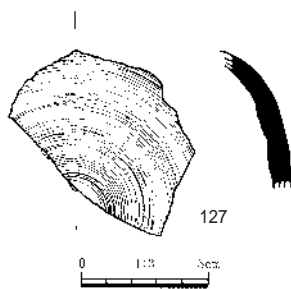


図38 集石4出土土器

溝13～溝16 (図39・40、図版10)

L・M10グリッドで南北方向の並行する3条の溝(溝13～15)、およびM9～11グリッドでほぼそれに直交する溝(溝16)を検出した。前者は平成16年度調査区へ続く谷部の西側縁辺にあり、後者はその谷上にある。南北方向の3条は1.5m前後のほぼ等間隔に位置し、もっとも西側にある溝13は検出長約10m、東側(下方)でやや幅が広がるが最大幅1.5m、検出した深さは0.15mであった。その東に位置する溝14は幅0.8m前後の直線的なもので、上部の南側で西方へ屈曲する。検出長は約15m、深さは最深で0.15mであった。東側の溝15は西側肩のみ検出したため、溝状とするより段状としたほうがよいのかもしれない。検出長は6.7mである。東西方向の溝16は、長さ14.6m、幅2.2mほどを測るもので、東端は谷部のほぼ中央で止まる。深さは0.18m、南側の肩は波状を呈し、直線的ではない。

これら溝の上面は近代以降の造成により削平されているが、いずれも埋土は橙色土ブロックを多量に含む褐色土であることから、それぞれ関連性の強い一連のものと考えられる。堆積土からは水流の痕跡などは確認できておらず、

これらの性格については不明である。この層は図8(第3章p.12)で見られるように中世前期の包含層であるG層上層に位置し、さらに近世墓域を区画する溝の上層に当たることから、少なくとも近世後期以降のものということは明らかである。遺構内から出土した遺物はすべて近世の陶磁器である(図40)。

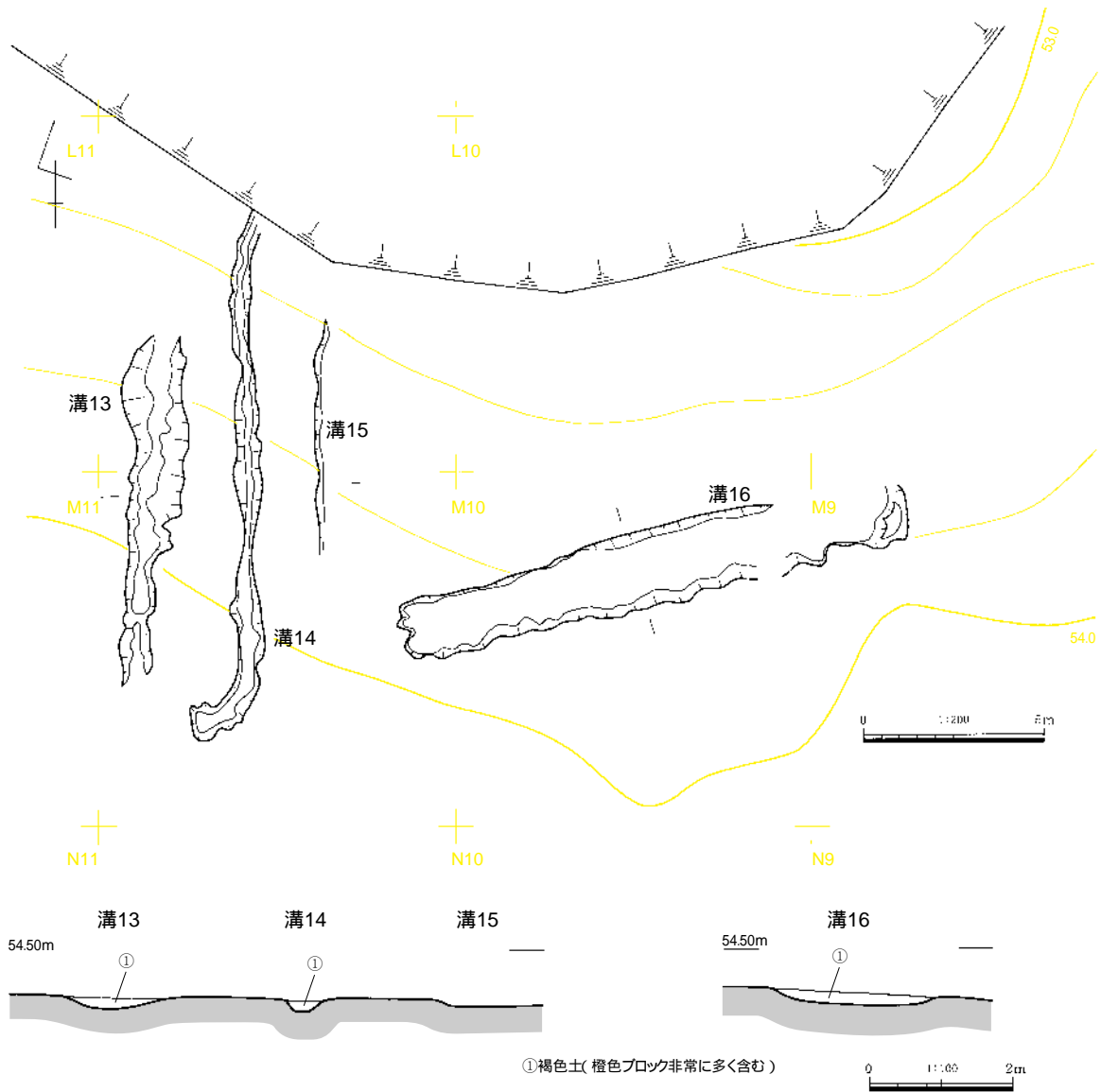


図39 溝13～16

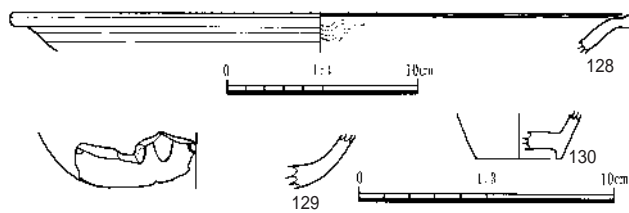


図40 溝16出土遺物

第4節 中近世墓群の調査成果

1. 概要 (図41、カラー図版1、図版11)

丘陵平坦面の西縁部 (G2・G3・G4区) から西側斜面 (G5区) にかけて、中世後期後葉から近代初期にかけてつくられた187基の墓が見つかった。墓は明確に群をなしており、すべての墓が密接なつながりをもつと考えられるので、中世から近代初期にわたるひとつの「墓群」として認識した (以下、中近世墓群と呼ぶ)。

墓の立地や土壌の形態、副葬品組成などの特徴からみて、墓群は2大別される。その主たる時期が、古い段階ではおおそ中世後期後葉に、新しい段階は近世にあたる考えられるので、以下本中近世墓群を「中世墓」と「近世墓」に区分して報告する。ただし、「中世墓」は土師器の形態と、銭貨に寛永通寶を含まずいわゆる渡来銭のみで構成されるものを区分の基準としたため、近世初頭に比定されるものが一定数含まれている可能性がある。しかし、両者を厳密に年代で線引きするよりも、墓の特徴を基準に区分したほうが実態をつかみやすい。したがって、「中世墓」は厳密には近世初頭までを含む段階の墓を指し、「近世墓」はそれより新しい段階のものを指すこととする。

立地と時期

墓の立地は丘陵斜面部と丘陵平坦面上の2つに分かれており、立地の違いが時期的な段階差ともほぼ対応する。丘陵西側斜面部のG5区には墓2から墓38までの37基が展開しており、これらはいずれも中世墓である。丘陵平坦面上には墓39から墓188までの150基が展開する。丘陵上の150基は調査区では3つに分かれており、調査区ごとに墓の特徴が異なっている。G3区に位置する墓39から墓47はすべて中世墓である。墓48から墓186までがG4区に位置し、そのうち5基が中世墓 (墓48～墓52)、他の134基が近世墓である (墓53～墓186)。G4区の中世墓はG3区に近い北縁部など、G4区の縁辺に位置する特徴がある。G2区の2基はいずれも現代の耕作で上面を大きく削平されて遺存状態が極めて悪いが、G4区の溝外にあることと、墓188からは中世の土師器が出土していることから、墓187も含めて中世のものと判断した。時期別に合計すると、中世墓は53基、近世墓は134基である。

特徴

中世墓の遺構配置は、G5区では地形に沿ってほぼ列状に並び、G3・G4・G2区では不規則に墓同士がある程度の間隔をもって展開している。G5・G4区では墓の上部施設と考えられる礫の集積を墓上面ないしは土壌上層に伴うものが大半を占める。G3・G2区は上面の削平が著しいため上部施設は確認できていない。土壌の平面形態は長方形のものが最も多いが、G5区では長楕円形のものも見られる。土壌は深く掘りこまれているものが多い。出土遺物を見ると、銭貨を副葬する墓が一般的で、土師器の杯や皿が副葬ないしは供献される例も比較的多い。ほかに漆器が副葬されたものはいくらかある。G3・G4区では釘を伴う墓が見られるので、木棺墓があったと考えられる。ただし、釘が出土しないものが直ちに土坑墓であると断定できるわけではない。骨が遺存するものはほとんどなく、G3・G2区の一部の墓からわずかに歯牙が検出されている。

近世墓の遺構配置は中世墓と異なり、狭い区画内に密集して展開する。上面に礫集積を伴い、土壌

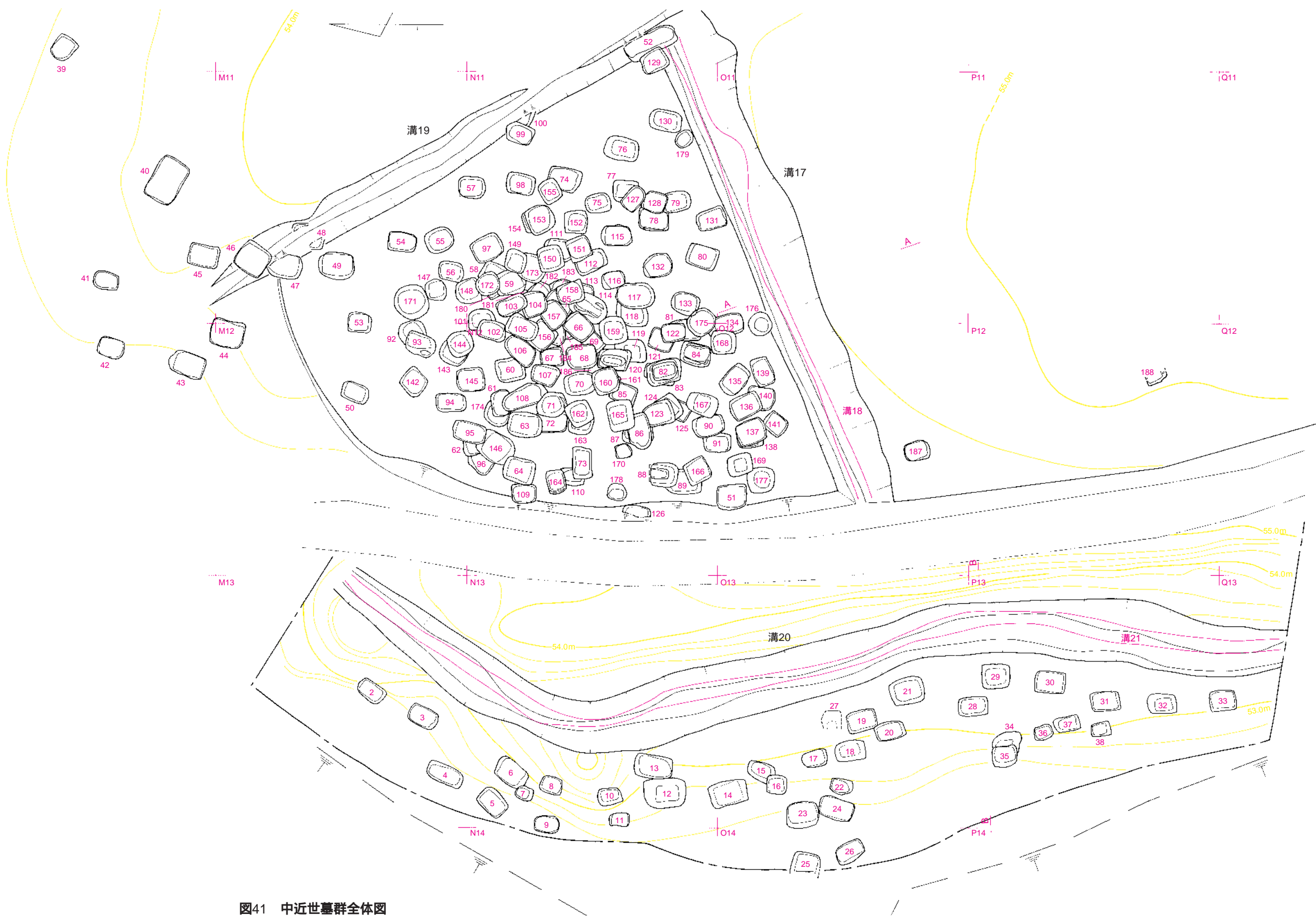


图41 中近世墓群全体图

は長方形、正方形、円形などいくつかの形態が見られる。出土遺物は銭貨を中心に、鎌、鋏、毛抜き、煙管、数珠玉など様々な種類が見られ、共伴関係も様々である。中世墓と異なり土器・陶磁器類を副葬するものはほとんど見られないが、墓上面への供献は行われていたようである。ほとんどの土壌内から骨が検出されている。遺存状態の程度はまちまちであるが、多くが埋葬時の肢位を検討でき、遺体の埋葬方法を推定できた（第6章参照）。

2. 中世墓の調査

ここでは先述のとおり、遺構形状および副葬品などから16世紀から17世紀初頭頃に比定されるものをあつかうこととする。

その分布はG2・3・4・5区にまたがっているが、地形との関係では丘陵平坦上のG2～4区と斜面部に立地するG5区に分かれ、前者を2群、後者を1群とする。さらに1群はa～dに細分して、以下に記述していくこととする。

1群（図42～44、カラー図版2、図版12）

丘陵平坦部から2mほど下がった地点に、丘陵と並行するテラスがつくられる。本群はそのテラスに比較的規則的な列状に配された土壌群といえよう。斜面から下がったところには近世以降につくられた溝（溝20・21、p.70参照）があり、これによって壊された墓があるかもしれないが、溝内からその痕跡を確認することはできなかった。ただ、後述する土壌の多くは溝底面よりも深く掘り込まれており、こちらには展開していなかった可能性も十分考えられる。

検出した土壌は、その状況からa～dの4群に細分した。すなわち、a・b群はそれぞれマウンド状の高まりをもち、その周囲に分布するものである。また、c群も僅かながら高まりをもつほか、標石が密集する。そしてd群はG5区のもっとも南側に展開する。

なお、人骨は墓27にまとってみられた以外、土壌内からは出土しなかった。土壌的な影響もあろうが、出土遺物相とあわせ、このことからG4区より古相を示しているといえよう。

多くの土壌の埋土は分層できず、基本的に淡灰褐色土の単層であった。

< 1 a群 >

1群のうちもっとも北側（M13グリッド）に位置する。東側は後世の溝20により切られているが、長径7mほどを測る平面楕円を呈した、高さ約1mのマウンド状高まりがある。そしてこの裾部に軸を同じくした、3基の土壌が列状に位置する。ただ、このマウンド上を中心に大木の根が張っていたため、すべてを完掘できていない。それ故、この3基以外にも土壌があった可能性が考えられるが、確認できなかった。

墓2（図45、図版13・24）

長径1.15m、短径0.7m、深さ0.8mほどを測るほぼ長方形を呈した土壌で、長軸は地形に沿って北東を向く。土壌内中位以上には径0.3～0.6mほどの礫が密にあるが、これらは標石として上面にあったものが落ち込んだのであろう。また、釘は1点も出土していないことと礫の状況から、組み合わせ式の木棺であったと想定される。遺物は南側中央の底面より僅かに浮いたところから、やや傾いた状

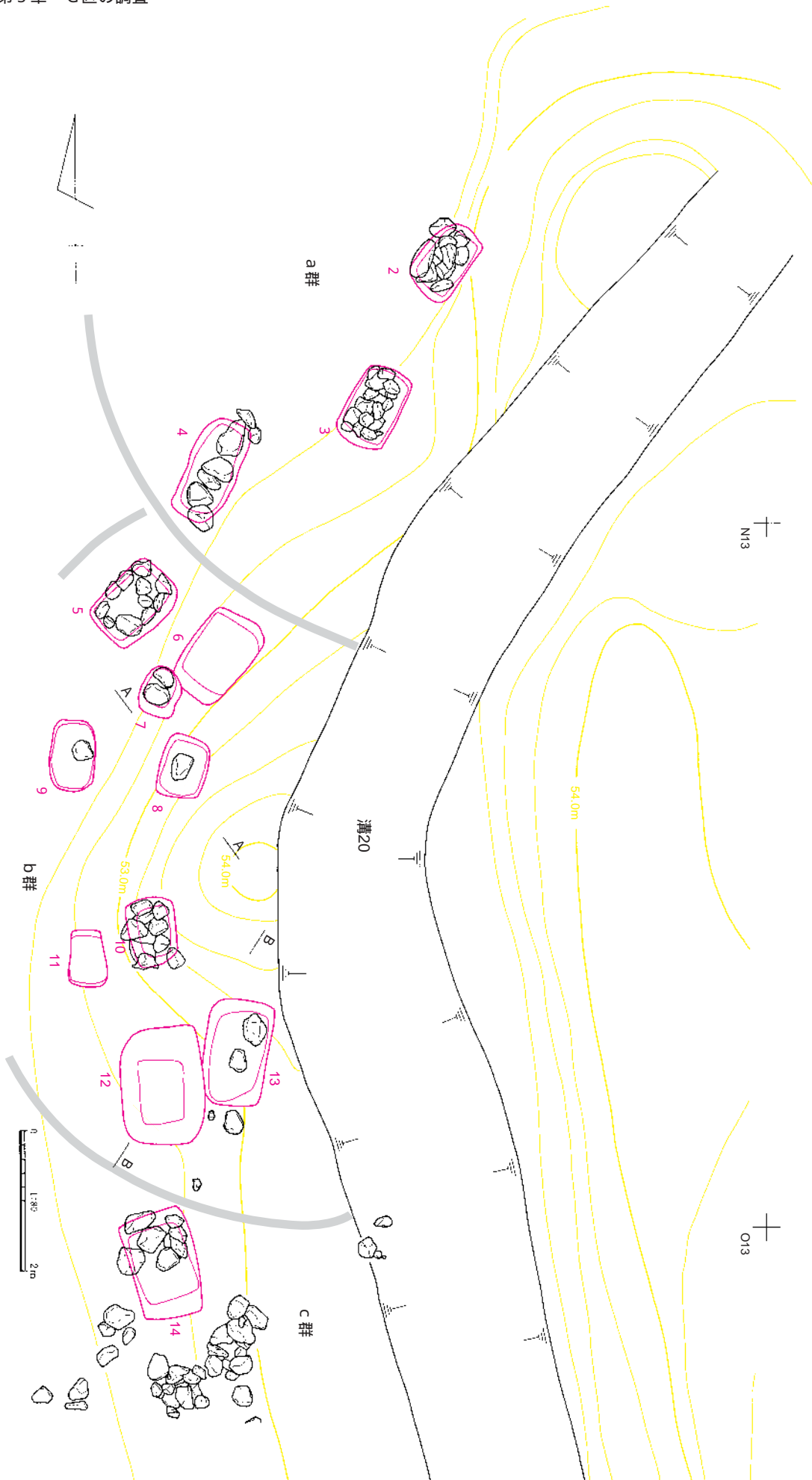


図42 G5区基配置図1

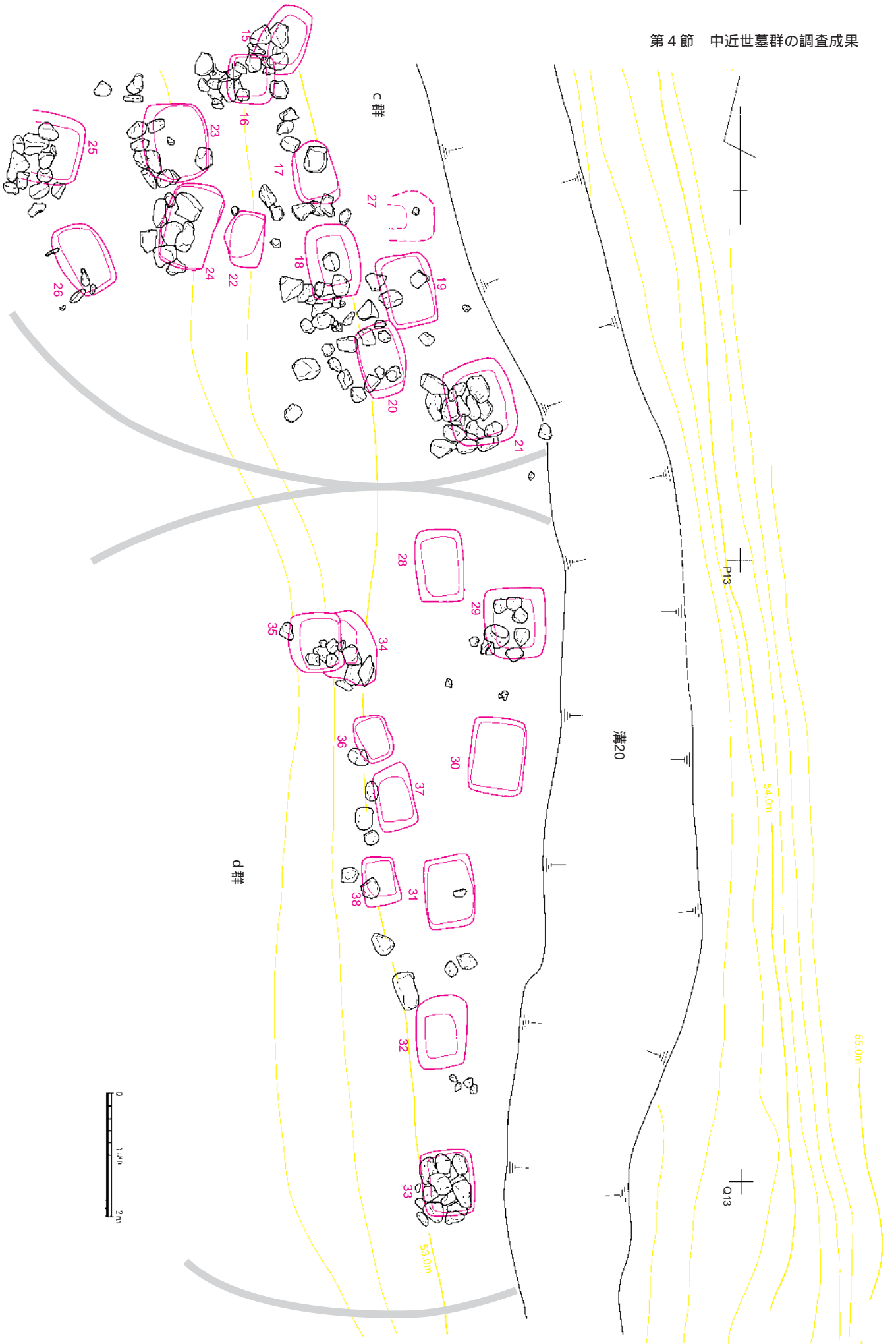


図43 G5区墓配置図2

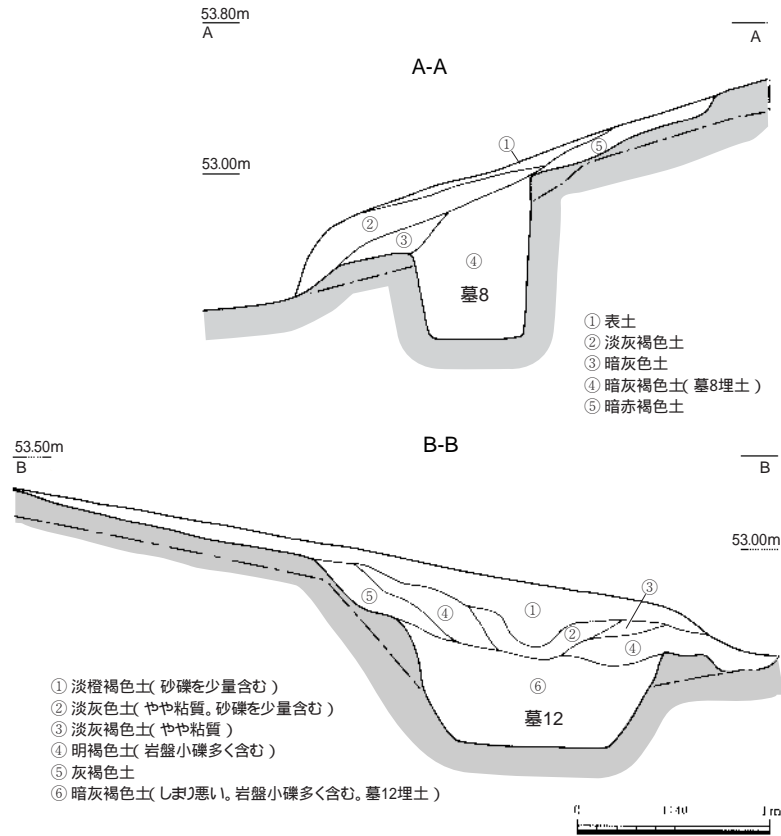


図44 G5区墓・マウンド状隆起土層断面図

態で6枚が接着した銭貨(C2)が出土している。銭種は大観通寶のほかは不明である。

墓3 (図45、図版13)

墓2の1mほど南に位置する。長径1.2m、短径0.7m、深さ0.65mほどを測るほぼ長方形を呈した土壌で、地形に沿い北東を向く。土壌内中位以上には、径0.2~0.3mほどの礫が密にあるが、礫の大きさは墓2より小さく量が多い。やはり標石が土壌内に落ち込んだもので、釘が出土していないことと礫の状況から組み合わせ式の木棺であったのであろう。

遺物は土壌底面中央やや北寄りから、漆器の上へのせられた銭貨が出土した。漆器は僅かな漆塗膜と黒色化した土壌の存在から、その範囲を確認できたのみであるが、底面より2cmほど浮いている。おそらく棺底に置かれたものであろう。銭貨(C3)は6枚が接着しており、元豊通寶2点がある。また土壌北側で上面の礫に混じり、土師器皿(131)が出土した。

墓4 (図45、図版13)

墓3の南西約1mのところろに位置する。長径1.5m、短径0.75m、深さ0.2mほどを測る長方形の土壌で、上面には0.4~0.6mほどの大型礫が1列に配される。この礫は土壌上場よりも広い範囲にあり、土壌の上場はほぼ検出したレベルであることがわかる。すなわち長軸が長く、非常に浅いものである訳だが、小口などの痕跡は見出せなかった。埋土も他の土壌と変わらないため同時期のものと判断したが、伸展葬であるなど、葬法は異なる可能性が考えられよう。遺物は出土していない。

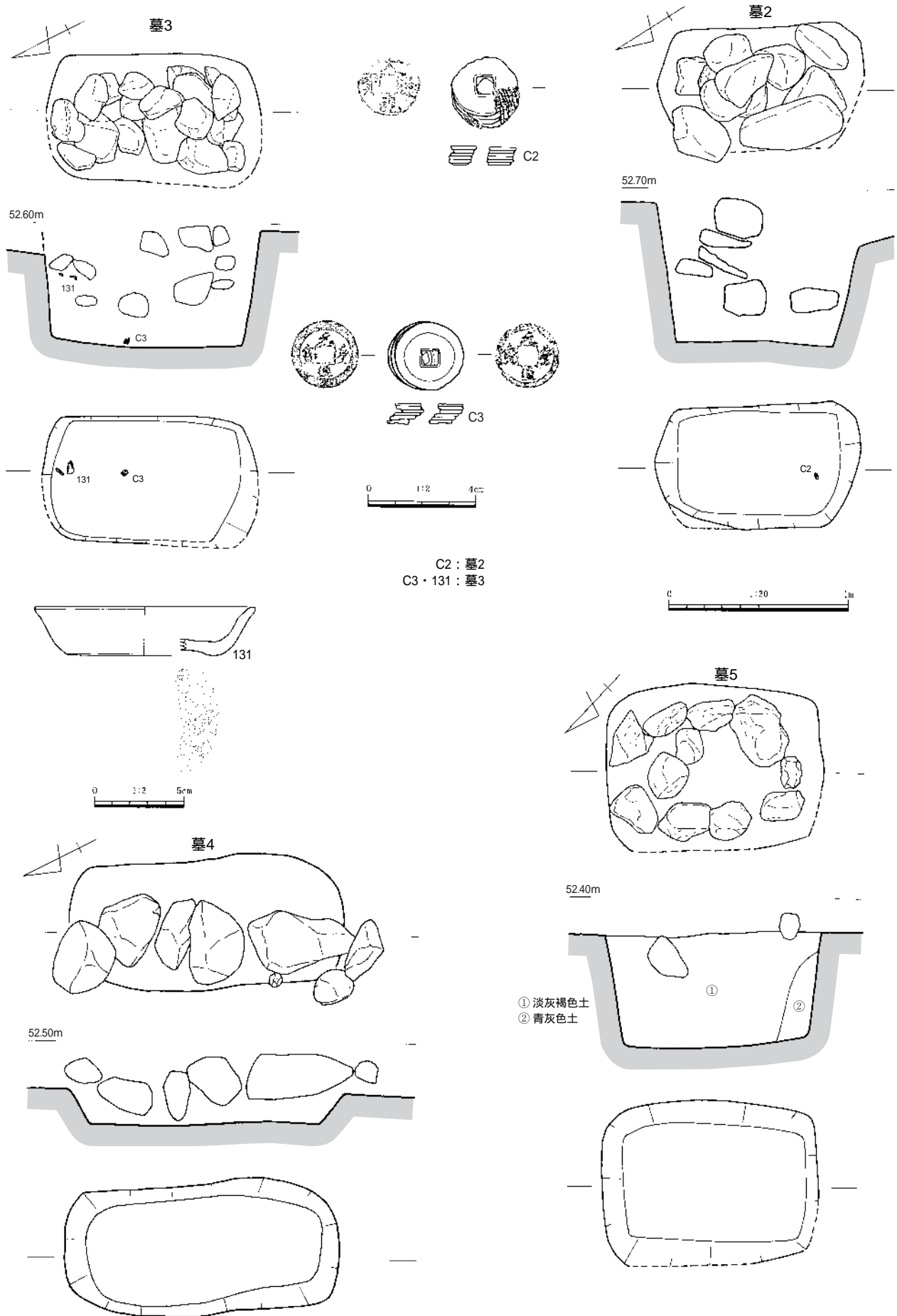


図45 墓2～5

< 1 b群 >

N13グリッド西側に、径5m、高さ1mほどを測る円形のマウンド状の高まりがある。東側は溝20により切られているが、マウンド西半分の上から裾部へかけて9基の土壌が展開する。この中でも北側（墓5～9の5基）と南側（墓10～13）にほぼ二分する。

墓5（図45、図版13）

墓6より下がった、西側0.5mのところを位置する。長径1.2m、短径0.9m、深さ0.65mほどを測る長方形の土壌である。上面には上場に沿って口字状に0.2～0.4mの礫が配される。こうした配置は、後述する墓25や墓21などに共通するものである。遺物は出土していない。

墓6（図46、図版14・24）

墓8の北側0.5mのところを位置し、墓7に切られる。長径1.35m、短径0.9m、深さ1.0mの長方形を呈した土壌である。軸は北東方向を向き、南東側の底面は上場よりも外側へ開く。標石はない。

遺物は底面中央から漆器の残骸と考えられる黒色土壌の範囲、および部分的に漆塗膜があり、その上に接着した銭貨（C5）が6枚のっていたほか、掘り下げ中にも銭貨（C4）が1枚出土している。また0.4mほど北側には数珠玉状のものがみられた。

墓7（図46、図版14）

墓6の南西隅を切る、長径0.7m、短径0.55mの北側が不定型な土壌。深さは0.5mほどで0.3～0.4mの礫が2個、底面近くまで落ち込んでいる。遺物は出土していない。

墓8（図46、図版14・24）

マウンド頂部に近く、1b群の中でもっとも高い位置にある。長径0.9m、短径0.65m、深さ0.7mほどを測る長方形を呈した土壌で、中央埋土中に、径0.4mの平たい礫が検出された。礫底面で埋土が変わるため、標石がこのレベルまで落ち込んだことが看取される。

遺物は北東隅の底面近くから銭貨が出土した（C6～C9）。3枚ずつ接着したものがふたつ縦向きの状態であった。このことから、遺体の首などにかけていたものが崩れたと想定される。銭種で判明しているのは政和通寶1枚、元祐通寶2枚、元豊通寶1枚である。

墓9（図46、図版14）

墓8の西側1mほどのところにある。長径1.0m、短径0.65mの長方形を呈すが、深さは0.2mほどしかない。おそらく上面は後世の削平をかなり受けたもので、本来はもっと深いものであったと考えられる。土壌内西側中央では径0.3mの礫が土壌検出面で出土した。先の墓3などのように、さらに上方には標石を構成した礫があったのではなかろうか。遺物は出土していない。

墓10（図46、図版14）

南群の中でもっとも高いところに位置する土壌で、長径1.0m、短径0.7m、深さ0.9mほどを測る長方形を呈したものである。上面には0.25～0.35mほどの礫が密にあり、やや口字状の配置となってい

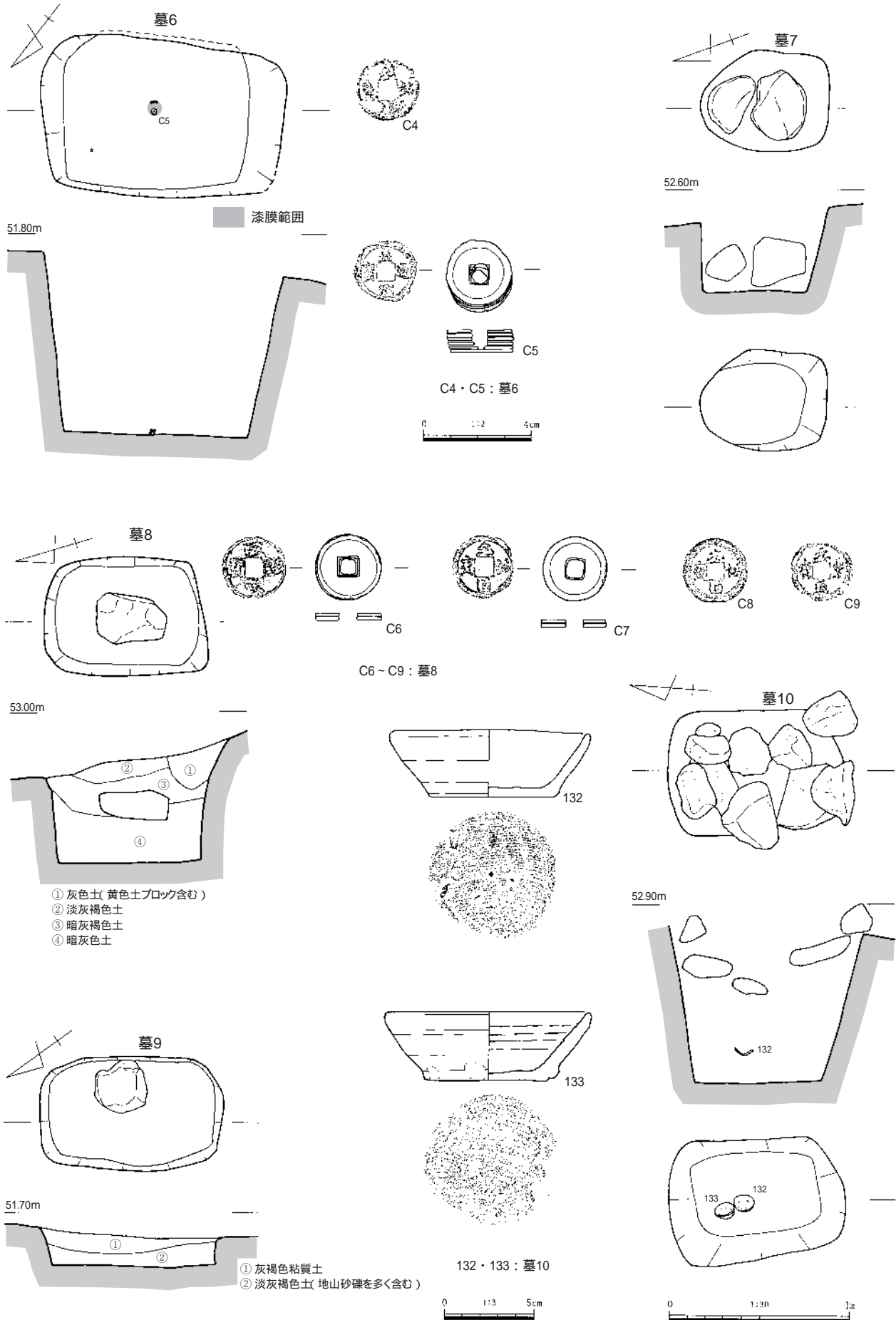


図46 墓6～10

る。また、底面より0.2mほど浮いたところから、ほぼ正位で土師器杯が2点(132・133)出土した。これらと標石の最下面とではレベル差が0.3m以上あり、どのような位置関係で、どこに置かれたものなのかは検討を要する。

墓11(図47)

墓10西側にあり、長径0.8×短径0.5m、深さ0.65mほどを測る長方形の土壇である。長軸は南北方向をとり、東西の壁はほぼ直立する。埋土は単層。遺物は出土していない。

墓12(図47、図版15)

墓10の南約0.7mで、マウンド裾部に位置する土壇。東接する墓13を切る。長径1.7m、短径1.2m、深さ0.75mを測る長方形を呈したもので、壁面はかなり傾斜する。遺物は底面近くの東壁そばから、3枚が接着した銭貨が2点(C11・C12)0.5mほど離れて出土した。銭種で判明しているものは景德元寶のみである。

墓13(図47、図版15)

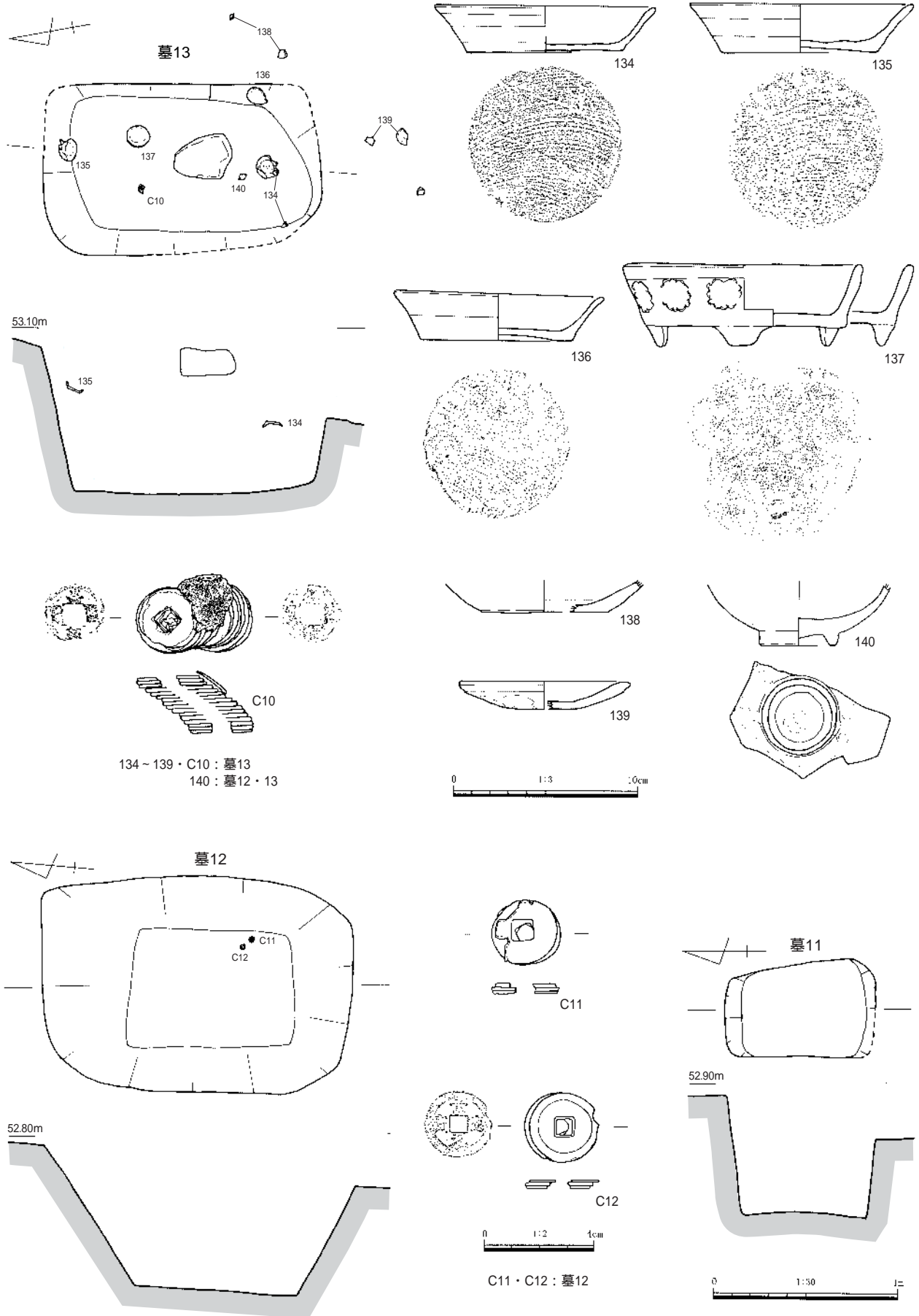
墓12に南西隅を切られる土壇で、長軸は南北方向をとる。長径1.5m、短径0.95m、深さ0.8mほどを測る長方形を呈したものである。土壇中央上面には、長径約0.3mの礫が1点ある。また埋土上層からは土師器杯3(134~136)、火鉢1(137)の4点が出土した。このうち3点は土壇中央の南北線上にあり、このなかの一番南にあるものは底面を上にした状態で検出された。また、1点(136)のみ南東隅から出土している。これらはいずれも回転台成形によるものである。なお、土壇上面やその周辺から土師器杯片(138)と手づくねの土師器皿(139)、陶器碗片(140)が出土しているが、これが本遺構に伴うものかどうかは明らかではない。このほか、底面中央やや北よりから16枚接着した銭貨(C10)があった。これらは倒れた状態で検出され、また布の痕跡があることから頭陀袋にいれ、死者の首にかけられていたものが転がったのかもしれない。

<1c群>

丘陵平坦部から斜面へかけてもっとも広く展開する群である。平坦部では削平によると考えられる、非常に低い残存高約1.5mのマウンド状の高まりがある。またこの高まりの北側に火葬骨が広がっていた。この群には13基の土壇があり、標石をもつものが主体となっている。

墓14(図48、図版15)

墓12の南1mほどのところに位置する。長径1.55m、短径0.9m、深さ0.7mほどを測る長方形の土壇で、上面北側半分には径0.25~0.5mの礫が密にある。この礫の間から小型の京都系土師器皿(143)が出土した。さらに土壇底面中央、やや浮いたところから正位で京都系土師器皿(141)があり、その北側から銭貨(C13・C14)がみられた。総数は6枚で、5枚が接着し1枚が離れていたが、出土状況からみてもともと一緒であった可能性は高い。なお、この上面南からは底面で見つかった141と同法量のものが出土している(142)。地点的には本土壇に関連する可能性が高いと思われるが、墓12に付随するものであるかもしれない。



134 ~ 139 · C10 : 墓13
140 : 墓12 · 13

C11 · C12 : 墓12

図47 墓11 ~ 13

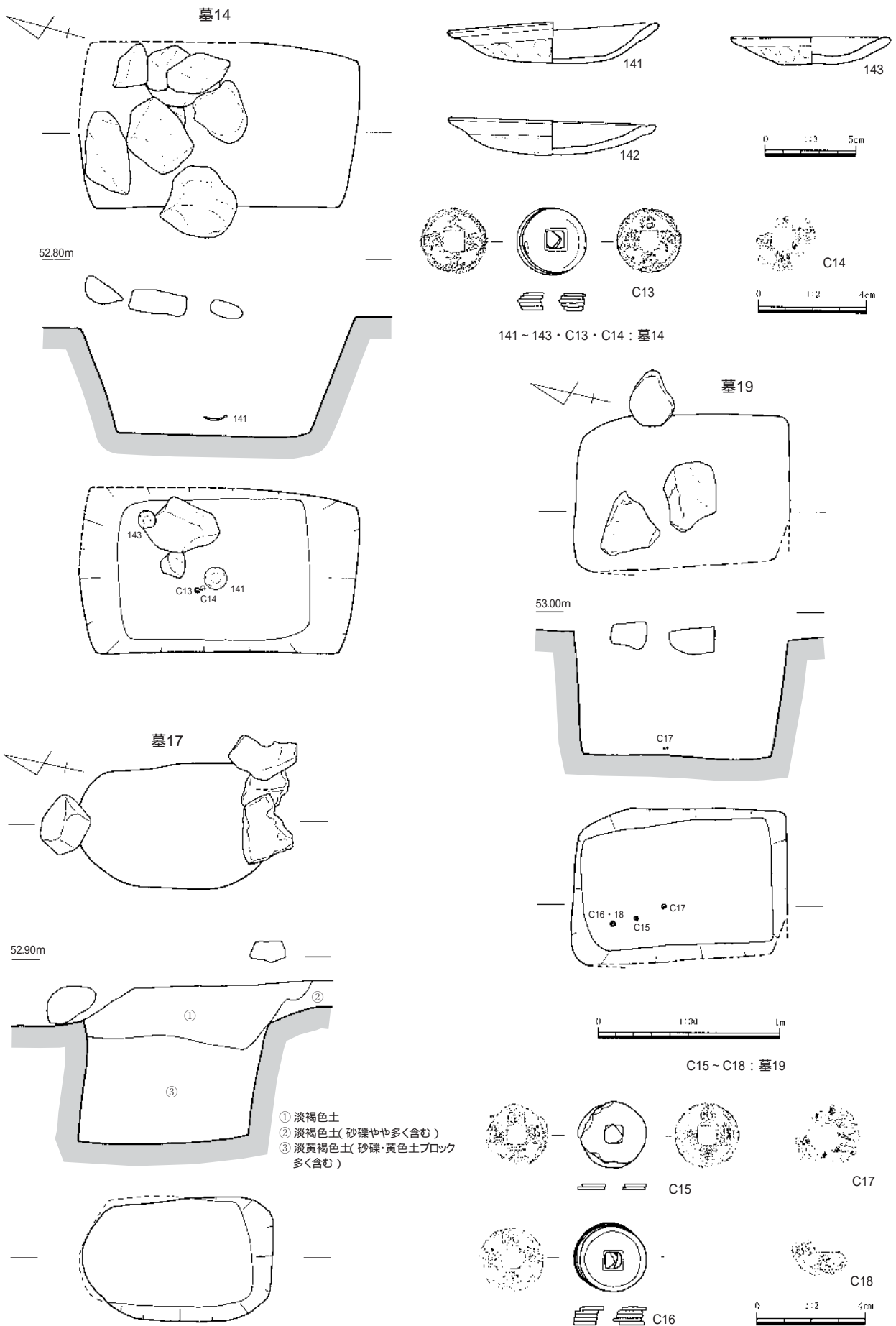


図48 墓14・17・19

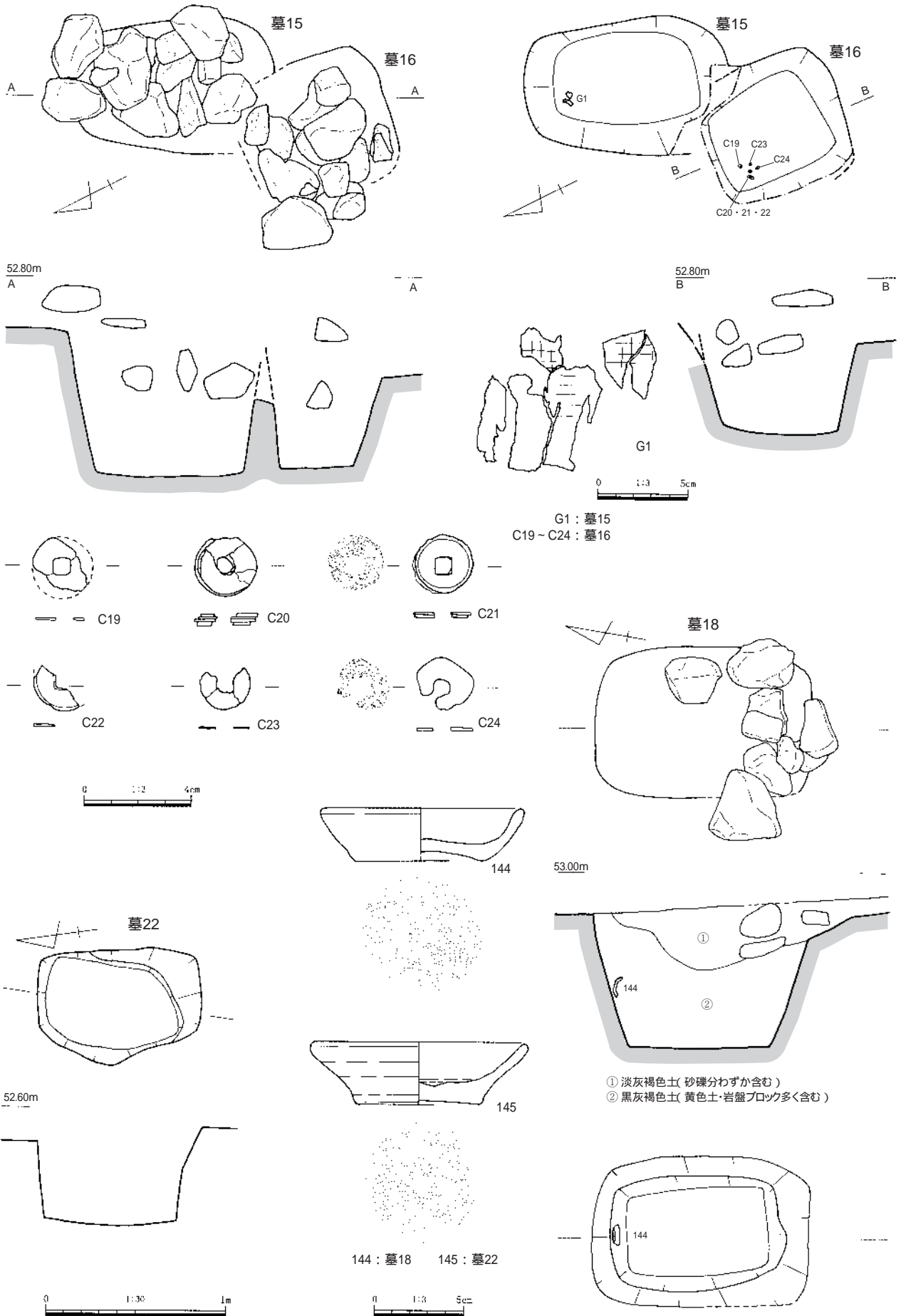


図49 墓15・16・18・22

墓15・16（図49、図版16・24）

墓14の南に位置する。切り合う2基の土壙であるが、その前後関係は明確にし得なかった。いずれも径0.2～0.35mの礫が土壙上面全体を覆うように密にある。墓15は長径1.15m、短径0.75m、深さ0.8mほどを測るやや不整な長方形、墓16は径0.8mほど、深さ0.5mほどのほぼ方形を呈する。前者からは北西隅埋土中位から和紙状のものを検出した。また後者では北東隅底面近くからまとめて銭貨が出土した。銭貨は計10枚（C19～C24）あり、そのうち最も北西にあるものは4枚（C20）と2枚（C21）が接着し上下で出土したことから、もともとは6枚であったと考えられる。いずれも遺存状態は悪く、銭種不明なものが多い。

墓17（図48）

墓15の南約1mのところのところに位置する。長径1.15m、短径0.7m、深さ0.85mを測る長方形の土壙である。北側は壁がほぼ直立ないし、内側に入り込む。北側上面に3、南に1個の礫があり、大きさはいずれも径0.35m前後であった。遺物は出土していない。

墓18（図49、図版16）

墓17の南に位置する土壙で、長径1.2m、短径0.85m、深さ0.8mほどを測る長方形のものである。上面南半に径0.2～0.4mの礫が密にあり、これらは上層である①層に覆われる。また土師器杯（144）が埋土中程、北側壁面から倒位で出土した。土層観察からは判断しきれないが、棺などの上にあったものが落ち込んだ状況であろうか。

墓19（図48、図版16・24）

墓18の南東に位置する。長径1.2m、短径0.85m、深さ0.7mほどを測る長方形を呈した土壙である。上面には径0.3mほどの礫が疎らに3個ある。底面よりわずかに浮いて北西部から3ヵ所、計9枚の銭貨が出土した（C15～C18）。このうちC15は2枚、C16・C18は6枚が接着していた。

墓20（図50、図版17）

墓19の南東隅を切り合うものの、その前後関係は確認できなかった。長径1.15m、短径0.75m、深さ0.45mほどを測る長方形の土壙である。上面にはほぼ口字状に径0.2～0.3mの礫が配される。埋土は3層に分かれ、南側は棺の裏込め的な堆積をする。上面の礫が落ち込んだような状況もないことと合わせると、長径1mほどの棺が納められた可能性が考えられよう。

墓21（図50、図版17）

墓20の南東0.5mほどのところに位置する。長径1.35m、短径1.05m、深さ0.7mほどを測る長方形の土壙である。上面には0.2～0.55mの礫が密に、2段に積まれており、中央下段のものがもっとも大きい。埋土は単層、遺物は出土していない。

墓22（図49、図版17）

墓24の東に位置する土壙で、長径0.9m、短径0.6m、深さ0.55mほどを測る長方形を呈したもので

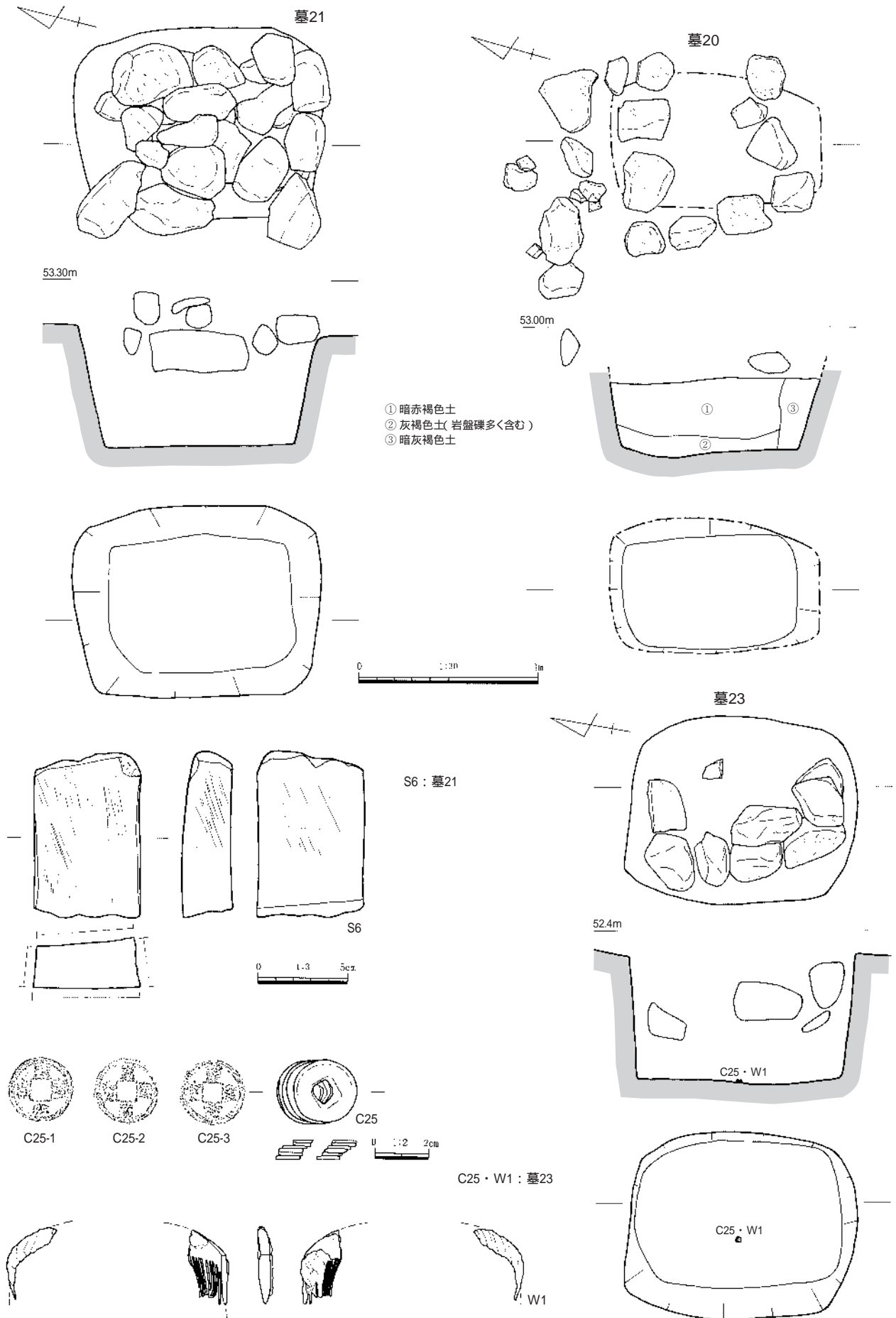


図50 墓20・21・23

ある。底面がやや不整な形となる。上面南東隅外側から、土師器杯(145)が出土している。

墓23(図50、図版17・24)

墓16の南西0.5mに位置する。長径1.25m、短径1.05m、深さ0.75mを測る長方形を呈した土壌である。上面東半にはコ字状に径0.3~0.4mの礫が配される。また、土壌底面中央には底面直上から6枚が接着した銭貨(C25)が出土したほか、埋土中位からは木製櫛(W1)が出土した。

墓24(図51、図版18・24)

墓23の南でわずかに切り合うが、その前後関係は確認できなかった。長径1.4m、短径0.85m、深さ1.05mほどを測る長方形を呈した土壌である。上面には径0.25~0.5mの礫が密にあり、土壌内に落ち込んでいた。また、底面中央直上からは漆器にのせられた銭貨が4枚(C26)接着して出土した。漆器は径約5cmの黒色漆塗膜の範囲が確認できた程度であった。

墓25(図51、図版18)

墓23の西側、1c群中もっとも低いやや傾斜したところに位置する土壌である。西側に関しては埋土と地山との区別がつかず、その規模を確認することができなかった。残存しているところでは長径1.1m、深さ0.55mを測り、短径は礫の範囲からみて0.9m以上あったと考えられる。上面には口字状に径0.25~0.55の礫が配され、西側中央部のものが平たく大きい。このすぐ西側から碁笥底の白磁皿(147)が出土した。この平石上に供えてあったものかもしれない。他に上面からは土師器杯片(146)が出土した。

墓26(図51、図版18)

墓25の南0.5mのところのところに位置する。南壁の立ち上がりは根株などがあったこともあり確認できなかったため、礫の状況などから推定している。長径は約1.2mと考えられ、短径0.8m、深さは0.5mほどを測る。上面には径0.2~0.3mの礫があり、立てているような状況が窺える。また土壌内東側、底面よりやや浮いたところから土師器杯が2個体出土した(148・149)。149を口縁を下にして置いたところへ、それにもたせ掛けるように148を置いている。他に埋土中から土師器杯片が2個体分出土した(150・151)。

墓27(図52、図版19・24)

唯一火葬骨が出土している遺構である。上面に炭と火葬骨が散布しており(①層)、②層中にも火葬骨は混じっていた。掘り込みがあることは断面で確認できたが、平面的にはその範囲を捉えられなかった。深さは約0.3mを測り、底面に3枚が接着した銭貨(C27)が置かれていた。また上面にもまとまって出土した3枚の銭貨(C28・C29)や、C30・C31が火葬骨とともにあったが、後2者は被熱し溶解していた。これらは茶毘に付される前に副葬されたものであることは明らかである。ただし、周辺に焼けた痕跡を持つところはなく、近在から持ち込まれたのであろう。

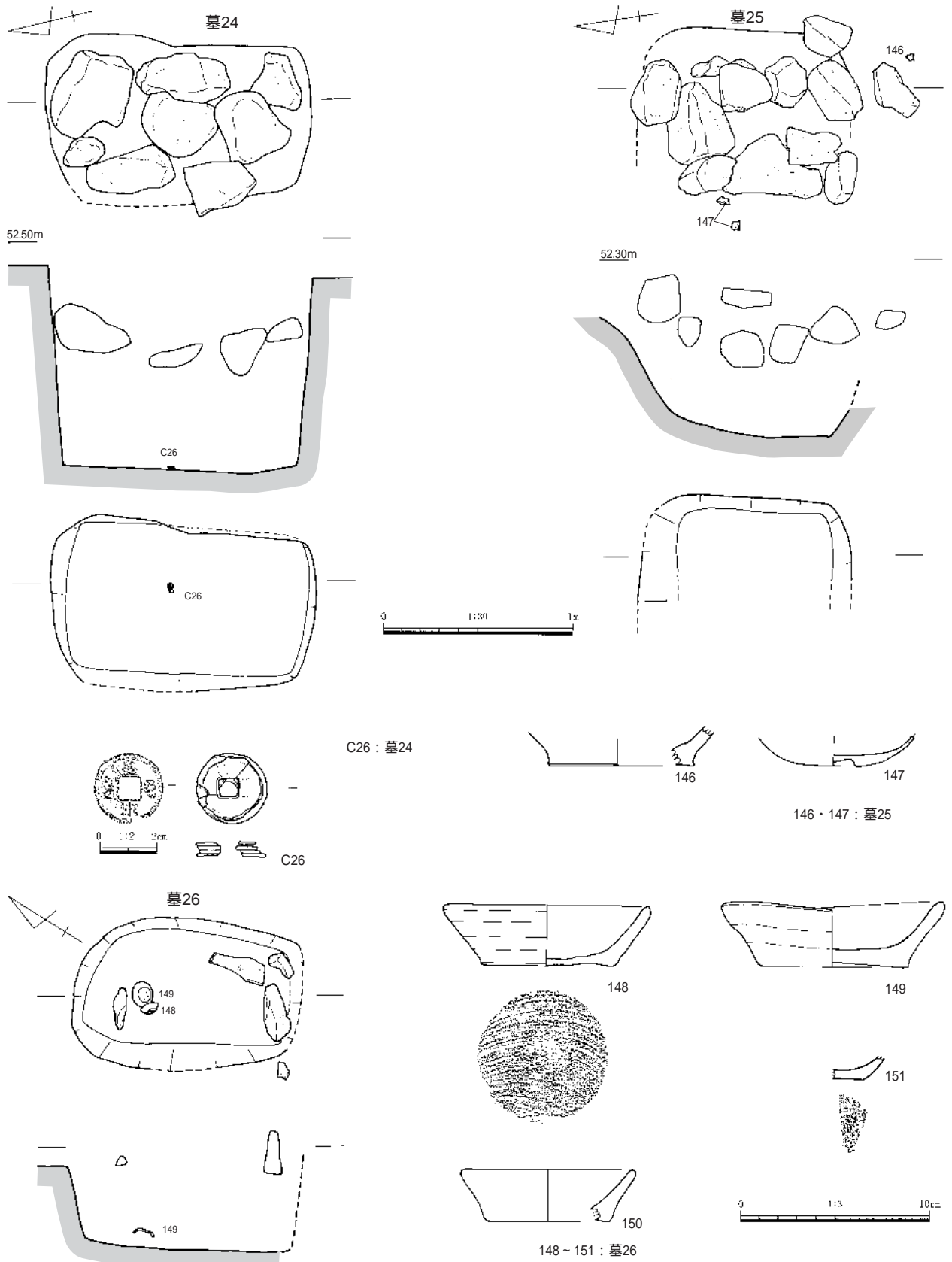


図51 墓24～26

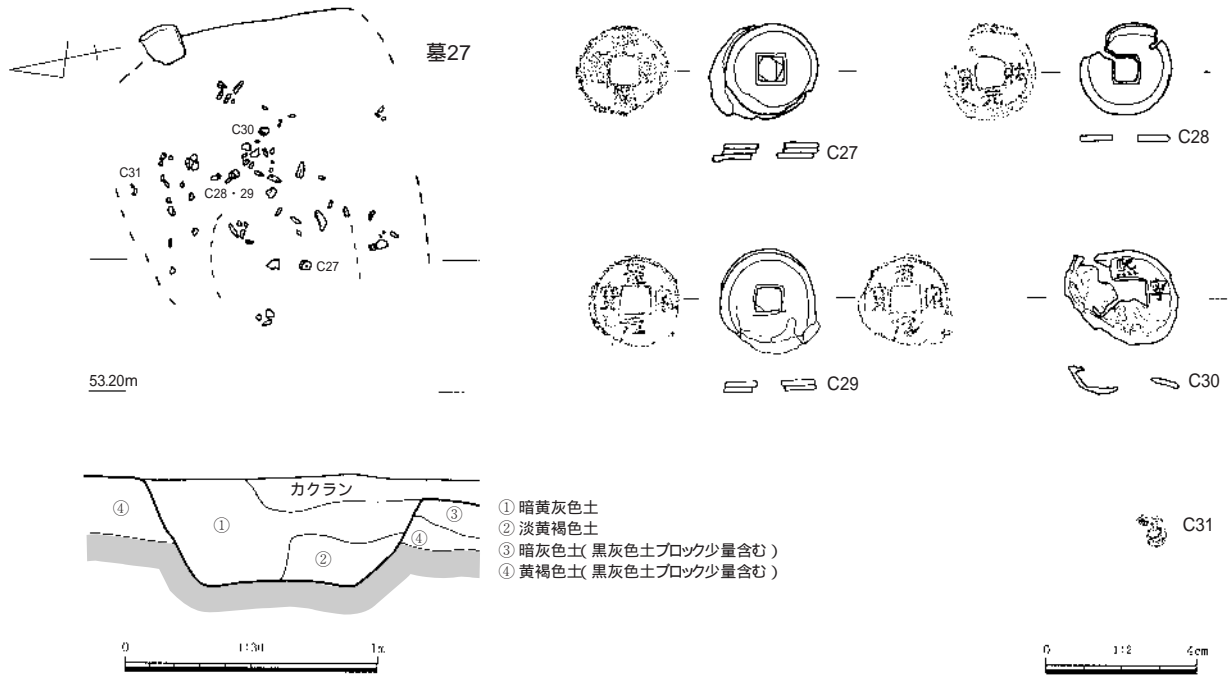


図52 墓27

< 1 d 群 >

1群のもっとも南に位置する群で11基ある。平坦部は北から南へかけて幅が狭くなり、北側では平坦部と西側傾斜変換点付近の2列に土壌が展開するが、南側では1列へと収束する。

墓28 (図53、図版19・24)

本群のもっとも北に位置し、長径1.2m、短径0.8m、深さ0.65mほどを測る長方形の土壌である。底面からは2ヶ所で銭貨が出土した。いずれも底面より2cmほど浮いた状態であった。中央からは遺存状態の悪い1点(C33)、ここより北東2mほどのところには3枚が接着したもの(C32)がある。

墓29 (図53、図版19)

墓28の南東部に位置する。北側はトレンチにより掘削してしまったが、長径は残存長で1.1m、短径1.0m、深さ0.85mほどを測る長方形の土壌である。上面東側半分をコ字状に径約0.3mの礫が配されている。さらにこの下側東壁には幅0.1mほどのテラスがあり、配石と関連してつくられたものと思われる。また配石よりも下、ほぼ中央部より大型の水輪(S7)が出土した。状況からみて、標石の一部として転用されたものと考えられる。土壌内からは遺物は出土していない。

墓30 (図54、図版19)

墓29の約1m南に位置し、長径1.25m、短径0.9m、深さ0.6mほどを測る長方形を呈した土壌である。遺物は1群の中では多く、底面で銭貨がみられるほか、南側の埋土中位で鉄製鎌(F1)が出土した。鎌は柄部を南側にし、刃部は下を向く。また、底面から出土した銭貨は北東側に集中して3ヶ所に分布する。東壁に接するC34は2点が接着したもので、北壁近くから1点(C38)、そしてその間から4点と2点接着したものの二つの8点(C35~C37)、計11点が出土している。

鎌の出土は後述する近世以降のものに通ずる。ただ確認できている銭貨が渡来銭で占められること

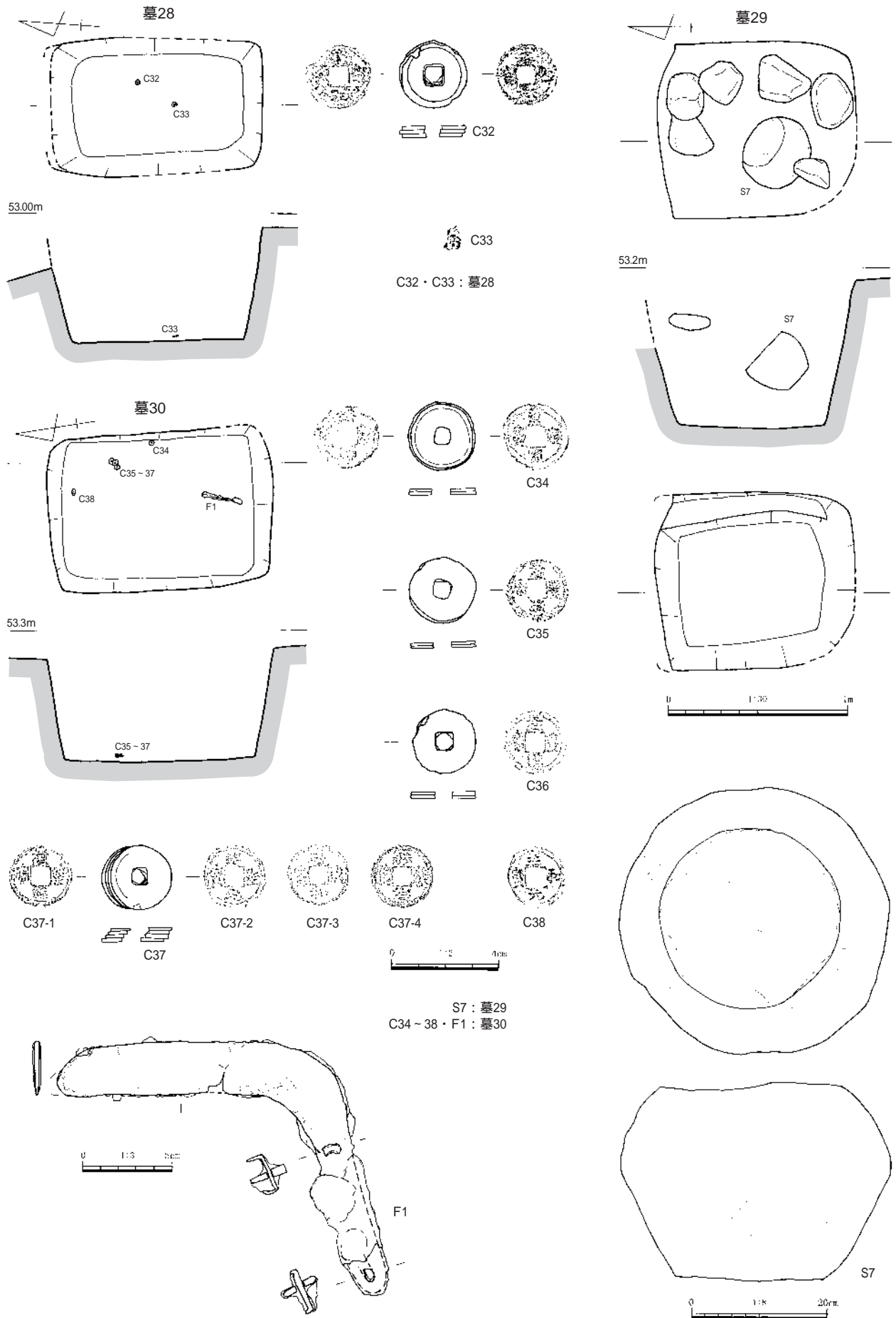


図53 墓28～30

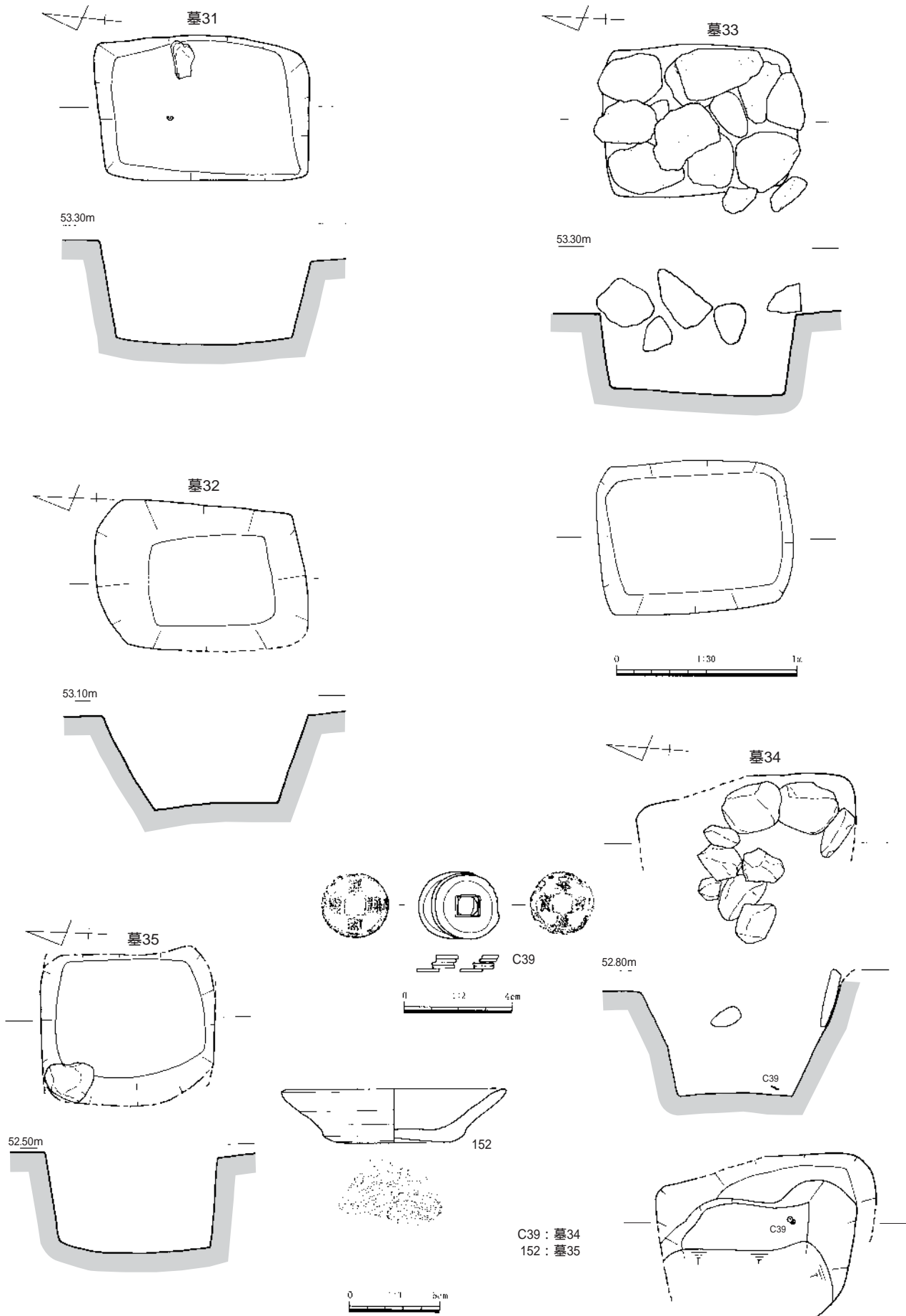


図54 墓31～35

と、その立地から考えて古相を示すことは間違いない。

墓31 (図54)

墓30の南、約1mのところに位置する。長径1.15m、短径0.8m、深さ0.6mほどを測る長方形の土壇である。上面東側に長径約0.2mの平たい標石がある。また底面中央やや北よりのところから銭貨が出土したが、非常に遺存状態は悪く取り上げ時に崩壊してしまった。

墓32 (図54)

墓31の1mほど南に位置する。長径1.15m、短径0.8m、深さ0.55mほどを測る長方形を呈した土壇である。壁は傾斜し、とくに北壁は傾斜角度がきつい。遺物は出土していない。

墓33 (図54、図版20)

墓32の南1mのところに位置する土壇で、長径1.1m、短径0.85m、深さ0.45mを測る長方形のものである。上面には長径0.3~0.45mほどの礫が口字状に、上場に沿って密に組まれている。遺物は出土しなかった。

墓34 (図54、図版20・24)

墓36の北0.5mに位置する。掘り下げ時には確認ができなかったが、礫の状況から鑑み、本土壇が西側にある墓35を切っていると考えられる。長径1.2m、深さ0.7mほどを測るほぼ長方形のもので、短径は1.0mほどはあったであろう。上面南半に0.1~0.35mの礫がおかれ、もっとも南の平石は壁に寄りかかるような状態で出土した。東壁のほうが大きい礫で、その下はテラス状の平坦面がつくられる。南東隅近くの底面からやや浮いたところで、5枚が接着した銭貨(C39)が出土した。

墓35 (図54、図版20)

墓34に切られ、残存値で長径0.95m、短径0.85m、深さ0.55mを測るやや方形に近い土壇である。北西隅から径約0.25mの礫が出土したほか、埋土中から土師器杯片(152)が出土した。

墓36 (図55、図版20・24)

墓34の南0.5mに位置する土壇。南側は肩を確認しきれずやや掘り下げてしまったが、残存値で長径0.75m、短径0.6m、深さ0.3mほどを測る、長方形を呈したものである。土壇上面東寄りに径0.3mほどの礫があった。また、土壇北東部からまとめて総数22点の銭貨が出土したが、底面にほぼ接するもの(C44~C46・C56~C61)や0.1mほど浮くもの(C41~C43・C47~C55)などがある。銭貨の出土数は本中世墓群の中でもっとも多いが、このなかには脆いものが多かった。その内訳は、洪武通寶7、祥符元寶5、祥符通寶2、祥符寶1、不明7点となっており、洪武通寶の占める割合が高い。

なお、南側に隣接する墓37との切り合い関係は把握できなかった。

墓37 (図55、図版20)

墓36に南接し、長径1.0m、短径0.6m、深さ0.6mほどを測る長方形のものである。墓36よりひとま

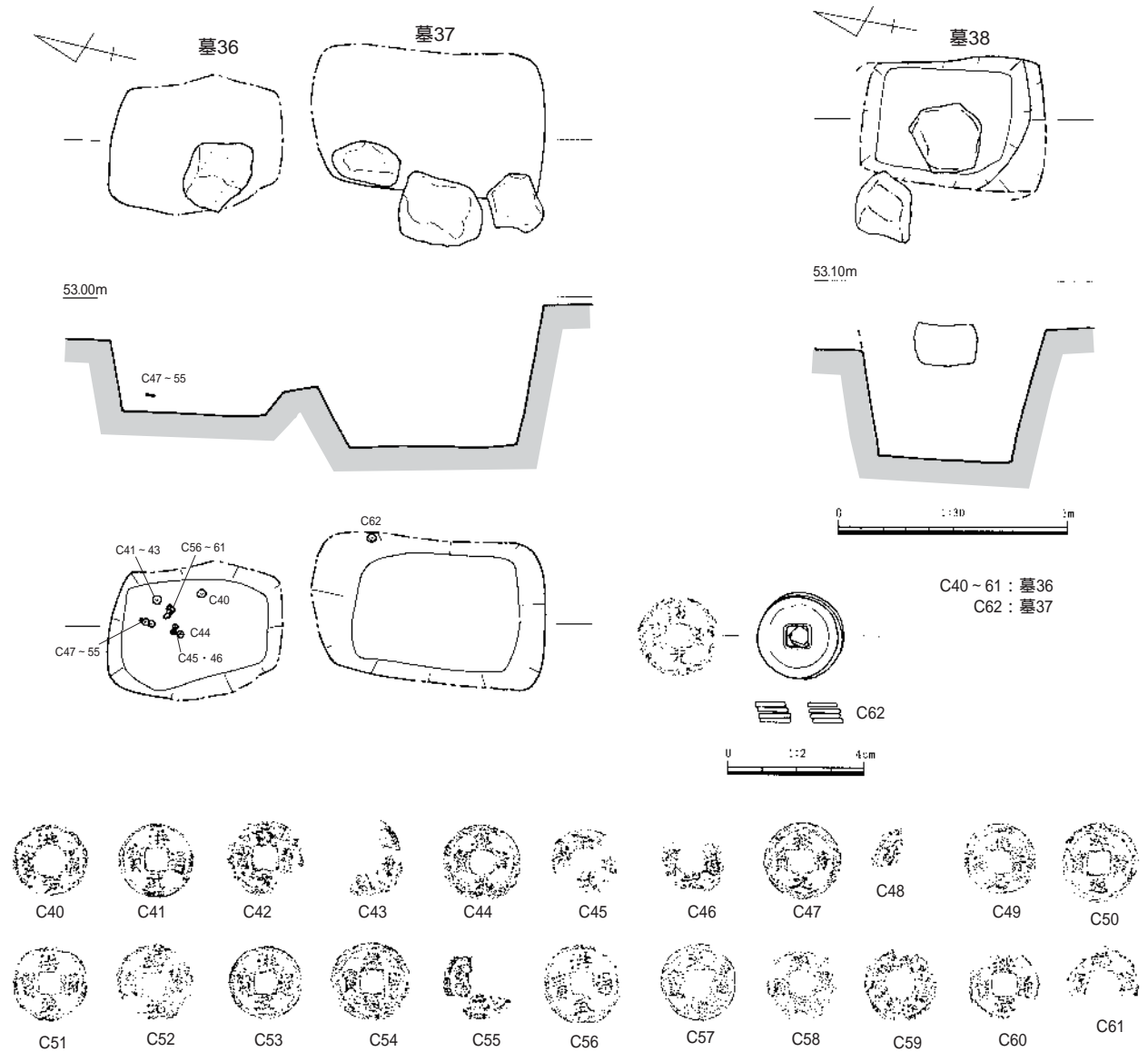


図55 墓36～38

わり大きく、0.15mほど深い。上面東側に径0.25～0.35mの礫が3個並ぶ。また土壙内北東隅には4枚が接着した銭貨（C62）があった。

墓38（図55）

墓31の西にある土壙で、西側上場は確認できず、少し掘り下げてしまった。残存値では長径0.8m、短径0.6m、深さ0.6mを測る。土壙上面には径約0.3mの礫があり、北東隅にも同規模のものがある。遺構内から遺物は出土していない。

2群 (図64)

丘陵上に展開する中世墓群を2群とする。調査区ではG3・4・5区が相当するが、G3区にまとめて検出された。ただ、G3・5区は後世の耕作に伴う削平を大きく受けているため、そのほとんどが土壌底面近くしか遺存していない。またG4区においても数基確認できているが、近世以降の墓に切られており、実態はつかみきれていない。近世墓の中で時期不明としたものには、本期に属するものも含まれている可能性は考えられよう。

墓39 (図56、図版21)

L10グリッドと墓域からかなり離れたところに位置する。長径1.05m、短径0.85mほどを測る不整な長方形を呈した土壌である。深さは0.1mに満たないほどしか残っていない。また、遺物も出土していないが、埋土が他の墓と同様であること、さらに土壌規模も類似することから墓と考えた。

墓40 (図56、図版21)

墓45の2.0mほど北東に位置し、長径1.75m、短径1.25mを測る大型の長方形土壌である。深さは残存値で約0.15m。長軸が東西方向を向く点で、他の遺構と異なるが、埋土から中世墓と判断した。遺物は出土していない。

墓41 (図56、図版21)

墓42の東2.0mほどのところに位置する。長径1.0m、短径0.6mほどを測る長方形を呈した土壌で、残存する深さは0.1mであった。遺物は出土していない。

墓42 (図56、図版21・24)

墓41の西2.0mほどに位置する。長径1.05m、短径0.8mほどを測る長方形を呈した土壌で、残存する深さは0.1mである。遺物は底面中央やや西よりのところから、6枚の銭貨(C63~C67)がまとめて出土したほか、底部北側からは下顎歯がみられた。この歯の出土状況からみて、埋葬体位は頭位を北にした右側臥屈葬であった可能性が考えられる。

墓43 (図56、図版22・24)

墓44の北西0.5mに位置し、長径1.35m、短径0.9mほどを測る長方形を呈した土壌で、深さは約0.15mであった。底面中央からは6枚が接着した銭貨(C68)が、底面に置かれたような状態で出土した。このほか釘が2点(F2・F3)みられたが、このことをもって木棺により埋葬されたものかは判断できない。また、南西隅からは土師質の土器細片が出土している。

墓44 (図57、図版21・24)

墓43の南東0.5mに位置し、上面に標石として置かれていた0.25~0.35mの礫が、土壌内床面近くまで落ち込んだ状態で出土した。床面では北側から歯牙、南西部からは大腿骨片が出土し、埋葬方法は北頭位の右側臥屈葬であったと推定される。また中央部には径10cmほどの漆器皿の痕跡である漆塗膜がみられ、その上に6枚が接着した銭貨(C69~C73)が置かれていた。土壌内縁辺部からは釘が26

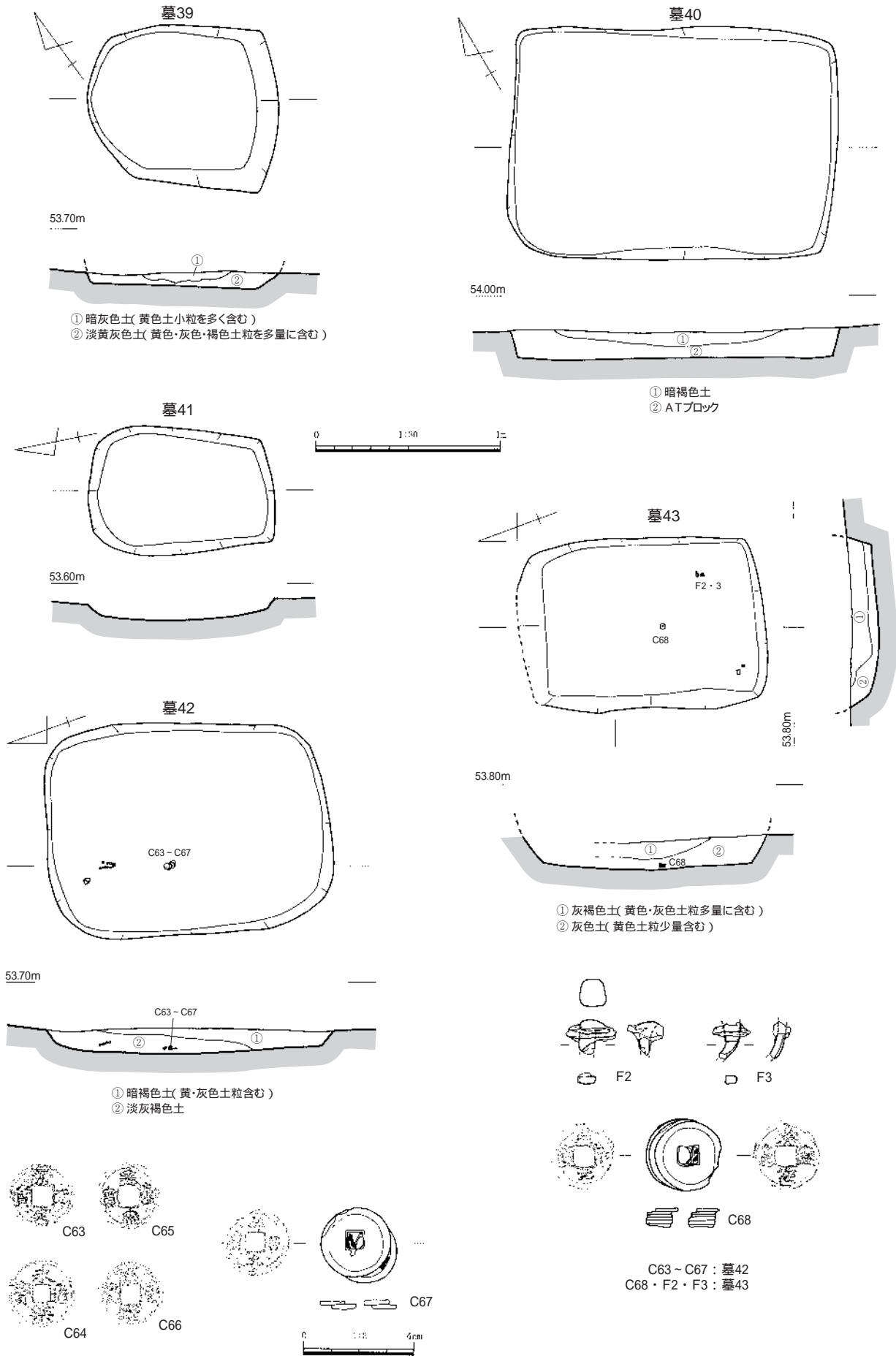


図56 墓39～43

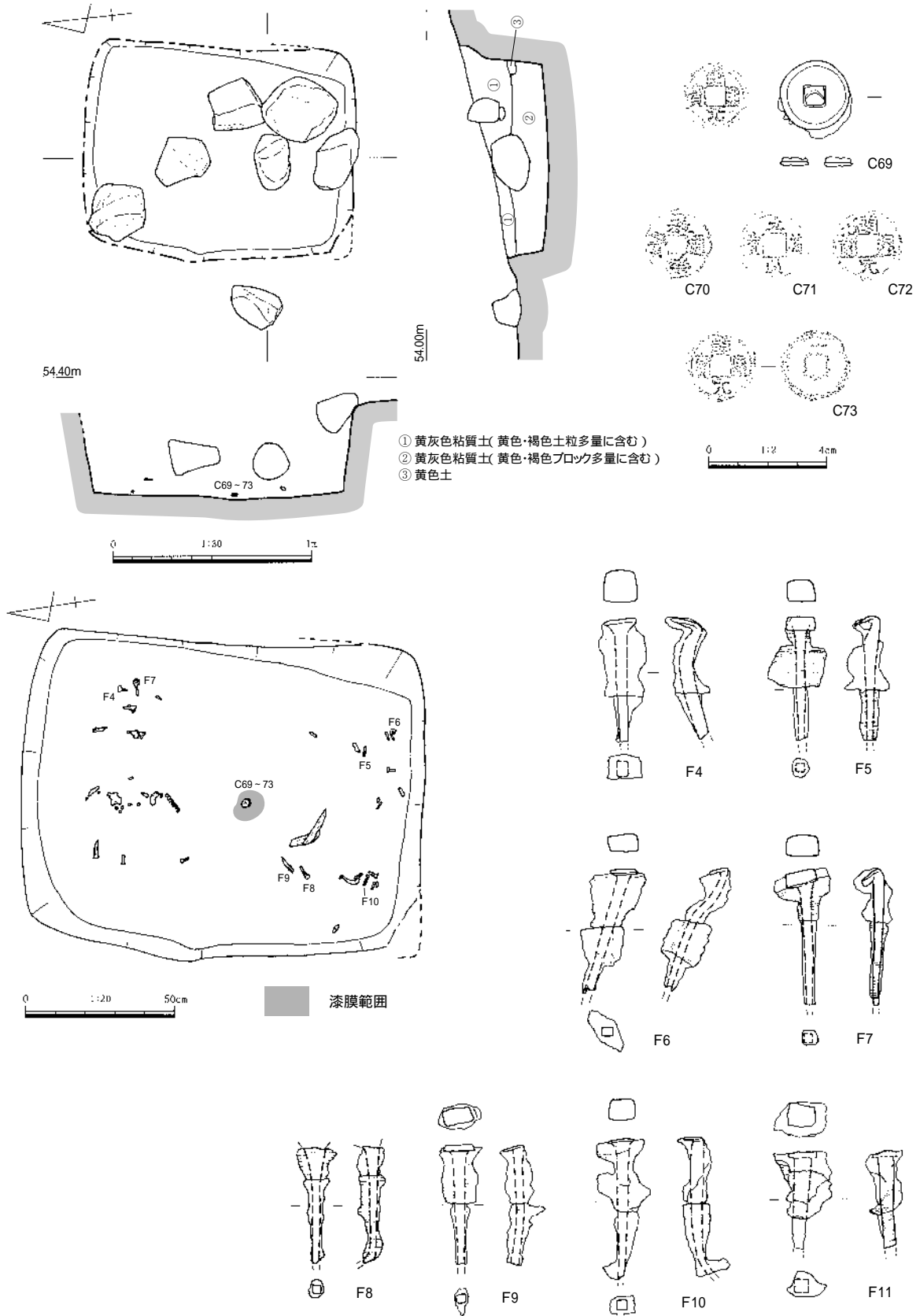


図57 墓44

点出土しており(F4~F11ほか)その範囲から長径1.0m、短径0.6mほどの棺であったと考えられる。

墓45 (図58、図版22・24)

墓46の北0.5mのところを位置し、長径1.2m、短径0.85mほどを測る長方形を呈した土壌である。残存する深さは0.45mで、上層にはブロック状の土があり、土壌内に落ち込むような堆積をしている。底面北東部に歯牙があり、その西側からは接着した6枚の銭貨(C74・C75)が床面上に置かれるような状況で出土した。また釘が土壌内四隅から出土している(F12~F17ほか)。その在り方からみると、棺は土壌より一回り小さい長径0.95m、短径0.65mほどのものであったと推定される。そしてその中に、頭を北にした臥葬の遺体があったと考えられる。

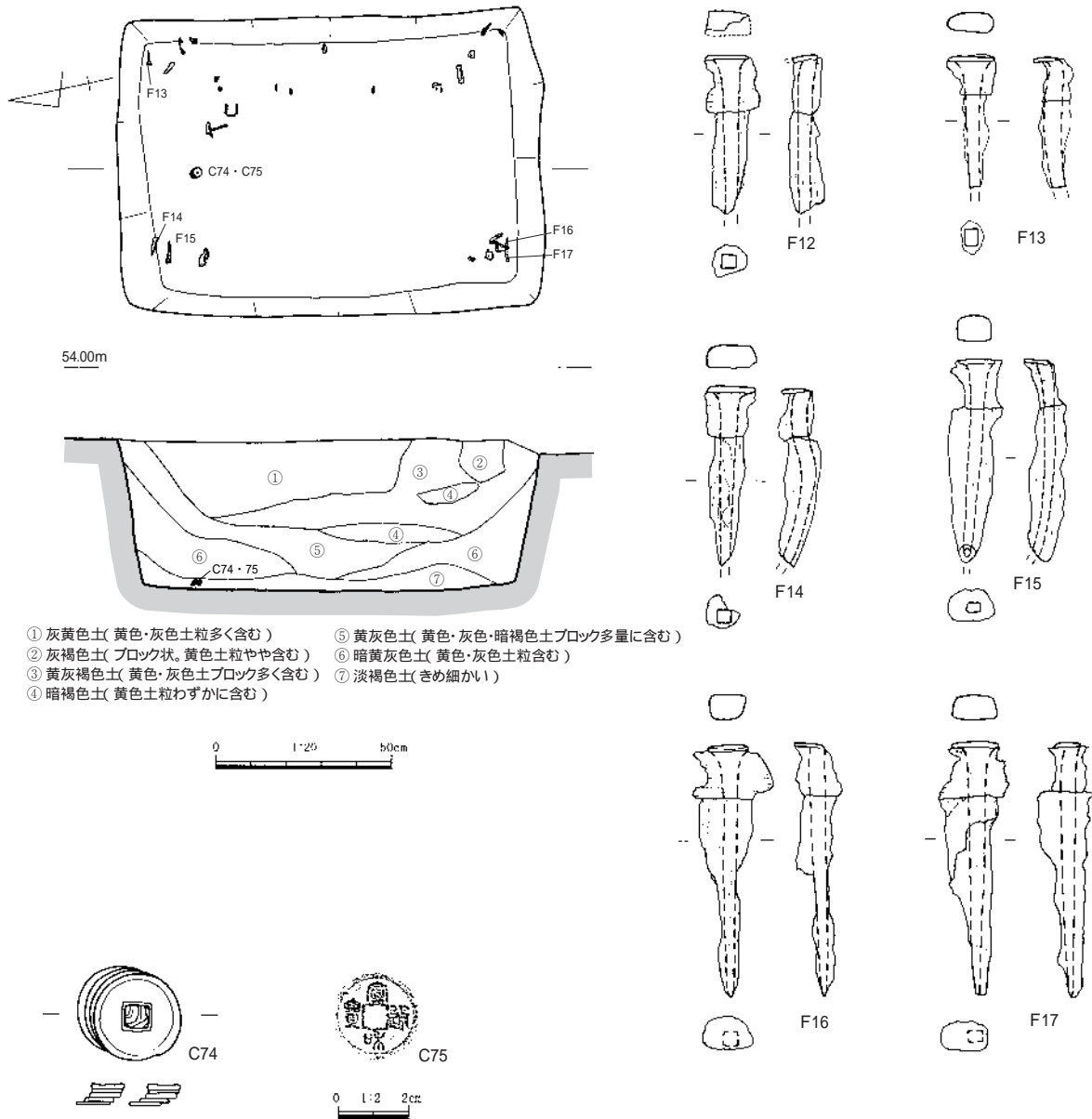


図58 墓45

墓46 (図59、図版22・24)

墓47の北にほぼ接するが、近世墓域を区画する溝に切られているため、墓との切り合い関係などはわからない。また後世の掘削により上面は大幅に削平を受けている。長径1.25、短径1.2mとほぼ方形を呈した土壌である。残存する深さは0.3m。底面には中央北側から歯牙が出土し、そのすぐ西側には15cmほどの範囲で漆塗膜があった。この上、および北側に銭貨(C76~C78)が散布していたが、

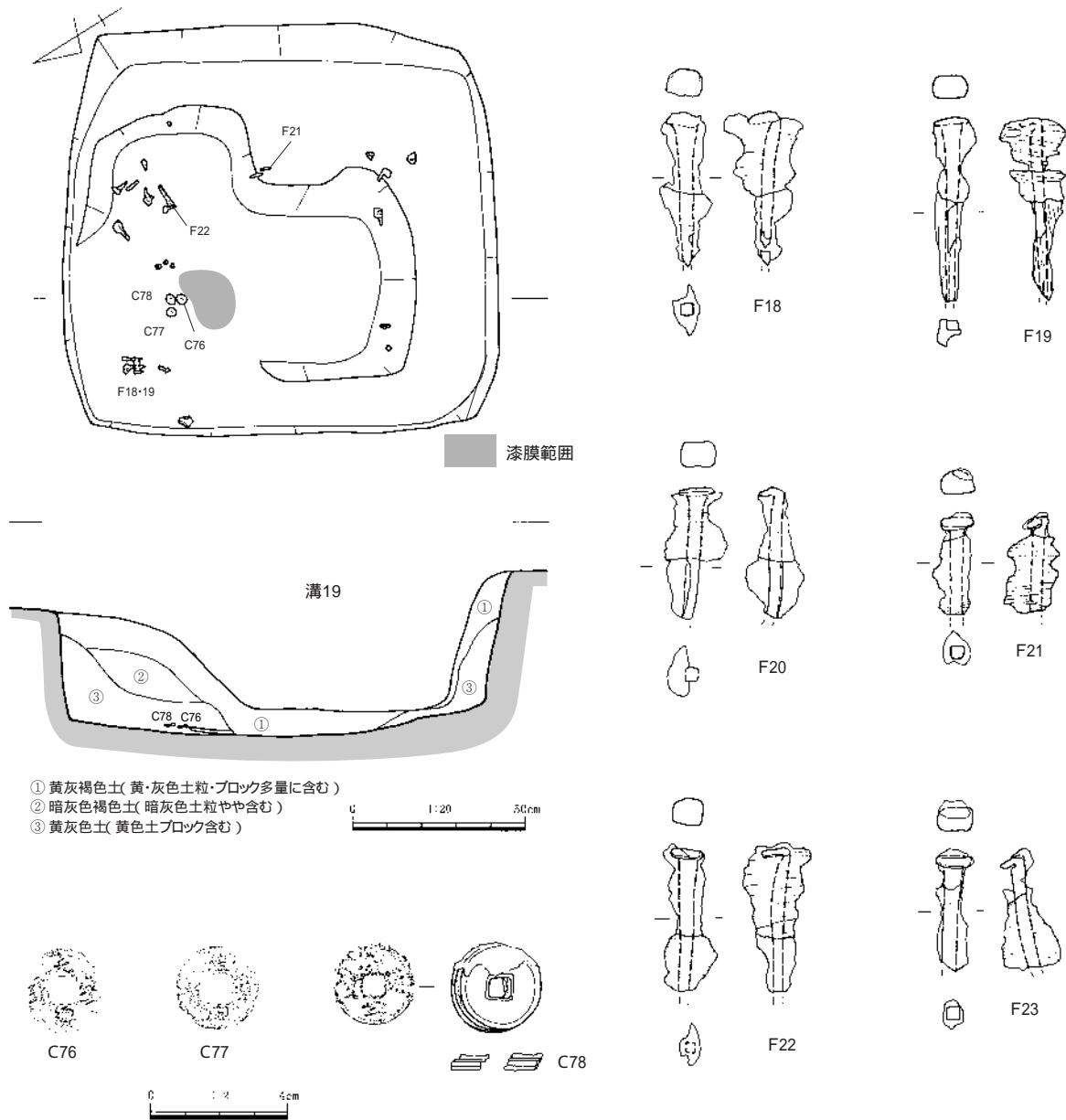


図59 墓46

この状況から漆器皿上に銭貨が置かれていたと考えられる。

また底面は中央から北側にかけて、一段5cmほど掘り窪まれている。北東部が突出したやや不定な形を呈するが、釘の分布範囲がこの掘り窪まれた範囲と重なることから、棺の設置に伴うものと考えられる。そこから、棺の法量は長径1m、短径0.7mほどと推定される。

墓47 (図60、図版22・24)

墓46の南側にほぼ接してある。北東部はG3・4区の境界であり、墓域を区画する溝、および後世の開発に伴う削平を受けている。そのため残存値で長径1.35m、短径0.9mを測り、復元すると長径1.5m、短径1.0mほどであったと考えられる。深さは約0.4m。遺物はいずれも底面より浮いており、中央からは5枚が接着した銭貨(C79)、北側からはほぼ正位で京都系土師器皿(153)が出土している。また、土師器の北側および南西隅からは釘がまとってみられる(F24~F26ほか)。

第5章 G区の調査

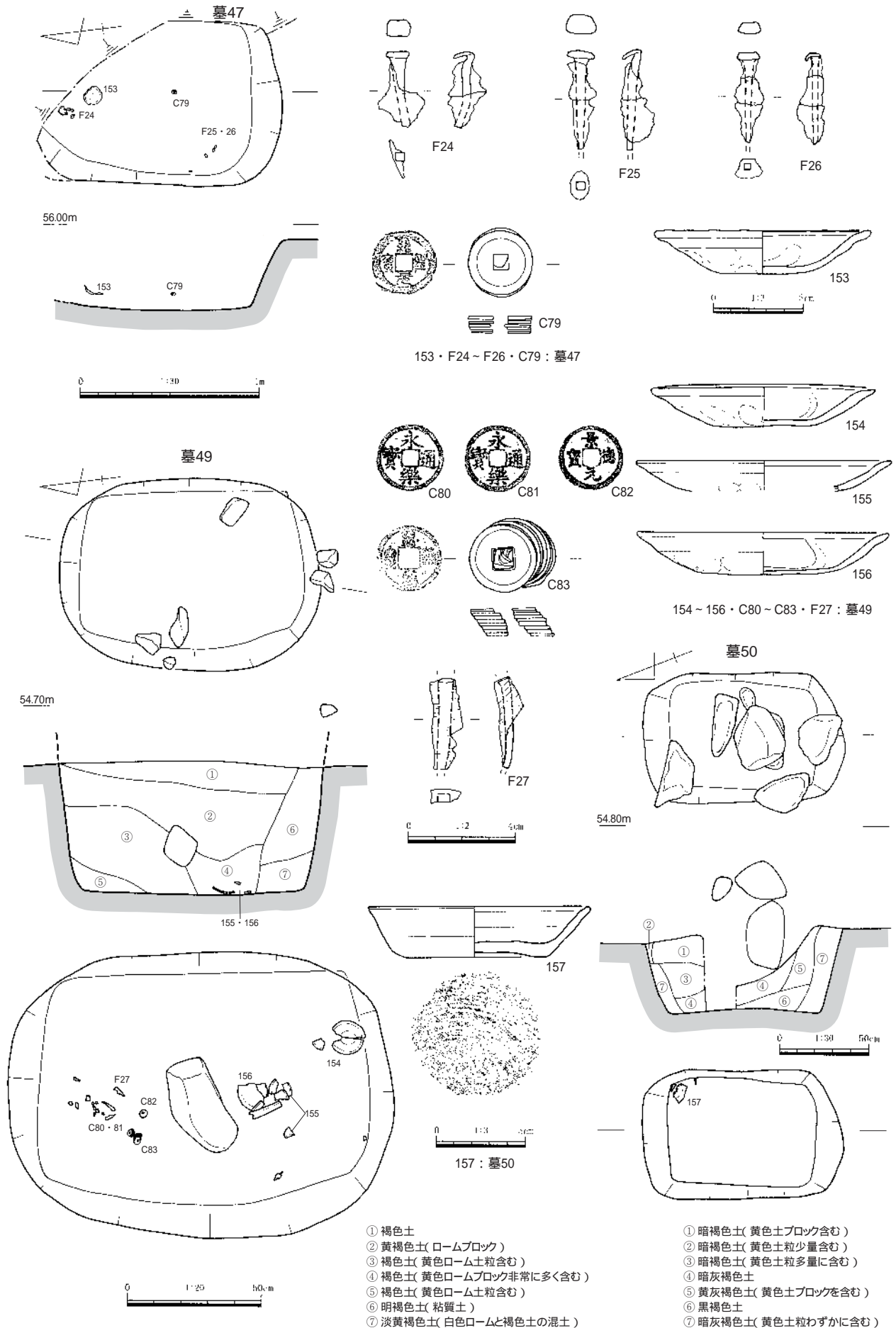


図60 墓47・49・50

墓48 (図61、図版22)

墓47のすぐ東に位置し、近世墓域を区画する溝に大幅に切られた土壌である。残存するのは北東および南西隅部であり、そこから推定される大きさは長径1.3m、短径1.05m、深さは0.3mほどの長方形を呈したものである。遺物などは出土していないが、溝に切られることから墓47などと同様の時期と判断した。

墓49 (図60、図版23)

墓47の南に位置し、長径1.45m、短径1.1m、深さ0.75mほどを測る長方形の土壌である。検出面より0.2mほど上層を中心に径0.15mほどの礫がいくつかみられたほか、土壌内中央には径0.35mの大型礫がある。おそらく標石としてあったものが落ち込んできたのであろう。床面には北側に人骨頭部、中央やや南に大腿骨片が出土しており、埋葬体位は顔を西へ向けた右側臥屈肢葬であったと考えられる。この大腿骨片の下側から口縁を下にした京都系土師器皿が2点(155・156)出土したほか、もう1点(154)は南壁近くの床面より浮いたところからみられた。また銭貨が頭蓋骨の南側からまとまって出土した。総点数は12点で、9点が接着したもの(C83)とその脇から出た2点(C80・C81)はもともと一緒に積まれていたものと考えられ、やや離れたところにある1点(C82)については、一連のものかどうかはわからない。

墓50 (図60、図版23)

墓53の西側約2mに位置する。長径1.1m、短径0.7m、深さ0.45mほどを測る長方形を呈した土壌である。上面には標石として径0.3mほどの礫が7個置かれていた。土層断面をみると中央部に土が落ち込んでいることが観察できるほか、壁に沿うような堆積は棺の裏込めであったと考えられる。このことから長径0.6mほどの棺であったと推定できよう。遺物は北東隅から壁に接して土師器杯(157)が出土した。

墓51 (図61、図版23)

G4区南西隅で、現代の農道法面に接する。長径1.25m、短径1.05m、深さ0.7mほどを測る長方形の土壌である。上面には径0.15～0.35mの礫が密に置かれており、その中に火輪(S8)も混じる。他の部材がないことから、この火輪は他の礫と同様に標石として置かれたものと考えられる。土壌内から遺物は出土していないが、人骨も遺存しておらず、礫の在り方および土壌形態がG5区の墓21に類似することから本期と判断した。

墓52 (図61、図版23)

G4区南東隅にあり、東半は後世の造成により削平され、西側は墓129に切られる。長径2.1m、短径0.85mを測り、深さは0.4mと浅い。底面南には長さ0.65mの直方体的な礫があり、また北には長径0.45mを測る平石が床面からやや浮いた位置で出土している。その状況からみれば、南側の礫は床面に置かれたもので、北は標石として土壌上面にあったと考えられよう。南の角柱状礫は供物などを置く台であったのであろうか。土壌形態から伸展葬であったと考えられる。墓129に切られることから18世紀後半以前であるが、遺物が出土しておらず時期特定はできない。ただ、土壌形態

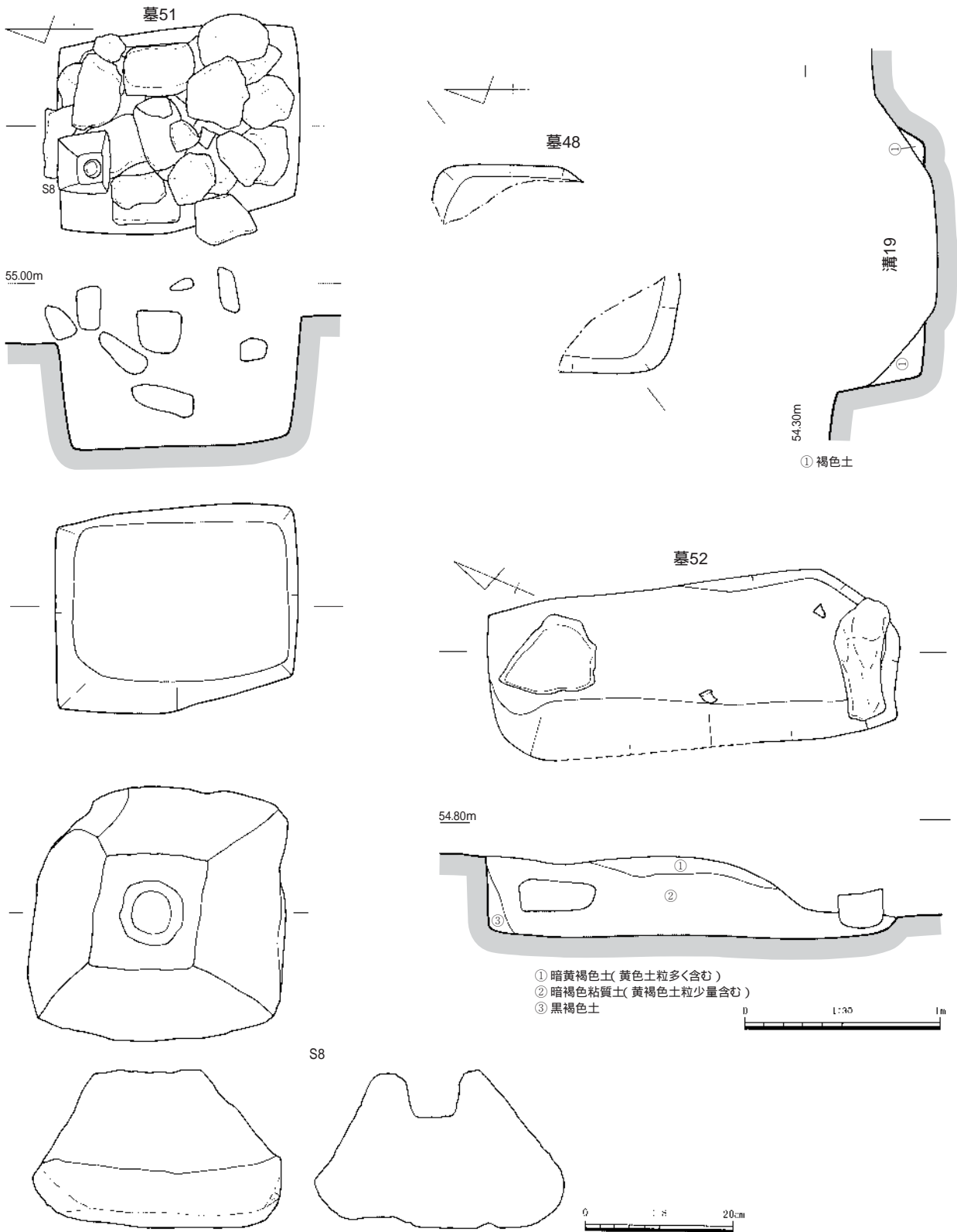


図61 墓48・51・52

から近世墓ではないと判断し、ここに含めた。

墓187 (図63、図版62)

G 2 区、墓188の北に位置する。長径1.05m、短径0.75mを測る長方形を呈した土壌で、上面は後世の造成などにより掘削されているが、残存する深さは約0.25mである。底面北側から壮年から熟年の

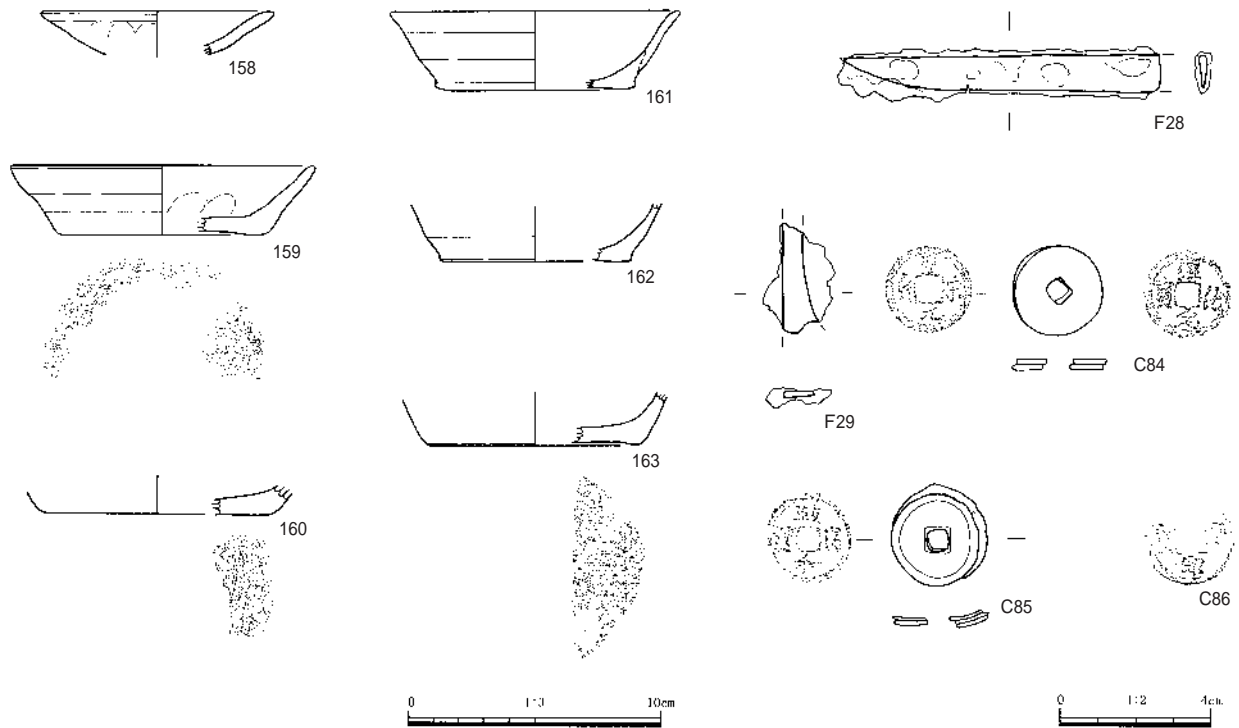


図62 G5・G3区中世墓周辺遺構外出土遺物

性別不明の歯牙が出土した。土壌検出地点が近世墓域外であったこと、人骨の遺存状況や出土状況からみて本期に属すると判断した。

墓188 (図63、図版62)

G2区に位置する土壌で、トレンチにより東半分を欠失している。ほぼ南北に長軸をとる長方形を呈したものと考えられ、長径0.9m、短径は残存値で0.3mを測る。深さは0.35mで、南側には上面より0.2m下がったところに小さなテラス状の段をもつ。また長径約0.2mの礫が、北側壁面に寄りかかるようにあったほか、底面ほぼ中央には土師器皿(164)が出土した。内面には白色の粉末状のものが塗布されているような状態であったが、その成分等は不明である。

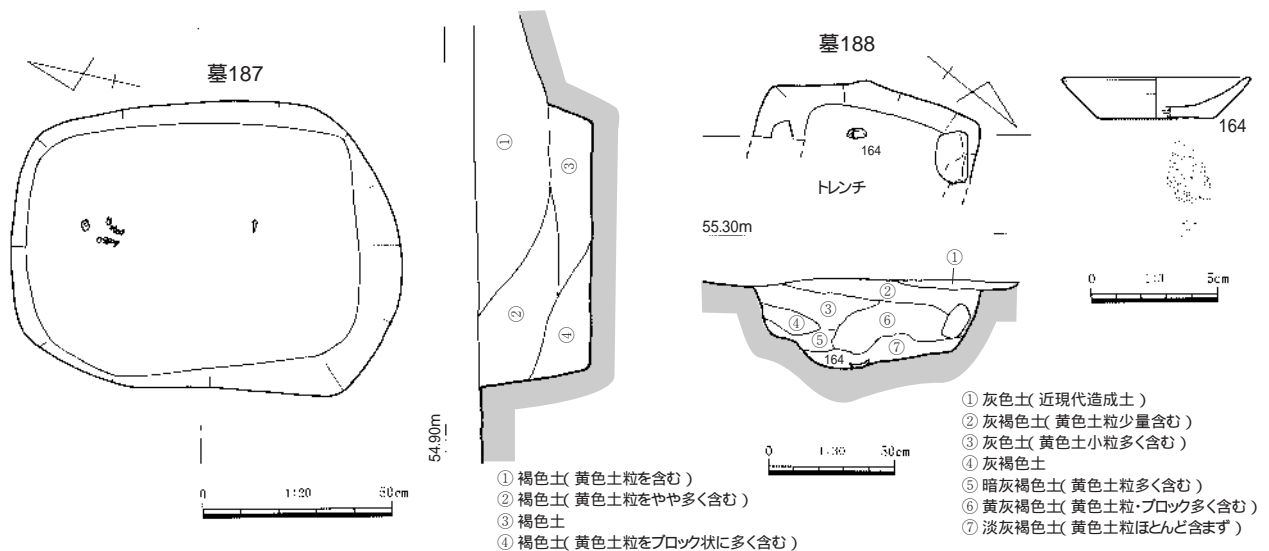


図63 墓187・188

3. 近世墓の調査

近世墓はすべてG 4区内に位置している(図41・64・65)。G 4区表面には多数の礫が調査前から見られており、表土を若干取り除いた段階で50箇所以上の礫集積が確認された。この下から近世の土壌が検出されたため、これらの礫集積は近世墓に伴う標石と認識した。本来の遺構掘り込み面は標石下面であったと推定されるが、この面での遺構検出は困難であったため、標石を取り除いた後に、遺構検出のため10cmから30cmほど表土を掘り下げた。

土壌は計136基が検出された。多数の土壌がわずかに約390m²の狭い区画内に集まっているため、遺構密度が非常に高く大部分の墓が切り合い関係をもつ。特にG 4区中央は多数の墓が密集し、切り合いも著しい(以下、墓密集域と呼ぶ)。こうした分布状況から、狭い墓域を長期間にわたって繰り返し使用したことがうかがえる。

墓域区画(図41・64~67)

G 4区は、農道に掘削される西側を除き、外周を溝や段切りによって区画している(図41・64)。溝はいずれも調査時には埋没していたが、段切りは調査時点でも残っていた。G 4区の東側と南側に見られる区画溝の埋土はいずれも近世以降に堆積したもので、東側の溝(溝19)と北側の段切りがG 3区の中世墓を切っている。このため、この区画は中世墓造営以後、近世のある段階につくられたと考えられる。ただし、区画をつくってからその内に近世墓が展開しはじめたのか、それともすでに展開していた近世墓の墓域の境界を区切るために後で区画をつくったのか、いずれの前後関係になるのかは土層からは判断できない。

南側の区画溝(溝17・18)は一回深く溝(溝17)が掘られた後に、同じ場所にそれより少し浅い溝(溝18)が掘りなおされている(図66)。したがって、比較的長い期間この区画溝が存在していたことは確かだろう。この溝の中からはG 4区の上面に散乱していた陶磁器と接合する破片が多く出土している(図72~74、表1参照)ほか、瓦質土器の破片(図67:165)が出土した。東側の溝19からもG 4区上面出土の陶磁器と接合する破片がいくらか出土したほか、銅銭3枚が固着したもの(図67:C87)が出土した。

G 5区にも近世以降に掘削された大きな溝が見られる(溝20:図41・66参照)。ただしこの溝が近世墓群と関連があるかどうかは不明である。この溝も掘りなおし(溝21)が行われている。溝20から染付盃(図67:166)が出土している。G 4区から転落したものであろうか。

標石(図64、図版25・26)

標石はG 4区のほぼ全面に広がっている(図64)。現状では、標石の並びには明瞭な規則性は認められないが、列状や円弧状に連なる部分をいくつか確認できる。そして、こうした標石列に沿って礫の空白帯も何本か認められるので、これらが墓域内の通路となっていたことがうかがえる。標石に利用されているのは、人頭大程度から一抱え以上の大きさがある角閃石安山岩の垂円礫ないしは円礫である。地山礫としても見られる礫種であるが、角が取れているものが多いので、河川等で採取されたのであろうか。なお、個別の墓の説明の際に後述するが、自然礫以外に五輪塔や石塔の部材が用いられたものも3例だけ見つかっている。

標石は大半が数個から十数個の礫を集めてつくられている。なかには、方形状にしっかりと礫を組

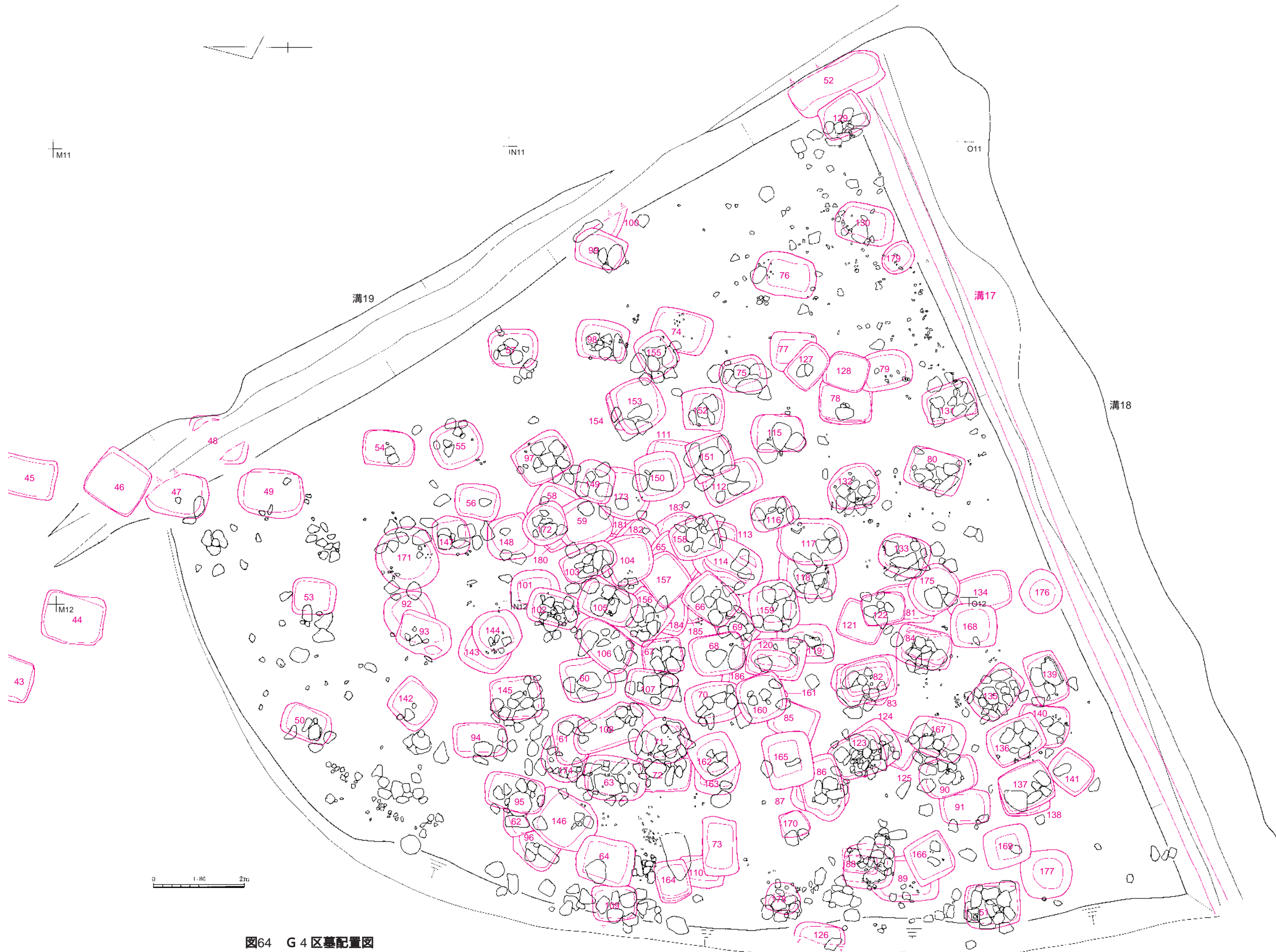


図64 G4区墓配置図

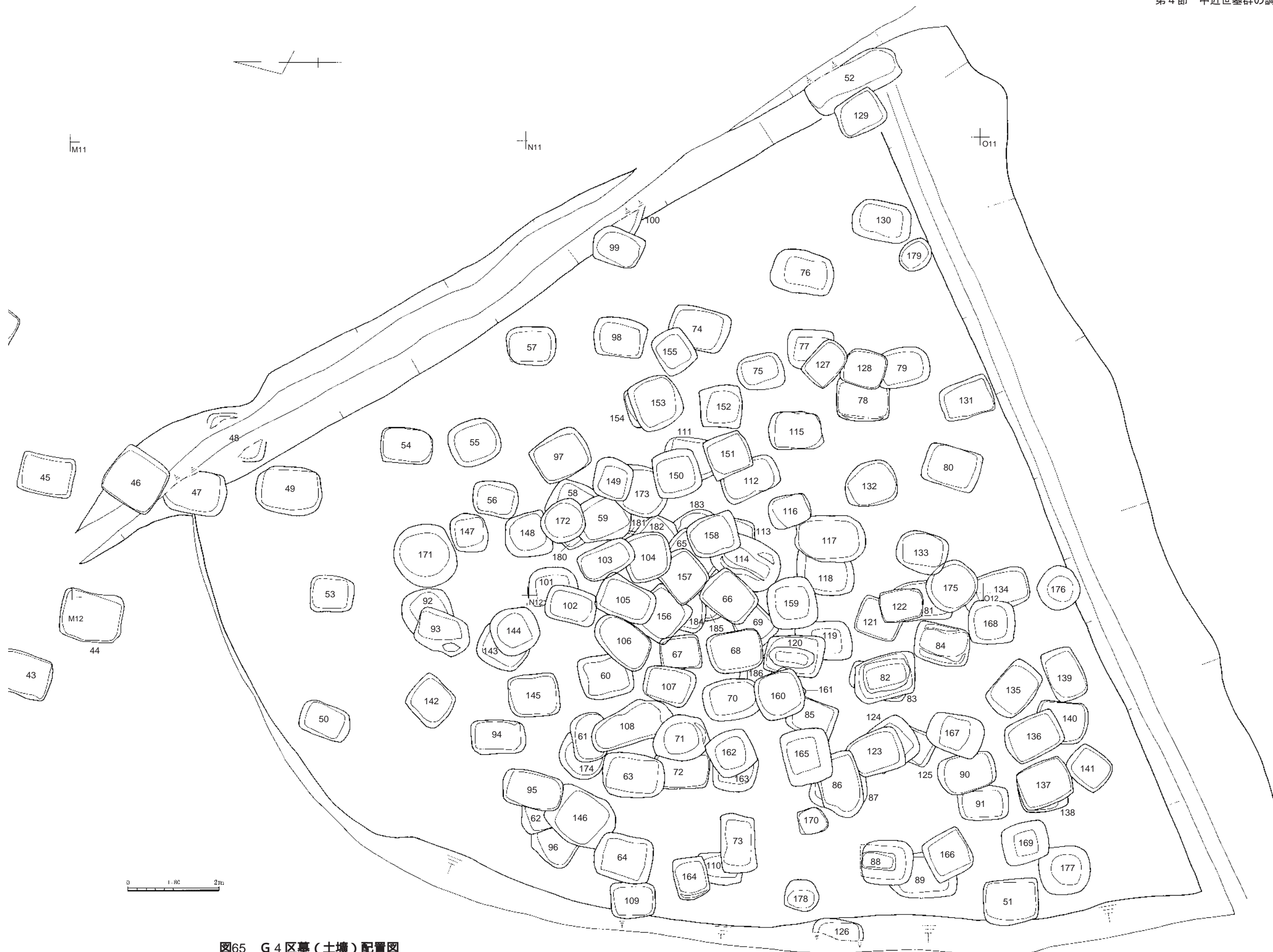


図65 G4区墓(土墳)配置図

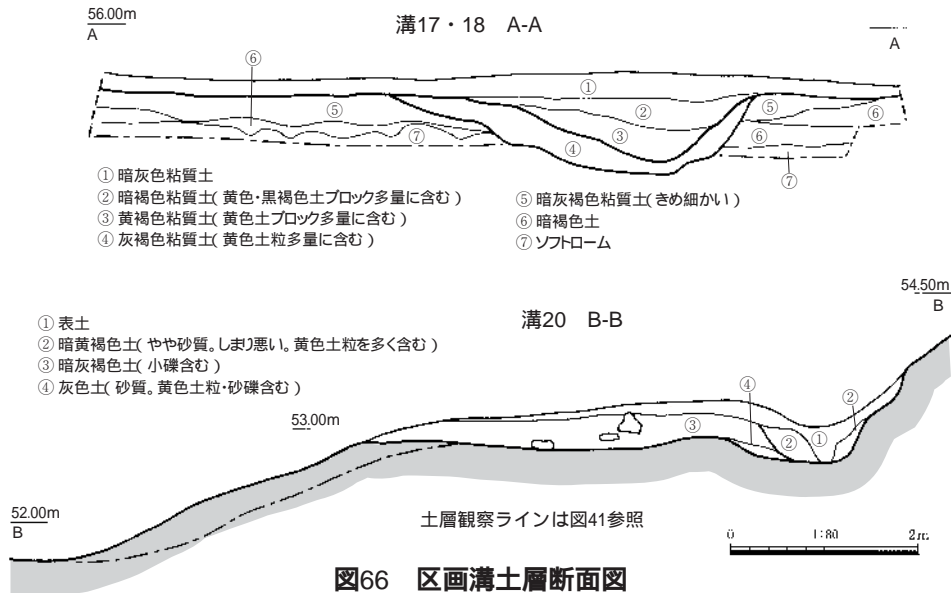


図66 区画溝土層断面図

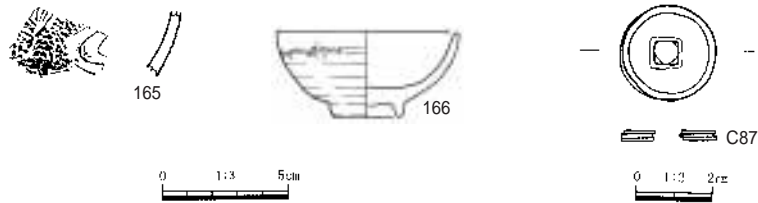


図67 区画溝出土遺物

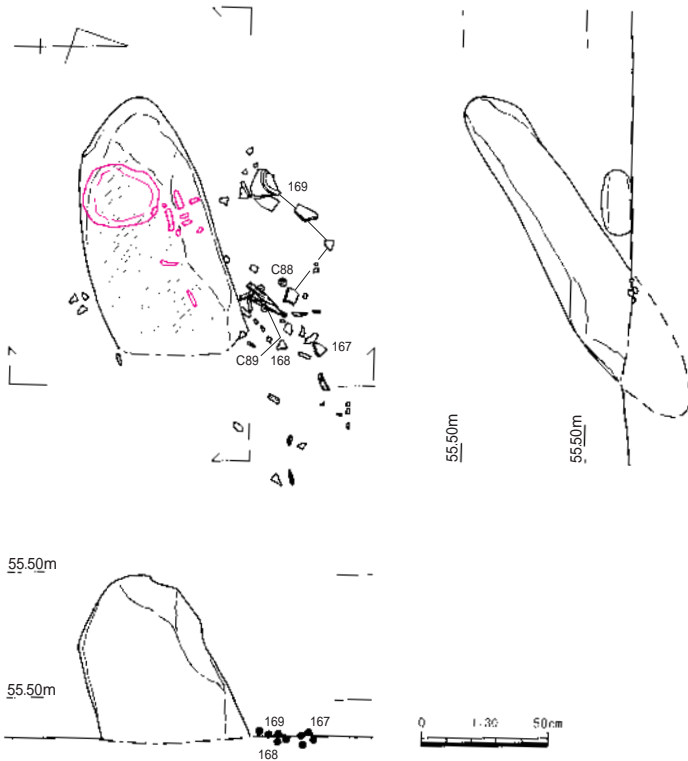
んだものもいくらか見られるが、大半はさほど整然とした礫の組み方ではない。比較的形状の整った標石が見られる一方で、礫が大きく分散するなど、明らかに本来の標石の状態が崩れてしまったものがある。これらを標石下から検出した土壌との関係で見ると、古い土壌には形状を崩している標石が伴う場合がほとんどで、標石そのものが見られないことも多い。こうしたことから、すでに墓の標石として並べられていた礫を二次的に移動して、新しい墓の標石として再利用していた場合があったことが考えられる。G 4区表面の礫全体のあり方を見た場合に、墓の数に比して標石の数や礫の数が少ないのは、このような礫の再利用が頻繁に行われていたからだろう。また、集石の下に土壌が伴わないものがいくつかあり、これらも「片付け」などで二次的に移動されたものと考えられる。

なお、礫集積による標石とは異なる大型の立石が1つ見つかっている。

立石1 (図68、図版26)

G 4区西縁部の中央付近に位置する大型の石塔状の立石である。立石は粗粒質の角閃石安山岩を長さ約1.5m、幅約0.5mの板状に成形加工している。基部を地中に突き立てているが、掘り込みは確認できなかった。地中に埋まっている部分は浅く、そのためか西側に大きく傾いている。また、立石の西側には平石が台石状に置かれている。

立石の周辺(特に南側)は礫分布の空白地となっており、ここから先述の礫空白帯が東や南東に向かって延びているので、この空白地が墓域の入り口のひとつであった可能性が考えられる(図64参照)。この場合、立石は三界万霊塔のような墓域の境界石として機能していた可能性が考えられる。



周辺から焼骨片約20点が集中して検出されたので、立石を中心に火葬骨の散布ないしは集積が行われた可能性がある。ほかに、周辺から京都系土師器皿（167・168）、唐津陶器片口鉢（169）、銅銭（C88・C89）などが出土しているが、この立石に対して供献されたものかどうかは不明である。

図68 立石1

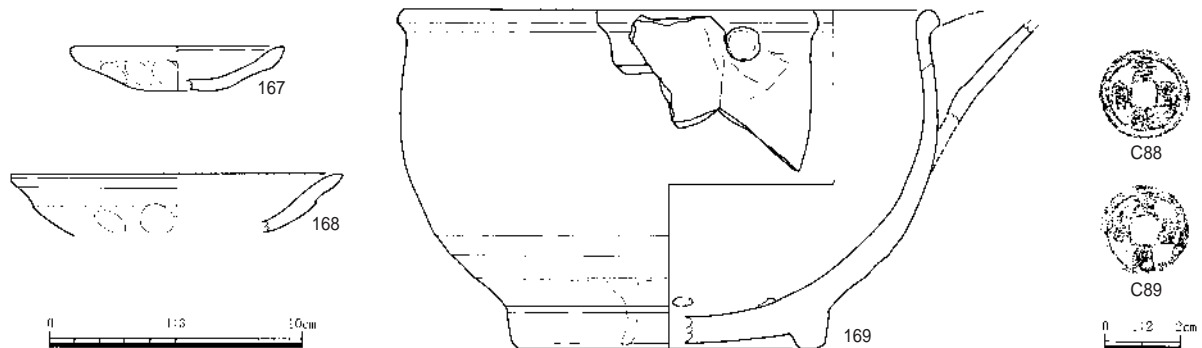


図69 立石1周辺出土遺物

標石周辺出土遺物（図70～77、表1、カラー図版3・4、図版63・64）

標石の検出された面からは土器、陶磁器を中心に、銭貨、煙管、鉄製品などの多数の遺物が見つかっている（図70～77、表1）。その大半は表面に露出している状態であった。陶磁器などは本来土壌上面の標石に供献されていたと推定されるが、その大半は破片となって広い範囲に散乱している（図70）。表面のみならず、同一個体の破片が土壌内から出土したのも見られる。長期にわたる墓地の利用によって、これらの土器類は二次的に移動したのであろう。ごく一部に原位置を保っていると判断できる遺物も見られたので、これらについては標石に伴うものと判断して、個別の墓の報告の際に記述する（表1参照）。確実に原位置ではなくとも、破片の分布にある程度のもたまりがある個体も見られるので、これらは本来、最も破片の集中する標石に伴っていた可能性がある（図71・表1）。また、銭貨や煙管などは、本来墓の副葬品として土壌内に埋納されていたものが、別の土壌の掘削時に掘り返されて表面に露出したものが大半と考えられる。

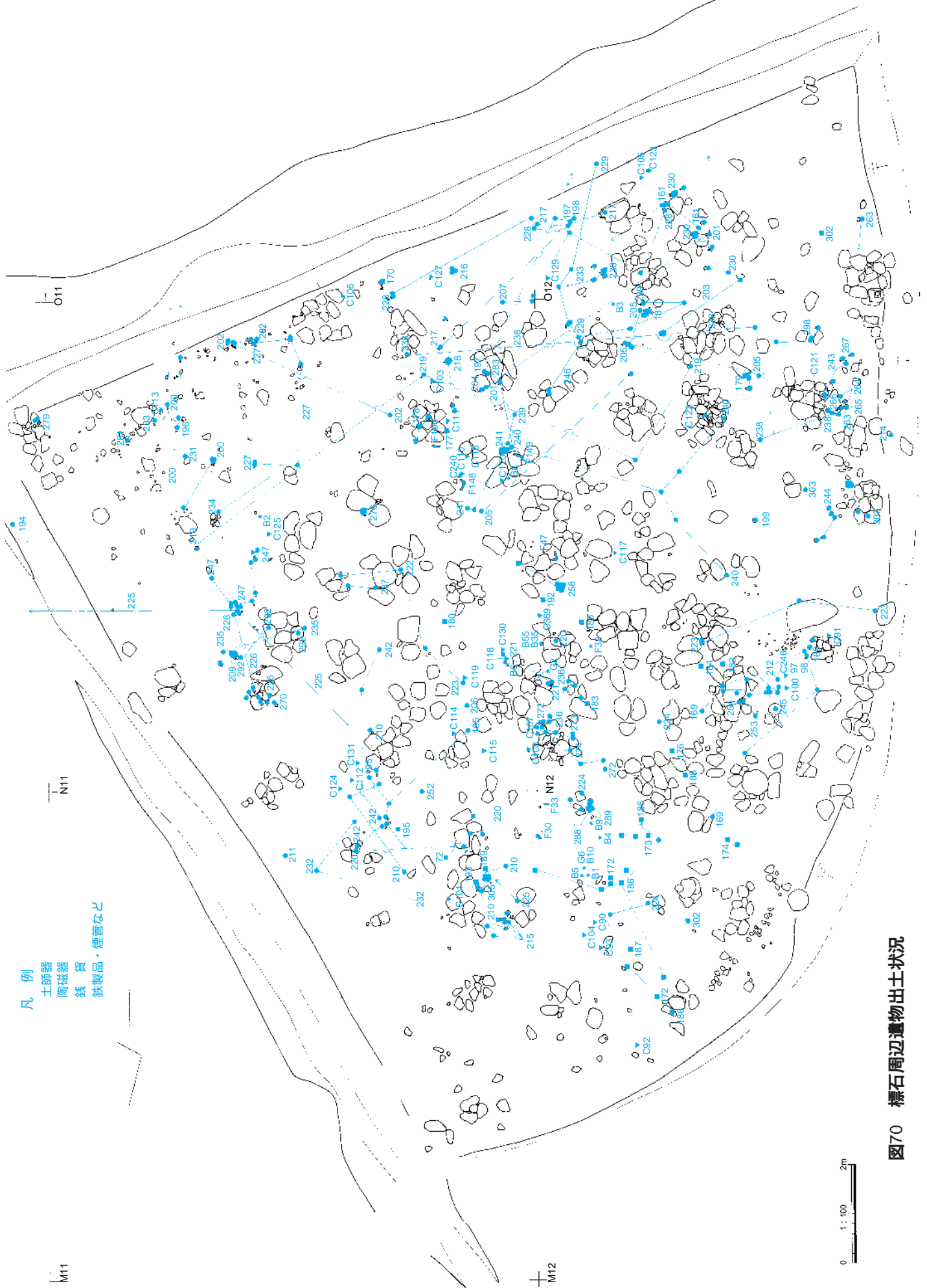


図70 標石周辺遺物出土状況

表1 標石周辺遺物出土位置一覧

掲載No.	図面No.	種別	出土位置
167	69	土師器 皿	立石1周辺
168	69	土師器 皿	立石1周辺
169	69	陶器 片口鉢	立石1周辺・墓63・墓72・墓146・墓164・墓63上 他
170	71	土師器 杯	墓132上周辺
171	71	土師器 杯	遺構外
172	71	土師器 杯	墓92上周辺 他
173	71	土師器 杯	遺構外
174	71	土師器 杯	遺構外
175	71	土師器 杯	墓126上周辺
176	71	土師器 杯	墓61上周辺
177	71	土師器 杯	墓132上
178	71	土師器 杯	墓132上
179	71	土師器 杯	遺構外
181	71	土師器 杯	墓135上周辺
182	71	土師器 皿	墓63上周辺
183	71	土師器 皿	墓106上
184	71	土師器 皿	墓71上周辺
185	71	土師器 皿	墓67上周辺
186	71	土師器 皿	遺構外
187	71	土師器 皿	遺構外
188	71	土師器 皿	墓145上周辺
189	71	土師器 皿	墓147上周辺
190	71	土師器 皿	墓104上周辺
191	71	土師器 皿	墓109上周辺
192	71	土師器 皿	溝18・墓66上
193	71	土師器 皿	墓171上
194	72	陶器 碗	遺構外
195	72	陶器 皿	墓172上・墓97上周辺 他
196	72	陶器 皿	溝18 他
197	72	陶器 皿	溝18・墓175・墓133上 他
198	72	陶器 皿	溝18 他
199	72	陶器 皿	遺構外
200	72	陶器 皿	溝18・墓76上 他
201	72	陶器 皿	溝18・墓134・墓168・墓133上・墓136上
202	72	陶器 皿	墓80 他
203	72	陶器 皿	墓167・墓90上周辺・墓167上周辺 他

掲載No.	図面No.	種別	出土位置
204	72	陶器 皿	墓133・墓133上 他(G6区)
205	72	陶器 皿	墓134・墓150・墓84上 他
206	72	陶器 皿	墓59上
207	72	陶器 皿	墓175上 他
208	72	陶器 皿	遺構外
209	72	陶器 皿	墓98上周辺
210	72	陶器 碗	墓55・墓97・墓97上・墓171上・墓97上周辺 他
211	72	陶器 碗	遺構外
212	72	磁器 碗	墓5上周辺
213	72	陶器 小杯	墓148・墓147上
214	72	陶器 碗	墓126上
215	72	陶器 挿鉢	墓171上 他
216	73	磁器 皿	遺構外
217	73	磁器 皿	墓176 他
218	73	磁器 皿	墓132上周辺
219	73	磁器 皿	墓131・墓167上周辺 他
220	73	磁器 皿	墓147・墓55上・墓147上・墓156上 他
221	73	磁器 皿	墓157・墓102上・墓105上 他
222	73	磁器 皿	墓151・墓150上・墓151上・墓152上 他
223	73	磁器 皿	立石1周辺・墓71上 他
224	73	磁器 皿	墓60・墓93・墓143・墓144・墓142上 他
225	73	磁器 皿	溝16・墓74 他
226	73	磁器 皿	墓97・墓98・墓155・墓98上 他
227	73	磁器 皿	墓79上・墓127上 他
228	73	磁器 皿	溝18・墓134・墓135・墓80上・墓135上・墓140上 他
229	74	磁器 碗	墓165・墓168・墓135上 他
230	74	磁器 碗	墓168・墓136上・墓140上 他
231	74	磁器 碗	墓76上周辺
232	74	磁器 碗	墓171上 他
233	74	磁器 碗	墓86・墓135上周辺 他
234	74	磁器 碗	墓136上・墓140上・墓76上 周辺
235	74	磁器 蓋	墓155上 他
236	74	磁器 紅猪口	墓102上・墓106上・墓106上 周辺
237	74	磁器 紅猪口	墓151上・墓152上
238	74	磁器 小杯	墓86・墓80上・墓86上・墓88上 他
239	74	磁器 小杯	墓118上 他

掲載No.	図面No.	種別	出土位置
240	74	磁器 小杯	墓118上・墓123上・墓133上・墓160上・墓162上 他
241	74	磁器 瓶	墓117上・墓118上 他
242	74	磁器 碗	墓55上 他
243	74	磁器 碗	墓88上・墓89上
244	74	磁器 小杯	墓178上周辺
245	74	磁器 蓋	墓63上・墓63上周辺
246	74	磁器 小杯	墓134・墓175・墓84上・墓122上
247	74	磁器 小杯	墓74上 他

複数土壌内出土土器・陶磁器

248	77	土師器 皿	墓63・墓102・墓108
249	77	陶器 皿	墓63・墓108
250	77	陶器 皿	墓134・墓168

墓標石に伴う可能性の高い陶磁器

253	99	磁器 皿	墓63上・墓63上周辺
254	99	磁器 碗	墓63上
258	105	土師器 皿	墓66上
263	145	磁器 急須	墓88上 他
264	145	磁器 皿	墓88上
265	145	磁器 碗	墓88上
266	145	磁器 小杯	墓88上
267	147	磁器 小杯	墓89上
270	167	磁器 紅猪口	墓98上
272	174	陶器 德利	墓102上
273	174	土師器 皿	墓102上
274	174	磁器 小杯	墓102・墓102上
276	197	土師器 皿	墓115上
279	222	磁器 碗	墓129上
281	224	磁器 紅猪口	墓130上周辺
283	231	磁器 碗	墓133上
288	254	磁器 碗	墓144上
289	254	磁器 碗	墓144上
298	292	磁器 小杯	墓166上 他
303	300	磁器 碗	墓170・墓170上
305	302	磁器 皿	墓171上
307	315	磁器 小杯	墓178上

*「墓○」は墓土壌内、「墓○上」は墓○上の標石(標石のない場合は土壌直上)から出土したことを示す。

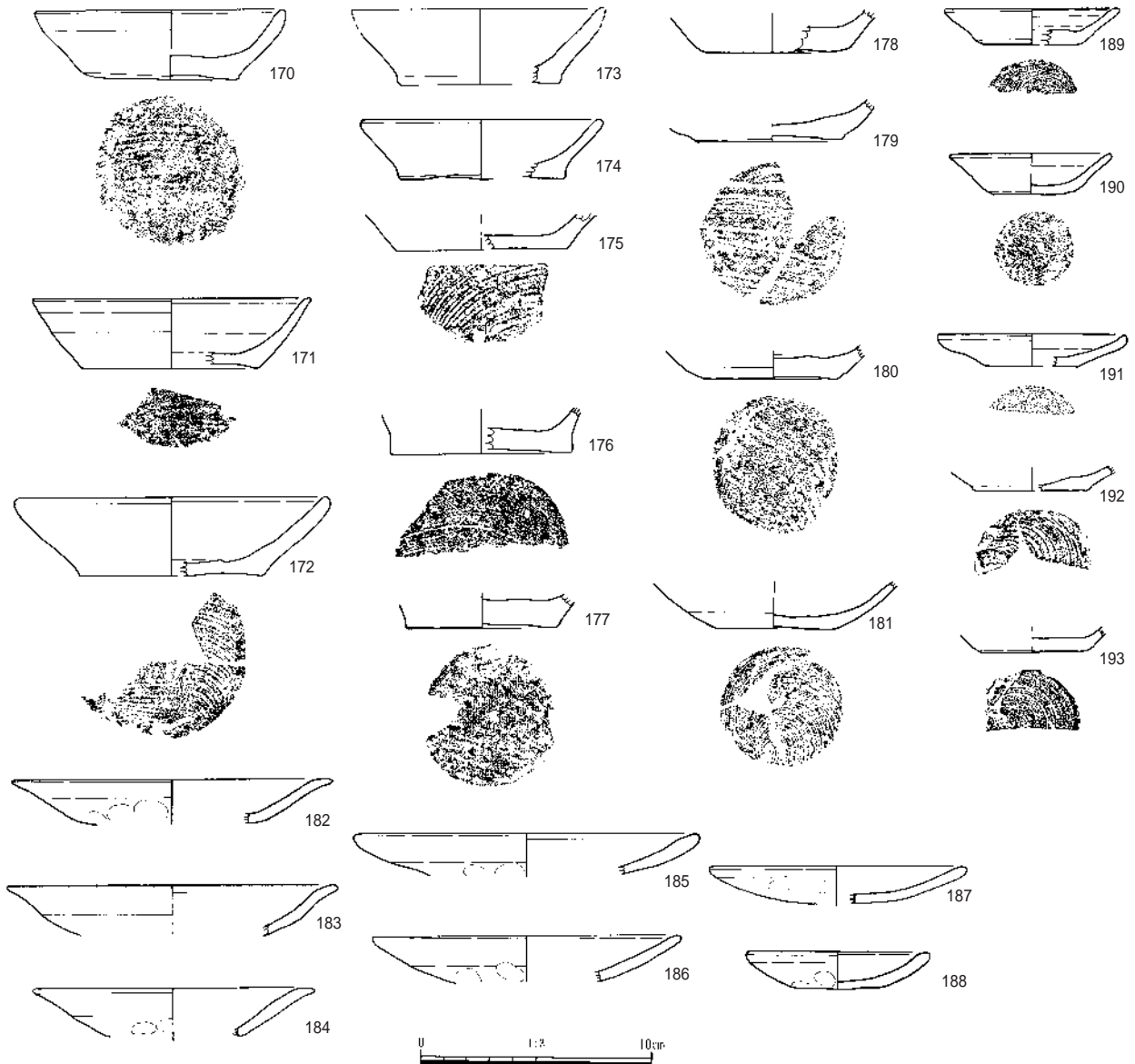


図71 標石周辺出土遺物1（土師器）

土器は、土師器杯（170～181）、京都系土師器皿（182～188）、近世土師器皿（189～193）が出土している（図71）。土師器杯にわずかに中世前期のもの（181）が見られるほかは、中世後期後半以降のものである。先述のように中世墓は土壌内から土師器が出土する機会が多いので、これらの中世後期の土師器は、本来中世墓にあったものが掘り返された可能性が高い。一方、近世の土師皿は、本遺跡の近世墓には土器類が副葬されている確実な例がないことから、供献されていた可能性が高いと思われる。

表面出土の遺物の中では陶磁器類がもっとも多い。

陶器は、肥前系陶器（唐津系）の皿（194～205）を中心に、灯明皿（206～209）、碗（210～214）、摺鉢（215）などが出土している（図72）。唐津系の皿は、胎土目をもつ肥前陶磁編年 期（16世紀末～17世紀初頭）のもの（194）から、蛇の目釉剥ぎで銅緑釉をかけた 期（17世紀末～18世紀末）のもの（202～205）まで時期幅は広い。なお、一部には鉄釉碗（212）、小杯（213）や京焼風碗（214）など近代のものも含まれている。

磁器は、皿（図73）碗、小杯ほか（図74）が出土した。皿はいずれも肥前系の染付で斜格子文の

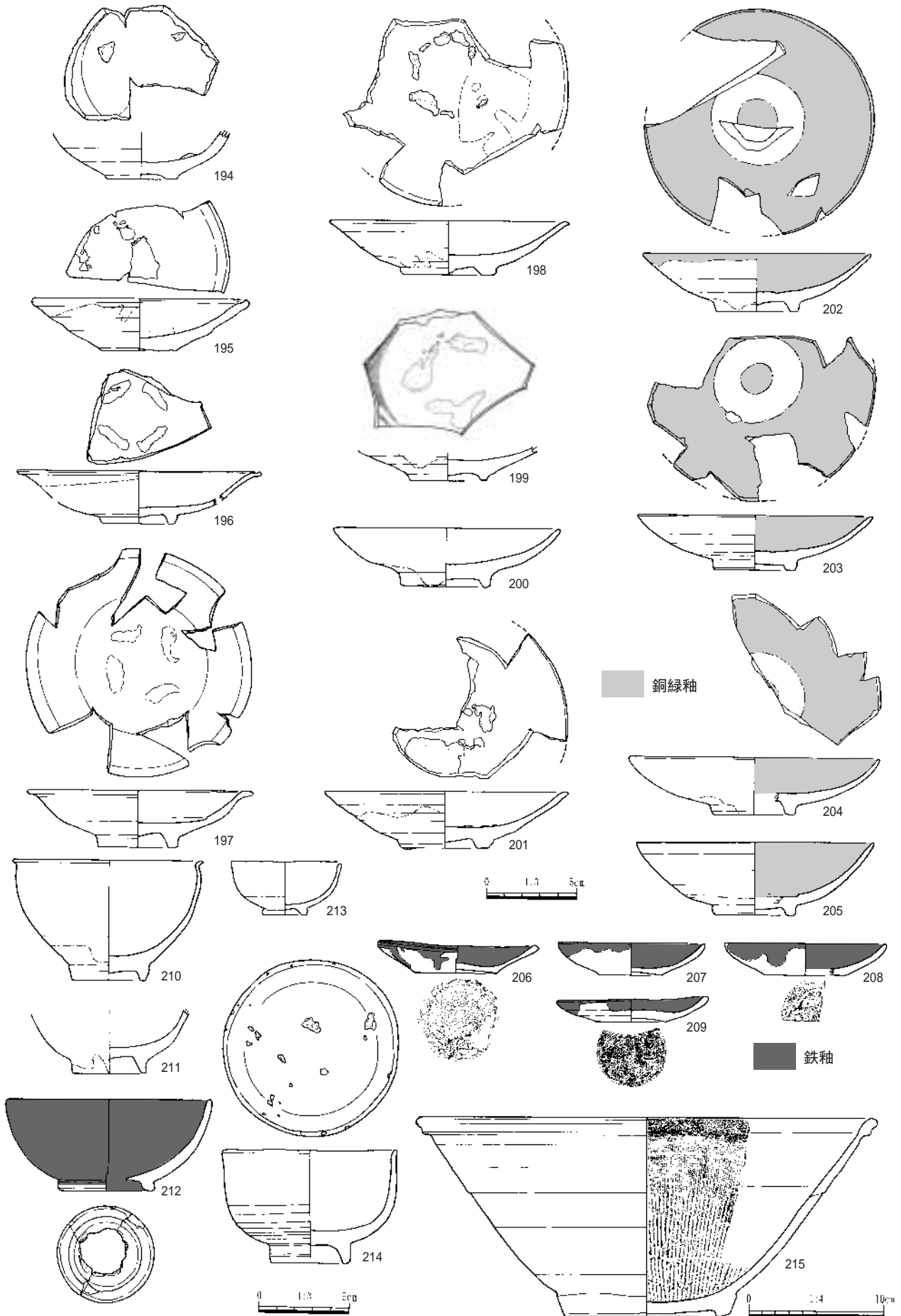


図72 標石周辺出土遺物2（陶器）

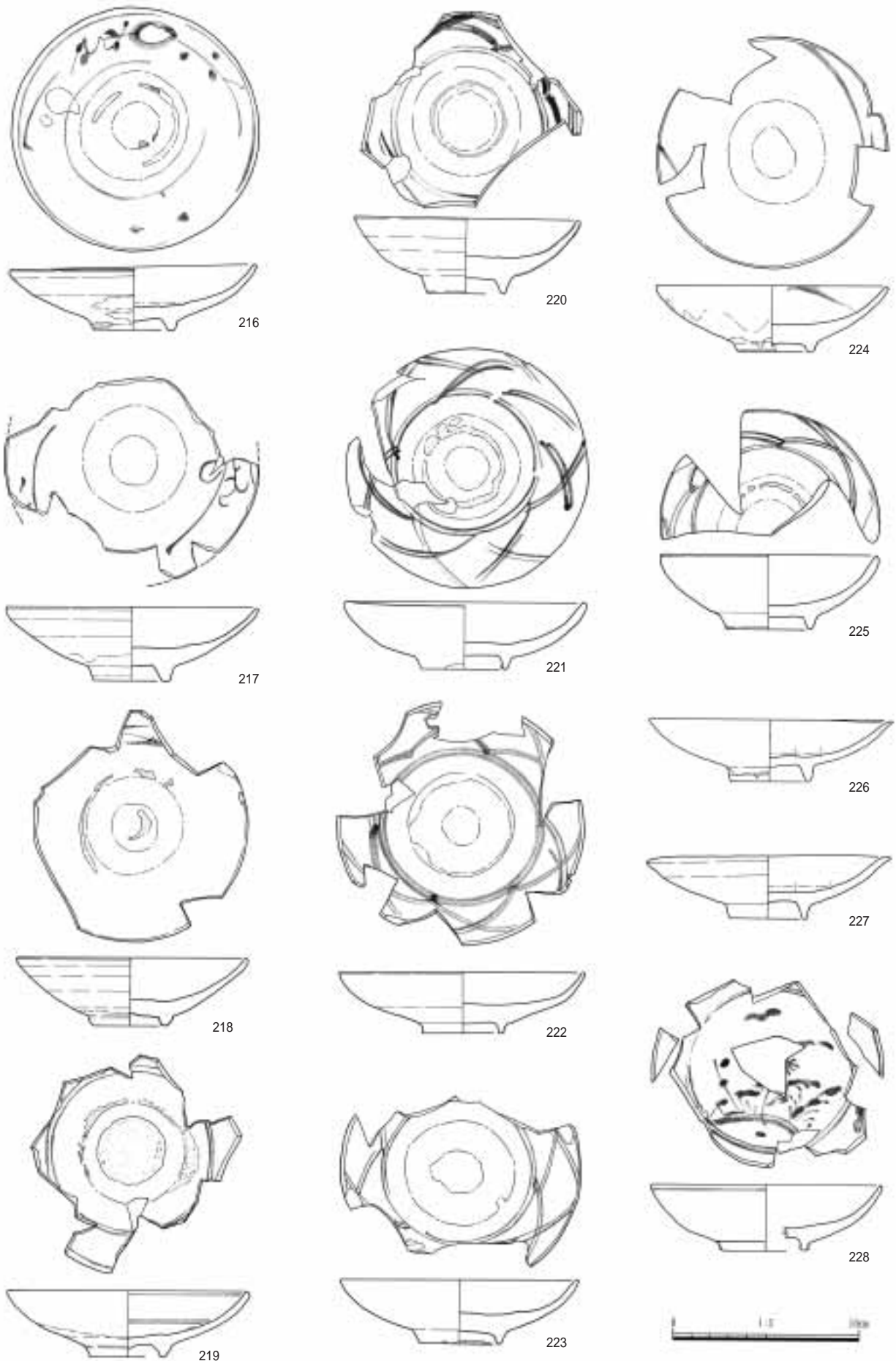


図73 標石周辺出土遺物3 (磁器 皿)

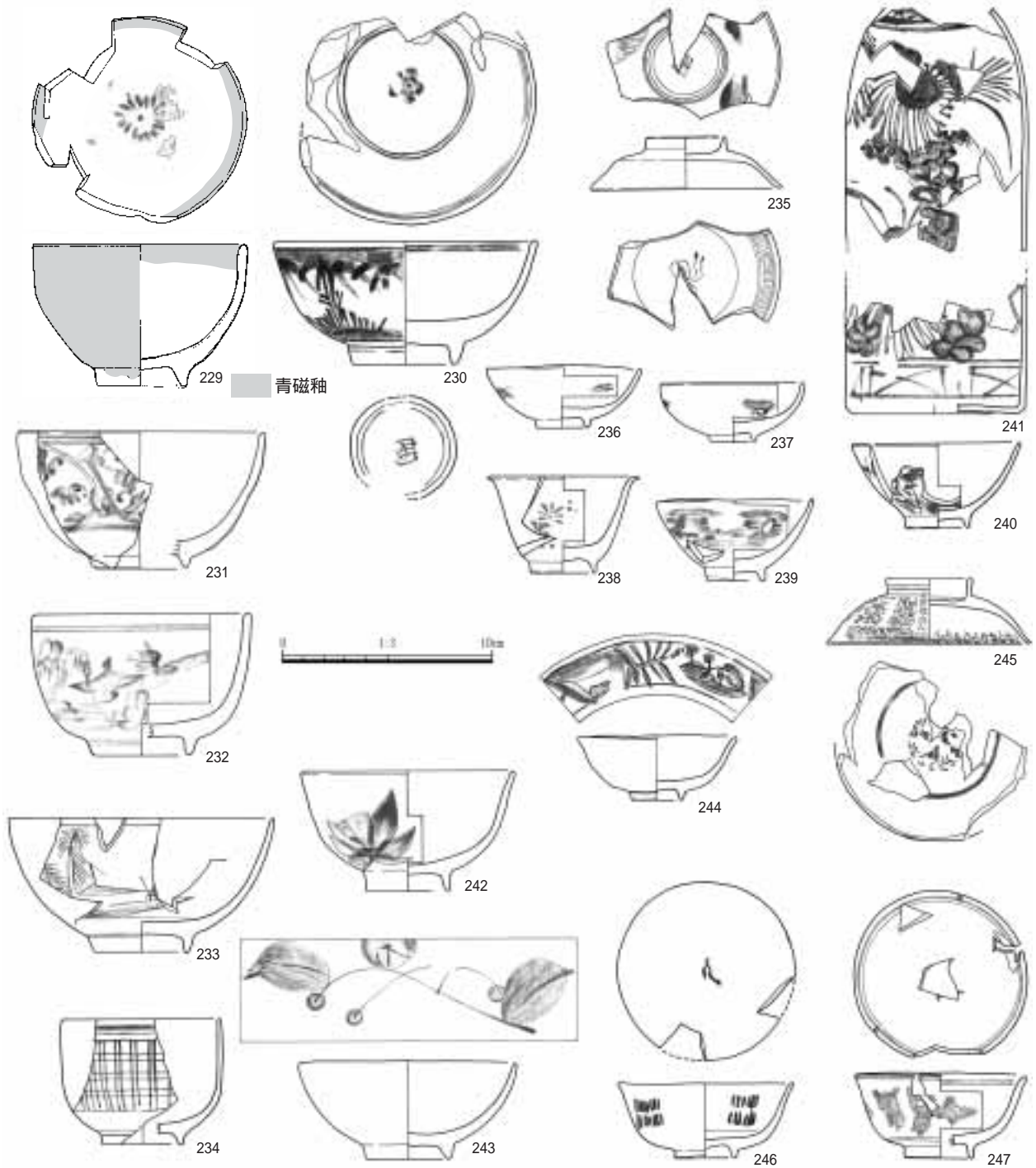


図74 標石周辺出土遺物4（磁器 碗ほか）

施される 期（17世紀末～18世紀末）のものを中心とする。皿以外の器種も肥前系磁器の染付が主体である（図74）。碗は、青磁釉かけ分けの天目形碗（229）は 期と古いが、ほかは 期のものが中心となる。ほかの器種も同じく 期を中心とする。また、近代の製品も多く見られ、印判転写によって文様の施されているものがほとんどである（241～247）。

銭貨は大半が本来土壌内に納められた副葬品であったと思われる（図75）。一部には標石に供献されたり、「撒き銭」に用いられたりしたものが含まれる可能性もあろうが、少なくとも複数枚固着した銭貨は副葬されていたものと考えてよいだろう。中国銭（C90～C102）が比較的多く見つかった。これらは先述の中世土師器と同じく中世墓に納められていた可能性が高い。

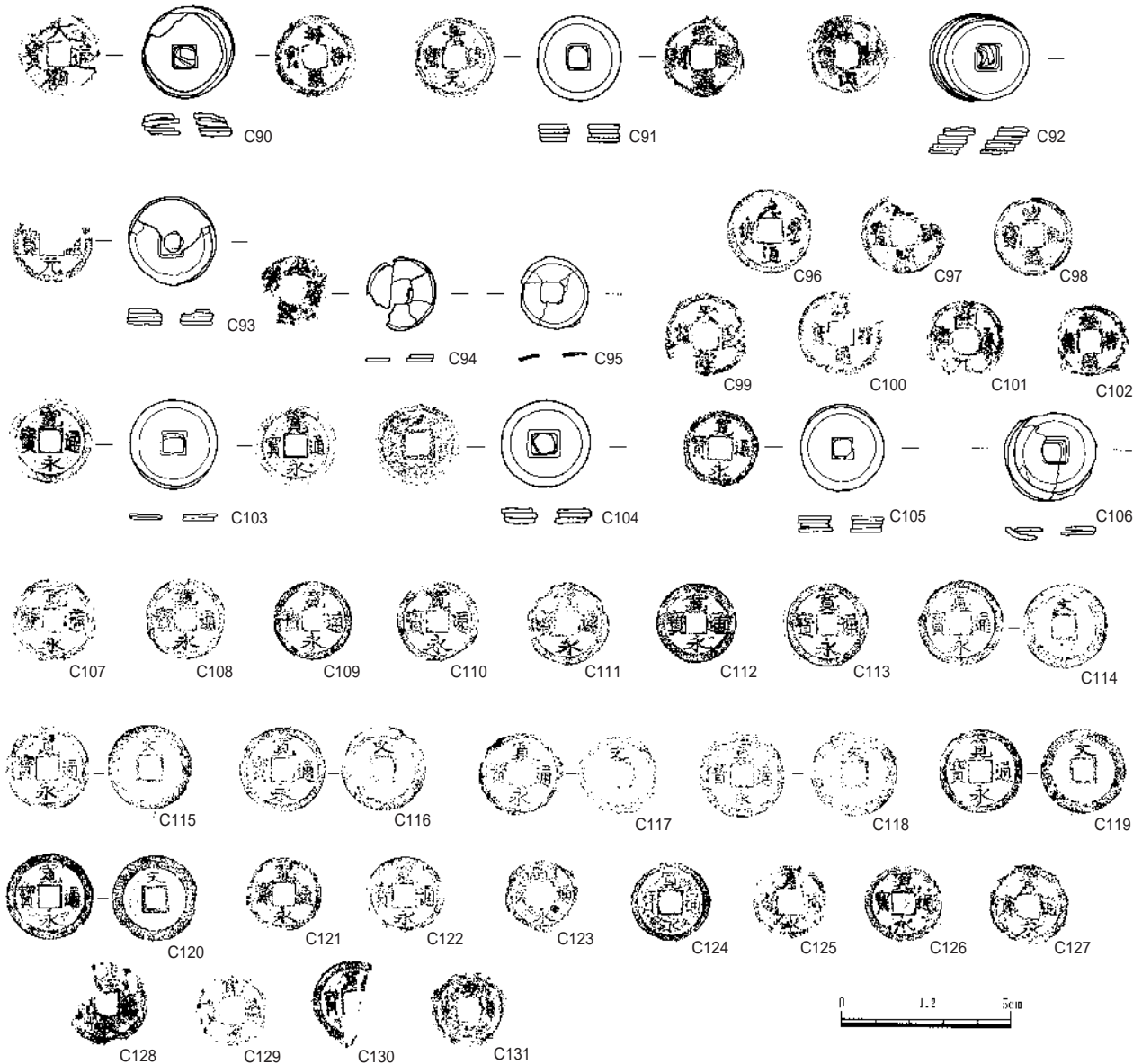


図75 標石周辺出土遺物5（銭貨）

煙管はいずれも本近世墓群出土のなかでは比較的古いものが目立つので、掘り返されて大きく壊されている古い段階の墓に納められていたと考えられる（図76：B1～B9）。

鉄製品、青銅製金具、数珠玉も本来土壌内に納められていたものがほとんどであろう（図76：B10～B14・F30～F34・G2）。

これらの遺物以外にも、表面の広い範囲から炭化した木材や炭粒が多く見ついている。特に、炭化材や炭粒が集中する部分も数箇所確認できた。民俗誌上の例として、墓穴掘りの際に焚き火を行うことが報告されているので、これらの炭化材や炭粒なども土壌掘削時の焚き火の痕跡かもしれない。ほかに、量的にはそれほど多くはないが、ウシなどの獣骨片も表面に散在していた。

なお、表面には破片は見られなかったものの、複数の土壌内から別々に破片が出土して接合した土師器皿（248）・陶器灯明皿（249・250）がある（図77）。これらも本来は上面にあったものが破片となって土壌内に混ざりこんだのであろう。

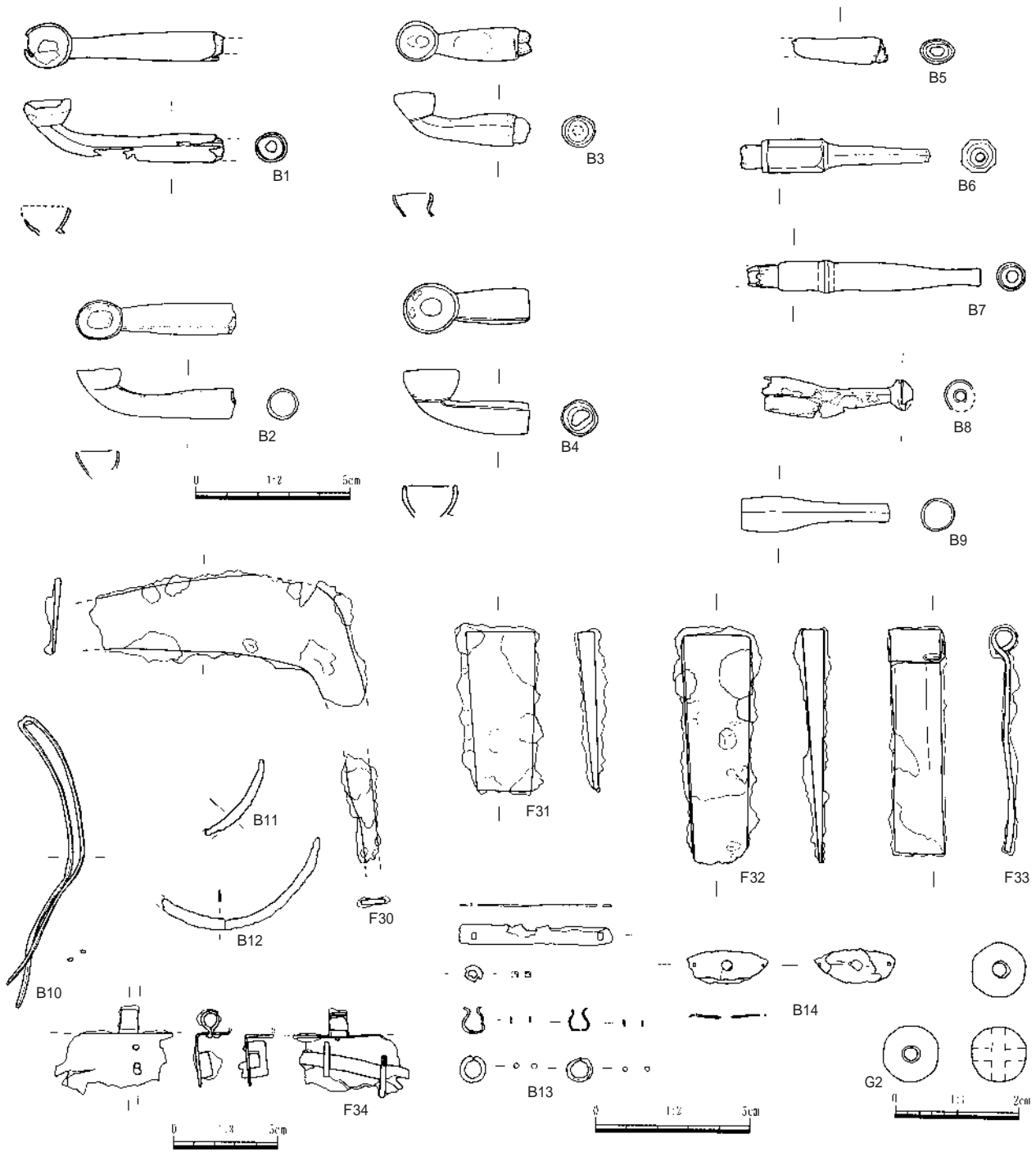


図76 標石周辺出土遺物6（煙管・鉄製品ほか）

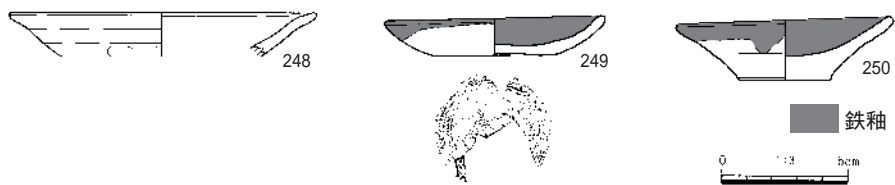


図77 標石周辺出土遺物7（遺構内）

近世墓の概要（図65）

近世以降の墓は136基検出されている。先述のように時期的な幅が広く、墓の様相もある程度のバリエーションがある。墓の展開の時期的変遷の概略をつかむため、以下のように土壌形態の分類を行った。

土壌類型

土壌掘り方の平面形と深さを基準に次の4類に分類した。

A類：平面長方形で深い（目安は検出面下0.65m以上）土壌

B類：平面長方形で浅い（目安は検出面下0.65m未満）土壌

C類：平面正方形または長幅比の小さい長方形で深い土壌

D類：平面円形で深い土壌

A類とB類の区分は標石下面からの深さも参照して判断した。大半は明確に深さの違いが認識できるが、いずれとも決定しがたいものも少数含まれている。したがって一部のA類とB類は漸移的な区分となっている。また、C類とA類の平面形の区別も明確でないものが一部にあり、正方形と長幅比の小さい長方形の区分が一部漸移的になっている。なお、長幅比が小さく正方形に近い長方形の場合でも、C類とするには浅すぎると判断したものはB類に分類している。

ほかに、本来はこの区分から逸脱すると思われる小型の土壌が計3基見つかっているが、土壌上面の平面形をもとにそれぞれC類小型（1基）とD類小型（2基）とした。

切りあい関係から大まかに時期的な変遷をたどってみると、A類が最も古く、ついでB類、C類が最も新しいという順になる。ただし、個別に見ていくとこの流れに当てはまらないものもある。

このように分類した土壌類型は一義的には遺体の埋葬の方法と関連すると想定できる。土壌内から人骨が出土し、かつ、骨の遺存状態の良いものについては人骨の肢位を検討することで、遺体の埋葬形態を推定できた（第6章参照）。なお、以下の遺体の埋葬形態は、詳細な人骨の埋葬肢位をもとに一部を統合して、葬法として理解しやすいように区分しなおしたものである。

本遺跡で確認された遺体の埋葬形態は臥葬と座葬の2種があり、臥葬がいわゆる「寝棺」に、座葬がいわゆる「座棺」に対応する。（ただしすべての墓で棺の使用が想定できるわけではない。）以下、埋葬形態の内容を記述しておく。

臥葬：遺体を横たわらせた埋葬形態。本遺跡では脚を折り曲げられたもののみしかみられない。さらに次の4つに分類できる。

右側臥屈葬：体の右側面を下にして、足を折り曲げて横たわらせた埋葬形態。埋葬肢位の右側臥屈位と対応。

左側臥屈葬：体の左側面を下にして、足を折り曲げて横たわらせた埋葬形態。埋葬肢位の左側臥屈位と対応。

仰臥屈葬：足を折り曲げて、仰向けに（体後面を下にして）横たわらせた埋葬形態。埋葬肢位の仰臥屈位、仰臥立膝位に対応。半仰臥屈位の一部もこれに含まれる。

伏臥屈葬：足を折り曲げて、うつ伏せに（体前面を下にして）横たわらせた埋葬形態。埋葬肢位の半腹臥正座位と対応。

座葬：遺体を座らせた埋葬形態。立膝座葬、半仰臥座葬、正座葬などのいくつかの細分が考えられるが、ほとんどが立膝座葬で、一部半仰臥座葬と見られるものがある。

立膝座葬：膝を立てて座らせた埋葬形態。埋葬肢位の立膝座位と対応。

半仰臥座葬：膝を折り曲げて深く座らせた埋葬形態。足は接地せず、腰から背中下半部が接地する。ただし、仰臥屈葬と区別できていないものもあろう。半仰臥屈位とほぼ対応。

埋葬形態が判然としないものがかかり含まれているので、すべての墓を埋葬形態ごとには分類できない。埋葬形態が判明したのものについては埋葬形態の大別分類が土壌類型の別に比較的良く対応しており、A類・B類は臥葬と、C類・D類は座葬と対応する。細かく見ると、A類の中に座葬のものが少数ながら含まれているものの、B類・C類・D類ではこの対応関係がほぼ完全に成り立つ。土壌類型に埋葬形態を加味して、あらためて切り合い関係をもとに時期的な変遷の概略を見てみると、A類臥葬のものが最も古く、次いでB類臥葬が古く、C類座葬とD類座葬が最も新しいというおおまかな流れがつかめる。

ただし、個別に見ていくと、こうした流れに当てはまらないものも見られるので、土壌形態と遺体の埋葬形態の対応関係とその時期的な変遷については、副葬品など墓出土遺物の分析などとあわせて後であらためて詳述することとしたい(第7章参照)。以下の個別の墓の説明については、この分類が時期的な変遷段階を必ずしも正確に反映しているわけではないことを前提とした上で、土壌類型ごとに個々の遺構の記述を行っていく。



図78 A類墓配置図

A類墓群 (図78)

遺構分布は、規則的な配置をもつ、あるいは明確な群をなすといった特徴は見られず、G4区全体に広がる。土壌の軸方向は圧倒的に南北主軸をとっているものが多い。大半が古い段階の墓のため、他の墓に切られているものも多く、特に墓密集域では原形をとどめないようなものが多い。

人骨の遺存状態も悪いものが大半だが、少数残りのよいものがある。掘り方が深いため、地山のローム層を深く掘り込み、概して、底面がG層(黄白色粘質土層)下部からGXI層(赤褐色粘質土層)土層にまで到達する。埋土の断面で棺の裏込め土と見られる立ち上がりを観察できるものも多い。

以下、A類土壌の墓を順に記述する。

墓53 (図79・80、図版27)

G4区北部の墓の分布が希薄な部分に位置する。墓53に伴う標石の可能性のある礫集積が上面にあるが、土壌とはいくらか平面の位置がずれている。

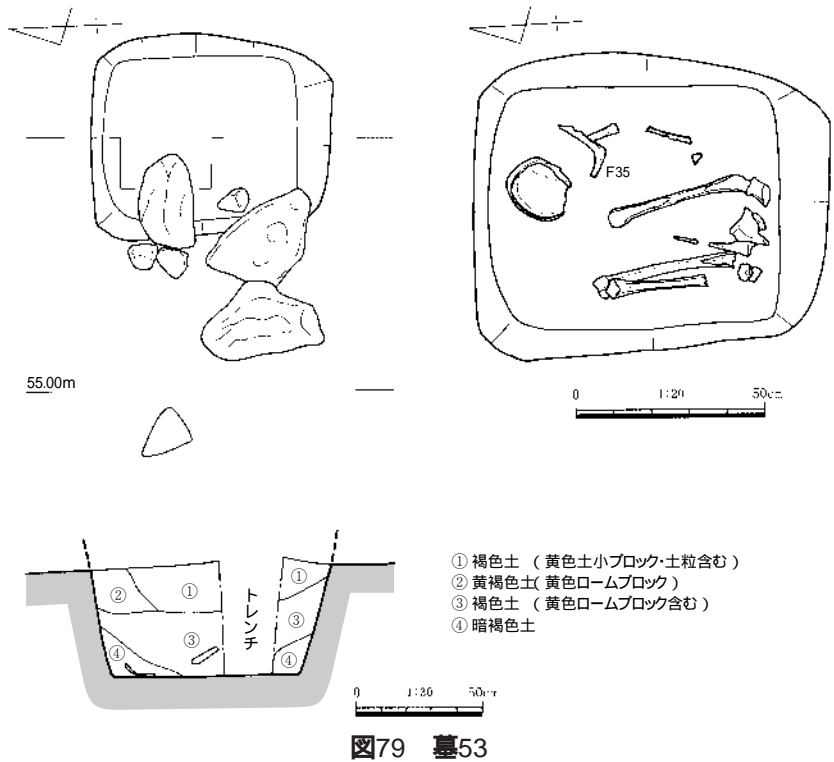


図79 墓53

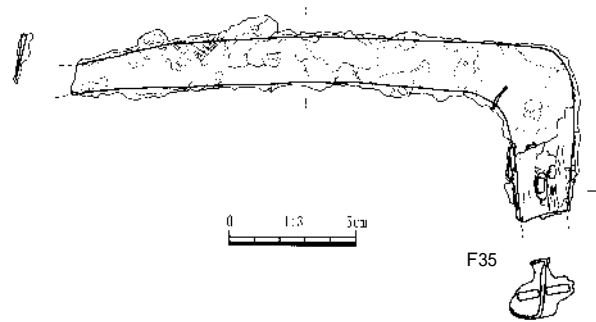


図80 墓53出土遺物

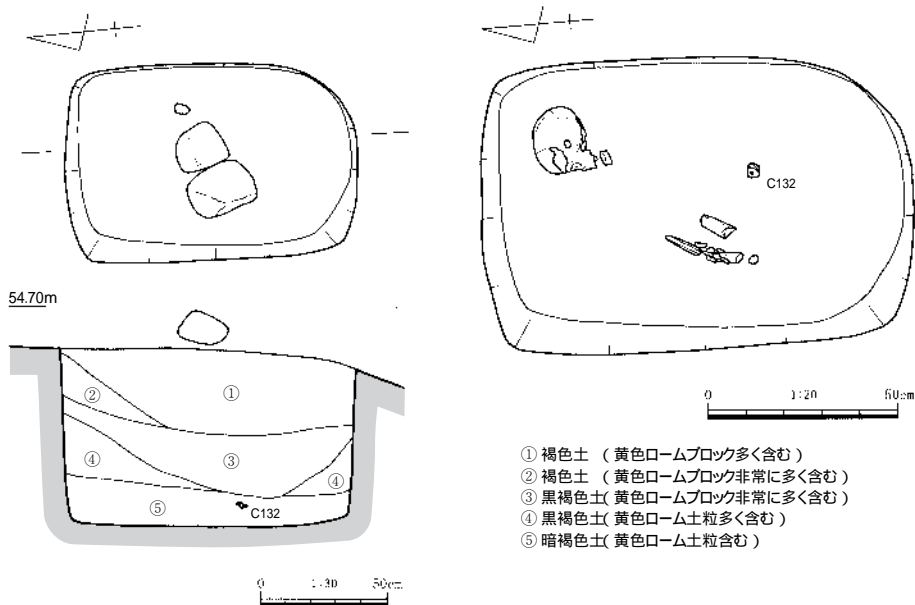


図81 墓54

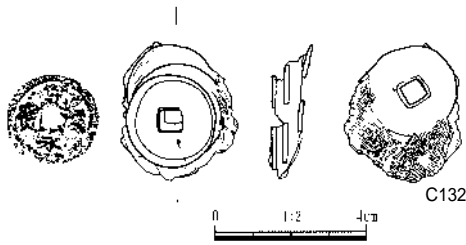


図82 墓54出土遺物

土壌は平面長方形で、長辺0.95m、短辺0.8m、深さ0.45m（磔下面からは0.85m）を測り、長軸方向を北から3度東に向ける。底面で人骨を検出した。土壌北端付近に頭蓋骨が、南西側に膝を北に向けた下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬と考えられる。被葬者は壮年から熟年の女性と推定されている（第6章参照。以下同）。

遺物は頭蓋骨の東側で鎌（F35）が出土した。

墓54（図81・82、図版27）

G4区北東部に位置する。土壌上面の中央に2つの磔を集めて標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺1.15m、短辺0.75m、標石下面からの深さ0.75mを測り、長軸方向を北から6度東に振る。底面で人骨を検出した。土壌北東部に顔を西に向けた頭骨が、土壌中央西寄りに下肢骨等がある。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬の可能性が高いだろう。被葬者は壮年後半の女性と推定されている。

遺物は、錆で固着した銅銭2枚と鉄銭2枚（C132）が下肢骨の東で底面

からわずかに浮いて出土した。布が付着しており、袋などに入れられていたと考えられる。

墓55（図83・84、図版27）

G4区北東部に位置する。7個ほどの磔が疎らに集められた標石を伴う。

土壌は長幅比の小さい長方形で、長辺1.1m、短辺1m、標石下面からの深さ1.1mを測り、長軸方向を北から18度西に振る。底面で人骨を検出

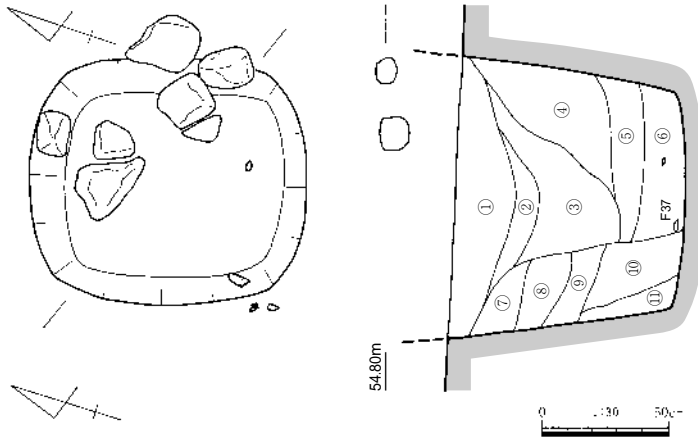


図83 墓55

- ① 褐色土（黄色ロームブロック含む）
- ② 褐色土（黄色ロームブロック非常に多く含む）
- ③ 褐色土（黄色ロームブロック非常に多く含む）
- ④ 黒色土（黄色ロームブロック多く含む）
- ⑤ 黒褐色土（黄色ロームブロック多く含む）
- ⑥ 暗褐色土（黄色土粒含む）
- ⑦ 褐色土（黄色ロームブロック含む）
- ⑧ 明黄褐色土（ロームブロック）
- ⑨ 黒褐色土（黄色ロームブロック含む）
- ⑩ 明黄褐色土（ロームブロック）
- ⑪ 黄褐色土（ロームと褐色土の混土）

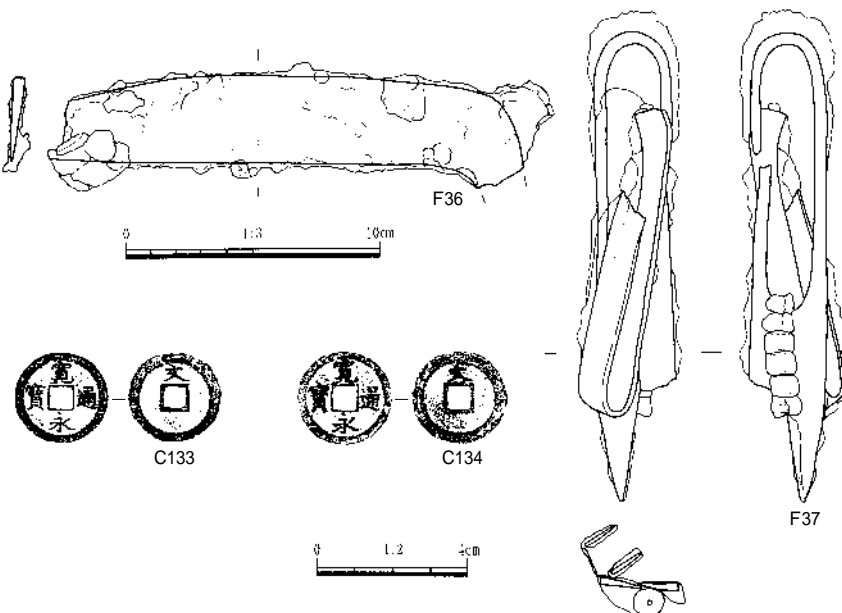


図84 墓55出土遺物

した。土壌南部に下肢骨などがまとまり、土壌中央北側寄りに頭骨片や歯牙がある。遺体の埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬と考えられる。被葬者は青年から壮年前半の女性と推定されている。

遺物は土壌底面で出土し、鎌（F36）が土壌北東隅で、鋏・毛抜き・木製数珠玉が固着したものの（F37）と銅銭2枚（C133・134）が頭骨片・歯牙のすぐ西側で見つかった。

墓56（図85・86、図版28）

墓密集域の北東端に位置する。小型の礫1個を標石としている。標石下面レベルから20cmほど下がった深さで肥前陶器甕（251）が、標石の下から陶器皿（252）が出土した。

土壌は平面長方形で、長辺1m、短辺0.75m、標石下面からの深さ0.8mを測り、長軸方向を北から9度東に振る。底面で人骨を検出した。下肢骨などが土壌南部にまとまっており、東に左下肢、西に右下肢がやや広めの間隔を空けて膝を北に向けて並ぶ。頭骨は土壌中央付近にある。遺体の埋葬形態は仰臥屈葬または座葬と推定される。被葬者は青年女性と推定されている。

土壌底面から鋏（F38）、銅銭5枚（C135・C136）、煙管（B15）が出土した。鋏は破片で、煙管も雁首のみの出土のため混入遺物の可能性もあるが、出土レベルはいずれも底面直上である。

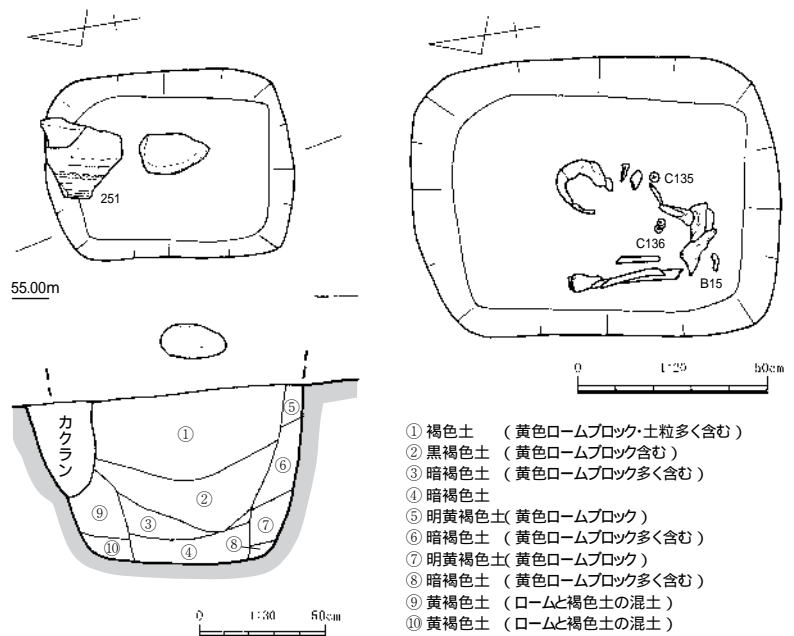


図85 墓56

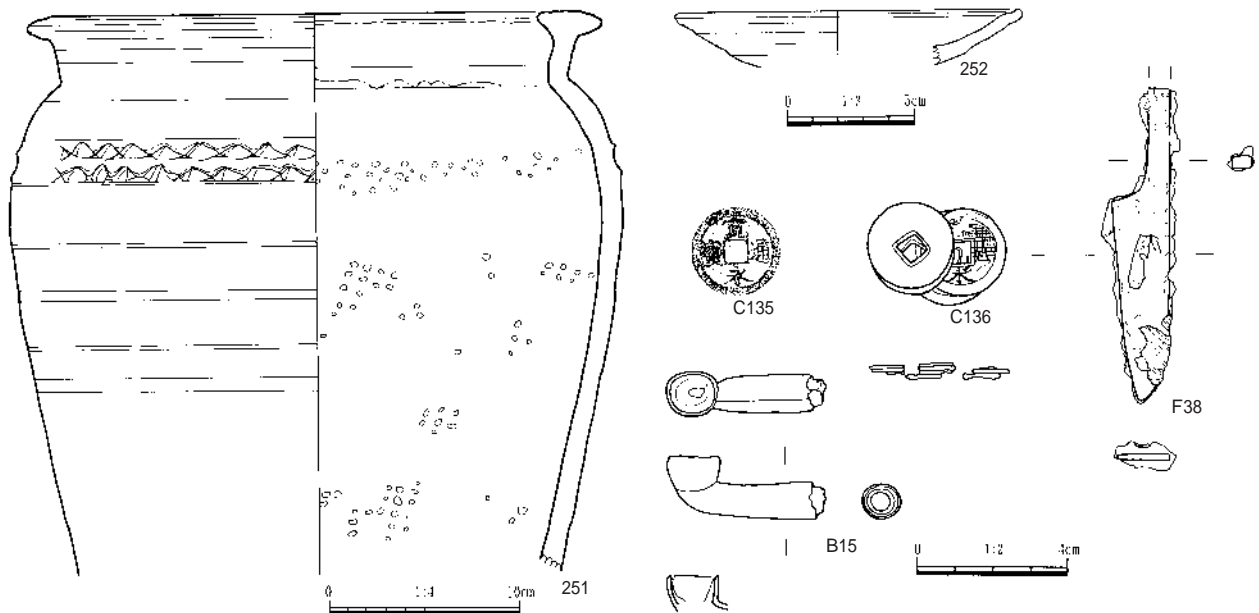
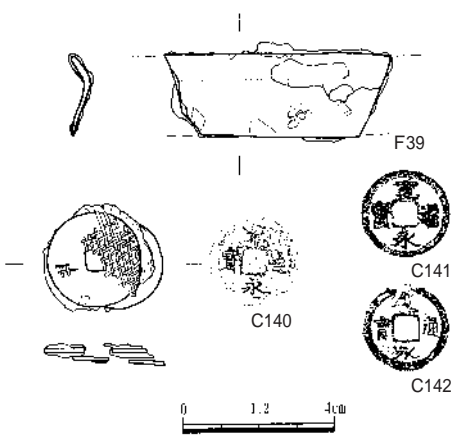
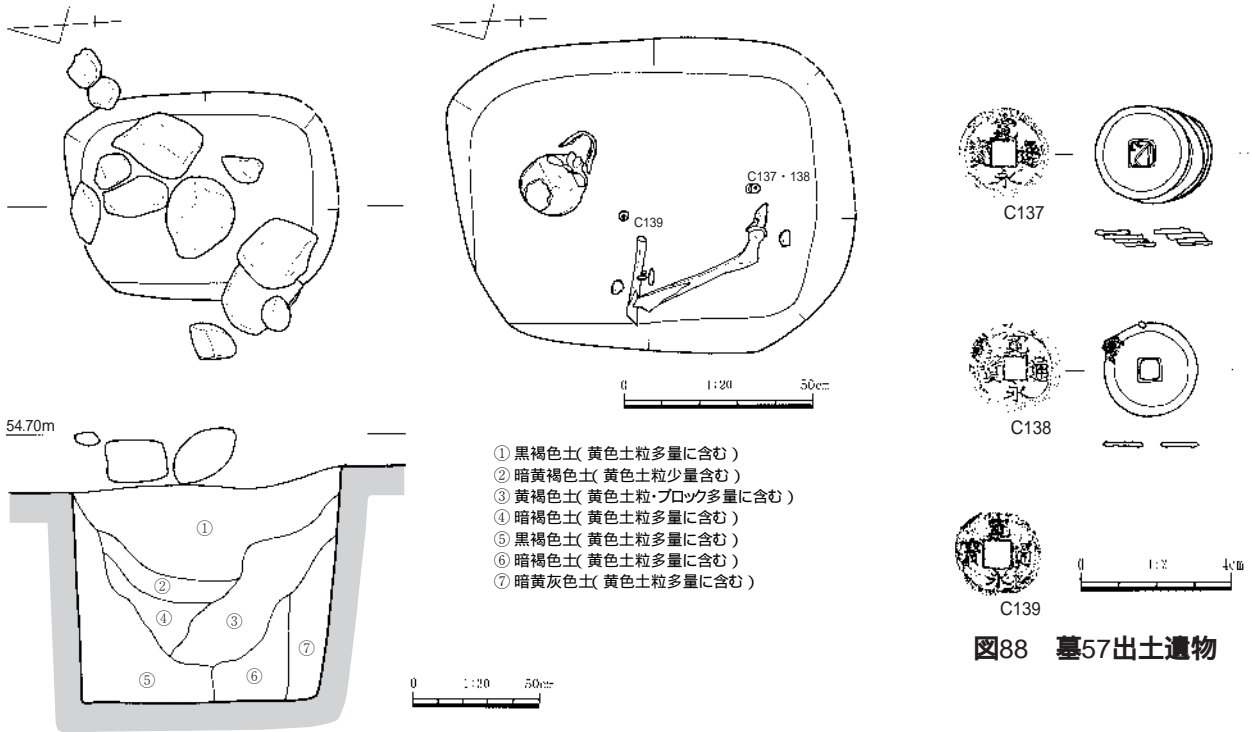


図86 墓56出土遺物

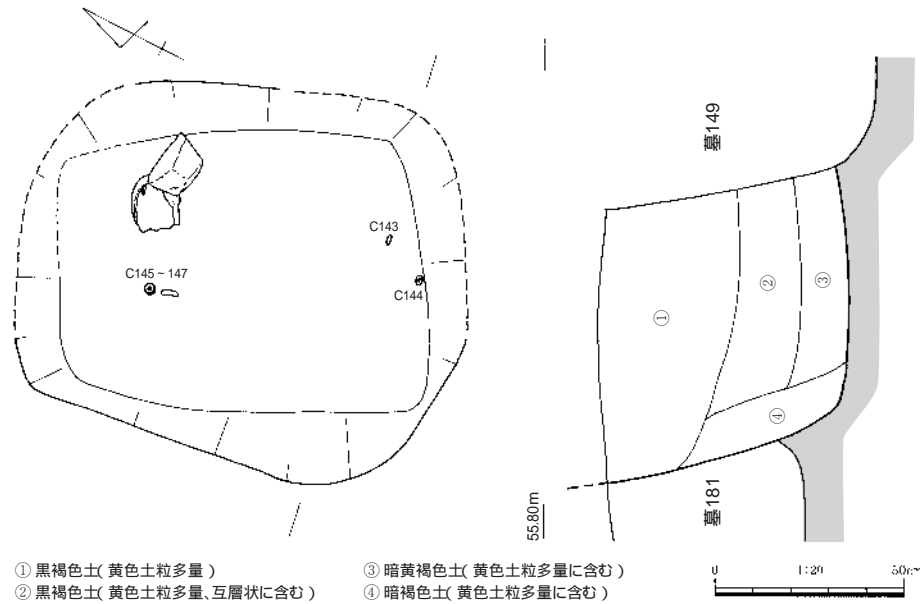


墓57 (図87・88、図版28)

G 4 区東部の墓の分布が希薄な部分に位置する。10個ほどの磔を集めて標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺1.05m、短辺0.8m、深さ0.9mを測り、長軸方向を北から4度東に向ける。底面で人骨を検出した。土壌北端付近に顔を下に向けた頭蓋骨が、南西側に膝を北に向けた左下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の伏臥屈葬と考えられる。被葬者は壮年女性と推定されている。

遺物は土壌底面中央で銅銭1枚(C139)が、人骨の腰元で銅銭5枚(C137・C138)が出土した。銅銭の中には布が付着したものが含まれている。



- ① 黒褐色土(黄色土粒多量)
- ② 黒褐色土(黄色土粒多量、互層状に含む)
- ③ 暗黄褐色土(黄色土粒多量に含む)
- ④ 暗褐色土(黄色土粒多量に含む)

図91 墓59

墓58 (図89・90、図版28)

墓密集域の北東部に位置し、土壌の西半を墓172・墓59・墓149に切られる。これらの墓に大きく切られているため、現状では標石は確認できない。

土壌は残存状態が悪いが、平面長方形と考えられる。残存値で、長辺0.7m、短辺0.4m、深さ0.6mを測り、長軸方向を北から26度東に振る。底面から頭蓋骨と長骨片を検出した。遺存状態が悪いが、遺体の埋葬形態は右側臥屈葬の可能性が高いだろう。被葬者は壮年後半から熟年の男性と推定されている。

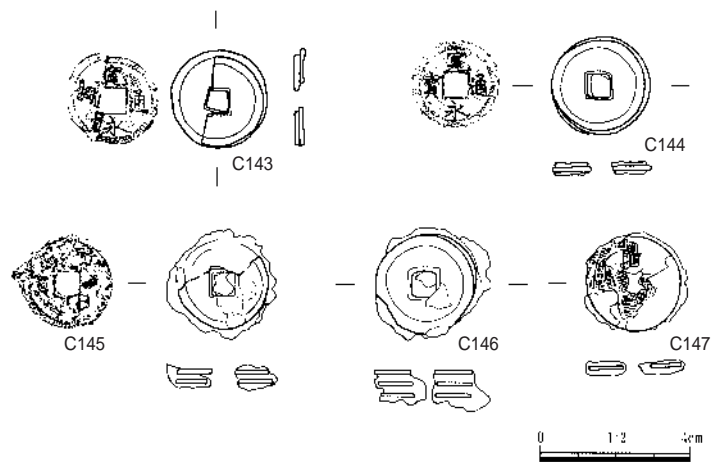


図92 墓59出土遺物

遺物は骨の間から鉄片(F39)、頭蓋骨下から銅銭3枚と鉄銭1枚(C140~C142)が出土した。鉄銭には布が付着している。

墓59 (図91・92、図版28)

墓密集域の東部に位置し、北東を墓172に、南東を墓149・墓173にそれぞれ切られ、墓58・墓180・墓181を切る。現状では上面に礫は見られない。

土壌は平面長方形で、長辺1.2m、短辺1m、深さ0.65mを測り、長軸方向を北から28度西に振る。土壌内①層中から銅銭2枚(うち1枚は破損品:C143)②層中から銅銭3枚(C144)が出土した。いずれもほかの墓からの混入の可能性が高い。

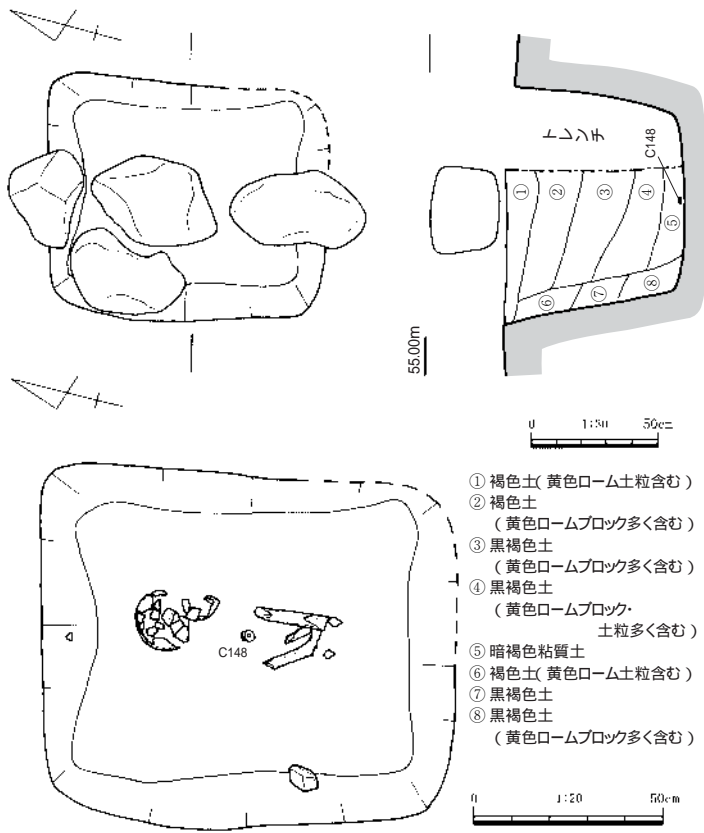


図93 墓60



図94
墓60出土遺物

底面北東隅付近で頭蓋骨を検出した。ほかに検出した人骨がないため不明点が多いが、埋葬形態は北頭位の臥葬と考えられる。被葬者は熟年の男性(?)と推定されている。底面から出土した遺物は銅銭2枚・鉄銭4枚(C145~C146)で、すべて頭蓋骨の西側で重なって出土した。なお、鉄銭には布が付着している。

墓60(図93・94、図版28)

墓密集域の北西部に位置し、南東端を墓106に切られる。4個の礫を縦長に並べて標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺1.1m、短辺0.9m、標石下面からの深さ0.75mを測り、長軸方向を北から14度西に振る。土壌底面で人骨を検出した。頭骨が土壌北部にあり、その南に下肢骨が膝を北に向けて並んでいる。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と考えられる。被葬者は熟年から老年の女性と推定されている。

土壌は平面長方形で、長辺1.1m、短

辺0.9m、標石下面からの深さ0.75mを測り、長軸方向を北から14度西に振る。土壌底面で人骨を検出した。頭骨が土壌北部にあり、その南に下肢骨が膝を北に向けて並んでいる。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と考えられる。被葬者は熟年から老年の女性と推定されている。

土壌底面中央から、錆で固着した銅銭3枚・鉄銭1枚(C148)が出土した。銭貨には棺材と思われる木質が付着している。

墓61(図95・96、図版29)

G4区北西部に位置し、南辺付近を墓108に切れ、墓174を切る。土壌東部の上面に4個の礫が乗っている。

土壌は平面長方形で、長辺1.05m、短辺0.75m、礫下面からの深さ0.8mを測り、長軸方向を西から5度南に振る。底面から比較的遺存状態の良い人骨を検出した。土壌の西端付近に膝を立てた状態の左下肢骨が、中央付近に同じく膝を立てた状態の右下肢骨があり、左右の下肢骨の間に頭骨・上肢骨・体幹骨がまとまっている。遺体の埋葬形態は正面を北に向ける立膝座葬と考えられる。被葬者は熟年から老年の女性と推定されている。

遺物は、銅銭3枚(C149)と櫛(W2)が底面北西隅付近で出土したほか、頭骨・上肢骨・体幹骨の集中部の下から釘2点(F40・F41)が出土している。

墓62(図97)

G4区北西部に位置し、墓96を切り、南東側の大半を墓95・墓146に切られる。現状では上面に礫などは見られない。

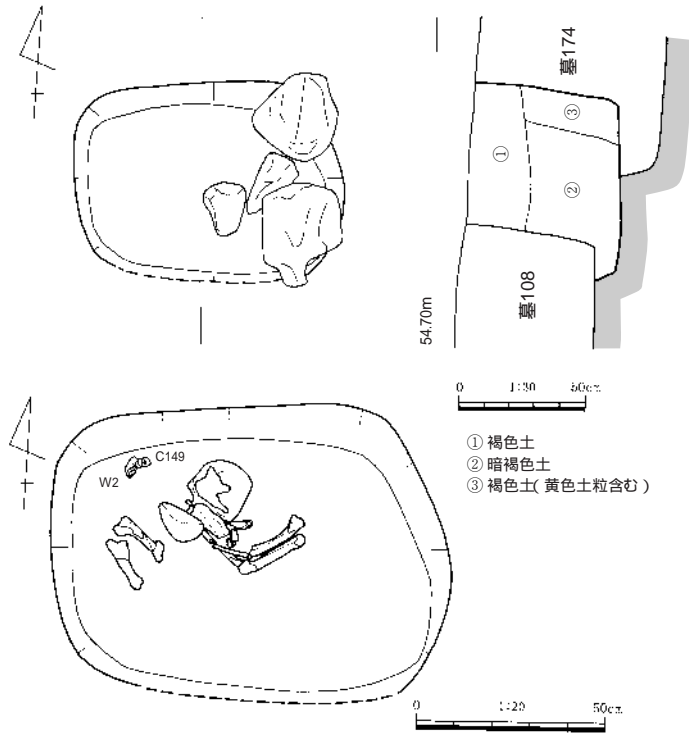


図95 墓61

土壌は長方形を呈し、残存部分で長辺1.2m、短辺0.8m、深さ0.55mを測り、長軸方向を北から16度西に向ける。土壌内からは人骨、遺物とも出土していない。

墓63 (図98・99、図版29)

G 4 区北西部に位置し、墓72を切る。上面に十数個の礫を密に組んで標石としている。標石周辺から染付皿 (253)、染付碗底部片 (254) が出土した。

土壌は平面長方形で、長辺1.4m、短辺 1 m、標石下面からの深さ0.9mを測り、長軸方向を北から 7 度東に振る。

土壌内上層 (①層) から土師器杯 (255・256) と陶器片口鉢 (図69: 169) の破片が出土した。

底面では比較的遺存状態の良い、壮年男性と推定されている人骨を検出した。土壌の南東側に頭骨などがあり、その西に左下肢骨が、北に膝を立てた右下肢骨がある。遺体の埋葬形態は体正面を北に向ける立膝座葬と推定される。遺物は、頭骨の下から銅銭 4 枚・鉄銭 1 枚が固着した鉄の刃部 (F43) が、左右寛骨の間で底面より数cm浮いて銅銭 1 枚 (C150) が、左下肢の東側底面で煙管 (B16) の雁首が、人骨の北西側底面で煙管 (B16) の吸口と鉄の持ち手部 (F42) がそれぞれ出土した。ほかに、底面付近からは釘 6 点 (F44ほか) と、土師器皿 (図77: 248) の破片、陶器灯明皿 (図77: 249) の破片が出土した。248は墓108・墓102から、249は墓108からそれぞれ同一個体の破片が出土している。

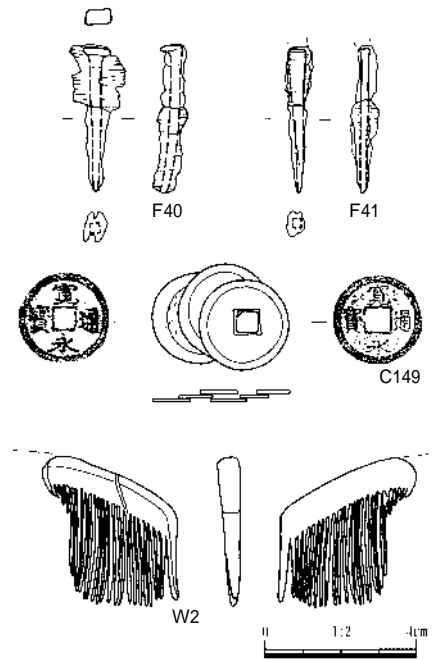


図96 墓61出土遺物

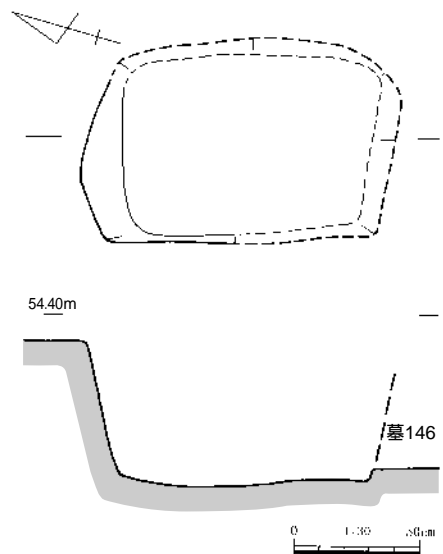


図97 墓62

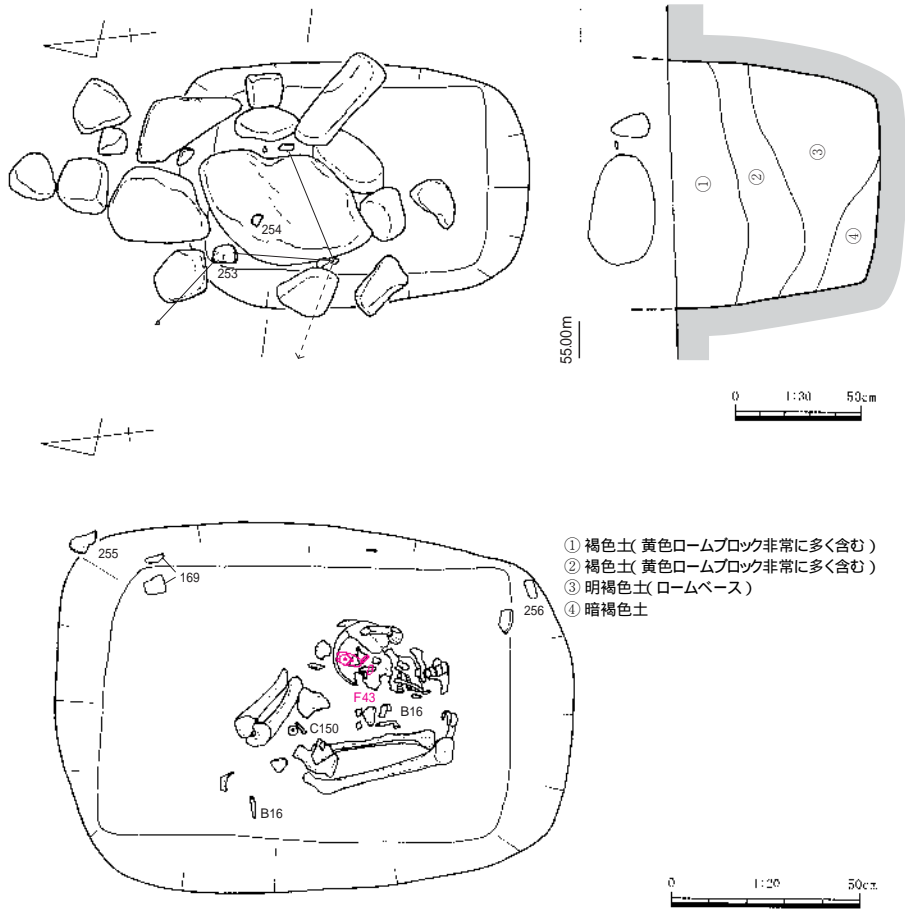


図98 墓63

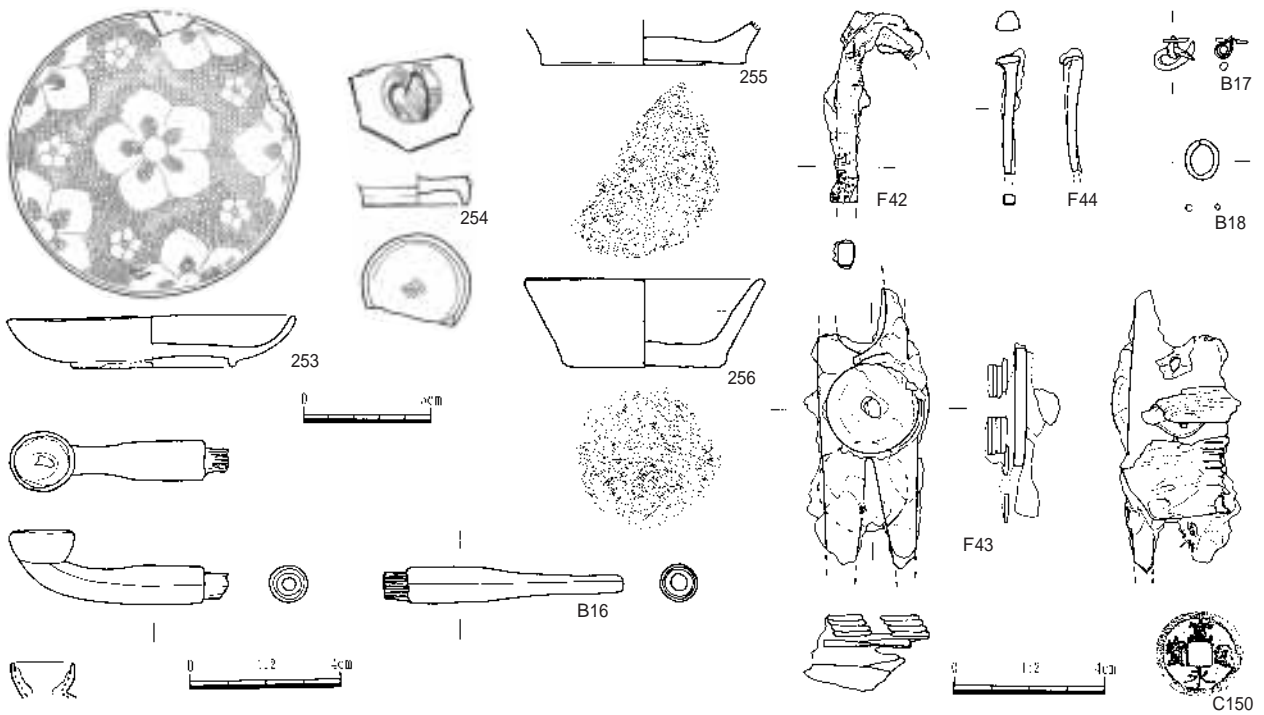


図99 墓63出土遺物

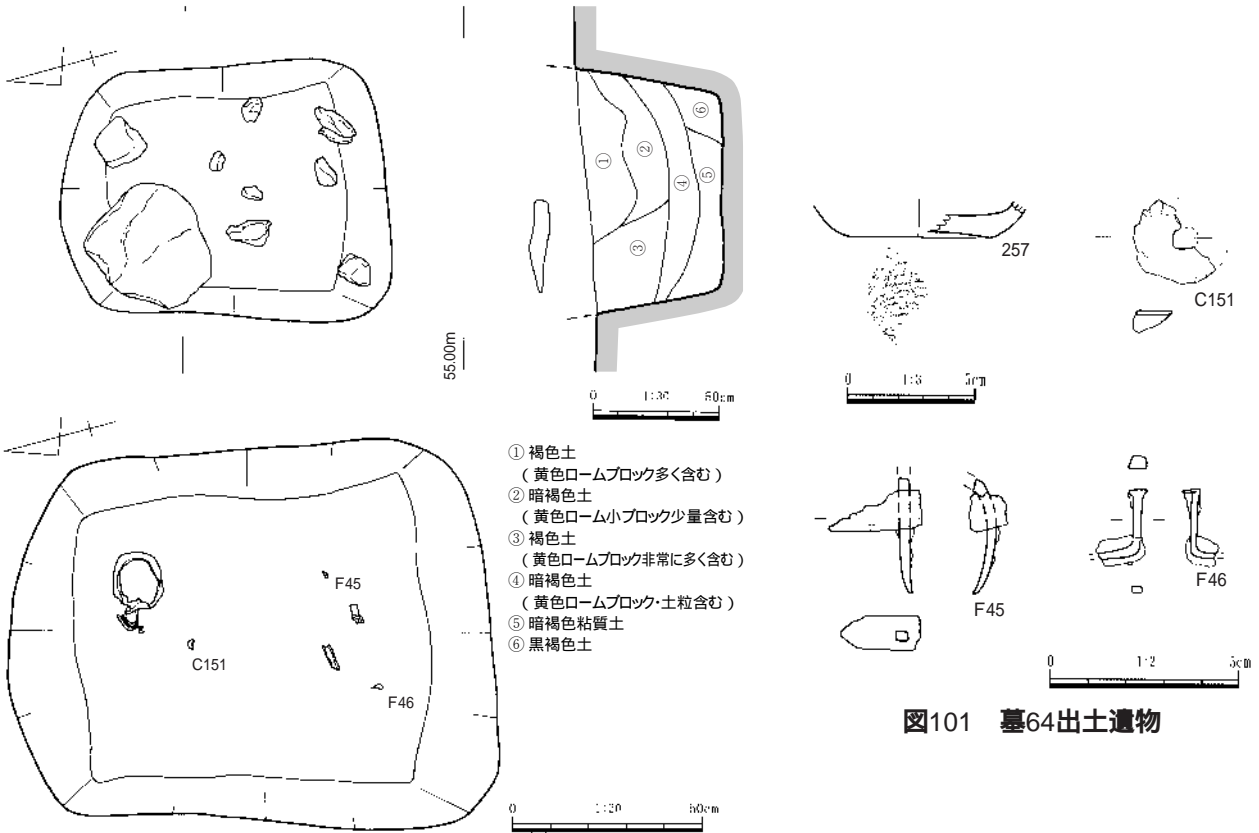


図100 墓64

図101 墓64出土遺物

墓64 (図100・101、図版30)

G 4 区北西部に位置し、墓146・墓109を切る。土壌上面には大型礫 1 個のほか小型礫が数個置かれている。

土壌は平面長方形で、長辺1.3m、短辺 1 m、標石下面からの深さ0.7mを測り、長軸方向を北から15度東に向ける。土壌内上層で土師器杯片 (257) が出土した。

底面からは壮年女性と推定される人骨を検出した。土壌北端付近で顔を下に向けた頭蓋骨を、土壌南部で長骨片を検出した。遺存状態が悪く、遺体の埋葬形態は不明である。他に底面からは、釘 2 点 (F45・F46)、鉄銭片 1 点 (C151) が出土しているが、いずれも混入した可能性が高い。

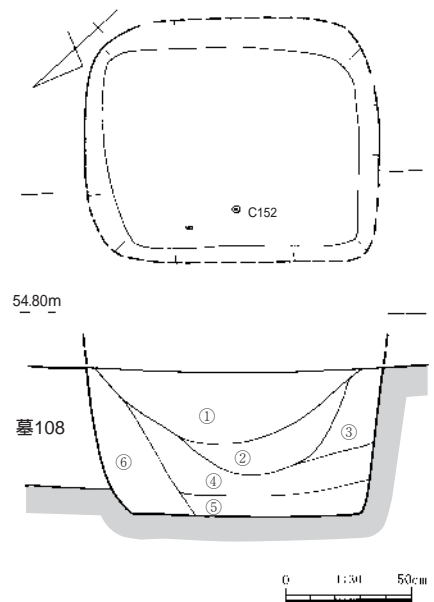


図102 墓65

墓65 (図102・103)

墓密集域の中央付近に位置し、墓157・墓158・墓114に切られ、墓182を切る。

土壌は平面長方形で、長辺1.15m、短辺 1 m、深さ0.6mを測り、長軸方向を北から43度東に振る。土壌内①層中から銅銭 1 枚 (C152) と人骨小片が出土した。底面からは人骨、遺物とも出土していない。



図103 墓65出土遺物

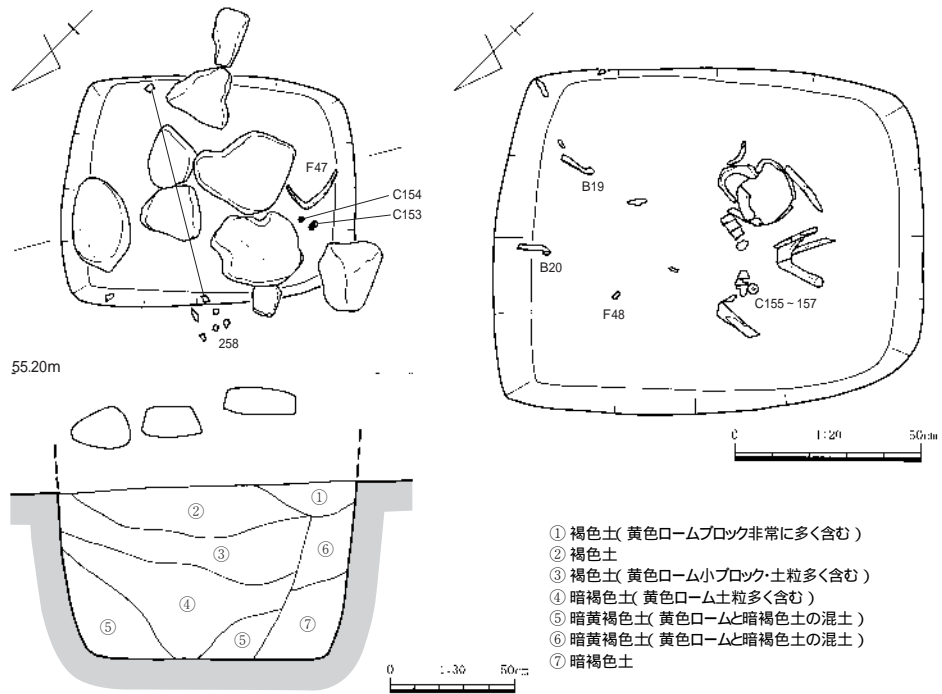


図104 墓66

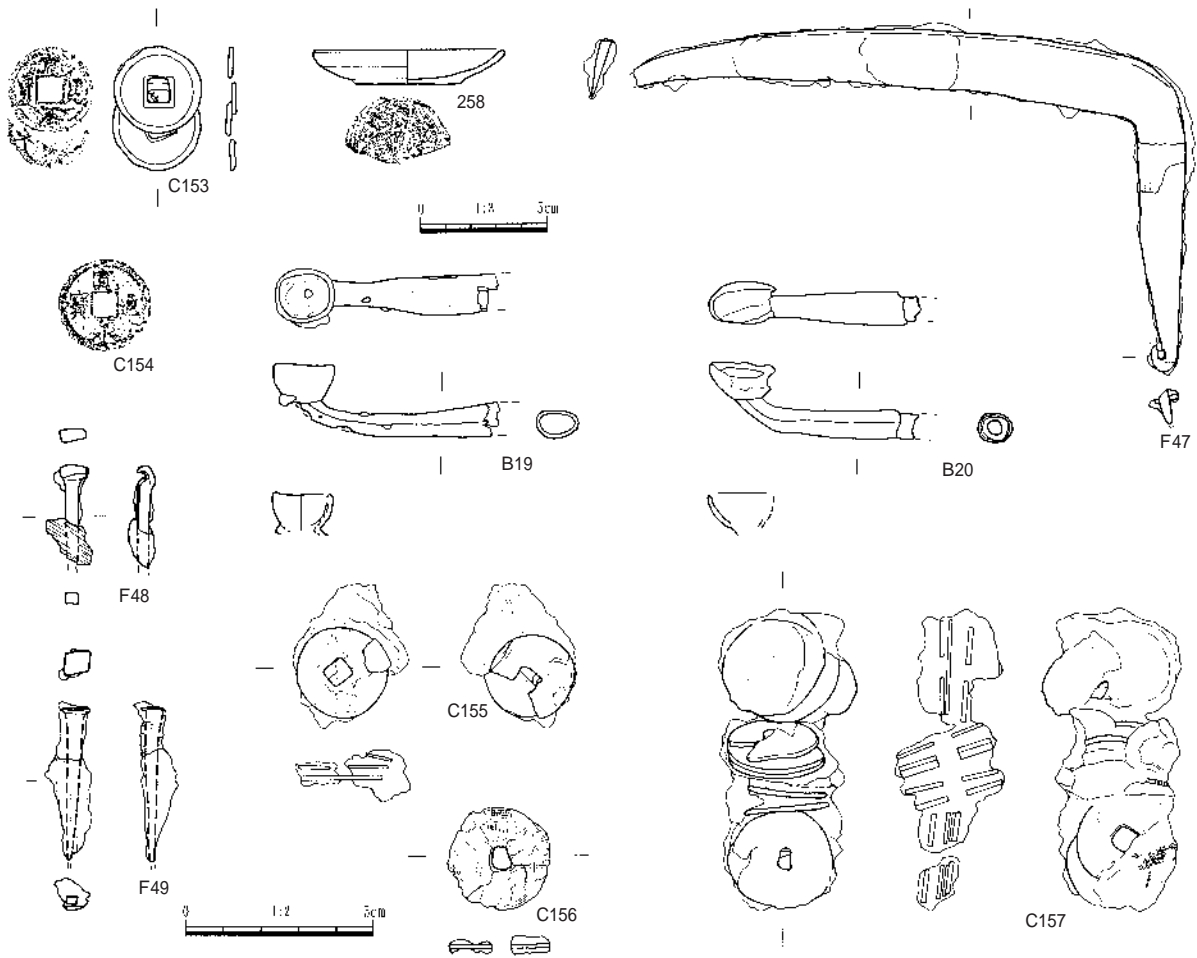


図105 墓66出土遺物

墓66 (図104・105、図版30)

墓密集域の中心部に位置し、墓114・墓69・墓185・墓184を切る。9個ほどの礫を集めて標石としている。標石周辺から銅銭3枚(C153・C154)、土師器皿(258)、鎌(F47)が出土した。なかでも鎌は墓66に供献されていた可能性が高い。

土壌は平面長方形で、長辺1.15m、短辺0.9m、標石下面からの深さ1mを測り、長軸方向を北から45度東に振る。土壌内上層(③・④層)から煙管の雁首が2点(B19・B20)出土している。

遺存状態はあまりよくないが、底面の狭い範囲で人骨を検出した。顔を下に向けた頭骨が土壌中心付近にあり、その北西側で右大腿骨が、西側で左大腿骨が、それぞれ遠位を西に向けて並んでいる。体幹骨や上肢骨も頭骨周辺にまとまっている。遺体の埋葬形態は体正面を西に向ける座葬と推定される。被葬者は熟年女性と推定されている。

遺物は、底面からは釘6本(F48・F49ほか)、鉄銭15枚(C155~C157)が出土した。鉄銭はいずれも大腿骨の間、腰の中央付近で出土しており、2枚が固着したC155には漆器塗膜が、C156には布が、12枚が固着したC157にはさらに何らかの鉄製品の破片が固着している。

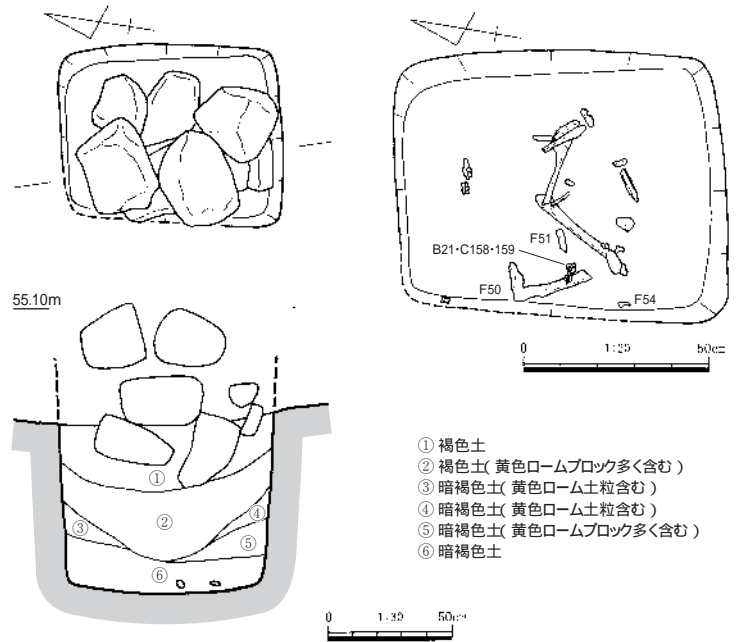


図106 墓67

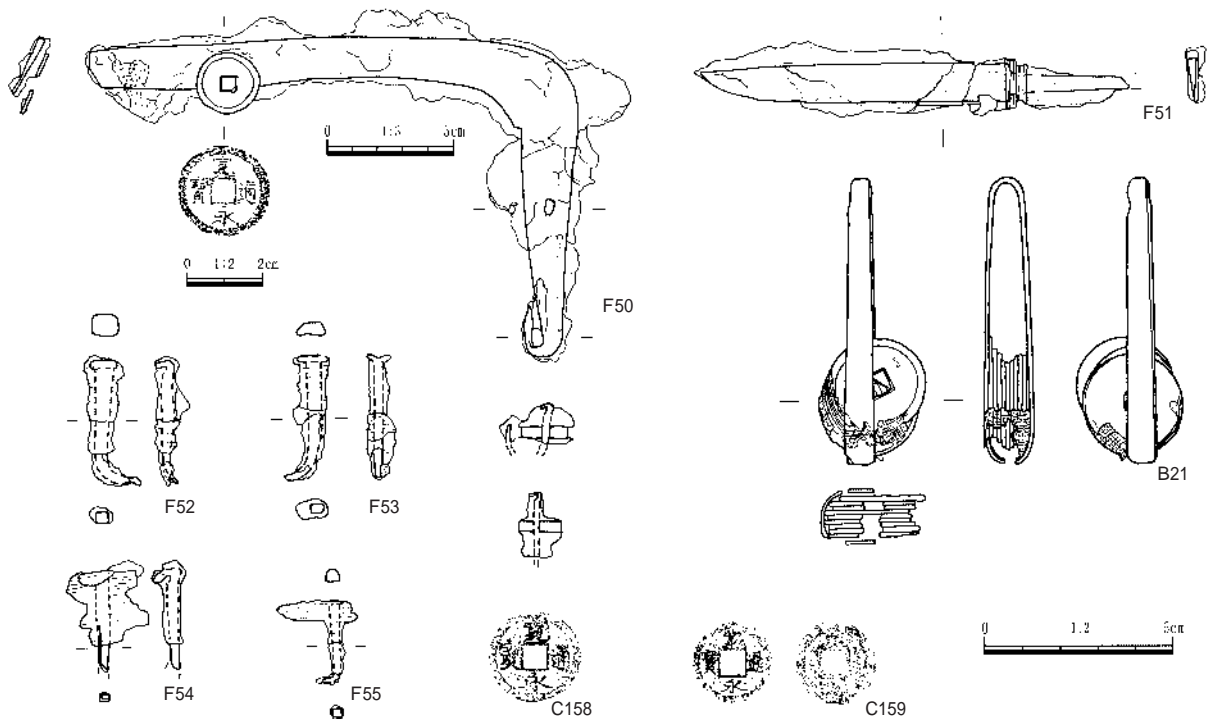


図107 墓67出土遺物

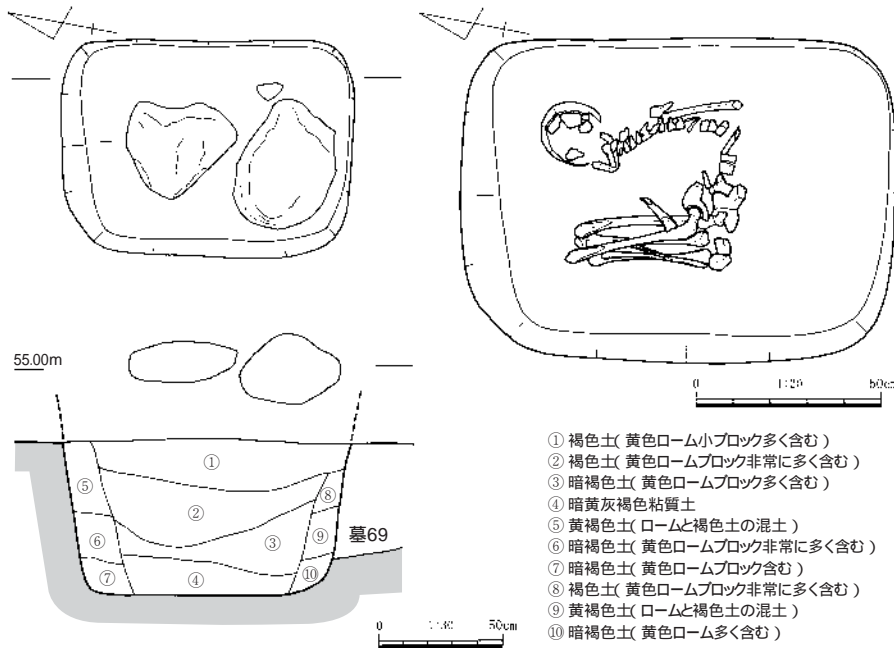


図108 墓68

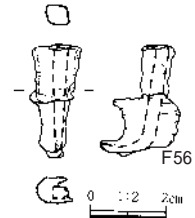


図109 墓68出土遺物

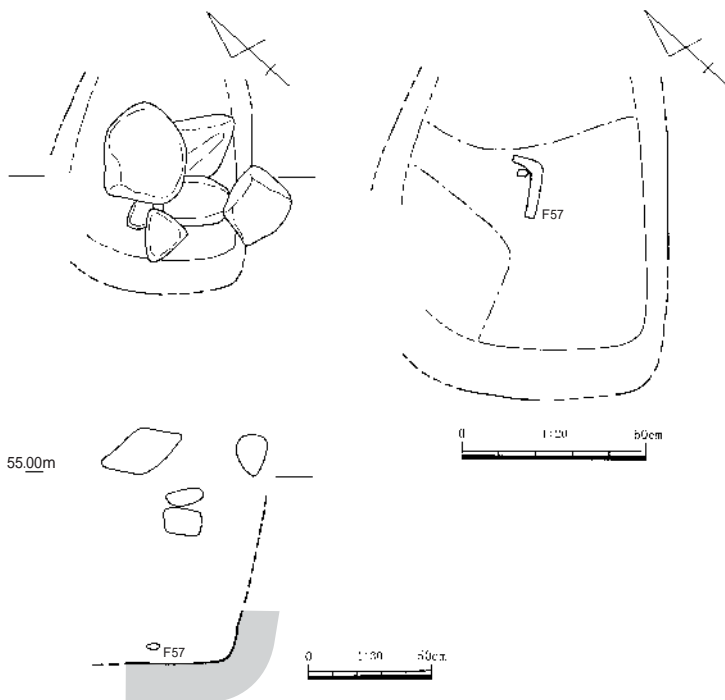


図110 墓69

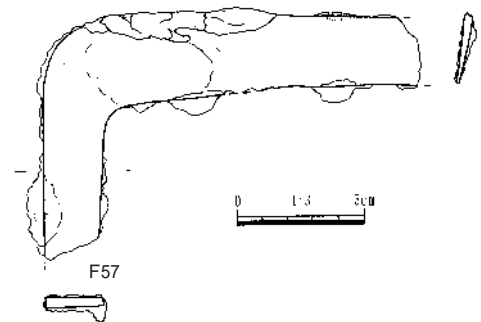


図111 墓69出土遺物

墓67 (図106・107、図版30)

墓密集域の中央付近に位置し、西側の肩を墓107に切られる。上面から土壌内上層にかけて10個ほどの礫が密に組まれた状態で検出された。

土壌は平面長方形で、長辺0.9m、短辺0.7m、標石下面からの深さ0.9mを測り、長軸方向を北から9度西に振

る。底面で人骨を検出した。北側に頭骨片があり、その南に上肢骨と下肢骨が東西に並んでいる。遺存状態が悪いため遺体の埋葬形態は不明である。被葬者は壮年前半の女性と推定されている。

遺物は土壌底面の西縁中央付近で鎌、銅合金製毛抜き、銅銭計12枚 (F50・B21・C159) が重なって出土し、そのすぐ東から刀子 (F51) が出土している。毛抜きと銅銭9枚が固着したB21には布が付着しているので、少なくとも毛抜きと銅銭12枚は頭陀袋などに入れられていたと考えられる。ほかに、底面から釘が21本 (F52～F55ほか) 出土している。

墓68 (図108・109、図版30)

墓密集域の中央付近に位置し、墓69・墓186を切る。上面には大型礫2個が並べられている。

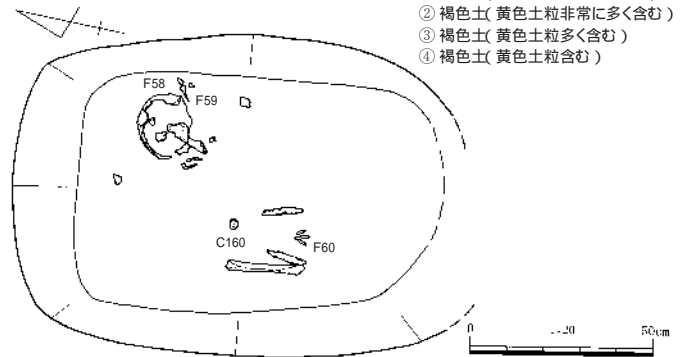
土壌は平面長方形で、長辺1.15m、短辺0.85m、標石下面からの深さ0.8mを測り、長軸方向を北から11度西に振る。底面で非常に遺存状態の良い人骨を検出した。北東側に頭骨があり、その南に椎骨が連なる。西側には膝を北に向けて折った下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬である。被葬者は壮年男性と推定されている。遺物は釘(F56)が1点出土しているが、混入したものであろう。



墓69 (図110・111、図版31)

墓密集域の中央付近に位置し、墓68・墓66・墓159・墓120に切られる。上面から土壌内上層にかけて礫が数個密に出土している。

土壌は平面長方形で、残存部分で、長辺0.8m、短辺0.75m、標石下面からの深さ0.8mを測り、長軸方向を東から43度北に振る。土壌底面から鎌(F57)が出土した。人骨は出土していない。



- ① 褐色土(黄色土粒やや多く含む)
- ② 褐色土(黄色土粒非常に多く含む)
- ③ 褐色土(黄色土粒多く含む)
- ④ 褐色土(黄色土粒含む)

墓70 (図112・113、図版31)

墓密集域の中央部に位置し、南端を墓160に切られ、墓186を切る。土壌上に8個ほどの礫を集めて標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺1.2m(残存値)、短辺0.9m、標石下面からの深さ0.85mを測り、長軸方向を北から10度西に向ける。土壌底面で人骨を検出した。土壌北東隅付近に顔を西に向けた頭蓋骨が、南西側に下肢骨がある。遺存状態が良くないため不明な部分もあるが、遺体の埋葬形態は北頭位の臥葬で、右側臥屈葬の可能性が高いと思われる。被葬者は壮年後半から熟年の女性と推定されている。

遺物は釘14本(F58~F60ほか)が底面付近で、布の付着した銅銭5枚・鉄銭1枚(C160)が土壌底面中央から、それぞれ出

図112 墓70

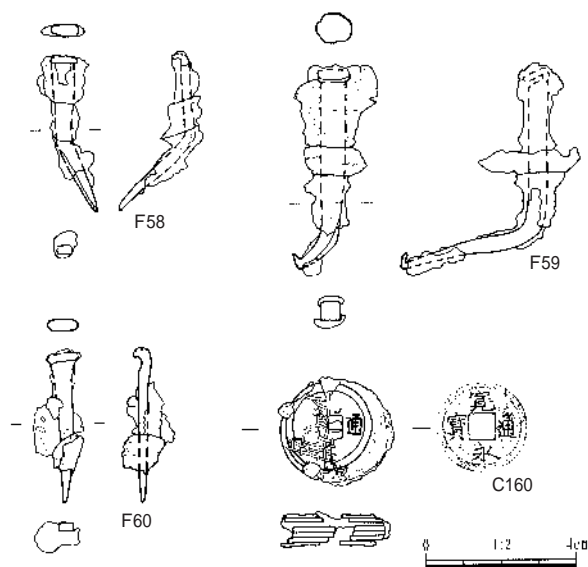


図113 墓70出土遺物

土している。

墓71 (図114・115、図版31)

墓密集域の西縁中央に位置し、墓162に切られる。十数個の礫を集めて標石としているが、いくつかの礫は土壌内に落ち込んでいる。

土壌は上面形が長楕円形に近い長方形で、長軸1.2m、短軸1m、標石下面からの深さ0.9mを測り、長軸方向を北から4度東に振る。土壌底面で比較的遺存状態の良い人骨を検出した。土壌北東に顔を下に向けた頭骨があり、その南に椎骨が連なる。南西側に膝を北に向けた下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と考えられる。被葬者は壮年後半から熟年の女性?と推定されている。

遺物は、左膝付近で鎌 (F61) が、頸部から右膝にかけて銅銭8枚 (C161~C166) が出土した。ほかに骨の下から釘が1点 (F62) 出土しているが、混入であろう。

墓72 (図116・117、図版31)

墓密集域の西縁中央に位置し、墓63・墓71・墓162に切ら

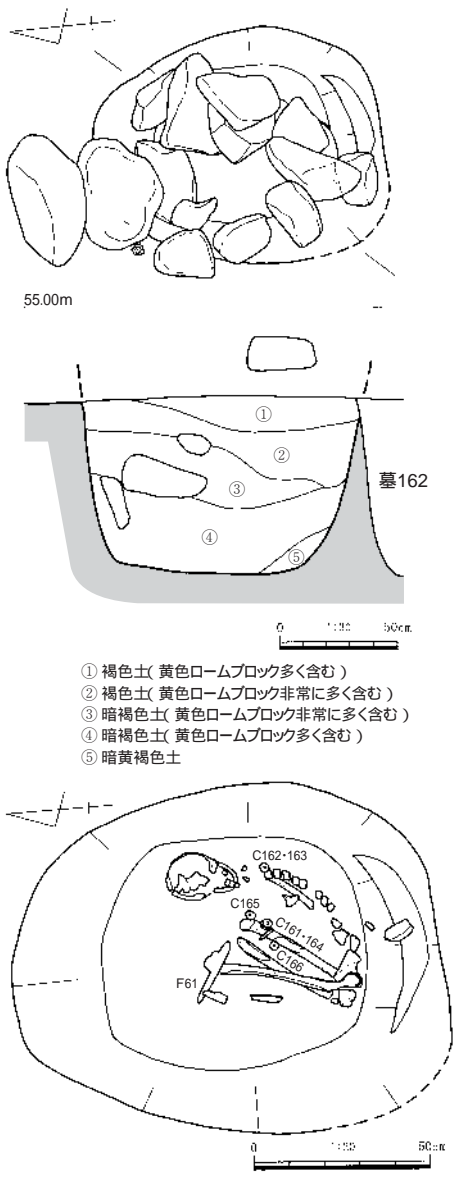


図114 墓71

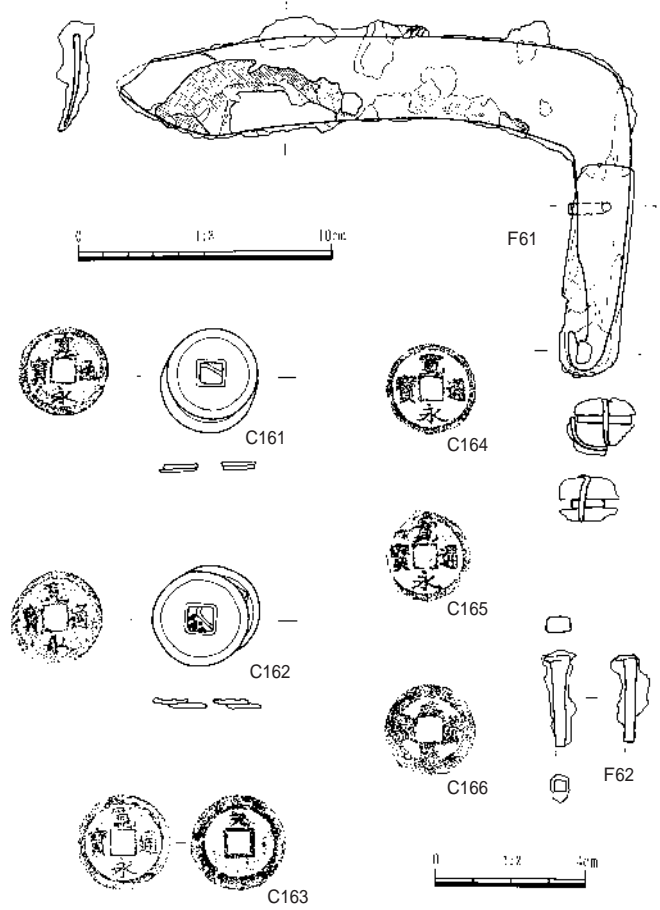


図115 墓71出土遺物

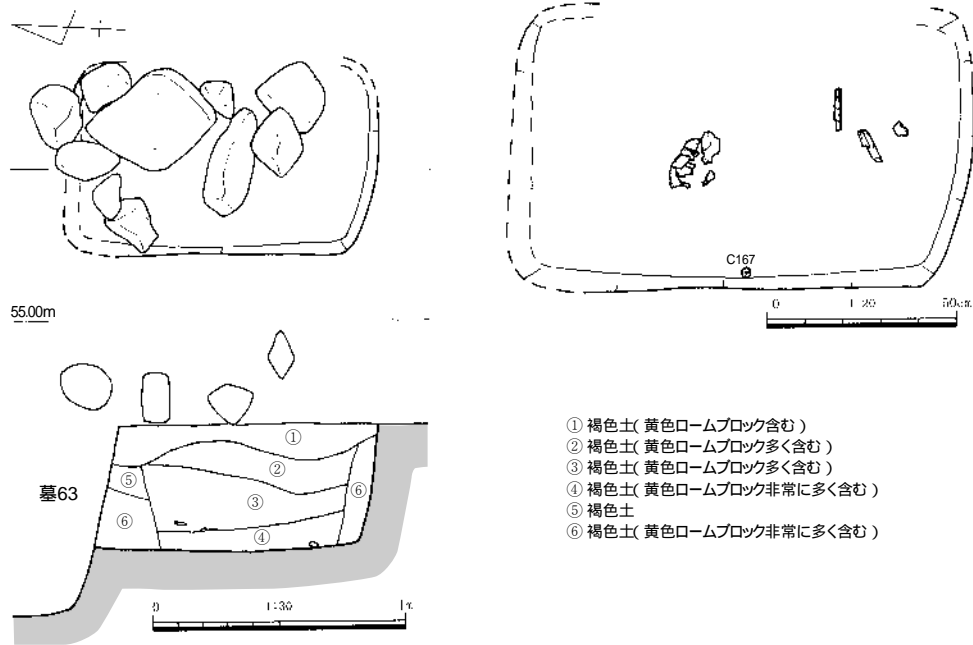


図116 墓72

れる。上面に10個ほどの礫を集めて標石としているが、北端の礫は墓63の標石と、東端の礫は墓162の標石と、それぞれはっきりと区別することができない。なお、標石の検出レベルは高低差が大きい、低い位置で検出したものも本来土壌上面にあったものであろう。

土壌は平面長方形で、長辺1.05m(残存値)、短辺0.75m、標石(高い位置出土のもの)下面からの深さ0.7mを測り、長軸方向を北から2度西に振る。土壌底面で人骨を検出した。土壌中央北寄りに頭骨片が、南側に下肢骨片がある。遺存状態が悪く、遺体の埋葬形態は判然としないが、北頭位の臥葬の可能性が高いと思われる。被葬者は壮年後半から熟年の女性と推定されている。

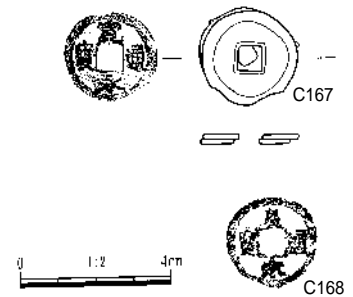


図117 墓72出土遺物

遺物は底面西縁中央付近から銅銭2枚(C167)が出土したほか、頭骨下から銅銭1枚(C168)が出土した。

墓73(図118・119、図版31・32)

G4区西縁中央部、立石1の南西に位置し、墓110を切る。10個ほどの礫を集めて標石としている。土壌は東西軸が長い長方形で、長辺1.3m、短辺0.7m、深さ0.75mを測り、長軸方向を西から1度南に振る。底面で遺存状態の良い人骨を検出した。頭頂部を上にして顔を東に向けた頭骨が土壌中央西寄りにあり、その南東に右下肢骨が、北東に左下肢が、ともに膝を西に向けて折った状態で並んでいる。遺体の埋葬形態は西頭位の仰臥屈葬と推定される。被葬者は熟年男性と推定されている。

遺物は、銅銭1枚(C169)が上層から出土し、底面からは人骨の下から玉髓片の固着した火打金(F64)が、右膝上で金具(F65・F66)が、右の足元付近で煙管雁首(B22)と銅製飾り金具(B23)がそれぞれ出土した。釘が1点(F63)のみ底面で出土しているが混入の可能性が高い。金具の蝶番(F65)と錠前(F66)は和筆筈や長持ちなどの金具と思われるので、こうした家具を棺として転用したのであろう。

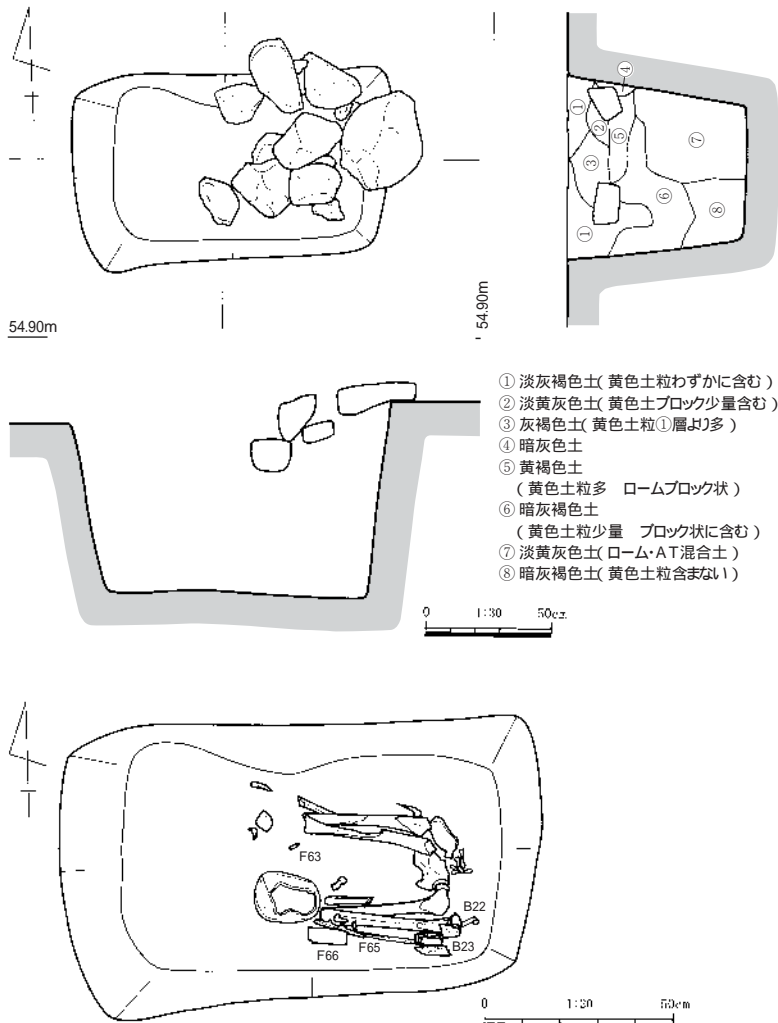


図118 墓73

- ① 淡灰褐色土(黄色土粒わずかに含む)
- ② 淡黄灰色土(黄色土ブロック少量含む)
- ③ 灰褐色土(黄色土粒①層より多)
- ④ 暗灰色土
- ⑤ 黄褐色土
(黄色土粒多 ロームブロック状)
- ⑥ 暗灰褐色土
(黄色土粒少量 ブロック状に含む)
- ⑦ 淡黄灰色土(ローム・AT混合土)
- ⑧ 暗灰褐色土(黄色土粒含まない)

墓74 (図120・121、図版32)

G4区東部の中央付近に位置し、北西隅を墓155に切られる。現状では標石は見られない。土壌上面から染付皿(図73:225)、染付小杯(図74:247)などの破片が出土している。

土壌は平面長方形で、長辺1.3m、短辺0.9m、深さ0.8mを測り、長軸方向を北から14度東に振る。土壌底面で人骨を検出した。土壌の北端寄りに頭骨があり、その南に脊椎が並び、南西側に左右の大腿骨が遠位を北に向けて並んでいる。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬であろう。被葬者は壮年男性と推定されている。

底面出土の遺物は、錆で固着した銅銭6枚・鉄銭1枚(C170)、鉄(F67)、煙管(B24)、木製数珠玉18個(W3~W20)で、すべて人骨の

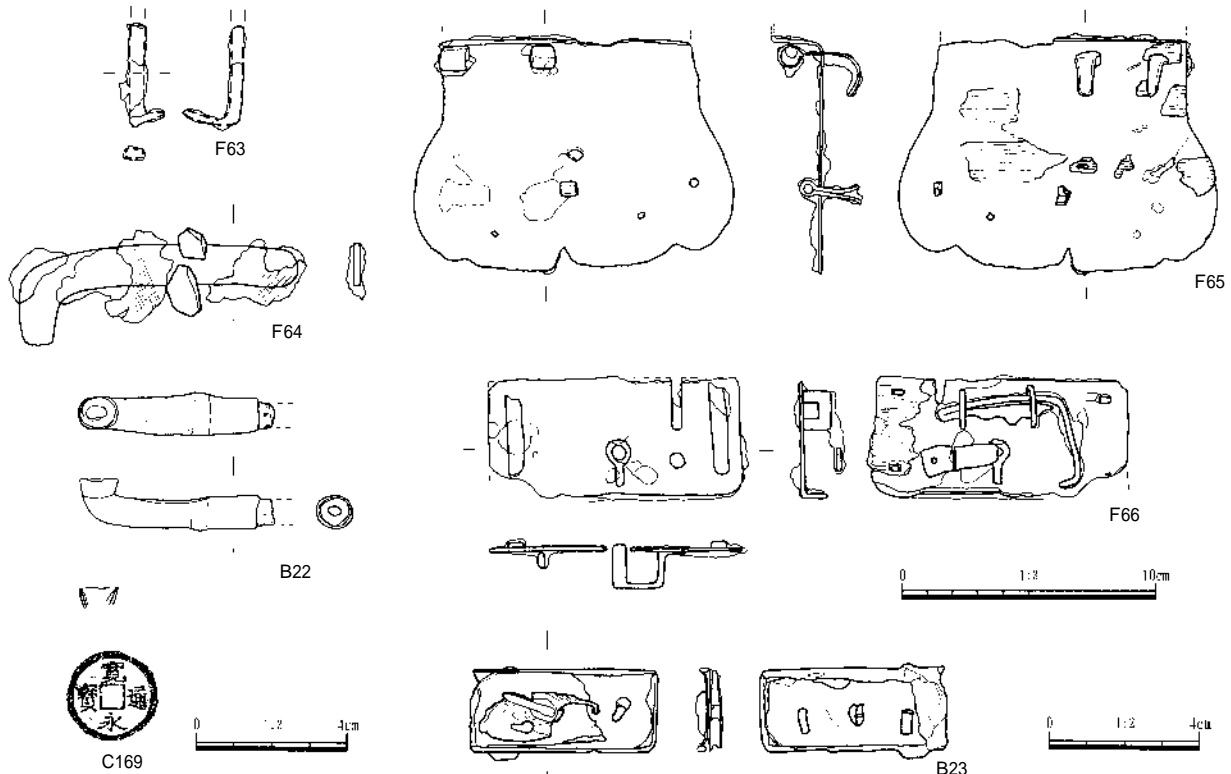


図119 墓73出土遺物

胸元に集中している。銭貨や鋏に布が付着しているので、副葬品は頭陀袋などに入れられて首にかけられたか胸元に置かれていたものと考えられる。

墓75 (図122・123、図版32)

G 4 区南東部に位置する。上面に6個の礫を並べて標石とする。

土壌は平面長方形で、長辺1.05m、短辺0.8m、標石下面からの深さ0.8mを測り、長軸方向を北か

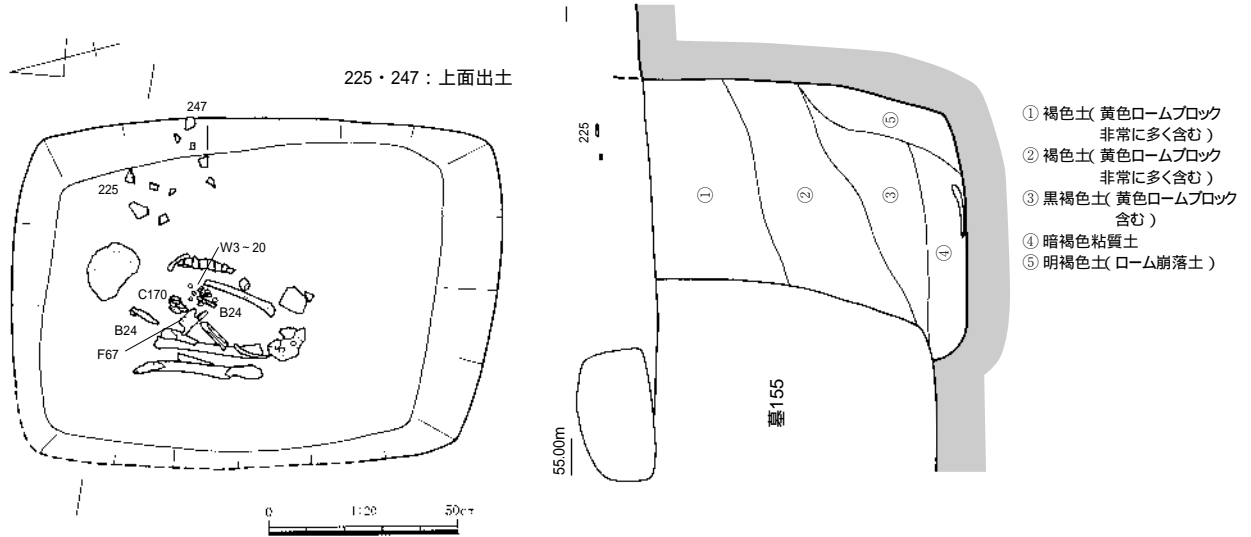


図120 墓74

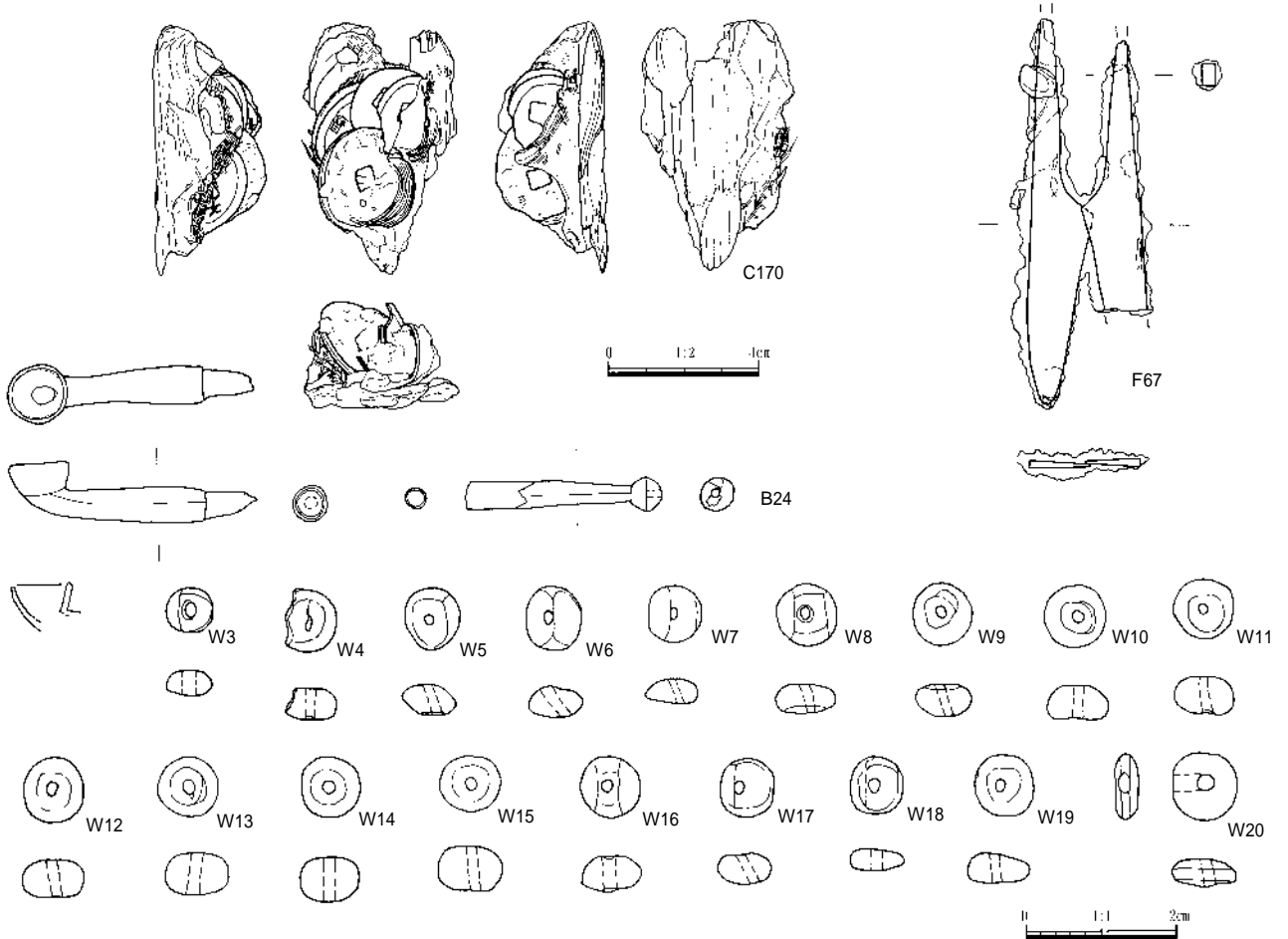


図121 墓74出土遺物

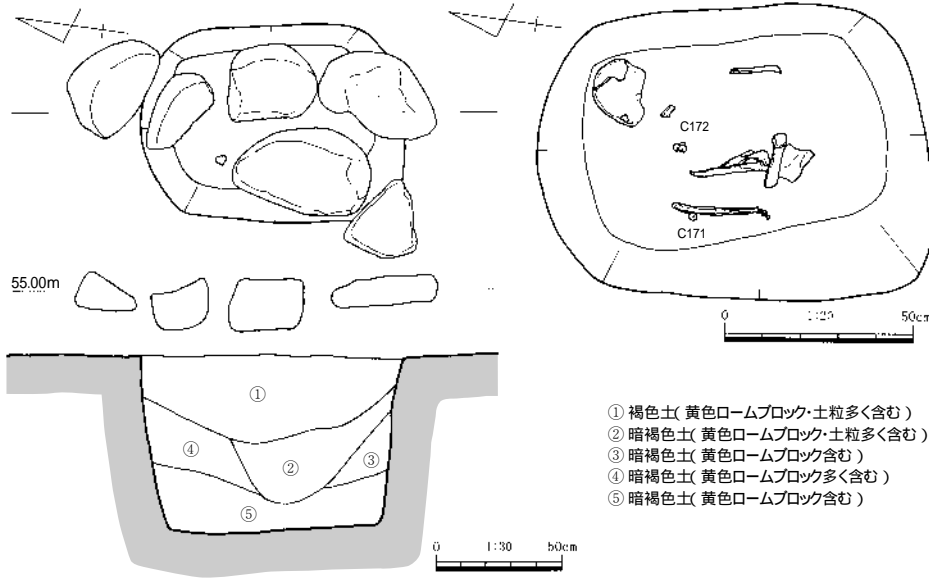


図122 墓75

- ① 褐色土(黄色ロームブロック・土粒多く含む)
- ② 暗褐色土(黄色ロームブロック・土粒多く含む)
- ③ 暗褐色土(黄色ロームブロック含む)
- ④ 暗褐色土(黄色ロームブロック多く含む)
- ⑤ 暗褐色土(黄色ロームブロック含む)

ら8度西に振る。底面から人骨を検出した。土壌北東隅に顔を西に向けた頭蓋骨があり、その南西に膝を北に向けた下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と推定される。被葬者は熟年女性と推定されている。

遺物は、右大腿骨の西から銅銭3枚(C171)が、底面中央北寄りから銅銭2枚・鉄銭1枚(C172)が出土した。ほかに、釘が1点(F68)出土しているが、混入の可能性が高い。

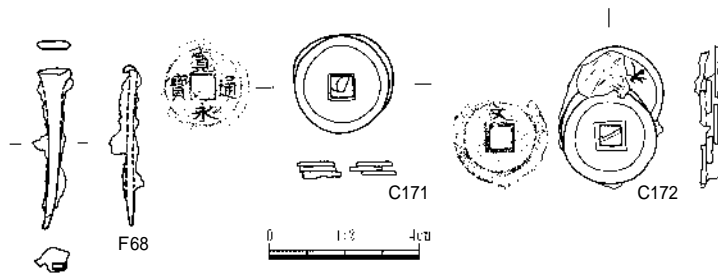


図123 墓75出土遺物

墓76

(図124・125、図版33)

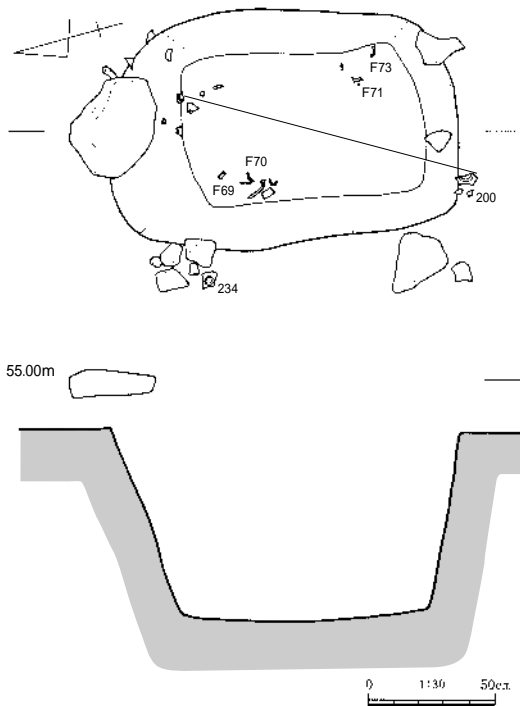


図124 墓76

G4区南東部に位置する。上面に大型礫1個のほか小型の礫が散漫に置かれている。礫周辺からは染付皿(図73:219)の破片、染付碗(図74:234)の底部片、陶器皿(図72:200)の破片が出土している。

土壌は平面長方形で、長辺1.35m、短辺0.95m、礫下面からの深さ0.9mを測り、長軸方向を北から15度東に振る。底面からは数点の骨片、釘9本(F69~F73ほか)、陶器皿破片(259)が出土した。人骨は成人のものと推定されている。

墓77(図126・127、図版33)

G4区南東部に位置する。現状では上面に礫は見られない。

土壌は平面長方形で、長辺1m、短辺0.8m、深さ0.9mを測り、長軸方向を北から8度東に振る。底面から人骨を検出した。北東部に顔を西に向けた頭骨があり、南西側に膝を北に向けた下肢骨がある。遺体の埋葬形態は

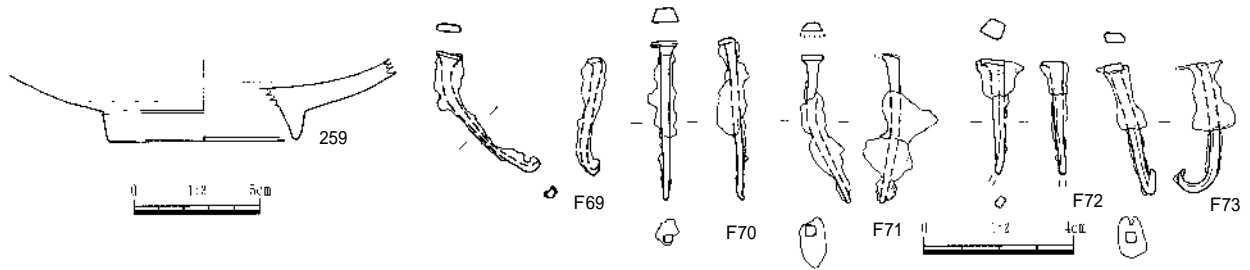


図125 墓76出土遺物

北頭位の右側臥屈葬と推定される。被葬者は成人女性？と推定されている。

遺物は、底面付近から底面より40cmほど浮いた位置にかけて釘が14本（F74・F75ほか）出土したほか、底面中央付近で銅銭4枚・鉄銭1枚（C173～C175）が出土した。銅銭には布の付着が見られる。

墓78（図128・129、図版33）

G 4区南東部に位置し、東側の肩を墓128・墓79に切られる。上面に大型礫が1個置かれている。土壌は平面長方形で、長辺1.2m、短辺0.9m、礫下面からの深さ0.8mを測り、長軸方向を北から1

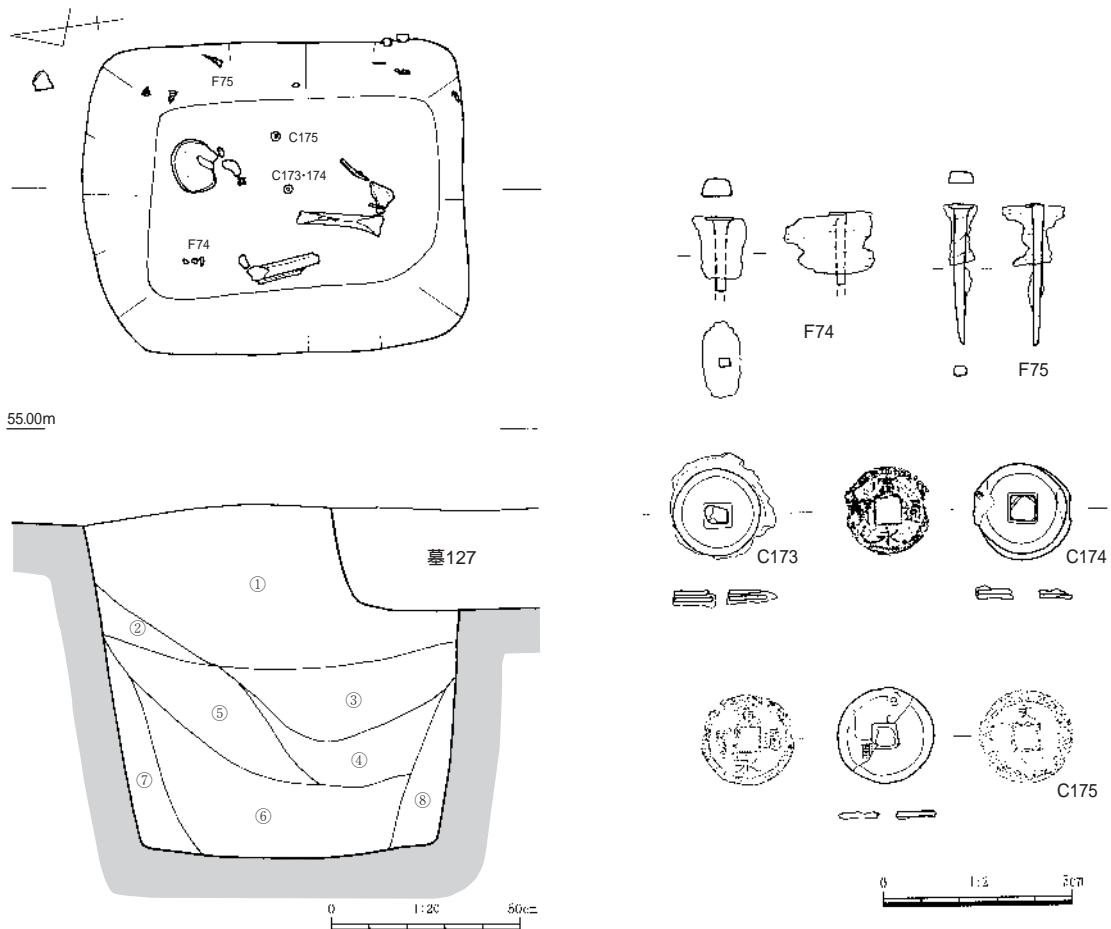


図127 墓77出土遺物

- ① 褐色土(黄色ローム多く含む)
- ② 暗褐色土(黄色ローム多く含む)
- ③ 暗黄褐色土(黄色ロームブロックと褐色土の混土)
- ④ 暗黄褐色土(黄色ロームブロックと褐色土の混土)
- ⑤ 暗褐色土(ロームブロック)
- ⑥ 褐色土(黄色ロームブロック多く含む)
- ⑦ 暗褐色土(黄色ローム多く含む)
- ⑧ 暗褐色土(黄色ローム多く含む)

図126 墓77

度東に振る。土壌内上層(①層)から鎌(F76) 釘(F77)が出土した。底面では、中央北東寄りから頭蓋骨が出土している。人骨はほかに小骨片しかないため不明な部分が多いが、土壌形態も考え合わせると、埋葬形態は臥葬の可能性が高いと思われる。被葬者は性別は不詳、年齢は壮年と推定されている。

遺物は底面東縁で鎌破片(F78) 底面南西部で銅銭2枚・鉄銭1枚(C176) 底面南部で銅銭1枚・鉄銭2枚(C177)と鉄(F79)が出土した。

墓79 (図130・131、図版33)

G4区南西部に位置し、北辺を墓128に切られ、墓78を切る。上面には小礫が数個乗っているのみで、明確な標石はもたない。

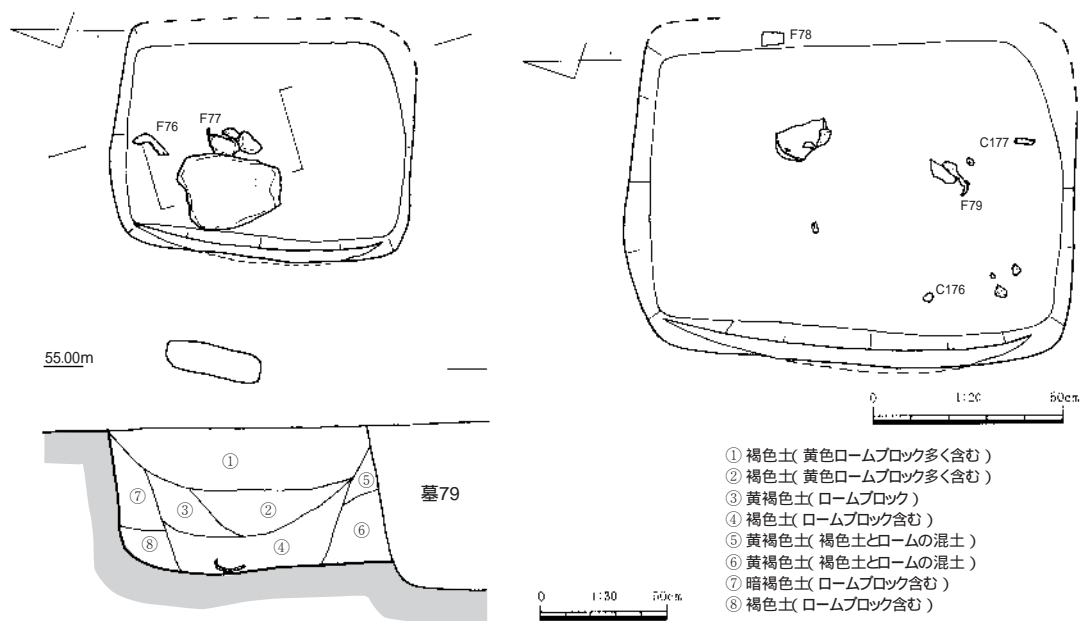


図128 墓78

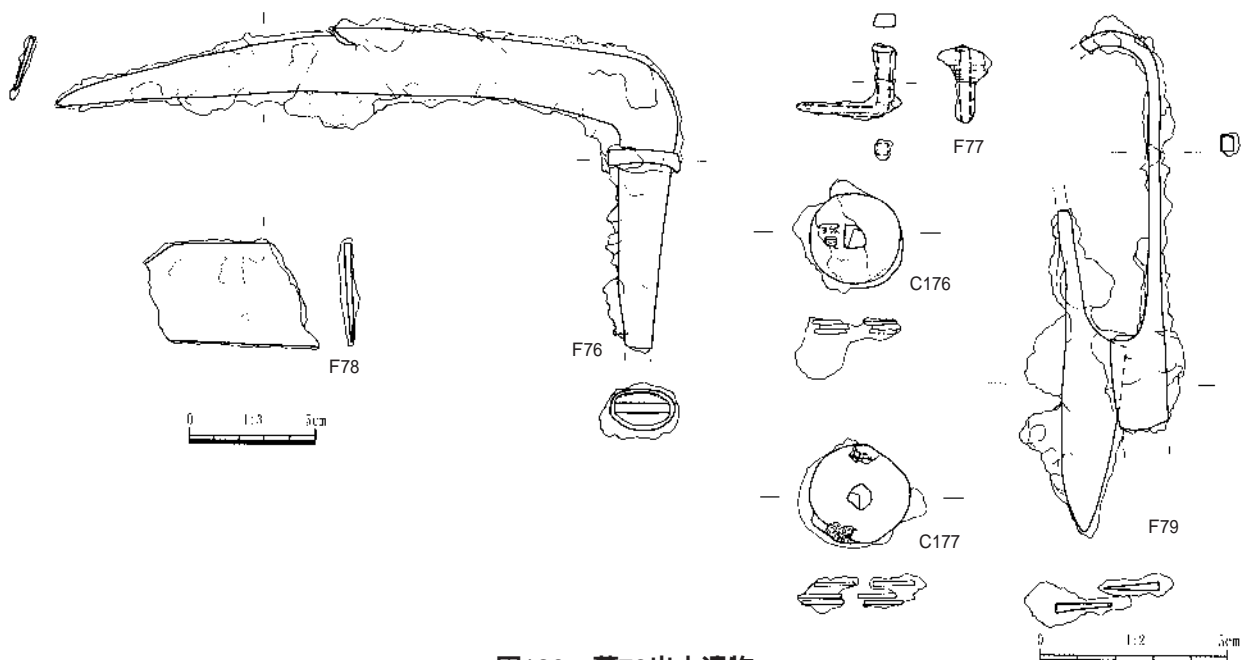


図129 墓78出土遺物

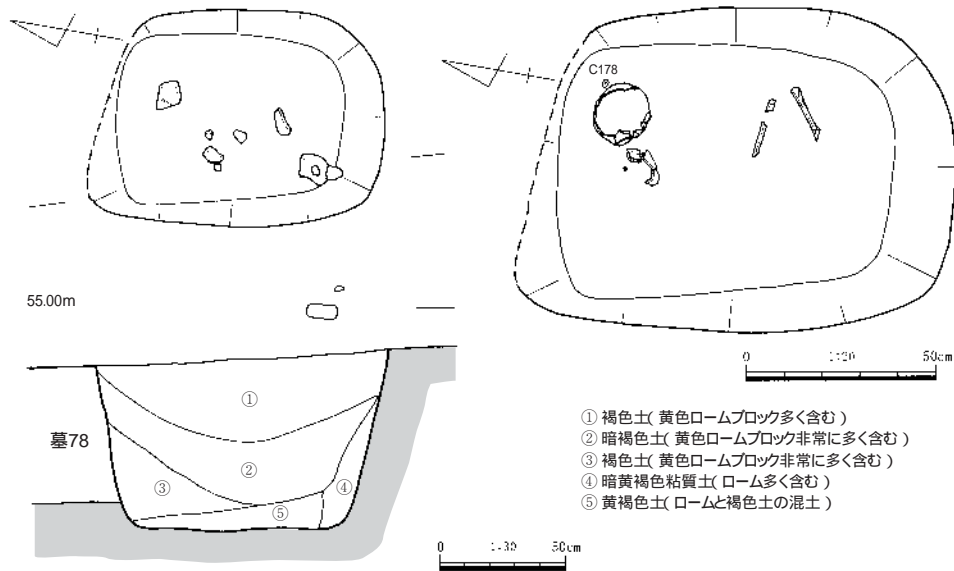


図130 墓79

土壌は平面長方形で、長辺1.1m、短辺0.85m、礫下面からの深さ0.8mを測り、長軸方向を北から8度西に振る。底面で人骨を検出した。北東隅付近に頭骨があり、その南に下肢骨片がある。骨の遺存状態が悪いため不明点が多いが、遺体の埋葬形態は臥葬と考えられる。被葬者は、性別は不詳、年齢は壮年後半から熟年と推定されている。

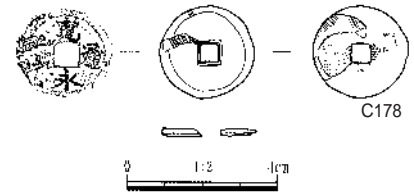


図131 墓79出土遺物

遺物は頭蓋骨の北東から布の付着した銅銭1枚(C178)が底面に接して出土した。

墓80 (図132・133、図版34)

G 4区南縁中央部に位置する。土壌上に10個ほどの礫を集めて標石としている。

土壌は平面長方形で、長軸1.2m、短軸0.9m、標石下面からの深さ0.8mを測り、長軸方向を北から

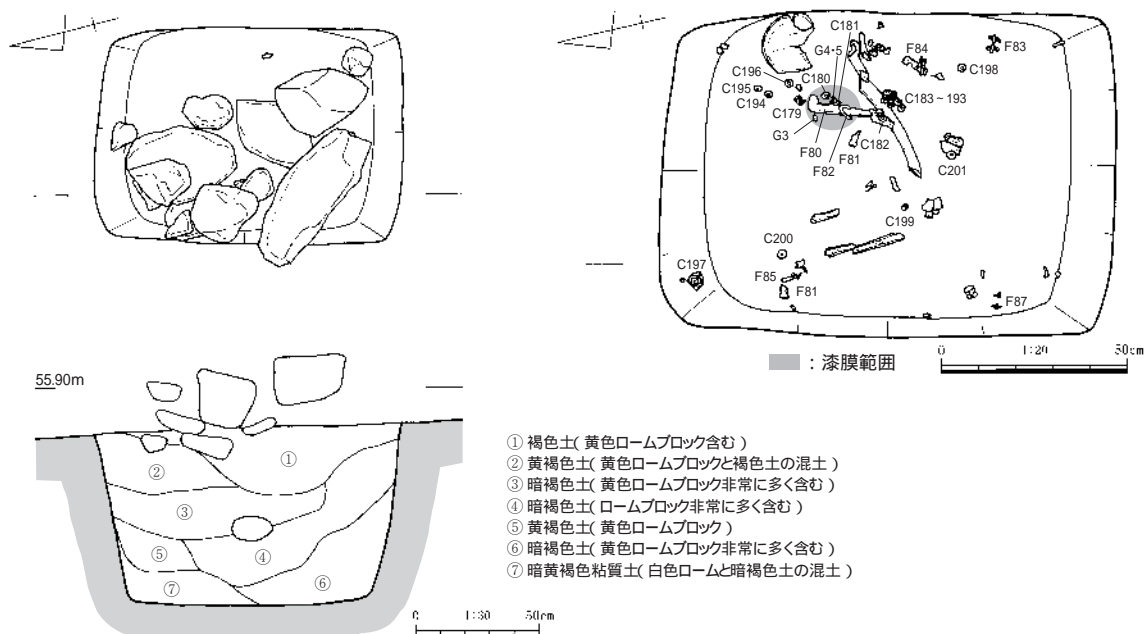


図132 墓80

13度東に振る。土壌底面で人骨を検出した。土壌北東隅に顔を西に向けた頭骨があり、南に椎骨が連なる。これらの西側に交連状態を全く保たない下肢骨がある。遺存状態が悪く、不明な部分が多いが、遺体の埋葬形態は北頭位の臥葬の可能性が考えられる。被葬者は熟年男性と推定されている。

遺物は、底面付近から底面より20cmほど浮いた位置にかけて釘が40点（F83～F87ほか）出土しており、棺材と見られる木材片も出土している。副葬品と考えられる遺物は、頭骨の南西側で鎌（F80）
 鋏（F81）毛抜き（F82）ガラス製数珠玉（G4・G5）布（G3）が底面直上で出土したほか、37枚と大量の銅銭（C179～C202）が出土した。銅銭は、頭骨南西側で28枚（C179～C193）が、頭骨北西側で3枚（C194～C196）がそれぞれ底面付近でまとまって出土し、そのほか6枚（C197～C198）は分散して出土した。頭骨周辺でまとまって出土した遺物は頭陀袋などに入れられて副葬されていたものと思われる。分散して出土した銅銭は木材の上に乗って底面から数cmから20cmほど浮いた位置で出

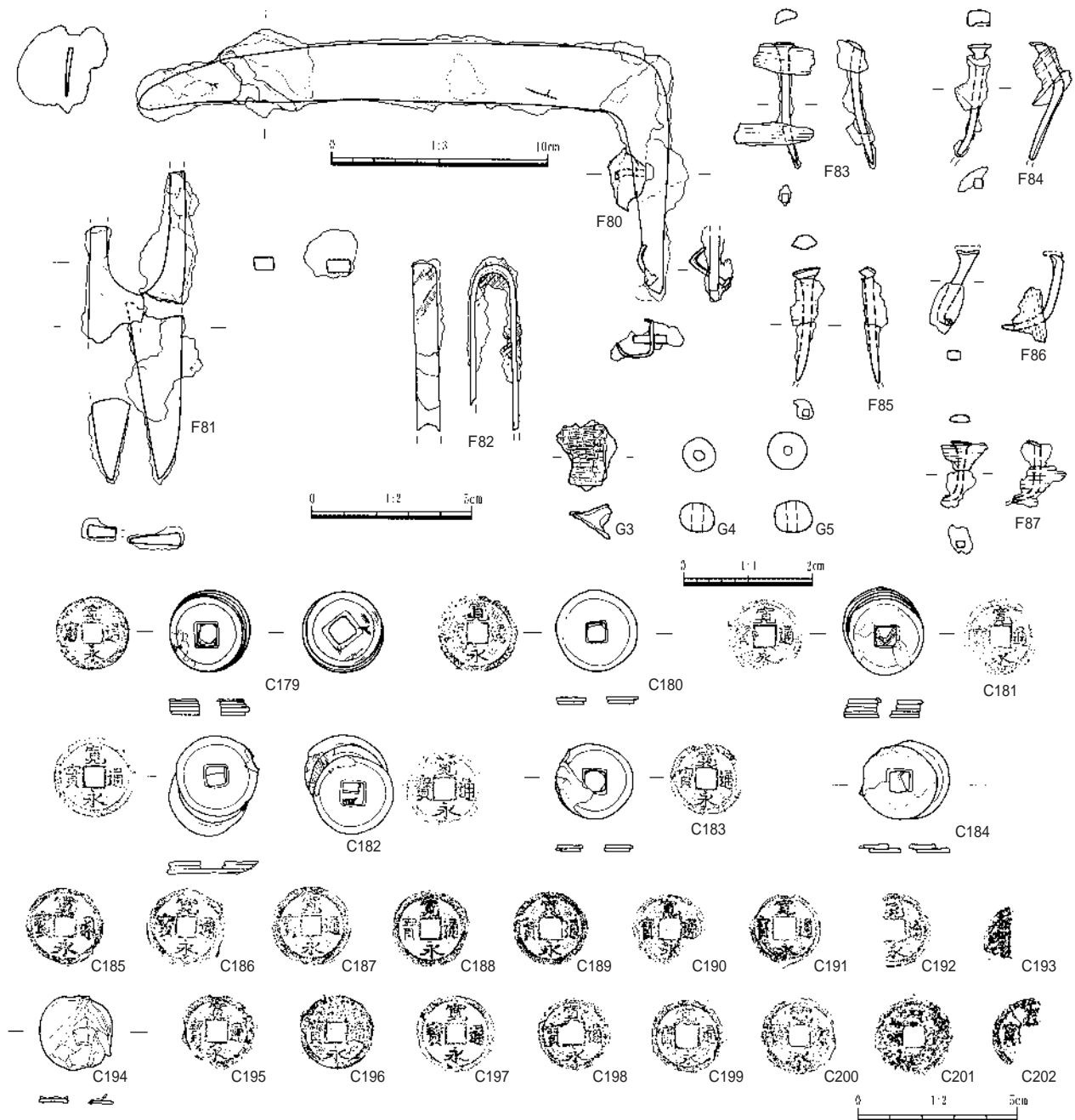


図133 墓80出土遺物

土したものもあるので、棺上に置くなど埋納過程で入れられたものかもしれない。ただし、破損したものも見られるので混入品が含まれる可能性もあろう。

墓81 (図134・135、図版34)

G 4 区南部に位置し、北側を墓122に、南側を墓175にそれぞれ切られる。現状では上面に礫は見られない。

土壌は平面長方形で、長辺1.15m、短辺0.85m、深さ0.65mを測り、長軸方向を北から6度西に振る。土壌内②層中から染付小杯(260)が出土した。底面では人骨を検出した。土壌中央の南西寄りに下肢骨がまとまっている。人骨の遺存状態が悪いため、遺体の埋葬形態は不明である。被葬者は、性別は不詳、年齢は成人と推定されている。底面からは遺物は出土していない。

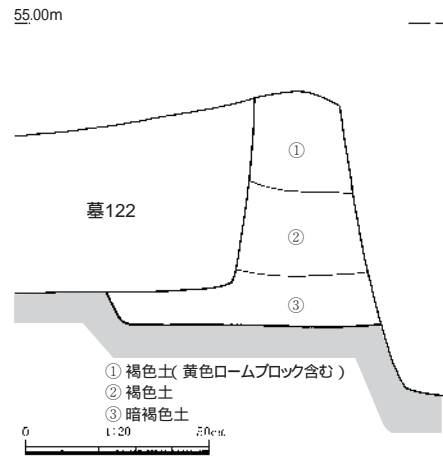
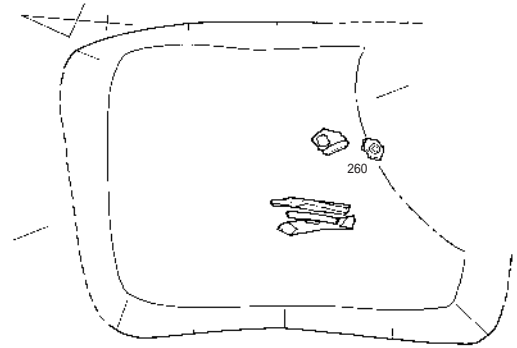


図134 墓81

墓82 (図136・137、図版34・70)

G 4 区南西部に位置し、墓83を大きく切る。上面から土壌内上層にかけて密に集まった10個ほどの礫を検出した。

土壌は平面長方形で、長辺1.4m、短辺0.95m、標石下面からの深さ0.85mを測り、長軸方向を北から13度西に振る。土壌底面は二段掘りになっている。土壌上層(①~③層)中から鎌(F88)、土師器皿(261)が出土したほか、陶器擂鉢(図206:277)の口縁部破片が出土した。

底面北部では人骨がまとまって出土した。土壌底面北西隅に左下肢骨が、北東隅に右下肢骨がそれぞれ膝を立てて並んでおり、右下肢の南側に頭骨、体幹骨、上肢骨がまとまっている。遺体の埋葬形態は体正面を北に向ける立膝座葬と推定される。被葬者は熟年女性と推定されている。

遺物は、左下肢の南の底面付近で鎌(F89)、底面北西隅付近から布と固着した銅銭計11枚(C203・C204)、土壌底面南東隅で火打金(F90)と銅銭1枚(C205)が出土した。C203・C204には毛髪が付着しており、近親者などの髪を銅銭と一緒に頭陀袋に入れて副葬した可能性が考えられる。

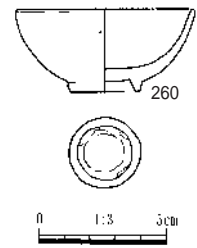


図135 墓81出土遺物

墓83 (図136)

墓82に土壌の大部分を切られる。土壌は残存部分が極めて少なく不明な部分が多いが、平面形は長方形と推定でき、長辺1.35m、短辺残存値0.65m、深さ0.6mを測り、長軸方向を北から15度東に振る。土壌内からは人骨、遺物とも出土していない。

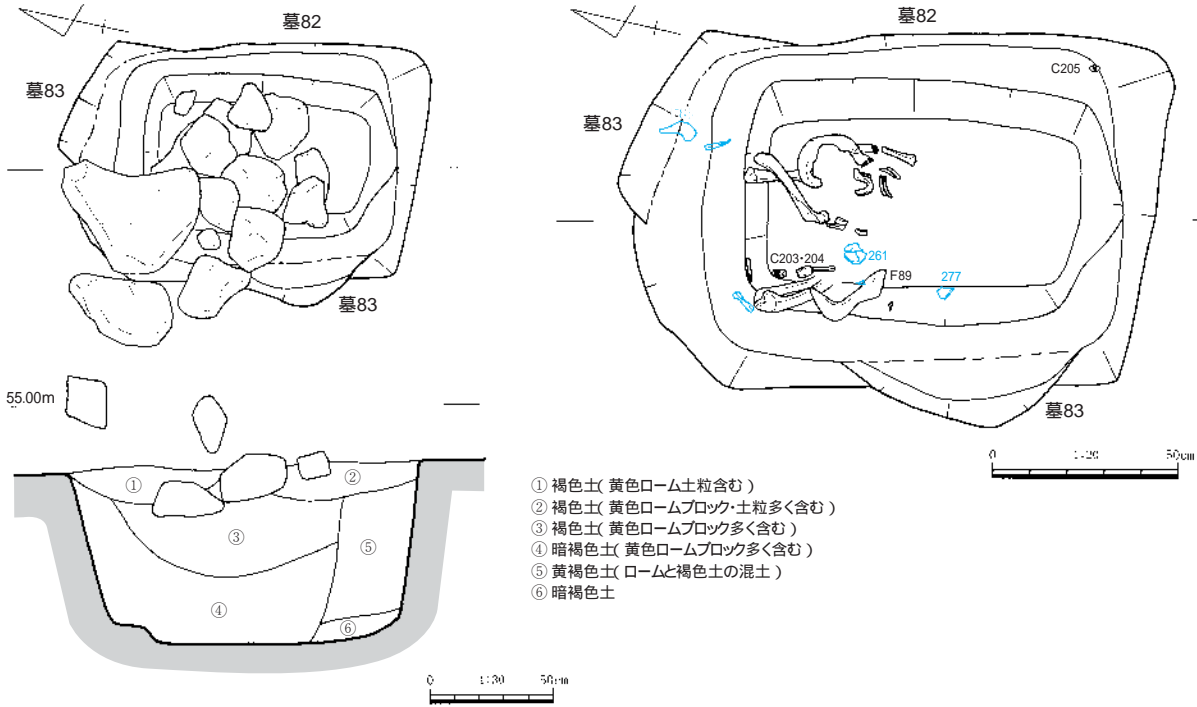


図136 墓82・83

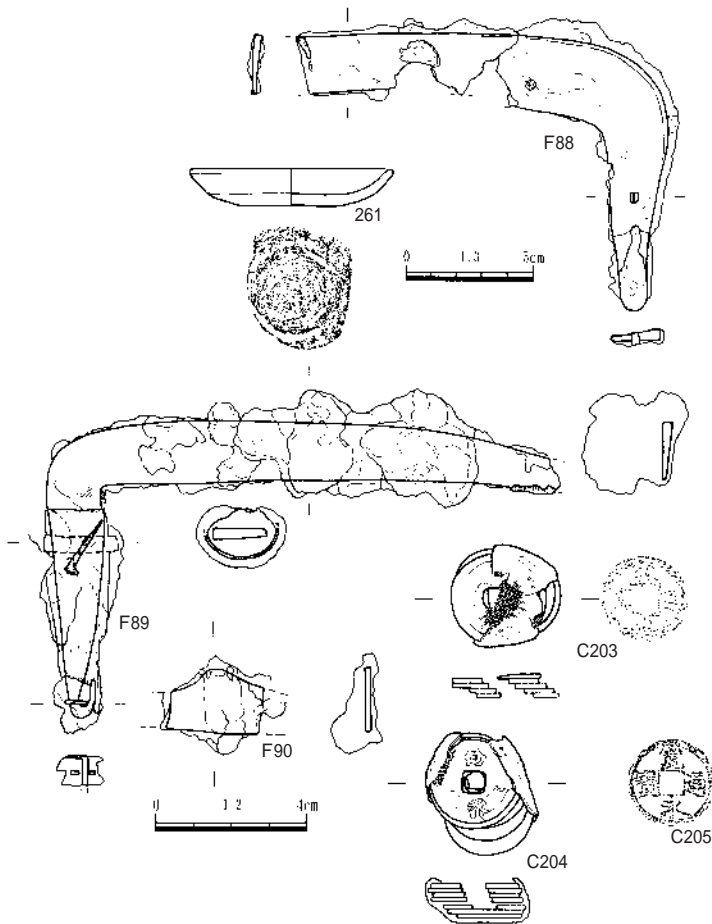


図137 墓82・83出土遺物

墓84 (図138・139、図版35)

G 4 区南部に位置する。土壌上面に10個ほどの礫を組んで標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺1.25m、短辺0.85m、標石下面からの深さ0.75mを測り、長軸方向を北から17度東に振る。底面の東縁、西縁は中央部より数cm高い。底面から遺存状態の良い人骨を検出した。底面北東隅に顔を下に向けた頭蓋骨があり、その南西側に上肢骨・下肢骨がある。いずれも交連状態を若干崩している。下肢の並びは、西から左上腿、左下腿、右上腿、右下腿の順になっているので、遺体の埋葬形態は北頭位の伏臥屈葬と考えられる。被葬者は壮年男性と推定されている。

遺物は、頭蓋の西隣から銅銭7枚(C206)、頭骨内から銅銭3枚(C207~C209)が、頭蓋骨の下から鉄(F92)が出土した。いずれも近接しており、

鍔に布が付着していたことから、これらは頭陀袋などに入れられていたと考えられる。ほかに釘1点（F91）が出土したが、混入したものであろう。

墓85（図140・141、図版35）

墓密集域の南西部に位置し、北東側を墓160に、西側を墓165にそれぞれ切られる。上面では標石を検出できなかったが、土壌内上層で1個の礫が出土した。

土壌は平面長方形で、長辺1.05m、短辺0.7m、深さ0.7mを測り、長軸方向を北から20度東に振る。底面から人骨が出土している。骨は土壌中央北側にまとまっており、頭骨が上から、上肢骨、下肢骨がその下から出土した。遺体の埋葬形態は正面を西に向ける座葬と考えられる。被葬者は壮年後半から熟年の男性と推定されている。

遺物は、頭蓋骨の下から銅銭が4枚（C210・C211）出土したほか、底面付近で釘が7本（F93ほか）出土した。

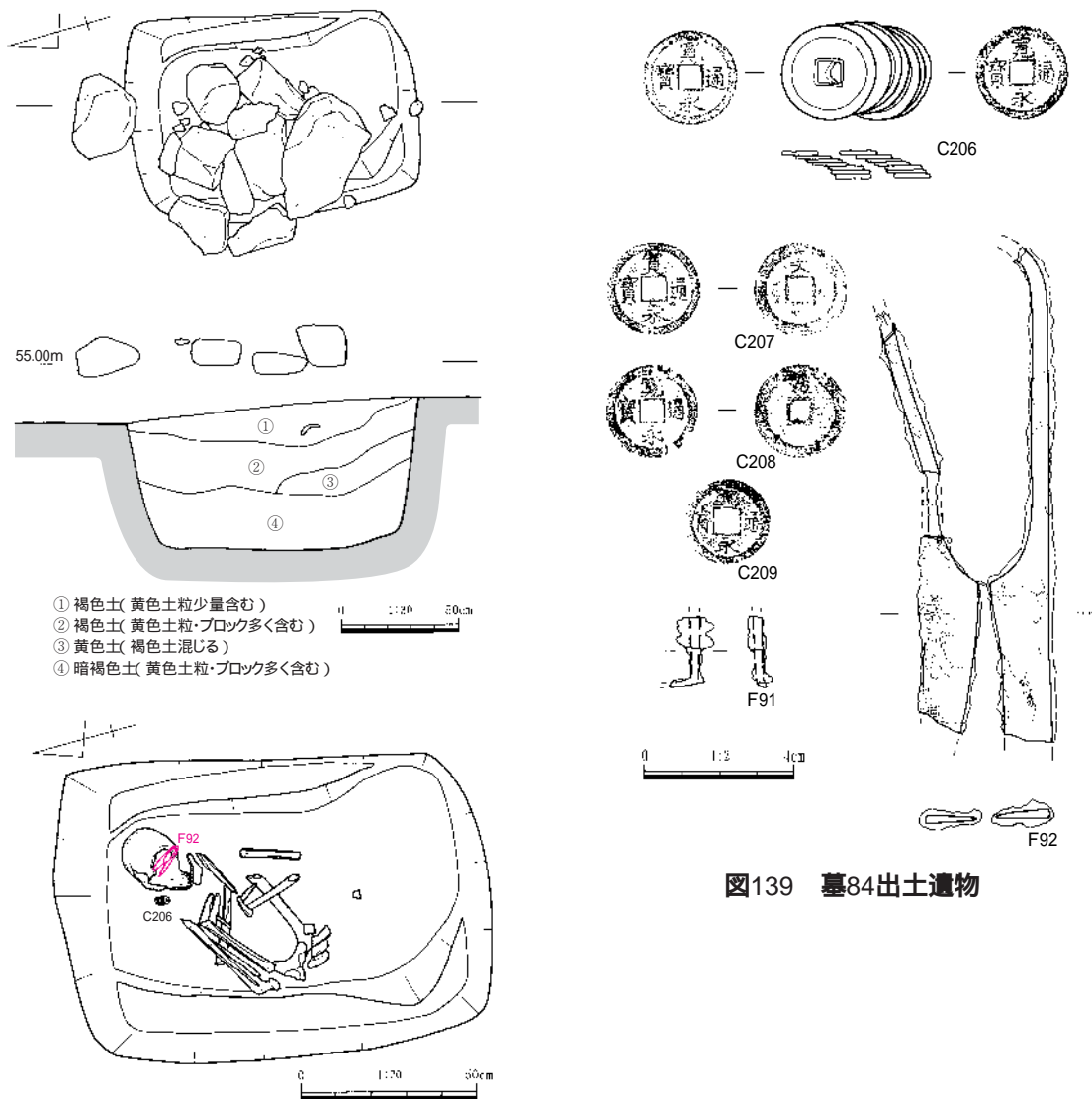


図139 墓84出土遺物

図138 墓84

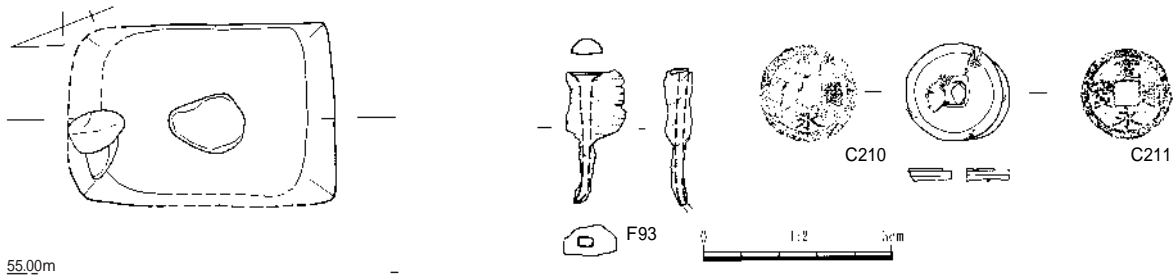
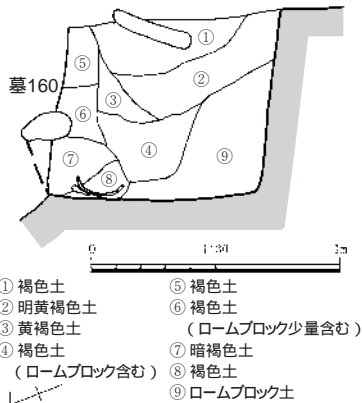


図141 墓85出土遺物



- ① 褐色土
- ② 明黄褐色土
- ③ 黄褐色土
- ④ 褐色土 (ロームブロック含む)
- ⑤ 褐色土
- ⑥ 褐色土 (ロームブロック少量含む)
- ⑦ 暗褐色土
- ⑧ 褐色土
- ⑨ ロームブロック土

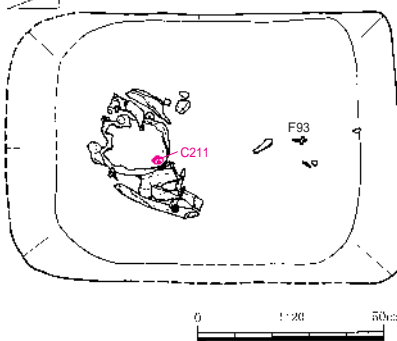


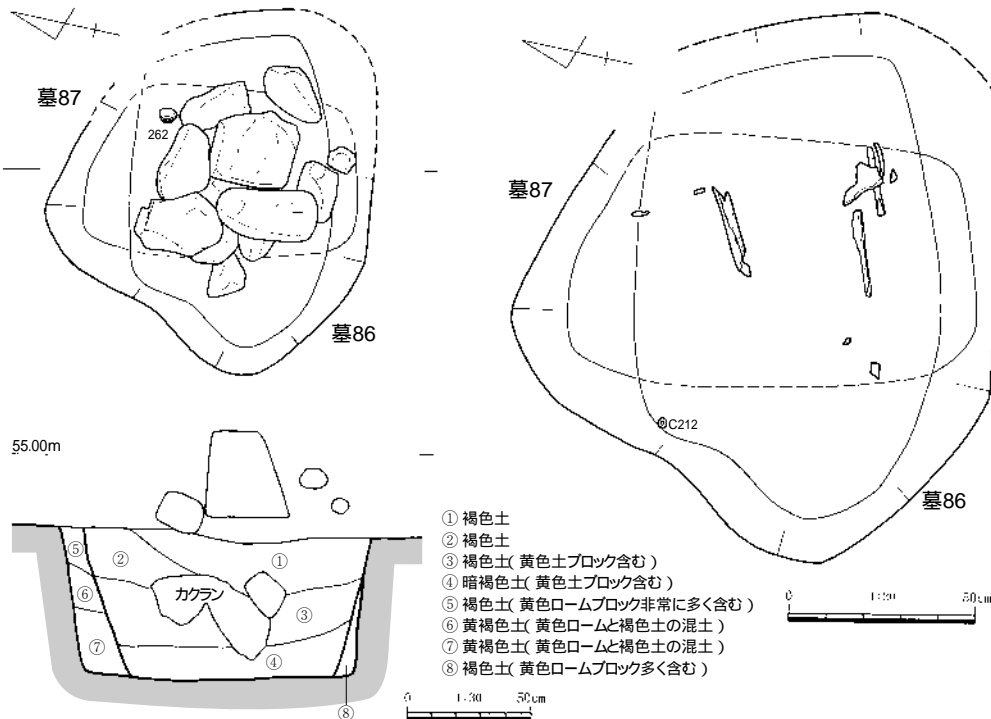
図140 墓85

墓86 (図142・143、図版35)

G 4 区の南西部に位置し、墓87の大部分と墓123の一部を切り、北東隅を墓165に切られる。土壌上面の中央に10個ほどの礫を密に集めて標石としている。標石周辺から完形の染付盃(262)が出土した。

土壌は平面長方形で、長辺1.45m、短辺1m、標石下面からの深さ0.65mを測り、長軸方向を西から11度南に向ける。底面で人骨を検出した。土壌底面東寄りに下肢骨などが見られるほか、歯牙が出土している。人骨の遺存状態が悪く、遺体の埋葬形態は不明である。被葬者は壮年から熟年の男性と推定されている。

遺物は、銅銭1枚(C212)が土壌底面北西隅で出土した。ほかに、底面から染付碗(図74:233)と染付小杯(図74:238)の破片が出土している。



- ① 褐色土
- ② 褐色土
- ③ 褐色土(黄色土ブロック含む)
- ④ 暗褐色土(黄色土ブロック含む)
- ⑤ 褐色土(黄色ロームブロック非常に多く含む)
- ⑥ 黄褐色土(黄色ロームと褐色土の混土)
- ⑦ 黄褐色土(黄色ロームと褐色土の混土)
- ⑧ 褐色土(黄色ロームブロック多く含む)

図142 墓86・87

墓87 (図143、図版35)

G 4 区の南西部に位置し、墓86に大きく切られるほか、墓165・墓123にも切られる。現状では標石などは見られない。

土壌は平面長方形で、長辺1.3m、短辺0.8m、墓86の標石下面からの深さ0.65mを測り、長軸方向を北から11度西に向ける。墓86に大きく切られているため底面がほとんど残存しておらず、土壌内からは遺物、人骨とも出土していない。

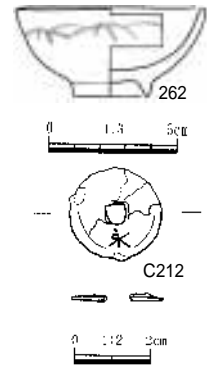


図143 墓86出土遺物

墓88 (図144・145、図版36)

G 4 区西縁付近南部に位置し、墓89を切る。上面に大小の礫を20個ほど密に組んで標石としている。標石周辺から染付急須 (263:ただし蓋は墓177上面で出土)、染付皿 (264)、染付碗 (265)、染付小杯 (266)、鎌 (F94) が出土した。いずれも破損が小さく、平面的にも分散しないので、この標石に供献されたと考えられる。ただし、これらの供献が墓88の埋葬直後になされたとは限らない。特に染付の磁器はいずれも近代以降のもので、墓88の埋葬の時期とは合わないと思われる。

土壌は平面長方形で、長辺1.15m、短辺1m、標石下面からの深さ0.9mを測り、長軸方向を北から3度東に振る。土壌底面には長さ0.75m、幅0.4mの長方形に深さ数cmの窪みがつくられており、この窪みの中から人骨と遺物を検出した。

人骨は北に顔を西に向けた頭骨があり、南に遠位側を北に向けた左右の大腿骨が並ぶ。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と推定される。被葬者は熟年男性と推定されている。

遺物は、煙管 (B25)、櫛 (W21)、銅銭6枚 (C213)、鋏 (F95) が、いずれも人骨の間や人骨の下から出土した。鋏と煙管には布が付着しているので、副葬品は頭陀袋などに入れられていたと推定できる。ほかに釘が1点出土しているが、混入と思われる。

墓89

(図146・147、図版36)

G 4 区西縁南部に位置し、北東部を墓88に、南東部を墓166にそれぞれ切られる。土壌上面付近で小型の礫が数個土壌内に半分ほど落ち込んだ状態で出土した。上面からは染付盃 (267) が出土している。

土壌は平面長方形で、長辺1.5m、短辺1m、標石下面からの深さ0.7mを測

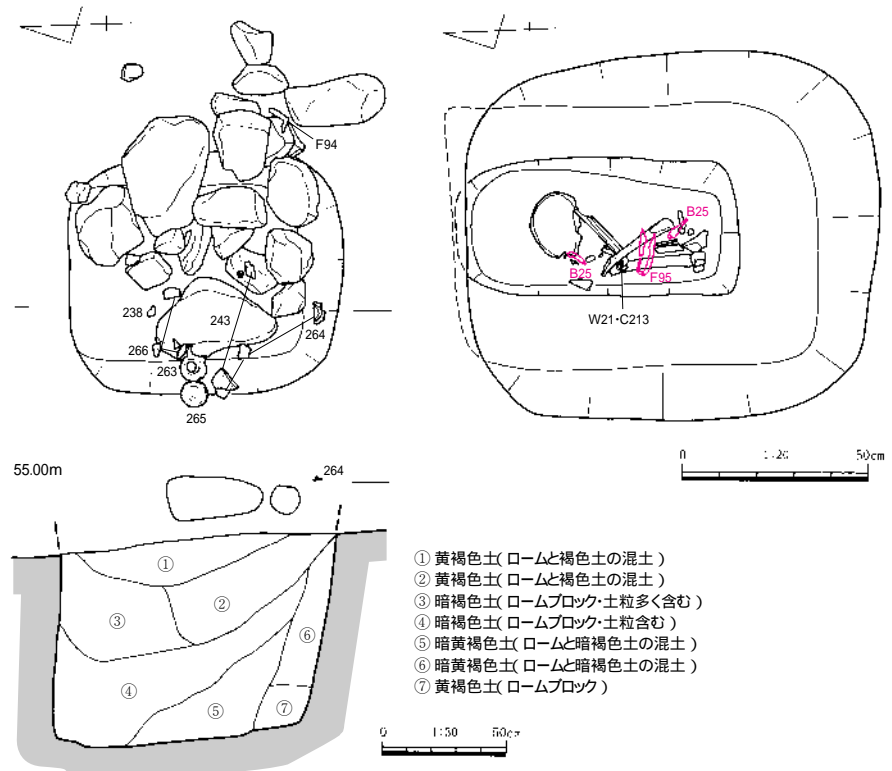


図144 墓88

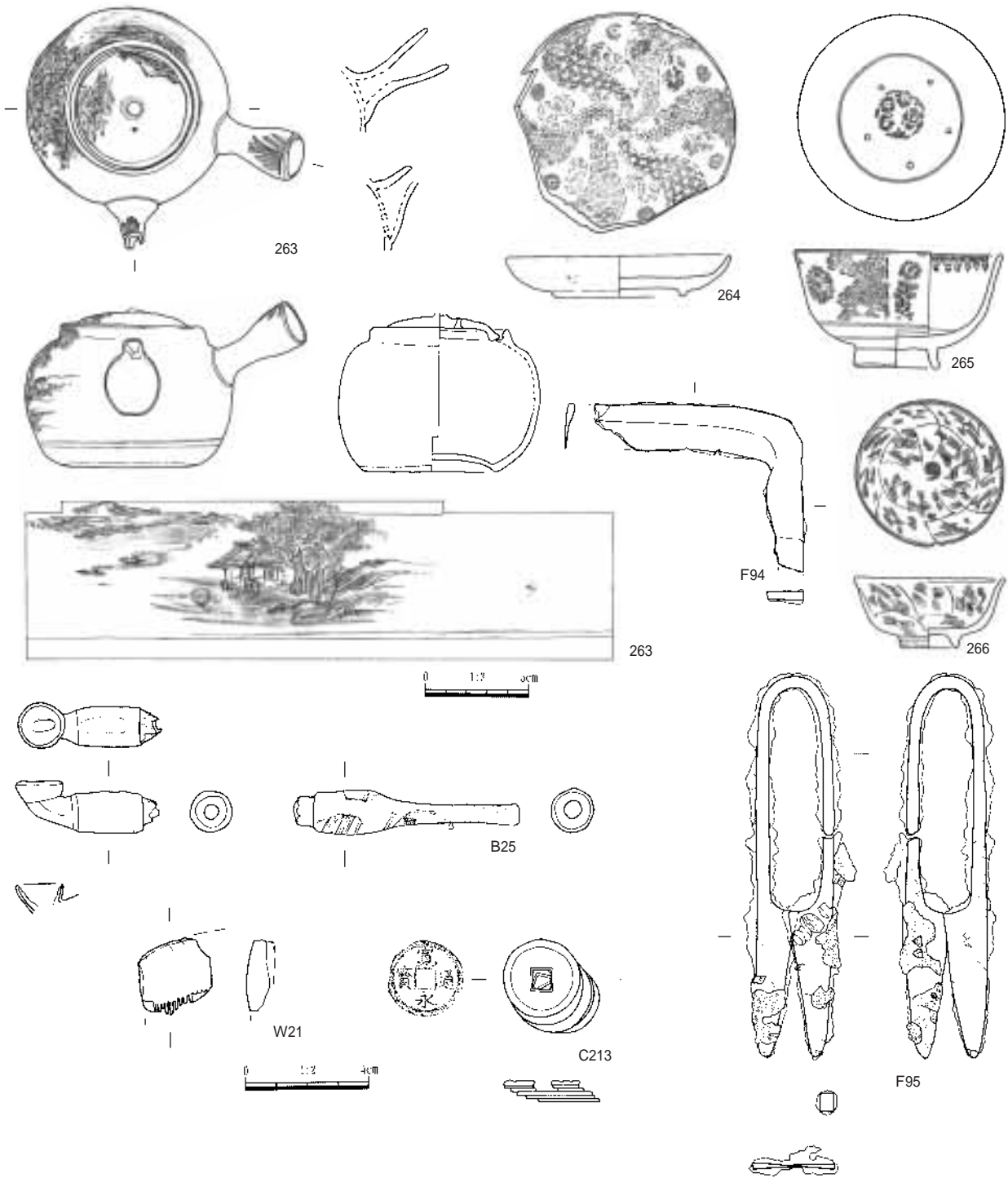


図145 墓88出土遺物

り、長軸方向は座標南北軸に乗る。土壌底面中央で、骨片2点、銅銭6枚(C214・C215)が出土した。

墓90 (図148・149、図版37)

G4区南東部に位置し、墓167に切られ、墓91を切る。上面に数個の礫を集め標石としている。標石の下から鎌(F96)が出土した。

土壌は平面長方形で、長辺1.25m、短辺0.85m、標石下面からの深さ0.85mを測り、長軸方向を北から12度西に振る。底面で人骨を検出した。北東側に頭骨があり、その南西に椎骨が並ぶ。南西側に

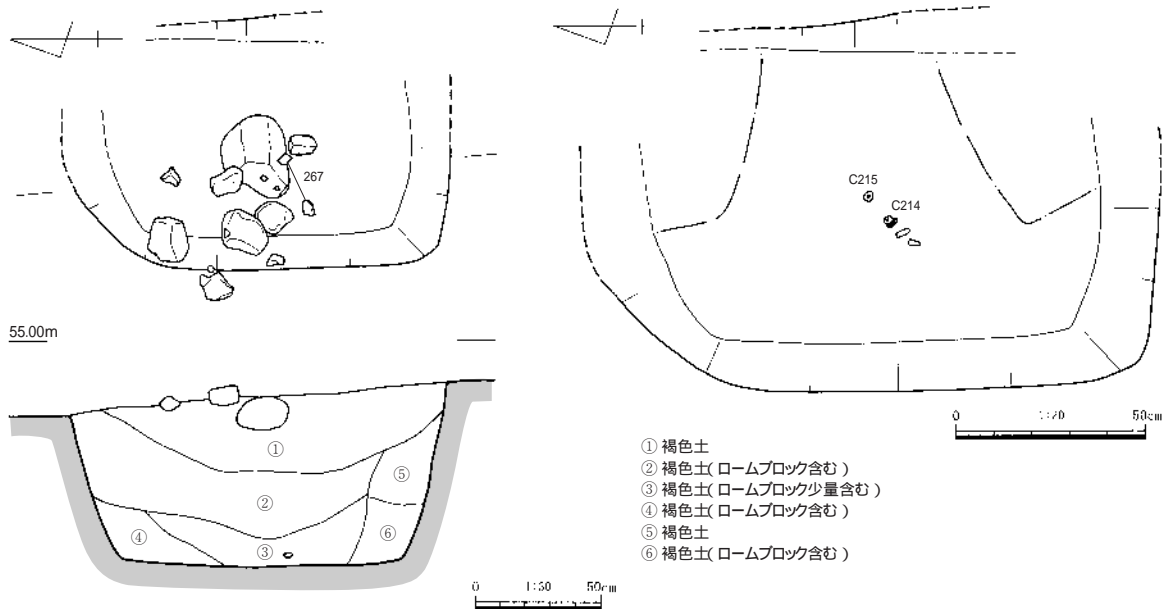


図146 墓89

は膝を北に向けた下肢骨があり、下肢骨の間に上肢骨や体幹骨がある。下肢骨は西側に右、東側に左のものがある。遺体の埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬と考えられる。被葬者は熟年男性と推定されている。

遺物は、頭骨上で鎌(F97)が、下肢骨の間から煙管(B26)、銅銭2枚と火打金が固着したものの(F98)がそれぞれ出土した。

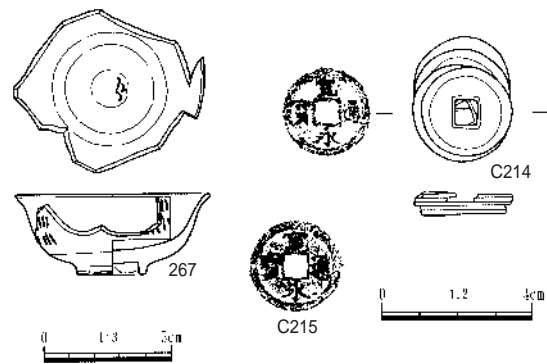


図147 墓89出土遺物

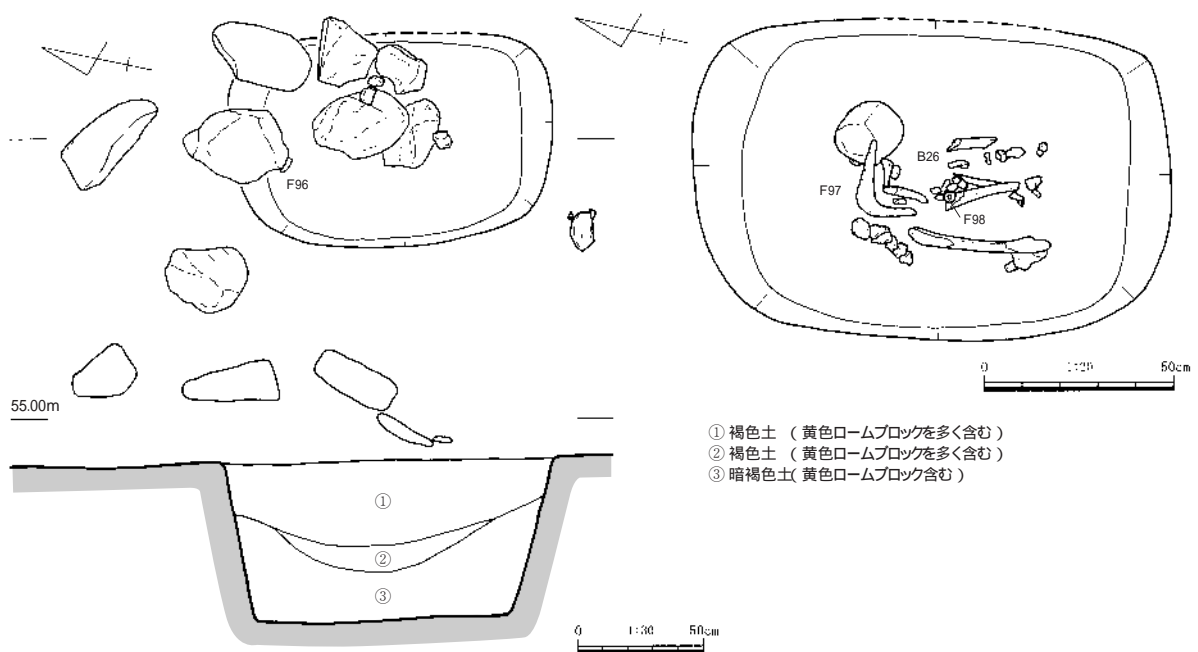


図148 墓90

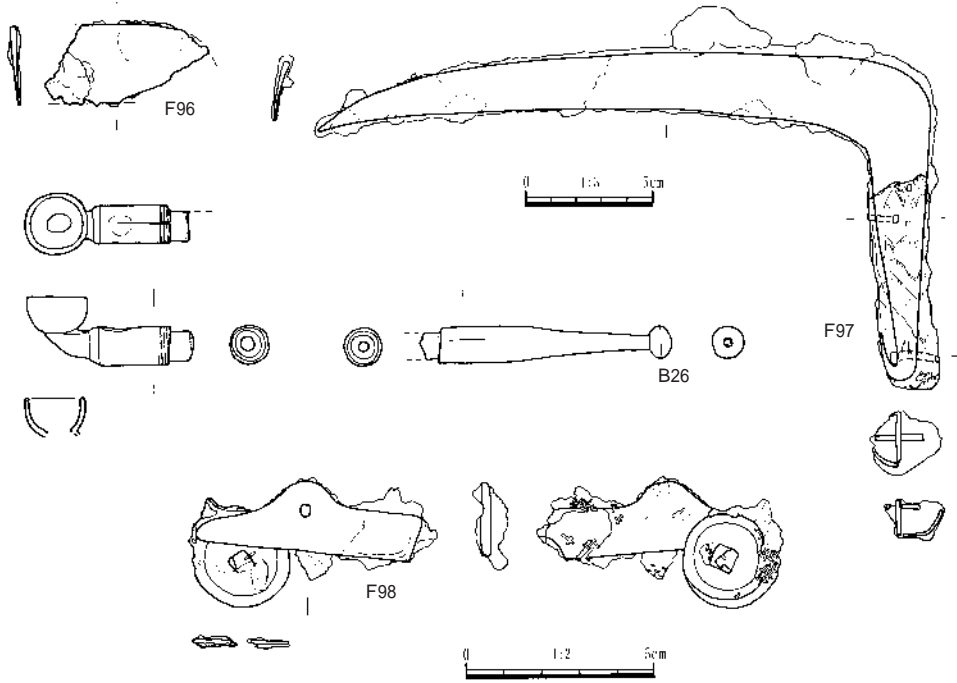


図149 墓90出土遺物

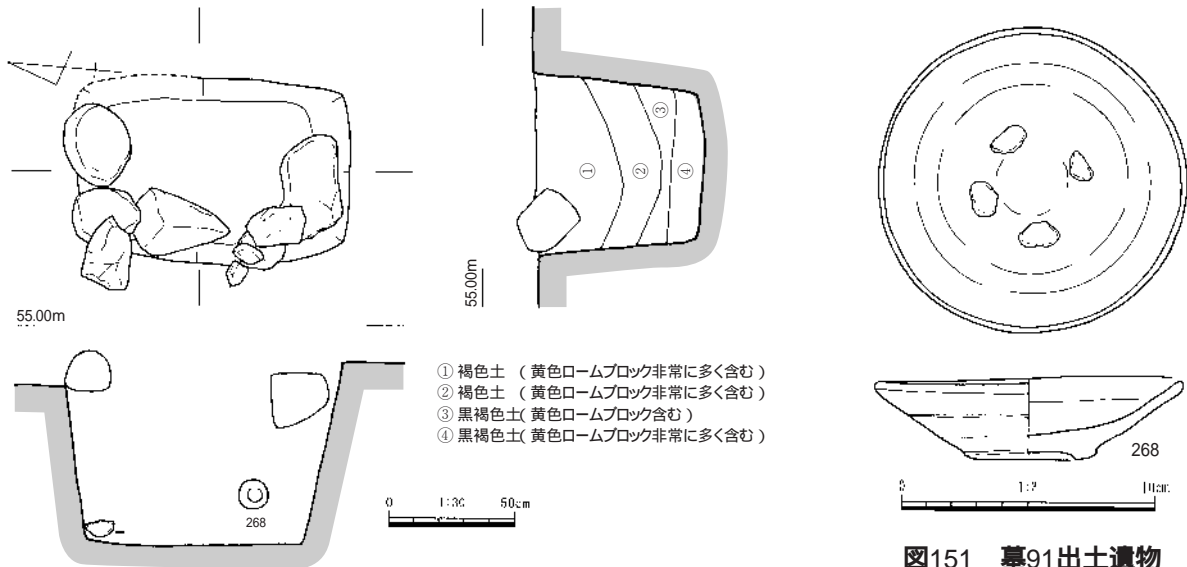


図151 墓91出土遺物

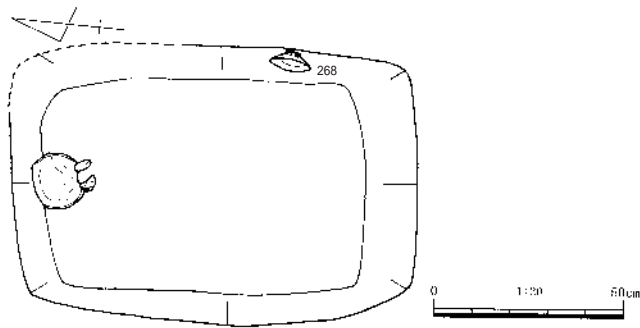


図150 墓91

墓91 (図150・151、図版37)

G 4区南西部に位置し、北東側を墓90に切られる。上面から土壌内上層にかけて数個の礫を検出したが、現状では土壌西側にしか見られない。

土壌は平面長方形で、長辺1.05m、短辺0.75m、深さ0.75mを測り、長軸方向を北から4度西に振る。土壌内で底面から10cmほど浮いた状態で胎土目の見られる唐津陶器皿(268)が出土している。

底面では人骨を検出したが、北縁部に頭骨が見られるのみである。遺存状態が悪いため、遺体の埋

葬形態は不明である。被葬者は壮年女性？と推定されている。

B類墓群（図152）

遺構分布は特に偏った状態は見せず、G4区全体に広がる。G4区南西部に規則的に並ぶ墓群をなす部分がみられ、墓135・136・137が並列して軸方向を同じくし、さらに墓138～141も含めてB類墓のみで群をなしている。そのほかには目立って規則的な配置をとる群は見られない。土壌の軸方向は圧倒的に南北主軸をとっているものが多い。

人骨の遺存状態は、良好なものから、ほとんど残らないものまで様々である。掘り方は浅く、底面はG層（ソフトローム層）からG層（AT層）下面まで掘り込まれている。土層断面で棺の裏込め土と見られる立ち上がりを観察できるものもみられる。

以下、B類土壌の墓を順に記述する。



図152 B類墓配置図

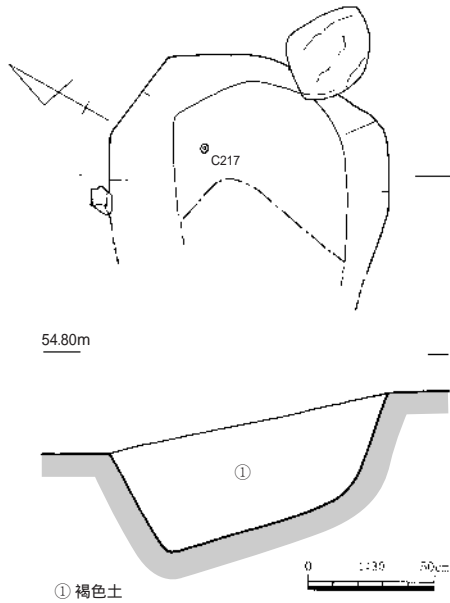


図153 墓92

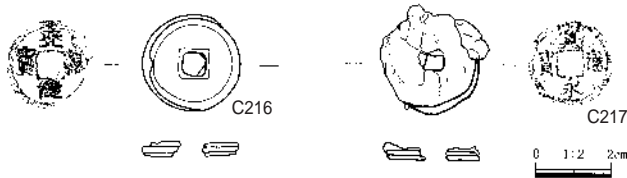


図154 墓92出土遺物

墓92 (図153・154、図版37)

G 4 区北部に位置し、西側を墓93に切られる。土壌の肩に礫が乗っている。

土壌は平面形が楕円形ないしは方形を呈し、南北長1.1m、東西残存長0.9m、深さ0.42mを測り、南北軸を北から30度西に振る。土壌上層から中国銭を含む銅銭3枚(C216)、底面から銅銭1枚・鉄銭1枚(C217)が出土した。

墓93 (図155・156、図版37)

G 4 区北部に位置し、墓92を切る。小型の礫を4つほど集めて標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺1.2m、短辺0.8m、標石下面からの深さ0.6mを測り、長軸方向を北から18度東に振る。

土壌底面から少量の人骨片、鎌(F99)、鋏・銅銭6枚(F100)が出土した。鋏は、持ち手破片2つが別々に銅銭と錆で固着して

いて本来の形に接合できないが、すべて同一個体の破片である。また、表面には布と棺材と思われる木質が付着している。

墓94 (図157・158、図版38)

G 4 区北西部に位置する。上面に礫を5個集めて標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺1.2m、短辺0.75m、標石下面からの深さ0.65mを測り、長軸方向を北から1度東に振る。土壌上層(①層)から土師器皿(269)が出土した。

土壌底面で全身がほぼ交連状態を保つ遺存状態の良い人骨を検出した。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬である。被葬者は壮年後半の男性と推定されている。

人骨周辺からは、頭蓋骨上から鎌(F101)が、右大腿骨上から銅合金製の取手金具(B28)と飾り金具(B30)が、腰椎の数cm上から煙管(B27)の雁首が出土した。ほかに、下肢骨・体幹骨の下から、煙管(B27)の吸口、銅合金製鋏(B29)、布の付着した銅銭1枚・鉄銭5枚(C218)が出土した。銅合金製の金具類(B28~B30)は箱の部品と考えられる。

墓95 (図159・160、図版38)

G 4 区北西部に位置し、墓62・墓146を切る。土壌上面中央に大型の円形礫を1個置き、その周りに礫を10個ほど並べて標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺1.3m、短辺0.8m、標石下面からの深さ0.7mを測り、長軸方向を北から13度西に振る。土壌底面で人骨を検出した。頭骨が土壌北東部にあり、その南西に下肢骨が膝を北に

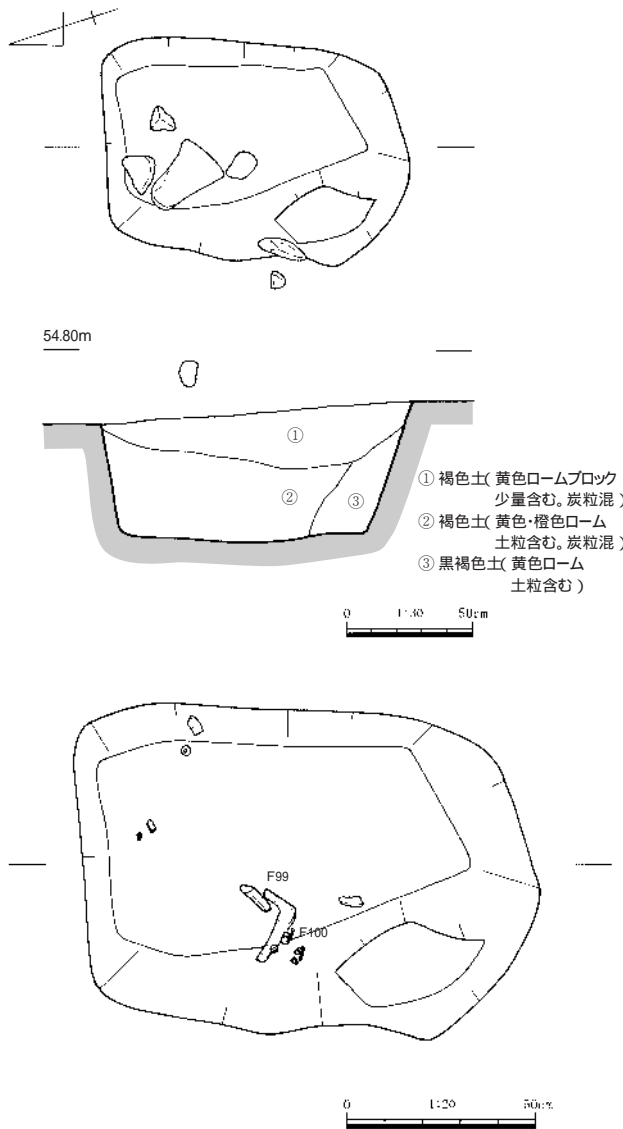


図155 墓93

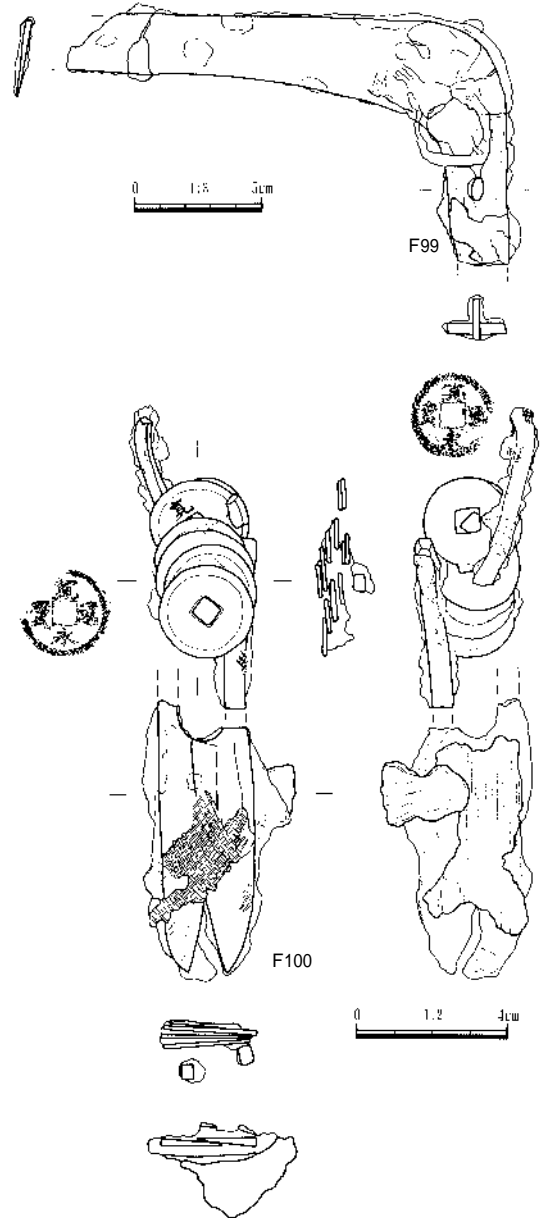


図156 墓93出土遺物

向けて並んでいる。遺体の埋葬形態は右側臥屈葬と推定される。被葬者は壮年女性と推定されている。

遺物は、土壇北東部から鎌（F103）が底面から10cmほど浮いて出土したほか、左大腿骨の下から鋏（F102）が、左右下肢骨の下から鉄銭5枚・銅銭1枚（C219～C222）がそれぞれ出土した。鋏と鉄銭には布や木質が付着している。

墓96（図161・162、図版38）

G 4区北西部に位置し、東側を墓62・墓146に切られる。上面に礫を4個集めて標石としている。

土壇は方形で、南北残存長1m、東西残存長0.7m、標石下面からの深さ0.5mを測り、南北軸を北から43度東に振る。土壇内上層で煙管の雁首（B31）が出土したほか、底面で鎌（B104）が出土した。人骨は出土していない。

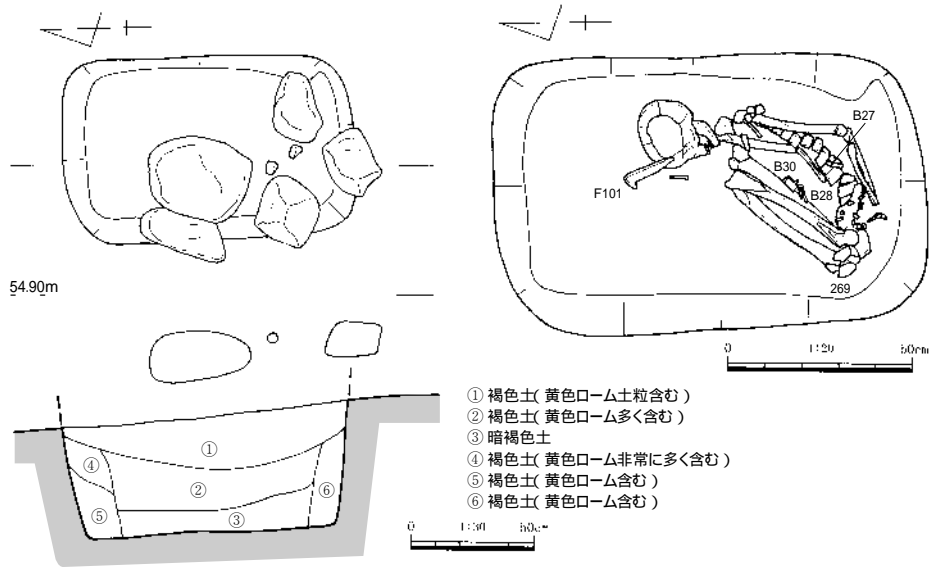


図157 墓94

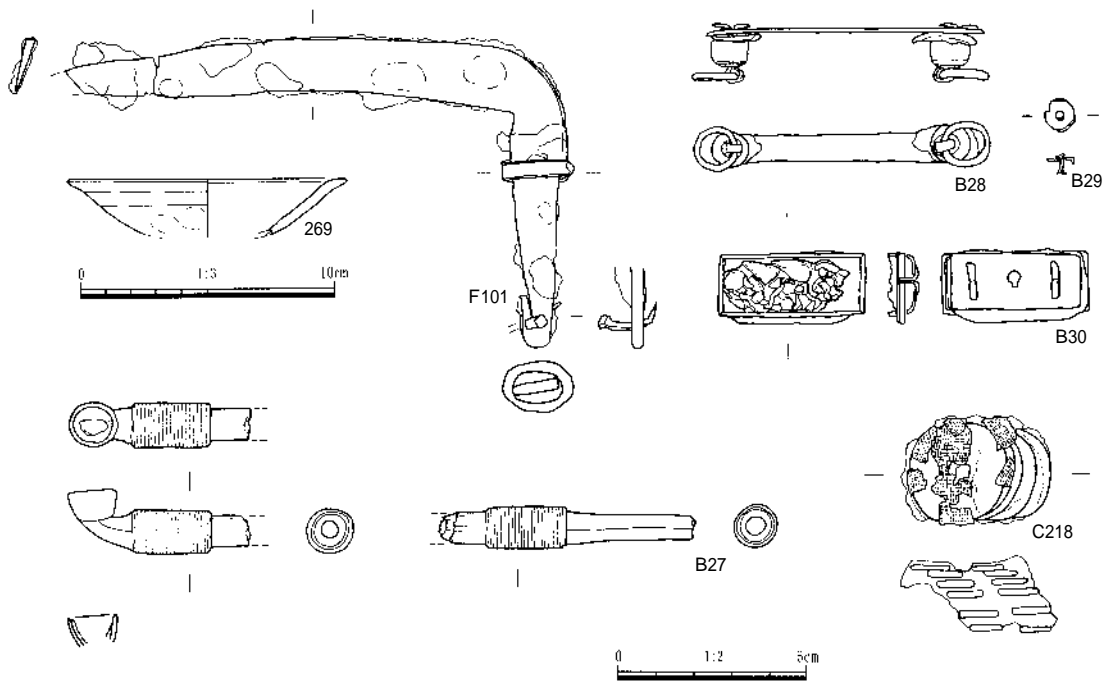


図158 墓94出土遺物

墓97 (図163～165、図版39)

G 4 区中心の墓密集域の東縁に位置する。五輪塔の地輪 (S9) と10個ほどの自然礫を長方形に組んで標石としている。標石周辺からは陶器碗 (図72 : 210) の破片が出土した。

土壌は平面長方形で、長辺1.2m、短辺 1 m、標石下面から底面までの深さ0.55mを測り、長軸方向を北から28度西に振る。

土壌底面で人骨を検出した。土壌南半で下肢骨などがまとまっているほか、遺存状態は極めて悪いものの土壌北半側に頭骨片が見られる。下肢骨は東側が左脚のもの、西側が右脚のもので、左右の脛骨が寛骨上で交差する。遺体の埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬と考えられる。被葬者は成人女性と推定されている。

遺物は、鎌 (F106) が右大腿骨の西に接して、煙管 (B32) が腰周辺で底面から数cm浮いて出土し

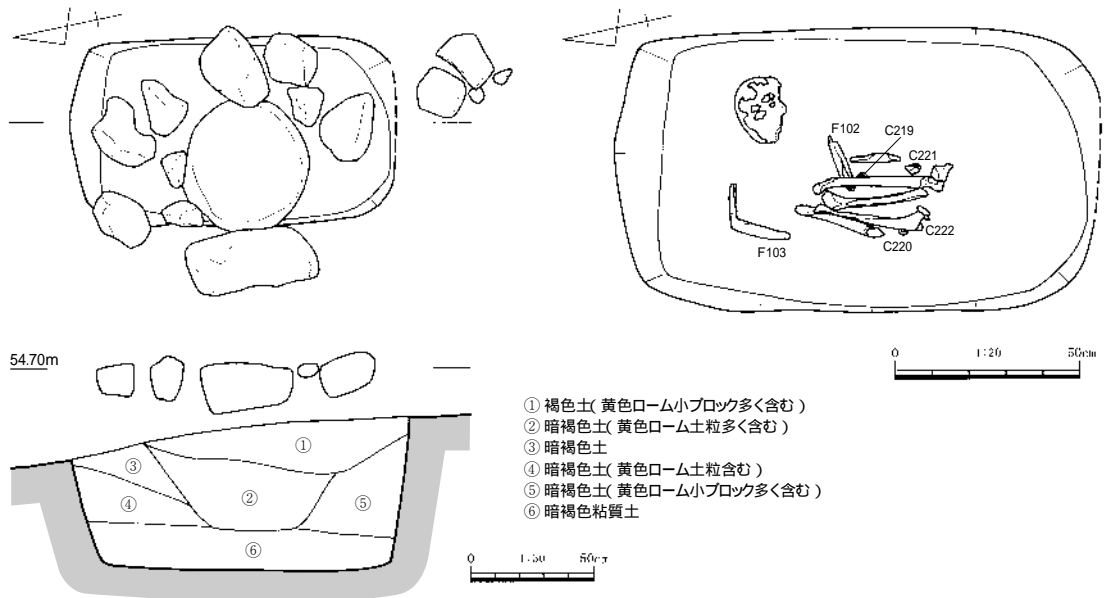


図159 墓95

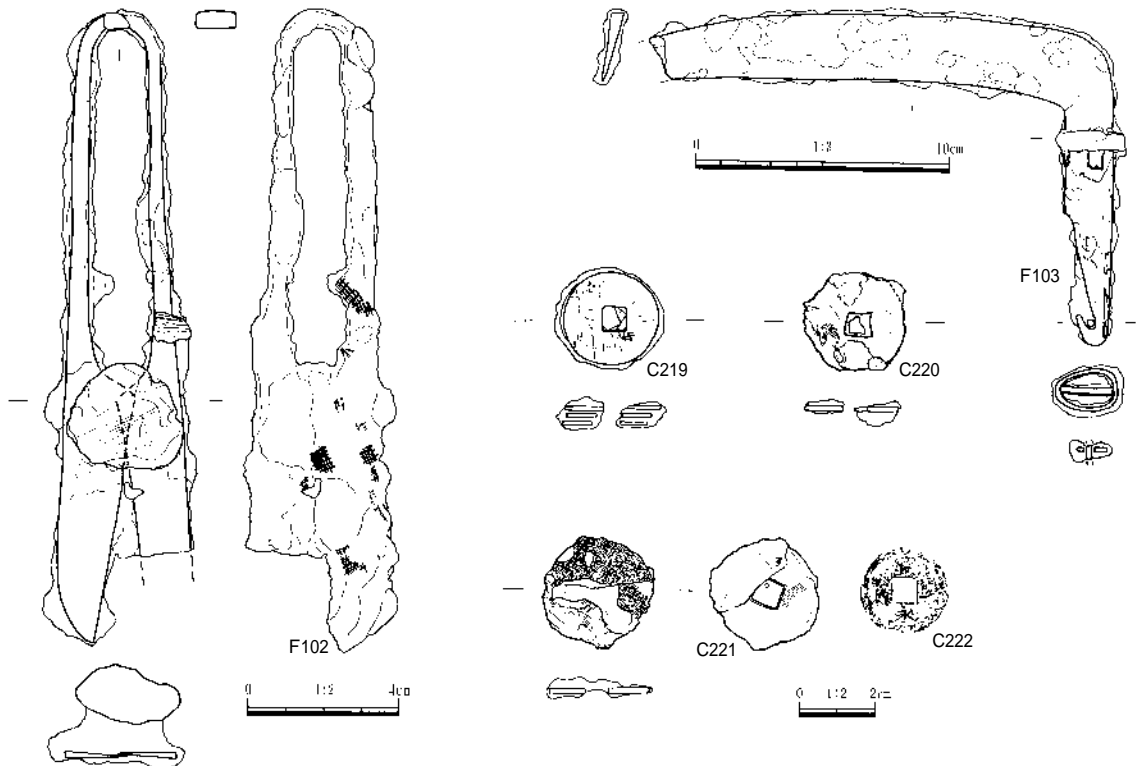


図160 墓95出土遺物

たほか、針金状の金具（F105）が出土している。

墓98（図167・168、図版39）

G4区東部の中央付近に位置する。上面に6個ほどの礫を長方形に組み標石としている。標石周辺から鉄鎌（F107）、染付紅猪口（270）、土師器皿（271）、磁器皿（図73：226）などの陶磁器片が出土している。F107、270は本標石に伴う可能性が高く、226も大半の破片が本標石上で出土しているので墓98に伴う可能性があるが、近隣の土壌内（墓97・墓155）や墓74上面からも破片が少量出土しているので原位置性がやや低い。

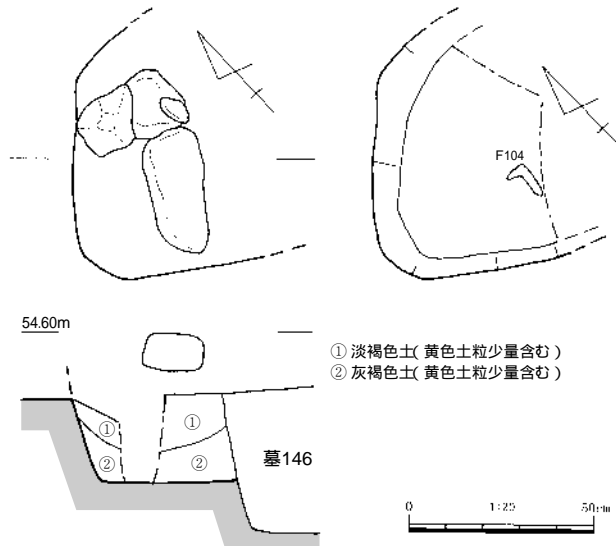


図161 墓96

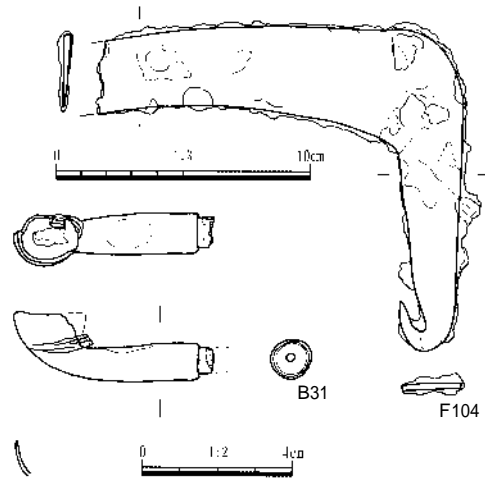


図162 墓96出土遺物

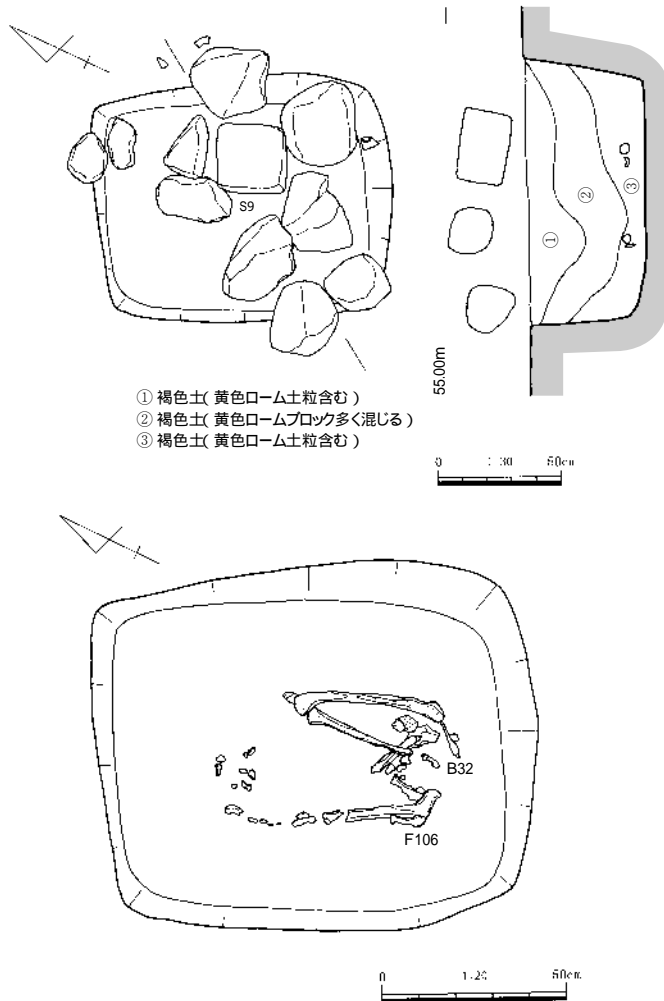


図164 墓97出土遺物 1

図163 墓97

土壌は平面長方形で、長辺1.1m、短辺0.8m、深さ0.6mを測り、長軸方向を北から11度東に振る。底面で人骨を検出した。土壌北端付近で頭骨を、土壌中央付近東側で左下肢、西側で右下肢をそれぞれ膝が北を向いた状態で検出した。北頭位の仰臥屈葬と考えられる。被葬者は壮年後半から熟年前半の女性と推定されている。

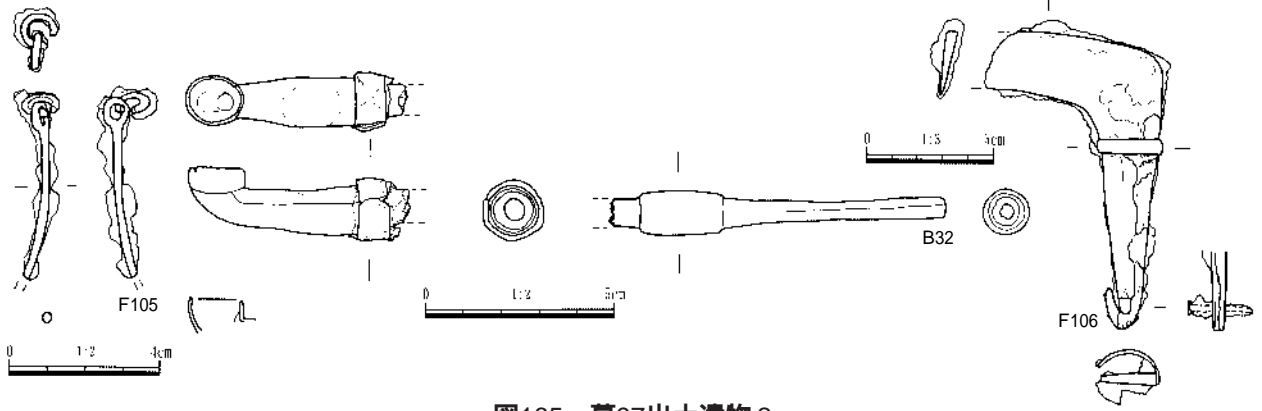
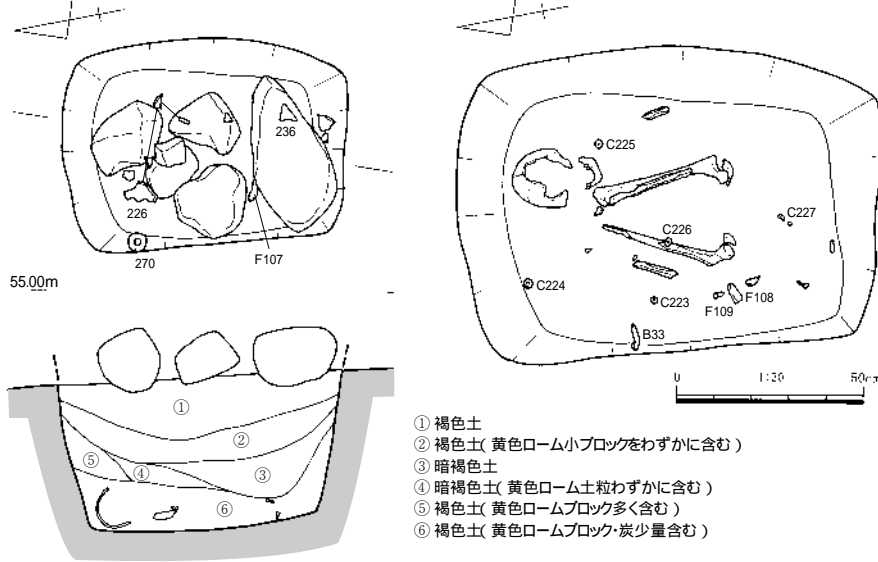


図165 墓97出土遺物2



- ① 褐色土
- ② 褐色土(黄色ローム小ブロックをわずかに含む)
- ③ 暗褐色土
- ④ 暗褐色土(黄色ローム土粒わずかに含む)
- ⑤ 褐色土(黄色ロームブロック多く含む)
- ⑥ 褐色土(黄色ロームブロック・炭少量含む)

0 1:20 50cm

図166 墓98

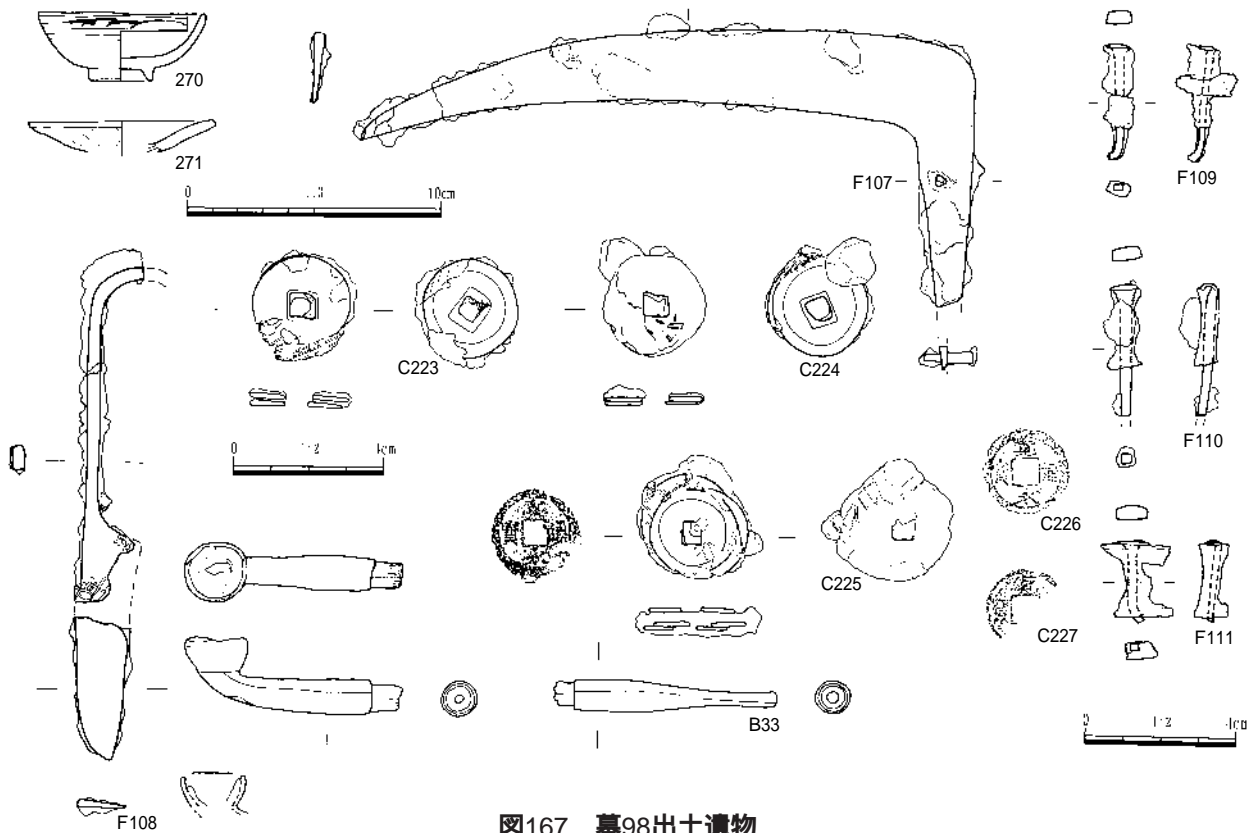


図167 墓98出土遺物

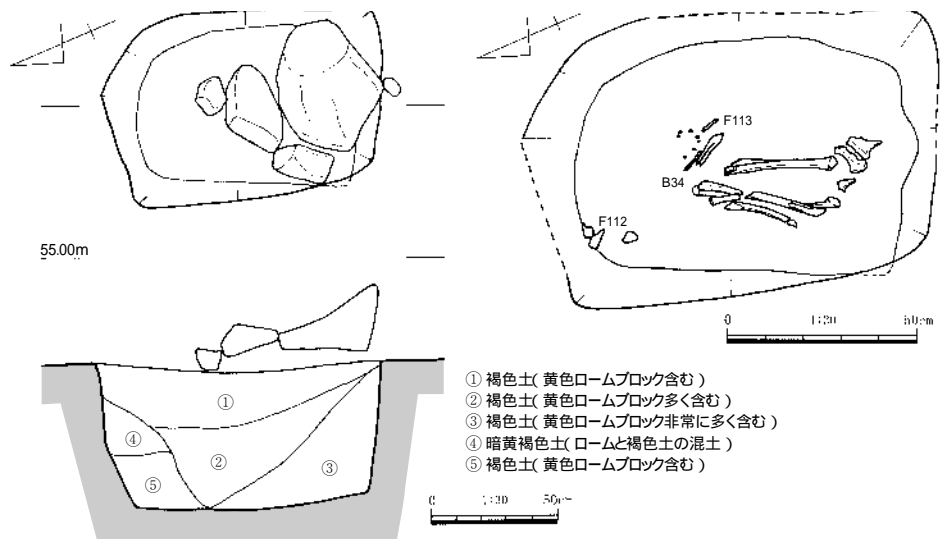


図168 墓99

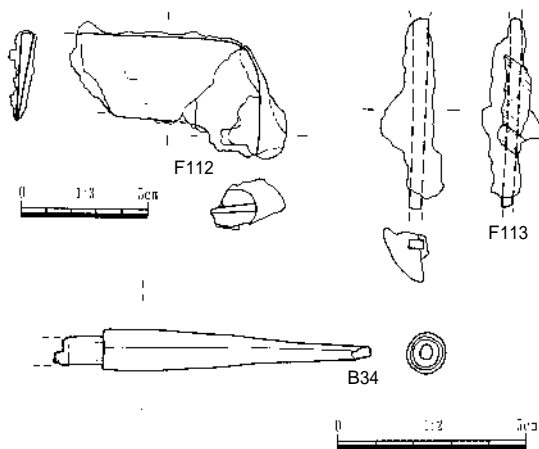


図169 墓99出土遺物

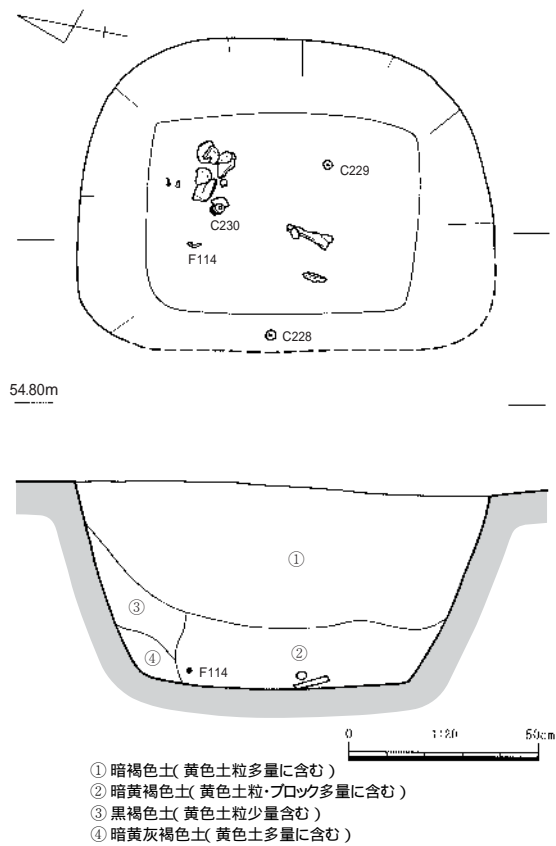


図171 墓101

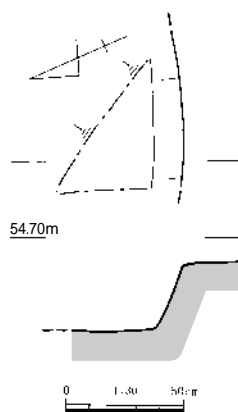


図170 墓100

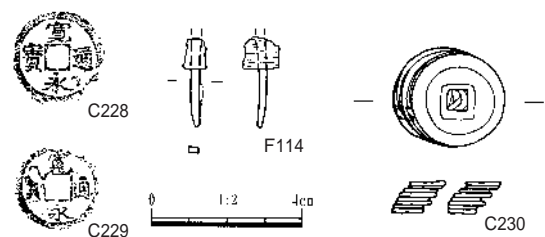


図172 墓101出土遺物

遺物は鉄釘13点（F109～F111ほか）、鋏（F108）、銅銭5・鉄銭4（C223～C227）、煙管（B33）が出土した。C225が底面直上での出土で、他はいずれも底から10～20cm程度浮いて出土した。鋏や銭貨には布の付着が見られ、頭陀袋等に入れての副葬が推測されるが、遺物の出土状況は平面的なまとまりをもたない。

墓99（図168・169、図版39・40）

G 4 区東縁中央部に位置し、墓100を切る。上面に大型礫 1 個とその周りに小型礫を集めて標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺1.1m、短辺0.75m、標石下面からの深さ0.6mを測り、長軸方向を北から23度東に振る。底面で人骨を検出した。土壌中央北寄りに歯牙があり、その南西には膝を北に向けた下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と推定される。被葬者は壮年女性と推定されている。

遺物は、歯牙周辺で鋏の持ち手部片（F113）と煙管の吸口（B34）が、底面北東隅で鎌（F112）が出土した。

墓100（図170、図版40）

G 4 区東縁中央部に位置し、G 4 区を区画する溝19に東側を大きく切られるほか、墓99にも西側を切られる。上面に礫などは見られない。

残存部分が少ないため不明な部分が多いが、平面形は方形と推定される。残存部分で東西辺0.55m、南北0.6m、深さ0.3mを測る。

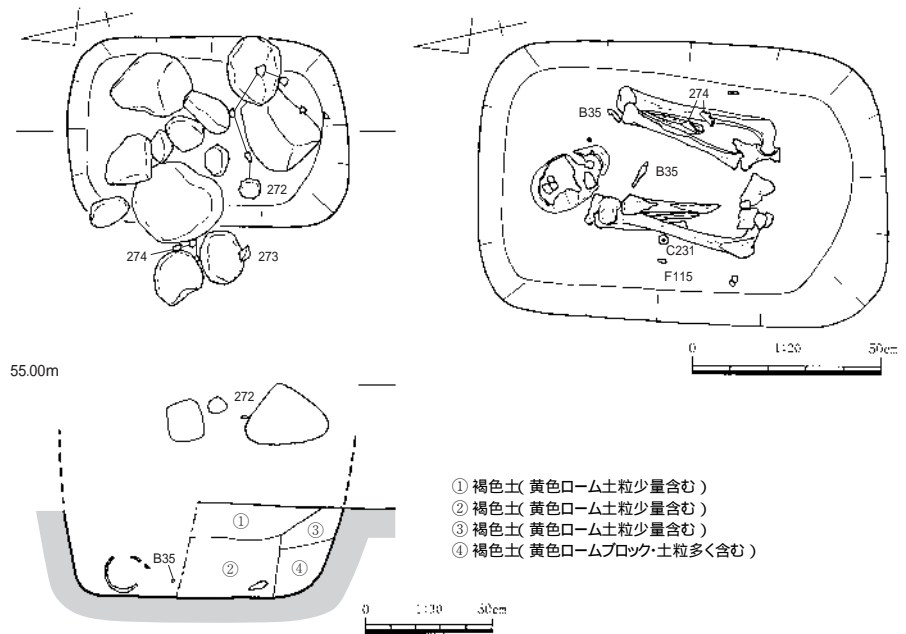


図173 墓102

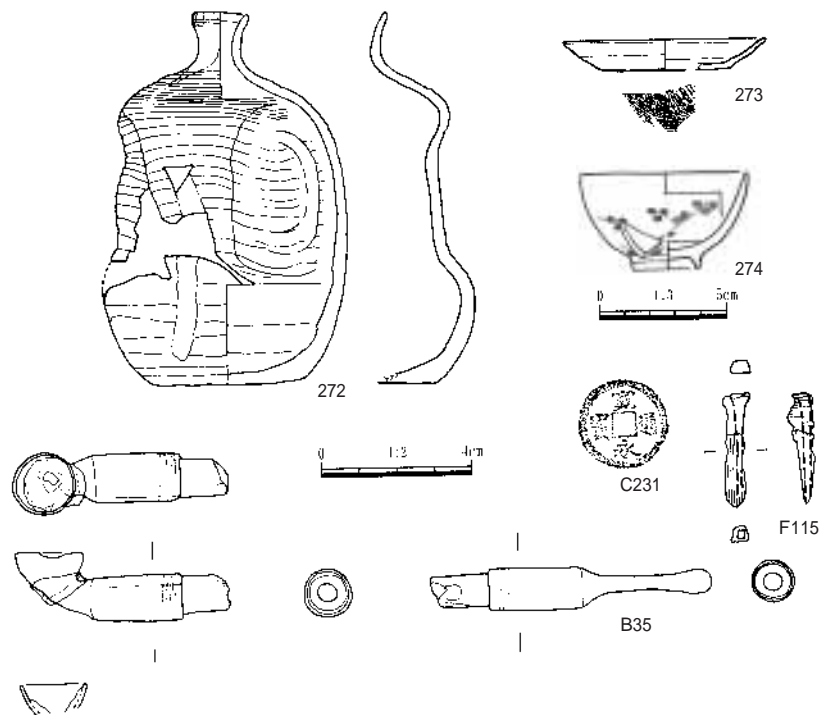


図174 墓102出土遺物

土壌内からは人骨、遺物とも出土していない。

溝19に切られるので、近世のある時期に墓域の区画が行われる以前のものと考えられる。遺構の時期が中世まで遡る可能性もあろう。

墓101 (図171・172、図版40)

墓密集域の北部に位置し、南西側を墓102に切られる。現状では標石は見られない。

土壌は平面長方形で、長辺1.1m、短辺0.8m、深さ0.55mを測り、長軸方向を北から11度西に振る。土壌上層(①層)中から銅銭2枚(C228・C229)が出土している。

底面から人骨を検出した。土壌北東側に頭骨片があり、南西側に下肢骨片がある。遺存状態が悪く、遺体の埋葬形態は判然としないが、北頭位の臥葬の可能性が高いと思われる。被葬者は成人男性?と推定されている。

頭骨付近から布の付着した銅銭8枚(C230)が出土した。ほかに釘1点(F114)が出土しているが、混入の可能性が高い。

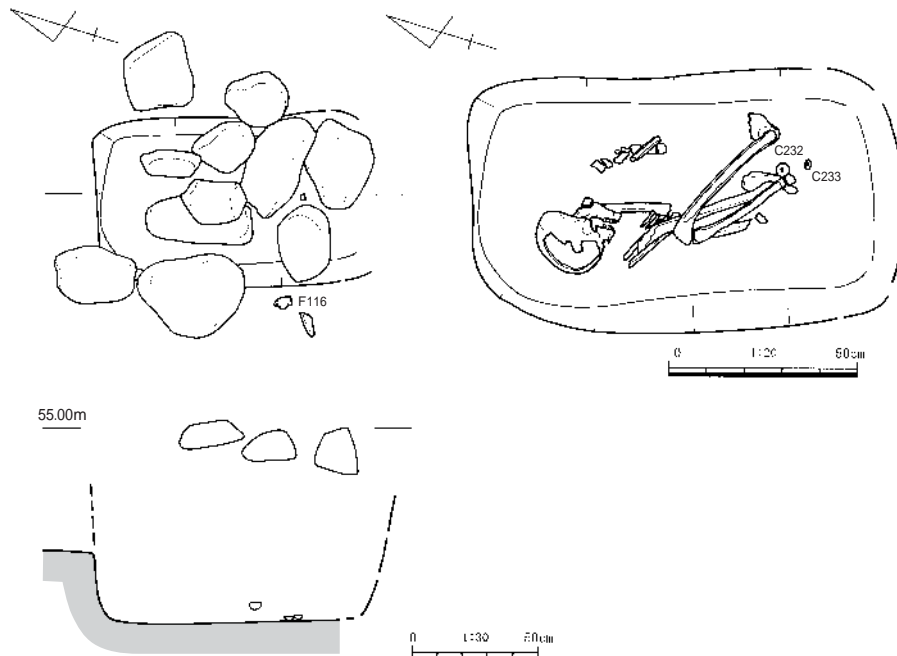


図175 墓103

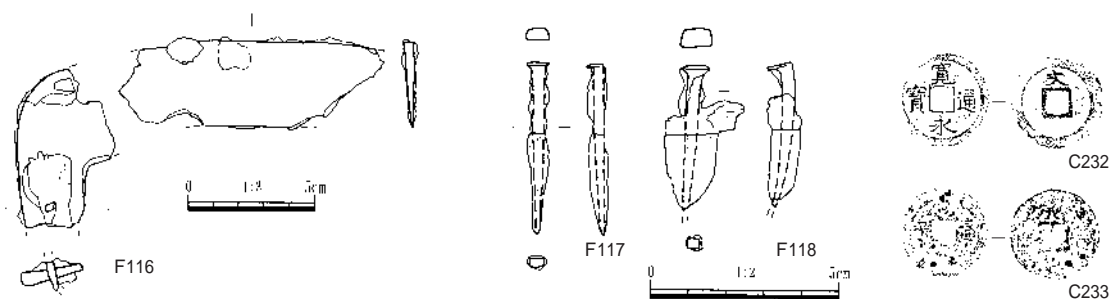


図176 墓103出土遺物

墓102 (図173・174、図版40)

墓密集域北部に位置し、墓101を切る。上面に十数個の礫を集めて標石とする。標石周辺から陶器徳利(272)、土師器皿(273)、染付小杯(274)の破片、染付皿(図73:221)の破片、染付紅猪口(図74:236)の破片が出土した。

土壌は平面長方形で、長辺1.1m、短辺0.75m、標石下面からの深さ0.6mを測り、長軸方向を北から12度東に振る。土壌内上層(①層)中で染付小杯(274)の破片が出土し、上面出土のものと接合している。

底面で遺存状態の良い人骨が出土した。土壌北部中央で顔が上に向いた状態の頭骨を検出し、その南東で左下肢骨を、南西で右下肢骨を、ともに脛骨前面を上にして膝を折った状態で検出した。遺体の埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬と考えられる。被葬者は熟年男性と推定されている。

遺物は、胸元付近で煙管(B35)の吸口が、左膝付近で煙管(B35)の雁首が、右下肢骨西側で銅銭1枚(C231)がそれぞれ出土したほか、釘が3点(F115ほか)出土している。

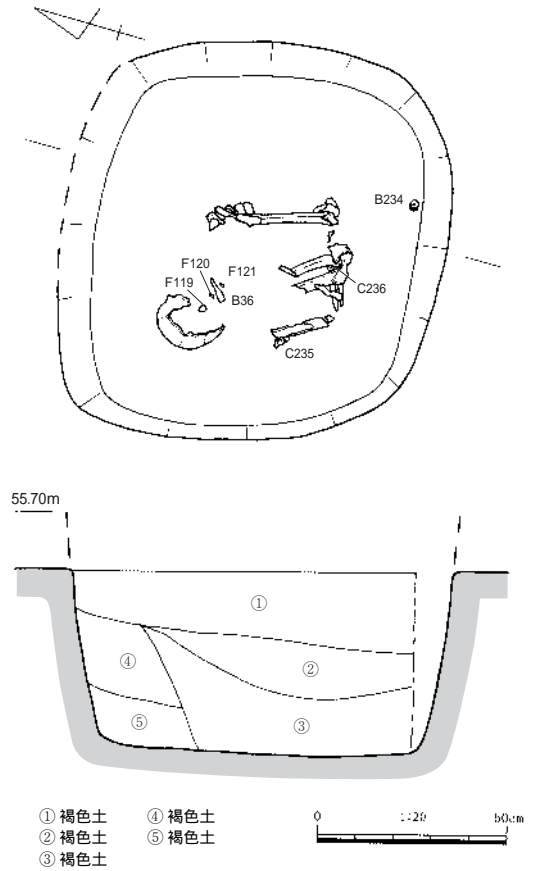


図177 墓104

墓103 (図175・176、図版40)

墓密集域の北部に位置し、墓104を切る。上面に10個ほどの礫を集め標石としている。標石周辺で鎌(F116)が出土した。

土壌は平面長方形で、長辺1.1m、短辺0.75m、標石下面からの深さ0.65mを測り、長軸方向を北から1度東に振る。土壌底面で遺存状態の良い人骨を検出した。北西隅付近に顔を南西に向けた頭骨が、その南に腕を曲げた右上肢骨があり、更に南には膝を北に向けて折った下肢骨が並んでいる。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬である。被葬者は熟年男性と推定されている。

遺物は足元から銅銭が2枚(C232・C233)出土したほか、底面付近で釘が6点(F117・F118ほか)出土した。

墓104 (図177・178、図版41)

墓密集域の中央付近に位置し、北縁辺を墓103に切られる。上面に標石は見られない。

土壌は1m平方の正方形で、深さは0.5mを測り、南北軸を北から17度西に振る。底面で人骨を検出した。北西側

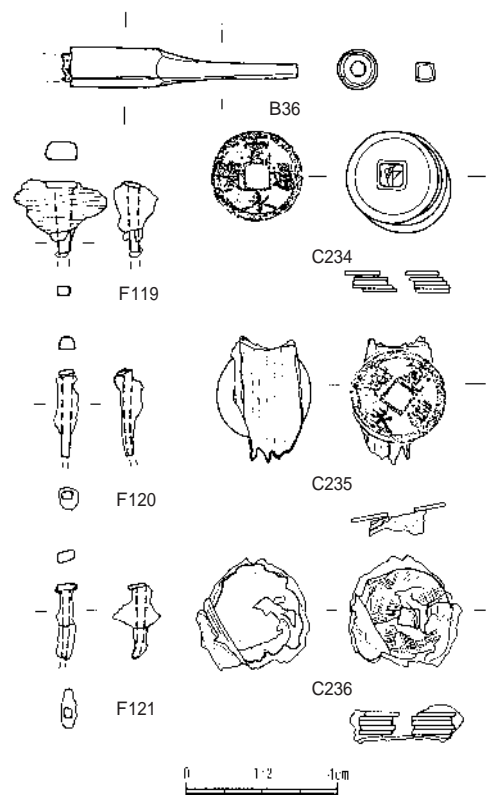


図178 墓104出土遺物

に顔を南西に向ける頭骨があり、その南東に膝を北に向ける下肢骨がある。下肢骨は東側が左のもの、西側が右のものである。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と考えられる。被葬者は壮年男性と推定されている。

遺物は、頭骨の南東付近で煙管の吸口（B36）と釘3点（F119～F121）がまとまって出土しているが、いずれも底面から10～20cmほど浮いているので混入したものである。底面出土の遺物には合計11枚の銭貨があり、銅銭5枚（C234）が

土壌南端から、布の付着した銅銭3枚・鉄銭2枚（C236）が右大腿骨の下から、木片の付着した銅銭1枚（C235）が人骨の西側からそれぞれ出土している。

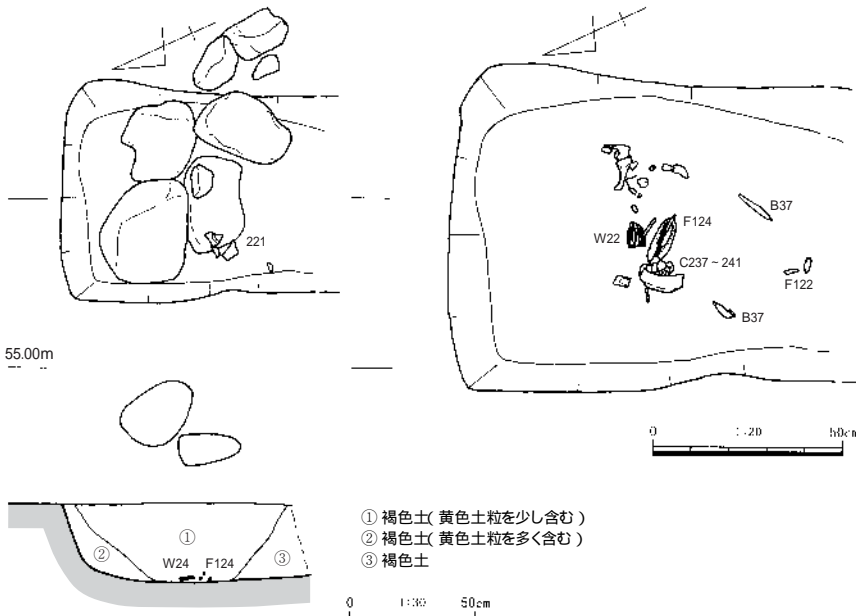


図179 墓105

墓105（図179・180、図版41）

墓密集域の中央付近に位置し、墓156を切る。上面に数個の礫を集めて標石としている。

土壌の南端は墓156と同時に掘り下げてしまったため確認できていない。土壌は平面長方形で、長辺残存値0.95m、短辺0.85m、標石下面からの深さ0.55mを測り、長軸方向を北から25度東に振る。遺存状態は悪いものの、底面で人骨を検出した。底面中央北東寄りに頭骨片があり、中央西寄りに下肢骨片がある。検出した人骨が少なく不明点が多いが、土壌の形態も考え合わせると、遺体の埋葬形態は北頭位の臥葬の可能性が高いと考えられる。被葬者は10才前後の子供と推定されている。

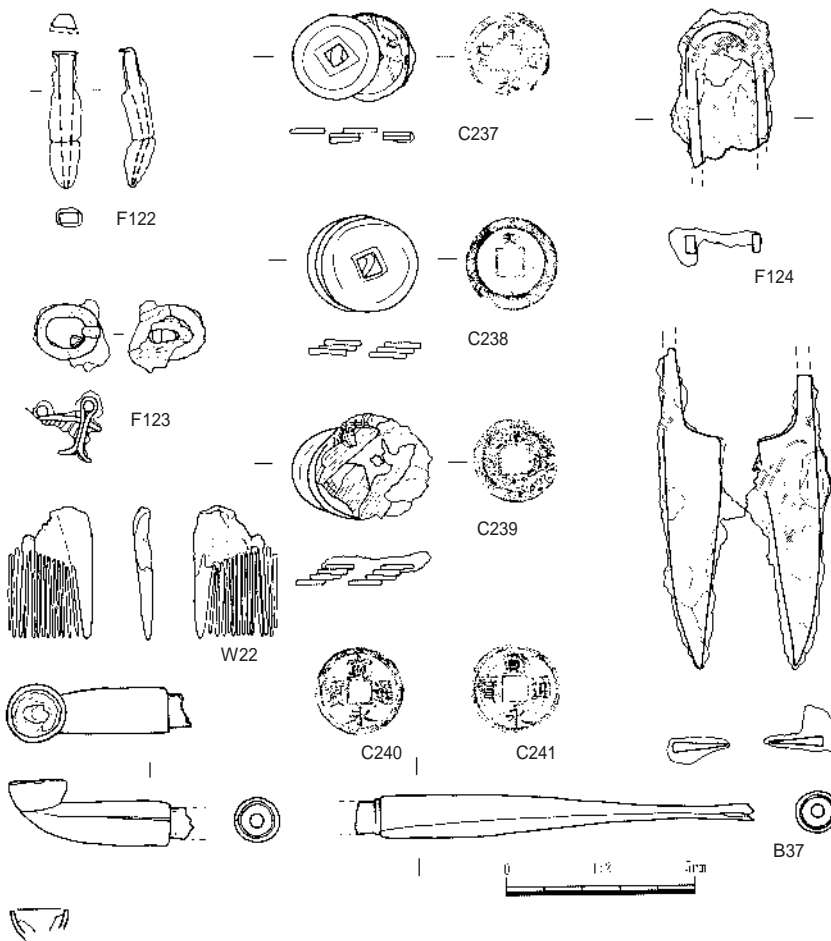
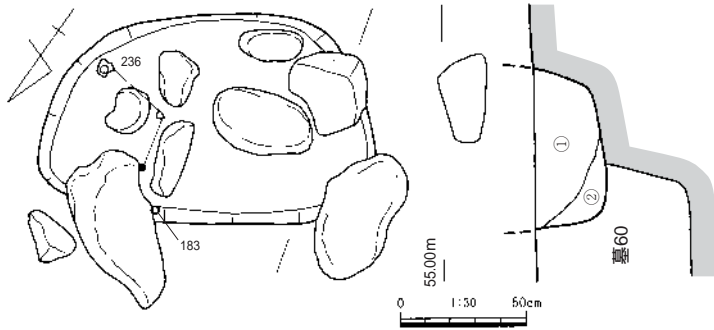


図180 墓105出土遺物



① 暗褐色土(黄色ローム小ブロック含む)
② 褐色土(黄色ロームブロック含む)

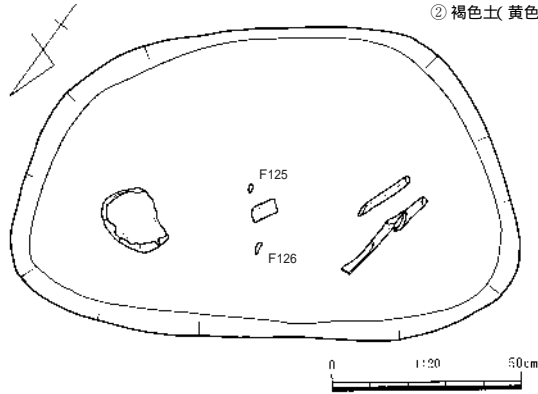


図181 墓106

標石周辺からは、染付紅猪口(図74:236)の破片、土師器皿(図71:183)の破片が出土している。

土壌は楕円形に近い長方形で、長軸1.3m、短軸0.8m、標石下面からの深さ0.5mを測り、長軸方向を東から北に36度振る。土壌底面で人骨を検出した。北東に顔を西に向けた頭骨が、南西に下肢骨がある。この頭骨と下肢骨は特徴が異なり、別個体の人骨と推定されている。いずれかの骨が混入したものであろうか。

遺物は、土壌中央で底面から10cm程度浮いた状態で、釘1点(F125)、火打金の破片(F126)、斜格子文の染付皿の破片が出土しているが、いずれも混入したものの可能性が高い。

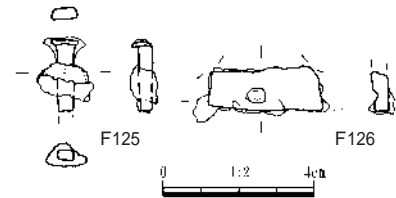


図182 墓106出土遺物

遺物は、土壌底面の中央で櫛(W22)、鋏(F124)、銅銭10枚・鉄銭1枚(C237~C241)がまとめて出土したほか、土壌南部で煙管(B37)が底面から数cm浮いて出土した。ほかに、釘1点(F122)と鉄製金具(F123)が底面から出土している。

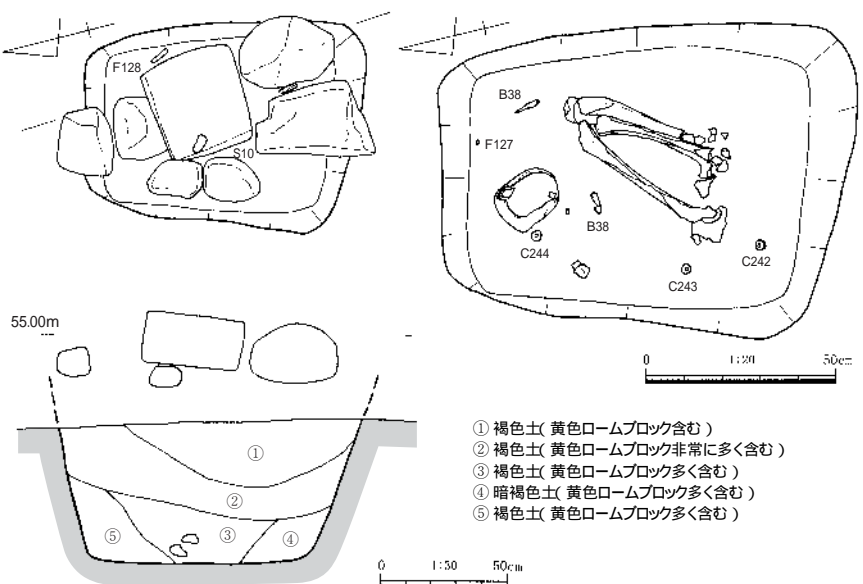
墓106(図181・182、図版41)

墓密集域の中央部に位置し、墓60を切る。9個の礫を集めて標石としている。

墓107(図183・184、図版41)

墓密集域西部に位置し、墓67を切る。上面に石塔台座石(S10)と自然礫数個を集めて標石としている。石塔台座脇から鎌(F128)が出土した。

土壌は平面長方形で、長辺1.05m、短辺0.8m、標石下面からの深さ0.7mを測り、長軸方向を北から14度東に振る。底面で人骨を検出した。北端部に頭頂部を上にして顔を南東に向ける頭骨があり、その南東に膝を



① 褐色土(黄色ロームブロック含む)
② 褐色土(黄色ロームブロック非常に多く含む)
③ 褐色土(黄色ロームブロック多く含む)
④ 暗褐色土(黄色ロームブロック多く含む)
⑤ 褐色土(黄色ロームブロック多く含む)

図183 墓107

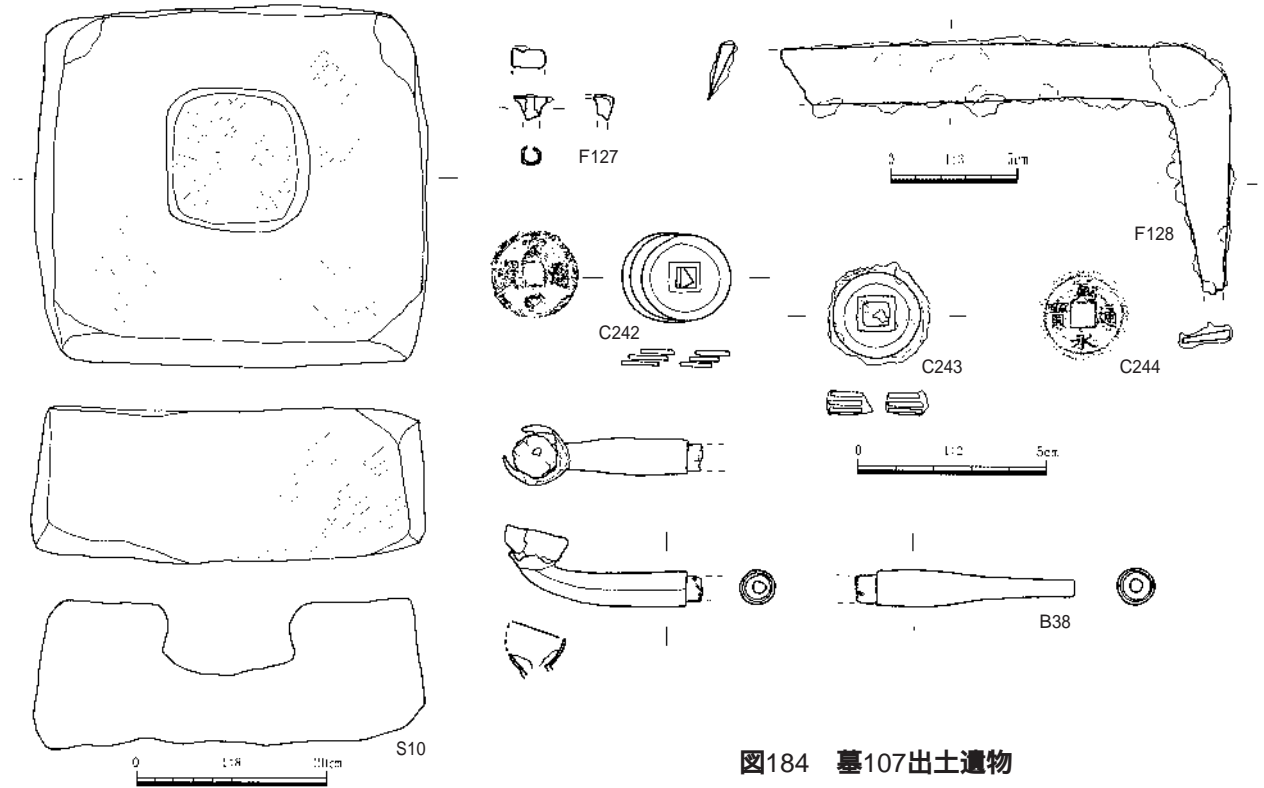
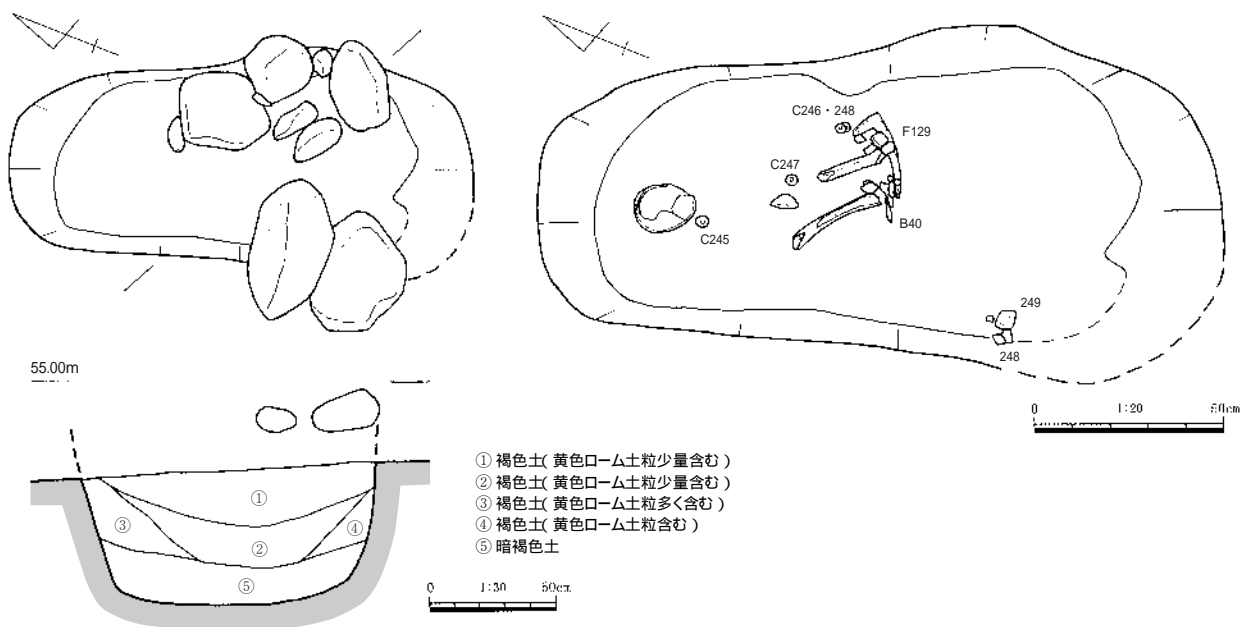


図184 墓107出土遺物

北に向けて折った下肢骨がある。下肢骨は東側に左のもの、西側に右のものがある。遺体の埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬と考えられる。被葬者は壮年後半から熟年の男性と推定されている。

遺物は底面南西部で銅銭3枚(C242)と銅銭1枚・鉄銭2枚(C243)が、頭骨と下肢骨の間で煙管(B38)が、頭骨の西側で銅銭1枚(C244)が出土している。ほかに、釘(F127)が1点出土しているが、混入したものであろう。



- ① 褐色土(黄色ローム土粒少量含む)
- ② 褐色土(黄色ローム土粒少量含む)
- ③ 褐色土(黄色ローム土粒多く含む)
- ④ 褐色土(黄色ローム土粒含む)
- ⑤ 暗褐色土

図185 墓108

墓108 (図185・186、図版42)

墓密集域の北西部に位置し、墓61を切り、南西隅を墓71に切られる。数個の礫を集めて標石とする。土壌はやや楕円形に近い長方形で南北に長く、長軸1.8m、短軸0.9m、標石下面からの深さ0.7mを測り、長軸方向を北から西に21度振る。土壌上層から土師器皿(図77:248)の破片と陶器灯明皿(図77:249)の破片が出土しているが、248は墓63・墓102からも、249は墓63からも破片が出土しているので、ともに上面で散乱していたものが混入したと考えられる。

底面から人骨を検出した。土壌北端付近に頭骨が、南に膝を北に向けた下肢骨がある。下肢骨は大

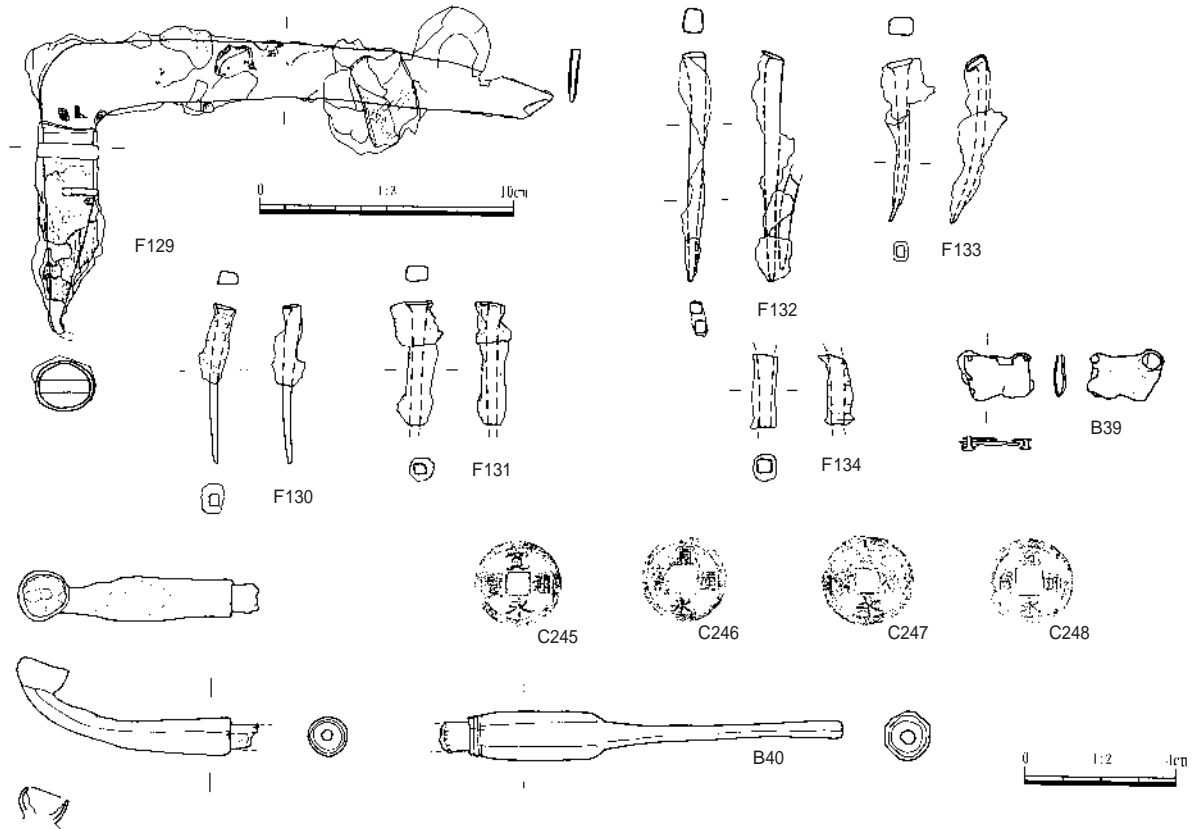


図186 墓108出土遺物

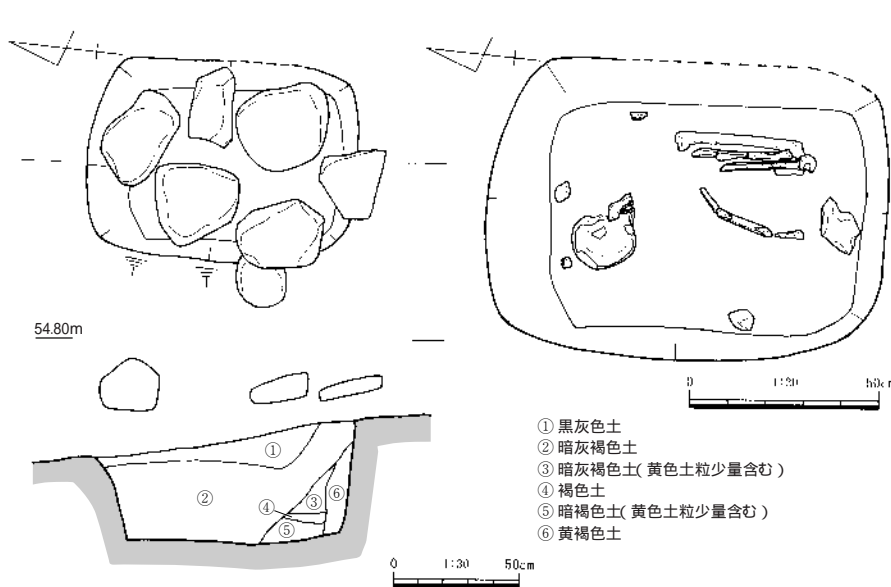


図187 墓109

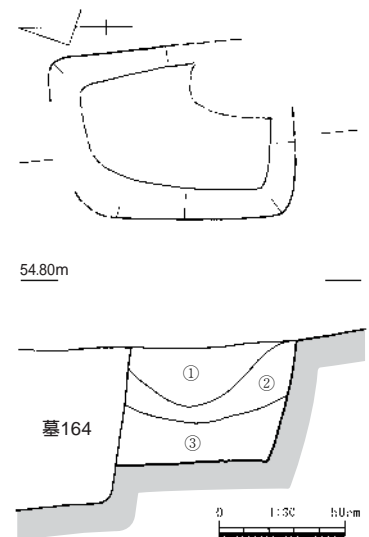


図188 墓110

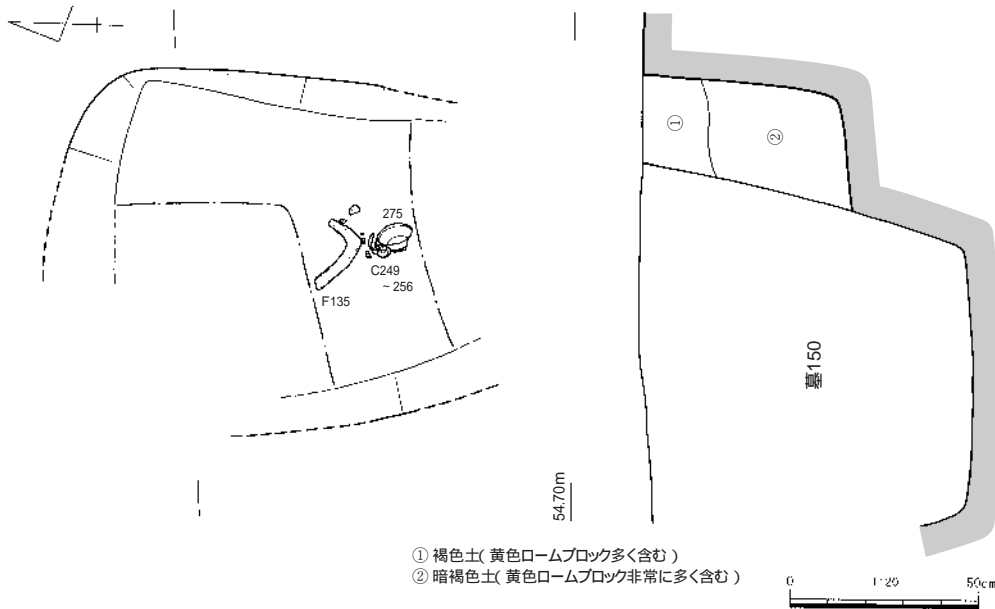


図189 墓111

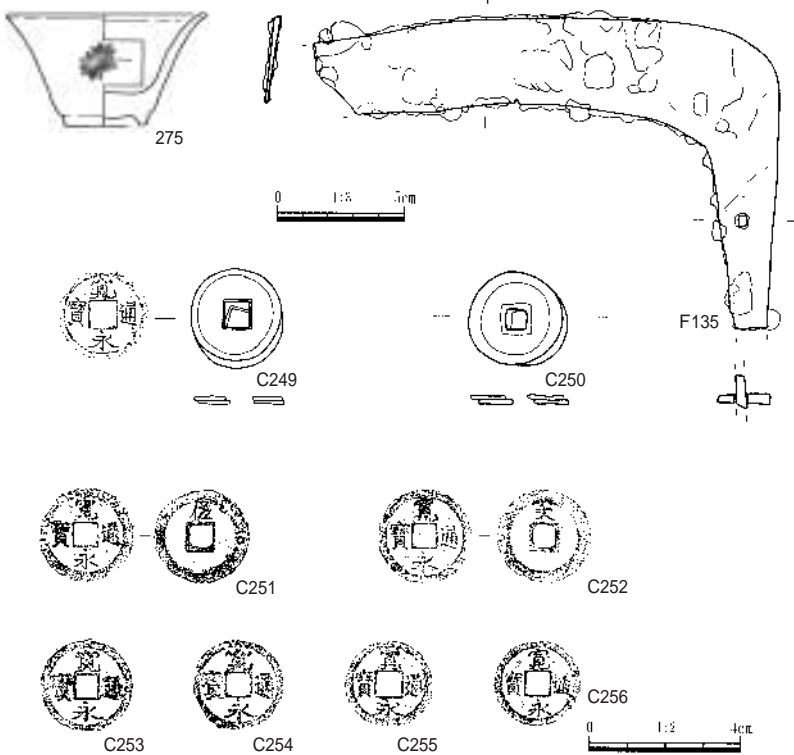


図190 墓111出土遺物

腿骨で前面を上にして、東に右、西に左のものが並んでいる。遺体の埋葬形態は北頭位の伏臥屈葬と考えられる。被葬者は壮年後半から熟年の女性と推定されている。

他に底面からは、腰元で鎌（F129）、煙管（B40）、銅製鋏留め金具（B39）が、頭から腰付近にかけて銅銭4枚（C245～C248）がそれぞれ出土したほか、釘16点（F132～F134ほか）も底面付近を中心に出土している。

墓109（図187、図版42）

G4区西縁中央北寄りに位置し、東肩を墓64に切られる。上面

に礫を7個集めて標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺1.05m、短辺0.8m、標石下面からの深さ0.55mを測り、長軸方向を北から6度西に振る。底面で人骨を検出した。北端に顔を南に向けた頭骨があり、南東には下肢骨がまつまってみられる。遺体の埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬と推定される。被葬者は壮年女性と推定されている。遺物は出土していない。

墓110（図188、図版42・56）

G4区西縁部の中央に位置し、北側を墓164に、南東隅を墓73に切られる。上面に標石は見られな

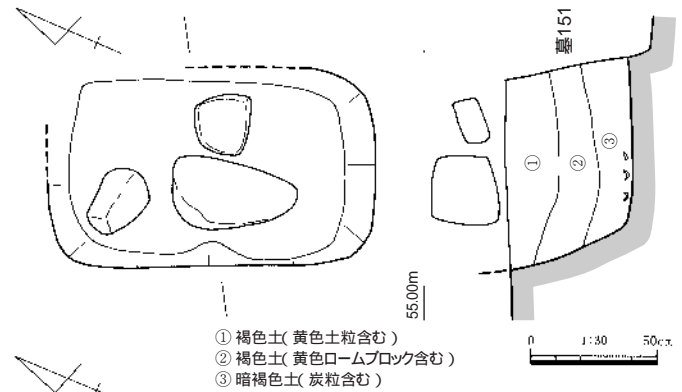
い。

土壙は平面長方形で、長辺0.95m、短辺0.7m、深さ0.45mを測り、長軸方向は座標南北軸に乗る。土壙内からは人骨、遺物とも出土していない。

墓111 (図189・190、図版42)

墓密集域の東部に位置し、土壙の北西を墓150に、南を墓151にそれぞれ切られる。現状では標石は確認できない。

土壙は平面長方形で、残存部で長辺0.8m、短辺0.7m、深さ0.55mを測り、長軸方向を北から2度西に向ける。土壙底面中央から歯牙、小骨片、染付小杯(275)、鎌(F135)、銅銭10枚(C249~C256)がまとめて出土している。被葬者は、性別は不明、年齢は壮年と推定されており、埋葬形態は不明である。



墓112 (図191・192、図版43)

墓密集域の東部に位置し、土壙北東部を墓151に切られる。3個の礫を集めて標石としている。

土壙は平面長方形で、長辺1.3m、短辺0.8m、標石下面からの深さ0.55mを測り、長軸方向を北から23度西に振る。底面で人骨を検出した。北東側に頭骨、その南に椎

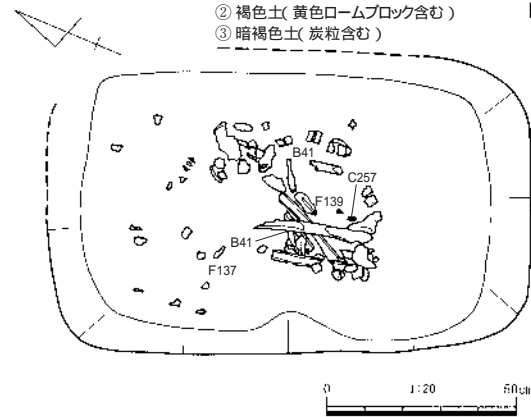


図191 墓112

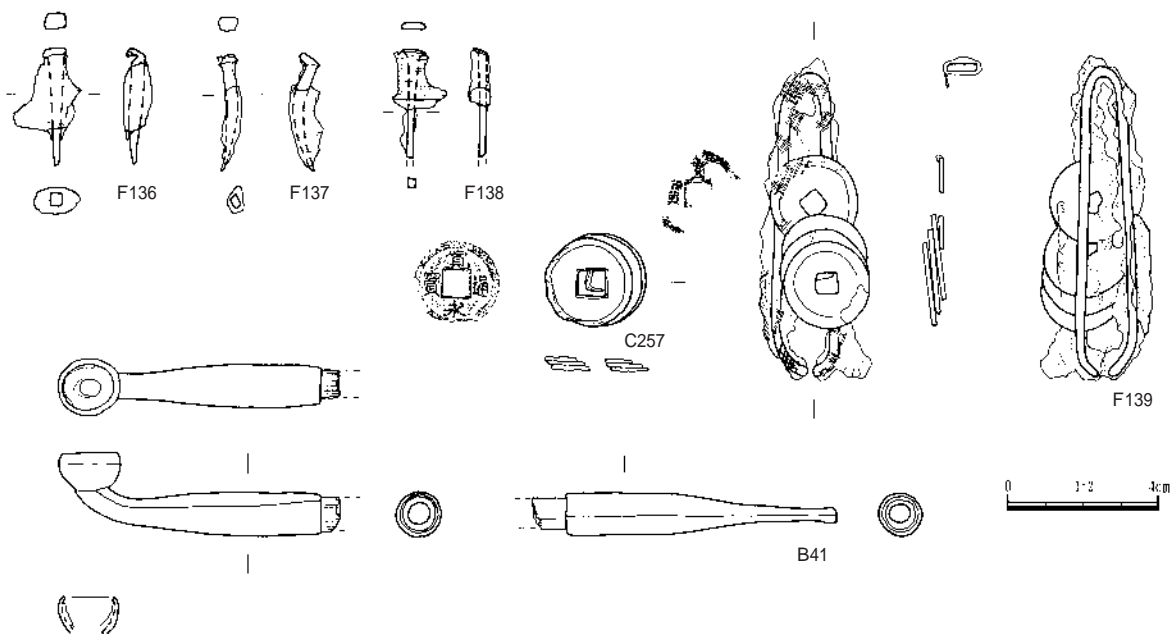


図192 墓112出土遺物

骨が並び、寛骨に続く。西側には北に膝を向けた下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と考えられる。被葬者は熟年男性と推定されている。

遺物は、釘18本（F136～F138ほか）が底面付近でやや散漫に出土したほか、人骨の胸元付近で毛抜きと銅銭4枚が固着したもの（F139）と煙管（B41）が、寛骨の東側で銅銭3枚（C257）がそれぞれ出土した。毛抜きには布が付着しているの、胸元の遺物は頭陀袋などに入れられていた可能性がある。

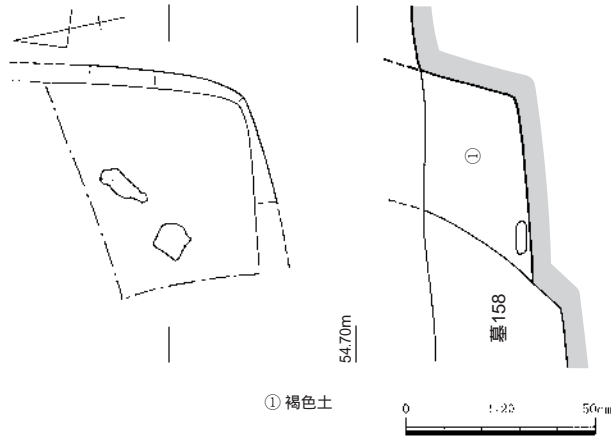


図193 墓113

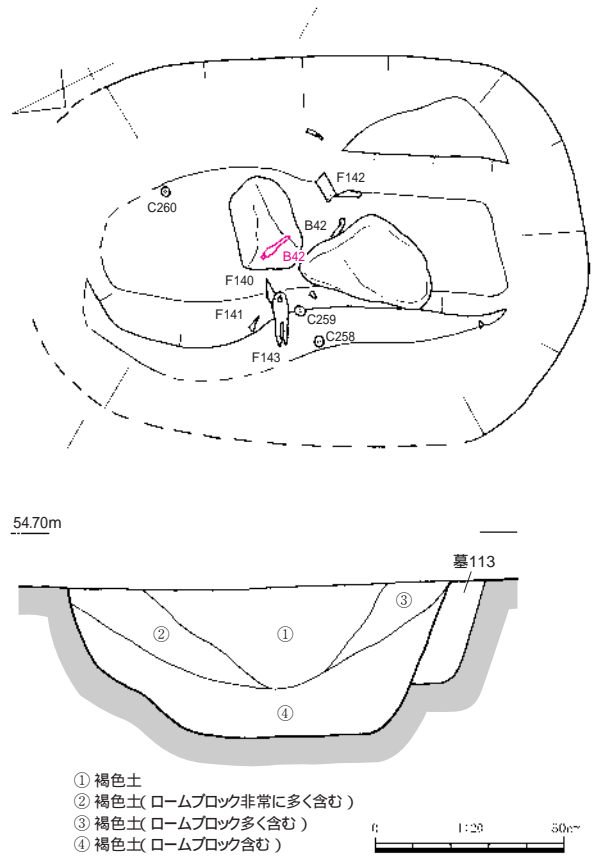


図194 墓114

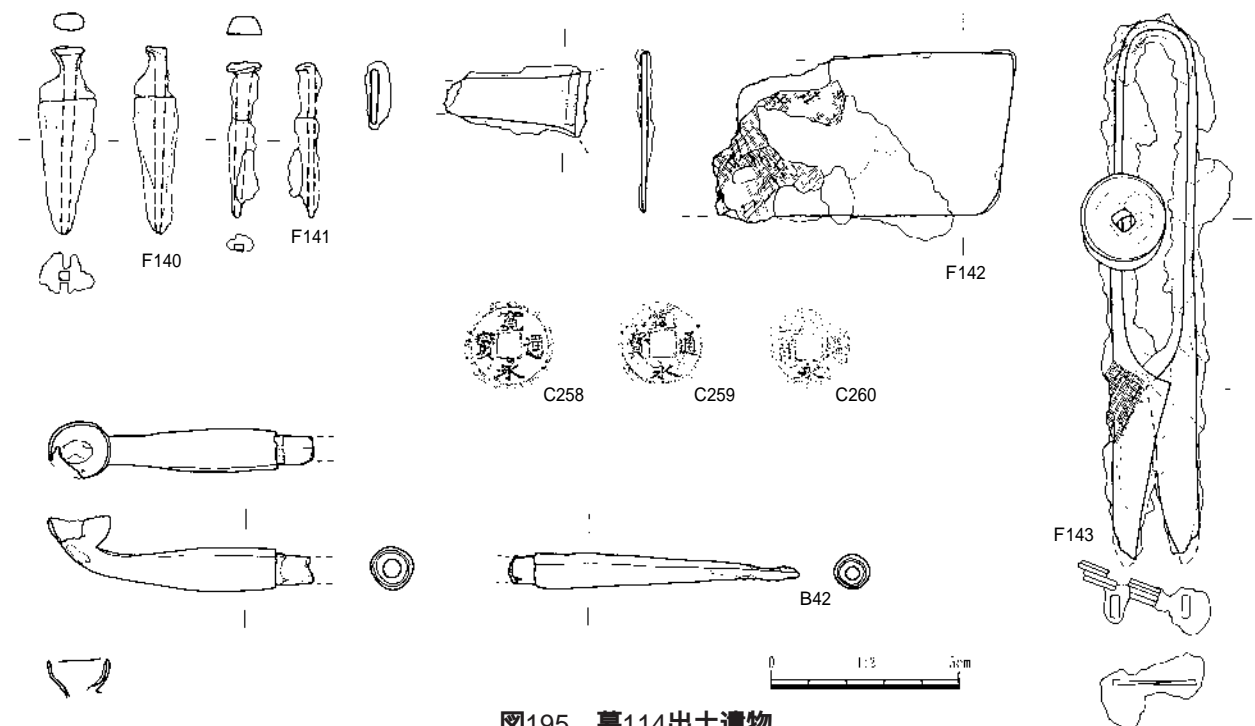


図195 墓114出土遺物

墓113 (図193、図版43)

墓密集域の東部に位置し、北側を墓158に、西側を墓114にそれぞれ切られる。現状では標石は見られない。

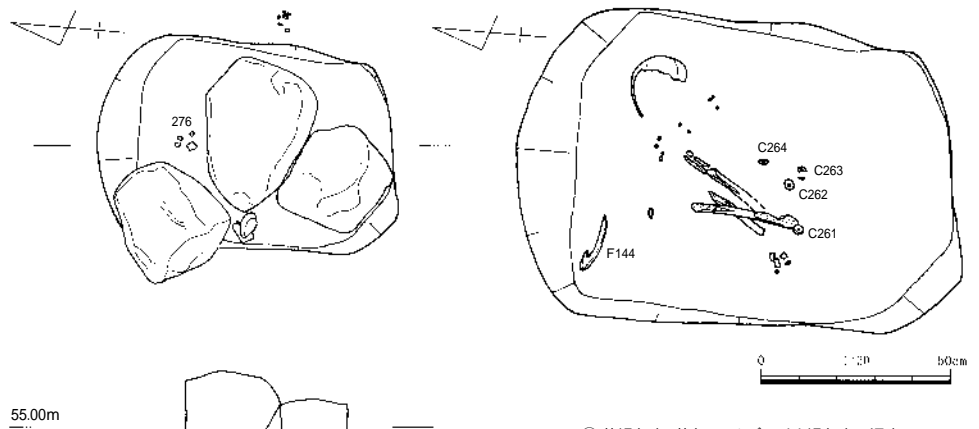
土壌は残存部分が少ないため不明な部分が多いが、平面形は方形で、南北辺残存長0.55m、東西辺残存長0.5m、検出面からの深さ0.3mを測る。土壌底面で人骨を検出した。遺存する部位が少なく、遺体の埋葬形態は不明である。

墓114 (図194・195、図版43)

墓密集域の中央付近に位置し、北側を墓158、西側を墓66に切られ、墓113を切る。現状では上面には標石は見られない。

土壌は平面長楕円形で、長軸1.5m、短軸1.05m、深さ0.4mを測り、長軸方向を北から26度東に振る。土壌上層から礫が2点出土した。

底面からは人骨小片数点と、釘4本(F140・F141ほか)、包丁(F142)、鋏と銅銭4枚が固着したもの(F143)、銅銭3枚(C258～C260)、煙管(B42)が出土した。



墓115 (図196・197、図版43)

墓密集域の南東部に位置する。上面に大型礫3個を並べて標石とする。標石周辺から土師器(276)が出土した。

土壌は平面長方形で、長辺1.15m、短辺0.8m、標石下面からの深さ0.65mを測り、長軸方向を北から2度東に振る。底面から人骨を検出した。土壌北東隅に顔を西に向けた頭蓋骨があり、その南

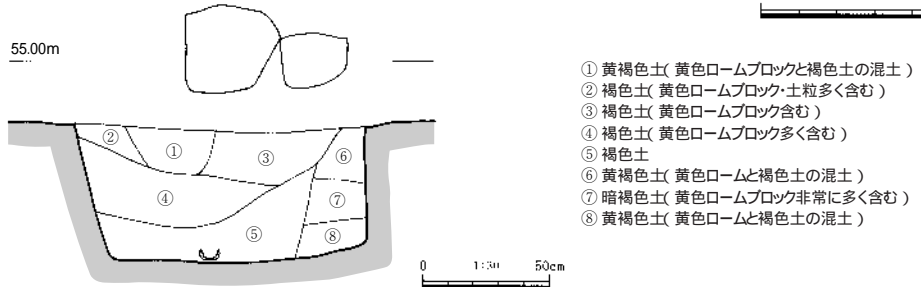


図196 墓115

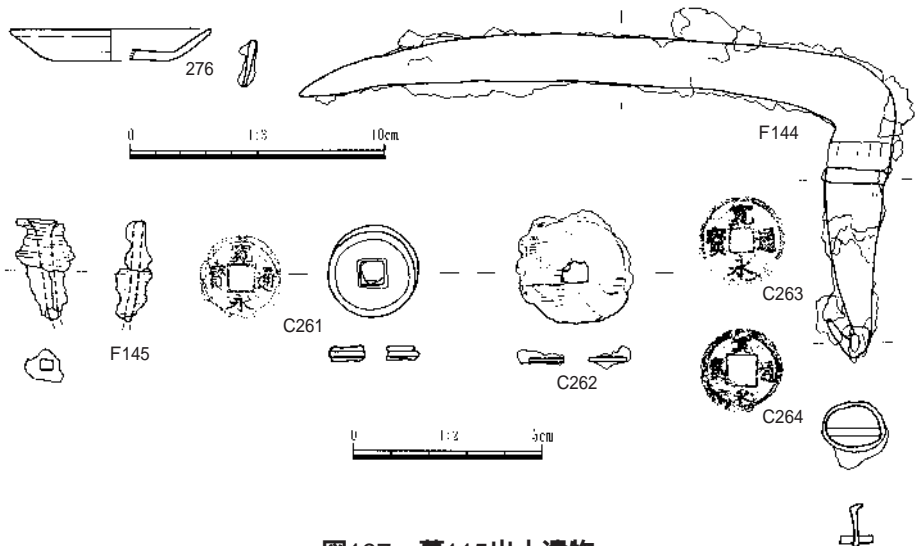


図197 墓115出土遺物

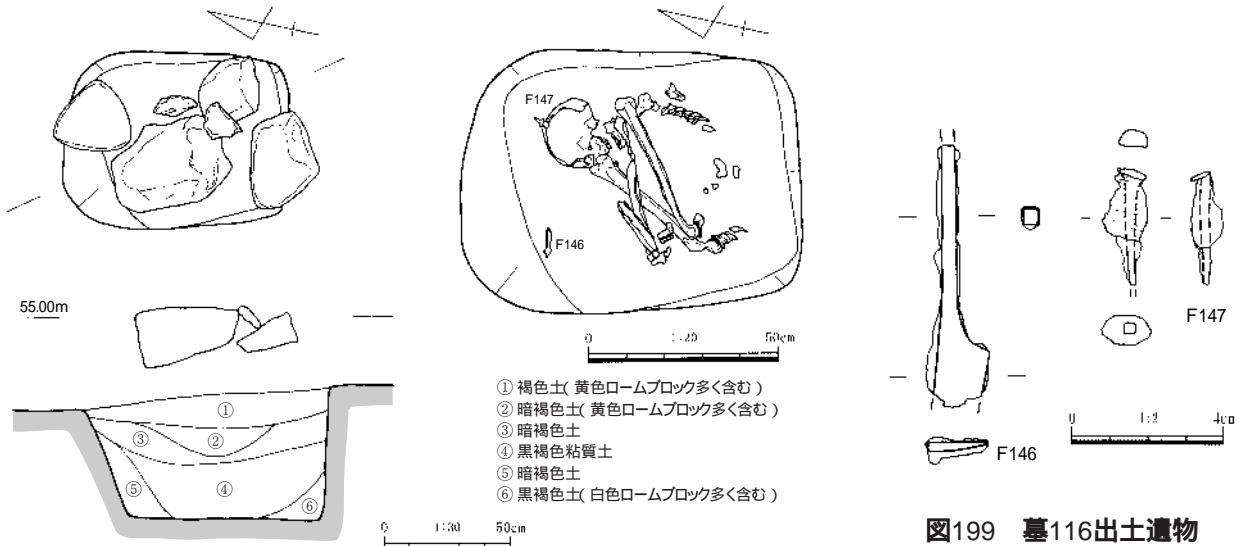


図198 墓116

図199 墓116出土遺物

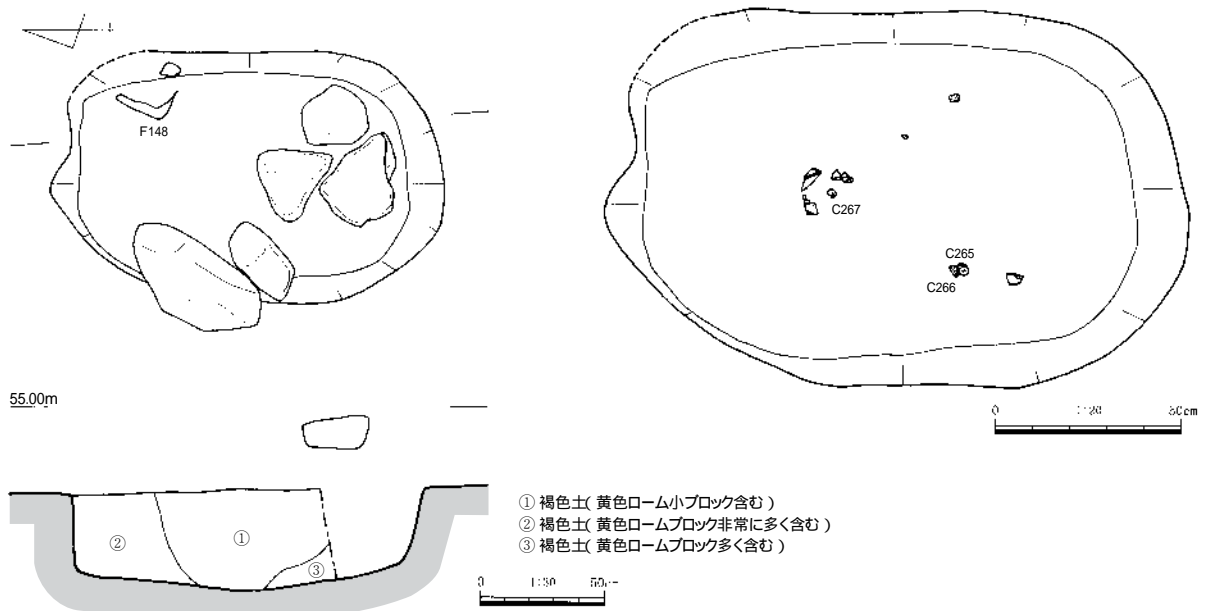


図200 墓117

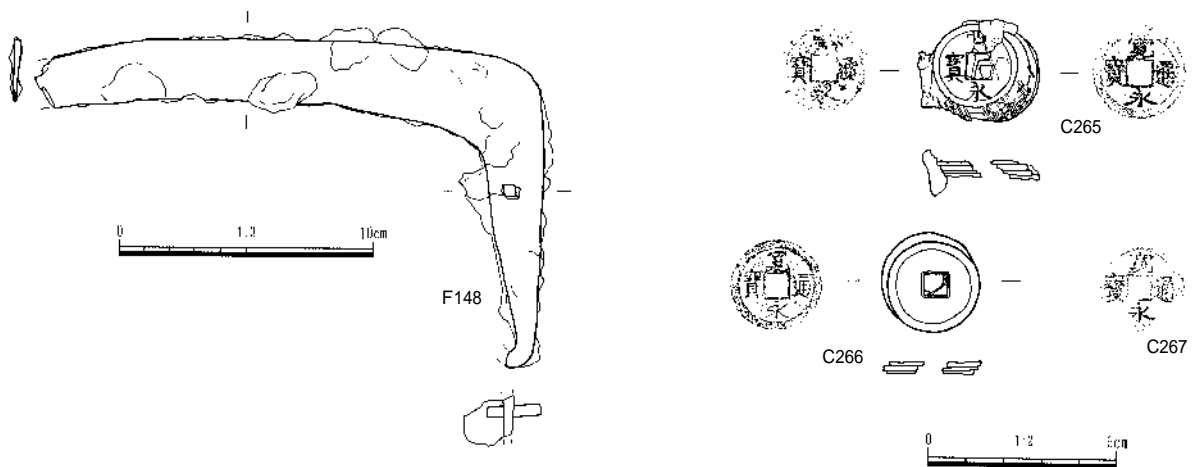


図201 墓117出土遺物

西に膝を北に向けた下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と推定される。被葬者は壮年女性と推定されている。

遺物は、底面北西隅付近から鎌（F144）が、中央付近で銅銭5枚（C261・C263・C264）、鉄銭1枚（C262）が出土した。ほかに、釘が1点（F145）出土しているが、混入の可能性が高い。

墓116（図198・199、図版43・44）

墓密集域の南部に位置し、墓117を切る。上面に大型の礫を4個集め標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺0.9m、短辺0.7m、標石下面からの深さ0.65mを測り、長軸方向を北から13度西に振る。底面から比較的遺存状態の良い人骨を検出した。土壌北東隅に顔を西に向けた頭蓋骨があり、その南に椎骨が連なる。南西側に膝を北東に向けた下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と考えられる。被葬者は熟年男性と推定されている。これとは別個体の下顎骨、歯牙数本が散乱して見つまっている。

遺物は、頭蓋骨上から釘1点（F147）、底面北西隅付近から鉄破片（F146）が出土したが、いずれも混入の可能性が高い。

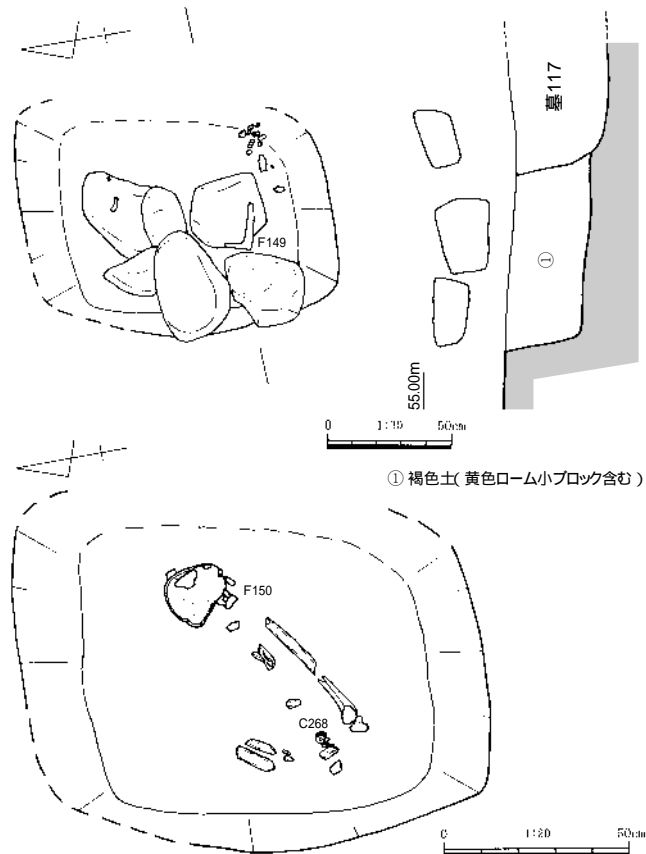


図202 墓118

墓117（図200・201、図版44）

G 4区南東部に位置し、北東隅を墓116に切られ、墓118を切る。上面に5個ほどの礫を集めて標石としている。上面から鎌（F148）が出土した。

土壌は楕円形に近い長方形を呈し、長辺1.5m、短辺1m、標石下面からの深さ0.6mを測り、長軸方向を北から9度東に振る。土壌内からは、底面中央北寄りでは頭骨片を検出したほか、小骨片がわ

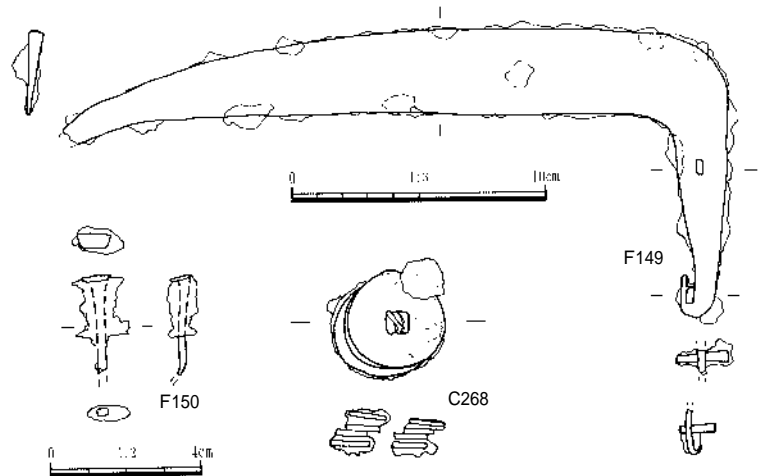


図203 墓118出土遺物

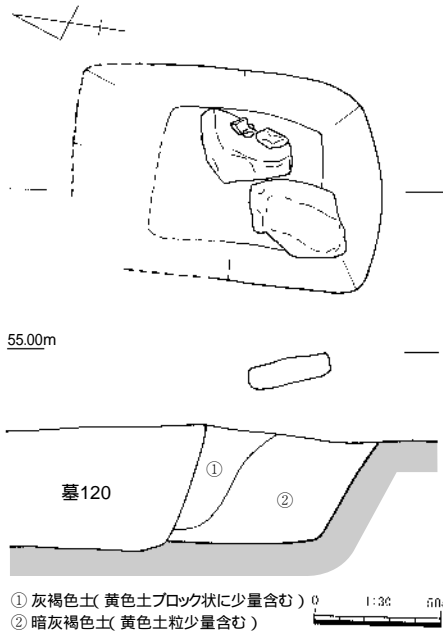


図204 墓119

ずかに出土した。遺存状態が悪いため不明な部分が多いが、遺体の埋葬形態は北頭位の臥葬の可能性が高いだろう。被葬者は、性別は不明、年齢は成人と推定されている。

遺物は、底面南西側で銅銭が7枚（C265・C266）、頭骨周りで銅銭が1枚（C267）出土した。

墓118（図202・203、図版44）

G4区南東部に位置し、東側を墓117に切られる。上面に6個ほどの礫を密に組んで標石としている。標石上から鎌（F149）が出土した。

土壌は平面長方形で、長辺1.25m、短辺残存長0.9m、標石下面からの深さ0.4mを測り、長軸方向を北から9度東に振る。底面から人骨を検出した。北東側に頭蓋骨があり、南西に膝を北に向ける下肢骨がある。下肢骨は東に右のもの、西に左のもの

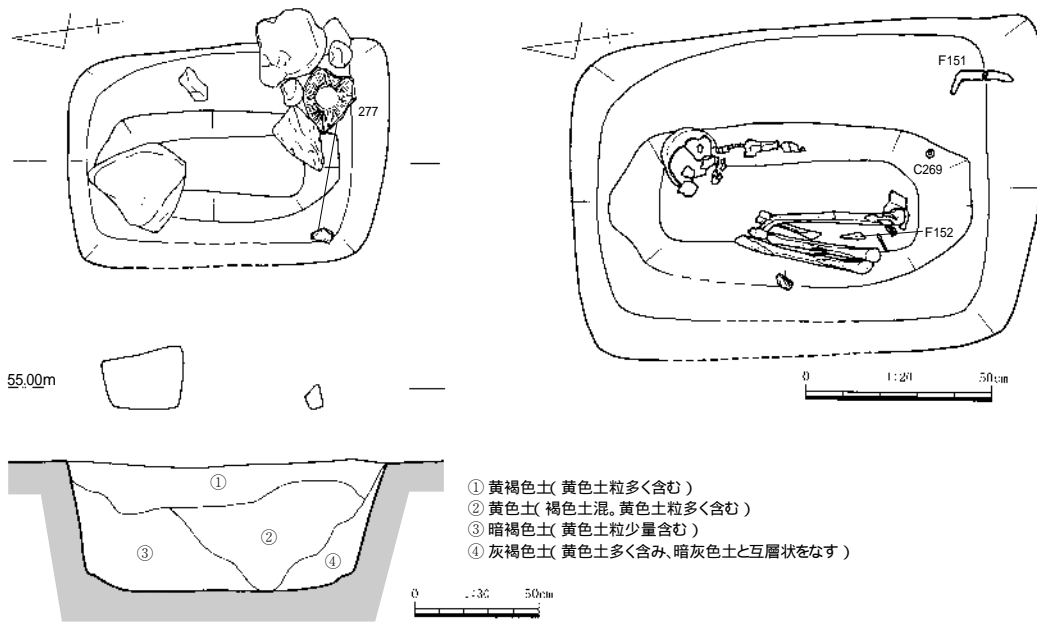


図205 墓120

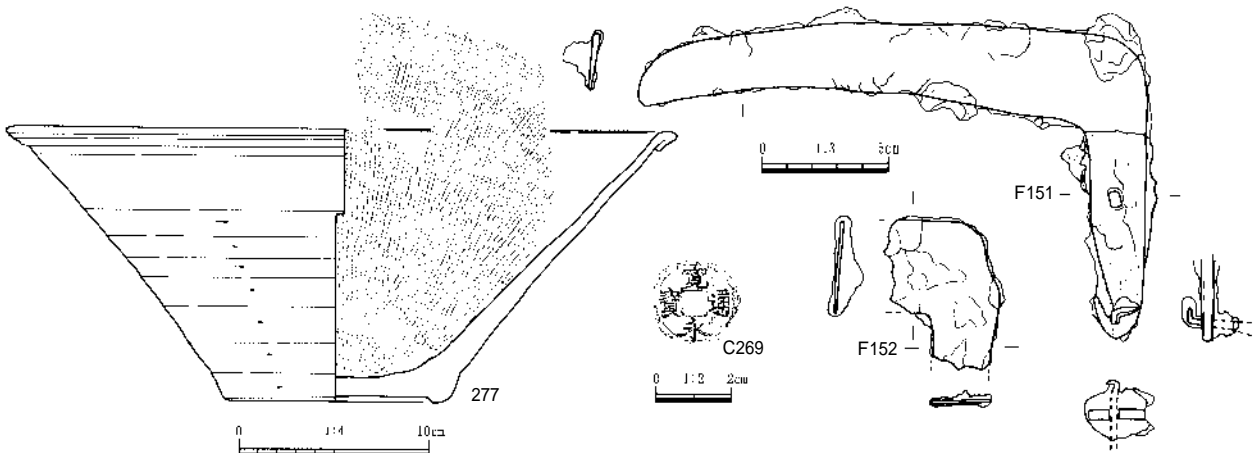


図206 墓120出土遺物

のが間隔をあけて並んでいる。遺体の埋葬形態は北頭位の伏臥屈葬の可能性が高いだろう。被葬者は壮年後半から熟年の男性と推定されている。

遺物は、腰元で銅銭2枚・鉄銭2枚（C268）が出土したほか、釘が2点（F150ほか）出土している。

墓119（図204）

墓密集域南部に位置し、北東隅を墓116に、南西側を墓120にそれぞれ切られる。上面に大型礫2個を並べ標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺1.2m、短辺0.85m、標石下面からの深さ0.6mを測り、長軸方向を北から4度西に振る。土壌内からは人骨、遺物ともに出土していない。

墓120（図205・206、図版44）

墓密集域南部に位置し、北西隅を墓159に切られ、墓119を切る。上面に礫数個を疎らに置いている。礫の下から陶器擂鉢（277）が出土した。なお、この擂鉢は墓120土壌内からも口縁部片が出土したほか、墓82・墓186からも口縁部片が出土し、接合している。

土壌は平面長方形で、底面中央が数cm低く掘り窪められている。長辺1.25m、短辺0.9m、標石下面からの深さ0.75mを測り、長軸方向を北から8度東に振る。底面の窪みのなかから人骨を検出した。北に顔を西に向けた頭骨があり、その南に椎骨が並ぶ。南西側には膝を北に向けて折った下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と考えられる。被葬者は壮年から熟年前半の男性と推定されている。

遺物は、底面南東付近で鎌（F151）が、下肢骨付近で鎌破片（F152）が、底面南部で銅銭1枚（C269）が出土した。

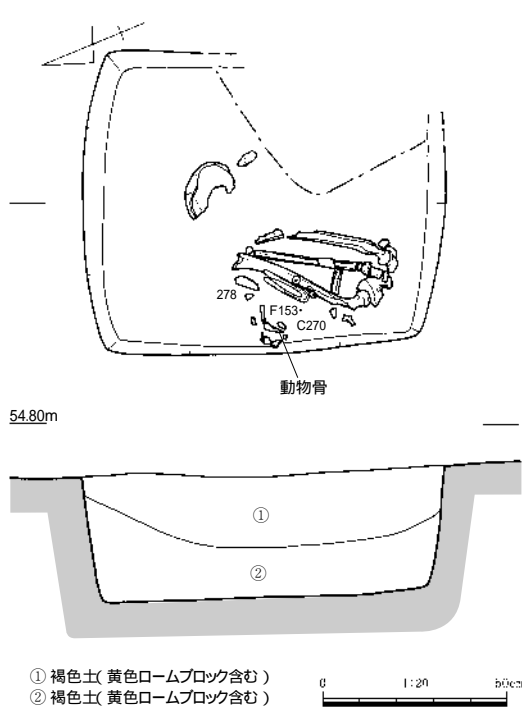


図207 墓121

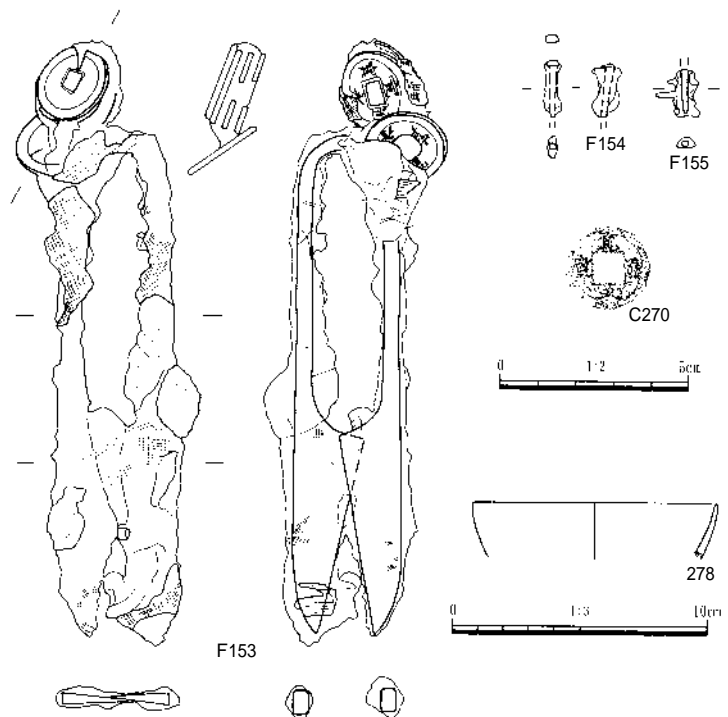


図208 墓121出土遺物

墓121 (図207・208、図版45)

G 4 区南部に位置し、南東側を墓122に切られる。現状では上面に礫は見られない。

土壌は平面長方形で、長辺 1 m、短辺 0.8 m、深さ 0.35 m を測り、長軸方向を北から 23 度東に振る。底面で人骨を検出した。土壌中央北東寄りに頭蓋骨があり、その南西に膝を北に向けて折った下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬と考えられる。被葬者は壮年後半から熟年の男性と推定されている。

遺物は、右大腿骨の西隣から鉄と銅銭 4 枚・鉄銭 1 枚が固着したもの (F153) と銅銭 1 枚 (C270) が出土した。ほかに、釘 2 点 (F154・F155)、磁器碗破片 (278) が底面付近で出土しているがいずれも混入であろう。また、土壌西縁中央から動物骨片が検出されているが、これらも混入と考えられる。

墓122 (図209・210、図版45)

G 4 区南部に位置し、墓121と墓81を切る。上面に 7 個の礫を集めて標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺 0.9 m、短辺 0.7 m、標石下面からの深さ 0.65 m を測り、長軸方向を北から 7 度西に振る。底面で人骨を検出した。北東側に頭骨があり、南西側に膝を北に向けて折った下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と考えられる。被葬者は熟年女性と推定されている。

遺物は、頭骨の南西側付近から鉄と鉄銭 2 枚および櫛の歯が固着したもの (F156) と銅銭 4 枚 (C271~C274) が重なって出土した。

墓123 (図211・212、図版45)

G 4 区南西部に位置し、北側肩を墓86に切られ、墓87と墓124を切る (土壌の南端は墓124と同時に掘り下げてしまったため復元ラインを示している)。上面に 30 個程度の大型、小型の礫を密に組んで標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺 1.15 m、短辺 0.95 m、標石下面からの深さ 0.7 m を測り、長軸方向を北か

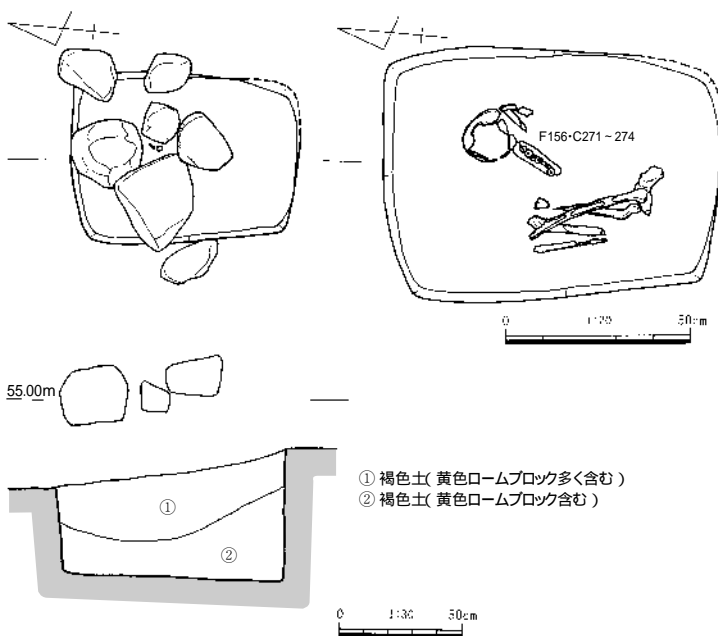


図209 墓122

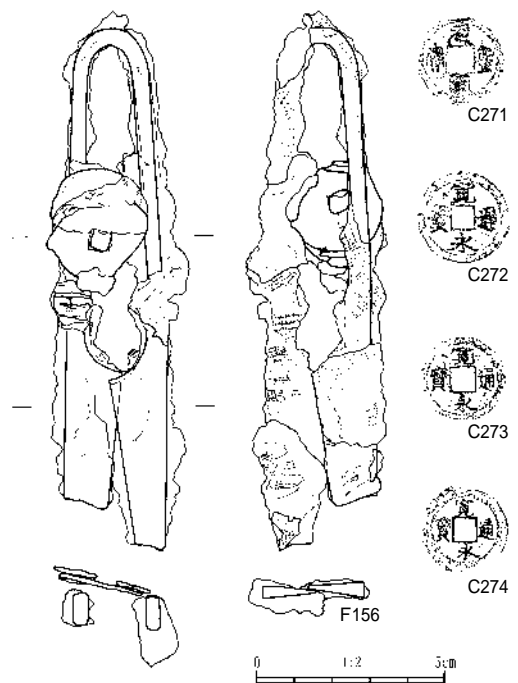


図210 墓122出土遺物

ら28度西に振る。底面で人骨を検出した。土壌中央に頭蓋骨片があり、その南西に膝を北に向けて折った下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と想定される。被葬者は熟年から老年の男性と推定されている。

遺物は、左膝の下から銅銭4枚・鉄銭1枚（C275）、銅銭1枚（C276）、鉄と鉄銭1枚の固着したもの（F157）、木製数珠玉4点（W23～W26）がまとめて出土したほか、腰付近から煙管の雁首（B43）が出土した。鉄銭や鉄に布が付着しているため、膝の下で出土した遺物は頭陀袋などに入れ

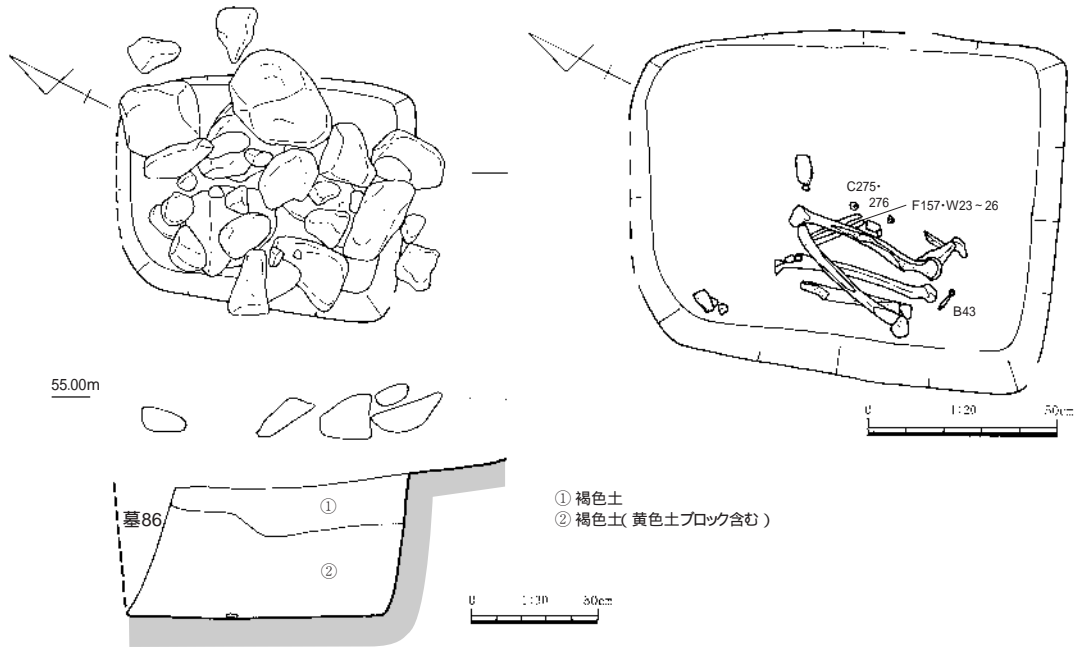


図211 墓123

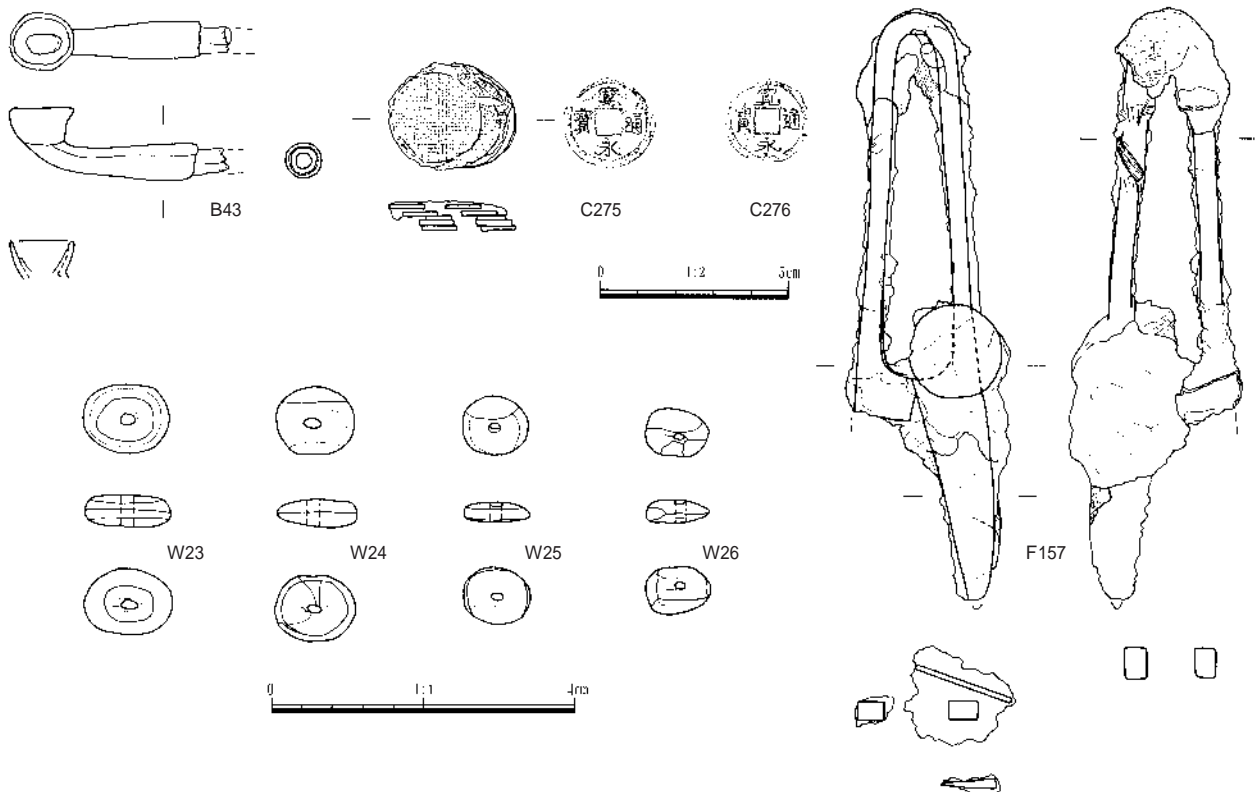
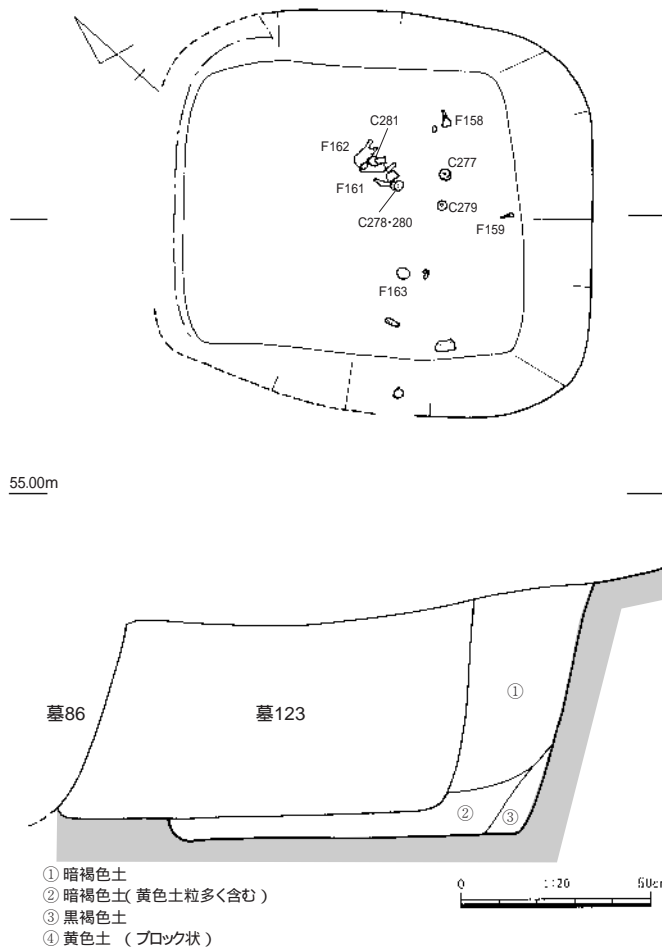


図212 墓123出土遺物



られていた可能性が高い。

墓124 (図213・214、図版45)

G 4区南西部に位置し、北側を墓123に大きく切られ、墓125を切る。現状では標石は確認できない。

土壌は平面長方形で、長辺残存長1.1m、短辺1.05m、深さ0.65mを測り、長軸方向を北から43度西に振る。土壌内上層から刀子(F160)、鉄銭1枚(C282)が出土した。

底面からは人骨片が数点、釘4点(F158ほか)、鋏持ち手片(F159)、毛抜き(F161)、鋏(F162)、銅銭10点(C277~C281)、布と木質が固着した鉄片(F163)が出土している。毛抜き(F161)と鋏(F162)には木製数珠玉が2点ずつと、布が付着している。

図213 墓124

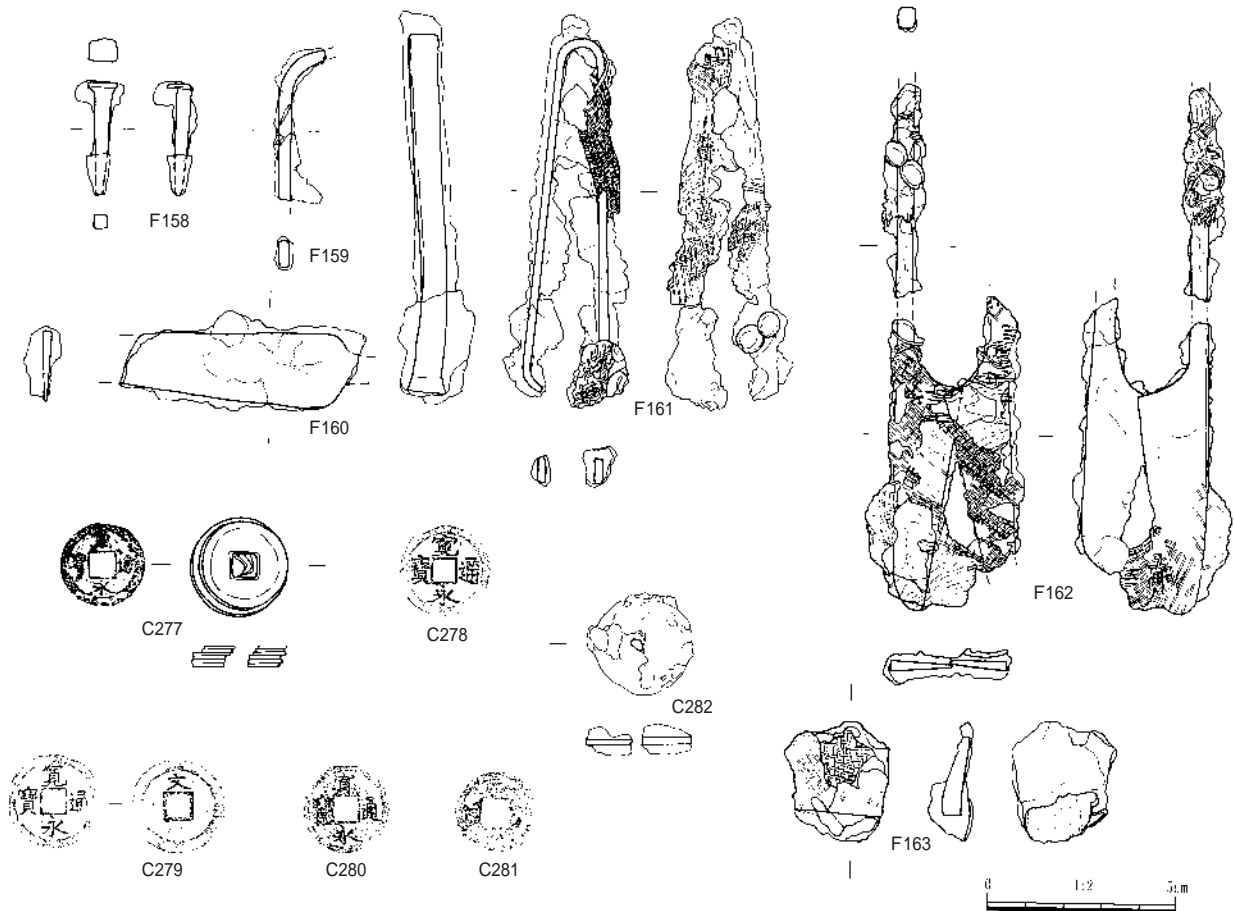
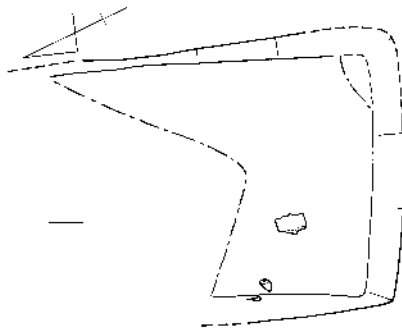


図214 墓124出土遺物



55.00m

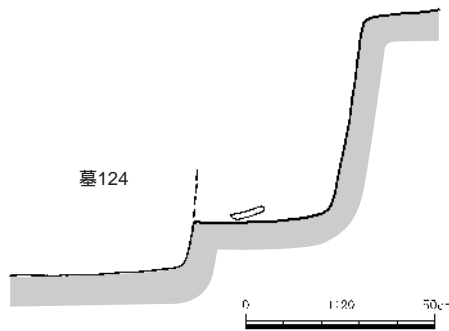


図215 墓125

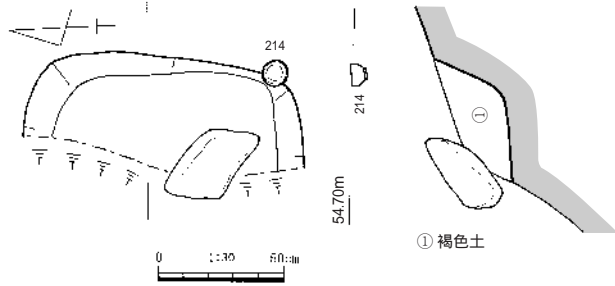


図216 墓126

墓125 (図215、図版45)

G 4 区南西部に位置し、北側を墓124に大きく切られ、南東隅を墓167に切られる。現状では標石は確認できない。

土壌は平面長方形で、長辺残存長0.9m、短辺0.75m、深さ0.55mを測り、長軸方向を北から26度東に振る。底面から人骨片がわずかに出土した。被葬者は成人女性?と推定されている。

墓126 (図216)

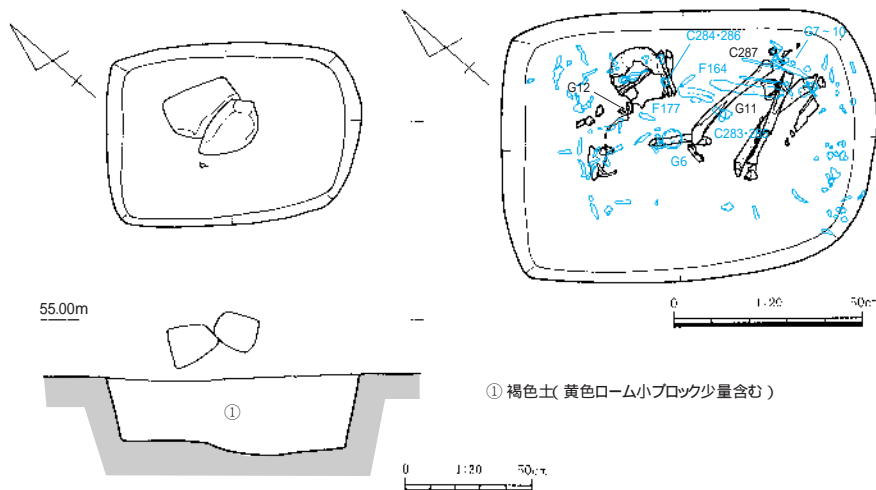
G 4 区西縁に位置し、西側半分を農道によって掘削されている。上面に礫が1個乗っている。陶器碗(図72:214)が出土しているが、本遺構には直接は伴わないと考えられる。

土壌は平面長方形で、長辺1.1m、短辺残存長0.45m、深さ0.3mを測り、長軸方向を北から3度東に振る。土壌内からは人骨、遺物とも出土していない。

墓127 (図217・218、表、図版46)

G 4 区南東部に位置し、墓77・墓128を切る。土壌上に礫を2個並べている。

土壌は平面長方形で、長辺1m、短辺0.7m、標石下面からの深さ0.4mを測り、長軸方向を北から



① 褐色土(黄色ローム小ブロック少量含む)

図217 墓127

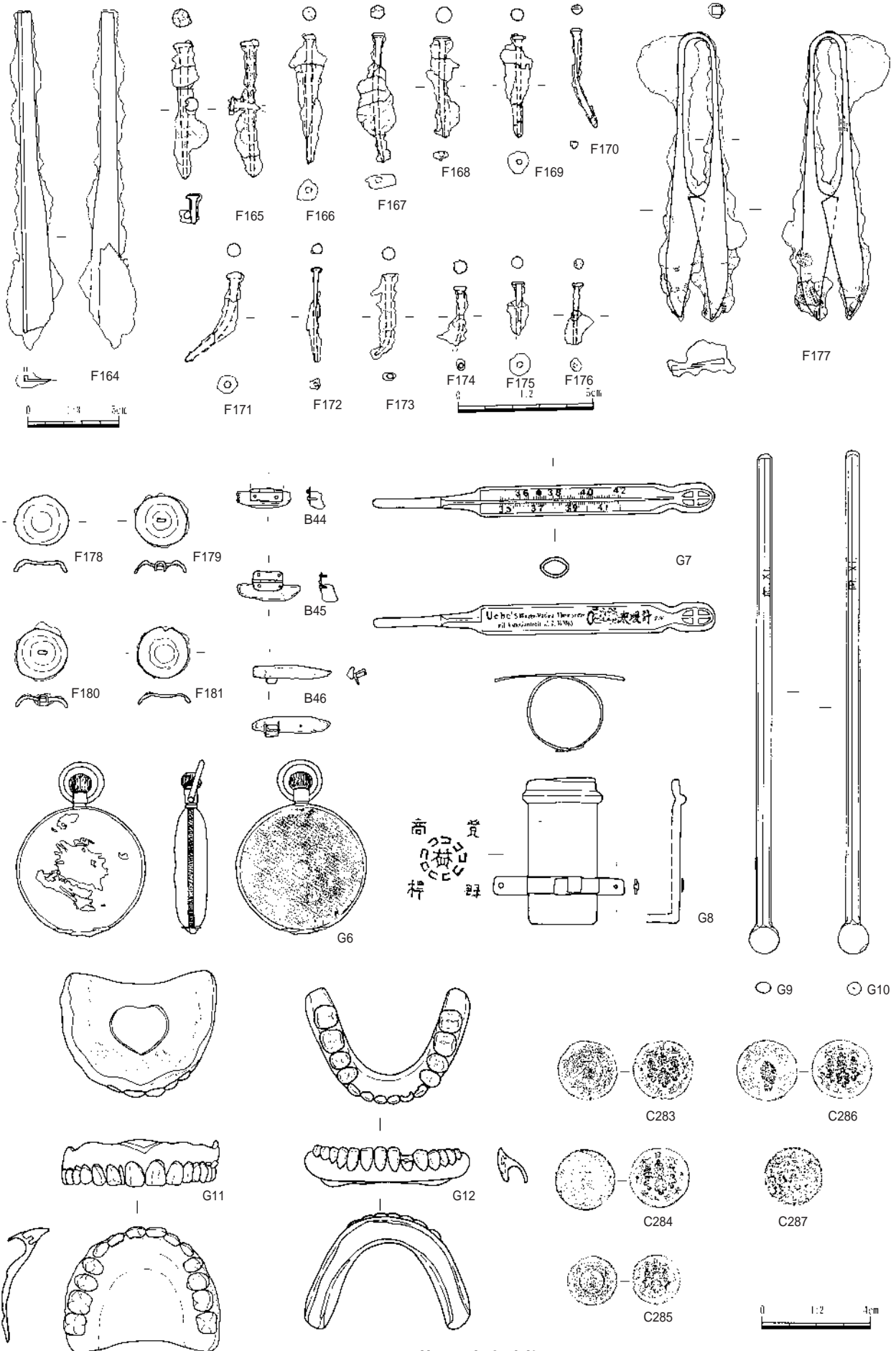


图218 墓127出土遺物

42度西に振る。底面から人骨を検出した。北東に顔を西に向けた頭骨があり、その南に膝を西に向けて折った下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬と推定される。被葬者は老年女性と推定されている。

底面付近から洋釘92本（F165～F176ほか）和釘7本が出土している。洋釘は0.7m×0.45mの長方形に並んで出土しており、これが棺の形状に一致すると考えられる。その他の遺物は胸元から腰付近にかけてまとまって出土している。木箱の部品と考えられるもの（F164・F178～F181・B44～B46）が出土しており、副葬品の大半は木箱に収められていたようである。副葬品は鋏（F177）、体温計（G7）、温度・湿度計（G8～G10）、懐中時計（G6）、上顎用義歯（G11）、大正9年、10年の銘のある1銭硬貨4枚（C283～C286）、大正7年銘の5厘硬貨1枚（C287）が出土した。遺物はほかに下顎用の義歯（G12）が下顎骨に装着されて出土している。

出土した硬貨から1921年以降の墓と考えられる。

墓128（図219・220、図版46）

G4区南東部に位置する。現状では上面に礫は見られない。

土壌は平面長方形で、長辺0.9m、短辺0.8m、深さ0.4mを測り、長軸方向を北から12度東に振る。人骨は小骨片が数点出土したのみで、遺体の埋葬形態は不明である。

遺物は、検出面付近で鎌（F182）が、底面から底面より10cmほど浮いた位置にかけて銅銭が17枚（C288～C294）出土した。銅銭には布の付着が見られる。

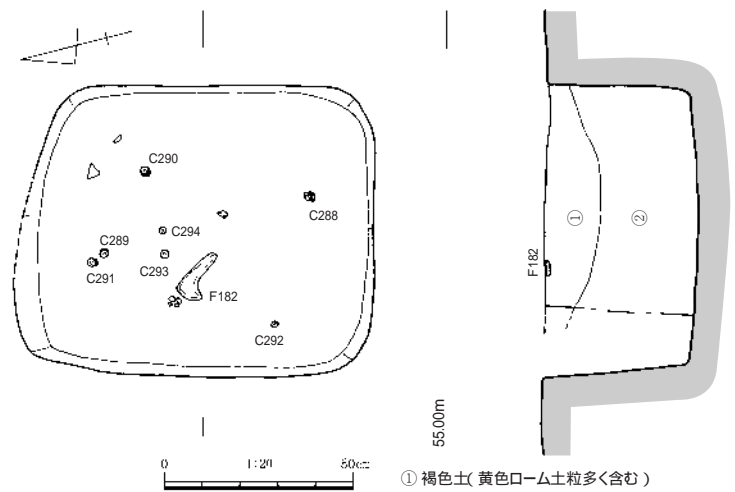


図219 墓128

墓129（図221・222、図版46）

G4区南東隅に位置し、墓52を切る。上面に11個の礫を密に組んで標石としている。標石上から染付碗（279）が出土

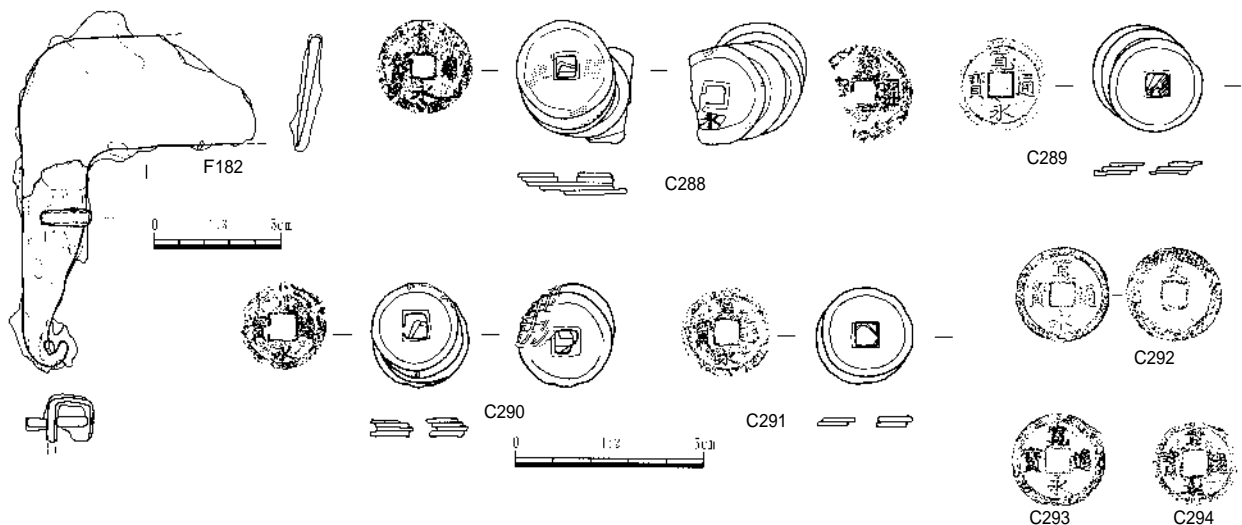


図220 墓128出土遺物

した。

土壌は平面長方形で、長辺1m、短辺0.85m、標石下面からの深さ0.4mを測り、長軸方向を北から25度西に振る。上層から鉄釉陶器碗の底部片(280)が出土した。

底面から人骨を検出した。北端付近に顔を西に向けた頭骨があり、その南に椎骨が並ぶ。椎骨の西には膝を北に向けて折った下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と考えられる。被葬者は熟年から老年の女性と推定されている。

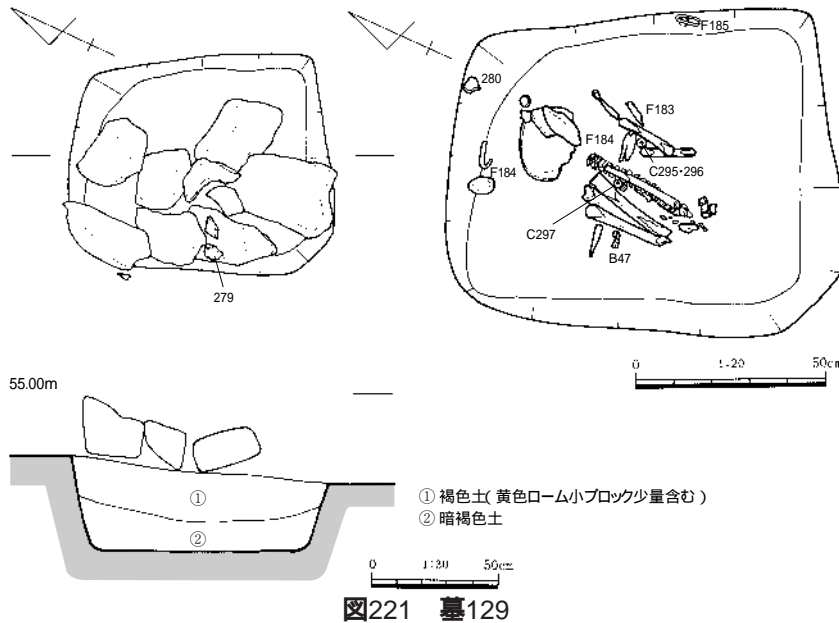


図221 墓129

遺物は、上腕骨周辺で刀子(F183)、鋏(F184)の刃部、布の付着した鉄銭1枚(C295)・銅銭10枚(C296)が、椎骨下から布の付着した銅銭2枚・鉄銭2枚(C297)が、下肢骨西側で煙管(B47)が、底面北縁部で鋏(F184)の持ち手が、底面東縁部で毛抜きと銅銭1枚・鉄銭2枚が固着したものの(F185)がそれぞれ出土した。

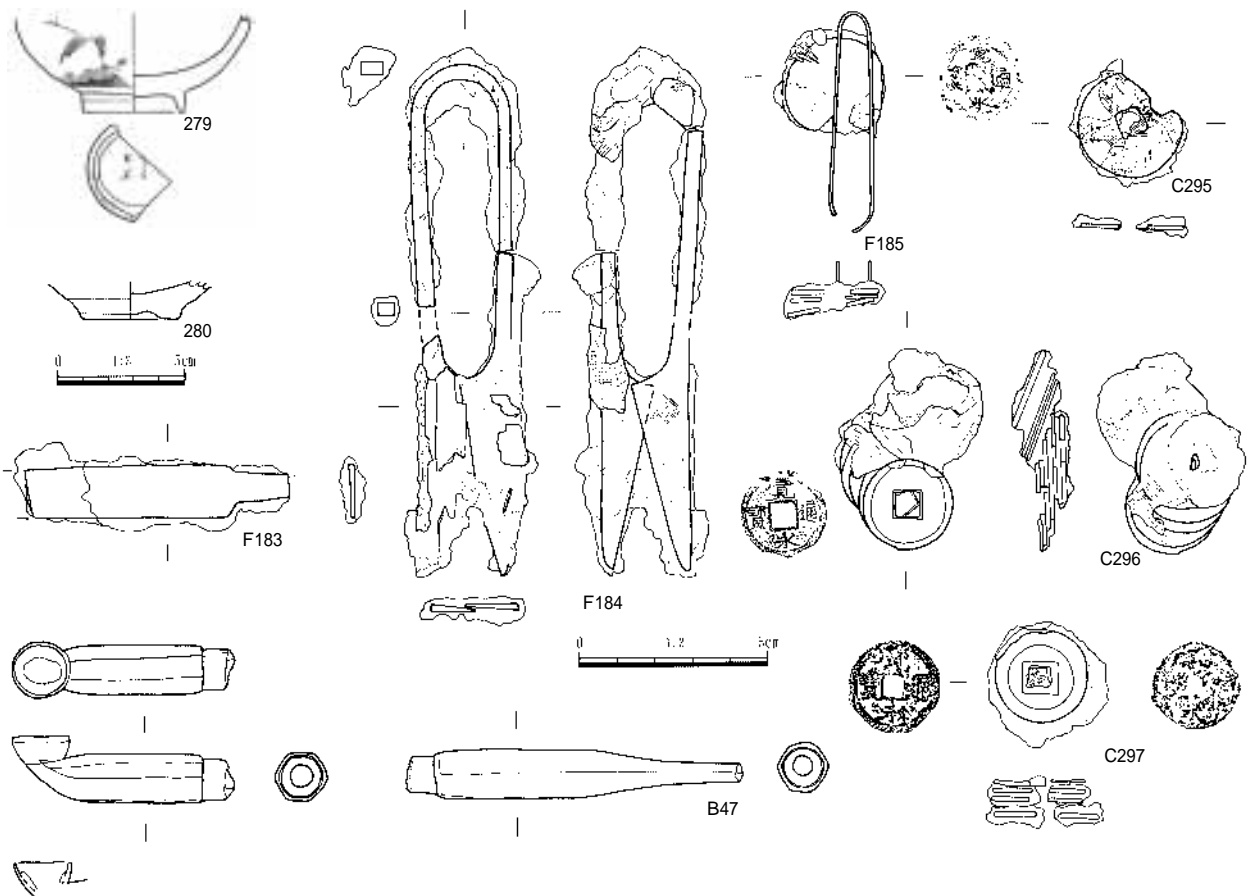


図222 墓129出土遺物

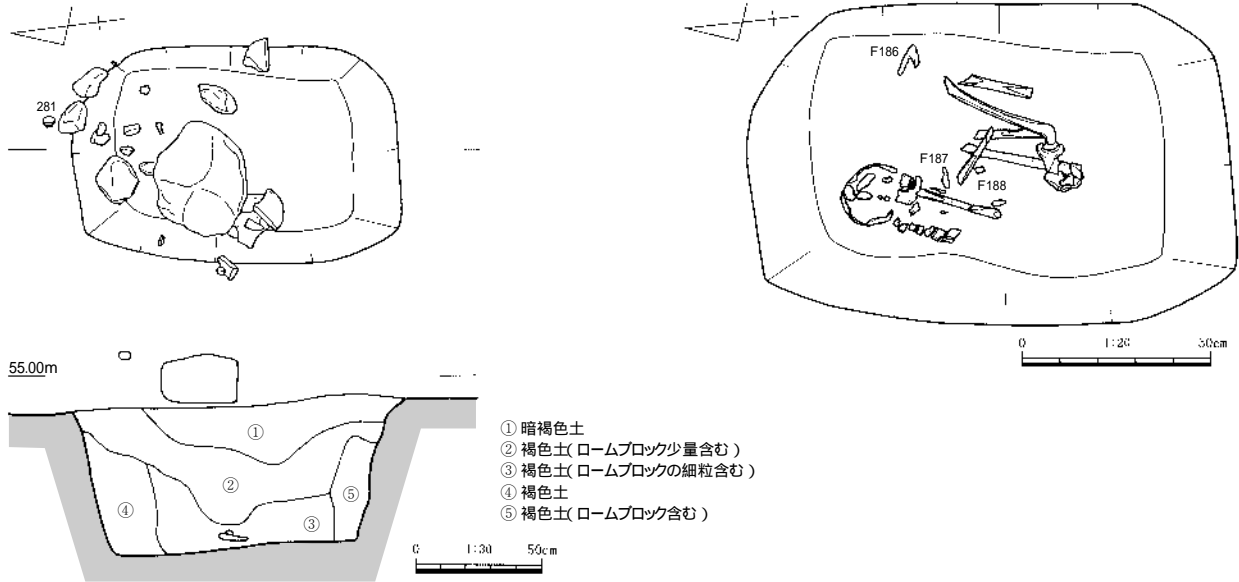


図223 墓130

墓130 (図223～225、図版47)

G 4 区南縁東部に位置する。土壌上に大型礫 1 個を置き、周辺に小型礫数個を集めている。標石周辺から完形の染付紅猪口 (281) などが出土した。



図224 墓130出土遺物 1

土壌は平面長方形で、長辺1.3m、短辺0.85m、標石下面からの深さ0.6mを測り、長軸方向を北から7度東に振る。底面から人骨を検出した。土壌北西隅に顔を東に向けた頭骨があり、その南に椎骨が並ぶ。南東側には膝を北に向けて折った下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の左側臥屈葬と考えられる。被葬者は壮年後半から熟年の女性と推定されている。

遺物は、底面北東から鎌 (F186) が立った状態で、人骨 (頭骨～上肢骨) の下から銅銭 4 枚・鉄銭 2 枚 (C298・C299) が出土した。ほかに、胸元付近から鉄破片 (F187)、釘 1 点 (F188) が出土している。

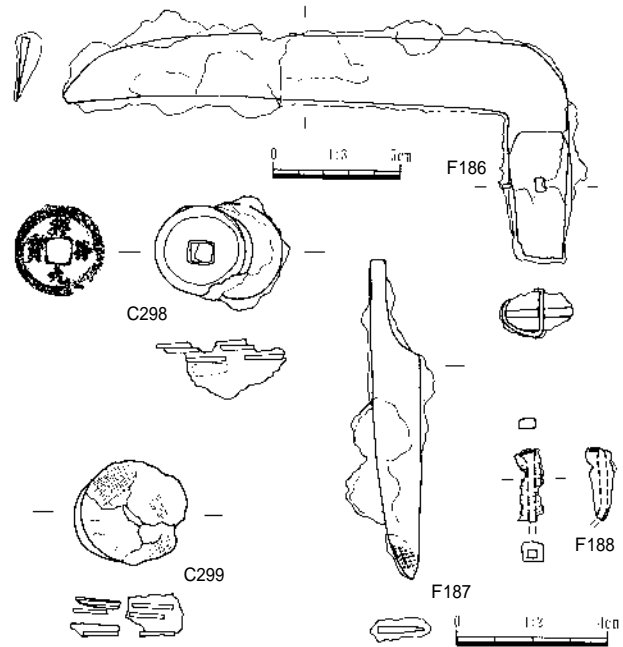


図225 墓130出土遺物 2

墓131 (図226・227、図版47)

G 4 区南縁に位置する。上面に礫を十数個集めて標石とする。標石上から銅銭 2 枚 (図75 : C106) が出土した。

土壌は平面長方形で、長辺1.15m、短辺0.8m、標石下面からの深さ0.7mを測り、長軸方向を北から20度西に振る。底面で人骨を検出した。北東隅に頭骨があり、その南西に大きく間隔を空けた左右の下肢骨が膝を北に向けて並ぶ。下肢骨は東に右、西に左のものがある。遺体の埋葬形態は北頭位の

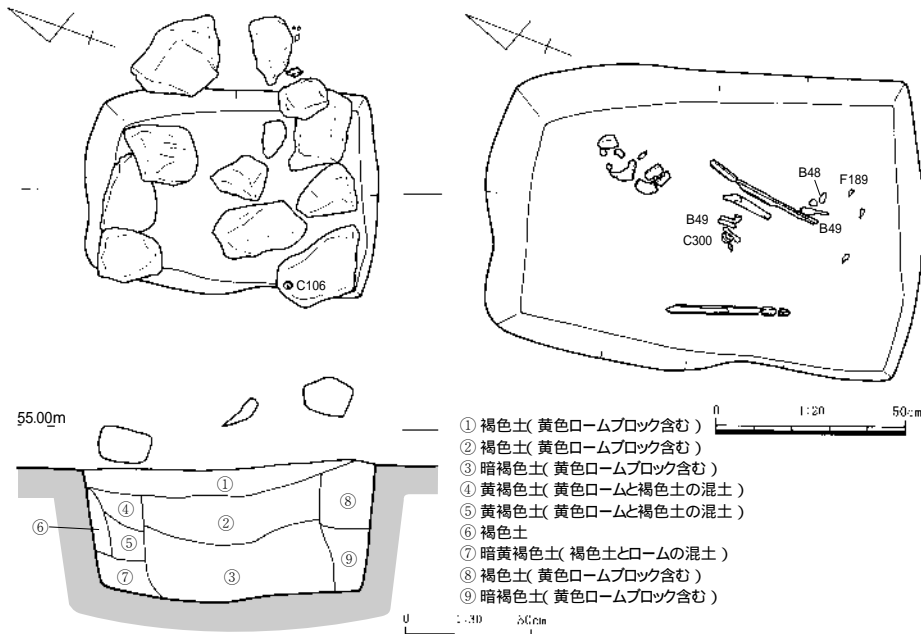


図226 墓131

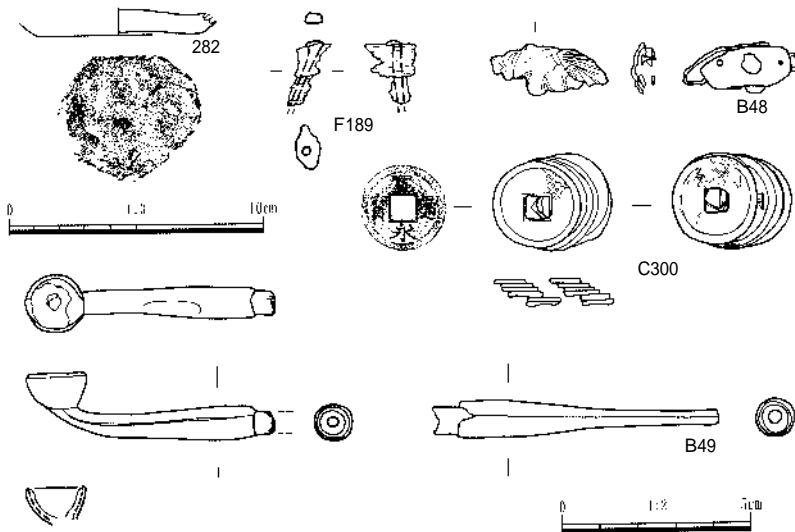


図227 墓131出土遺物

伏臥屈葬と想定される。被葬者は熟年から老年の女性と推定されている。

遺物は、底面中央から銅銭6枚(C300)と煙管(B49)の雁首が、左大腿骨の近位端付近で煙管(B49)の吸口と銅製飾り金具(B48)出土したほか、釘3点(F189ほか)、土師器杯破片(282)が出土した。釘と土師器は混入であろう。

墓132

(図228・229、図版47)

G4区南部に位置する。上面に十数個の礫を密に組んで標石としている。標石周辺および標石の下から、骨片、刀子(F190)、銅銭1枚(図75:C111)、土師器杯(図71:177・178)、染付皿(図73:218)の破片などが出土している。

土壌は平面長楕円形

で、長軸1.1m、短軸0.95m、標石下面からの深さ0.55mを測り、長軸方向を北から6度西に振る。土壌内上層(①層下面)で鎌(F191)と毛抜き(F192)が出土した。

土壌底面から人骨を検出した。土壌北に頭骨があり、その南に膝を北に向けた左右の下肢骨が広い間隔をとって並んでいる。下肢骨は西から左上腿、左下腿、右上腿、右下腿の順で並ぶ。遺体の埋葬形態は北頭位の伏臥屈葬と考えられる。被葬者は成人男性と推定されている。

他に底面からは、左の腰元付近で銅銭5枚(C301~C303)と煙管(B50)が出土した。

墓133(図230・231、図版48)

G4区南部中央に位置する。上面に大型礫数個を集めて標石とする。標石周辺から染付碗(283)が出土した。

土壌は平面長方形で、長辺1.1m、短辺0.9m、標石下面からの深さ0.7mを測り、長軸方向を北から

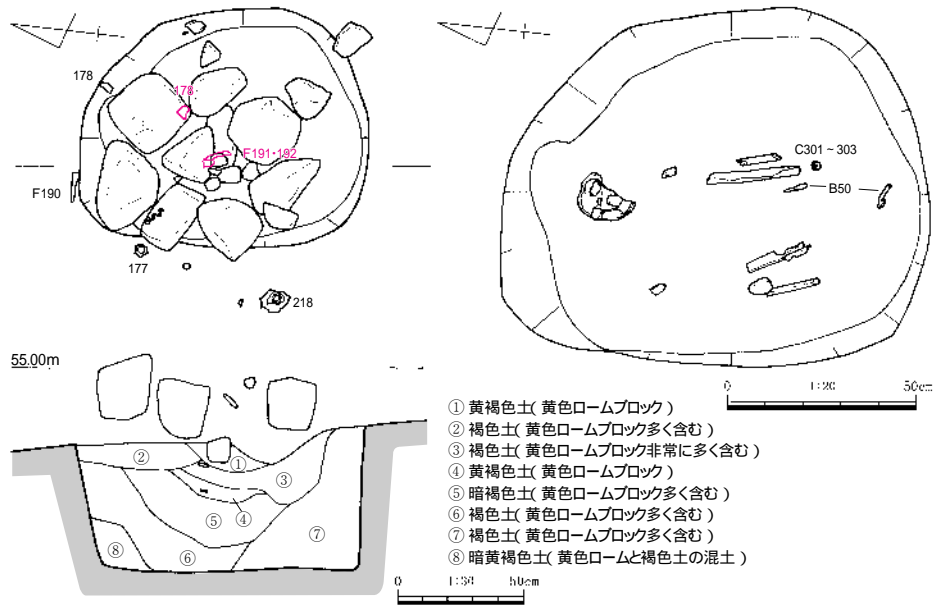


図228 墓132

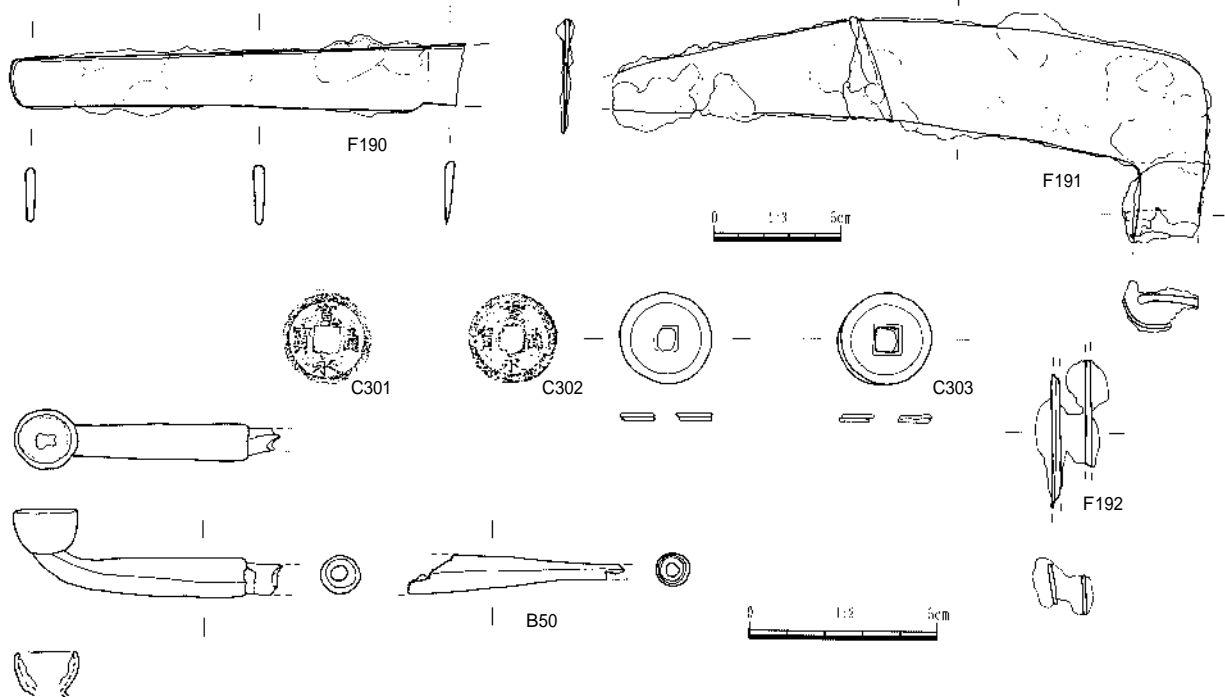


図229 墓132出土遺物

19度東に振る。底面北東隅で顔を西に向けた頭蓋骨を検出した。人骨はほかには小片しか出土していない。人骨の遺存状態が悪いため判然としないが、遺体の埋葬形態は北頭位の臥葬の可能性が高い。被葬者は壮年後半から熟年の男性？と推定されている。

遺物は、底面西縁から銅銭4枚・鉄銭1枚(C304)が出土したほか、土師器杯破片(284)、釘3点(F193ほか)が出土した。

墓134 (図232・233、図版48)

G 4 区南部に位置し、北東隅を墓175に、北西隅を墓168にそれぞれ切られる。標石は確認していな

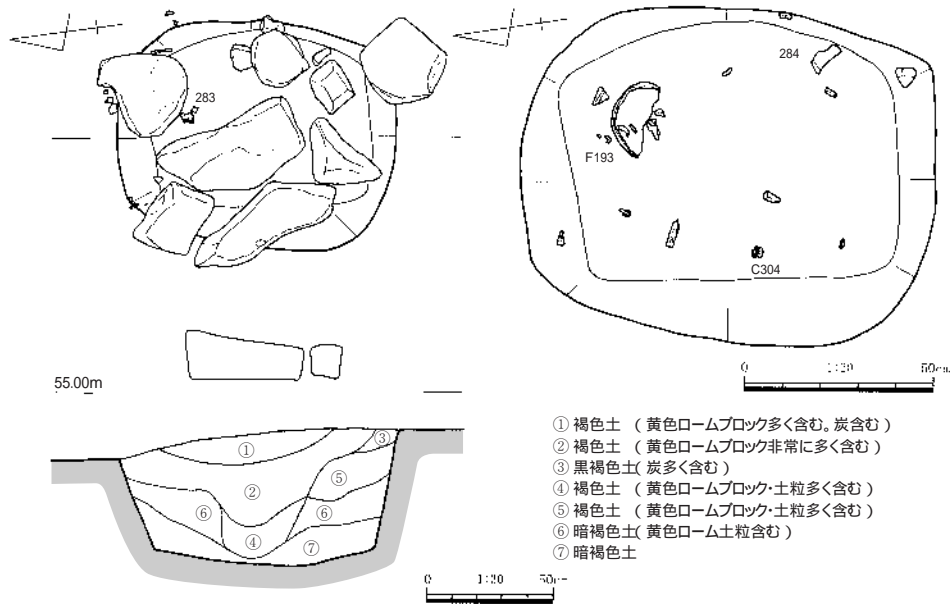


図230 墓133

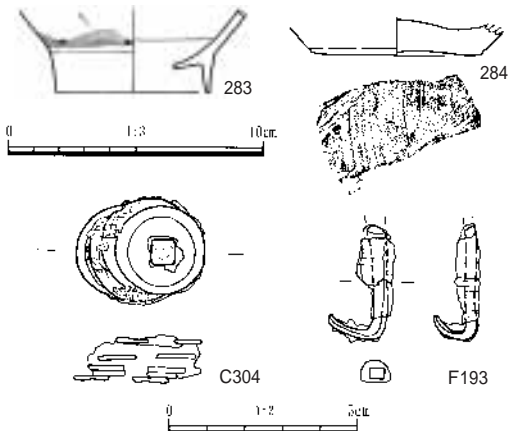


図231 墓133出土遺物

い。

土壌は平面長方形で、長辺1.45m、短辺0.85m、深さ0.55mを測り、長軸方向を北から18度西に振る。土壌底面北東寄りで頭蓋骨が出土した。遺存状態が悪いが、遺体の埋葬形態は北頭位の臥葬の可能性が高いと考えられる。被葬者は熟年男性?と推定されている。

遺物は土壌底面中央付近で煙管 (B51)、銅銭6枚 (C305~C307) が出土したほか、釘4本 (F194ほか)、染付碗破片 (285)、土師器杯破片 (286) がいずれも底面で出土した。

墓135 (図234・235、図版48)

G 4 区南西部に位置する。上面に十数個の礫を長方形に組んで標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺1.25m、短辺0.85m、標石下面からの深さ0.7mを測り、長軸方向を西から40度北に振る。底面で人骨を検出した。北側に顔を南西に向けた頭骨があり、その南には膝を北に向けた下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位で顔を西に向けてひねった伏臥屈葬と考えられる。被葬者は熟年男性と推定されている。

遺物は、骨の西側で鉄と毛抜きが固着したもの (F200) が、左大腿骨西側で銅銭3枚・鉄銭1枚 (C308~C310) が出土した。ほかに、底面付近から底面より30cmほど浮いた位置にかけて釘が30点 (F195~F199ほか) 出土している。

墓136 (図236・237、図版49)

G 4 区南西隅付近に位置し、墓140を切る。上面に礫を数個集めて標石としている。南の土壌外の礫は墓140に伴う可能性が高い。標石周辺から鎌 (F201)、土師器皿 (287)、染付碗 (図74: 230・

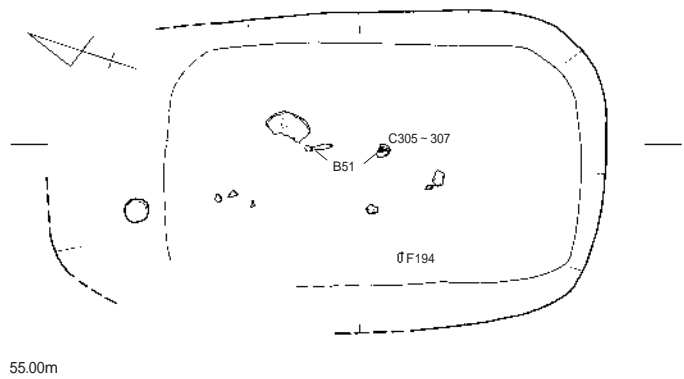
234) 破片、染付皿(図73:228)破片、陶器皿(図72:201)破片が出土した。鎌と土師器皿以外はほかで出土した破片と接合する。

土壌は平面長方形で、長辺1.25m、短辺0.9m、標石下面からの深さ0.6mを測り、長軸方向を北から27度西に振る。

底面で2体分の人骨が出土した。墓136に埋葬されたと考えられる人骨は、土壌北東部に顔が南西を向いた頭骨があり、南部に下肢骨がある。遺体の埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬と考えられ、壮年女性と推定されている。もう一体は、土壌南西隅で頭骨が出土している。他の墓からの混入であろう。これは壮年男性と推定されている。

遺物は、蝶番金具が頭骨西側(F203)と下肢骨西側(F204)から、取手金具が下肢骨南西側(F205)と頭蓋骨上(F206)から、錠前(F207)が土壌中央東寄り、いずれも底面から10cm~20cmほど浮いて出土した。これらは長持ちなどの家具の金具と考えられるので、家具を棺として転用したのであろう。ほかに、銅銭1枚(C311)、鉄の持ち手部片(F202)が出土しているが、少なくとも鉄破片(F202)は混入であろう。

なお、西に隣接する墓137も、墓136と土壌形態・軸方位が同じで、類似した家具を棺に転用してほぼ同様の埋葬形態をとっているの、両者は極めて関連が深いと考えられる。



墓137(図238・239、図版49)

G4区南西隅付近に位置し、墓138を大きく切る。上面に礫数個を集めて標石としている。

土壌は平面長方形で、長辺1.2m、短辺0.95m、標石下面からの深さ0.6mを測り、長軸方向を北から25度西に振る。底面で遺存状態の良い人骨が出土した。土壌北部中央で顔が東に向けた頭骨を検出し、その南東で左下肢骨を、南西で右下肢骨を、ともに脛骨前面を上

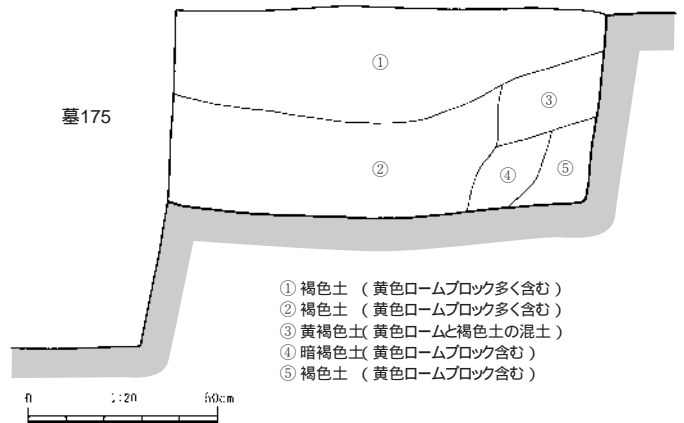


図232 墓134

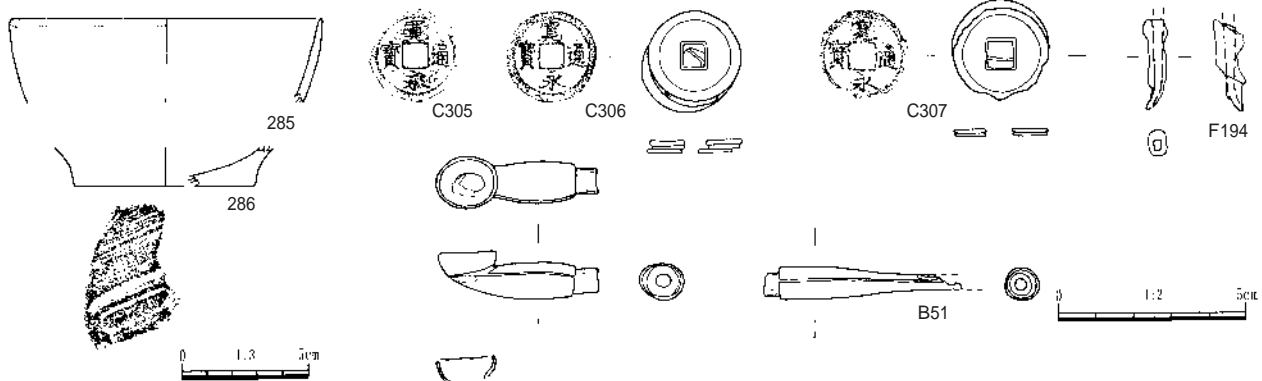


図233 墓134出土遺物

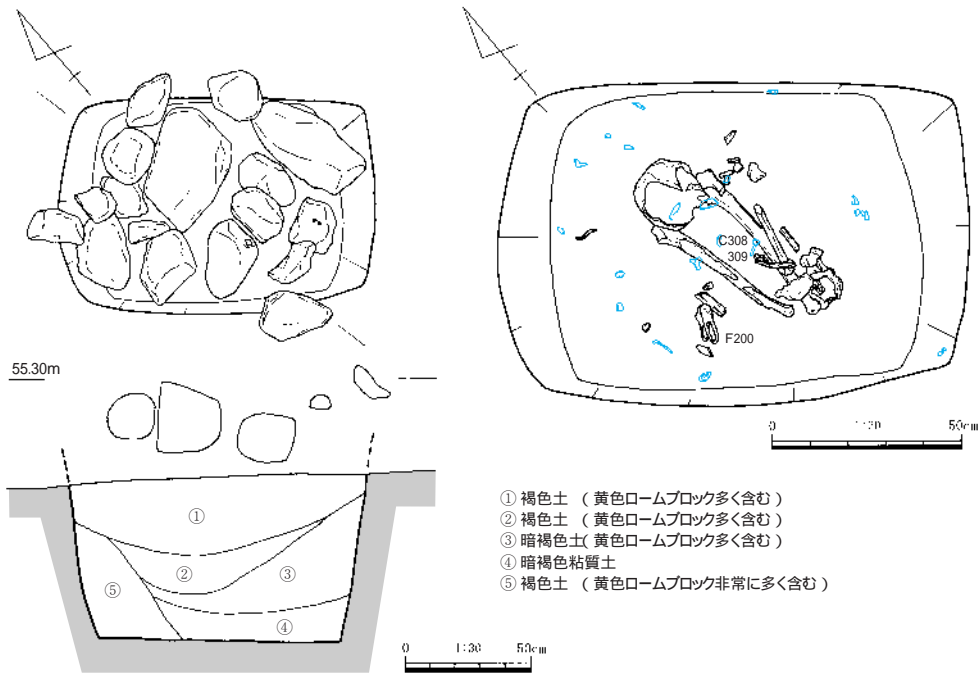


図234 墓135

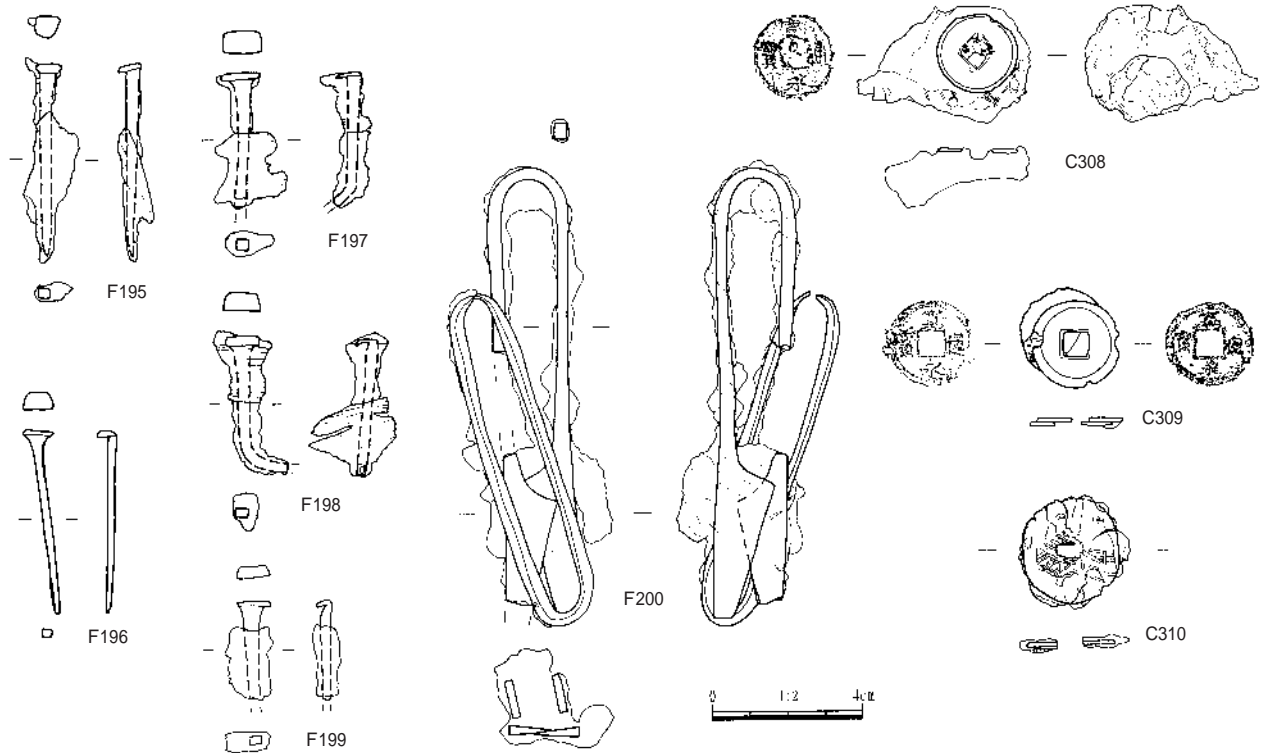
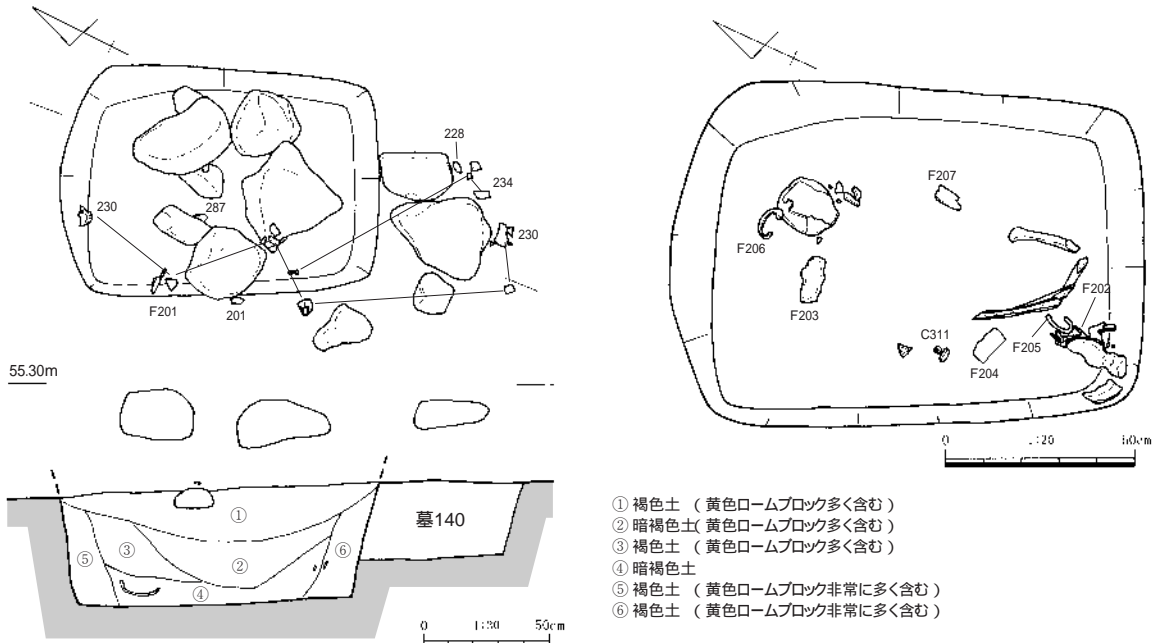


図235 墓135出土遺物

にして膝を折った状態で検出した。遺体の埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬と考えられる。被葬者は熟年男性と推定されている。

遺物は、底面から10cm～20cmほど浮いて、金具が2種4点出土した。蝶番金具が左腰付近 (F208) と頭蓋骨上 (F209) から、取手金具が頭骨西側 (F210) と腰中央付近 (F211) からそれぞれ出土した。これらは長持ちなどの家具の金具と考えられるので、家具を棺として転用したのであろう。ほかに、銅銭2枚・鉄銭1枚 (C312)、櫛の歯が固着した鉄銭2枚 (C313) が右下肢の東側底面付近で出土した。C312・C313とも鉄銭には布が付着している。



- ① 褐色土 (黄色ロームブロック多く含む)
- ② 暗褐色土 (黄色ロームブロック多く含む)
- ③ 褐色土 (黄色ロームブロック多く含む)
- ④ 暗褐色土
- ⑤ 褐色土 (黄色ロームブロック非常に多く含む)
- ⑥ 褐色土 (黄色ロームブロック非常に多く含む)

図236 墓136

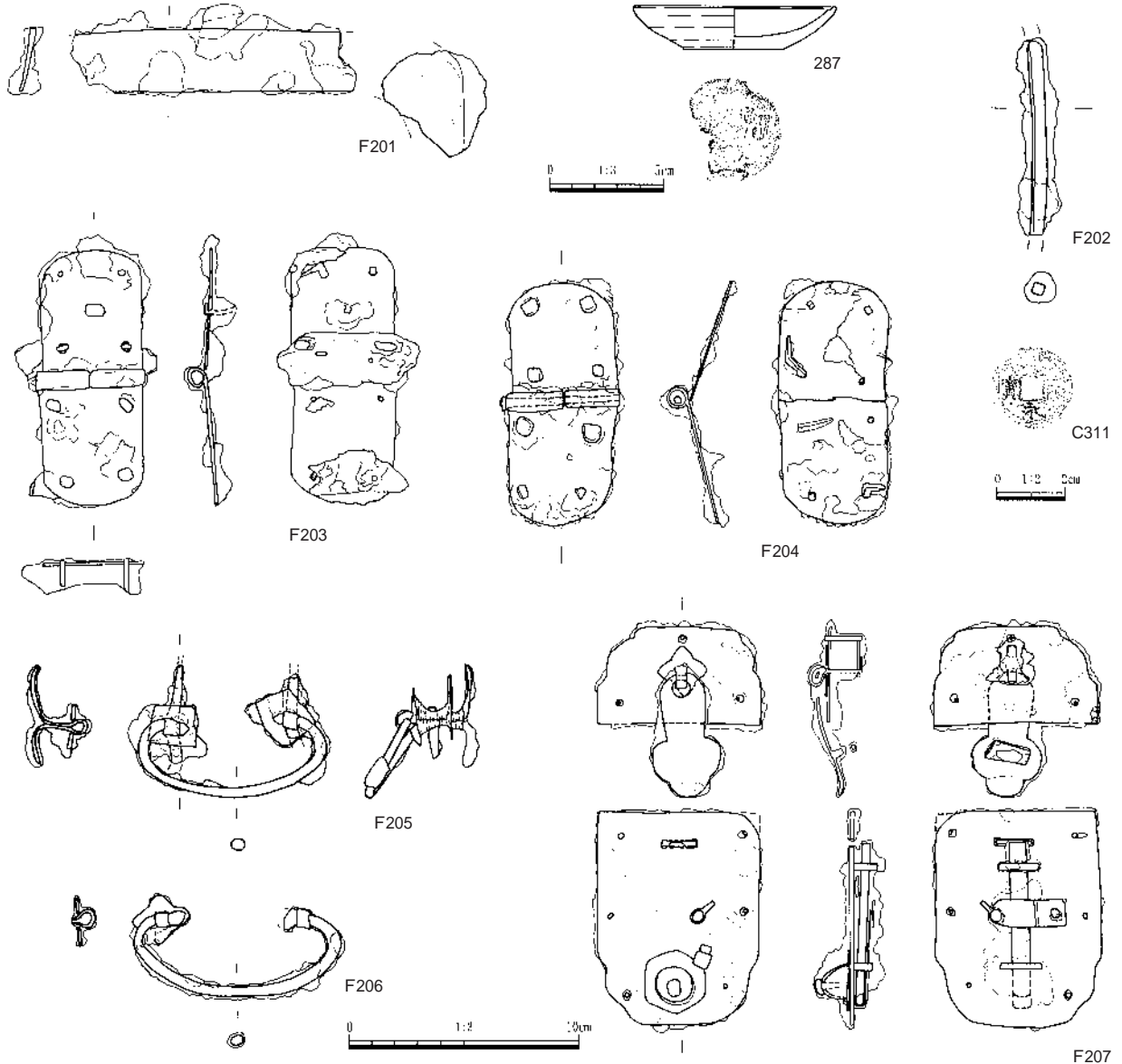


図237 墓136出土遺物

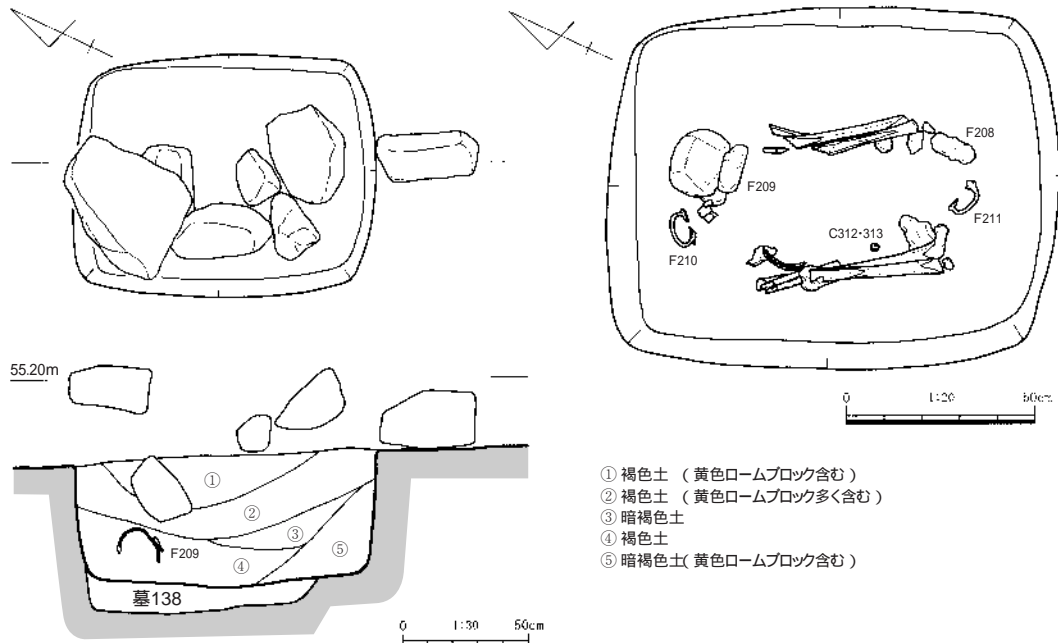


図238 墓137

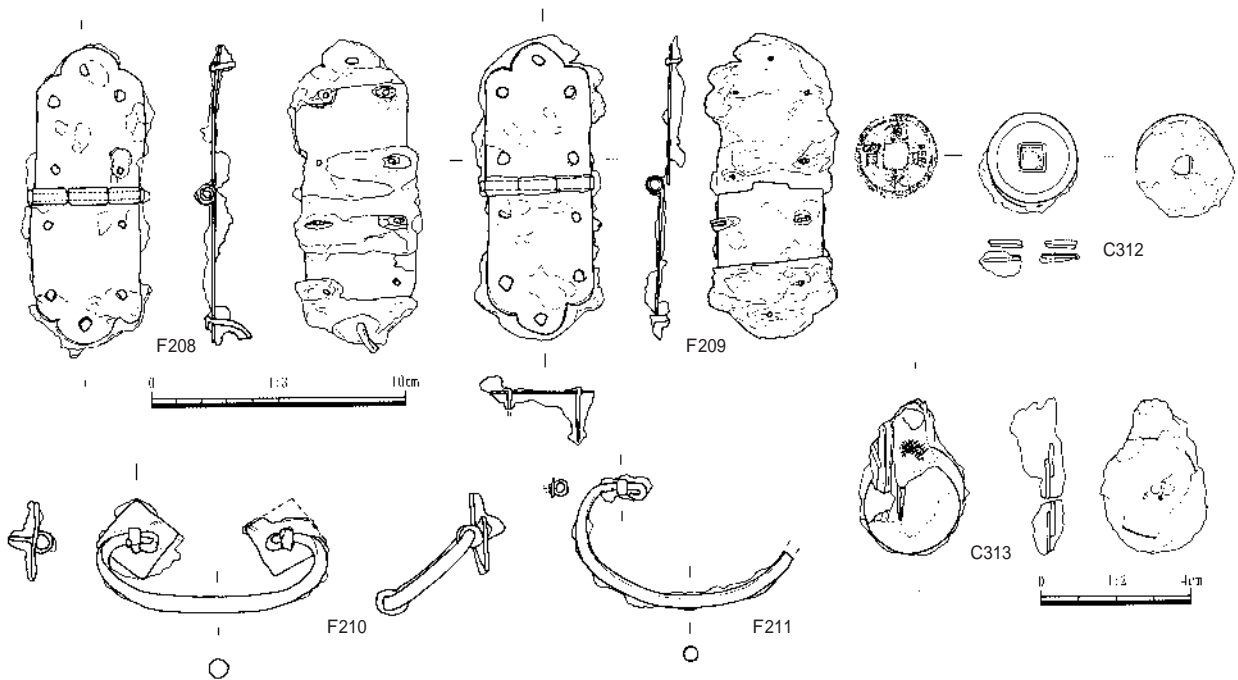


図239 墓137出土遺物

前述のように、墓137は東に隣接する墓136と極めて関連が深いと考えられる。

墓138 (図240・241、図版49)

G 4 区南西部に位置し、東側の大部分を墓137に切られており、掘削を受けた範囲では底面からわずか10cm程度しか掘り方が残っていない。おそらく墓137の棺底面が墓138人骨に直接接する状態であったと思われる。現状では標石は確認できない。

土壌は平面長方形で、長辺 1 m、短辺0.8m、墓137上面からの深さ0.6mを測り、長軸方向を北から12度西に振る。底面で人骨が出土した。墓137の土壌が掘られた際に、左大腿骨と頭蓋骨が原位置から移動しているものの、そのほかの部位は交連状態をおおよそ保っている。土壌北東隅に頭骨があり、

その南西に椎骨が連なる。南西隅に下肢骨が膝を北に向けて並ぶ。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と考えられる。被葬者は老年男性と推定されている。

遺物は、左上肢と体幹の間で玉髓製火打石と火打金の固着したもの（C212）と煙管（B52）の雁首が、右下肢の西側で煙管（B52）の吸口が出土している。

墓139（図242・243、図版50）

G 4 区南西部に位置する。上面に石塔 1 個と大型自然礫 4 個を集めて標石としている。石塔（S11）は頭部が幅広になる駒形で、墓碑銘を刻むために窪みが作られているが、戒名、没年などは記されていない。おそらくこの石塔は樹立するために持ち込まれたのではなく、ほかの自然石と同じように単なる集石礫のひとつとして用いられたのであろう。ただし、わざわざ未使用の石塔を持ち込んで標石の一部とした行為自体には、単なる自然石を並べるのとは違った意味をもつ可能性がある。

土壌は平面長方形で、長辺1.2m、短辺0.8m、標石下面からの深さ0.55mを測り、長軸方向を東から25度北に振る。土壌内上層の北東隅付近から鉄銭 1 枚（C319）が出土している。

底面で人骨を検出した。土壌東端に頭骨があり、その西に膝を北東に向けて折った下肢骨がある。遺体の埋葬形態は東頭位の伏臥屈葬と考えられる。被葬者は壮年女性と推定されている。

遺物は、頭骨の上から鎌（F213）と銅銭 2 枚（C315・C317）、頭骨の西から銅銭 1 枚（C314）、頭蓋骨内から銅銭 1 枚（C318）、土壌南縁付近から銅銭 1 枚（C316）、頭骨の北から鉄銭 1 枚（C320）がそれぞれ出土した。

墓140（図244・245、図版50）

G 4 区南西部に位置し、北西側を墓136に大きく切られる。上面に礫 3 個が置かれている。標石周辺から、染付碗（図74：230・234）の破片、染付皿（図73：228）の破片が出土した。

土壌は平面長方形で、長辺1.1m、短辺0.9m、標石下面からの深さ0.5mを測り、長軸方向を北から8度東に振る。底面で人骨が出土した。土壌中央南寄りに下肢骨が膝を北東に向けて並んでおり、下

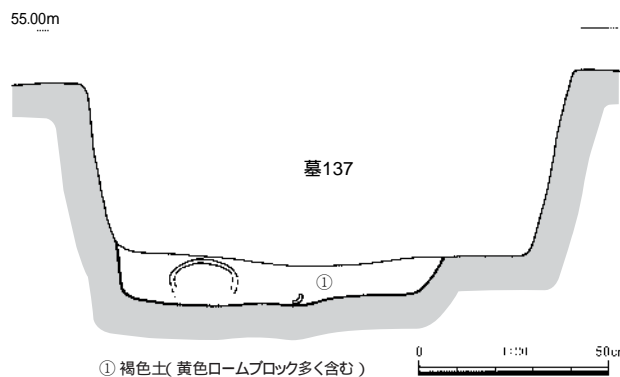
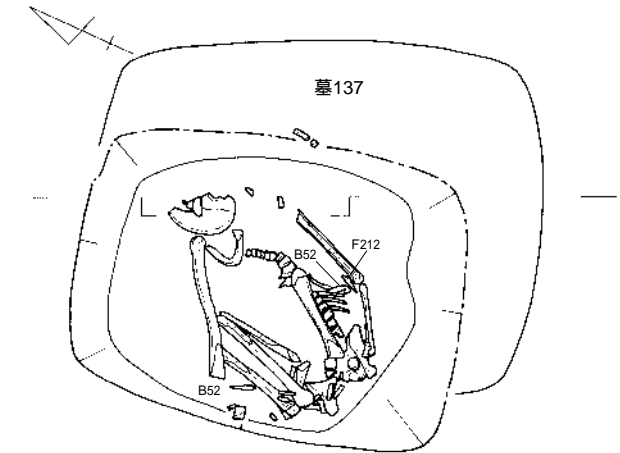


図240 墓138

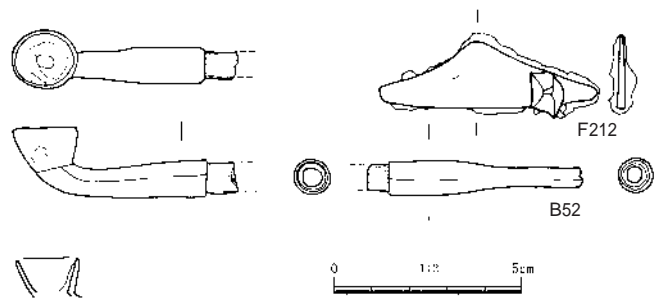


図241 墓138出土遺物

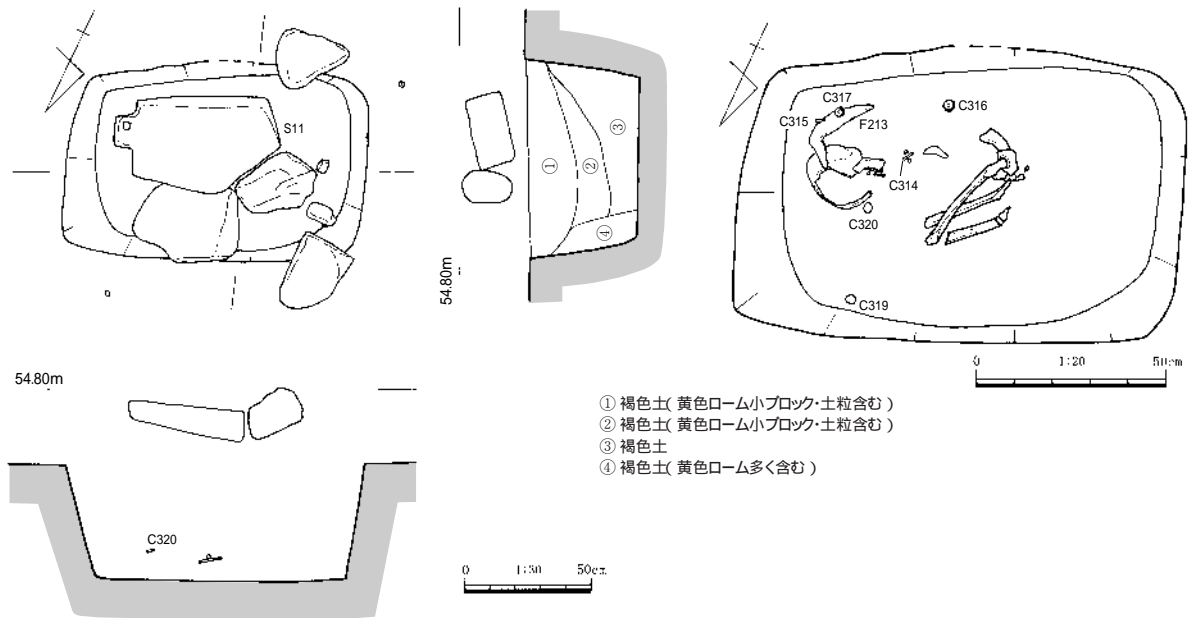


図242 墓139

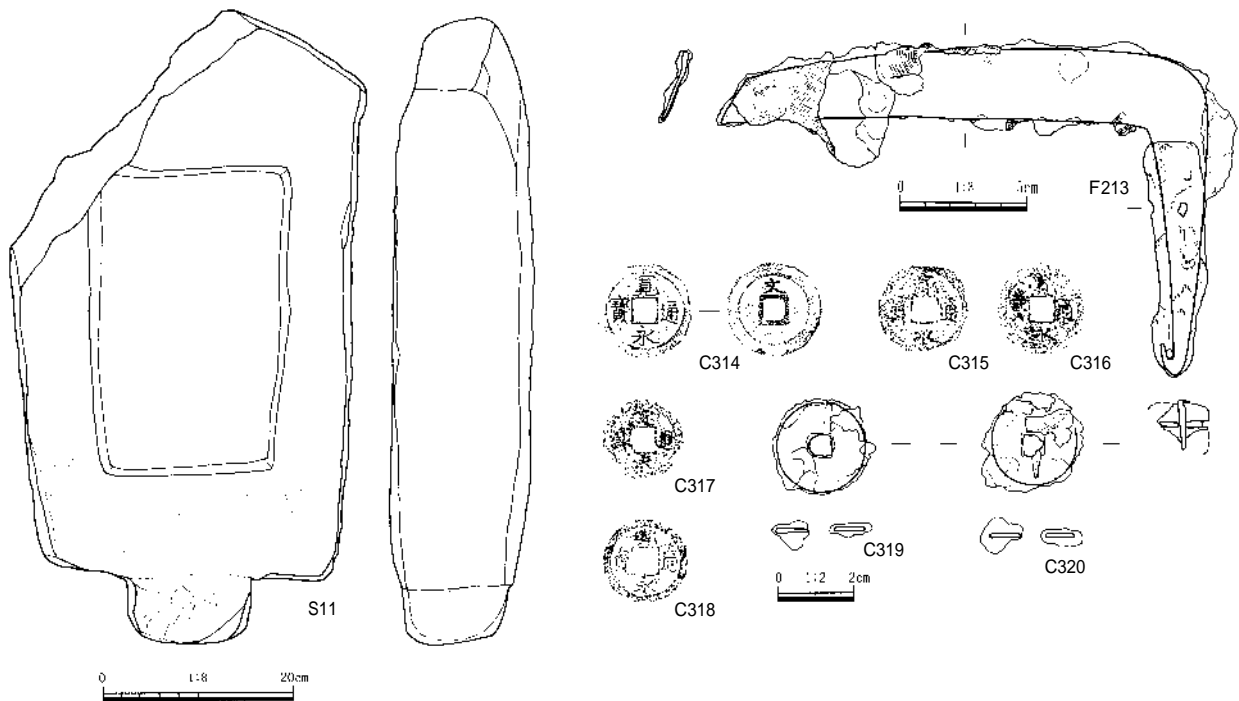


図243 墓139出土遺物

肢骨の北東には上肢骨がある。頭骨は見られないが、墓136掘削時に掘り返されて原位置を離れたと考えられる。遺体の埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬または右側臥屈葬と考えられる。被葬者は成人女性と推定されている。

遺物は下肢骨の下から銅銭3枚・鉄銭2枚(C321・C322)が出土した。

墓141 (図246・247、図版50)

G4区南西部に位置し、北東隅を墓137に切られる。現状では上面に2個の礫が乗っている。

土壌は平面長方形で、長辺0.95m、短辺0.8m、礫下面からの深さ0.6mを測り、長軸方向を北から32度東に振る。底面で人骨を検出した。土壌北東隅付近に頭骨があり、土壌中央付近には膝を北東に

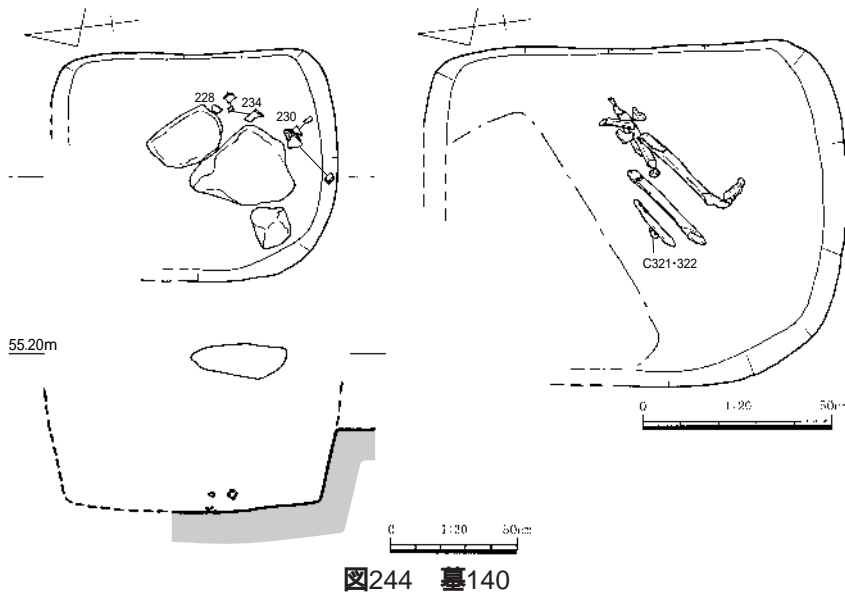


図244 墓140

向けて折った左右の下肢骨が間隔を空けて並んでいる。下肢骨は東側が右、西側が左のもので、ともに前面を下にした脛骨の真上に、前面を上にした大腿骨が重なっている。遺体の埋葬形態は北東頭位の伏臥屈葬と考えられる。被葬者は壮年男性と推定されている。

遺物は、底面中央のやや南寄り銅銭4枚（C323・C324）と鉄（F214）が、右下肢骨の東側で銅銭1枚（C325）が出土したほか、人骨取り上げ後の精査中に銅銭1枚（C326）が出土した。

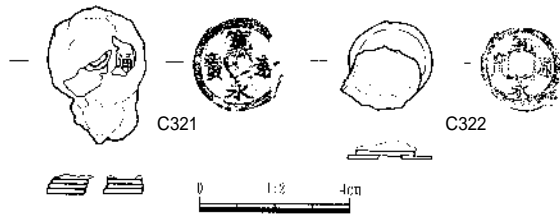


図245 墓140出土遺物

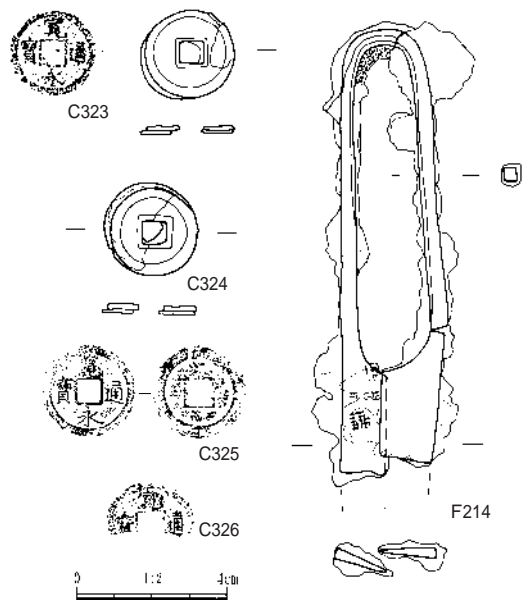


図247 墓141出土遺物

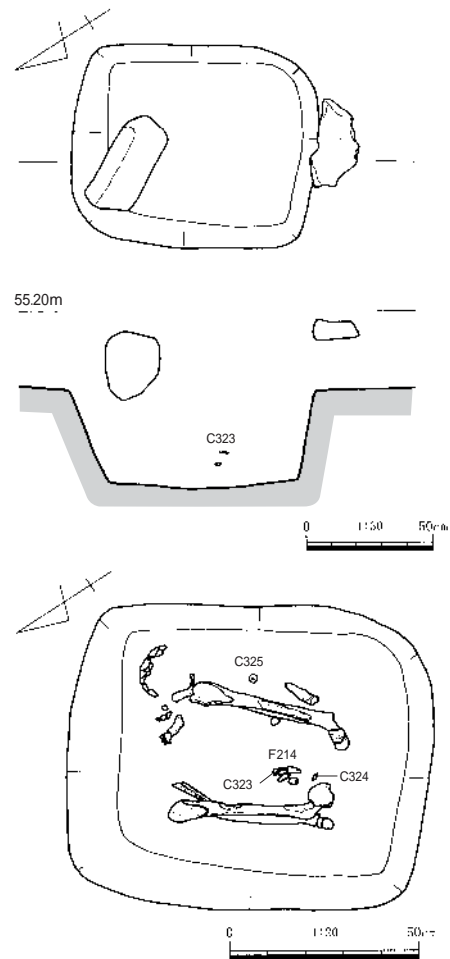


図246 墓141



図248 C・D類墓配置図

C類墓群 (図248)

C類墓もそれほど偏った遺構分布ではないが、G4区の南東部は分布が希薄である。南北に連なる墓147～151をはじめとして、列状に並ぶ可能性がある墓群が何箇所か見られるが、それほど規則性は明確ではない。ただし、列状に並ぶように見える土壌はほぼ同じ軸方向をとっている。これ以外の土壌も軸方向が比較的良くそろっており、南北を主軸として見た場合、大半のものが10度から20度程度西偏している。

人骨の遺存状態は概して良い。掘り方が深いため、地山のローム層を深く掘り込み、概して、底面がG層(黄白色粘質土層)下部からGⅪ層(赤褐色粘質土層)土層にまで到達する。土層断面で棺の裏込め土と見られる立ち上がりを観察できるものが多い。

以下、C類土壌の墓を順に記述する。

墓142 (図249・250、図版50)

G4区北西部に位置する。土壌上に3個ほどの礫が乗り、土壌の西側にも4個ほどの礫を積んでいる。

土壌は平面正方形で、一辺0.9m～0.95m、標石下面からの深さ0.7mを測り、南北軸方向を北から40度東に振る。土壌底面中央から頭骨、四肢骨などがまとまって出土した。四肢骨は頭骨の下に潜り

込んでいる。遺体の埋葬形態は座葬の可能性が高い。被葬者は壮年女性と推定されている。

遺物は釘12点（F215～217ほか）、銅銭5枚（C327～C331）が出土した。釘は底面から10～30cmほど浮いて出土した。棺の上部や蓋にだけ釘が打たれていたのであろうか。銅銭は底面にほぼ接して、頭骨のレベルよりも低い位置で出土した。この出土状況から、銅銭は頭陀袋などに入れて首にかけるなど、遺体に直接付随させていた可能性が考えられる。

墓143（図251・252、図版51）

G4区北部に位置し、遺構の東半分を墓144に切られる。標石は見られない。

土壌は約1m平方の正方形で、深さは0.6m（墓144上の礫下面からは0.75m）を測り、南北軸方向は北から東に37度振る。土壌内上層から釘4点（F218・F219ほか）と鉄（F220）が出土している。鉄には布が付着している。

土壌底面中央から正位で鉄鍋（F221）が検出され、鉄鍋内から頭骨と上肢骨の一部、鉄鍋の西から左右の下肢骨と上肢骨の一部が検出された。被葬者は壮年女性と推定されている。

遺物は鉄鍋内から、漆器塗膜片（G13）、ガラス製白玉16点（G14～G29）が出土した。その他に鉄鍋内面には漆器塗膜片とガラス白玉4点が固着している。鉄鍋の北側からは銅銭5枚・鉄銭1枚（C332）と銅銭2枚（C333）が出土している。

人骨の検出状態はあまり良好ではないものの、交連状態で検出した左下肢骨を見ると、大腿骨の近位側が土壌の西側縁辺にかなり近い位置にあるため、更にその西側に体幹などが並ぶ状態になる側臥屈葬とは考えにくく、二次的な移動を考えなければ座葬が最も自然な体位と思われる。また、土壌形態も座葬墓に用いられることが多いC類である。これらを積極的に捉えると、鍋を頭に被せられて座葬で葬られていた遺体が、腐敗過程で前のめりに倒れた可能性が考えられるだろう。

遺物は頭陀袋などに入れて遺体の首にかけるなどしていたものが鍋の中に落ち込んだのであろう。

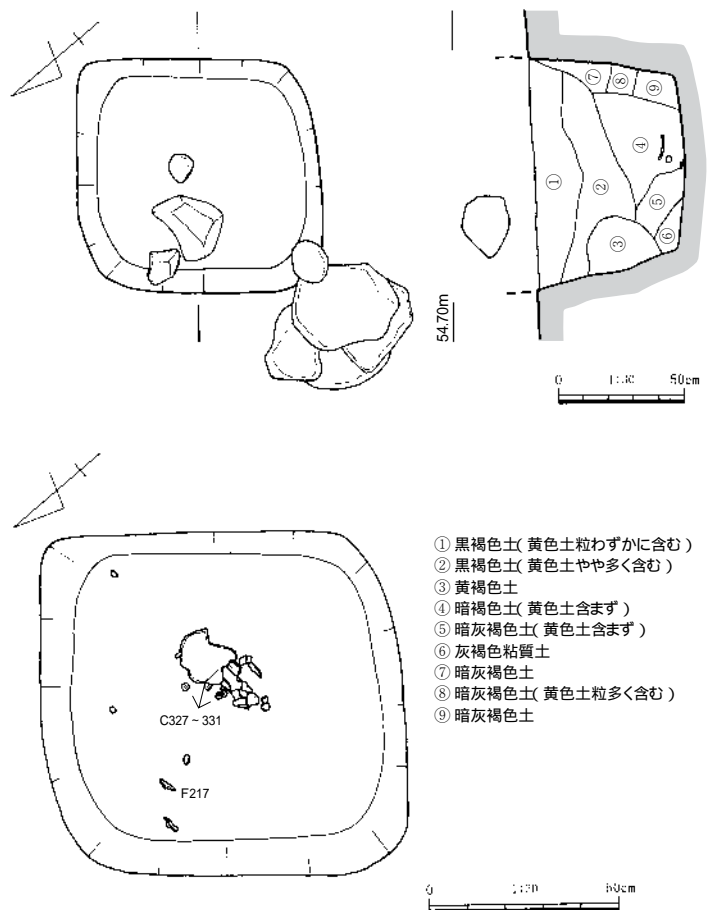


図249 墓142

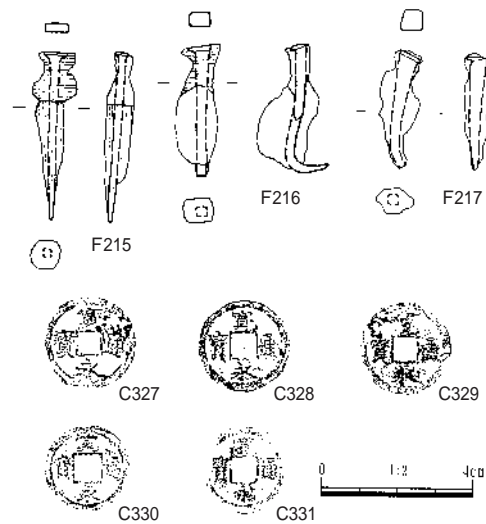


図250 墓142出土遺物

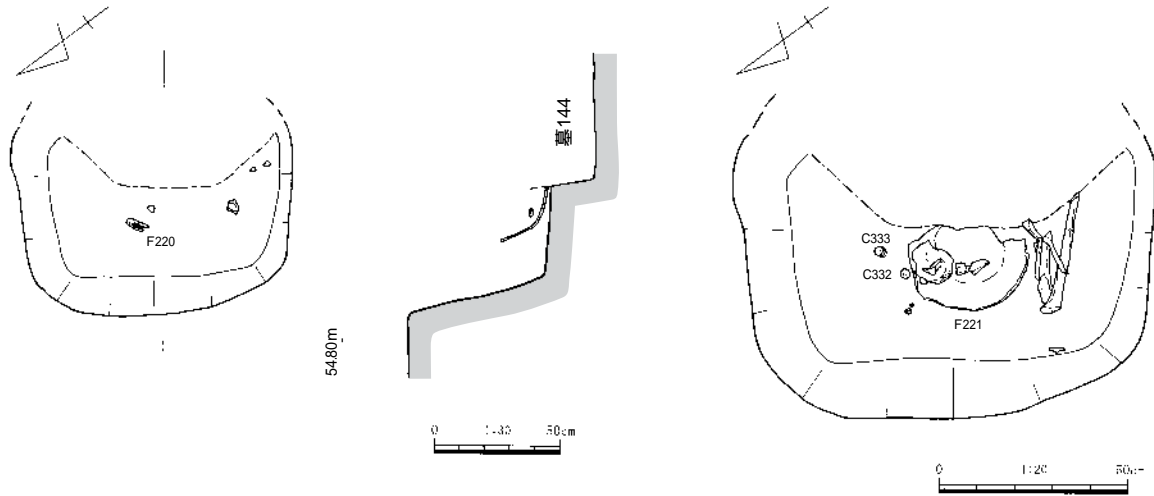


図251 墓143

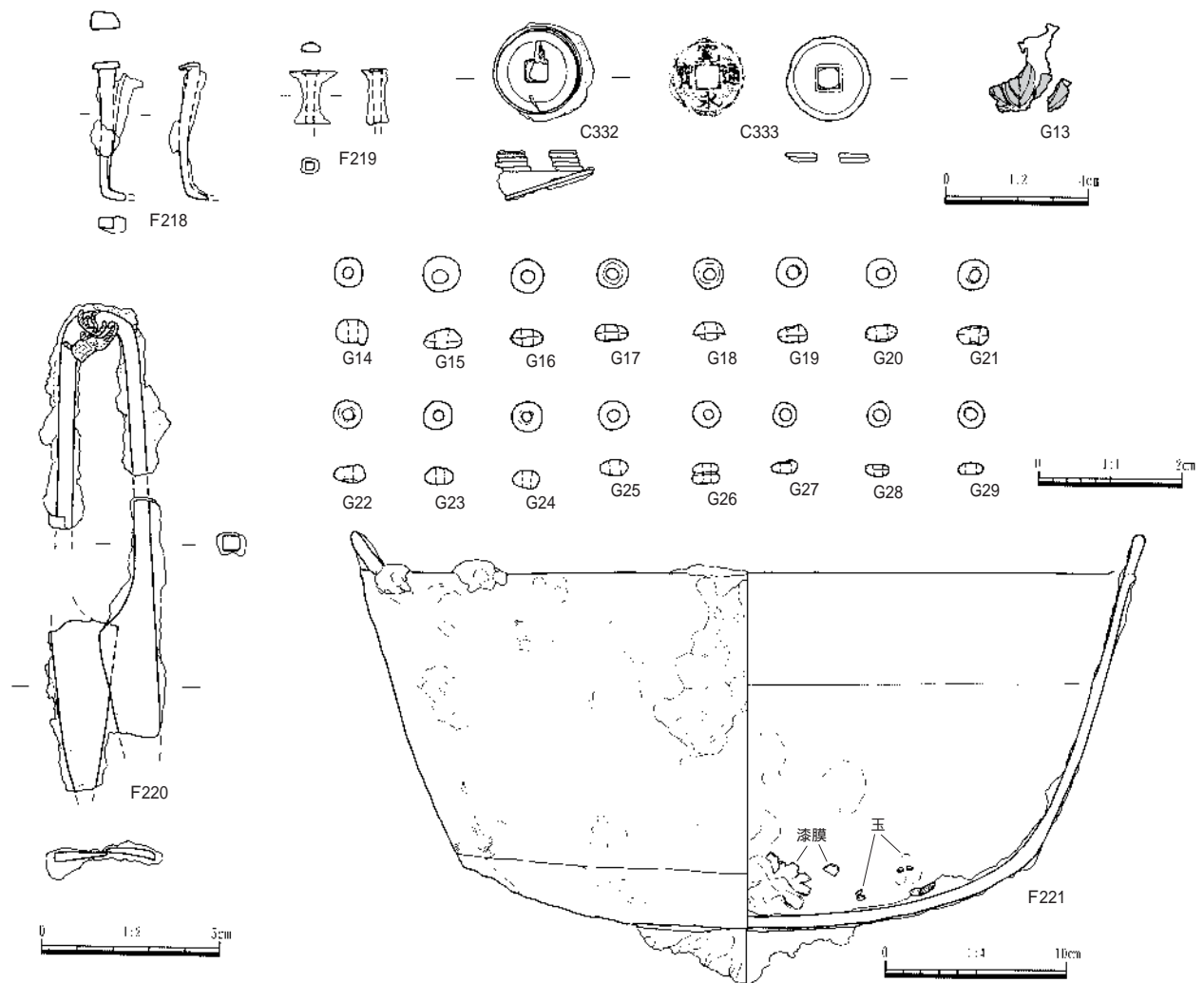


図252 墓143出土遺物

墓144 (図253・254、図版51)

G 4 区北部に位置し、墓143を切る。上面に小型の礫を3つ集めた標石をもつ。標石周辺から転写による染付文様のある磁器碗(288)と鉄釉の磁器碗(289)、鎌(F222)が出土した。本墓に供献された可能性が高い。いずれも近代の遺物である。

土壌は1m平方の隅丸方形で、標石下面からの深さは0.95mを測り、南北軸方向は北から西に27度

振る。土壌中央から非常に遺存状態の良い人骨を検出した。膝が立った状態の下肢骨が西に、その東にほぼ交連状態を保った上肢骨・体幹骨・頭骨がある。遺体の埋葬形態は体正面を西に向けた立膝座葬と考えられる。被葬者は熟年から老年の女性と推定されている。

土壌内から真鍮製の足袋のコハゼ2点 (B53・B54)、洋釘18点 (F223・F224ほか)、和釘1点 (F225)、墓143に副葬された鉄鍋 (F221) の破片が出土した。釘は底面から20~30cmほど浮いて出土したものと人骨を取り上げた後に出土したものが半々の割合で、コハゼはいずれも人骨の取り上げ後に出土した。真鍮製コハゼは1900年代以降に使用され出したものである。一方のコハゼにはサイズを示す「235」(23.5cm)と「九七」(九文七分)の打ち出しが見られる。洋釘(丸釘)は明治初期から輸入品が普及しはじめ、1890年ごろに国内で生産されるようになったようである。

出土遺物からこの墓は近代のものと考えられる。

墓145 (図255・256、図版52)

墓密集域の北縁付近に位置する。上面に15個ほどの礫を長方形に組んだ標石を伴う。

土壌は正方形に近い方形で、長辺1.1m、短辺1m、深さ0.8mを測り、長軸が座標南北軸に乗っている。土壌底面の中央で比較的遺存状態の良い人骨を検出した。狭い範囲に頭骨、下肢骨、椎骨などがまとまっている。下肢骨は南西側に左、北東側に右のものが

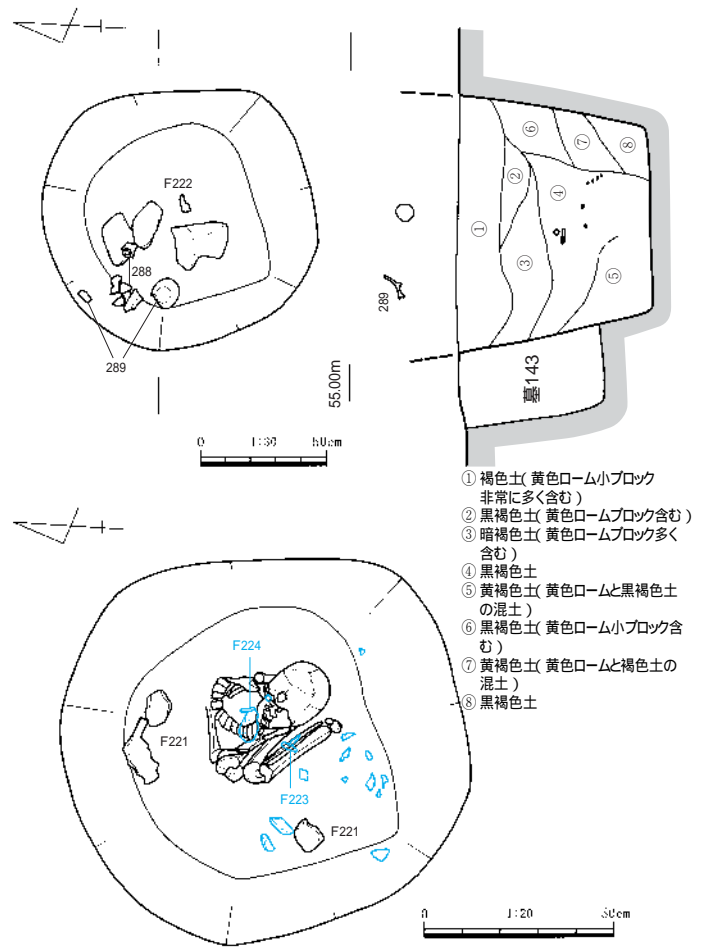


図253 墓144

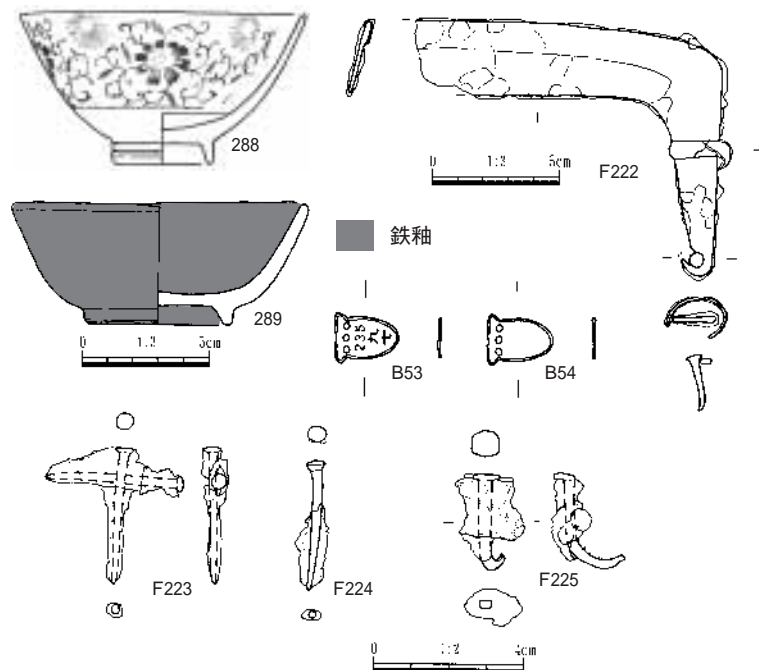


図254 墓144出土遺物

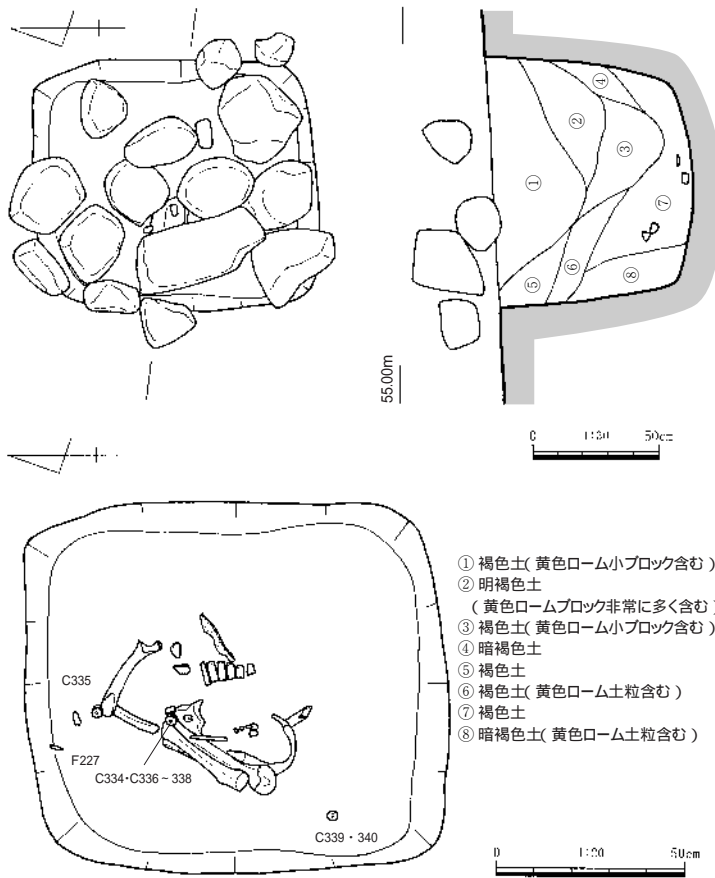


図255 墓145

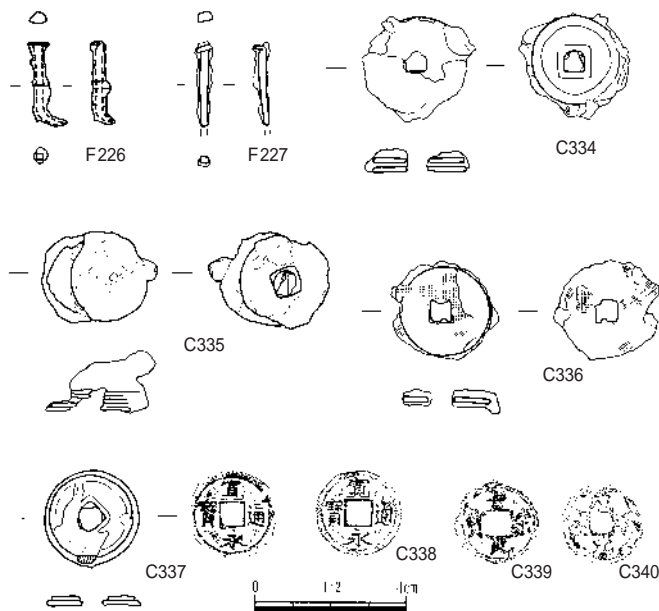


図256 墓145出土遺物

あり、ともに膝を上にして斜めに立った状態で検出した。左右の下肢骨の間に椎骨、頭骨などがある。遺体の埋葬形態は体正面を北西に向けた立膝座葬と考えられる。被葬者は壮年後半から熟年前半の男性と推定されている。

遺物は鉄釘5点（F226・227ほか）、銭貨（C334～C340）が出土した。釘は底面から20cmほど浮いて出土したものが多く、銭貨は、中国銭のC339・C340が底面から50cmほど浮いて、煙管と銅銭が熱で溶着したC335が右下肢骨の膝の上から、銅銭4枚・鉄銭2枚（C334・C336～C338）が左大腿骨近位端付近でまとまって出土している。C334・C336～C338の6枚の銭貨は布が付着しているものもあり、頭陀袋などに入れられて副葬されたものと考えられるが、中国銭（C339・C340）は混入の可能性が極めて高く、C335も墓145に伴う副葬品ではなく、別の墓の副葬品が掘り返されて表面に露出した後に、焚き火などで受熱溶着したものが混入した可能性があるだろう。

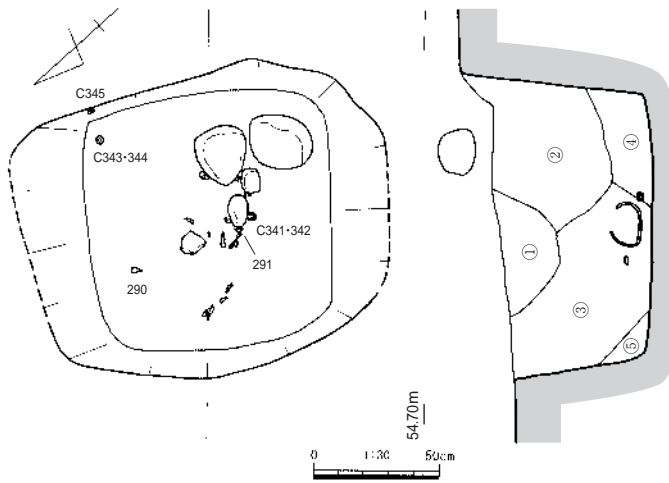
墓146（図257・258、図版52）

G4区北西部に位置し、墓62・墓96を切り、北端を墓95に、南端を墓64にそれぞれ切られる。上面に小型礫を5個ほど集めて標石としている。

土壌の平面形は、上面は長方形を呈し、底面は正方形を呈す。南北長辺が1.45m、東西短辺が1.2m、深さ0.75mを測り、南

北軸を北から39度東に振る。土壌内上層中から土師器皿（290）・杯（291）、中国銭5枚（C341～C345）が出土した。いずれも混入品と考えられるが、本来は中世墓の副葬品であった可能性があるう。

底面からは比較的遺存状態の良い人骨が出土している。骨は土壌中央にまとまっており、頭骨が最も上から、上肢骨、体幹骨、下肢骨がその下から出土した。遺体の埋葬形態は正面を南東に向け



- ① 暗褐色土(黄色土粒わずかに含む)
- ② 暗黄褐色土(黄色土粒・ブロック多く含む)
- ③ 暗褐色土(黄色土粒多く含む)
- ④ 黄褐色土(暗褐色土・黄色土ブロック多く含む)
- ⑤ 暗黄灰褐色土(黄色土粒少量含む)

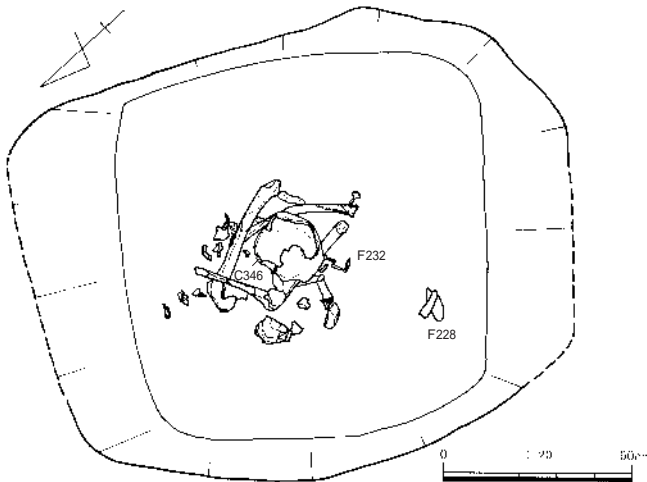


図257 墓146

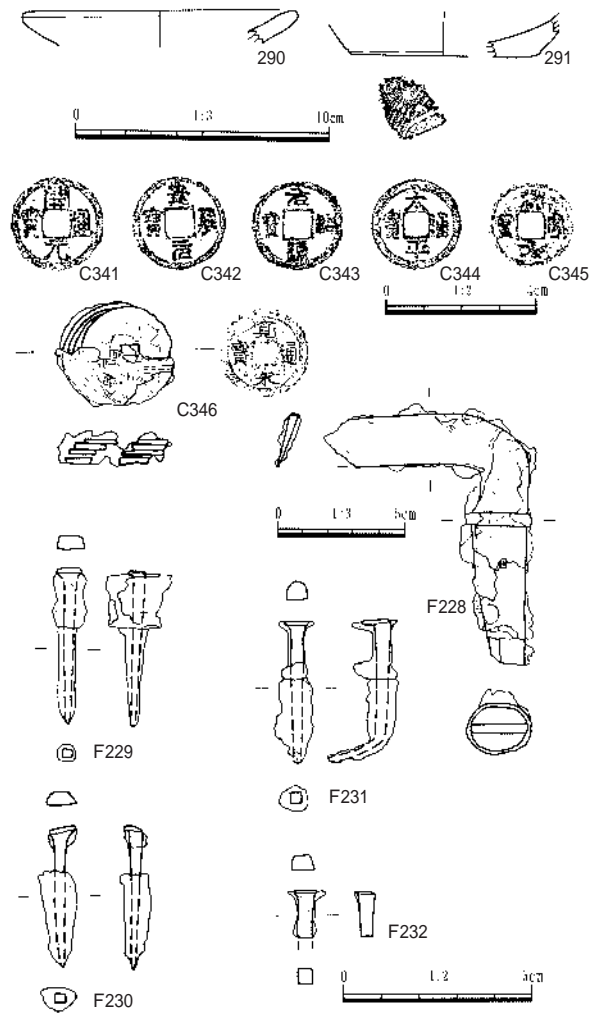


図258 墓146出土遺物

る座葬と考えられる。被葬者は壮年後半の男性と推定されている。

底面出土の遺物には、頭蓋骨の下から出土した布の付着する銅銭1枚・鉄銭3枚(C346)、底面南部から出土した鎌(F228)があるほか、土壌底面から埋土中位にかけて出土した釘36本(F229～F232ほか)がある。

墓147(図259・260、図版52)

G4区北東部に位置する。6個ほどの礫を集めて標石としている。標石周辺で染付皿(図73:220)が出土している。

土壌は約0.8m平方の正方形で、標石下面からの深さは0.8mを測り、南北軸を北から7度西に振る。底面で比較的遺存状態の良い人骨を検出した。下肢骨が土壌北半にあり、膝を東に向けた右下肢骨が北側に、膝を西に向けた左下肢骨が南側にある。頭骨や上肢骨は土壌の南東部にまとまっている。体正面を西に向ける立膝座葬と考えられる。被葬者は壮年後半から熟年の女性と推定されている。

遺物は、鎌(F233)が土壌底面から数cm浮いて出土したほか、釘2本(F234・F235)が②層中から出土している。釘は棺に使用されていたものにしては数が少なく、また上層からの出土であるため

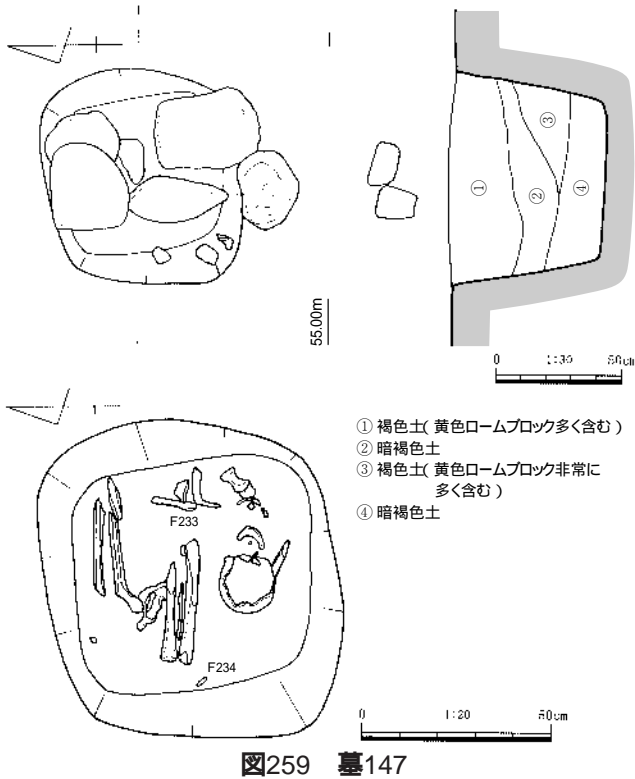


図259 墓147

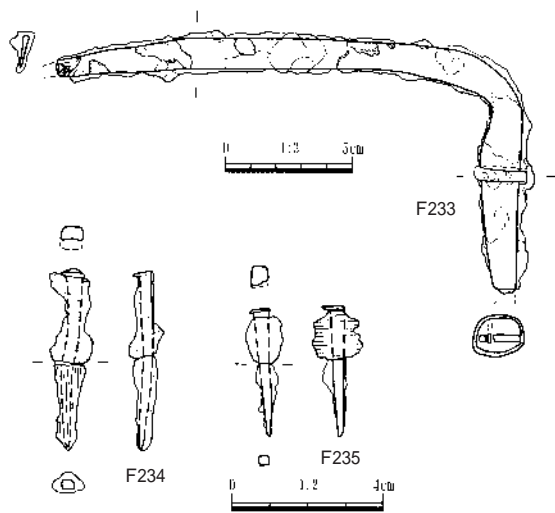


図260 墓147出土遺物

墓149 (図263・264、図版53)

墓密集域の東部に位置し、墓173、墓59、墓58を切る。数個の礫をやや疎らに集めて標石としているが、土壌の範囲外にある西側の3つの礫は墓173や墓59に伴うものの可能性もある。

土壌は約0.8m平方の正方形で、標石下面からの深さは0.95mを測り、南北軸方向は北から東に18度振る。土壌底面で人骨を検出した。膝が立った状態の右下肢骨が北西隅にあり、その南に左下肢骨、左右下肢骨の東に頭骨等がある。遺体の埋葬形態は体正面を西に向けた立膝座葬であろう。被葬者は熟年女性と推定されている。

混入の可能性が高い。

墓148 (図261・262、図版52)

墓密集域の北東部に位置し、南辺を墓172に切られる。土壌上には4個の礫が疎らに乗っている。上面から陶器小杯(図72:213)の破片が出土している。

土壌は1m平方の正方形で、標石下面からの深さは0.9mを測り、南北軸方向は北から20度西に振る。土壌上層(①層)で銅銭3枚・鉄銭1枚(C347)が出土している。

底面で遺存状態の良い人骨を検出した。膝が立った状態の下肢骨が西側にあり、その東に体幹骨・上肢骨が倒れている。頭骨は骨盤の上で検出した。遺体の埋葬形態は体正面を西に向けた立膝座葬と推定される。被葬者は壮年女性と推定されている。遺体は、腐敗する過程で頭骨が落ちた後に、上半身が後ろ向きに倒れたと考えられるので、埋葬段階では遺体の周りに空間があった可能性が高い。釘は出土していないが、組み合わせ式木棺など釘を用いない棺が用いられていたと推定できる。

他に底面付近からは、頭蓋骨の10cmほど上で鎌(F236)が、寛骨上でガラス製かんざし(G30)、寛骨周辺で棺金具と考えられる木質に包まれた針金状鉄製品(F237・F238)が出土している。

遺物は人骨の取り上げ後の精査中に銅銭片（C348）が1点出土したのみで、これも混入の可能性が高い。

墓150（図265・266、図版53）

墓密集域の東部に位置し、墓173・墓111を切る。大型の礫を土壙上面中央に1個置き、その横に礫を2個並べて標石としている。

土壙は約1m平方の正方形で、標石下面からの深さは1.05mを測り、南北軸方向を北から11度西に振る。底面で比較的遺存状態の良い人骨を検出した。下肢骨は膝を立てた状態で出土し、その間から骨盤の上に乗って頭骨が出土した。骨盤と交連し北側へ延びる脊椎は、病変によってほとんどの椎骨が癒着・硬化しており（第6章参照）、立ったままの状態出土した。遺体の埋葬形態は正面を南に向ける立膝座葬である。被葬者は熟年男性と推定されている。

遺物は、釘13本（F239・F240ほか）が底面付近で、銅銭1枚（C350）が左寛骨上に乗って出土したほか、頭骨のクリーニング作業中に頭骨に付いた土から銅銭3枚・鉄銭2枚の固着したC349が見つかっている。C349には布が付着しているので、銭貨は頭陀袋などに入れて首にかけられていたと考えられる。

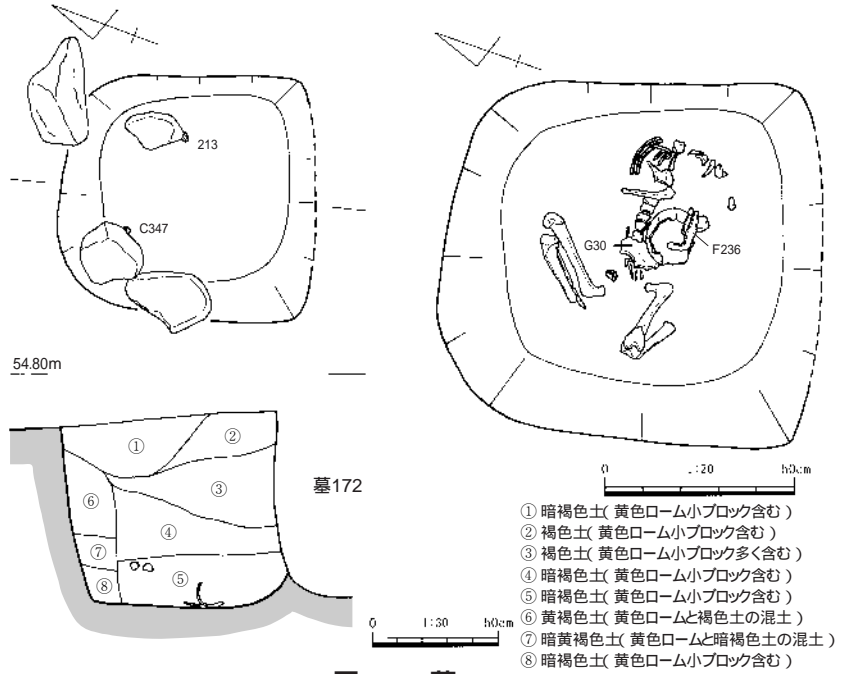


図261 墓148

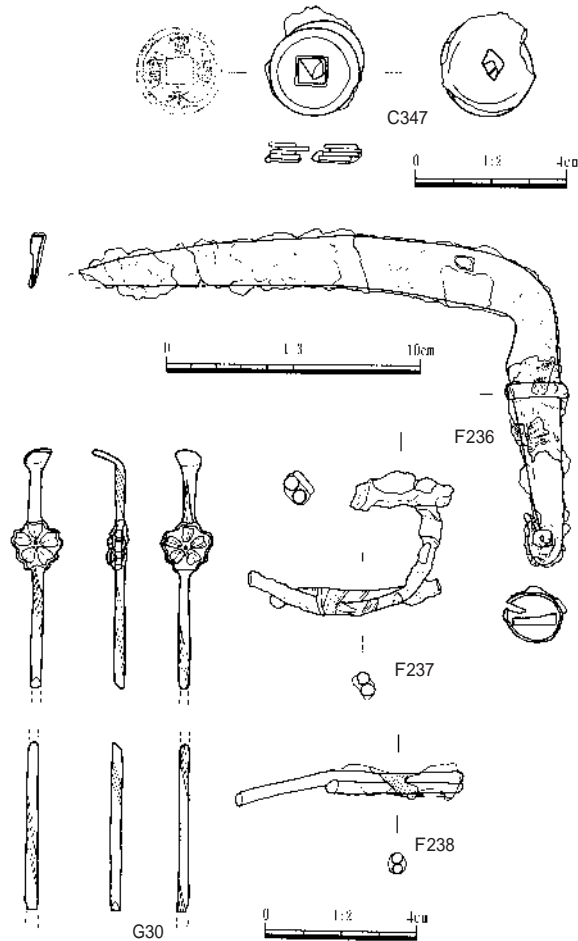


図262 墓148出土遺物

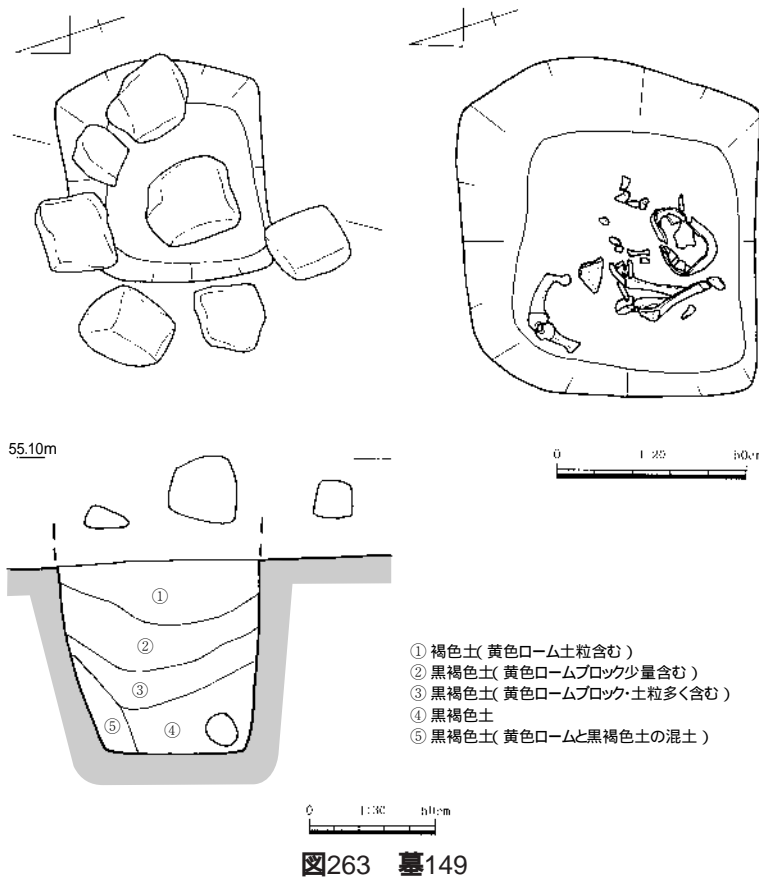


図263 墓149

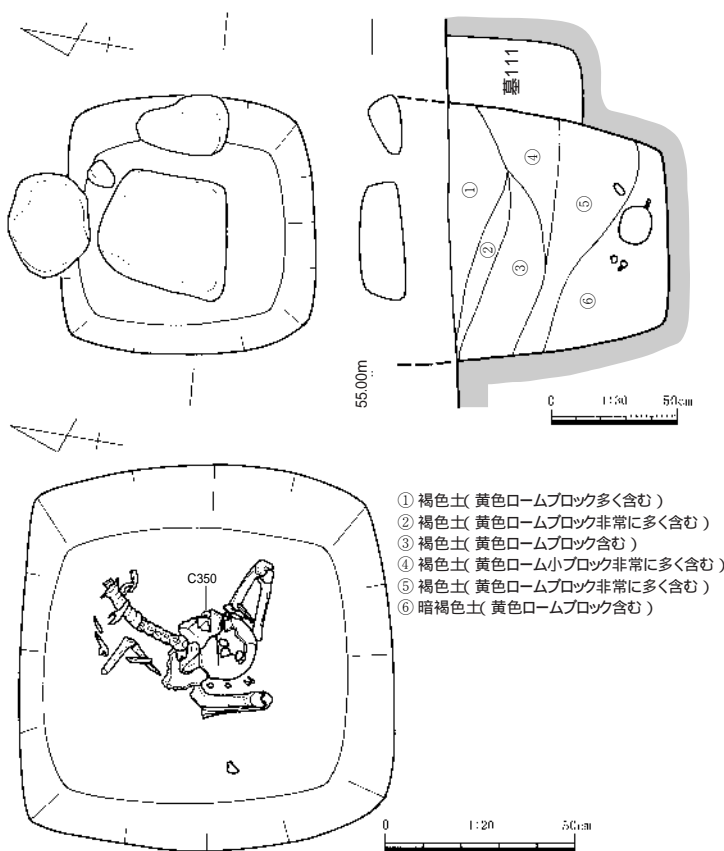


図265 墓150



図264 墓149出土遺物

墓151 (図267・268、図版53)

墓密集域の東部に位置し、墓111・墓112を切る。5個の大型礫を土壌上面に並べて標石としている。土壌の形状をよく意識して礫を組んでおり、土壌の中心に最も大きな礫を1個置き、残りの4個を土壌の四隅に配している。標石周辺から染付皿(図73:222)の破片が出土した。

土壌は約0.9m平方の正方形で、標石下面からの深さは0.8mを測り、南北軸方向を北から23度西に振る。底面で比較的遺存状態の良い人骨を検出した。人骨は土壌の中央にまとまっており、四肢骨・体幹骨の上に頭骨が乗っている。遺体の埋葬形態は座葬をとっていた可能性が高い。被葬者は熟年男性と推定されている。

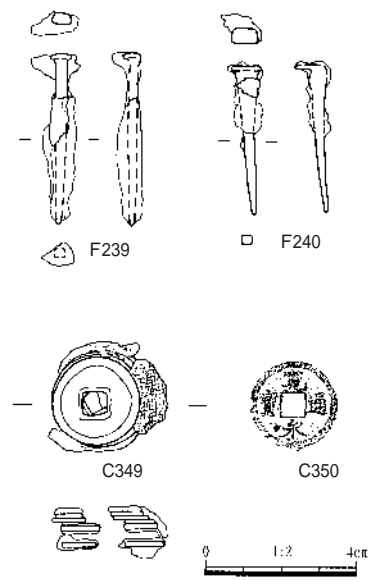


図266 墓150出土遺物

遺物は、鎌（F241）が頭蓋骨上に乗って出土したほか、底面付近から底面より20cmほど浮いた位置にかけて釘が16点出土した（F242・F243ほか）。

墓152（図269・270、図版53）

墓密集域の東部に位置する。5個の礫を集めて標石としている。標石周辺から染付紅猪口（図74：237）の破片が出土している。

土壌は0.9m平方の正方形で、標石下面からの深さ1mを測り、南北軸方向を北から5度西に振る。土壌底面から比較的遺存状態の良い人骨を検出した。東に右下肢骨、西に遠位端を上にして立つ左大腿骨があり、その間から頭骨や上肢骨、体幹骨がつぶれるように出土した。取り上げ時に確認したため図化できていないが、左右下肢の間、頭の下から骨盤を検出している。遺体の埋葬形態は体正面を北に向ける立膝座葬と推定できる。被葬者は熟年男性と推定されている。

遺物は、釘17本（F245～F247ほか）が底面付近や底面より10cm程度浮いた状態で出土したほか、頭蓋骨の上から鎌（F244）が、右下肢骨東側の底面直上で布に包まれた状態で固着した銅銭3枚と鉄銭3枚（C351）が出土した。銭貨は袋などに入られていたものであろう。

墓153（図271・272、図版54）

G4区東部に位置し、墓154を大きく切っている。上面に4個の礫を集め標石としている。

土壌は約1.1m平方の正方形で、標石下面からの深さ0.75mを測り、南北軸を北から24度西に振る。土壌内から人骨を2体分検出した。底面北西隅付近でまとまっているものが墓153に伴う人骨であろう。ここでは、顔を下に向けた頭骨と、その下から上肢骨・下肢骨が出土している。遺体の埋葬形態は座葬の可能性が高いと考えられる。被葬者は熟年から老年の男性と推定されている。これとは別個体の人骨が土壌東側で見ついている。土壌北東部で底面から30cmほど浮いて頭蓋骨が出土しており、その南の底面付近で椎骨、上肢骨が出土している。これらは本来墓154に埋葬されていた可能性が高い。この人骨は12才前後の女性と推定されている。

遺物も墓154のものが混在していると思われる。北西側の人骨周辺からは鎌が3本（F253～F255）

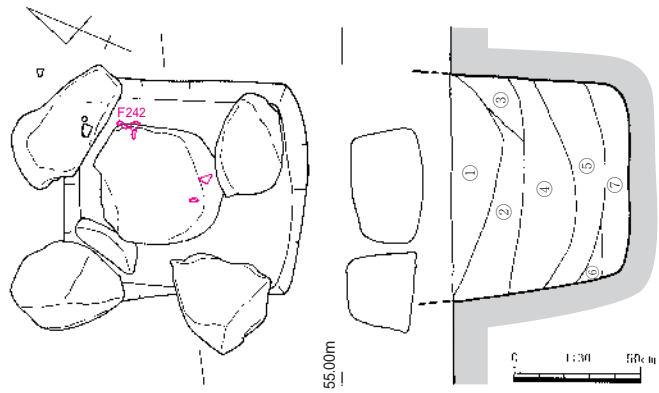


図267 墓151

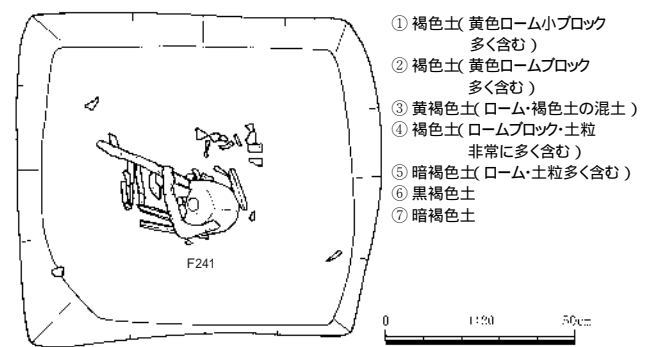
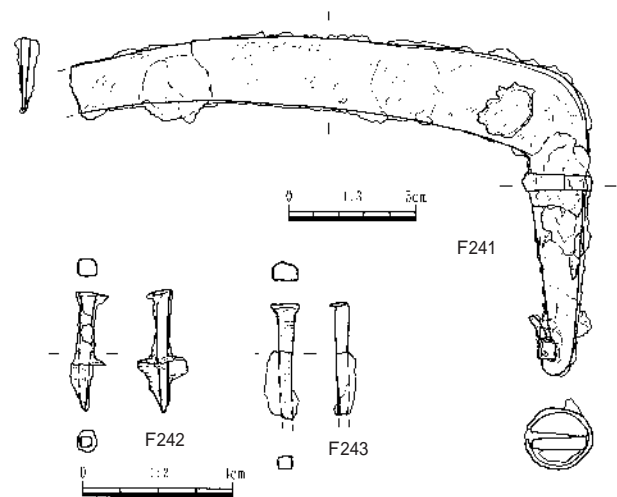


図268 墓151出土遺物



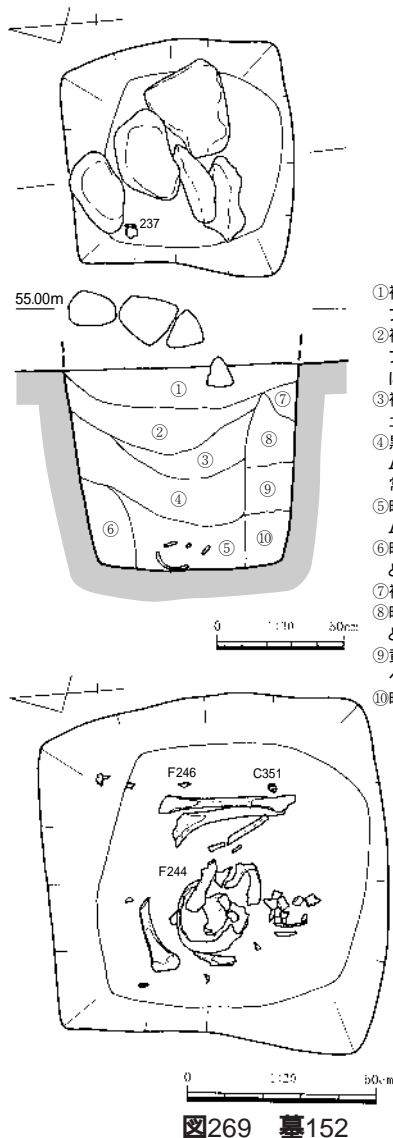


図269 墓152

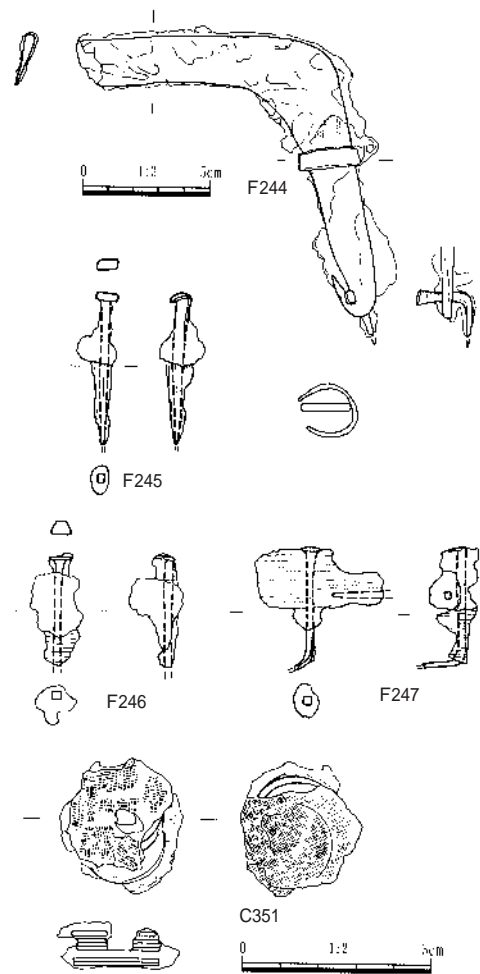


図270 墓152出土遺物

出土した。うちF253は上層出土の破片と接合するので、少なくとも墓153の副葬品ではないだろう。同じく北西側人骨の頭骨脇からは棺材と思われる木片(W27)と銅銭6枚(C352)が重なって出土した。この銅銭は墓153の副葬品の可能性が高い。ほかに東側の人骨付近からも銅銭が6枚(C353・C354)出土しており、これは本来墓154の副葬品であった可能性がある。そのほか、釘が6点(F248～F252ほか)出土している。

墓154 (図271・272、図版54)

G4区東部に位置し、墓153に土壌の大半を切られ、わずかに北端部の掘り方が残るのみである。現状では標石は見られない。

土壌は方形と思われ、東西辺の長さ0.85m、墓153標石下面からの深さ0.75mを測り、南北軸を北から24度西に振る。残存する土壌内からは人骨、遺物とも出土していない。これらは墓153の埋土内に混入したものと思われる。

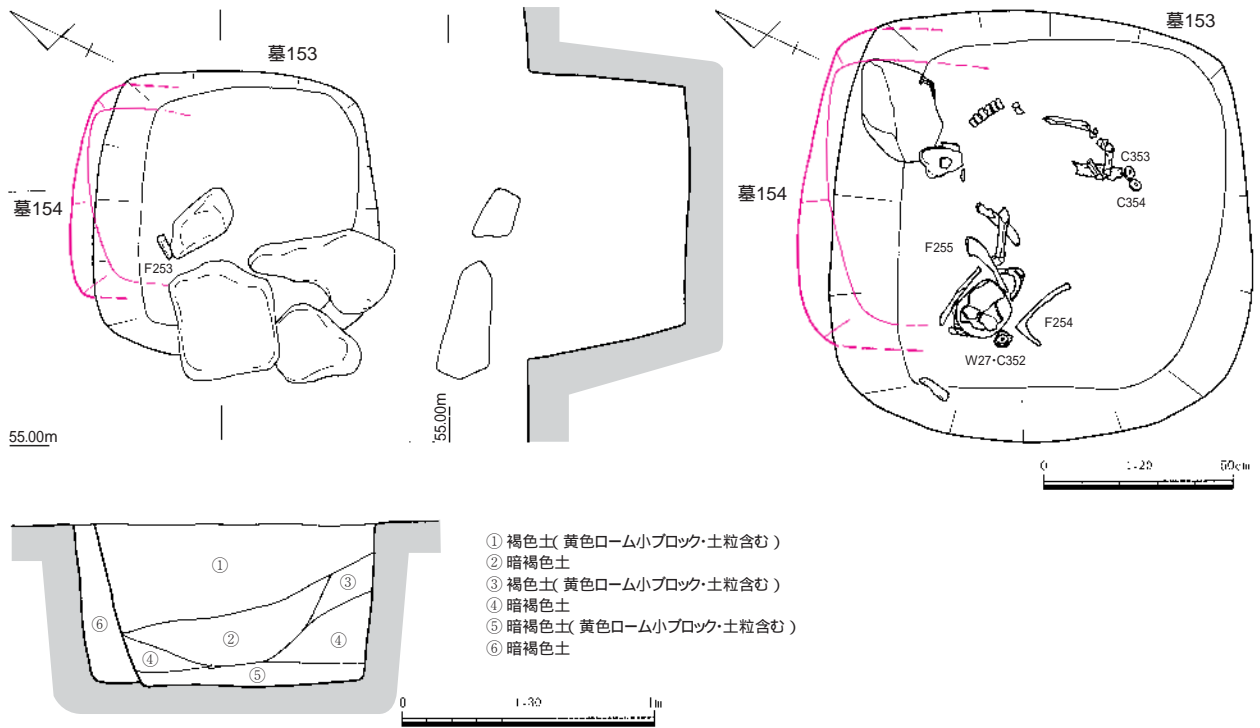


図271 墓153・154

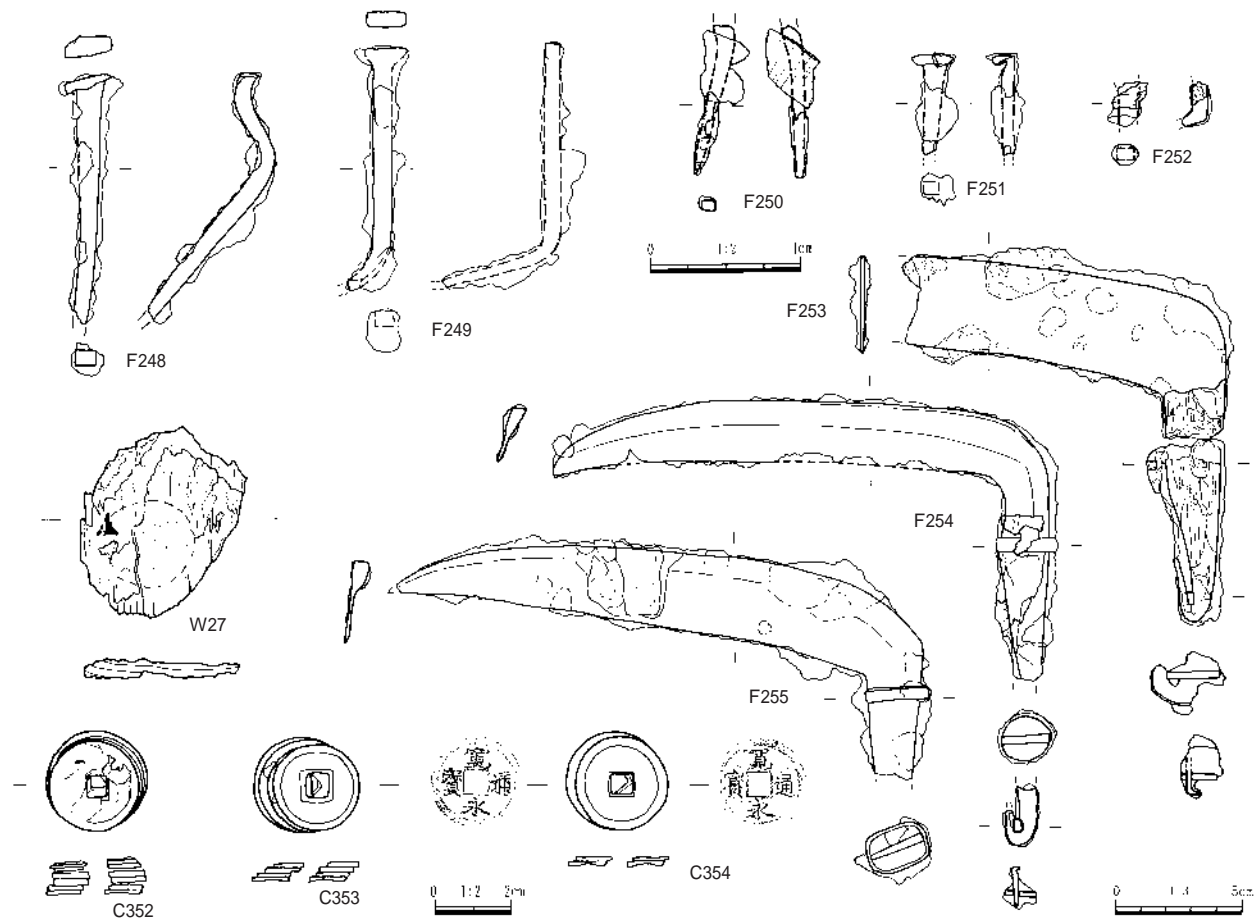


図272 墓153出土遺物

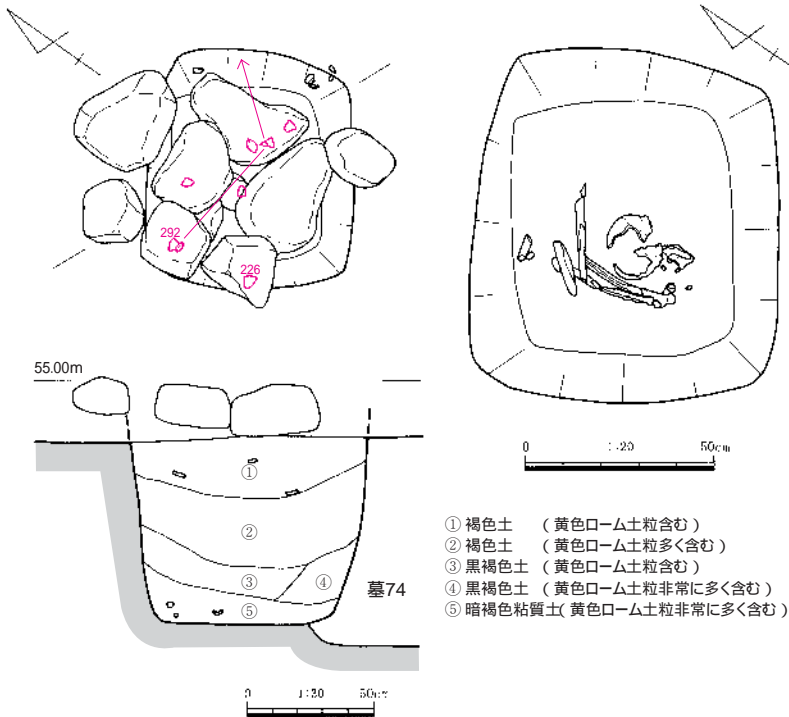


図273 墓155

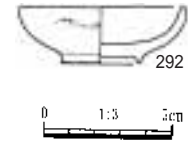


図274 墓155出土遺物

墓155 (図273・274、図版54)

G4区東部の中央付近に位置し、墓74の北西隅を切る。10個ほどの礫を整った方形に組んで標石としている。標石周辺からは人骨片が少量出土している。

土壌は正方形に近い方形で、東西軸長0.9m、南北軸長0.8m、深さ0.75mを測り、南北軸(短軸)方向を北から35度西に振る。

土壌内上層(①層)中から染付の

紅猪口(292)が出土した。墓155内から大半の破片が出土しほぼ完形となったが、墓74上面付近で検出した破片1点もこれに接合している(図70参照)。本来墓74の上面付近に供献されていたものが墓155掘削時に混ざりこんだ可能性がある。

土壌底面付近で比較的遺存状態の良い人骨を検出した。狭い範囲に頭骨、下肢骨などがまとまっている。下肢骨なども底に倒れた状態であったが、検出状況や土壌形態から見て遺体の埋葬形態は立膝座葬と考えられる。被葬者は壮年女性と推定されている。

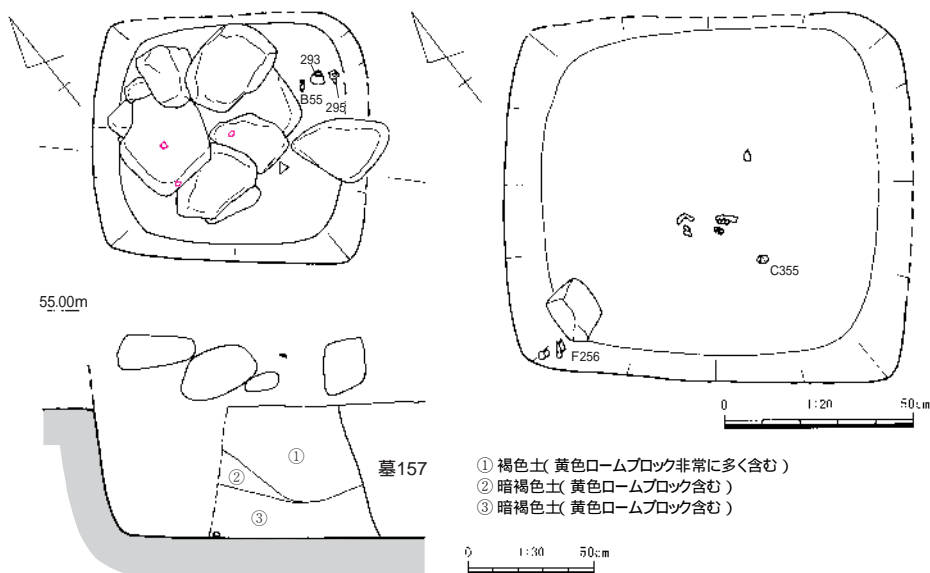


図275 墓156

墓156 (図275・276、図版54)

墓密集域の中央に位置し、墓105・墓157に切れ、墓184を切る。上面に10個ほどの礫を密に組んで標石としている。

土壌は約1m平方の正方形で、標石下面からの深さ0.7mを測り、南北軸を北から37度東に振る。土壌内上層(①層)から、磁器小杯(293)、青花碗(294)、白磁人形(295)、煙管雁首(B55)が出土した。

底面からは、中央付近で人骨頭骨片がわずかに出土したほか、布の付着した銅銭5枚・鉄銭1枚(C355)が出土した。ほかに、底面付近から上層にかけて釘が4点(F256ほか)出土している。

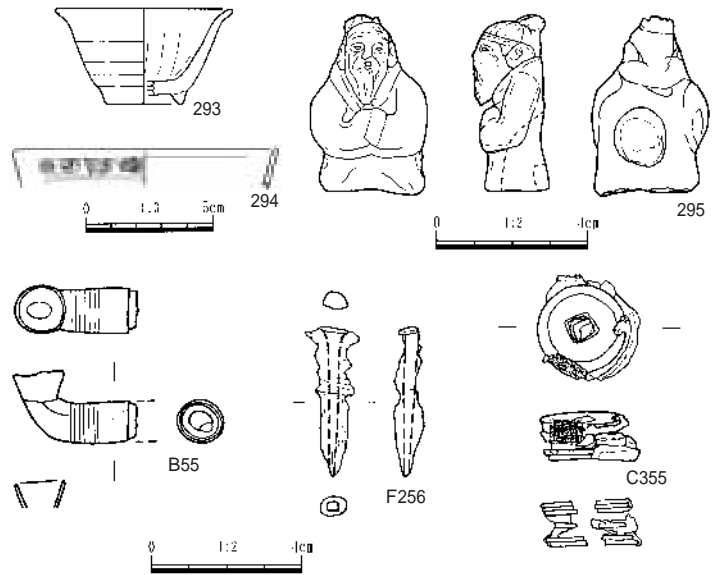


図276 墓156出土遺物

墓157 (図277・278、図版55)

墓密集域の中央に位置し、墓156・墓184・墓65を切り、墓104に切られる。現状では標石は確認できない。

土壌は長幅比の小さい長方形で、長辺1.05m、短辺0.9m、検出面からの深さ0.5mを測り、長軸方向を東から35度北に振る。土壌上層(検出面付近)で染付皿(図73:221)の破片が出土している。底面からは人骨を検出した。土壌西寄りに下肢骨片がある。遺体の埋葬形態は不明である。

底面から出土した遺物には鎌(F258)と釘1点(F257)がある。釘は混入したものであろう。

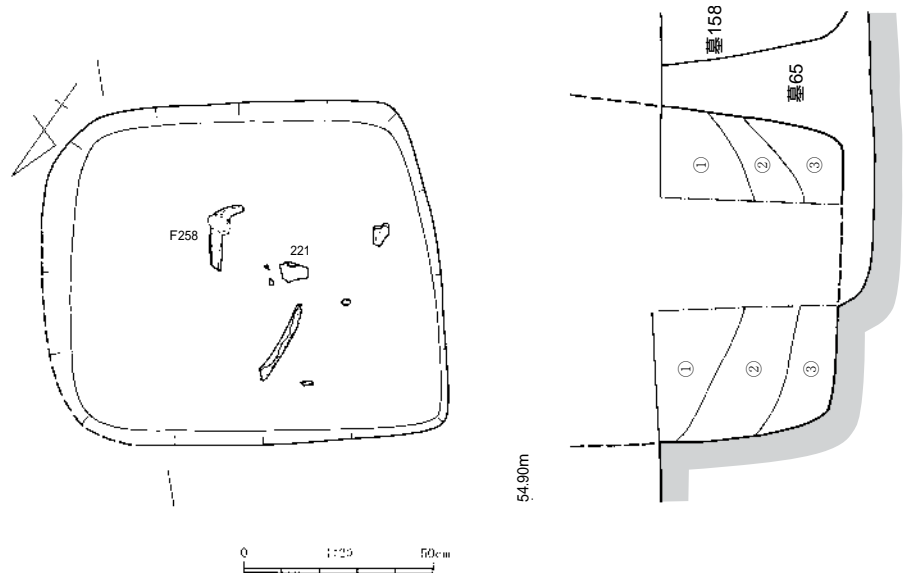


図277 墓157

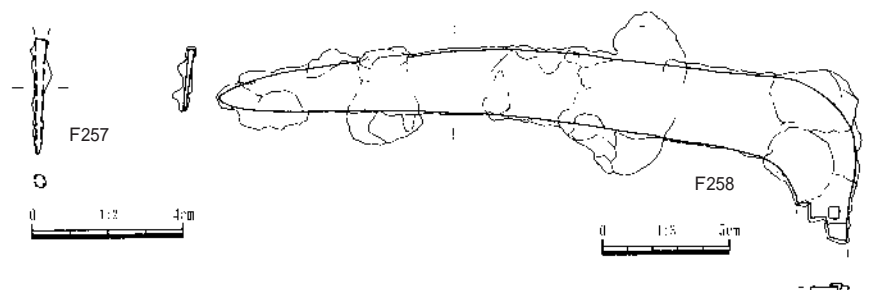


図278 墓157出土遺物

墓158

(図279・280、図版55)

墓密集域の中央東寄りに

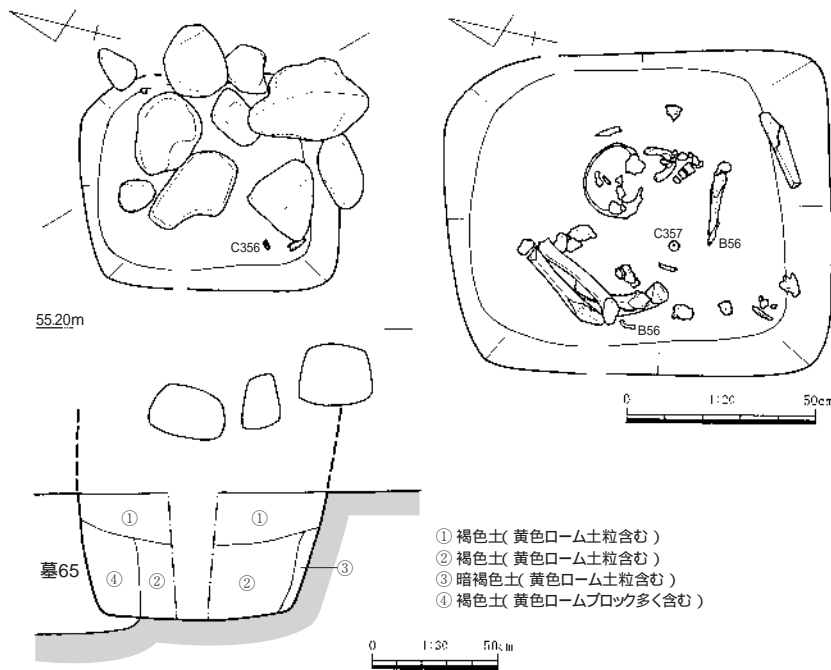


図279 墓158

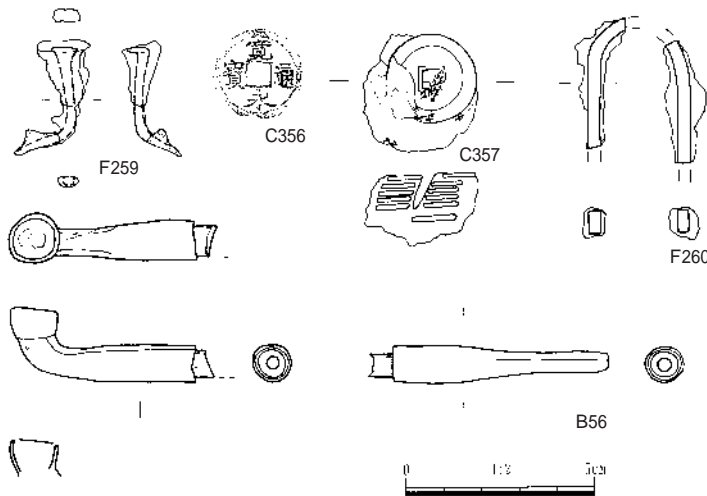


図280 墓158出土遺物

あり、墓65・墓183・墓113・墓114を切る。上面に10個の礫を集めて標石としている。

土壌は正方形に近い長方形で、南北長辺が1m、南北短辺が0.85m、標石下面からの深さ0.8mを測り、南北軸方向を北から14度西に振る。上層(①層)から銅銭1枚(C356)が出土しているが、混入したものであろう。

底面で人骨を複数個体分検出した。墓158に埋葬されたと考えられる人骨は、中央に頭骨があり、その北西に下肢骨がある。下肢骨は北側に右下肢が、南側に左下肢がともに膝を立てた状態で並んでいる。遺体の埋葬形態は正面を西に向ける立膝座葬と考えられる。被葬者は壮年後半から熟年の男性と推定されている。これとは別個体の人骨片が土壌南端部から数点出土している。

遺物は、布の付着した銅銭1枚・鉄銭5枚(C357)と煙管(B56)が底面から出土している。

ほかに、釘2点(F259ほか)と鉄持ち手部破片(F260)が人骨の下から出土したが、いずれも混入したものであろう。

墓159 (図281・282、図版56)

墓密集域の中央部に位置し、墓69・墓119・墓118を切る。土壌上に10個ほどの礫を方形に組んで標石としている。土壌肩の外(北側)にも礫が途切れずに続くが、おそらく墓69に伴う標石であろう。

土壌は約1.1m平方の正方形で、標石下面からの深さ0.95mを測り、南北軸を北から6度西に振る。土壌内下層(③層)中から土師器皿(296)が出土している。完形に復元できており、平面的にも比較的良くまとまるので、本遺構に伴う可能性がある。

底面では遺存状態の良い人骨を検出した。西側に膝を立てた下肢骨があり、その東に頭骨・体幹骨・上肢骨が見られる。遺体の埋葬形態は体正面を西に向けた立膝座葬と考えられる。被葬者は壮年

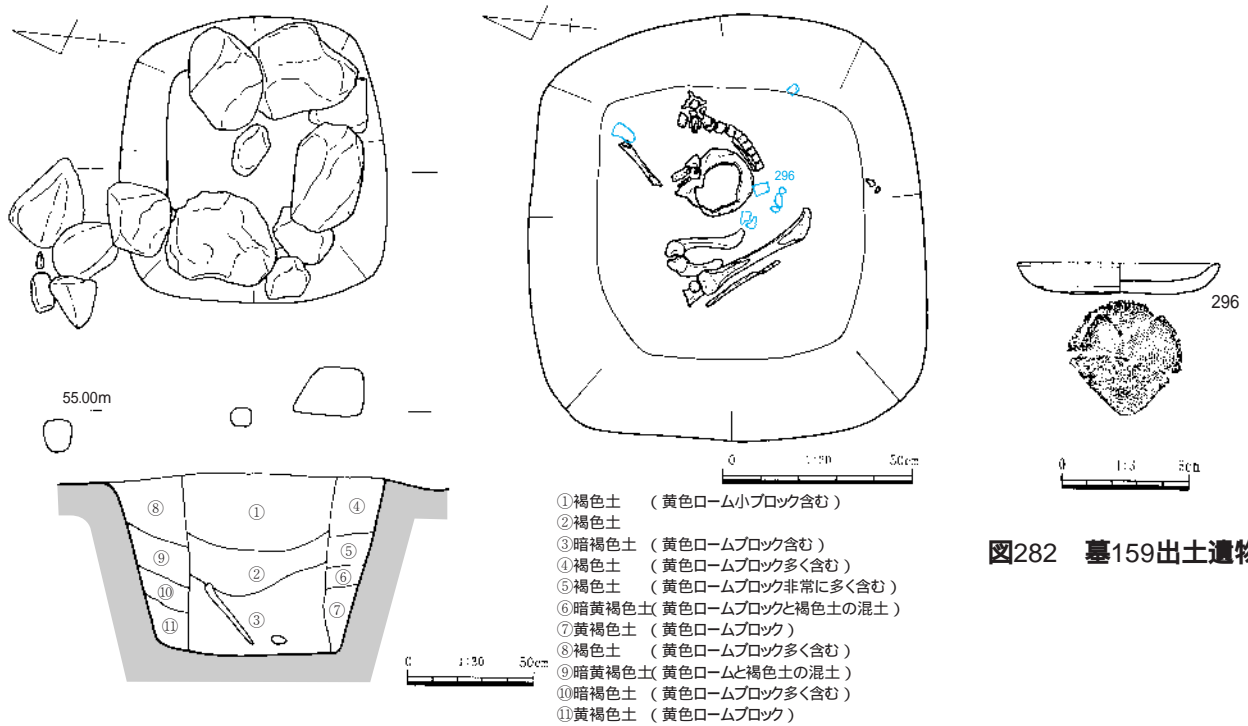


図282 墓159出土遺物

図281 墓159

女性と推定されている。底面からの遺物の出土はなかった。

墓160 (図283・284、図版55)

墓密集域の中央部に位置し、墓70・墓186・墓161・墓85を切る。土壌上に6個ほどの礫を疎らに置いて標石としている。

土壌は約1m平方の正方形で、標石下面からの深さ0.9mを測り、南北軸を北から18度西に振る。土壌内上層(検出面下約20cmの位置)で銅銭1枚(C358)が出土している。

底面では非常に遺存状態の良い人骨を検出した。北側に膝を立てた下肢骨があり、その南におおよそ交連状態を保った体幹骨・上肢骨・頭骨が見られる。遺体の埋葬形態は体正面を北に向けた立膝座葬と考えられる。被葬者は熟年男性と推定されている。この人骨とは別に土壌の東側で下肢骨や頭骨片が出土した。おそらく墓160が大きく切る墓161に埋葬されていた人骨であろう。これは壮年から熟年の女性のもものと推定されている。

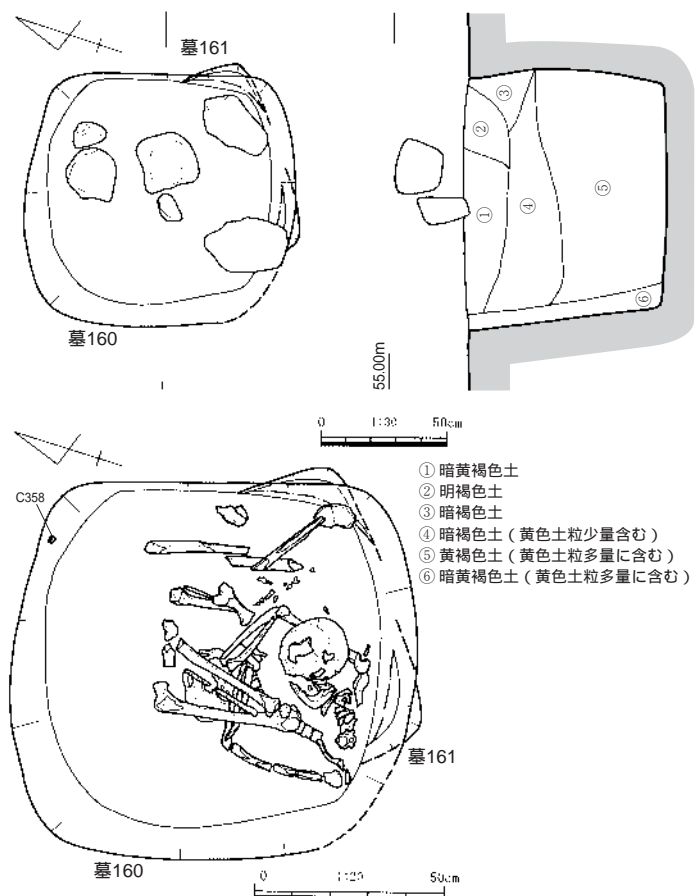


図283 墓160・161

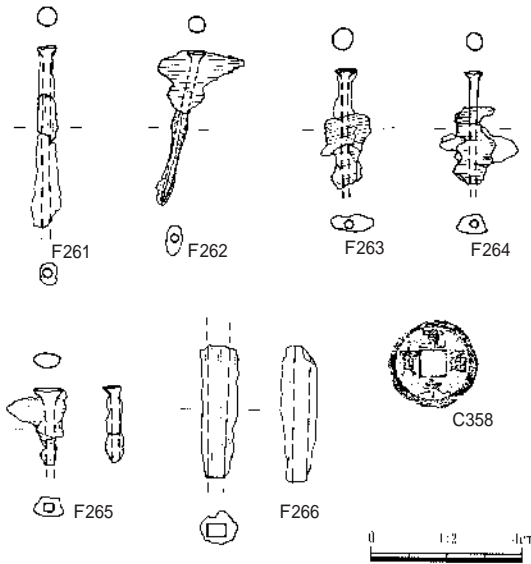


図284 墓160出土遺物

底面付近からは洋釘30点（F261～F264）
和釘2点（F265・F266）が出土している。
洋釘の出土から本遺構は近代以降のものと考えられる。

墓161（図283、図版55）

墓密集域の中央部に位置し、墓160に大きく切られ、ほとんど原形をとどめていない。平面形は正方形であった可能性が高く、一辺0.8m、深さ0.8mを測る。南北軸は北から34度西に振る。

墓162（図285・286、図版56）

墓密集域の西縁中央に位置し、墓163・墓71を切る。6個ほどの礫を集めて標石としているが、いくつかの礫は土壌内に落ち込んでいる。

土壌は約1m平方の正方形で、深さ0.85mを測り、南北軸を北から26度西に向ける。

土壌上層（①層）から人骨片が少量出土している。土壌底面では非常に遺存状態の良い人骨を検出した。頭骨以外はほぼ交連状態を保っており、遺体の埋葬形態は正面を西に向けた座葬と考えられる。ただし、一般的な立膝座葬ではなく、遺体の臀部から背部下半にかけては底面に接し、肩部以上を起こしていたと想定されるので仰臥に近い姿勢となる

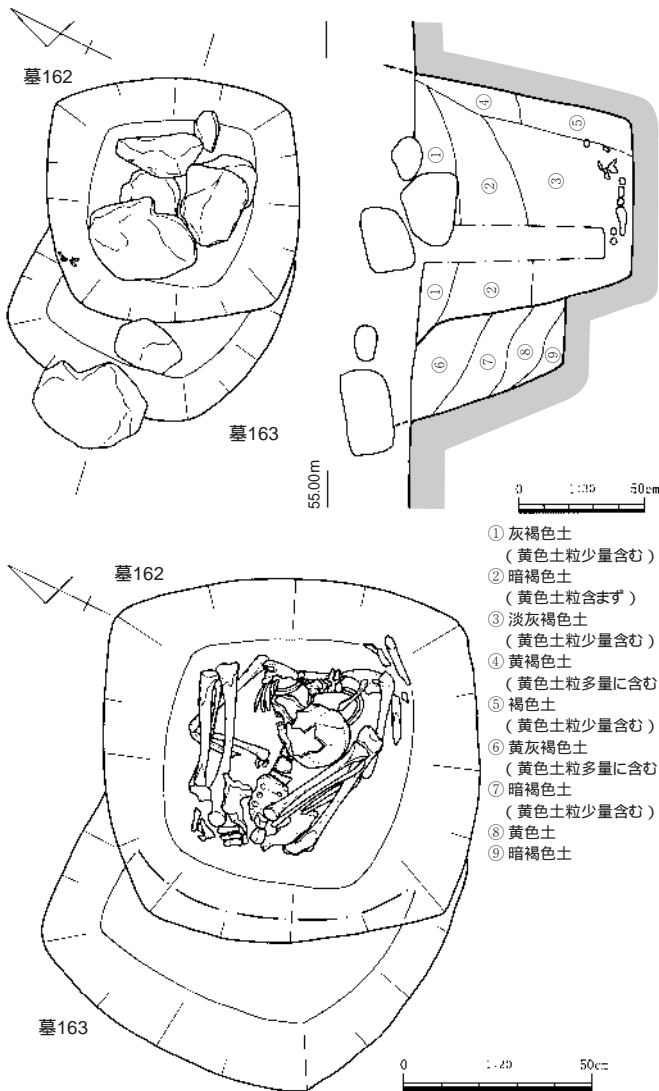


図285 墓162・163

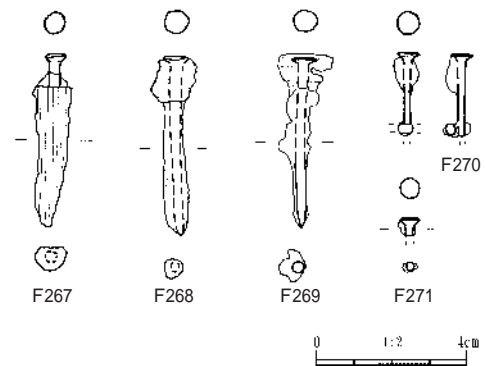


図286 墓162出土遺物

(埋葬肢位では「半仰臥屈位」。第6章参照)。被葬者は壮年男性と推定されている。また、この人骨とは別の人骨片を土壌南東隅で検出している。墓163に埋葬されていたものであろうか。

遺物は土壌底面付近を中心に洋釘(丸釘)が20本(C267~C271ほか)出土した。出土遺物から本遺構は近代以降のものと考えられる。

墓163 (図285、図版56)

墓密集域の西縁中央に位置し、東半を墓162に切られる。現状では2個の礫が土壌上面にある。

土壌は一辺1mほどの正方形と思われ、深さ0.6mを測り、南北軸を北から7度東に振る。人骨、遺物とも出土していない。

墓164 (図287・288、図版56)

G4区西縁部の中央に位置し、墓110を切る。土壌の本来の掘り込み面の上には礫は見られなかったが、土壌上層(①層)から礫数個が密集して出土した。また、礫とともに完形の染付紅皿(297)が出土している。これらはいずれも上面に置かれていたものが土壌内に落ち込んだと考えられる。

土壌は正方形に近い長方形で、東西長辺が0.9m、南北短辺が0.75m、検出面からの深さ0.6m(残存値)を測り、南北軸方向を北から13度東に振る。底面で人骨を検出した。底面北縁部に頭骨があり、その南西側に膝を北に向けた左大腿骨が、南東側に右下肢骨がある。遺体の埋葬形態は正面を南に向ける座葬と考えられるが、これも墓162と同じく埋葬肢位での分類では半仰臥屈位と推定される。被葬者は壮年女性?と推定されている。

底面からは遺物は出土していない。

墓165 (図289・290、図版57)

墓密集域の西南部に位置し、墓86、墓87、墓85を切る。土壌上面に礫が乗っているが、しっかり組まれたものではない。

土壌は正方形に近い方形で、長辺1.2m、短辺1.05m、標石下面からの深さ1.05mを測り、南北軸

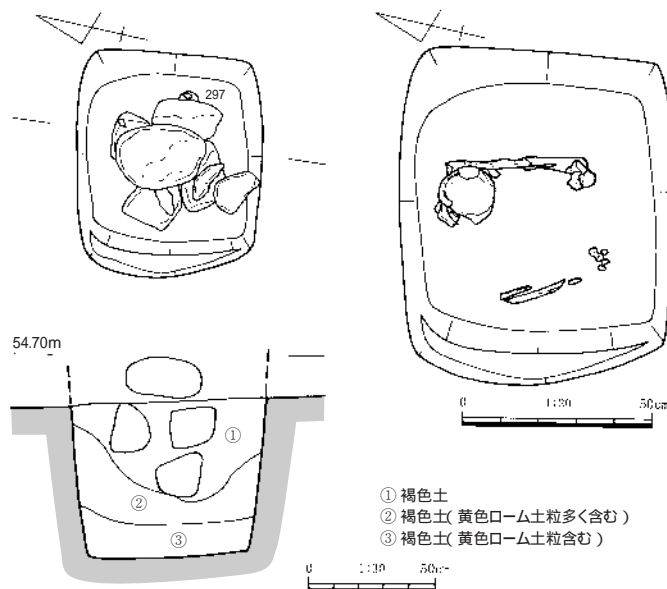


図287 墓164

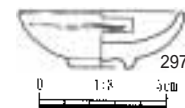


図288 墓164出土遺物

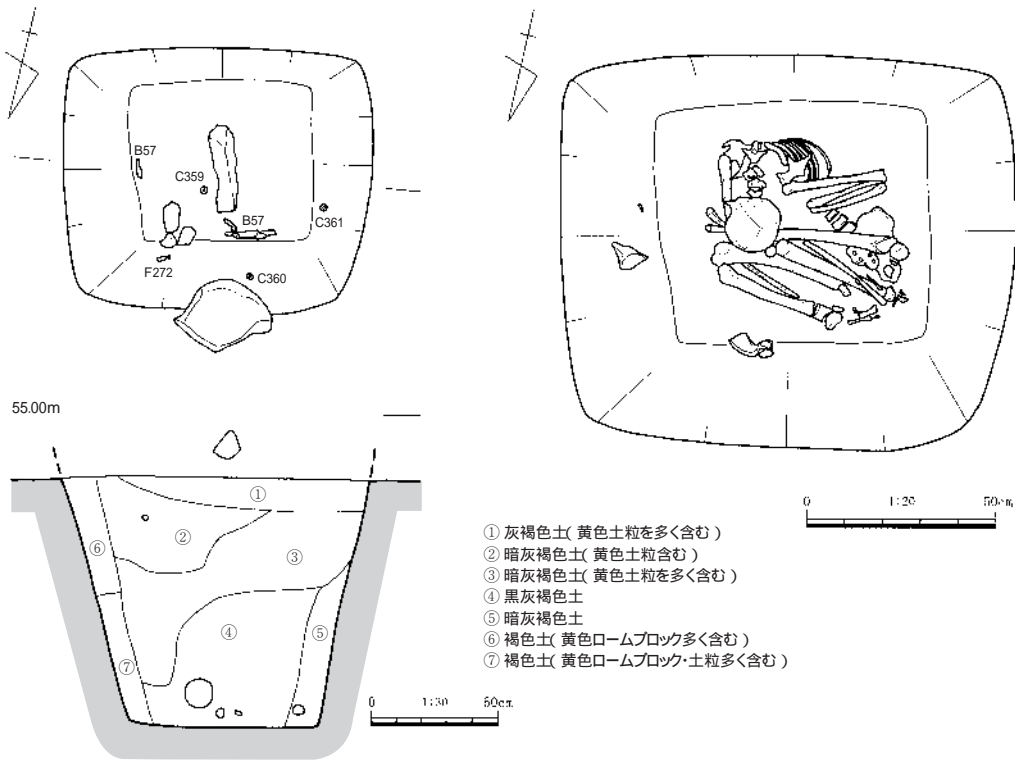


図289 墓165

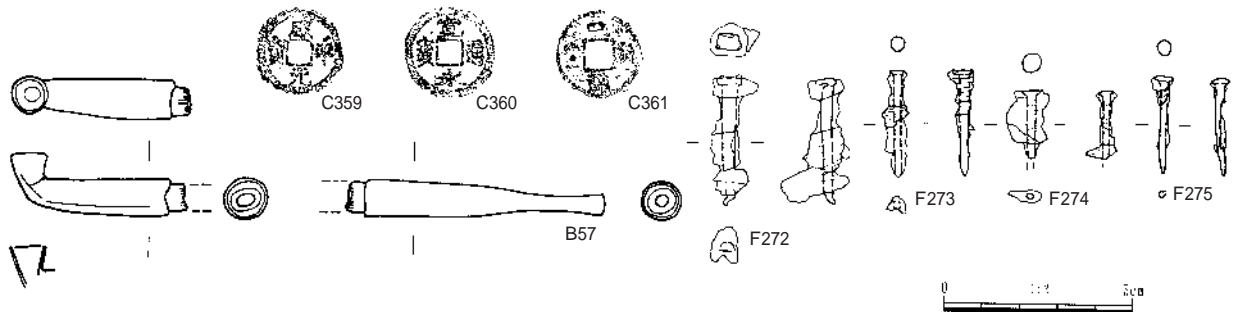


図290 墓165出土遺物

(短軸)方向を北から13度西に振る。

土壌上層の①層中から人骨片、中国銭を含む銅銭3枚(C359~C361)、煙管(B57)、和釘(F272)が出土している。他の墓の人骨、副葬品などであろう。

土壌底面から交連状態を保った非常に遺存状態の良い人骨を検出した。下肢骨が北側にあり、その南に上肢骨・体幹骨・頭骨がある。遺体の埋葬形態は座葬と考えられるが、これも墓162・164と同じく埋葬肢位は半仰臥屈位をとっていたと推定されている。被葬者は壮年後半の女性と推定されている。ほかに、土壌北端でこれとは別の個体の人骨片が出土している。この人骨は壮年女性のものと推定されている。

墓165に伴う遺物は底面付近から出土した釘34点である。釘はいずれも洋釘(丸釘)である。

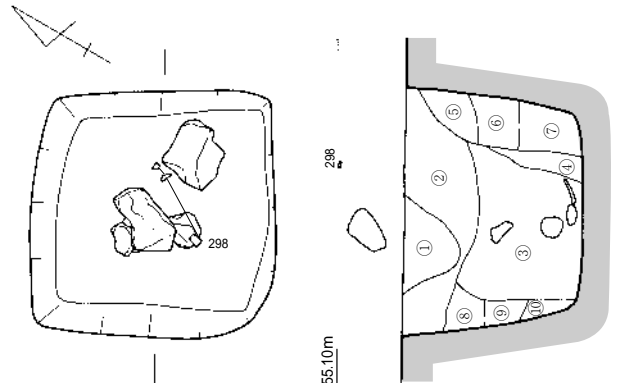
出土遺物から本遺構は近代以降のものと考えられる。

墓166 (図291・292、図版57)

G 4 区西縁南部に位置し、墓89を切る。5 個ほどの小型の礫を集めて標石としている。標石周辺から染付盃 (298) が出土している。

土壌は 1 m 平方の正方形で、標石下面からの深さは 0.8m を測り、南北軸方向を北から 30 度西に振る。土壌内からは非常に遺存状態の良い人骨を検出した。膝が立った状態の下肢骨が北側にあり、その南に上肢骨・体幹骨が倒れている。頭骨は下肢骨の間で検出した。遺体の埋葬形態は体正面を北に向けた立膝座葬と推定される。遺体は、腐敗する過程で頭骨が股の間に落ちた後に、上半身が後ろ向きに倒れたと考えられるので、埋葬段階では遺体の周りに空間があった可能性が高い。釘が出土したことも合わせて、棺が用いられていたと推定できる。被葬者は壮年後半男性と推定されている。

遺物は鉄釘 15 本 (F276・F277 ほか)、煙管 (B58) が出土した。釘のほとんどは底面付近で出土した。煙管は体幹骨の頸から胸元付近で出土した。釘は和釘で、煙管は古泉編年の 段階であることから、江戸時代後期後半～近代初頭の墓であろう。



墓167 (図293・294、図版58)

G 4 区南西部に位置し、墓125と墓90を切る。十数個の礫を組んで標石としている。

土壌の平面形は、上面は長方形を呈すが、底面形は正方形に近い。南北長辺が 1.2m、東西短辺が 0.8m、深さ 0.85m を測り、南北軸を北から 14 度東に振る。土壌内上層 (①層) 中から陶器皿 (図 72 : 203) の破片が出土した。

土壌底面からは遺存状態の良い人骨が出土している。北東隅に頭骨があり、南西側に膝を北に向けた下肢骨がある。上肢骨と体幹骨は頭骨の南にあるがいずれも交連状態を保たない。検出状況からは右側臥屈葬と考えられるが、正面を西に向けた立膝座葬の遺体が北側に倒れた可能性もある

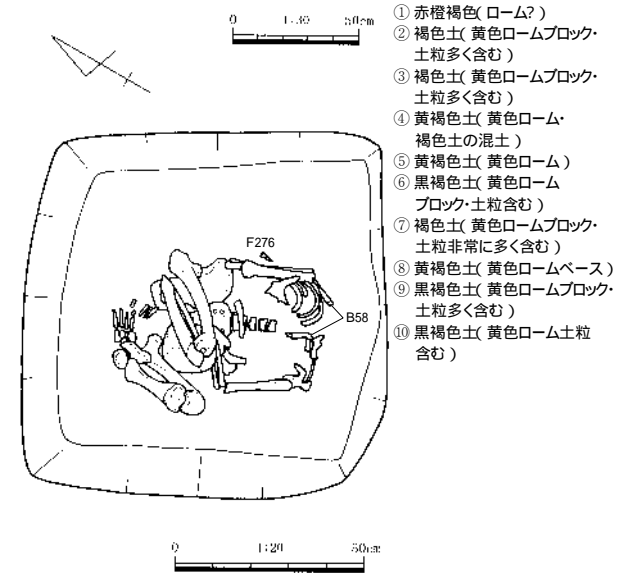


図291 墓166

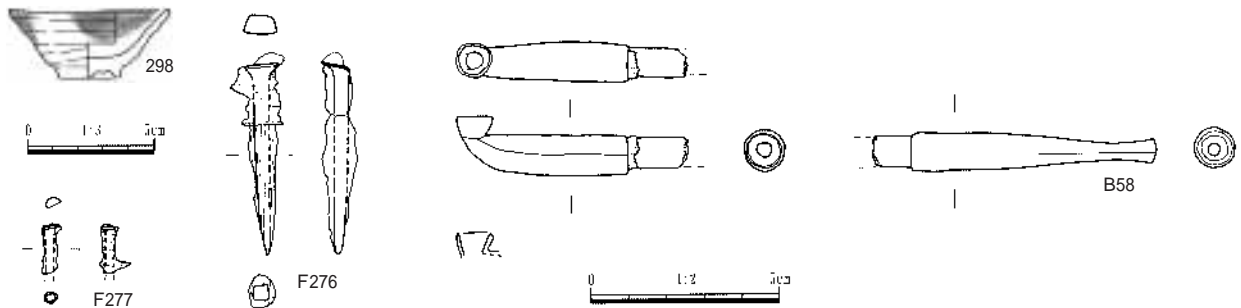


図292 墓166出土遺物

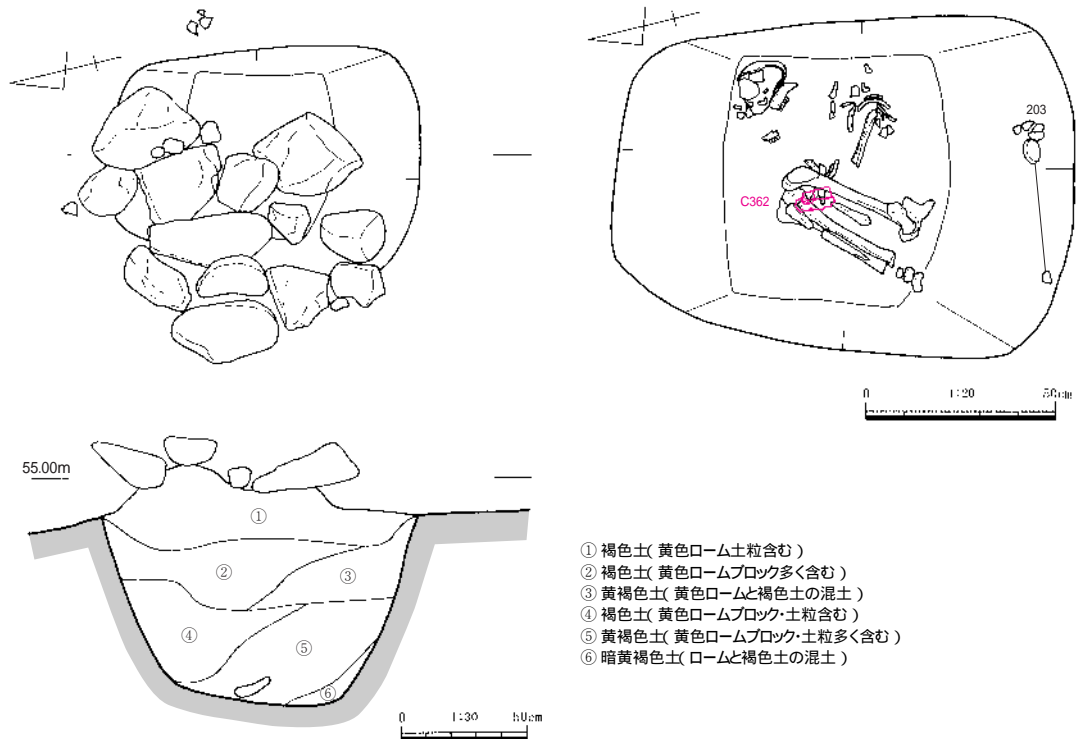
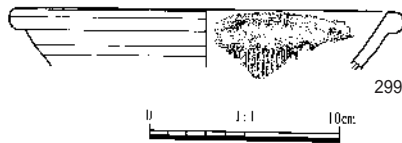


図293 墓167

う。被葬者は熟年男性と推定されている。

底面出土の遺物には、人骨の下から出土した木質の付着する銅銭3枚・鉄銭2枚(C326)のほか、陶器播鉢片(299)がある。



墓168 (図295・296、図版58)

G4区南部中央付近に位置し、墓134を切る。上面に小型の礫を10個ほど集めて標石としている。

土壌は約1m平方の正方形で、深さ0.7mを測り、南北軸方向を北から5度東に振る。土壌内上層から磁器碗(300)、土師器杯(301)、陶器灯明皿(図77:250)の破片、染付碗(図74:230)の破片が出土している。250と230は表土中出土など墓168以外から出土したものと接合する。

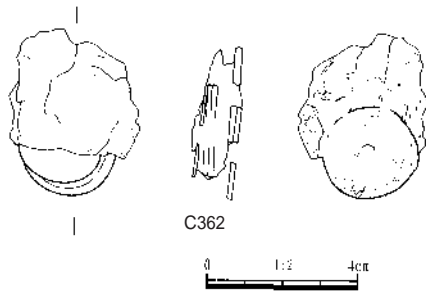


図294 墓167出土遺物

土壌底面西側で人骨がまとまって出土した。下肢骨の上に上肢骨、頭蓋骨が乗っている。遺体の埋葬形態は体正面を西に向ける座葬と推定される。被葬者は壮年後半から熟年の女性と推定されている。

底面からの遺物は、骨の北側で鉄銭が6枚(C363・C364)出土したほか、釘が3点(F278ほか)出土した。釘は混入の可能性が高いだろう。

墓169 (図297・298、図版58)

G4区南西隅付近に位置し、墓177を切る。土壌上面中央に小型礫が1個乗っている。上面から土師器皿(302)が出土した。

土壌の平面形はほぼ正方形で、上面で1m×0.9m、底面では非常に狭くなり0.5m平方を測る。標

石下面からの深さは1.45mを測り、南北軸方向は北から11度西に振る。土壌上層から銅銭4枚(C365)が出土した。銅銭はこの墓には伴わない可能性が高い。

底面付近から非常に遺存状態の良い人骨を検出した。膝が立った状態の下肢骨が北側にあり、その南に上肢骨・頭骨・体幹骨がある。遺体の埋葬形態は体正面を北に向けた立膝座葬と考えられる。被葬者は壮年後半から熟年の男性と推定されている。

土壌底面からの遺物の出土はない。

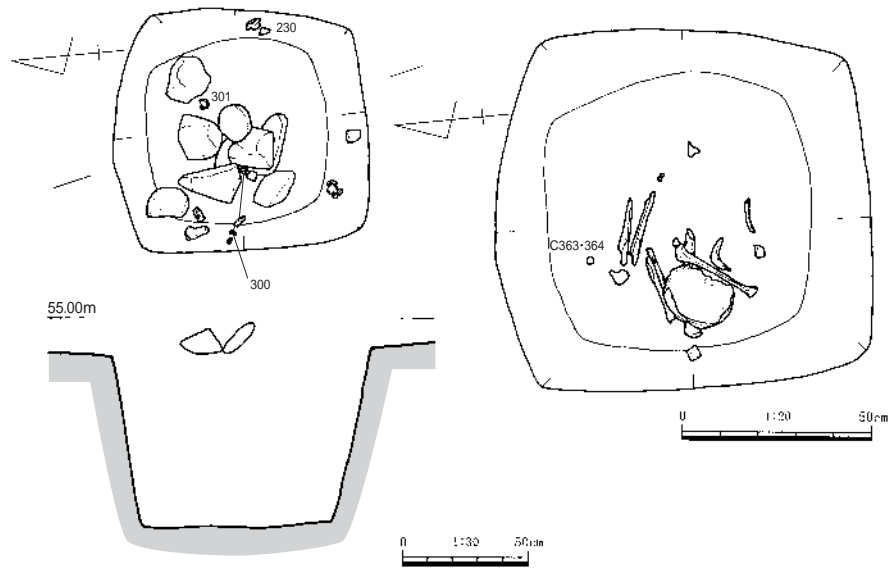


図295 墓168

墓170 (図299・300、図版59)

墓密集域の西縁中央部に位置する。2つの礫を並べて標石としている。

土壌は平面正方形で、一辺0.6m、標石下面からの深さ0.75mと小型で、南北軸を北から18度西に振る。土壌内上層(①層)中から染付碗(303)と陶器油受皿(304)が出土した。そのうち303は接合した破片のうち1点が土壌上標石周辺からの出土である。両者とも本来土壌上に供献されていたものが土壌内に落ち込んだ可能性があるだろう。

人骨は一切出土しなかったが、形態から見て墓であろう。その大きさから乳幼児などの墓であった可能性がある。

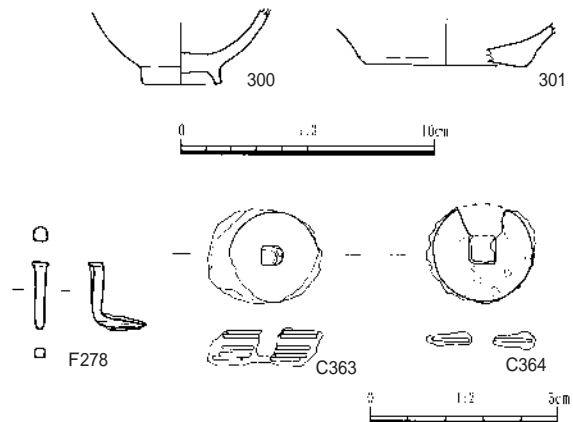


図296 墓168出土遺物

D類墓群

D類のものは少数に限られるため、遺構分布に目立った特徴を見出すことはできない。土層の状態はC類のものと同様である。

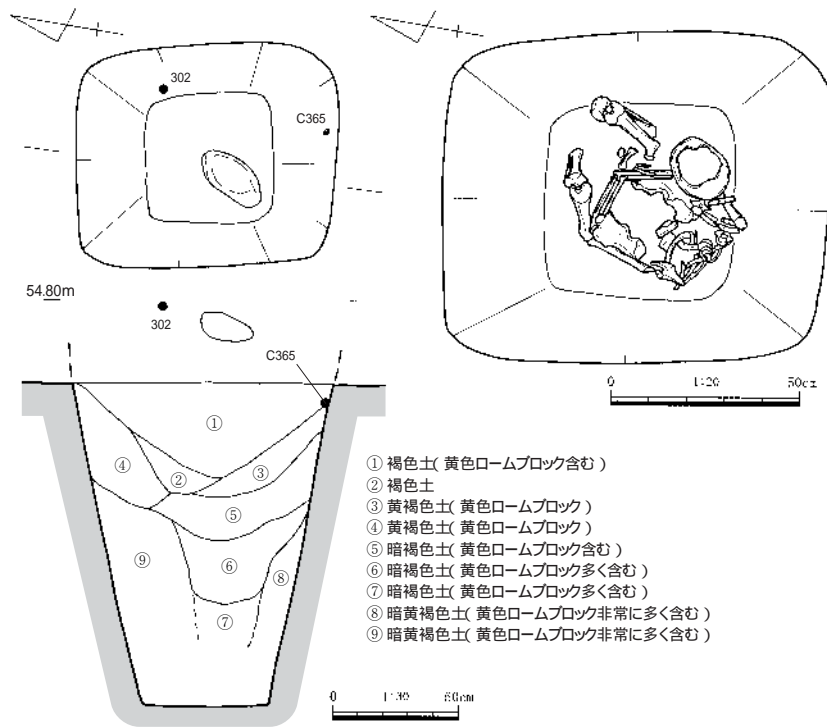
以下、D類土壌の墓を順に記述する。

墓171 (図301・302、図版59)

G4区北部に位置する。15個ほどの礫を集めて標石としているが、礫の約半数は土壌内に落ち込んで検出された。上面の標石周辺からは染付皿(305)、磁器碗(図74:232)、陶器播鉢(図72:215)、陶器碗(図72:210)、土師器皿(図71:193)が出土している。305・193以外は本標石以外からも破

片が出土しており、305・193も破片が少量出土したのみで、いずれとも本標石に確実に伴うとは判断できない。

土壌は平面円形で、径1.3~1.4mほど、標石下面からの深さ1mを測る。底面で遺存状態の悪い人骨を検出した。



- ① 褐色土(黄色ロームブロック含む)
- ② 褐色土
- ③ 黄褐色土(黄色ロームブロック)
- ④ 黄褐色土(黄色ロームブロック)
- ⑤ 暗褐色土(黄色ロームブロック含む)
- ⑥ 暗褐色土(黄色ロームブロック多く含む)
- ⑦ 暗褐色土(黄色ロームブロック多く含む)
- ⑧ 暗黄褐色土(黄色ロームブロック非常に多く含む)
- ⑨ 暗黄褐色土(黄色ロームブロック非常に多く含む)

図297 墓169

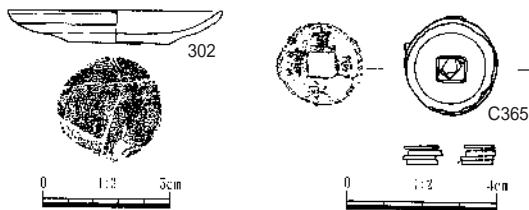


図298 墓169出土遺物

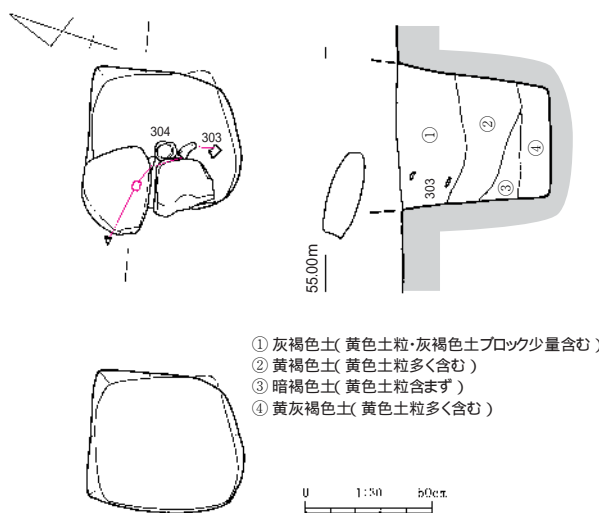
骨を検出した。頭蓋骨、歯牙が土壌北東隅から、下肢骨などが土壌中央から出土している。遺体の埋葬形態は仰臥屈葬または座葬と考えられる。被葬者は壮年女性と推定されている。

遺物は、鎌(F279)が大腿骨の下から底面に接して、刀子(F280)が人骨の下から出土した。

墓172 (図303・304、図版59)

墓密集域の北東部に位置し、墓148・墓58・墓59・墓180を切る。7個ほどの礫を集めて標石としている。標石周辺から陶器皿(図72:195)の破片などが出土している。

土壌は円形で、南北径0.95m、東西径0.9m、標石下面からの深さ0.8mを測り、南北長軸方向を北から32度西に振る。土壌底面から比較的遺存状態の良い人骨を検出した。下肢骨が南北



- ① 灰褐色土(黄色土粒・灰褐色土ブロック少量含む)
- ② 黄褐色土(黄色土粒多く含む)
- ③ 暗褐色土(黄色土粒含まず)
- ④ 黄灰褐色土(黄色土粒多く含む)

図299 墓170

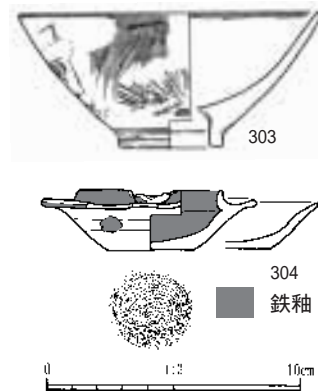


図300 墓170出土遺物

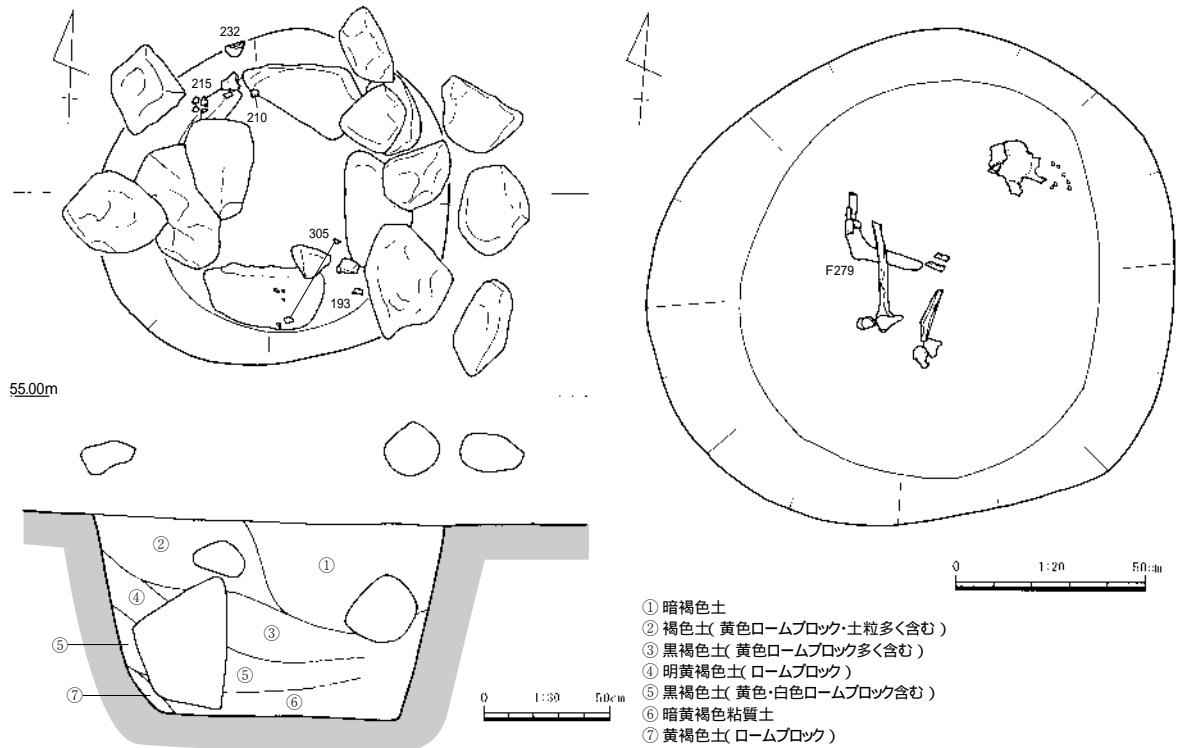


図301 墓171

方向を向いて並び、その上に体幹骨、上肢骨、頭骨がつぶれるように乗っている。左右の大腿骨はともに近位が北にある。遺体の埋葬形態は体正面を北西に向ける立膝座葬と考えられる。被葬者は熟年男性と推定されている。

遺物は、釘5本(F282・F283ほか)が底面や底面から10cmほど浮いた位置で出土したほか、鎌(F281)が左大腿骨の下で底面に接して出土した。

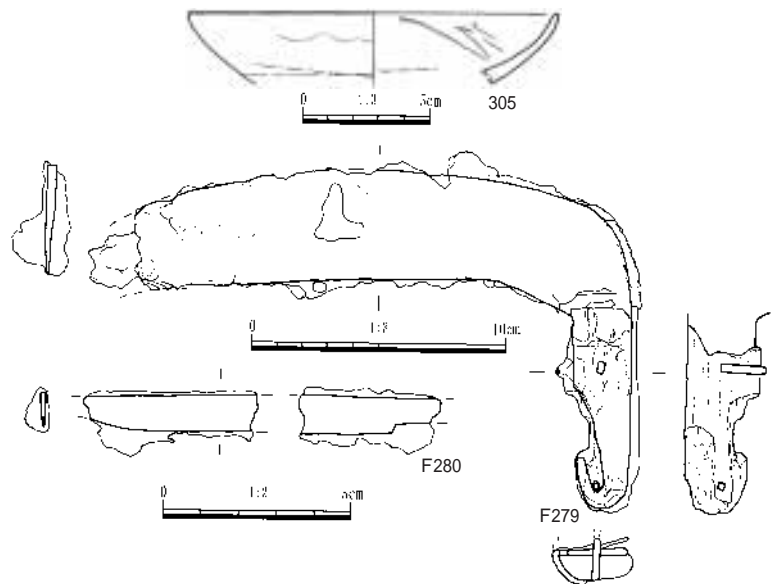


図302 墓171出土遺物

墓173 (図305・306、図版60)

墓密集域の東部に位置し、墓149と墓150に切られ、墓59を切る。表土除去後の表面には標石は露出していなかったが、土壌検出面で大型礫1個が出土した。

土壌はやや南北に長い円形で、長径残存長0.9m、短径1.2m、深さ0.6mを測り、長軸方向を北から20度東に振る。

土壌内上層(①層下面)から明らかに墓173に伴わない人骨、鎌(F284)、煙管(B59)がまとめて出土した。集中して出土した点や、副葬品がセット関係を大きくは崩していないと思われる点から、墓173を掘った際出土したものをそのまま埋め戻したと考えられる。墓59は墓173に切られるものの、肩部が壊された程度で、人骨や遺物が掘り返されたとは考えられない。したがって、墓173直下に土壌掘り方を残していない別の墓があった可能性も考えられよう。人骨は成人男性?のものと推定され

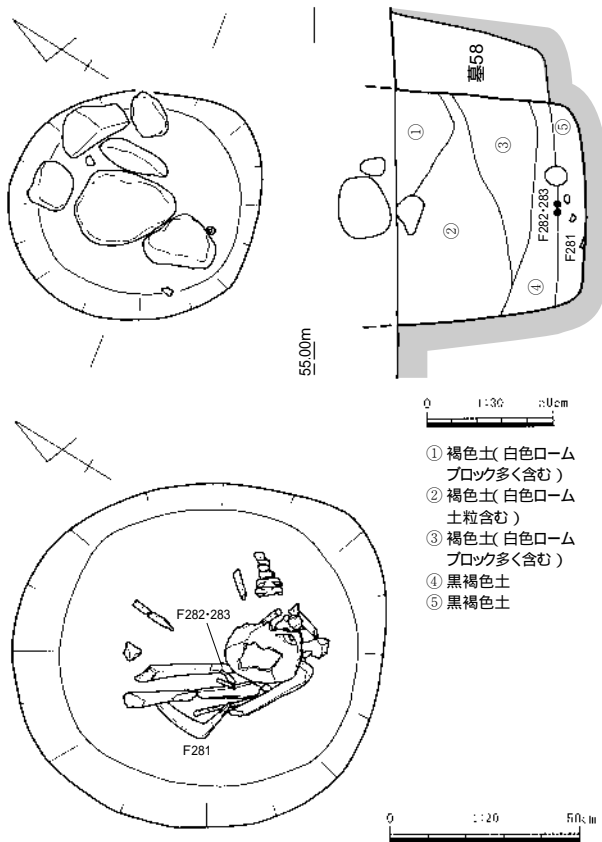


図303 墓172

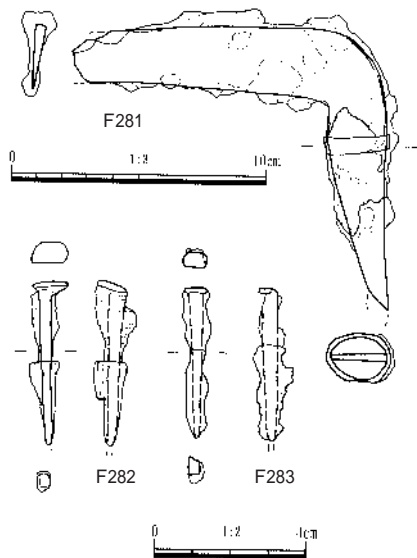


図304 墓172出土遺物

遺物は底面で鎌（F295）、煙管（B62）が出土したほか、底面より30cm程度浮いた位置から底面にかけて洋釘76本（F292・F293ほか）、和釘3本（F294ほか）、染付小杯（図74：246）の破片、陶器皿（図72：197）の破片が出土した。和釘はほかの墓のものが、陶磁器は上面にあったものが混入したのである。

洋釘の出土から本遺構は近代以降のものと考えられる。

ている。

底面からは比較的遺存状態のよい人骨が検出された。頭骨が北寄りの位置にあり、その南に下肢骨が膝を北に向けて並んでいる。遺体の埋葬形態は北頭位の右側臥屈葬と考えられる。被葬者は壮年から熟年の女性と推定されている。

遺物は、鎌（F285）・ガラス製数珠玉（G31）が頭骨上から、鋏と銅銭5枚・鉄銭1枚が固着したもの（F286）、火打金（F287）、煙管の吸口（B61）が人骨の胸元付近で、煙管の雁首（B61）と銅製飾り金具（B60）が下肢骨の下からそれぞれ出土した。なお、頭骨の西で出土した銅銭（C366）は破損しており、出土位置も他の銭貨と離れるため、混入したものの可能性がある。

墓174（図307・308、図版60）

墓密集域北西部に位置し、南東側を墓61に切られる。標石は現状では確認できない。

土壌は径1m～1.1mの円形で、深さ0.75mを測り、長軸方向を北から39度東に振る。土壌内上層から釘が5点（F290・F291ほか）出土している。人骨は出土しなかった。

墓175（図309・310、図版61）

G4区南部に位置し、墓81・墓134を切る。5個ほどの礫を集めて標石としている。

土壌は径1～1.1mの円形で、深さ1mを測る。底面から遺存状態の良い人骨を検出した。北側に膝を立てた下肢骨があり、その南に上肢骨・頭骨・体幹骨がある。遺体の埋葬形態は正面を北に向ける立膝座葬と推定される。被葬者は壮年後半から熟年の男性と推定されている。

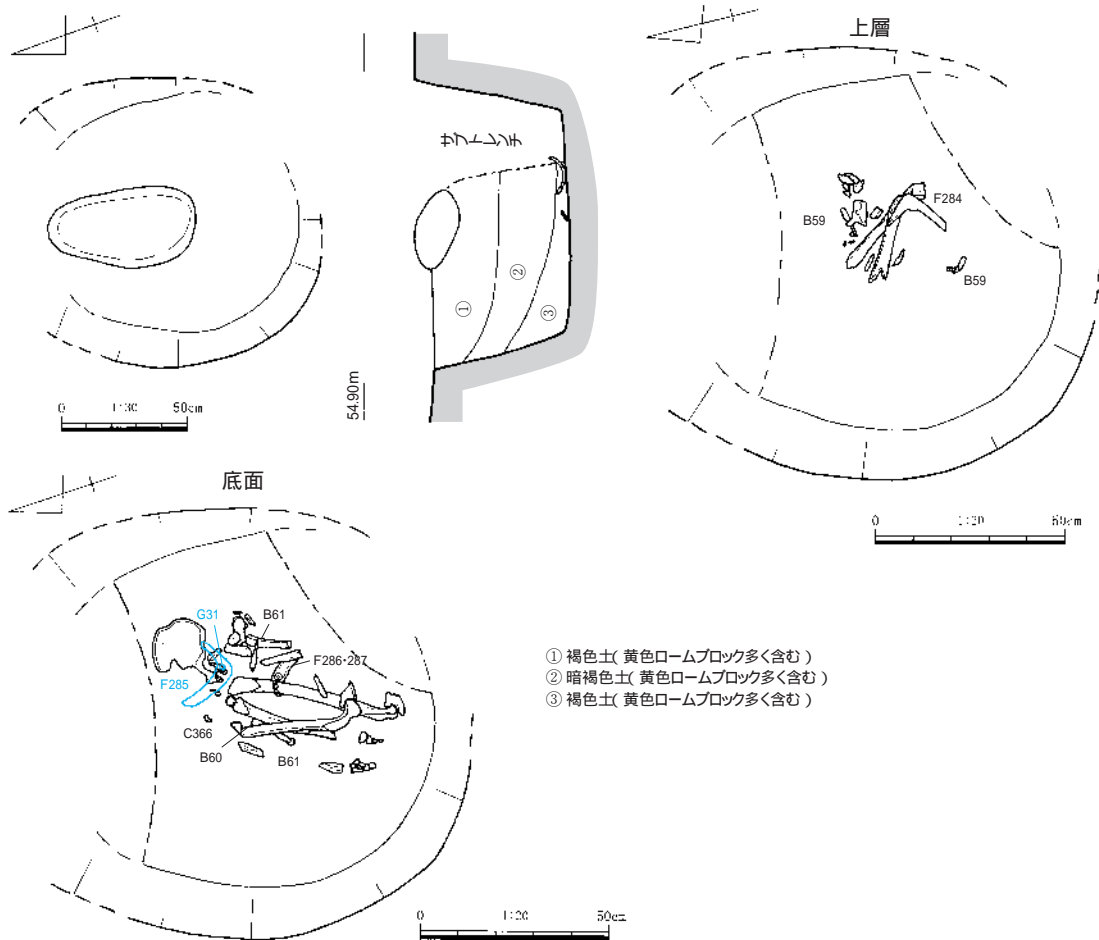


図305 墓173

墓176 (図311・312、図版61)

G 4 区南縁中央部に位置する。上面には標石は見られない。

土壌は平面形円形で、径0.9m、深さ0.8mを測る。土壌内中位で6個の礫が出土した。

底面で遺存状態の悪い人骨片を検出した。埋葬形態は人骨が少ないため不明だが、座葬の可能性が高いだろう。被葬者は、性別は不詳、年齢は壮年から熟年と推定されている。

ほかに底面からは鉄釉陶器碗(306)、銅銭3枚(C367)、釘2本(F297ほか)が出土した。

墓177 (図313、図版60)

G 4 区南西隅付近に位置し、北東隅を墓169に切られる。上面に礫は見られない。上面から染付急須(図145:263)の蓋が出土している。

土壌の平面形は、上面は一辺1.1m程度の隅丸方形で、底面は円形を呈す。土壌の深さは1mを測り、南北軸方向は北から1度西に振る。底面付近から人骨を検出した。北東側に頭骨があり、その西隣に右大腿骨が、その北西に膝を立てた左下肢骨がある。遺体の埋葬形態は体正面を北に向けた立膝座葬と推定される。被葬者は壮年後半から熟年の男性と推定されている。

土壌内からは遺物は出土していない。

墓178 (図314・315、図版61)

G 4 区西縁中央に位置する。10個ほどの礫を集めて標石としている。標石周辺で染付小杯(307)

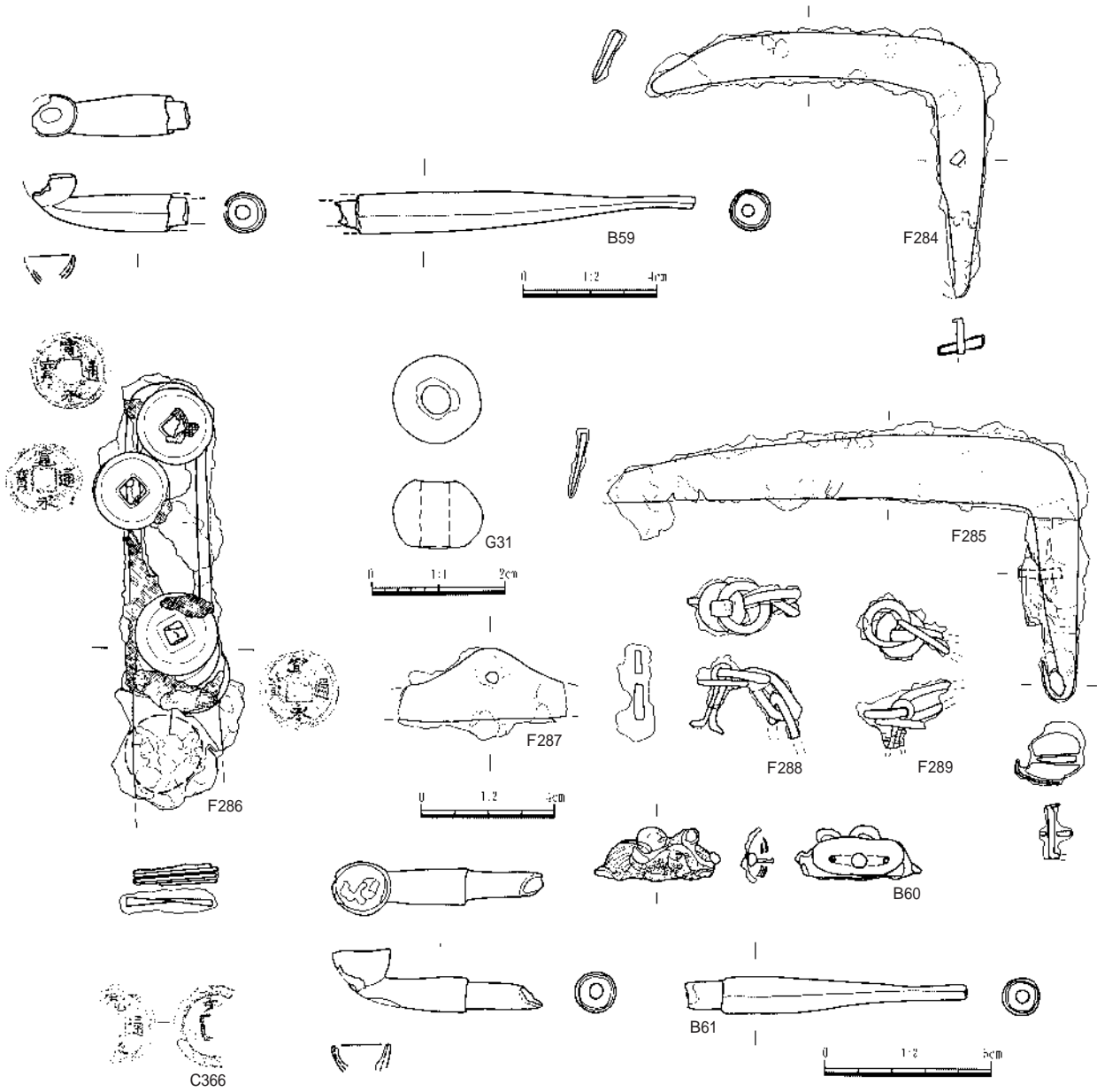


図306 墓173出土遺物

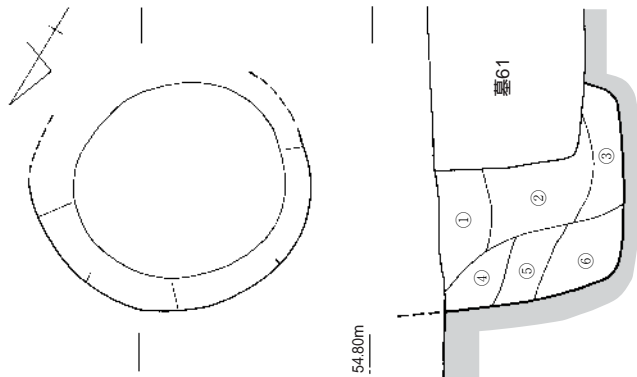


図307 墓174

- ① 褐色土
- ② 褐色土(ローム土粒・ブロック多く含む)
- ③ 暗褐色土
- ④ 黄褐色土(ロームブロック)
- ⑤ 褐色土(ローム土粒・ブロック含む)
- ⑥ 黒褐色土

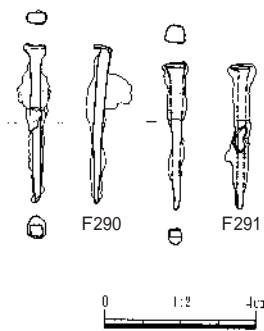
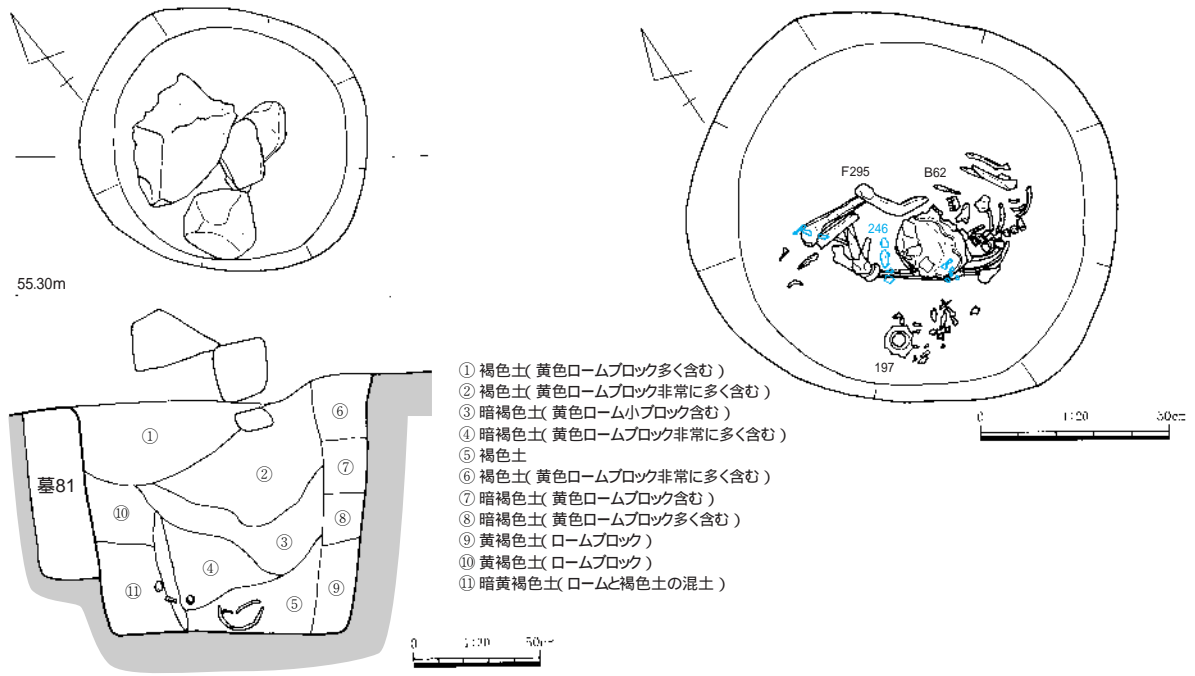


図308 墓174出土遺物



- ① 褐色土(黄色ロームブロック多く含む)
- ② 褐色土(黄色ロームブロック非常に多く含む)
- ③ 暗褐色土(黄色ローム小ブロック含む)
- ④ 暗褐色土(黄色ロームブロック非常に多く含む)
- ⑤ 褐色土
- ⑥ 褐色土(黄色ロームブロック非常に多く含む)
- ⑦ 暗褐色土(黄色ロームブロック含む)
- ⑧ 暗褐色土(黄色ロームブロック多く含む)
- ⑨ 黄褐色土(ロームブロック)
- ⑩ 黄褐色土(ロームブロック)
- ⑪ 暗黄褐色土(ロームと褐色土の混土)

図309 墓175

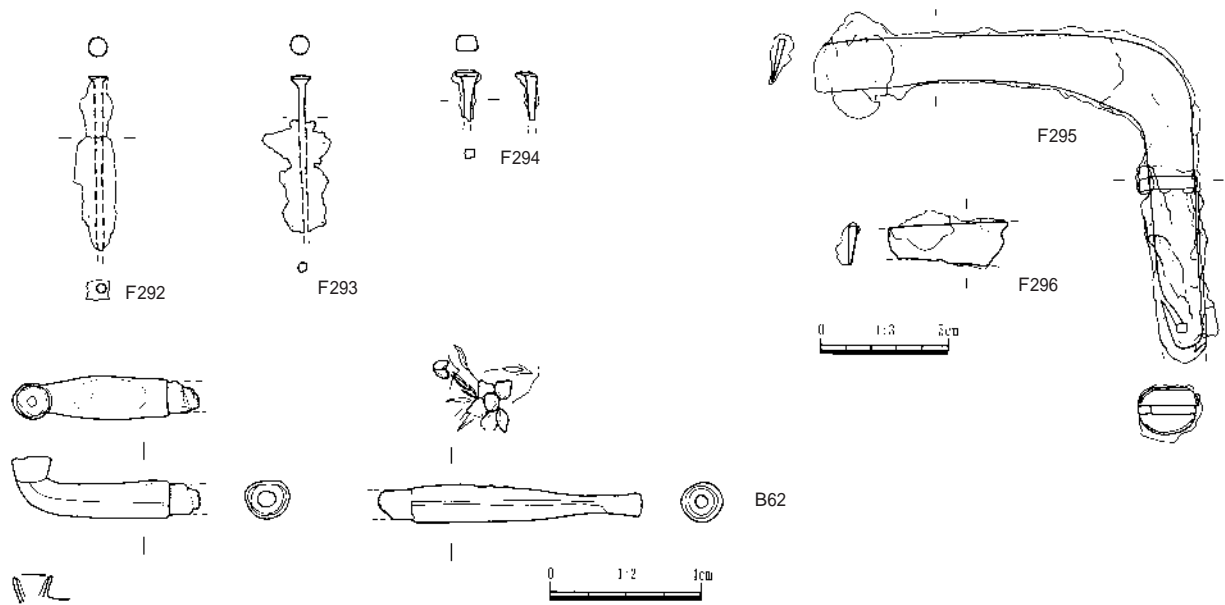


図310 墓175出土遺物

が出土した。

土壌は南北にやや長い楕円形で、長径0.75m、短径0.7m、深さ0.5mと小型である。長軸方向を北から1度東に振る。

土壌内からは人骨、遺物とも出土していない。その大きさから乳幼児などの墓であった可能性がある。

墓179 (図316、図版62)

G 4 区南縁東部に位置する。上面に小型礫数点に乗っているが、明確な標石は伴わない。

土壌は平面楕円形で、長軸0.75m、短軸0.6m、深さ0.55mと小型である。長軸方向を北から44度西に振る。

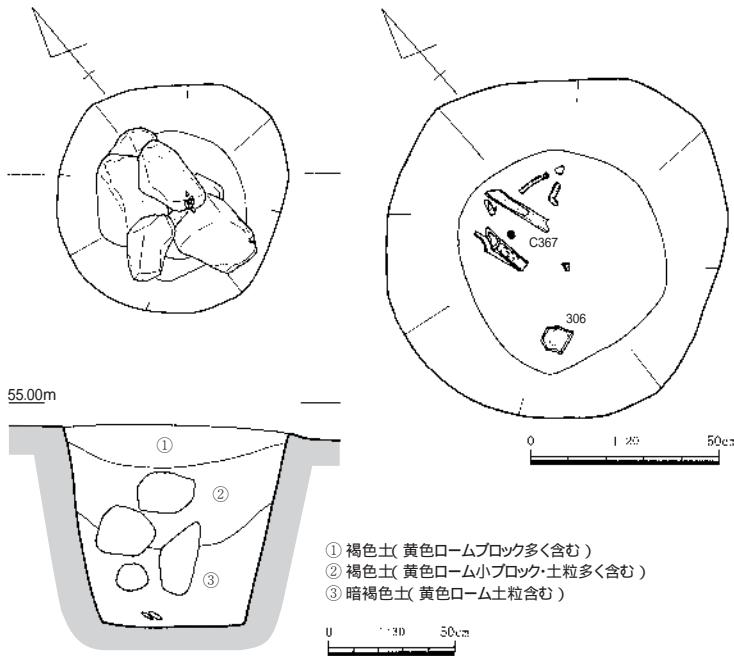


図311 墓176

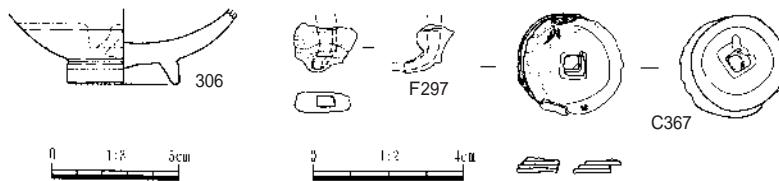


図312 墓176出土遺物

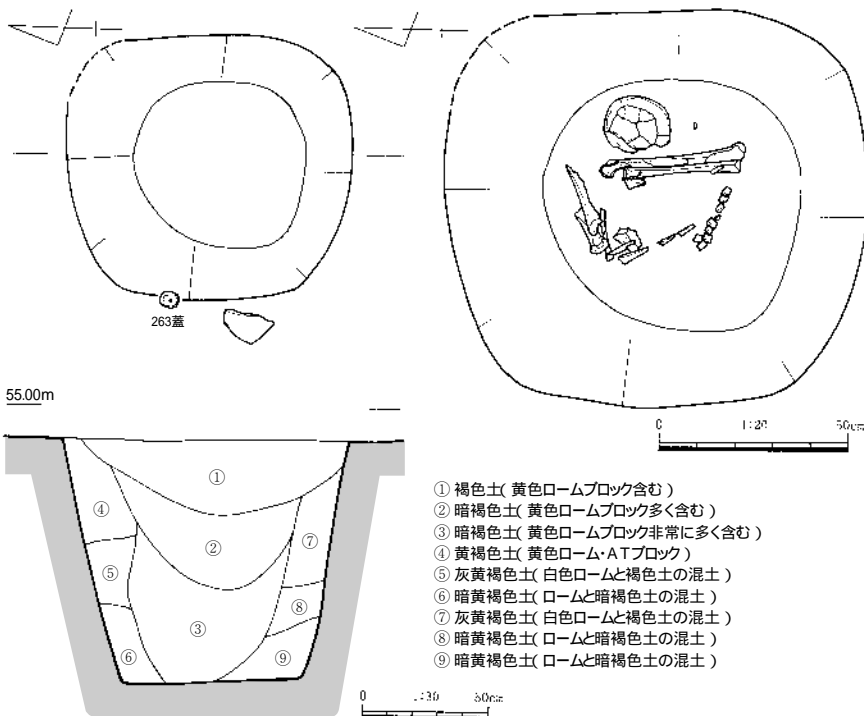


図313 墓177

土壌内からは人骨、遺物とも出土していない。その大きさから乳幼児などの墓であった可能性がある。

その他

墓密集域などに位置し、他の墓に大きく切られて土壌の形態が不明なものを以下に一括する。

墓180 (図317)

墓密集域の東部に位置し、東側を墓172・墓59に大きく切られており、原形をほとんど残さない。現状では上面に礫は見られない。残存部分が極めて少ないため不明点が多いが、土壌の平面形は方形を呈し、深さが残存値で0.45mを測る。

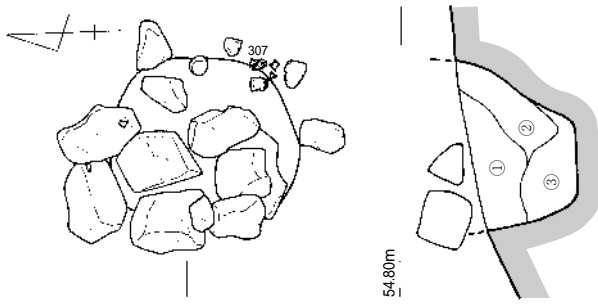
土壌内からは人骨、遺物とも出土していない。

墓181 (図318)

墓密集域の東部に位置し、墓59・墓104・墓182に大きく切られる。

土壌は残存部分が少ないため不明な部分が多いが、平面形は方形で、南北残存長0.45m、東西0.7m、残存部の深さ0.25mを測る。南北軸を北から10度東に振る。

人骨、遺物とも出土していない。



- ① 褐色土(黄色ロームブロック多く含む)
- ② 暗褐色土(黄色ロームブロック多く含む)
- ③ 黄褐色土(ロームと褐色土の混土)

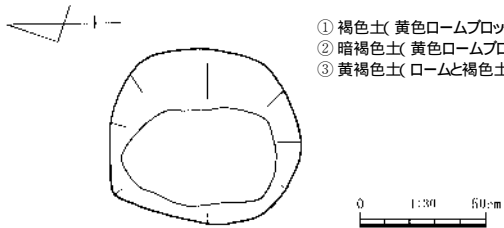


図314 墓178

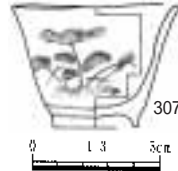
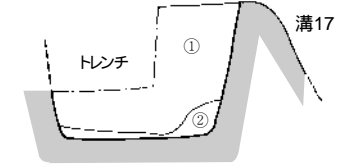
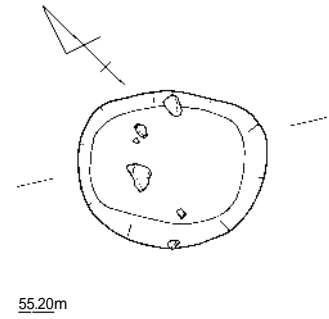


図315 墓178出土遺物



- ① 暗褐色土(黄色土粒わずかに含む)
- ② 暗黄褐色土(黄色土粒多く含む)

図316 墓179

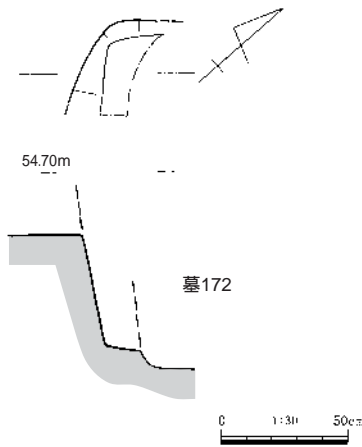
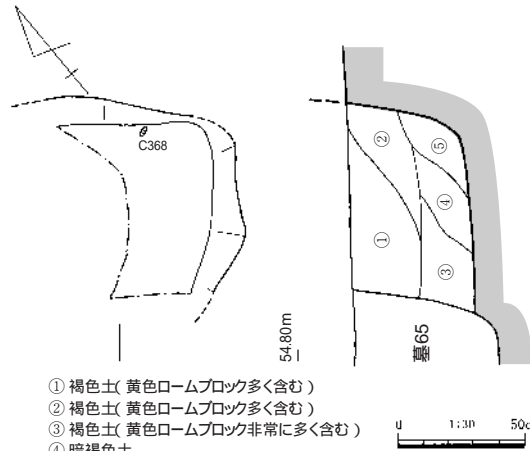


図317 墓180



- ① 褐色土(黄色ロームブロック多く含む)
- ② 褐色土(黄色ロームブロック多く含む)
- ③ 褐色土(黄色ロームブロック非常に多く含む)
- ④ 暗褐色土
- ⑤ 暗褐色土(黄色ロームブロック多く含む)

図319 墓182

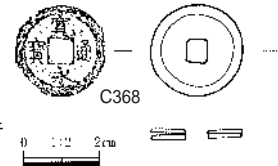


図320 墓182出土遺物

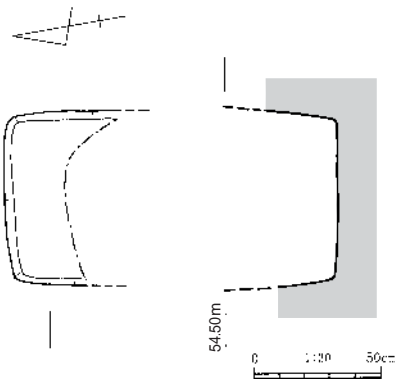
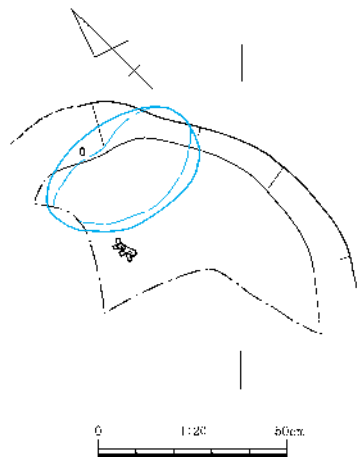


図318 墓181



- ① 暗褐色土(黄色土粒多く含む)
- ② 暗褐色土(黄色土粒含む)
- ③ 褐色土(黄色土粒多く含む)
- ④ 褐色土(黄色土粒多く含む)

図321 墓183

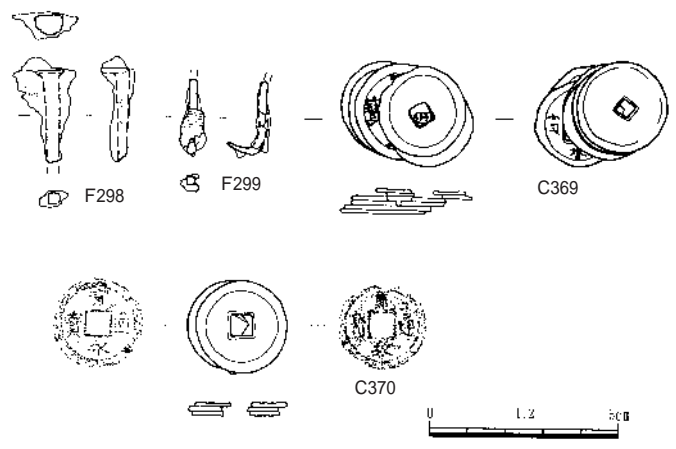
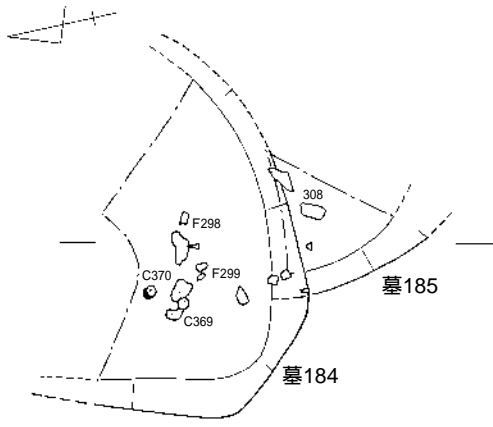


図323 墓184出土遺物

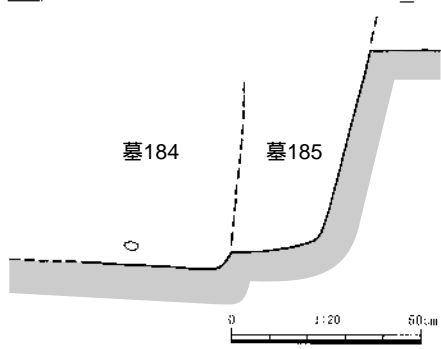


図322 墓184・185

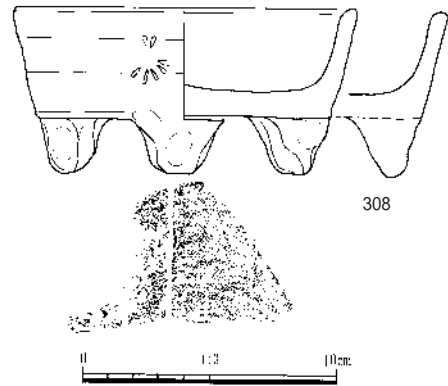


図324 墓185出土遺物

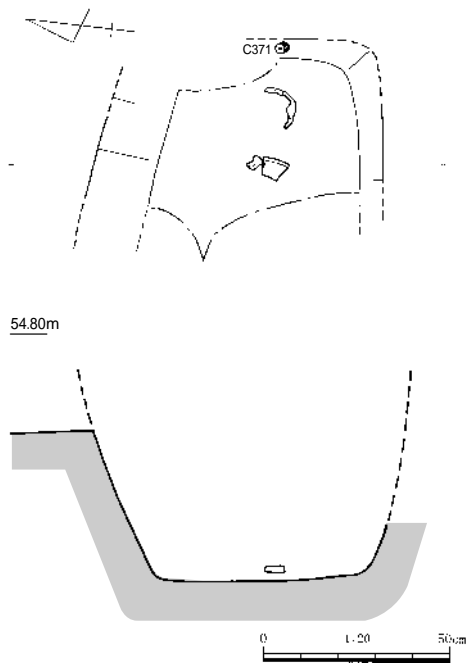


図325 墓186

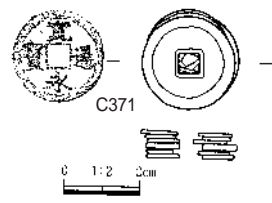


図326 墓186出土遺物

墓182 (図319・320)

墓密集域の中央付近に位置し、西側を墓104・墓65に大きく切られる。現状では上面に礫は見られない。残存部分が少ないため不明点が多いが、土壌の平面形は方形を呈し、残存値で一辺約0.8m、深さ0.5mを測る。南北軸方向を北から39度東に振る。土壌内上層(②層)から銅銭2枚(C368)が出土した。底面からは人骨、遺物とも出土していない。

墓183 (図321)

墓密集域の中央東よりにあり、西側を墓182・墓65・墓158に大きく切られる。礫は上面には見られないが、土壌内から1点出土している。

土壌は残存部分が小さいため平面形状、規模とも不明である。深さは検出面から0.5mを測る。底面で人骨小片が数点、漆膜の細片が1点出土した。被葬者は熟年から老年の女性と推定されている。

墓184 (図322・323、図版62)

墓密集域の中央に位置し、墓156・墓157・墓66に切られ、墓185を切る。標石は現状では確認できない。土壌は原形をとどめないほどに大きく切られている。平面形は方形で、残存部で東西0.9m、南北0.5m、深さ0.6mを測り、南北軸を北から13度東に振る。底面で人骨片が少量出土しているが、埋葬形態は復元できない。被葬者は成人男性と推定されている。遺物は上層から銅銭6枚(C369)が、底面から釘3本(F298・F299ほか)、銅銭3枚(C370)が出土している。

墓185 (図322・324)

墓密集域の中央に位置し、墓184・墓66に切られる。標石は現状では確認できない。

土壌は原形をとどめないほどに大きく切られていて平面形は不明である。残存値で深さ0.55mを測る。土壌内上層、底面から30cm程度浮いた位置で土師器火鉢(308)が出土した。

墓186 (図325・326、図版62)

墓密集域の西部に位置し、墓68・墓120・墓160・墓70に切られる。

土壌は残存部分が少ないため不明な部分が多いが、平面形はおそらく長方形で、東西残存長0.6m、南北残存長0.7m、検出面からの深さ0.4mを測る。東西軸を東から7度北に振る。底面東端付近で人骨頭骨片を検出した。ほかに人骨を検出しておらず、遺体の埋葬形態は不明である。被葬者は壮年後半から熟年の男性?と推定されている。遺物は底面東端で銅銭6枚(C371)が出土したほか、底面中央付近から墓120出土陶器播鉢(図206:277)の口縁部片が出土している。

G区遺構外の出土遺物 (図327)

G区の遺構外からは縄文時代から近世にかけての遺物が出土している。包含層がほとんど残っていなかったため、出土した遺物は極めて少ない。大半が遺構の多く見られる時期の遺物である。

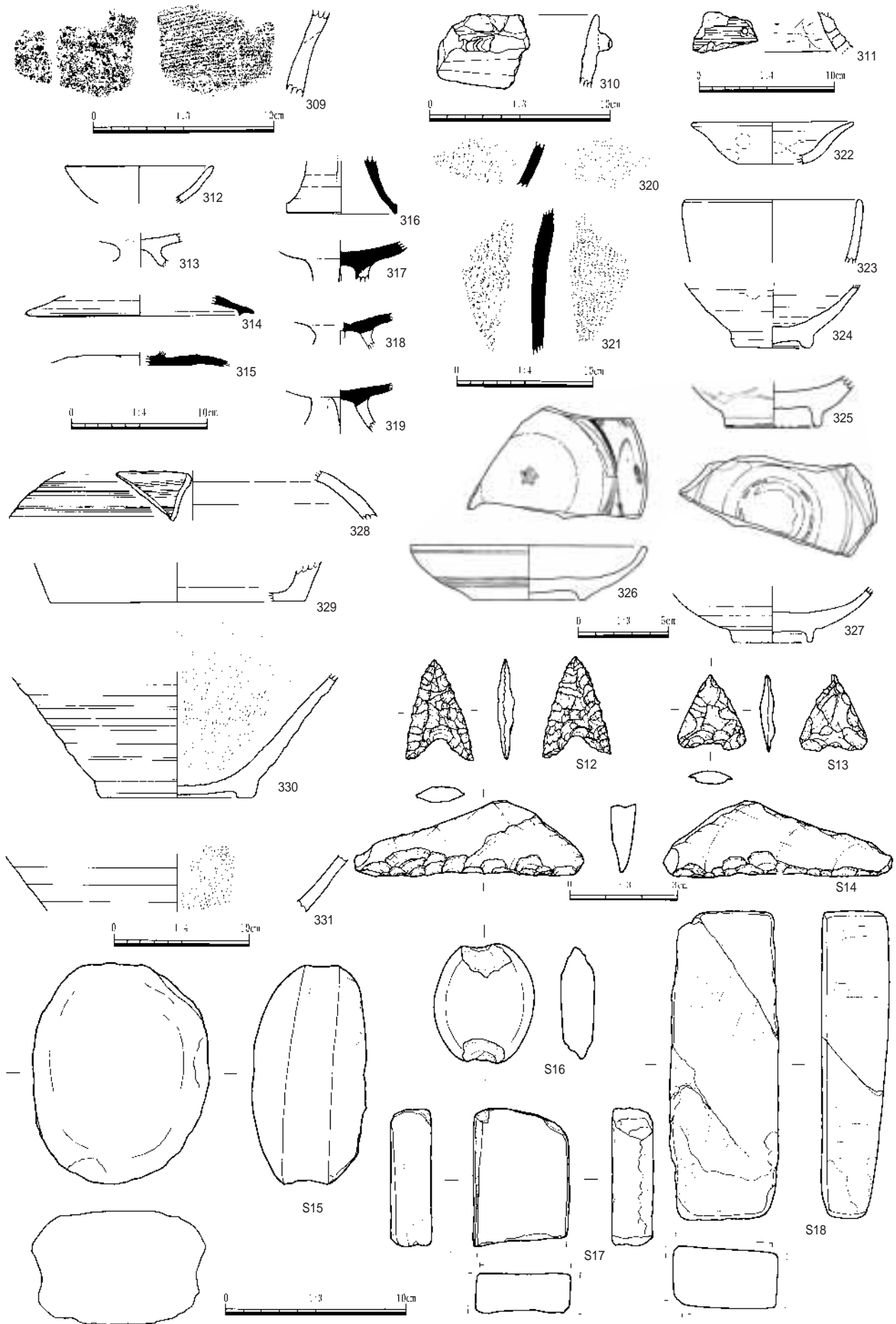


図327 G区遺構外出土遺物